

---

# メダロット

蒼騎士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メダロット

### 【Nコード】

N6516F

### 【作者名】

蒼騎士

### 【あらすじ】

数々の激戦と事件を制し、メダロッターにとっての高みへと辿り着いて2年。イツキは友人達と共に純粋なロボットを謳歌していたがどこか物足りなさを感じつつもあった。

だがそんな時に現れたレアメダルに選ばれしもう一人の少年、ヘブンスゲート壊滅の報、そして《悪魔》と呼ばれる謎の存在達と彼らの操る異形のメダロット達……。それらが交錯し、やがてイツキの日常は徐々に壊れていく……。

待たせたなイツキ。全部話すよ、俺の過去を。お前が聞きたがってるであろう全部を

## プロローグ：災厄の襲来

へブンズゲート、地球で最も宇宙に近い都市であり多くの富豪や有名人たちも身を寄せている。メダロット研究だけでなく宇宙関連の研究にも力を注いでいることでも有名な都市で現在は宇宙とメダルの関連性を重きにおいて調べている。2年前メダリンピックの決勝の舞台にもなり優勝者を宇宙への駅である「スターゲート」から送り出した。その中でも1、2を争う大富豪の土地、二毛作邸ではもう夜も遅いというのに光が灯っていた。

カタカタカタカタカタ・・・

「あんまり根をつめ過ぎると体を壊しますよユウキさん。」

大体14、5といったところの1人の少年がいまだに手を休めない人物に向かって呆れたように言葉をかけている。

「もう遅いんだしそろそろ休まないと・・・」

「おや？もうそんな時間かい？いやはや時間が経つのは中々に早い。」

「仕事熱心なのは結構っすけどね。あなたに倒れられると俺が親父に・・・」

「ああ、ごめんごめん。毎度の事だけどいつも付き合わせて悪いな。君は君で色々忙しいだろうに。本当に感謝しているよカラス君」

カラスと呼ばれた少年はテレくさそうに頭をかきながら

「こつちこそありがとうございます。わざわざ俺なんかを補佐にしてくれるなんて。」

「なんかなんて謙遜する必要はないよ。君は優秀だ。ロボットにかけても、ね。」

「アイツのお陰なんですけどね。アイツがいなかったらたぶん俺はまだ燻ってた。って話の腰を折らないでくださいよ!!」

「ハハハ、ごめんごめん。うーんじゃあ先に上がっていいよ。君に頼んだ仕事は全部済ませてあるみたいだし僕はもう少しかかりそうだから。」

「いいんですか?じゃあお言葉に甘えて先にながらせてもらいますけど。」

「うん。僕ももう少ししたら休むから。それじゃあお休みカラス君。」

「はい。また明日、ユウキさん。」

カラスは一礼してから部屋を出て行った。

バタンッ!!

「フウ……本当に悪いことしたなあ。こんな時間になるはずじゃなかったんだけど。」

残された青年 ユウキはそう一人呟いていた。

「けど、もうすぐなんだ。これが成功すれば我々はメダルと宇宙の関連性にまた1歩近づけるんだから。」

ふと一人笑みがこぼれてしまう。そして部屋に飾ってある大切な写

真を眺めながら

「こっちは元気だよ。お前は どうしてるのかなヒカル……………」

と友の名前を呟く。そして深呼吸した後

「よし、仕事再開！もう少しで……………ん？これは一体……………？」

怪訝そうな顔をしてあるものを見つける。さっきまではなかったファイルだった。何だろうとファイルを開いたユウキは、

「な、何だこれは……………!?!？」

その中に入っていたデータに驚愕した。もし、もしこれが本当だとしたら……………?

「もうそこまで辿り着いちゃったかあ。さすがは二毛作ユウキと言ったところだけど正直困るんだよねえ。」

「っ!?!？」

驚愕もつかの間、いつの間にか部屋に見慣れぬ少年に注意を奪われる。何だこの少年は？

「君は……………?どうやって中に……………?」

疑問はそのままに恐る恐る口を開く。なぜなら、

「ワオッ!?!口利けるんだ。すごいなあ。」

その少年からは一瞬でも気を抜けばすぐに殺されかねない殺気が放たれていたのだから。

「まあとにかく君には消えてもらうよ。いけ……クリア＝ワーム。」

瞬間、

「これは、メダロットなのか……!？」

異形の姿をした見たことのない姿の存在が現れた。メダロット? いや何かが違う……っ!!

「クツ、パピルニア!!」

「イエス、マスター」

ユウキは危険を察知し、メダロットを転送した。長年彼とともに戦ってきた相棒「パピルニア」である。この機体と自分のコンビに勝てるのは地球にはほとんどいない。だがこの少年と不気味な存在を前にしている今、ユウキは今までにない恐怖を感じていた。

「それが君の相棒か……神型のメダロット。フツツ少しは楽しめそうだね」

その言葉とともに笑みを浮かべる少年。そうして何の前触れもなく現れた災厄はゆっくりとユウキとパピルニアに襲い掛かっていった……

## プロローグ：災厄の襲来（後書き）

どうも、作者の蒼騎士です^^ついにプロローグが始まりましたね。つて書いているのは俺なんです。突然ですが自分、メダロットが大好きです！！多分現存してるゲームの中で1番好きなんじゃないかな？製作側のイマジニアさんがもう作らないって言ってたときはマジ泣きしかけました。けど1〜4以降の作品を出すくらいならそれも仕方ないかな？つて半ば諦めてましたけど。この発言から分かるようにこの物語は2〜4の主人公イツキの物語です。できるだけキヤラは全員出すつもりですが出ないやつもいるかもww正直言つて文才無いんで見ててイライラするかもしれない。けどこれはあくまで自己満足のためにやってるんでどんなにけなされても最後までやりぬくことを先に言っておきます。もし呼んでいただいで「良かったよ」とかって感想いただけたらすごく嬉しいですけどね。そんなわけでよろしく願いますね^^第1話でよければまた会いましょう^^



## 第1話：イツキの憂鬱

キーンコーンカーンコーン……

ここはギンジョウ中学校。おみくじ町というメダロット研究所があることで有名な田舎町である。しかしここ数年この町は観光地でもないのに客が後を絶たなかった。なぜなら……

「うわあ、あれが天領イツキ先輩？」「すげえ、本物だ！！」「メダリンピックの優勝者で」「メダマスターの称号を持っている最強のメダロットー！！」「それだけじゃない、メダスピードやダークロボットにおいても天才的らしいぜ。」「うわあ、サインくんねえかなー？」

そう、この町には2年前のメダリンピックを制し、歴史上2人目となるメダマスターとなった天領イツキがいるためである。ちなみに2人目と言ってもメダマスターになるためにはただ単純に強いだけでなくあらゆる状況でのロボット、メダスピード、メダロードレース、メダバードコンテスト、暗闇で更なる技術が要求されるダークロボット等の様々なテストをクリアする必要がある、なによりもメダロットとの強い絆が無ければ合格はありえず正に難関中の難関と言える。現在にいたっても3人目以降のメダマスターは存在しないため更にその価値は上がる。そんな難関をクリアして見せた天領イツキという少年は正にメダロットに関する天才と言えよう。

「大人気じゃない、メダマスターさん」

「勘弁して……」

放課後、そんな視線に対して迷惑そうに顔をしかめながら噂の天領

イツキ本人は幼馴染の甘酒アリカと団欒していた。

「大体僕はそんなすごいやつじゃないよ。ただ単にメダロットが好きってだけで……」

「ハイハイ分かってるって。まあたいしたこと無いって言うのは合ってるかもね。成績悪いし。」

「……痛いところかないでよ。」

「あはははは！！ゴメンゴメン。ってそんなことより聞いた？明日うちの学校に転校生が来るらしいよ。」

「相変わらず耳が早いなあ。さすが未来のジャーナリスト。それで男の子？女の子？」

「それが良く分かんないのよ。私の情報網に引つかかんないなんて初めて。」

「ふーん。でも珍しいね、この町に越してくるなんてリュウコ先生以来じゃない？」

リュウコ先生と言うのは2年前越してきたイツキたちの担任である。当時ライバルとなったミズチの姉で厳しくも優しい先生として有名なみになぜか中学に上がった今でも担任にもなっている。なぜ？と言う疑問はあえて挟まないでおこう……

「もう珍しくもなんともないでしょ。メダマスターがいるんだし。」

気付いてた？実は今の3年と比べてあたし達2年と1年の人数が圧倒的に多いのはあんたがいるからなのよ？」

「薄々感じてはいたけど知りたくは無かったよ。」

「ま、そんなわけで転校生に関しては明日にならないとなんとも言えないわね。ところでこの後どうする？私は取材のネタを探すけど。」

「

「皆にロボトルに誘われてるからそっちに行くよ。約束破るわけにはいかないしね。」

「フーンそつか。分かった、じゃあまた明日ね!！」

言うが早いカアリカは返事を返すまもなく去ってしまった。

「相変わらず忙しいなあ。おっと、僕も行かなきゃ。」

そんなアリカの行動に苦笑しつつ、イツキは駆け足で皆との待ち合わせ場所に向かった。

「ぐおつまた負けた……」「さすがはメダマスターとその相棒、これで破竹の30連勝だ!」「次俺!俺がやる!」「バカおめえじゃ勝てねえよ」「うっせ、やんなきゃ分かんないだろう!！」

「へッ誰でもいいからかかってこいよ!!俺様に勝てるもんなら勝ってみな!！」

「……メタビー調子に乗りすぎだよ。」

イツキは傍らでガッツポーズを決める相棒、「メタビー」を諷めていた。

「なんだあ、イツキ?お前そんな疲れた顔して。まさかもうばてたのかよ?」

カプト型メダロット・サイカチス、通称メタビー。天領イツキの為にメダロット博士が開発してくれたメダチェンジ機能搭載型のメダロット。

「そうじゃないよ。ただこうも僕達が勝ちまくってたら皆に悪いな

あつて」

『仕方ねえだろ俺達、いや俺様が無敵すぎんだからよ！』

「僕は抜きなんだ。相変わらずマスターへの敬意ってもんが無いなあ」

このメタビーに使われているのは数ある中でも希少種とされるカブトだった。しかもメダルを作り出した

【マザー】の力を受け継いでいるレアメダルの一種であるので通常のメダロットよりも感受性が豊かなのだ。なのでマスターであるイツキにも結構わがままを通してしている。

『お前が1人前になったら敬意つてやつを払つてやるよ』

「毎回言つてるよねそのセリフ。」

まあ何だかんだ言つてこの2人は強い絆で結ばれていた。だからこそイツキはメダマスターになれたのだ。だが最近イツキはどこか物足りなさを感じていた。今もそう。何が物足りないんだろう？

「つたく、どいつもこいつもだらしが無いねえ。」

そんな中1人の少女がその場に割り込んできた。すぐ傍には取り巻きと思われる子分を2人連れている。

「す、スクリユーズ!?」「ま、マズイつて……」「に、逃げなきゃ……」

【スクリユーズ】、それはギンジョウ中学校の問題児で、リーダーであり紅一点のキクヒメ、天才ハッカーイワノイ、無口で綺麗好きのカガミヤマの3人組グループ名である。小学校の頃から弱いものいじめ等の悪さをしており皆からは嫌われる存在だった。しかも何

気に実力があるため懲らしめることが出来ないのが現状なのだ。しかし2年前にある事件があり、リーダーのキクヒメの心境が変わったため昔ほどの悪さはしなくなった。最も、悪巧みは今でもやっているが……

「はあ、何のようなの？キクヒメ。」

「決まってるじゃない。今日こそは私達スクリユーズが最強だったことを証明しに来たんだよ!!」

「……割り込みは良くない、って今更だよね」

「そういうことで、まずはカガミヤマ!!行きなさい!!」

「分かった。出て来いブラウンバイソン!!」

カガミヤマはメダロッチから愛機を出現させる。光学系パーツが豊富な「ブラウンバイソン」だ。

「ちったあ骨がありそうなやつだな。さあて準備はいいな？イツキ!!」

「分かったよ……行くよ、メタビー!!」

「オウツ!!」

そして2人の戦いは始まった。先手はメタビー。ブラウンバイソンのパーツは一発一発の威力は高いが発動するための時間がかかるのが難点だった。対するメタビーは火力系のスピードタイプ。先手を取れないはずが無い。

「くられ、フューザー!!」

メタビーの右腕からライフルが放たれる。その一発でブラウンバイソンの脚部は破壊された。

「くっ、まだまだブラウンバイソン！！反撃のレーザーだ、お洋服が汚れてもおおおおおおおおおおおおおお！！！」

ブラウンバイソンからレーザーが放たれる、が、

『遅い、遅い』

難なく回避し、

「無駄玉は打ちたくないんだけどね。メタビー、ブラスター発射！

！」  
『いっけえ、ガトリング！！』

メタビーの左腕からガトリングが放たれブラウンバイソンの頭パーツを破壊した。

「お洋服汚れちゃった……」

カガミヤマはショックで落ち込んでしまった。

「次は俺だ、行くぜストレイウォルフ！！」

『アイアイ、マスター』

今度はイワノイが格闘型メダロット【ストレイウォルフ】を転送して、

「いくぜえ！！ソードっ」

すばやく切り付ける。だがメタビーはこれも回避し

「ブラスター！！」

すばやくガトリングを放つ！！だが

「ブラウンバイソンとは違ってこいつはスピード型だぜ。」  
ギリギリ回避されてしまう。

「お返しだあ、ソード！！」

今度は左腕からソードが放たれる。先程とは違い威力のある「がむしやら」属性のソードだ。そしてメタビーは、

『ちえっ、一発もらっちゃったな。』

ガトリングは「ねらいうち」属性だったために、回避が出来ず一撃喰らってしまったのだ。

「まだいける、メタビー？」

『当然。大したダメージも受けてねえ。もう少し威力つけたほうがいいぜ。』

とつさに防御行動をとったためパーツは破壊されることは無かったがさすがは「がむしやら」。まだまだ余裕だが、久々のダメージでメタビーは少し反省した。

『さてとこっちの番だな。』

メタビーは次の攻撃行動に移る。

「あれいくよー！！」

「OK、いつでもいいぜ!!」

そしてメタビーの代名詞とも呼べる頭パーツ「バリスタ」から

「ミサイル!!!」

ミサイルが放たれた。ストレイウォルフは先程「がむしゃら」の攻撃を使ったため回避が出来ず、受けるダメージはクリティカルとなる。よって……

「あ、あね~~~~~~~~~~~~!!」

ストレイウォルフの頭パーツが破壊されイワノイは敗北。

「スクリユーズが2人やられたぞ!!」 「勉強になる戦い方だ。」

「さすがメダマスター!!」

ギャラリーが一斉にイッキ達を応援していた。なんとなくスクリユーズが来る前より人数が多い気がするのはいえ触れないでこつ。

「だらしが無いねえお前達。最後はあたいの出番だよ!!」

そう言つてキクヒメは「ダークパンサー」を転送した。

「ようやく最後か。」

さすがに疲れてきていた。しかもこつも連戦続きでは「スラフラフシステム」は発動しても作動する暇も無い。とはいえこれがラストなのは事実。

(キクヒメ………僕やアリカを除けば恐らくこの学園で一番強



い。まあ卑怯な戦法は使わないだろうけど。とにかく……)

「まあ、頑張ろうか、メタビー」

「やるきねえなあ……。まっ今のこいつ相手にダメージ0で勝つのはきついだろうがさっきので頭は冷えたからな。油断はしないぜ!」

イツキの気分に関係なくメタビーは今まで以上に気合を入れた。

「ここであなたに勝てなきゃ……。カラス様に振り向いても  
られない!!行くよ、ダークパンサー!!」

「にゃーっ、任せるにゃ!」

そしてどちらからともなく走り出す!!先手は……

「もらったあつ!!ライフル!!」

まずはメタビーが先手を取りライフルを放つ。当てる気半分、牽制  
半分の一発は、

「なめんじゃないよ!」

難なくかわされしまつ。

「こっちの番にゃ!!ソード!!」

こちらもも負けじとソードを放つ。ストレイウォルフの一撃とは比  
べ物にならない速さだがこの程度なら……

「なっ!?!」

「にゃっはっはっは！！やっぱりダメージは残ってたみたいだよ。」

かわしきれず先程ダメージを受けていた左腕を破壊されてしまった。この一撃、前なら難なくかわせたが……

「そんな……メタビーのパーツが破壊されるなんて……」  
「当たり前でしょお。自分がメダマスターだからって一番強いって思ってたのお？あたしはねえカラス様に振り向いてもらうためならどんな困難でも乗り越えてみせる。くやしいけどあんたは知ってるなかでは一番強い。だから私はカラス様に振り向いてもらうため、そしてあんたを倒すためもっと強くなるんだ！！」

その言葉にイツキの表情はハッと何かに気づいた。そして思わず緩んでしまう。

（そうだ。どうやら僕はちょっと自惚れてたのかもしれない。メダマスターになったから。もう僕より強い人はいないって意識せずにロボットも楽しめなくなっていた。だけど僕より強い人はいっぱいいるんだ。キクヒメだってこんな風に強くなった。それに何を勘違いしてたんだ僕は？僕の大好きなメダロットは……）  
「ありがとうキクヒメ。お陰で大切なことが思い出せた。」  
「な、何なのさ突然？」

そう、最近は実力の拮抗する相手と戦うことが滅多になく正直つまらないと感じていたのだ。あれから2年経って大切なことを忘れていた。誰が相手でも自分は全力でメダロットを楽しむのではなかったか？

「お待たせメタビー！！本領発揮だ！！楽しもう！！」  
「へッ、ようやくいつも通りになりやがったな。」

すっかりいつもの、あのイッキの顔に戻ったのを見てメタビーは笑う。

「んじゃあ景気づけに一発派手にいかあ！？メダフォース、チャージ！！」

瞬間、メタビーは攻撃ではなくメダフォースを溜め始める。

「隙アリニヤ」

好機と判断したダークパンサーの一撃は、

「ニヤ！？」

「そ、そんな。さっきまでと動きが違う！？」

本調子のイッキ達には難なく回避され、

「チャージ、完了。」

メタビーの身体が輝きだす！！

「ロボトルの楽しさを思い出させてくれた、これは君への感謝の気持ちだ。メタビー！！」

「OK！！マスター！！」

そして2人の呼吸が、考えがシンクロする。

『メダフォー ス発動!! 「いつせいしやげき」!!』

壊れた左腕以外、頭と右腕から圧倒的な火力が放たれる!!

「に、にゃーーーーー!!!」

そして、

「僕の勝ちだ!!」

イツキは勝利した。

「ようやく勝てると思ったのに……手加減してたとはね。」

「ううん。君がロボトルの楽しさを思い出させてくれなきゃ僕は負けてたよ。」

「慰めは結構だよ!!」

笑いかけるイツキとは対照的にキクヒメは不機嫌そうに怒鳴った。

彼女としてはあまり面白くない結果なのだろう。

「つたくまた鍛え直さなきゃね……お前達行くよ!!」

言うが早いかキクヒメは肩を怒らしてその場から立ち去ってしまう。

『ま、待ってくださいよ、あねごぉ~~~~~……』

あわてて子分2人はキクヒメについて行きスクリーンズが去っていた。

「あの女に感謝しなきゃな。お陰で府抜けたお前をこれ以上見なくてすむ。」

「ごめんよメタビー。」

イツキは笑いながら謝った。

「イツキ先輩!!」

「うん? ってうわっ!!」

声をかけられ振り向くと

「何でこんなに人がいるの!?!」

「サインください!!」 「ロボトルのコツを!!」 「かつこよかつたですよ!!」 「是非、是非ロボトルの相手を・・・」 「ズリイぞ、俺が先だ!!」

最早全校生徒が集まっているのでは?と思わんばかりの人の数だった。

「よし、今度の新聞は『メダマスター・天領イツキ君の強さに迫る密着インタビュー!!』これに決まりね!!」

「ってアリカ!! 写真撮ってないで助けて・・・う、うわああああああああああああ」

そうしてイツキの声は聞こえなくなった。

「あれが天領イツキ。メダリンピックの優勝者で2人目のメダマスター。そしてカブトのレアメダルに選ばれし男、か・・・」

その様子を遠くから眺め、1人呟く。

「少々期待はずれだと思ったけどやっぱり面白えやつだな。中々骨のあるメダロッターも多そうだ。」

フツツと、笑ってしまう。嬉しくて。楽しめそう。ダメだ、この笑みは止まりそうに無い。

「ここでの生活は本当に面白そう。お前もそう思うだろう、相棒？」  
「.....」

返事は無い。だがそれが答えだった。

「フッフ、ああっ楽しみだぜ！！わくわくする。っとそんなこと言ってる場合じゃねえな。イッキも見れたしそろそろ行動開始するか.....」

そう呟き、神田ユウトはその場から離れた。

## 第1話：イツキの憂鬱（後書き）

どもー！！蒼騎士です^^今回はプロローグと比べて長くなりました。文章力無いんで「何でこうなるの？」とか「ここからこういくのおかしくね？」とかには触れないでね。俺自身書き終わって「なんかおかしいなあ」とか思ってるんで。さて、第1話はとうだったでしょうか？面白かった？死ぬほどつまんなかった？どっちにせよ最後まで書き続けますけどねwwところでカブトの戦い方とか性格はあんな感じでいいっすかねえ？正直自分、クワガタバージョン専門なんでカブトは良く分かんないんすよ。だからユウトと緑青の絡みとかは上手く書けると思うんですけどイツキとメタビーの辛味についてアドヴァイスがあれば教えていただければありがたいです。さて、では感想待ってます。第2話で会いましょう！！

## 第2話：謎の転校生現る

「昨日は疲れた……」

イツキは1人呟いていた。

「皆して僕をもみくちやにするんだから。ヒカルさんが来なかったら間違いなく僕はここにはいないね。」

昨日、スクリーンズを撃退した後イツキの戦いを見ていた大勢のギヤラリーにもみくちやにされたのである。もはや意識が朦朧としてきれいなお花畑と湖が見えかけたところでたまたま通りかかったヒカルが助けてくれたのだ。その後のことはおぼろげにしか覚えていない。

「まあ過ぎたこと気にしても仕方ねえじゃんか。」

「メタビーはいいよねえ……すぐにメダロツチの中に隠れられてさ。」

「だーっ、ウジウジしてんじゃねえよ！昨日の事より今日の事だろうが！……ったく、昨日ようやく元に戻ったと思ったら……」

メダロツチの中でメタビーは自分のマスターに呆れかえっていた。

「ウグツー！……わ、悪かったね。でもそうだね。ウジウジしても仕方ないか。」

パンパンッと両頬を叩いて喝を入れる。

「そっぴやイツキ。今日は転校生が来んだろ？」



ふとメタバビーは疑問をイツキに問いかけてきた。恐らく昨日のアリカの話の思い出したのだろう。

「転校生？そういえばそんなことを昨日アリカが言ってたね。男の子か女の子かはアリカでも分からないらしいけど。」

「んなことはどうでもいいんだよっ！！」

イツキの回答が不満だったのかメタバビーは騒ぎ始めた。

「え、じゃあ何でそんなことを？」

イツキはイツキでメタバビーの言わんとすることが分からず逆に問い返してしまっ。

「俺にとって男か女かなんて関係ねえんだよ！！俺が転校生について知りたいのは一つだけだ！」

「……あえて聞くけど、何？」

「決まってるじゃねえか、強いかどうかだよ！！」

「……」

「あっイツキてめえ無視すんな！！コラ、俺の話の聞けーっ！！」

そんなメタバビーを無視し、イツキは学校へと急いだ。（どうかメタバビーが会った瞬間にケンカをふっかけませんように）と心の中で祈りながら。

ガヤガヤガヤ……

教室の中はかなり騒然としていた。皆これから現れるであろう転校

生が気になるのだろう。

「おはようイッキー!!」

イッキの登校にあわせてアリカがこちらに向かってきた。

「おはようアリカ」

それにならないイッキも挨拶を返す。

「昨日は大変だったわねえ」

「自分も交ざってたくせにどの口がそんなこというのかなあ。」

そう、ドサクサに紛れてアリカも昨日イッキをもみくちやにしていたのだ。と、言うよりアリカが現れてから騒ぎがヒートアップした気がする。

「アハハハ!!ゴメンゴメンWWそんなことより転校生見掛けなかった?」

「?見てないけど。もしかしてもう来てるの?」

そう言いながら今日来た道で会った人を思い出してみた。うーん、やっぱりそれらしい人には会ってないなあ。

「そう?となると、やっぱり今回はかなりの強敵ね」

「え、もしかしてまだどんな人が分からないの?」

正直驚いてしまった。アリカはジャーナリストを志すだけありかなりの情報源を持っているのだ。中学に上がってからは更に豊富にな

っている。今やおみくじ町だけでなく広い地方にパイプがあるアリの網にかからないなんて……信じられない。

「結局のところ直に見るまで何にも分からないわ。名前も性別も。」  
どこか悔しそうに、だがそれでいて楽しそうな表情を浮かべながらアリカは話して終えた。

「全て謎に包まれた転校生か……なんか気になるな」  
「なら、早く席に着きなさい。」

突如背後から聞こえた声に思わず振り返ってしまう。そこには、

「り、リュウコ先生!？」

学園一、いやおみくじ町最恐の女性。闇雲リュウコ先生が立っていた。

「天領君も甘酒さんも本鈴に気付かないほど話し込むのは後にしなさい。HR始められないでしょ。」

『は、ハイ!! スミマセン!!』

話に夢中になり、本鈴が鳴ってしまっていたことに気づき、2人は慌てて席についた。

「ようやく皆席に着いたわね。さて、HRを始める前に皆さんに伝えることがあります。」

皆の出欠を確認した後にリュウコ先生は本題を切り出した。皆制裁が恐いため騒ぎこそしていないが視線は全てリュウコ先生に向けら

れていた。

「あなた達の耳には届いてるでしょうけど、今日このクラスに転入生が来ます。」

そんなことは言われなくても知っていると云わんばかりに先生への視線が更に強まる。そんな様子に珍しく先生は苦笑し、

「それじゃあ入りなさい。」

と、廊下にいるらしき転入生に言った。

「ウイッス」

廊下から変わった返事が聞こえ転入生は扉に手を伸ばした。先の返事で男ということは分かったが、遂に謎の転入生の全貌が明かされる、と皆の視線が廊下に集中した。かくいうウイッキも首を伸ばして廊下に視線を投げていた。そして扉が開き

「いやあ視線が痛く感じるなあ。ハハハ。」

なんて言いながら一人の少年が入ってきた。かなりリラックスした様子で髪はこれでもかと言うほど跳ねていた。しかし一番注目を浴びたのは目だろう。リラックスした姿とは裏腹にどことなく冷たい印象を受ける。だが、ウイッキがなによりも興味をひかれたのは、

(何だろう。どこか僕と同じ感じがする……)

「神田ユウトです。まあこれからよろしくお願いします。」

気が付けば自己紹介を始めていた。

「皆、質問は多いだろうけどそれは休み時間にしてちょうだい。さてあなたの席は多い……天領君の隣ね。」  
「ハイ」

そして以外にも自分の隣にやって来た。

「よろしく、天領君」

そう言った彼の表情はとても人なつこそうで、さっきの冷たい印象は全くなかった。なんとなくコレが彼の素の姿なんだな等と考えながら、なんとなくこの少年とはうまくやっていけそうな気がした。

「こちらこそヨロシクね。神田君!!」

これが天領イツキと神田ユウトは運命の出会いだった。

放課後。ユウトの周りを大勢の人が囲んでいた。いわゆる転入生の宿命である。

「神田君ってどこから来たの?」

「ロボットは好き?」

「どんな番組が好き?」

「趣味は?」

「好きな子いる?」

……なんか最後の方はプライベート過ぎる質問だな。

「あれが転入生への洗礼ってやつね。初めて見たわ」

「洗礼とは違う気がするけど。」

遠くから質問攻めにあっているユウトの姿をアリカとともに見ていたが人の数は一向に減りそうもない。

「ところでイツキ。神田君とは何か話した？」

隣の席だったからだろう。アリカは当然の様にイツキに質問してきた。

「いや。そんなに話はしてないよ。初めの挨拶くらいじゃないかな。」

「えっ？だって隣の席なんでしょ？少し位は話するでしょ？」

いやね、アリカ。君の言いたいことは分かるんだけど。

「彼、寝てたから。」

「は？」

「いやだから寝てたんだよ。もうグッスリと。」

アリカはポカンとしていた。うん、そうだよ。転校初日から授業中寝る人って聞いたことないよね。しかも傍目からはちゃんと授業受けてるようにしか見えないし。僕も隣じゃなかったら気付かなかつたろうな。なんて考えていると、

「俺の話かい？」

と、いつの間にかユウトが目の前に立っていた。

「神田君!？」

「ユウトでいいよイツキ。」

さっきまでの彼は数多くの質問を迷惑そうに答えながらどこかその他大勢的な扱いをしているような冷たさがあった。しかしイツキ達に対してはそんな冷たさはなくむしろフレンドリーに接してきた。

「ちょっといいか？甘酒さんも俺に色々聞きたそうだし、丁度いいと思うんだが。」

その提案に、

「本当に!？もちろんいいわよね、イツキ？」

「もちろん。」

断るわけがなかった。

「えっ？学校に行つてなかったの？」

アリカは驚いていた。なぜなら

「そういうわけではないけどな。一応籍を置いてる学校はあったんだけど、ここに転入したからもう関係ないんだ。てゆうかその学校はつまんなくって旅してた。つまり最近までは学生じゃなくて旅人。」

なんて平然と言つてのけたからだ。

「でも、なんで私のパイプにひとつも引っ掛かんかったの？」  
「それは知らない。けど親しくない人間には基本的にドライだから、俺。交流なんて全くないしね。だからじゃねえかな。」

笑いながら言う話ではない気がするけど……

「けど、この学校は面白そうだと思うんだ。昨日のロボットの最後のほうを見る限り。」

「あ、ユウト君イッキのロボット見てたんだ。」

アリカは少し意外そうにユウトを見た。ユウトはああと言ってからイッキを見つめて語りだした。

「正直な感想言うとき、最初この程度のやつだったのかって期待外れだったんだぜ？相手は真剣なのに本気で戦わないで押されてるし、メダロットをぜんぜん楽しんでないみたいだったから。メダロットへの愛情がないやつにメダマスターの資格あげたのか？って。」

正直イッキには耳が痛かった。確かに全力の相手に本気を出さなかったから押されてました、なんて格好悪いどころじゃない。最低だ。それが分かっていたから何も言えなかった。

「けど途中でなんか吹っ切れたろ？そんな時のお前の顔、すんごい楽しそうだったぜ。これが本当の天領イッキかあって分かったから、この学校は面白いって俺自身の目で確認できた。あの強気な女とか結構骨のありそうなやつもいそうだしな。」

そう語るユウトは本当にメダロットが好きなんだろう。目が輝いていた。だけどさっきの発言からすると……



「ねえユウト。今俺自身の目でって言うてたけど、ここに来るのは自分で決めたんじゃないの?」

「ん? ああ違う違う。燻ってる俺を見かねてある人がここを紹介してくれたんだ。」

「ある人?」

「ああお前らも知ってると思う。アトムさんだから。」  
『って誰?』

聞きなれない人の名前に思わずアリカと声が被ってしまった。その様子を見てユウトは怪訝そうな顔をするが、とすぐに分かったように手をたたき

「ゴメンゴメン。そうか本名知らないんだな。お前らにはメダロツト博士って方が分かりやすいかな。」

すぐに訂正した。瞬間、

「ええええええええ!! 博士ってそういう名前だったの!?!」

ものすごく意外だったのだろう。イツキは驚きの声を上げていた。

「俺はアトムさんって言うてるからさ。博士って呼ぶほうがしっくりこないんだよねえ。」

「でもどんな関係なの?」

すかさずアリカが質問する。イツキもそれには興味があった。博士を名前で呼ぶなんてかなり親しいのだろう。だが、

「それは秘密。これに関してはあんまり楽しい話じゃないしな。」

ユウトはその問いには答えなかった。そのときの顔は少し影がかかっていたので何も言えなかった。

「ってすっかり忘れてた！！俺がイツキに話があったからここで話してたんだよね？」

「ああ、確かそういう理由だったような……」

正直話が弾みすぎてよくは覚えていなかった。

「俺のことは大体話したしそろそろ本題に入ろうか。さっきまで忘れてたけどな。」

「本題？」

「ああ。イツキ、今から俺とロボットしてくれ。」

## 第2話：謎の転校生現る（後書き）

はい、ようやくユウトがイツキ達に絡んできました。にしても読み返してみるとワケ分からん展開とかセリフとか多いっすね。文才がないのを改めて認識してしまった。さて、今回はようやく俺の大好きなロクシヨウが出せます。楽しみにしてくださいね。

### 第3話：異形の存在

「今から俺とロボトルしてくれ」

ユウトは突然そう言った。

「いや、それはぜんぜん構わないんだけど。でもそれが本題なの？」  
イツキは意外そうにユウトを見た。ロボトルならこんなふうに頼まなくてもいつでも応じるのに。

「いや、まあロボトルはあくまで本題の下調べみたいなものなんだけどな。メタビー、君は構わないか？」

「誰に言ってるんだ？当然だろ！！」

言葉とともにまだ転送もしていないのにメタビーが勝手に出てきた。

「全く、お前はもう少し僕の指示に従ってくれよ……」

「うっせー！！売られたロボトルは買う主義なんだよ！！お前だつて受けるつつつてただろうが！！」

「もういいよ……」

完全な戦闘モードに入ってしまったためイツキはメタビーを諷めることを諦めた。

「さすがはカブトのレアメダルってところだな。自我が強い。」

ユウトは笑いながら呟いたがイツキは驚きを隠せなかった。

「どうしてレアメダルのことを！？博士から聞いたの？」

「それを説明する前に俺の相棒を紹介するな。来いっ、ロクシヨウ  
！！」

直後、

「やれやれ、貴様の行動はいつも突飛だな」

メタビーと対をなすメダロットが現れた。

「このメダロットは……クワガタ型メダロット？」

「紹介するぜ、俺の相棒の『ロクシヨウ』。お前のメタビーのカブトメダルと同様こいつもクワガタのレアメダルだ。」

「クワガタの……レアメダル。」

驚きが隠せない。確かにレアメダルは「マザー」が自ら作りしメダルのこと。数は少ないとはいえ1枚や2枚だけじゃない。けど

(僕やヒカルさん以外にもレアメダルに選ばれた人がいるなんて……)

「信じられないか？」

「正直に言っと。」

正直に今の感想を言った。

「うーん。けどお前なら分かるだろ。理解できてないようできてちゃんと理解してるはずだ。同じレアメダルに選ばれたものとして……何よりもメタビーに分からないわけがない。」

「そうなのメタビー？」

メタビーはしばらく黙っていたが、

「ああ。間違いねえ。こいつは俺と同じ……マザーに作られたレアメダルだ!!」

もはや信じるしかなかった。

「別に驚くほどのことじゃないさ。レアメダルだってその力を解放しなければ普通のメダルとそう大差ないだろ？もう1人のレアメダル使いと戦ったときに分かってるはずだ。」

「……そうだね。よし、ユウト!! ロボトル、受けて立つよ!!」

「てめえの実力見せてもらうぜ。謎の転校生!!」

一度ロボトルを言うと言った以上、レアメダルだろうがなんだろうが全力で戦うだけ。そう悟リイツキはメタビーとともに臨戦態勢に入った。

「そうこなきやな!! 準備はいいな、ロクシヨウ!!」

「フツ、答えなくても分かっているのだろう？」

ユウトもロクシヨウとともにすぐに仕掛けられるよう体勢を整えた。

「それじゃあ……」

「ああ、ロボトル・ファイツ……」

「大変よ!!」

今まさに始まるうとしていたロボトルは、突然いなくなったはずのアリカの突然の登場で中断されてしまった。

「アリカ……今いいところだったのに。」

「い、今から始まる場所だったの？ゴメン、でもそれどころじゃないの！！」

自分のせいで2人の戦いを邪魔してしまったことには謝るが、アリカの様子は只事ではなかった。

「何？ロボトル団がまた脱獄でもしたのか？」

ユウトが冗談半分に質問する。が、アリカは首を振り大きく深呼吸して、衝撃的な言葉を吐き出した。

「襲われてるの。」

「え？」

「人が……メダロットに襲われてるの！！」

「そんな！？それってつまり……」

「三原則が外れてるって事か……」

三原則・これがあるためメダロットは人間を攻撃することができない。逆に言えば三原則さえ外れれば簡単に人間を襲うことができる。今までイツキが出会った敵の多くがメダロット三原則をはずすことに成功していた。ただ、あんな大きな戦いは2年前に終わったはずじゃなかったのか！？

「アリカ！！そのメダロットはどこにいるの！？」

「し、自然公園で、たくさん人を傷つけてるって……」

「僕、行ってくる！！」

言うが早いかイツキは全速力でその場所へ向かっていった。

「あ、待ちなさいよイツキ！！」

今のイツキは目を離すと危険だ。長年の付き合いからそう判断したアリカは急いでイツキの後を追っていった。

「忙しいな、全く。」

1人残されユウトは眩く。

「思ったより早かったな……」

「ユウト、これはやはり……?」

「急ぐぞロクシヨウ。今のイツキじゃアイツらには絶対に勝てない。ヤツが来るとは思わないがそれでも、な。」

そう答えユウトはその場を去っていく。その目の色は先ほどまでイツキ達と仲良く話していた優しそうな色ではなく、見たもの全てを戦慄させてしまいそうな冷たい色をしていた。

「ぎ、ジ……ガ、ゴ……ズ……ギイシャヤアアアアアアアッ!」

「な、何なのあれ……?メダロット、なの……?」

アリカの疑問は当然だった。メダロットに見えなくもないがあんな機体は見たことが無い。

「何よ、コレ?何なの!」

だが、その謎の機体よりも現場の様子の方が異常だ。マスターを守るために立ち向かったであろうメダロット達だろうか。その多くが原形を留めていない。パーツどころかティンペットまで破壊されている。いや、違う。アレは破壊されたんじゃない。食われたんだ。

あの、怪物に。多くの人も怪我を負っているが、幸いかなり傷程度のようなのだ。動かなくなってしまうたメダロット達に比べれば無傷に等しい。しかしかすり傷だとしても人が危害を加えられているという事実。その事実がアリカには信じられなかった。

「イツキ、あいつ……」

「アリカは下がって。」

アリカの言葉の先を待たずイツキは言った。

「ちよつとイツキ!?アンタ何を言っ……!」

抗議しようとするアリカだが、それはできなかった。イツキの目は

その謎の機体に向けられている。完全に怒りに燃えていた。

「メタビーツ!!!」

「ああ……久々に俺も大暴れしたい気分だ。行くぜイツキ!!!」  
「ちよつと2人とモ!?」

アリカの制止も聞かずイツキ達は飛び出した。

「オイ、こつちを見る!!!」

なおも殺戮を繰り返す存在にイツキは叫んだ。

「ギシャ?」

呼ばれたのが分かったのか、ソイツはこちらを向いた。

「お前は……メダロットを、なんだと思ってるんだっ!!!」

「今の俺達は正直、抑えられそうにねえから覚悟しろよっ!!!」  
言葉と同時にガトリングを放つ!!!

ガガガガガガッ!!!

続く轟音。辺り一帯が砂塵に包まれる。

「やべえ。不意打ちは流石に卑怯だったな。」

「いや、メタビーの判断は多分間違ってたよ。」

少しばかり後悔したようなメタビーとは対照的にイツキは冷静だった。

「あん?お前いつから不意打ち賛成になったんだ?」

「そういうわけじゃないよ。でも、メタビーだって薄々感付いてるんじゃないの?」

「……まあな。」

確かに本来ならイツキはどんなに相手が卑劣でも不意打ちをするこ  
とはまずない。ではなぜ今回は不意打ちをしたのか?簡単だ。2人  
は目の前の相手にこれまでになく不気味さと恐怖を覚えていた。ゴ  
ッドエンペラーやグレインよりも。いや、それどころかブラックデ  
ビルよりも。

「何にせよ今の一撃じゃあ流石に倒せねえだろうしな。上手くいけ  
ば一パーツ位は破壊できてるだろうし、無傷って事もないだろうが・  
……」



メタビーの言葉とともに砂塵が晴れていく。そしてその中には  
「ッ!? そんな!?!」

「マジかよ……」

ソイツは傷一つなくその場に佇んでいた。

「バリスタを撃つとくべきだったか?」

軽口を叩くメタビーだがイツキはそれに答えない。

「ギギツ、レ・ア・メ・ダ・ル……ミ・ツ・ケ・タ!!」

その目は光り、腕からは鋭いツメが出てきた。完全な戦闘体勢だ。どうやら興味がこちらに移ったらしい。だが、それならばこれ以上被害は広がらないだろう。なら、

「メタビー、メダチエンジンだ。アイツは危険だ。」

「OK、レクリスモードッ!!」

メタビーに使われている純正パーツ

「サイカチス」の能力・メダチエンジンが発動した。メダチエンジンを行うと全ての性能が上昇する。また全パーツが統合されるため機能停止になるまでどのパーツも壊れることはない。

「レ・ア・メ・ダ・ル、テ・ニ・イ・レ・ル!!」

メダチエンジンが完了した瞬間、敵は凄まじい速度で向かってきた!!

「メタビー、クロス攻撃セツト!!」

イツキの掛け声に呼応し、メタビーが大技の準備に入る。

「ギシャアアアツツ!!」

刻一刻と迫るべきをギリギリまで引き付け……

「今だ!!」

「オオオツ、クロス攻撃・ファイヤーッ!!」

そして放つ!!

ドゴオオオオオオン!!

周囲が爆煙に包まれるほどのその威力は変形前のメタビーの攻撃の比ではない。大抵の機体ならこの一撃で沈黙させられる。が、

「レアメダル、モラッタツツ!!」

この異形の敵には牽制にもならず爆煙から飛び出してきた。

「っ、回避だメタビーー!!」

慌てて回避命令を出すのが、ギリギリまで引き付けたせいで回避行動がとれそうにはなかった。いくら変形しているとはいえ、この敵は異常だ。一撃でスクラップにされる可能性は高い。

「クッ、ヤベえ……!!」

「メタビーー……ッッッ!!」

敵のツメがメタビーに届く直前、イッキの叫びが木霊した。

### 第3話・異形の存在（後書き）

連続で書くのってなかなか疲れますね。さて、ここからイッキの日常は壊れていきます。本編のメダロットとは違い少々暗くなっ行ってきますが、よろしく願います。

## 第4話：ロクシヨウの力

時は少し遡り、メダロット研究所。

カタカタカタカタカタ……

「失礼しますよ、博士。」

『メダロット研究所』。おみくじ町に構えるこの研究所は世界でその名を知らぬ者なしとされる研究者『秋葉原アトム』、通称メダロット博士の指揮の下に世界でもトップクラスの研究所となっている。メダルの研究はもちろんのこと、メダロット社で作られる新型パーツやメダロットの性能実験。壊れて使い物にならなくなったメダルの修復など幅広い活動を行っている施設なのだ。そしてその中でも限られた人間しか入ることはできないシークレットルーム。通称『パンドラの箱』に快盗レトルトは入室した。

「おお、レトルトか。急に呼び出してすまん。」

「いえ……それよりお話というのは？」

快盗レトルト、彼はメダロット博士の頼みで暴走したレアメダルの鎮圧と回収を行っていた。今回も回収したメダルを博士に渡し、私生活に戻っていたときに大事な話があると呼び出されたのだ。

「いつものように博士の研究室ではなく限られた人間しか入れないこの『パンドラの箱』に呼び出された以上大事な話ということは嫌でも分かります。いったい何が……？」

「フム。それを話す前にお主が最後に回収し、わしに預けたメダルを覚えとるか？」

「ええ。普通のレアメダルと何かが違うということは私でも分かったんですが。何か問題でも？」

「あのメダルは……わしでも治せん。」

「？それはどういう……」

「喰われとる。」

「ますます分らないんですけど……」

「いったい博士は何を言っているんだろう。レトルトには見当がつかなかった。」

「言ったとおりじゃよ。見た目は少し弱った程度に見えるかもしれないが、あのメダルは何者かにその力を喰われた形跡がある。六角へイセキでもここまでひどくはない。」

「メダルの力を喰う？メダルが壊れたという話はよく聞きます。現に僕のメダルも一度壊れたことがありますから。しかし喰われたという話は一度も聞いたことはありません。」

レトルトの正体、ヒカルは過去に一度タイヨウという名のロボロボ団のトップにメダルを壊された経験がある。だがユウキの話からとある遺跡の湖で完全に修復されたのだ。そして現在はメダルが壊れるという話は数多くあるが、時間をかければ我々人間の手でも治せるところまでできていた。しかし、壊れたのではなく喰われたという話は聞いたことがない。

「わしもこんなことは初めてなのじゃ。正直いまだに実感が湧かん。だが、宇宙に最も近いヘブンスゲートにいるユウキならばこういう症状を知っているかもしれん。そう思い連絡を入れたのじゃが……」

「なんと言っていたんですか？」  
「それがヘブンスゲートに連絡がつかんのじゃ。ヘブンスゲート行き空港も停止してある。原因不明でな。」  
「では、私が呼ばれたのは……？」  
「ヘブンスゲートに行き、ユウキとともに原因を調べてほしいのじゃ。わしは調べねばならんことがあるのでう。」  
「分かりました。しかし調べなければならぬこととは何です？」  
「それはの……」

博士が口を開いたとき扉の外から騒がしい声が聞こえてきた。

『こら、ここから先は立ち入り禁止だ。』  
『通してよ！！レトルトさんがこの扉の向こうにいるんでしょ！！急がなきゃいけないのよ！！』  
『うわ、なんて力だ！！おいつ警備員を……』  
「何の騒ぎじゃ？」

騒ぎの中に聞き覚えのある声が混じっていたので博士達は外に出てきた。

「あつ……申し訳ありません博士。この少女が……」  
「構わん構わん。わしの知人じゃからな。ところでどうしたのじゃアリカ？」

予想通りアリカが騒ぎを起こしていたらしい。博士は少々きつく叱ってやるべきかな？と思いつつ尋ねたが、アリカはレトルトの姿を見つけると急に叫びだした。

「お願いっレトルトさん力を貸してっ！！」

その切羽詰った様子にあわててレトルトは駆け寄った。

「どうしたんだアリカちゃん!? いったい何が……?」

「このままだと、イツキとメタビーが死んじゃうのっ!」

その言葉を聞き、ヒカルの顔は凍りついた。

「メタビー………!」

異形の敵の爪が迫り、かわしきれずやられそうになっているメタビーにイツキは絶叫した。

( 僕が、僕がもっとちゃんと指示を出していれば…… )

自分を責めるイツキは、メタビーの元に走り出した。だがどうやっても間に合う距離ではない。それでも走らずにいられなかった。このままメタビーがやられるのを見ていられなかった。だがそんなイツキと思いと裏腹に、

「ギャハアハツハハハツハアアハ! レアメダル、テニイレタ!  
!レアメダル、テニイレタ!!!」

無常にもメタビーの体は貫かれた。

「あ、あああああ……め、メタビー………」

いつも一緒にいてくれた相棒の無残な姿を前に、イツキは倒れこんだ。

「そんな、嘘だろメタビー？お前はこんなところで壊れないよな？  
いつつもいつつも僕の指示も聞かないで好き勝手なことをして・・・  
・・・迷惑極まりないお前が、こんなところで・・・」

メタビーは答えなかった。

「メタビー・・・メタビー――――――ツツツ！！！！」

「心配しなくてもメタビーは無事だ。」

突如現れた声を聞き、イツキの視線はそちらに向いた。そこには、

「あれは残像を利用した変わり身。本体はホレ。ここにいるよ。」

メタビーを担いだユウトの姿があった。

「ゆ、ユウト？それに、メタビー！？」

「ちよつと気は失ってるみたいだけどな。無理もない、アイツらの攻撃は慣れないと直撃しなくてもちよつときついからな。」



そういつてイツキにメタビーを預けた。

「しばらくは休ませてやれ。」

「あ、ありがとうユウト……」

「礼なら後でロクシヨウに言ってやってくれ。直接助けたのはあいつだから。」

そういつて

「さ・て・と。ほんじゃまいっちょ暴れますかね。死んでねえけどメタビーの敵討ち？もしなきゃならんし。」

「え、ユウトあいつと戦うの……？」

「当然」

何を言ってるんだとばかりに悪戯っぽい笑みをイツキに向ける。だがまたもイツキは冷静でいられなくなった。

「当然って、無茶だユウト！！アイツは異常だ。一人で勝てるような相手じゃない！！」

今日会ったばかりだがユウトとは気が合うような気がしていたし、何よりもあんな危険な相手に誰かを向かわせるなんてできなかった。だが、

「大丈夫。アイツらとは戦い慣れてる。あの程度にや負けないよ。」

ユウトは自信満々にそう言った。

「戦い慣れてる……」

「心配すんなって。すぐに終わる。」

イツキの疑問には答えずにそう言い、ユウトはロクシヨウの近くに移動した。

「オ・マ・エモレアメダル？オマエガジヤマシタ？」

新たに現れた標的に興味が移ったのか、それともメタビーを仕留めるのを邪魔した敵への怒りか、その敵の関心は完全にロクシヨウに移っていた。

「クリア・トルーパーか。となるとやつぱりヤツは来てねえのか・・・？これは俺がこの町にいるのかの確認か？だがこんな雑魚一体だけを？となると・・・」

敵の姿を一通り観察し終えたあと、何やらブツブツと考え込んでしまった。正直にいつて無防備にも程がある。

「ユウト、ここ一带にヤツの気配は感じない。」

「だろうな。となるとやつぱこいつだけか。」

「ああ。援軍もないようだ。」

「うわあ、舐められたもんだねえ。」

ロクシヨウも敵を真正面から見据え背中こそ向けていないものの、意識は完全にユウトとの会話に向けられていた。クリア・トルーパーと呼んだこの相手は全く眼中に入っていない。

「オマ、エ、モレ、ア。メ・ダル。テニ。イ・レル、」

「お前うるさい。かたことかちゃんと話すかどっちかにしろよ。」

考え事の邪魔だと言わんばかりに手を振るユウトの、その敵を舐め

くさったその態度のせいかどうかは分からないが

「デニレレルッ!!!!」

クリア・トルーパーは一瞬で二人の間合いに入りロクシヨウを貫ぬこうとする。

「ユウト!!!ロクシヨウ!!!」

思わずイツキは叫ぶ、が

「グイイイイイイイイヤヤヤヤヤヤアアアアアアアアアアアア  
!!!!!!!」

悲鳴を上げたのはクリア・トルーパーのほうだった。突き出した方の腕が肩からかけて切断されている。

「あつ言い忘れてたけど戦闘態勢に入った俺達の間合いに入るとブツタ切られるから気をつけて。って、ああもう切られてたか。悪い悪いあんまりにも話に夢中になってて全然気がつかなかった。」

顔は下に向けたままそう謝っていたが、やがて思い出したように顔を上げた。

「そっぴゃお前、さっきはここにいた人たちに色々やってたよな？俺のダチにも襲い掛かってたし。考え事に夢中になって気づかなかったけどさ、お前はここで消えるよ。」

瞬間、

「メダフォー・ス・チャージ完了」

ユウトのセリフの最中にメダフォー・スを溜め終わったロクシヨウが金色に輝きだした。

「もし思念でも飛ばせんならアイツに伝える。すぐに会いに行くつてな。」

イツキ達には見せない、全てを凍りつかせるような目を向けて冷ややかにユウトは言う。

「加減はしねえ。ツて言ってもお前程度じゃあ全力出すまでもねえけどな。」

「ググググツガガアガツガアアアアアアアアア……」

ユウトの殺意とロクシヨウの尋常ではないプレッシャーに押されたのかクリア・トルーパーの姿が震えだした。

その姿はまるで許しをこいているようにも見える。が今のユウトには関係のないことだった。

「じゃあな。」

『たていっせんっ!!!』

二人の呼吸がシンクロし、クワガタメダルの代名詞とも言つべきメダフォー・ス『たていっせん』が放たれる。ロクシヨウの右腕から放たれた斬撃による衝撃波に触れた瞬間

ザンッ!!!

異形の敵の姿は跡形もなく消えていた。斬撃の音はしたがおよそ切ったとは思えなかった。

「まあ、こんなもんだろ。戻れロクシヨウ。」  
「承知した。」

そしてロクシヨウはユウトのメダロツチの中に戻っていく。そしてユウトはイツキの元に歩いていき

「ケガ、ねえか？」

いつもの人懐こい笑みを向けながらイツキに手を差し伸べた。

#### 第4話：ロクシヨウの力（後書き）

はい、本格的なユウト&ロクシヨウコンビのバトルです！！即効で終わりましたけど・・・次の話で分かりますがユウトとイツキの實力。それにロクシヨウ（ドークス）とメタビー（サイカチス）の力の差はほとんどありません。なのになぜイツキはあの敵に傷一つつけられなかったのか。その理由は次の話で。

## 第5話：明かされる敵の正体

差し出された手を掴みながら、イツキは呆然としていた。メタビーの攻撃が全く通用しなかったクリア・クリーパーという異形のメダロットの存在は今までのイツキの常識を崩した。だがそれ以上に、そんな化け物じみた存在をアツサリ倒してしまったユウトとロクシヨウの二人は一瞬異常に思えてしまったのだ。

「その……ユウト。」

「ん？」

「えっと、君は一体……？」

何者なの？と続けようとしたとき、

「イツキ……！」

「イツキ君……！」

遠くから見知った顔がこちらに向かって来るのが見えた。

「アリカ……それにレトルトさんも……！」

こちらに向かって来る二人に手を振ろうとしたその時、

「このバカー……ッ……！」

「グハッ……！」

猛ダッシュで駆けてきたアリカに溝内を思いきり殴られた。体重がのった綺麗な一撃。格闘技の達人でも滅多に出せないだろうと思われる正に芸術の一撃だった。

「バカバカバカバカバカッ！！あんた何を考えてんの！？あんなワケわかんないヤツに突っ込んで行くなんて、下手すれば死んでたかもしれないのよ！？分かってんの！？」

「ご、ゴメン。アリカ。でもアイツは許せなかったんだ。」

鬼のようなアリカの剣幕にたじろきつつイツキは弁解した。

「言い訳無用っ！！いい、もうこんな無茶は絶対しないこと！！分かった！？」

「わ、分かりました……………」

あまりにも恐ろしい形相で念を押され、イツキは更にたじろいだ。

「本当に……………死んだらどうしようって……………」

ひとしきり怒鳴ったあとにアリカの態度は打ってかわって泣きそうになっていた。

（本当に心配してくれたんだな……………）

「ゴメンね。もう大丈夫だから、心配しないでアリカ。」

心からそう言った。

「とにかく無事そうで何よりだよイツキ君。アリカちゃんに助けを求められたときは物凄く心配だったからね。」

「すみません、レトルトさん。ご心配をおかけしました。」

もう一人自分を心配して駆け付けてくれた人にもイツキは謝った。



「気にすることはないよ。無事はらそれでいい。しかしここで何があつたんだい？それにあの少年は……？」

レトルトはイッキに問うた。無理もない。彼はアリカに呼ばれて来たので何があつたのかは分からないのだ。しかし何があつた？と聞かれても、実のところイッキもここでの出来事の全ては把握しきれていなかった。

「ええつと、その話は後でユウトと一緒に説明します。」

自分一人では説明できそうもないので、ユウトの説明も借りることにした。

「ユウト？彼のことかい？」

「ええ。ユウト！ちよつといい？」

レトルトに状況を説明するためイッキはその場で考え事をしていたユウトを呼んだ。

「ん？もうそつちの話は済んだのか？」

「うん。ユウト、この人は……」

「快盗レトルトだろ？知ってるよ。有名人だしな。」

「ほう、いつの間にか私は有名人になつているのかい？」

レトルトとしても少々意外だったようで、彼のほうもユウトに興味を持った。

「レアメダルハンターレトルト。あなたとは一度話してみたいって思ってたんだ。」

「レアメダルについて知っているとは……まさか君も？」

「その質問とここでの出来事を答える前にあなたにお願いがある。」

急に真剣な表情になり、ユウトはレトルトをじっと見つめた。

「なんだい？私にできることなら出来る限りのことはするが。」

その真剣な眼差しに思わずレトルトに緊張が走ってしまう。ユウトはスーツと深呼吸をして息を整えると……

「サイン下さいっ！！！！！！」

「……………」

「……………」

「……………」

この場の空気を完全に無視し頭を下げた頼み込んだ。

ところ変わってメダロット研究所。

「フム、となると既にイツキは例の謎のメダロットと交戦したわけじゃない？」

あれからイツキとレトルトはさっきまでの状況を整理するためにメダロット研究所の博士の部屋に来ていた。ユウトも来ているのだが、ちよっと中を見て回ってくると言って散歩に行ってしまうこの場にはいない。アリカも来たがっていたのだが、今までの敵とはわけが

違うし、これ以上無駄な戦いに巻き込みたくないというイツキの必死の説得でしぶしぶ引き上げていった。もっともアリカがこの程度で引き下がるとは到底思えないが……

「交戦、って言えないと思いますよ。こっちの攻撃は一切通用しなかったし、結果的には相手から攻撃も受けませんでしたから。」

あのとときの戦いを思い出してそう言う。現にこちらの攻撃は一切通用していない。そして後一步のところまで届いていた敵の攻撃はロクシヨウによって阻まれている。とても戦ったとは思えない。

「攻撃が一切通用しない……完全防御か、それとも無効系の能力か？」

「いえ、ガトリングもクロス攻撃も無効系の能力では阻めません。それにあれは完全防御というよりは直撃しているのにまるで効いていないといったほうがしっくりきます。」

レトルトの疑問にイツキが答える。

「ますます分からないな。いったいどんな機体なのか……それに最後の一部始終を見たけど彼は本当に何者だい？いくら強力なメダフォースでも相手を消滅させることはできないはずなんだけど。」

「それについてはユウトが戻ってくるまで分からんな。あやつが戻ってくるまで待とう。」

レトルトの疑問に博士はそう答えた。その言葉を聞き、イツキはユウトと博士の関係が知りたくなった。

「あの、博士。少し聞きたいこと……」

「いやあ、昨日はよく見てまわれなかったけどやっぱりここの施設は  
すげえなあ。さすがはアトムさんの研究所だね。」

イツキが博士とユウトとの関係を訊ねる前にユウトは帰ってきてし  
まった。少し残念な気もするが前にユウトが話そうとしなかったこ  
とを思い出しこれでよかったのかもと思い直すことにした。

「ユウト。早速で悪いが、おぬしの知っていることを話してくれん  
か。」

「ん、そうだね。アトムさんには昨日少し話したけどこの二人は何  
も知らないっぽいし。当事者が何も知りませんでしたなんてことは  
ないようにしないと。」

「当事者？」

ユウトとしては軽く言っただつもりだったのだからレトルトはそこ  
に反応した。

「どついうことだいそれは？僕らが当事者って……」

「それについて語る前に一つ。イツキ、そしてヒカルさん。あなた  
達はレアメダルに選ばれた存在と言っことは自覚している？」

ユウトは二人に問いを投げた。

「メタビーがカブトのレアメダルで僕はそのメダロッターというこ  
とは自覚してるつもりだ。」

「ああ、イツキ君と同じように僕はカブトとクワガタの二つのレア  
メダルの所有者だと言っことは自覚しているよ。」

二人はその問いに肯定した。

「なら、なぜメダルは、いやその原初となるレアメダルは作られたと思う?。」

ユウトは更なる問いを投げかける。

「それは……それを調べることが今の僕らの目標なんじゃないの?。」

そう、その謎ははまだ解明されていない。通常のメダルはアンドロメダル星人によって作られているがレアメダルは違う。2年前イッキは宇宙からやってきたマザーのスバルとマールブルーによってレアメダルが彼ら自身の手で作られた原初のメダルであること。そして自分の相棒がレアメダルであることを知った。しかしなぜ彼らはメダルを生み出したのかと言う疑問は今でも明かされていない。

「正直言うと俺も詳しくは知らない。いや知っているけど信じたくないし信じていないといったほうが正しいな。」

だがユウトは知っていると言った。いまだ誰も知らないメダル誕生の秘密を、彼は知っていると言ったのだ。

「なぜメダルは作られたの!?。」

その答えを知りたくなりイッキは思わず興奮した。よく見ると冷静に装ってはいるがヒカルのほうも同じようにウズウズしている。いったいどんな秘密が……

「数多くある星との対話。そしてフォースの力を使い困っている星を助けるためさ。もっとも、彼らの目的が果たされることはなかったがな。」

「え？」

疑問に思うイッキ。だが続く言葉は更に衝撃的な内容だった。

「アンドロメダ星は比較的友好的で平和な星だ。戦いとは無縁のな……。だがある日侵略者が来襲した。侵略者たちは圧倒的な科学力を持ち、そして残忍だった。次次に同胞たちが殺されていく中、彼らはかねてより多くの星と対話するためにマザーによって作られた核石。つまりはレアメダルを兵器として導入したんだ。レアメダルの力については宇宙に行ったイッキならわかるだろう？ 形勢は一気に逆転。レアメダル達の活躍で侵略者たちは殲滅された……。そして長い年月が流れ、地球に人間という生命がいると知った彼らは、ささやかなプレゼントとして。なによりも自己防衛とはいえ多くの命を手にかけてしまったことの恐怖からレアメダルを使って再び戦いを起こさないために地球にメダルを贈ったんだ。俺達人間ならきつと正しい使い方をしてくれると信じて。」

そこまで一気に話しユウトは一息ついた。

「これが自称宇宙人から聞いたメダルが作られた理由だ。俺としては信じたくないんだがな。」

「確かに壮絶な話だが僕は信じられない。そもそも自称宇宙人というヤツは何者だ？ 正体が分からない以上それはただの虚言かもしれない。」

ヒカルはそういって頭を振った。

「まあこの話が真実かどうかは別としてここから俺たちに関係してくる話なんだ。」

「ここから？」

「ああ。本格的にこれから起こる戦い。」

再びイツキたちのの方を向きユウトは更なる言葉を紡ぎだす。

「その侵略者達、話し手はミュータントって言ってたな。そいつらにはまだ生き残りがいるらしい。」

「まさか、そいつらと戦うことが……?」

「ああ、どうやらそうらしい。やつらは自分たちを滅ぼしたレアメダルを憎んでいる。そしてレアメダルがこの地球にあることも知ってる。そしてその強さも知ってるから喰らって己のものにしたいわけだ。レアメダルに到達するためなら、やつらは何百、何千ものメダルの命を喰らうこともいとわないだろうな。」

「そんな……!!」

そんなことがありえるのか。イツキは戦慄を覚えた。

「じゃあ、あの不気味なメダロットは……」

「やつらに言わせればメダロットだろうがメダロットじゃない。ミュータントが独自に作り出し、あらゆる負の感情を詰め込んだ闇のメダル。それを埋め込まれた哀れな犠牲者さ。」

「ミュータントじゃないのか?」

「ミュータント単体で戦えるやつは知らないな。やつらは残忍だし戦闘凶だが主に兵器を使うから。まあ俺はそいつらが作り出した下級兵つぱいのをミュータントって呼んでるけどね。」

イツキはここまでの話をゆっくりと整理していった。つまり僕たちの敵は、

「……メダロットを模した怪物、ってことだよな?」

「正確には違う。奴らは奴らで厄介だがさっきも言った通りあくま

で下級兵だ。そいつらを操り陰で暗躍する組織《悪魔》、それこそが俺達の相手。ほぼ全員が人の姿をした化物で構成され、ミュータント以上の機体を扱いこなす最恐の敵だ。」

「そんな……っ!!」

アレが下級兵……？メタビーの力が全く通じず、そしてあれほど強かった相手が？更にその上がいると言うのか……!!？

「話は分かったがどう戦うんだ？レアメダルの力を持つイツキ君のメタビーでは傷一つ負わせられなかったらしいじゃないか。」

そう。敵は分かったがどうやって戦えばいいのか分からない。今回はユウトのお陰で助かったが……

「あのメダロットを倒せるのはレアメダルを持つメダロットしかない。本来の力を極限まで引き出したレアメダルのね。イツキのメタビーはまだその力を発揮し切れていないんだ。まあ普通に生活する分には必要ない力だしな。」

ユウトの答えはますますイツキを混乱させた。

「ならどうやって戦えば……」

その疑問はヒカルも持っているらしく、ユウトに目で質問していた。それを悟り、

「イツキ。ヒカルさん。これからあなた方のメダルの力を覚醒させる。だがそれはミュータント達と戦うということだ。今までの敵とは次元が違う。本当に命を落とすこともありえるし二度と元の日常には帰れないかもしれない。だから選んでくれ。強制はしない。」



二人に運命の選択を突きつけた。

## 第5話：明かされる敵の正体（後書き）

なんか、ますます文章として成り立っていないし本家メダロットの影がなくなってきたますね……

本家メダロットのファンの皆様には期待を裏切ってるような気がして申し訳ありません。しかし一度書いた以上どんなに非難されても最後まで書き遂げて見せます。あと、自称宇宙人の正体と、話を聞いただけの割にはユウトが色んなことを知りすぎてることに関しては話が続くうちに分かるのでよろしくお願いします。

## 第6話：固まる決意

ユウトに選択を突きつけられイツキ達は困惑した。何も知らなかったときならば、馬鹿馬鹿しいとか笑えないジョークだねとか言つて笑い飛ばしていたらう。しかしイツキは見てしまった。知つてしまったのだ。メダロットを喰らう化け物を。そしてその被害にあつたメダロットや人間を。それを思い出し、イツキは言葉を紡いだ。

「僕はメダロットが好きだ。最近までロボットをやつてもどこか満たされない思ひはあつたけど、それでも大好きだつた。けどさつき、その大好きなメダロット達の多くは殺された。何にも悪くないのに、ただレアメダルを手に入れようとしたヤツらに運悪く会つてしまつたつてだけで……!!」

自然と拳に力が入る。体は震え、その目からは助けられなかったという思いと何もできなかった無力感から涙がこぼれていた。

「このままアイツらを野放しにすれば、きつと更に多くの罪のないメダロットたちが命を落としてしまう。きつと人間にだつて多くの犠牲が出るかもしれない。そんなのは御免だ。だから、あいつらを倒せるのが僕らしかないなら……あいつらから皆を守れるのが僕らしかないのなら……」

そこまで言つてユウトを見据える。そして力強く言つた。

「僕らにも戦わせてくれ。ユウト。」

「……覚悟はあるみたいだな。だがいいのか？ さつきも言つたがこの戦いは危険だ。多くのメダロットや人々を救えるかもしれないがその代わりにメタビーがいなくなるかもしれない。いや、お

前だって命を落とすかもしれないんだぞ？それでも本当に……

「ならユウトはそんな危険な戦いになぜ挑んでいるの？」

続くユウトの確認を制し、イツキは逆に問い返した。

「君だってメダロットが大好きなんだろう？それに友達がいなくて前に言ってたけど人間が嫌いってわけでもない。本当は戦いだって嫌いなんだろう？なんとなく分かるよ。でも君はロクシヨウと一緒にこの危険な戦いに身を投じている。それはなぜなの？」

更に続くイツキの問いに対して、

「……俺にはこれしか、戦うという選択肢しかなかった。ただそれだけだよ。お前の言う通り、戦いだって本当はそんな好きじゃないけどメダロットは大好きだ。守りたい人達もいる。けどそんな理由よりも俺には戦うことしか道は残されていないんだ。」

そう、自嘲気味に笑った。その言葉に黙って話を聞いている博士の顔がなぜか悲しそうにゆがむ。

「僕だってそうさ。戦いは好きじゃないし、できることなら話し合いたい。でも何もせずにかくさんの人達が傷つくのを見るのはもっと嫌なんだ。君とは違いかもしれないけどこの話を知ってしまった以上、僕の中には戦うという選択肢しかないよ。」

イツキもそういつて笑う。

「へっ……そうだな。」

「メタビーー!？」

先の戦いからずっと眠り続けたままだったメタビーが目を覚ました。まだ元気とは言い難いがその目は力強かった。

「あんな連中にやられっぱなしなんて性に合わねんだ。難しい話なんか関係ねえ。あいつらは俺達がぶつ潰す！！ただそれだけだ。」

「メタビーだつてこう言ってるしね。僕達は覚悟ができてるよ。」

その言葉を聞きユウトは大笑いした。

「ハハハハハハハ！！なんだよそれ！！ハハハハハハ！！」

「そんなに笑うようなことかな？」

「いや、お前らも馬鹿なんだなって再認識しただけさ。けど、嫌いじゃない。むしろ好感を覚えるよ。笑ってすまん、あんまりにも嬉しくてさ。」

そう言つてイツキに手を差し出す。

「んじゃ、改めましての握手だ。」

その差し出された手をイツキは強く握り返した。

「これからよろしくねユウト！！」

「ああ、こつちこそよろしくなイツキ！！」

二人は笑顔で握手を交わした。

「と、あとはもう一人だな……あなたはどうしますか、ヒカルさん？」

それまで博士と同じく黙って話を聞いていたヒカルにユウトは問いかける。

「あなたの答えはイツキと同じなのか、それとも……」  
「……すまないが、少し考える時間をくれないか？」

しばらくして、ヒカルはそう答えを出した。

「ヒカルさん……」

「すまない、イツキ君。君たちの話を信じていないわけではないんだ。だが、あまりにも大きな話すぎて整理がつかない。いや違うな、まだ覚悟ができていないんだ。」

そうすまなさそうに頭を下げた。

「確かに結構でかい話ですからね。急いで答えを聞く気はありません。時間があまりないのも事実ですがこれはある意味運命の選択だ。よく考えて決めたほうがいい。」

ユウトはそうヒカルに言った。

「ありがとう。では博士、大体の話は済んだようですよし私はヘブンズゲートに向かいます。」

「……ああ。気をつけてな。」

レトルトの仮面を被りヒカルは部屋から出て行った。

「ヒカルさん、悩むだろうな……」

「仕方ないさ。誰もがお前みたいに覚悟を決められるわけじゃない。」

「

「僕もできる限り話し合いをしたいんだけどね。」

「それでいいさ。ところでアトムさん。ヒカルさんは、いやレトルトさんはなぜへブズゲートに？」

ユウトは博士に問いかけた。イツキも同様な疑問が浮かんでいたの  
で博士を見た。

「ひよつとしてへブズゲートになにか……？」

「いや、それはなんとも言えん。それを確かめるためにレトルトに  
向かってもらったのじゃが……」

博士が歯切れ悪く答える。そのときイツキは直感した。

「もし何かあるとして、ミュータントが関連していたら……！  
？」

「今のヒカルさんじゃ勝ち目はないだろうな。さっきまでのお前と  
同じだ。」

イツキの問いにユウトは至極冷静に答える。

「それじゃあ僕たちも行かなきゃ！！あそこにはカラスやカモメち  
ゃん。ユウキさんだっているんだ！！」

急いで部屋を出ようとするイツキ。だがユウトは彼の肩を掴み、止  
めた。

「今のお前が行ったとしてもその人たちは守れない。」

「けど！！」

「ヒカルさんなら大丈夫だろう。あの人のレアメダルはちよつと特  
殊だしな。」

「それってどういう……」

「それにミュータントが関わっているかどうかも分からんしな。そ

れより今はメタビーの力を解放させることが先決だ。」

冷静にユウトは諭すがイツキはまだ納得がいかない様子だった。

「ユウトの言う通りじゃ。ヒカルならば心配せずともな。それより今は自分たちのことに集中せい。戦うと決めたのなら力が必要なんじゃろう?」

「それは……そうですね。分かりました。」

博士の説得もあって、ようやくイツキは折れた。

「でもユウト、力を解放するってどうやって?」

「ロクシヨウの力をメタビーに流し込む。手荒な方法だが確実だ。後は時間がたてば自然とメタビーの真の力は開放される。」

「でももし開放されたらロボットとかは出来るの?」

「いったん力が解放されても制御法があるから安心しろ。手を抜く必要なく戦えるぞ。」

そういつてロクシヨウを転送する。

「こっちの準備はいつでもいい。お前の準備が出来たらはじめるぞ。」

「やめるなら今のうちだ。」

「言つたる。負けっぱなしは性に合わないって。こっちもいつでもいいぜ!! だろ、イツキ!？」

「うん。始めてユウト。」

「OK。んじゃ始めるぞ。」

そうしてメタビーの力を開放するためロクシヨウを動かした。



一方ヒカルは……………

「なんだ？ヘブンスゲートには入れない……………」

『風の翼』をつかい、ヘブンスゲートの近くに来たのはいいものの、全ての入口が閉じられており中に入ることが出来なかった。

「何か嫌な胸騒ぎがする……………ユウキ達は大丈夫か？」

一通り周りを一周してみたがどこにも中に入れそうな入口はなかった。

「仕方ない。後で謝っておくか……………メダロット転送！！」

仕方なくアークビートルDを転送する。カプト型メダロットの発展型でヒカルの愛機の一体でもあった。

「扉を破壊してくれ……………出来るだけ直しやすいように。」  
「分かりました、ヒカル。」

そうして

ズゴオオオオオン！！

扉を破壊した……………結構ド派手に。

「・・・・・・・・仕方ないか。」

溜息をつき中に進入した。だが中に入ったヒカルは驚愕する。

「な、なんなんだこれは!？」

へブンズゲート、その内部は惨状となっていた。

## 第6話：固まる決意（後書き）

どうも、蒼騎士です。本格的にストーリーは進んでいきますよ・・・  
・・・しかし登場人物紹介で書いたヒカルの愛機初代めたびーとろくしょうをいつ出すべきか悩んでおります。一体どこで出せばいいかな・・・

## 第7話：惨劇の天国

「ユウキ!!! いるのなら返事をしてくれ!!! パティ!!! カラス君!!! カモメちゃん!!!」

炎に包まれ、多くのメダロットの残骸が倒れているヘブンスゲート。天国のゴミ捨て場と呼ばれるゴミ処理施設、ヘルズゲートがここにはあったが今のヘブンスゲートの方が天空の地獄に思えてならない。

「クソッ!!! 何があったんだここで……」

一体ここで何があったのか？ 生き残った人はいないのか？ ユウキは？ パティは？ それにイツキ君の友達であるカラス君達は？ 総理は現在地上に降りているはずだがその他の人々は……

「……メ……ん!!!」

「!?!」

かすかだが声が聞こえた。間違いない、無事だった人がいたのだ。

「カ……メ!!!……さん!!!……返事を……モメ……!!!……ウキさん!!!どこだ!!!」

どンドンこちらに近づいてくる声。

「カモメ!!! ユウキさん!!! いたら返事をしてくれ!!! カモメ!!! ユウキさん!!!」

どンドンこちらに近づいてくる。この声は……

「カラス君かい!？」

こちらに駆けてくる人影はカラスだった。2年前と比べ背も伸びているし顔つきはあの頃と比べてやわらかくも鋭くなっているが間違いない。しかし衣服はボロボロで、目に映る怪我也多くあった。

「っ!？あなたはレトルトとか言うやつか!？なんでここに……いや、それよりもユウキさんやカモメを見なかったか!？」

「いや、悪いが見ていない。ところでどうしたんだ、ヘブンスゲートは!？それにその傷……」

問いかけようとしたときだった、

「っ!！話は後だ!！来るぞ!！」

野良メダロットと思われる機体が三体こちらに向かってきた。

「グルルルル……」

(イツキ君と交戦した怪物ではなく、真正銘の野良メダロットか。しかし様子が……)

その疑問が雰囲気となって出たのかカラスはこちらに顔を向けず答えた。

「やつらはヘルズゲートにいたメダロットと同じタイプのヘロケロベロスだ。2年前にヘルズゲートが閉鎖されて以来まったく見かけなかったんだが、昨日からさらに凶暴化して大量に出現しやがった。」

「メダロットの凶暴化と大量発生……まさかこいつらがこの」

惨状を？」

「さあな。一つ言えることはやつらには三原則がない。つまり油断していると……」

「グルルル、ゴアアツツ!!」

「ただじゃすまないってことだっ!!」

こちらに向かってへロケロベロスがメルトを放つ!!メダロットに与える場合なら継続ダメージこそあれど大した威力を持つメルト系パーツは少ない。だがそれはあくまでメダロットに対してのみ。人間に対しては……

「火傷で済みそうにはなさそうだな。こりゃ。」

間一髪メルトを回避する。元いた場所の近くの家の壁が広範囲で溶かされていた。

「よけ切れなかったら死んでたな……アークツツ!!ティレルツ!!来い!!」

『了解!!』

危険性を再認識し自らの愛機、ヘラクレスカブト型のアークビートルDとオクワガタ型のティレルビートルを転送する。カブトとクワガタの発展型である機体。レトルト自身の腕もありイッキでも中々勝てない実力だ。

「悪いけど、さっさと片付けさせてもらおうかな。アーク、レーザー発射!!ティレル、ソードで叩き切れ!!」

二機は二体のへロケロベロスに向かいそれぞれの攻撃を加える。

ピーーーーーッ！！！！

ズバババッ！！

「グルオオオオ・・・！！！」

「ギャルルオオオオ・・・！！！」

圧倒的な実力を見せつけ一気に機能停止に持ち込む。だが、

「グルルルウアアッ！！！」

片付いたと思つた隙を突かれ、すぐに二体新手が現れ攻撃を仕掛けてきた。

「しまったっ・・・」

「マスター！！！」

ザンッ・・・！！

それに気付きティレルが迎撃を行う。が、一体のみしか仕留められずもう一体のバグ攻撃がレトルトに迫った・・・！！

（油断したなあ。やっぱり勘が鈍ってる）

ヒカルとしてコンビニ店員のアルバイトをしながら若い子達の育成を続ける日々。まだまだそこいらのメダロッターに負けはしないが

現役には程遠い実力に下がっていたのだ。それにより昔なら気付いたはずの敵の接近に気付かなかった・・・実力が落ちてきているのは自覚していたが正直、これほどとは思わなかった。

「ガルウウアアアアアッ!!」

「ッ!!かわしきれない・・・」

へロケロベロスの攻撃が目前に迫り、覚悟を決めたときだった、

キキキキキキキ・・・

「グオオツ・・・!!」

ドゴオオオオン!!

正に目前にまで迫っていたへロケロベロスが機能停止した。

「今のは・・・サクリファイス攻撃か？」

犠牲攻撃サクリファイス・・・それは相手に大きなダメージを与えられるかわりに、攻撃を放った自らのパーツをも壊してしまう禁断の攻撃。使いこなすのが難しいこの技を使いこなせるのは・・・

「まったく、現役を退いてるからってこりゃ酷すぎるだろう快盗レトルト。いや、伝説のメダロット・あがたヒカル。」



カラスだった。すぐ側には彼の愛機G・ODESが両腕を失いながらも佇んでいる。見ると彼らの後ろには約十体ものヘロケロベロスが停止していた。

「これ全部君が・・・？」

「回数足りないから二体ずつ相手にしたかな。さすがに骨が折れたぜ。」

一度G・ODESを戻し、めんどくさそうにそう言った。

「最近本当に若い芽が充実してるなあ・・・。」

自分は死にかけたというのに三体しか倒せていない。

(これが、現役との差か・・・)

悔やんでも仕方ないのだが、それでも今の自分が弱くなってしまったことを再認識してしまう。

「さて、これでは早くは出てこないだろ。早くユウキさん達を見つけないと・・・。」

もう敵が出てこないことを確認し、カラスは再びユウキ達を探し出そうと歩き出す。

「ま、待ってくれ!!」

「何だ!?俺は今急いで・・・。」

二人を探し出そうと走り出していたカラスを思わずレトルトは引き

止めてしまっ。

「急いでいるのは理解してる。だがここで何があったんだ！？君以外に無事な人はいないのか！？」

「・・・・・・ここで何があったのか、か。難しい質問だな。それが分かれば苦労はしない。」

「それはどういう・・・・・・？」

「二日前の夜のことだ。俺はユウキさんの補佐として仕事を手伝っていた。俺は頼まれていた仕事が付いていたしユウキさんの許可も得たから先にあがったがな。だが帰り道を歩いている途中に突然爆発音が聞こえた。」

「まさか二毛作邸から？」

信じたくはなかったが話の流れからそうとしか考えられない。案の定カラスは頷き更に続ける。

「まさかユウキさんに何かあったのか？そう思った俺はすぐに引き返した。まだ火はユウキさんの部屋からしか出てなかったから入るのは苦じゃなかったしな。けど部屋にいるはずのユウキさんはいなかった。俺は焦ったがユウキさんにもしものことがあればと頼まれていたパソコンのデータ回収に急ぐことにしたんだ。だが部屋にあった全てのパソコンのデータは消されていた。最終的に残っていたのは、誰のものか分からない血痕と・・・・・・」

言いつつカラスは一つのロケットを取り出した。

「このロケットだけだ。」

「このロケットは・・・・・・！！！」

そのロケットには見覚えがあった。昔ユウキがメダロット社の若き

社長に就任したプレゼントにと自分があげたものだ。ナエやキララに手伝ってもらい買ったロケット。男にあげる物としては恥ずかしいと思うがユウキには不思議と似合う気がしたのだ。パーティは安物だと憤慨していたがユウキはありがとうと笑ってくれた。

「アイツ、まだ持っていてくれたのか……」

ヒカルはそのロケットを受け取り、懐にしまった。

「ユウキさんのロケットを拾ってすぐだ。あの野良メダロット達が暴れだしたのは。すぐにカモメと合流して皆を急いで地上に降ろそうとしたんだが、空港も使い物にならない。スターゲートも封鎖されていた。」

「じゃあ他の人達は!？」

カラスが悪いわけではないのに思わず声を荒げてしまう。しかしここにはまだパーティがいたはずだ。ユウキが巻き込まれているうえにさらに友人が巻き込まれているなんて御免だ。

「分からない。」

「じゃあ早く他の人の家に行って確かめないと……!!」

「そういうことじゃない。消えたんだ。ヘブンズゲートにいた全ての人間が。」

「な、なんだって!？」

予想もしていなかった言葉にヒカルは更に驚く。

「皆を避難させようと手分けして探したんだ。一人もいなかった。あれからもう一日経つのに誰も出てこない。そして二手に分かれたカモメも……!!」

そこまで言ってカラスは口を閉ざした。

「じゃあ今ここで無事なのが分かっているのは君だけ……？」

その問いにカラスはゆっくりと頷く。そのときだった、

「これは意外だ。まさかまだレアメダル保持者が残っていたとはね。」

『っ！？』

こちらに向け発せられた声と殺気に二人の息が一瞬止まった。

「ん？君は……あがたヒカルじゃないか！ちよつと派手な騒ぎを起こしすぎたようだね。まあいいや。」

軽い口調で話を進める少年。しかしその場にいるヒカル達にとっては喉元に刀を突きつけられているような思いだった。

「そつちの君もレアメダル保持者ってことになるのかな？そうじゃないとここにいた連中のように取り込まれているはずだからね。」

「っ！！ここにいた皆をどこにやった！？ユウキさんやカモメはどこだっ！？」

その言葉を聞き、カラスは正気に戻る。この男がヘブンスゲートをメチャクチャにしたのか……！！

「カモメ？ああ、あの雑魚のことか。最後は『助けて兄さん、兄さん！！』って叫んでたよ。一人じゃ何も出来ない雑魚のくせに歯向かってくるなんて笑えるよねえ。あっこれは君にあげるよ。」

そう、カモメを笑いながら何やら長いものを投げつけてきた。

「これは……!?!」

それはティンペットの腕だった。そしてわずかだが腕につけられているパーツ。それはカモメの愛機ライトチーターのパーツだった。

「貴様……カモメに何をしたあつっ!!!!!!!!!!」

それを見てカラスは瞬時にG・ODESを転送する。その目はこの少年を完全に敵として認識していた。

「ハハッ!面白いなあ。その目、そのメダロット。まるで死神だ!なら僕らにも与えてくれるのかな?死を!」

少年はカラスに興味を持ち、同時に異形のメダロットを出した。

「あのメダロットは!」

それは姿こそ違うもののイッキ達が交戦したミュータントのメダロットだった。

「ダメだっ、カラス君!!そいつは……!!」

「G・ODES、ヤツらに思い知らせる!!死の恐怖を!!」

ヒカルの静止も聞かずカラスはG・ODESに指示を出す。

「フフッ、遊んでやれ。クリア・ワーム。」

「ゲゲゲゲゲ……」

クリア・ワームと呼ばれた機体がG・Oデスに迫る！！

「・・・・・・・・」

それを見てG・Oデスがサクリファイスを放つ！！

キキキキキキ・・・・・・・・！！

その腕から放たれた黒衣の死神がクリア・ワームに向かいつつすぐ飛んでいく。その死神に触れたものは死を免れられない。はずだったが、

「喰らえ、クリア・ワーム。」

「ゲゲゲゲ！！」

グオオオオオオ・・・・・・・・

クリア・ワームは体を広げ、サクリファイスを文字通り喰らった。

ギジュ、ガジュ、グジュ・・・・・・・・

気持ち悪い音とともにサクリファイスが消えていく。無論クリア・ワームにダメージはない。いや、むしろ先程までよりその存在感が

増しているように思えた。

「な、なに……!?!?」

「フフフ……素晴らしい御馳走だったようだよ。クリア・ワームが喜んでる。こいつは結構グルメだね。中々に味の好みがうるさいんだ。」

カラスの様子などお構いなしに少年は続ける。

「さて、これでお終いかい？ 待つてあげてから出せる技は全て出した方がいい。全力を出して、持てる手は全てうって、そうして見せてくれこの僕に。君の絶望に歪んだ顔を!! フフフ、ハーツハツハツハツハ、アーツハツハツハツハアアツ!!」

今まで見たこともない存在に驚愕するカラスに向けて少年は笑う。  
へブンスゲート。ここで繰り広げられる惨劇はまだ終わりそうになかった……

## 第7話：惨劇の天国（後書き）

遂にプロローグと話がリンクしました。カラス本編にと登場です！ちなみに今のカラスのG・Oデスのサクリファイスは一撃で一体のメダロットを破壊できるレベルになっています。これは作者が毎回二体目のメダロットをカラスのサクリファイス一撃で消されてきた経験が元になっています。そんなことはさておき、この少年は一体何者なのか？ユウキは？カモメは？そしてヘブンズゲートの皆は？多くの謎は後ほど語られるでしょう……



## 第8話：天空の激闘

「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「ふーむ」

「ギイヤアアアアアアアアアア!!!」

「……………」

「ウグワアアアアアアアアアア!!!」

「……………ねえユウト?」

「何だ?」

「これって……………大丈夫なの?」

イツキは度々聞こえてくる絶叫を発しているであろう相棒の様子を  
思い浮かべながらユウトに問いかけた。

「何かさっきからものすごい絶叫が聞こえてるような気が……………」

「まあさっきも言った通り荒っぽい方法だからな。けどロクシヨウ  
のときに比べたら可愛いもんだぞこんくらい。」

のんびり煎茶など飲みながらユウトは答える。その手元にはメダロ  
ットの小説が置かれていた。

「そうなの?でもこのBGM聞きながらよくそんな風にリラックス  
してられるなあ。」

「褒めるなよ。」

「いや、褒めてないけどさ。」

そう言いつつイツキは天井を見上げた。

「ん？天井になんか面白いモンがあんのか？」

つられてユウトも天井を見上げる。

「いや、そうじゃなくて。ヒカルさん大丈夫かなあって。」

イツキは今ヘブンスゲートにいるであろうヒカルのことを思い浮かべ、友達のカラス、カモメを思い浮かべ、色々お世話になったユウキを思い浮かべた。・・・なんかすごくキツイ女の人がいた気がするのはいのせいだろうか？

「ヘブンスゲートにはカラス達がいるし、大事には至ってないと思うけど・・・」

自分達はミュータントに襲われたのだ。そしてまったく太刀打ちできなかった。ユウトが来てくれなければきっと今頃は良くて病院のベッドの上だったろう。そんな連中に対抗できるのは覚醒したレアメダルのおかげ。もし空がそんな連中に襲われていたら・・・

「さっきも言ったけど大丈夫だって。ヒカルさんの実力なら覚醒させなくてもあいつらに対抗できる。それに空にはお前と変わらない実力者が何人かいるんだろう？心配すんなって。」

そうは言うもののユウトの顔も少し真剣そうだった。もしミュータントがヘブンスゲートを襲ったとして、今言ったように楽観視できないのだろう。でも心配するイツキの姿を見て元氣付けようとしてくれているのだ。それが分かりイツキは微笑んだ。

「そうだね。皆ならきつと大丈夫だ。」



打を放つたはいいが、その一撃もクリア・ワームが唯一放った攻撃に破られてしまい、G・Oデスは停止こそしていないものの頭パーツを残して全て破壊されていた。その頭パーツも皮一枚で繋がっているといってもいい。

「うーん。その様子だと、どうやらこれで種切れみたいだね。でも結構頑張ったほうだよ。特に最後の生命ドレイン。あれは正に死神の名に相応しい一撃だった。ちょっと本気出しちゃったしね。さすがはレアメダル、覚醒してないというのにこれほどの力を秘めているとはね。いや、そのメダルを使いこなしている君が凄いというべきかな。」

クリア・ワームの使い手である少年が少々満足げにカラスを見下ろす。その瞳はまるで面白い玩具が手に入ったといわんばかりに輝いている。

「フフフフ、レアメダルだけじゃダメだな。君も連れて帰ろう。そしたらもつともつと面白くなる……」

「勝手なこと言うなよ。俺はまだ負けてない。」

「その強気な態度もいいなあ。僕、気に入っちゃったよ。じゃあそんな君を連れて帰るためにもここらで決着を……」

「……悪いけど第二ラウンドだ。」

「ん？」

突如乱入してくる声。そして……

ズガアアアアアアアアアアアアアアアアンツ!!!!!!!!!!

同時に巨大なビームがクリア・ワームに直撃した。

「ようやくメダフォースが満タンになってね。これでアークとティレルが参戦できる。」

「あがたヒカル……!!」

そこにはメダチェンジを終えたアークビートルDとティレルビートルを引き連れたヒカルの姿があった。

「すぐ近くにいたのに参戦するのが遅れてすまない。しかしこの敵とまともにやり合うためにはこいつらを変形させてフルパワーで挑むしかなかったんでね。」

そう言つてヒカルはカラスに微笑みかける。

「現役には程遠い実力になっちゃったからね。どうやらこれから先もこういう敵と戦っていきそうだし、いい機会だからこの敵で勘を戻すことにしたよ。」

「……へえ、つまり僕は練習台つてことかな？」

ヒカルの言葉に少年が反応する。先程とは違いその目は冷たく光っている。

「君もさっさと構え直しなよ。まさかあのメダロット、今の一撃でやられたなんて言わないだろう？」

「その言葉、そっくりそのままお返しするよ。」

「何?っ!？」

「ゲツゲエツゲゲゲ!」

いつの間にかクリア・ワームはアークの背後に回り、

「ゲツゲツゲツゲー!!」

ザシュツ!!

その鋭い爪で切り裂いた!!

「アークツ!？」

「問題は……ありません、ヒカル。」

不意打ちのためかなりのダメージを受けたのだろっがアークはそう言った。

「卑怯なんていうなよ？戦いには卑怯も何もない。」

「そうだね。確かにまだ僕は甘いようだ。そして………君達も。」

瞬間、

「ゲゲツ!？」

ティレルの大きな牙がクリア・ワームを捕らえていた。

「迂闊だったね。僕の愛機は二体いることを忘れてたんじゃないかい？ティレル、遠慮は要らない。噛み砕け。」

「イエス、マスター。」

バキバキバキバキ・・・・・・・・！！

とどん牙が閉まっていきクリア・ワームの体が悲鳴を上げる。

「こ、これが・・・・あがたヒカルの実力・・・・！！」

目の前の光景にカラスは驚いた。先程の戦い方では正直なところ失望を感じていたが、今の二対のメダロットを操る実力は本物だ。伝説のメダロットと呼ばれた一端が垣間見える。この調子ならば・・・・

「この力・・・・覚醒しているのか？いや違う・・・・では一体・・・・？」

「いいのかい？考え事をしている間に君の愛機は停止するよ。」

この程度で終わるとは思えないが客観的に見ればこちらが有利だ。にもかかわらずなぜそんな風に悠長にしているのか？やがてあと少してクリア・ワームが噛み砕かれそうになったとき、少年は突如顔を上げた。

「そうか・・・・！！君が『ツインレアメダル』の所有者か！！ならば覚醒の手順を踏まずとも納得がいく・・・・クリア・ワームでは少々分が悪いな。」

そう言って懐からなにやら黒い球体を取り出す。

「ほんのお遊びのつもりだったんだけど状況が変わったな。クリア・ワーム！！撤退するぞ、さっさと抜け出せ！！」

「ゲゲッゲゲッゲ！！」

その言葉とともにクリア・ワームはティレルの牙を力ずくで開けていく。

「バカな！？さっきまでの演技だったというのか！！」

「クツ……すみませんマスター。持ちこたえられません……  
……！！」

あまりにも強い力だったのだろう。抑えきれずティレルはクリア・ワームから離れた。

「ツインレアメダル保持者があがたヒカルとはね……あの力  
ブト型メダルのみがレアメダルだと油断したよ。ここはひとまず……  
……」

「何ぶつぶつ言ってる？」

その声とともに圧倒的な気配が場を包み込む。驚いて少年が目を向けた先には、

「まだ質問に答えてないだろ。ユウキさん達に何をして、どこにやつたか！！」

カラスだ。G・ODESとともにこちらを睨み付けている。それまで  
はいい。だがこの気配は……

「覚醒だ！？このタイミングで！？」

バカななぜ覚醒を……訝る少年などお構いなしにカラスの咆哮が轟く……！！



「答えるおおおおおおつっ！！！！」

「・・・・・・・・！！！！」

咆哮とともに現れるは絶対的な死。そう、正に死そのものというベ  
き黒い影だった。その大きさ、存在感の前ではサクリファイスなど  
赤子の児戯にすぎない。

グオオオオオオオオオツ！！！！

影が迫る。そして

「ギャゲゲツギアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

その一撃でクリア・ワームは消滅した。

「ハア、ハア、ハア、い、今は・・・・・・・・？」

「これがカラス君のレアメダル之力・・・・・・・・！！」

放ったカラス自身さえ何が起こったのか分からず呆然とする。ヒカ  
ルは覚醒したレアメダルの力をまじかで見て声が出せなかった。そ  
れを見て少年は

「先の戦闘でG・Oデスに与えた一撃。そしてツインレアメダルの  
存在がカラスのレアメダルを覚醒させたというわけか・・・・・・・・  
フフフ、クリア・ワームの代わりなどいくらでも利く。それよりも  
・・・・・・・・」

笑っていた。その顔を激しく歪ませて。

「気に入った、気に入ったよカラス!!!!君こそ我が宿敵に相応しい!!!」

そして叫ぶ。ようやく巡り合えた自らの好敵手の存在を祝い。

「何わけの分からないことを言ってる!?ユウキさん達を……」

「二毛作ユウキは僕らが預かるよ。この都市の人間と一緒にね。」

「何!?!」

「貴様、ユウキをどうするつもりだ!!!」

「僕の名を教えよう、カラス。そしてあがたヒカル。君達の実力に敬意を評して。我が名はベルフェゴール。怠惰を司りし悪魔が一人さ!!!」

「悪魔……?何を言って……!!!」

「いずれ、僕の本当のメダロットを連れて君の前に現れよう。今の君はまだ未熟だ。だが君は強くなる。もっともつと強くなり、そして見せてくれ!!!壊させてくれ!!!そのときまで君との決着はお預けだ。」

そう言っつて手の中にある黒い球体を掲げる。するとその球体が黒く輝きだしそれと同時にベルフェゴールと名乗った少年が消えていく。

「待てっ!!!カモメを町の皆を元に戻せ!!!」

(次に君に会うとき、一体どんな顔をするのか楽しみだよ。ハハハハッハハハハハッハ!!!)

「待てベルフェゴールっ!!!待てええっ!!!」

カラスの叫びも虚しくベルフェゴールの姿は消え、その場にはカラ

スとヒカルだけが残った・・・

## 第8話：天空の激闘（後書き）

遂に明らかになる謎の少年の正体。彼の名前はアニメなどによく使われる七つの大罪からもってきました。つまり彼と同じような存在が少なくともあと六人いるということです。一体どんなやつらなのか！？それにしても戦闘シーン短いなあ……。もっと長く分かりやすく書けるよう精進します。

## 幕間1：日常の風景

「あのクワガタ野郎、次会ったら絶対泣かすっ！！」

翌日、学校に向かう途中でメタバビーがメダロツチの中から喚いていた。昨日の夜から数えて、もう何回聞いたか分からない。

「何が『ちよつと痛いかもしれない』だ！！メチャクチャ痛いじゃねえかよ！！』これに耐え抜けばもつと強くなれる』とか何とか言つて俺を痛めつけやがって！！」

「・・・分かつたから少し静かにして。」

「ああっ！？イツキ、テメエ相棒が酷い目にあつたつてのに何言つてんだコラアツ！？」

「昨日、色々あつて正直寝不足なんだよ・・・頭に響く・・・」

そう。昨日は転校生が来て友達になったり、意味分かんない怪物が暴れ回つてたり、その怪物に襲われたところを友達になった転校生に助けられたり、ヒカルさんと一緒に怪物の正体とかレアメダルについて壮大な話が聞かされたりで、本当に色々あつたのだ。そのせいで帰るのが遅くなつてしまい、何の連絡もしていなかつたので母さんにメチャクチャ怒られてしまったが・・・一日があんなに長く感じたのはいつ以来だろう？寝不足なのも久しぶりな気がする。まずいなあ、授業中寝ちやうかも・・・

「おつはよ！！イツキ」

そんなことを考えているイツキなどお構いなしにバシンツ！！と背中が叩かれる音と寝不足の頭に響く大きな声を出してアリカが現れ

た。

「寝不足みたいねえ。大丈夫？」

「正直・・・大丈夫・・・じゃ・・・ない・・・」

あまりに強烈な一発だったためその場にうずくまってしまう。

「その様子じゃあ全然平気そうね。心配して損した。」

「し、心配って、何が・・・？」

ようやく楽になってきたので立ち上がりながら聞いた。

「何が？じゃないでしょ！！あんた昨日結構危なかったじゃない！

！ユウト君が助けてくれてたけど、メタビーは気絶してるし・・・  
・ねえ、また何か危ないことに巻き込まれてるんじゃないの？」

いつになく珍しいアリカの真剣な眼差しにイツキは返答に窮した。

確かに彼女は一番自分の身近にいて二年前の大きな事件のときも一緒に戦ってくれた大切な仲間の一人だ。だが今回は勝手が違う。もしかするとブラックデビルとの戦いときよりも命懸けになるかもしれないのだ。だからどうしても本当のことを話すことが出来なかった。

「大丈夫。アリカが心配するようなことは何もないよ。」

そう言ってイツキはアリカに微笑みかけた。アリカはまだ納得していない様子だったが

「・・・ならいいけど。でも何か困ったことがあったら相談しなさいよね。あたし達仲間で、しょ！...」

バシッ！と背中を叩きながら微笑み返してくれた。それはいいんだけど、アリカさん痛いです……そんなことを話しながら教室に辿り着くと、

「あれ？ユウト？」

昨日かなり親しくなった転校生、ユウトが机につっぱして寝ていた。

「結構早く来てたみたいね彼。でもあの格好じゃあ風邪引くと思うんだけど。」

その様子を見ながらアリカが呟く。

「だよ。風邪引くとよくないし、後で怒られるの覚悟で起こしておこう。」

そう言ってイツキは鞆を席においてからユウトの机に歩み寄り起こそうと声をかけた。

「ユウト、こんなところで寝てたら風邪引くよ。起きなつて。ユウト、ユウト。」

だが、

「ZZZ……ZZZ……」

いつこうに起きる気配がない。これぞまさに爆睡といえる見事な眠りっぷりだった。

「ダメだ。全然起きないよ……」

「しょうがないわね。このまま寝かせておきましょうか。もうすぐHRだしそのときになったらさすがに起きるでしょ。」

そうして二人は席に着いた。しかし自分達の読みが浅かったことをイツキはこの一日で知ることになる。

カツカツカツカツ……

担任であるリュウコ先生の授業。この授業だけはどんなに眠気が催しても誰も眠ることはない。なぜならば後が怖いからだ。噂ではものすごく勉強が嫌いな問題児が彼女の授業中に居眠りをした次の日、勉強が大好きなものすごい優等生になったらしい。あまりの変わりように本人の親御さんや周りの人間が恐れおののいたという……

「ではこの問題を……神田君。答えてみて。」

「ZZZZ……ZZZZ……」

そんな危険な授業だとも彼知らずに、彼はこの時間も爆睡していた。

(ユウト、ユウト。指されてるよ。ユウト……!!)

さすがにまずいと思いユウトを起こそうとするが

「ZZZZ……ZZZZ……」

そんなイツキの様子などお構いなしに気持ちよさそうに寝ていた。



「フフツ……いい度胸してるわね」

先生らしくもないものすごいさわやかな笑顔に語尾に……………

バキツ……………!!

次の瞬間握られていたチョークは粉々に砕け、室内の気温が一気に下がったような気がした……………

「ソーツ、ア……………よく寝たぜ。」

「まさか、一日中寝てるなんて……………」

放課後、横でのん気に大欠伸などしている友人に向かってイツキは溜め息を吐く。

「そんな褒められるようなことじゃないぜ。」

「誰も褒めてません。」

二カツと笑うユウトに素早くアリカが突っ込みを入れる。

「リュウコ先生の授業まで寝て過ごすなんて正気とは思えないわ……………」

「BGMに授業という名の子守唄をわざわざ流してくれてるんだ。相手が誰でも簡単さ。」

さも当然と胸を張って答えるユウト。

「けどその様子じゃありユウコ先生が最も危険な教師らしいな。つまり俺は歴史に名を刻んだわけだ。ハッハッハッハッ！」

「ある意味ね……」

もう何を言っても無駄と判断してさっさと帰り支度を始めることにする。

「それじゃあ僕は帰るけど。アリカはどうするの？」

「決まってるでしょ。新たなスクープを探しに行くわ!!」

目をキラキラと輝かせアリカは答える。

「そう、頑張つてね。」

「うん。それじゃあユウト君また明日!!」

「オウ!!スクープ見つかるといいね。」

挨拶をした後アリカは風のように去っていった。

「んじゃまあ、帰りますか。」

そう言い二人は帰り道を歩き出した。

「そつえばユウトはどこに住んでるの？」

昨日、夜までは一緒にいたのだが研究所で別れたのを思い出しイッキは気になってユウトに聞いた。

「やっぱり研究所？」

「そういう話もあったがな。けど俺があそこに住んでもアトムさんやナエさんの邪魔になるだけだって。余計な気も使わせちまうし。」  
歩みを止めずにそう続ける。

「だから、一人でもアトムさん達が安心出来る場所に住むことにした。」

「ここら辺でそんなところある？」

おみくじ町は基本的に一軒家が多い。そんな場所があるとは思えないが……

「すぐに分かるって……ホラ、あそこだ。」

「あそこって、廃工場!？」

そこは研究所に次いでおみくじ町最大の大きさを誇る廃工場だった。確かに住むぶんには不自由ない設備が整っているが、記憶ではここは白玉さんが住んでいたような……?

「ここに誰か住んでなかった？」

「ん? いや、俺が入ったときは無人だったぜ。」

あれ、白玉さんどこに行っただらろう?

「ああ、でも人は住んでたと思うぜ。なんか『ナエさんと憎きヒカルが楽しそうにシヨッピングしていた。あの雰囲気から恋人なんだろう……傷心したので旅に出ます。どうか探さないでね』って手紙が残ってたから。ナエさんに片思いしてたやつがいたみたいだな。まあ、あの人はもてそうだもんな。ってどうしたイツキ? そんな変な顔して?」

「い、いや！な、な、何でもないよ！！」

思わず声が裏返ってしまった。白玉さんいつから旅に出てたんだろ  
う？

「？変なやつだな。まあとりあえず上がってつてくんない？実は荷物整理まだ終わってなくてさ。もし用事なければ手伝ってくれと  
ありがたいんだが。」

それが狙いか。思わず苦笑してしまう。

「今日は週刊メダロットもないし、別に構わないよ。」

「マジで！？すっげー助かるよ、ありがとな！！お礼といっちゃあ  
なんだけど夕食食ってけよ。今日はカツカレーうどん定食の予定な  
んだ。自慢じゃないが結構料理できるんだぜ俺。」

二カツと笑うユウトに対し、イツキの目は輝いていた。

「カツカレーうどん定食！？是非いただくよ！！その前に母さんに  
連絡しておかなきゃ・・・」

そうして少年達の楽しい夜が始まる。今はゆっくりしておくといい。  
そして噛み締めるのだ、日常の素晴らしさを。この先二度と元の生  
活に戻れないかもしれないのだから・・・

## 幕間1：日常の風景（後書き）

今回はバトルなし、シリアスなしの方向で書きました。カラス達のその後は次に持越しです。にしてもユウトは恐ろしい・・・リユウコ先生の授業中に寝るなんて普通なら出来んぞ。まあ彼のキャラクターは一部、作者自身や現実の友人に意図的に似せてあるんですが。次はこんなほのぼのした話から一転、シリアスに戻っていく予定です。

## 第9話：開戦を告げる

「そうか、ヘブンスゲートでそんなことが……」

レトルトの帰還と同時に、博士は空での出来事を聞いていた。

「ミュータント、悪魔、ベルフェゴール、レアメダルにツインレアメダルか……」

「ベルフェゴールと名乗った少年はヘブンスゲートにいた人々を預かると言っていました。ユウキと一緒に。この発言から皆は捕まってるこそのものの、まだ生きている。そう解釈するのは楽観的すぎるでしょうか？」

レトルトも一語一句丁寧に思い出しながらそう呟く。

「いや。お前さんの考え通り恐らくはだれも死んではおるまい。だがユウキは……」

「でしょうね。彼はあえてユウキだけは名前を出しました。それにカラス君の話だとあいつのパソコンの研究データは残らず消されていた。だとすると彼らの一番の目的はあの場ではユウキということになる。恐らくはユウキの研究が彼らに何らかの支障をきたす物だった。ということでしょうか？」

「恐らくな……そういえばカラス君はどうしたのじゃ？一緒に降りてきたんじゃろう？」

そこまでの結論を出した後レトルトと共に空で戦っていたという一人の少年の姿が見えないことに気付き博士は尋ねた。

「先程お話したように彼のメダルはレアメダルだったようです。そ

してあの戦いの最中に覚醒してしまった。敵が撤退したあと、その力を解放したせいか気絶したんです。かなり負担がかかったんでしょう。結構無理もしていたようでしたし、この付近で一番設備が整ったメダロポリスの病院に運びました。」

そう言っつてその場所が書かれたメモを渡した。

「ここは、コウジ君達が住んでおる場所の近くか？」

「ええ、一年前ほどに設立された病院だそうです。キララの話だと中々の評判らしいですよ。」

「そうか。では彼が目を覚ましたら一度行つてみるとするかの。」

「博士、イツキ君にはどう説明しますか？」

カラスは彼の親友だ。ヘブンスゲートのこともあるしどう説明するべきか……

「ありのままに説明する他ないじゃろうな。どんなに隠し通してもいずれは分かることじゃ。」

レトルトの問いにそう答え、博士は部屋から出て行った。

「……そう、ですね。」

この話を聞いて、彼は一体どんな顔をするだろうか？悲しみ、怒るのだろう。彼に説明するのが躊躇われてしまう。しかし博士の言うとおりいずれは分かっつてしまうことだ。そう考えレトルトも研究所を後にした。

・翌日・

「おはようさん、お二人さん。」

「あっおはようユウト君!!」

「おはようユウト。今日は早くないんだね。」

アリカと共に学校へ向かう途中ユウトと合流した。相変わらずものすごい寝癖だがそれが逆に彼らしい。

「ちーつとばかり寝過ぎしてな。ああそついやイツキ、昨日はありがとな。荷物整理の手伝い。」

「何度もいいよ。それに昨日は僕だって夕食頂いちゃったんだからおあいこだよ。」

そう。昨日は本当においしい夕食だった。ユウトは言葉通り本当に料理が出来たからだ。母さんの料理とはまた違うがもう一度食べた味だった。まさか友達の家でカツカレーうどん定食がいただけるとは思ってたし……

「ああ、昨日は中々楽しかった。お前もあの味が分かる同士だったんだな……」

「もちろん!! 僕の大好物だったからね。」

「だよなっ!! やっぱお前とは本ツ当に気が合うよ!!」

ガシツと肩を組んでにこやかにユウトが言う。

「ねえ、二人とも? バカやるのは後にしない? 早くしないと遅刻するわよ。」

そんな二人の様子をあきれた様子で眺めながらアリカが冷静に言った。



「そうだね。それじゃ行くうか。」  
「ああ。」

そうして教室へと向かう三人。しかしその歩みはすぐに止まってしまった。

「あれ？何で皆校庭にいるの？」

朝会でもないのに皆が校庭に出て何かに耳を傾けていたからだ。

「なんか問題でも起きたんか？」

「んー……ないと思うよ。比較的平和な学校だし。」

「なら何なんだ？」

イッキとユウトは唸りながら何が起きているのか考えていた。

「あんた達そんなところで考えてないで私達も行くわよ！！何かスクープの予感がするわ……！！！」

そう言うアメリカの目はキラキラ輝いている。うわあ、こついつときのアリカと関わるとロクなことがないんだよなあ……

「それもそうだな。イッキ、行くうぜ。」

そんなことは全く知らないユウトもアメリカについて行ってしまっ

「ユウトまで行くんなら僕も行くしかないかあ……」

まあロクでもないことに巻き込まれると決まったわけでもないしい

いか等と考えながらイツキも二人の後をついて行く。しかしここで行われていたことはイツキにとっても嬉しいことだった。

「聞いたか!？」「ああ、こりゃやるしかないっしょ!!」「私だつて出るんだからね!!」「こ、これで俺も有名人に……」  
「うわあ今から盛り上がるなあ……」

その日あった授業は全て自習となり、教室でも職員室でもその話題でもちきりだった。

「まさかユウト君が転校してきてすぐにこんな大イベントがあると  
はね……!!」

「うん。これは出るしかないよね『全世界メダロットバトルグラン  
プリ』!!」

『全世界メダロットバトルグランプリ』これが先程まで校庭で行われていた出来事だった。校庭にある朝礼台の上になぜかミスターうるちが立っており力説していたのだ。

「我々メダロット連盟は全世界を巻き込んだ大規模なメダロット大会『メダロットバトルグランプリ』の開催を決定しました!!空地、海、そして地上!!2年前行われたメダリンピックよりも更に大規模に行います!!参加条件はメダロッターであること!!つまりは前回のよう小学生だけでなく、メダロッターであれば誰でも参戦可能です!!そして三人〜十人のチームであることです!!優勝商品はメダルが生まれた場所ともいえるアンドロメダル星への

チケットですっ！！全世界で行われるこのバトルロイヤルを勝ち抜いて優勝の栄冠を掴みメダル誕生の地へのチケットを手にするのは誰かっ！？詳しい日程は後日お知らせします！！では！！」

とまあこんな風に言われたわけで。

「悪いけど今回こそあたし達スクリューズが優勝させてもらっわよ  
お。」

「おうよ！！前回のようにはいかなえからな！！」

「お洋服が汚れても！！」

スクリューズも宣戦布告しているというわけだ。

「ねえねえどうする！？やっぱりコウジ君達と今回も組めないかな  
？」

「どうだろう。あいつのことだから『今回は敵同士だぜっ！！どっちが優勝しても恨みっこなしだからな！！』とか言いそうだなあ。」

そう言いながらライバルと片思い中の少女の姿を思い浮かべる。そういえば二人とも最近会ってないなあ……

「じゃあ今回は、あたしとイツキとユウト君で出ない！？」

「それはいいかも！！ユウトは強いしきつと勝てるよ！！」

「そういうわけでどう？ユウト君！？」

「……………」

「ユウト君？」

「……………ん？ああっ悪い悪い。ちょっと考え事しててさ。」

そういえばさつきからユウトは全く会話に入ってこなかった。寝てるのかなと思ってたら深刻そうな顔して何か考えていたし。でもお

かしいなユウトの性格ならきつと大騒ぎすると思っただけど？

「もうすっかりしてよね!!」

「ハハハ、ゴメンゴメン。で、何の話だっけ？」

「大会にあたし達で出場しなかつて話!!」

「ああ、そのことか。もちろん、俺としては異議無いぜ。てか二人と組んだら優勝いただき間違いないしな。」

そう言つてニヤリと笑う。さっきまでの深刻そうな顔ではなかつた。

「ところで二人に聞きたいんだけどさ。」

「なに？」

「最近アンドロメダル星に自由に行けるようになったのか？俺最近まで旅してたからそういう情報に疎くてさ。」

「んー……どうだろう。そんな話は聞かないけど。」

イツキとしてもあまりニュースは見るほうではないがそんな話があれば耳に届かないはずが無いが……

「まあそうね。けど実はね、まだ正式に行った人はいないんだけどつい最近アンドロメダル星人とのコンタクトに成功したって話は聞いたことがわよ。」

「ああっそういえば!!じゃあもしかしたらそのときに!？」

「……なるほどね。」

二人の話を聞いてユウトは多少納得した様子だつた。

「宇宙か……スバル達に会えるかなあ？」

イツキは宇宙にいるはずの友達に会えるかもしれないという期待を持ち気合を入れるのだった。しかしイツキはこのとき気付いていな

かった。ユウトがまたも深刻そうな顔をしていたことに。そしてこのとき、闇も動いていたことに……

「だってさ。どうする皆？」

「決まっている。レアメダル保持者達は間違いなく出るだろう。ならばそのときがチャンスではないか。」

ベルフェゴールの問いにサタンは答える。

「そうねえ。この大会を利用して全てのレアメダルを頂きましょうか。」

「一体どんな味のメダルが集まるのかな？」

アスモデウスとベルゼブブも楽しそうだ。

「そうだなあ。この機会に全部頂いちゃうのも悪くねえ。メダルは全て俺のモンだ。」

「ハハハ、相変わらずだなお前の強欲ぶりは。」

ママンの態度にレヴィアタンが愉快気に笑う。

「全員いるようだな。」

その声に全員の注目が集まる。彼らのまとめ役ルシファーだ。

「ゼロ様の許可が下りた。『この大会でレアメダルを喰らい尽くす

ことを許可する』とな。つまりは各々好きに暴れてよいそうだ。「  
「アッハハハ！！さすがゼ口様。話が分かる。」  
「クツクツク・・・好きに暴れていいってことはメダルも全部頂  
いていいってことだよな!？」  
「好きにしる。だが忘れるな。我々《悪魔》の為すべきことを。」

その言葉に一同の目が真剣になる。

「では今宵、開幕の鐘を鳴らそうか。恐怖の鐘を!!！」

その声と共に闇が蠢く。暗い暗いこの場所で彼らは準備を始めた・・・

第9話：開戦を告げる（後書き）

メダリンピック再来！！という今回ですがここからが皆さん好き嫌いが別れるんじゃないかな？まあ前にも言ったとおりこれは自分を満足させるための小説ですから仕方ないんですけどね。ちなみに三人なら分かるけど何で十人までなの？という疑問を持った人。これにはちゃんと意味があるんですよフッフッフ・・・まあなぜこんな上限を作ったのかは後々語られますが今は秘密です。

## 第10話：語られる天国の惨劇

放課後。毎度の如くアリカは取材に走り、イツキとユウトは帰路についていた。

「ねえユウト。どうしたの？さっきから難しい顔してるけど。」

大会の話が出てからユウトはずっと何かを考え込んでいるようだった。いや、もっと正確に言えば優勝商品が宇宙と知ってからだ。

「ん、ああいや。別に何でもないんだ。本当に。」

そうは言うものの明らかにユウトの様子はおかしかった。だがこうまで何でもないと言い張る以上無理に聞き出しても意味はないだろう。もし何かマズいことがあると何か言ってくるだろうし。そう思いイツキはこのことには触れないことにした。

「やあ二人とも。今帰りかい？」

そう考えていると聞き慣れた声が聞こえてきた。その方向に目を向けると、

「あれ、ヒカルさんか？」

こちらに手を振っている私服姿のヒカルがいた。

「こんにちはヒカルさん。珍しいですねこんなところで。」

この時間いつもならコンビニのアルバイトだったはずだが……



「イツキ、何も言ってるな。きつとヒカルさんも辛いんだ……」

訝るイツキの肩に手を置きユウトはゆっくり首を振った。

「やっぱり、そういうことなのかな……?」

「ああ。だからせめて俺達が……」

「オイオイ、何を考えてるのか大体予想がつくが全く違うぞ!!」

変な方向に盛り上がっている二人にやれやれと突っ込みを入れるが、

「いやだって、なあ?」

「こんなこと言うと悪いけどヒカルさん前科がありすぎるし……」

「今日は正式な休みを貰いました!!決してクビになったわけじゃないぞ!!」

まだ変な方向に向かって二人に力説するヒカル。正直、なんか哀れです。

「全く……そういうえばアリカちゃんと一緒にじゃないのかい?」

「いや。彼女ならスクープ探しに走り回ってますけど。」

ヒカルの質問にユウトが答える。その表情はいつも通りだった。

「そうか。なら好都合かな。」

「どういうことですか?」

「僕は君達を待ってたんだ。話したいことがあってね。ちょっと時

間をもらえないかな？」

「カラスが！？それにユウキさん達も！？」

ヒカルからヘブンスゲートでの出来事を聞きイツキは動揺した。そういうえばヒカルはヘブンスゲートの調査に行ってたけど……

「なるほど。ベルフェゴールに悪魔ねえ。そうか、本格的に動きだしたってことか。先手を打たれたな。」

ヒカルの言葉を冷静に聞きユウトは何やらブツブツと考え込み始める。だがイツキは冷静にはなれなかった。

「どうということなんだユウト！？君は全部知ってるのか、カラス達を襲ったやつ等を！！」

思わず声を荒げてしまう。ユウトが悪いわけではないしイツキ自身分かっているのだがそれでも大声を上げずにはいられなかった。

「知っている……とは言い切れないな。少しだけ情報を持っているといった方が正しい。」

対してユウトの方もそんなイツキの心情が分かっているのか比較的气にした様子もなく続ける。

「ベルフェゴールは《悪魔》の幹部の一人だ。幹部はそれぞれキリスト教の七つの大罪？だったかな。とりあえずそれぞれそういう大罪の名を冠する存在で、それに対応するミュータントのメダロット

を持つてる。

ベルフェゴールは怠惰の名を冠する悪魔。つまり怠惰の意味を持つメダロットがそいつの本当のメダロットだ。」

「つまり、僕達が戦ったクリア・ワームは……」

「そいつらはクリア・トルーパーの発展型さ。確かに脅威ではあるが覚醒したレアメダルの力なら雑魚だな。使い手がベルフェゴールだったなら通常のワームよりはかなり強いだろうけどね。」

その言葉にヒカルは青ざめた。

「あれでもまだ、雑魚レベル……!!」

自分はとりあえず渡り合えたとはいえギリギリだったといっている。カラスのメダルがレアメダルでなかったら、いやあの時覚醒していなかったら僕はここにいなかったかもしれないというのに……

「悲観することはないよ。ヒカルさんはツインレアメダル保持者だから。こうしてる間にも着々と覚醒してるから、あいつら程度にはもう遅れはとらないよ。」

そんなヒカルの様子を見てユウトはそう言った。

「その、ツインレアメダルとはなんだい？普通のレアメダルとは何か違うのか？」

「知らないのも無理ないさ。俺だって最近まで知らなかったからね。ツインレアメダルってのは二個一対のメダルのことさ。ヒカルさんのアークのカブトメダルとティレルのクワガタメダル。俺達のと同じじゃないって気付かなかった？」

そういつて自分のクワガタメダルを見せる。絵柄などは同じだが確かに雰囲気というかとにかく何かが違うように思えた。

「ツインレアメダルは一つ一つ別々に使うとうまく機能しない。普通のメダルと比べて少しだけ強力つくらしいの力しか持たないんだ。けど対となるもう一つのメダルが近くにある。同時に使つてると更にいいんだけど」と、どのレアメダルよりも強力な力を発揮するんだ。最も謎だらけのメダルだし俺もヒカルさんに会うまではそんな物あるなんて信じてなかったんだけどね。」

「僕のメダルが……?」

ヒカルは自然と自分のメダルを眺める。今までの相棒が更に頼もしく見えた。

「……けど覚醒してないんでしょ? 強力つて言ってもそれだと……」

「いや覚醒しつつある。どうやらミュータントとの交戦で今まで止まっていた歯車が動き出したつてところだろ。」

ユウトがスラスラと答える。その様子を聞きイッキはどうしても気になることができた。

「ユウトは何でそんなに色んなことを知ってるの? 今回のことだけど、君は相手のことも知りすぎてる気がする。」

その言葉を聞き初めてユウトの顔色が変わった。イッキ達を助けてくれたときのようないや冷たい氷のような目。見る者全てを凍てつかせるような冷たい冷たい……

「何で知ってるかって? そりゃあ知ってるさ。俺が旅を始めた一番

の切っ掛けだからな。」

「え？」

旅を始めたのは学校がつまらなかつたからじゃ……………

「ずっと探してるんだ。あいつを。ガキの頃からずっとずっと……………」

誰に言うでもなく一人続ける。

「俺はあいつに会わなきゃいけない。見つけ出して、会って。そして……………」

『私が憎いか？ならば追ってきたまえ。他の全てを犠牲にしても私を追い続け、そして……………』

「……………ユウト！！ユウト！！」

「ッ！！あれ、何話してたんだっけ？」

どうやら昔のことを思い出し周りの声が聞こえなくなっていたらしい。イツキは心配そうな顔でユウトの顔を覗き込んでいた。

「……………ワリい。ちょっと気分が悪くなっちまったから俺帰るな。」

「あ、ユウト！！」

そのままその場を立ち去っていくユウト。その背中を追いかけてこないでくれと懇願しているようだった。

「僕、明日ユウトに謝らなきゃ。」

「何があったのかは知らないけど、どうやら過去に嫌なことがあったようだね。」

一人言を言っていたユウトの顔は今までにない負の感情が含まれていた。詮索したら絶対に彼を哀しませることになるな……

「とりあえずヒカルさん。病院の場所を教えてくださいませんか？」

「いいのかい？彼を追わなくても。」

「多分今僕がユウトにかけて上げられる言葉は無いですから。」

「分かった。」

病院の場所が書かれたメモを渡す。イツキはそれを受取り礼を言ってカラスが入院している病院に行くべくメダロポリスへ向かった。

## 第11話：病院にて

コウト達と別れイツキは一人メダロポリスへと来ていた。目的はカラスのお見舞い。彼がいる病院がこのメダロポリスにあるからだった。

「それにしても、まさかここに病院があったとは……」

結構大きい病院。それが建てられていたのはメダロポリス。つまりはメダロポリス内でもかなりの金持ち、もとい富豪達の住む場所である。イツキの友人達であるコウジ、カリン、そしてハチロウの家もここにある。皆この地区でもかなりの富豪の家系で、いわゆるボンボンだった。

「最近は来てなかったとはいえこんな大きい建物が建てられてることに気が付かないとは。僕って意外と注意力なかったんだな。」

そんなことを考えながらイツキは病院の扉を開け

「あれ？イツキか？」

不意に呼び止められた。

「えっ？イツキ君？」

「その声は、コウジ！？カリンちゃんも……」

イツキを呼び止めた声の主はライバルであり親友でもあるコウジだった。その傍らには同じく友人のカリンもいる。

「やっぱりイツキか！！久しぶりだなあ！！元気だったか！？」

こちらが誰か分かった瞬間、駆け寄ってきて背中をバシバシ叩くコウジ。

「痛い、痛いつてコウジ！！」

そう言うが、久しぶりの親友との再会にイツキの顔には自然と笑みが浮かんでいた。

「本当にお久しぶりですわねイツキ君。お元気そうだなによりですわ。」

「うん！！カリンちゃんも元気そうで何よりだよ！！」

カリンの天使のような微笑にイツキの心も温かくなる。鼻目なしにカリンは可愛いのだ。カリンたちの通う花園学院中等部では「カリンちゃんファンクラブ」なるものがあり親衛隊まで結成されているとか。イツキは親衛隊には入っていないが彼女に恋する一人の少年なのだ。

「にしても病院なんかは何の用だお前？体でも悪いから病院に入ろうとしてたんじゃなかったのか？」

コウジが不思議そうに尋ねる。

「違うよ。お見舞いだよ。」

「誰かお体を悪くされたんですか？」

イツキの答えに今度はカリンが心配そうに尋ねる。



「まあ……色々あつてね。」

やっぱりカリンちゃんは優しい子だなあと思いつつイツキは二人にカラスのことを簡単に伝えた。ヘブンズゲートでの出来事は隠しようが無いので、レアメダルを巡つての大きな戦いに巻き込まれたということは伏せておき、大きな事故があったということにしておいた。彼らも二年前にカラスに会っているし知らない仲ではないのですぐに誰だか分かったようだが、それだけに事件のことを聞いて複雑な思いを抱いてるようだった。

「そうか、そんなことがあつたのか……」

「皆さんが心配ですね……それでイツキ君はこれからカラス君のお見舞いに行くところだったんですね？」

「そうなんだ。二人こそどうしてここに？」

今度はイツキが二人に問い返す。まさか八チロウあたりが怪我でもしたのかな？

「俺らは別に病院なんかには用はねえよ。ただの学校帰りさ。」

そういつて鞆を掲げてみせるコウジ。なるほど確かにここは彼らの家だけじゃなく花園学院もあったな。

「あの、イツキ君。」

「何カリンちゃん？」

声をかけられイツキはカリンのほうを向く。

「よろしければ私もカラス君のお見舞いに付き添っていいですか？」

「そうだな。最初はいいけど、最後に会ったと

きは結構いいやつだったし。知り合いがそんな目にあって入院してんなら一回くらいは見舞つとかねえと」

「うーん……」

本来なら肯定したいところなのだが今回カラスは事件に巻き込まれたのだ。それもヘブンズゲート全体を巻き込み世界をも巻き込むであろう大事件に。大きな脅威に。もしカラスの見舞いに付き添わせたら二人の身にも危険が迫るのでは？そう考えたが、

「……そうだね。いいよ。」

イツキは頷く事にした。恐らくは大丈夫だろうと考えたかったということもあるがそれよりも、今はユウトのおかげでメタビーのレアメダルは覚醒しているはずだ。もし二人に何があっても僕が守る、そう考えたのだった。

「んじゃ、善は急げだ。早速行こうぜ!!」

「その前にお見舞い用のお花を買いませんか。」

「あっそうだった。忘れてたよ。」

そんなことを話しながらお見舞い用に花を買い、そして三人で病院に入った。

「渡鳥カラス様ですか？少々お待ちください。」

病院に着き、カリンが受付でカラスの病室を調べてもらう。その間にイツキは周りを見渡していた。

「結構人多いんだねえ。」

「まあな。結構評判になってる病院だし驚くようなことでもないさ。それよりお前が知らない方が驚きだ。」

「最近こつちに来てなかったとはいえ確かに……………」

改めて有名な病院だということが分かり自分の観察力の無さに呆れてしまう。

「お二人とも、カラス君の病室が分かりましたわよ。早速向かいましょう。」

「あ、うん。」

受付にいたカリンが戻ってきたのでカラスの病室に向かうことにした。

「えーつ302…………303…………304…………あつありましたわ。この病室です。」

『305・渡鳥カラス』と書かれたプレートを見つけてカリンが見つけた。

「んじゃ、あいつがどうしてるか見てみるとするか。」

「僕らはお見舞いに来たってこと忘れないでよコウジ。」

そんなことを言いながらイツキ達はドアの前に立つ。

コンコンコン……………

「入っていいぞ。」

カラスは起きているようで返事が聞こえてきた。

「失礼しまーす……」

許可を得てイツキ達は中に入った。

「久しぶりだね、カラス。」

「イツキか？それに確か辛口コウジに純米カリンまで……」

「コウジでいいよ。堅苦しいからさ。」

「私のこともカリンで結構です。」

中にいたカラスは比較的健康そうに見えた。ベッドの上に寝ているといってももういつでも退院できるといわんばかりの表情で、退屈そうに本を読んでいた。

「お花、ここでいいですか？」

「ああ、そこでいい。わざわざすまないな。」

「いえいえ。お気になさらないでください。」

カリンはにっこり微笑み花瓶に水を入れに部屋を出て行った。

「体は大丈夫みたいだね。」

「ああ。正直、退屈だ。」

「本当に退屈そうだな。けどこのぶんならすぐ退院できんじゃないかねえのか？」

「まあな。」

そっけなく返事をするカラスだがコウジは気にした様子は無かった。彼がこういう性格なのは彼もよく知っているのだ。

「それより聞いたぞ。大きな大会が開かれるそうじゃないか。」

「ああっ！？そっついえばそうだったぜ。」

「コウジ君。病院内では静かにしてください。」

部屋に戻ってきたカリンがコウジを諷める。

「わ、悪い、カリン。けどすっかり忘れてたぜ。三丁十人のチーム戦だったよな。」

「お前達は今回も同じチームで出場するの？」

「うーんどうすっかなあ・・・正直イツキと戦いつて気もするしなあ・・・」

「私はまたイツキ君と一緒に戦つてみたいですね。」

「そうか？イツキ、お前どうするんだ？」

「えっ？」

イツキは急いで顔を上げる。正直、話の半分も聞いていなかったのだ。

「大丈夫ですか？気分が優れないのなら・・・」

「大丈夫、大丈夫。心配しないで。ちよつと考えしてて話を聞いてなかったただけだから。」

しまった昨日に続いてカリンまで心配させてしまった。

「珍しいな。まあそれよりお前はどうすんだ？大会のメンバー。」

「ああ、そのことか。」

実を言うと大会のことを考えてる余裕が無かったのだ。学校にいるときは大騒ぎできたが自分はカラスが怪我をしてここにいる原因となった大きな戦いに巻き込まれている。そのことを思い出し大会について考える余裕が無かった。

「とりあえずアリカと組んで出るつもりだよ。後は取って置きの新メンバーかな。」

「誰だソイツ？」

「神田ユウトってメダロッター。クワガタメダロットを使う凄く強いやつなんだ。」

「転校生ですか？」

「うん、最近転校してきたんだ。話してみると中々いい人だったよ。」

「へえ、面白そうだな。今度会わせてくれよ。」

「私も会ってみたいですね。」

「うん、喜んで!!！」

二人に会ったらユウトはどんな顔をするんだろうか？僕やアリカに向けるような笑顔を向けてくれるだろうか？多分向けてくれるとイツキはなんとなく思った。

「そうか……。お前達は出るんだな。」

「ん？カラスは出ないのか？」

「いや、一緒に出る奴がいないんだよ。」

「あ……悪い、その俺……。」

きまらずい沈黙が流れる。

「気にするな。全員死んだというわけじゃない。」

「そうだよ。皆きつと無事さ。捜索隊も出てるみたいだし……」  
「きつとすぐに見つかりますわ。」

カリンは善意でそういつているのだがイツキはそう言いながらも真実を知っているのを見つからないだろうことも分かっていた。けどカラスはもつと辛いのだ。何とかして元気付けてあげたい……

「ねえ、カラス。そんな気分じゃないかもしれないけど良かったら僕らと同じチームで出ない？」

「何？」

「三人〜十人におさまれば大丈夫だから。今のところ僕のチームには三人だけだから最低でもあと七人入れる。」

表向きそうは見えないかもしれないがカラスもメダロットが大好きなのだ。こんな状況でこんな誘いは不謹慎かもしれないが、これでカラスが元気になってくれるなら、

「………考えておく。」

「え!？」

「考えておくと言ったんだ。あいつらが見つからないのに俺だけそんな大会に出場するのは不謹慎だと思うがいつまでもしょぼくれないられないしな。それに全国から年齢無制限で参加者が集まるならもしかしたらあいつらの行方を知るものがあるかもしれないし、もしかしたらこっちの気も知らずに出てる可能性だってある。」

「それは無いと思うけどな……」

「とにかく誘ってくれてありがとうイツキ。今すぐは答えられないが返事はちゃんとする。」

「うん、分かった。」

良かった。心からそう思った。確かに全国から集まるのだからレアメダルを狙いにあいつらミュータントも参加していないとは言いきれない。もし出ていたら一発ブン殴って皆の行方を聞き出そう。

「ウフフ。もしカラス君がイツキ君のチームに入ったら強敵になりますわね」

「そのほうが倒しがいはあるがな。」

コウジ達が楽しそうに言う。

「あれ、結局二人とは別チーム？」

「まあな。けどもし俺達がぶつかるとしてどっちかが勝っちゃっても空きがあつて優勝チームメンバーの許可さえもらえば同伴して旅行につきあえるらしいしな。」

「そうなの？」

「ええ、そうなんです。」

知らなかった。だとすると……

「まずは敵としてぶつかって、その後また皆で集まればいいわけだ。」

「ああ、俺達が当たるかどうかはわかんねえがな。」

「そうか。ならそのときまで負けないようにしないとね。」

「ああ、今度こそ負けねえからな!!」

「……お前らここは病院だぞ。」

こうして熱くなりながらイツキは大会の参加を改めて決意した。その後カラス達と色々談笑して時間を過ごしたのだった。



第11話：病院にて（後書き）

申し訳ありません！！今回は区切りがものすつごく悪いです。反省  
します。けどここで変えてしまうと次の展開に支障が……  
次からはこのようなことが無いよう気をつけます。

## 第12話：迫る悪意

「それじゃあ俺達はそろそろ帰るか。」

時間が過ぎるのは早いものでコウジがそう言い出した頃にはもう日が傾きかけていた。

「そうですね。あまり遅いとお父様が心配してしまいますし。」

「カリンの親父さんは心配症だからな。心配しすぎて軍の一つは動かしかねない……。」

「もう。コウジ君たら大袈裟ですわ。」

カリンはおかしそうに笑っていたがイツキは冗談に思えなかった。何せカリンの事になると見境がなくなるからなあ。

「確かにそろそろ帰ったほうがお前らの家族も安心するだろうな。」

「心配してくれてるの、カラス？」

「別にそういうわけじゃ。」

からかうイツキに対してカラスは少々恥ずかしそうにそっぽを向いた。

「んじゃカラスも心配してくれてるし、そろそろ帰るか。」

「いや、だから心配してるわけじゃ……。」

「ありがとうございますね。カラス君。」

「だから心配してるわけじゃないと……!!」

必死の抗議の声も聞かずに帰り支度を始める二人。楽しんでてわざとやってるな。

「よし。じゃあ帰ろうぜイツキ。」

「あ、僕はもう少しここにいるよ。二人がいない間に本格的に勧誘しておきたいんだ。」

イツキはまだ話すことが残っていたのでそう言った。この話はコウジ達には聞かせないほうがいい……

「？イツキ。その話は……」

カラスは何か言いたそうだったがイツキの意図を察したのか何も言わなくなる。

「そうか。じゃあここで解散だな。イツキ、カラス。またな!!」

「それではお二人とも。ごきげんよう。」

「うん、またね二人とも!!」

「今日はわざわざすまなかつたな。」

そうしてコウジ達は病室から出て行き中にはイツキとカラスのみが残った。沈黙が流れる。イツキ自身中々話を切り出せなかったのだ。

「……で、わざわざ一人で残った理由レアメダルについてか？あいつらに聞かれたくない話だからなんだろう？」

そんな沈黙を破ったのはカラスの方だった。先程までとは違い真剣な眼差しだった。

「うん。カラスもレアメダルに選ばれた人なんだってことには驚いたよ。実はレアメダルって結構あったんだね。」

「前置きはいい。さっさと本題に入ろう。」

いまだ本題に入ろうとしないイツキに、カラスは少タイラついた様子を見せる。

「……………さつき神田ユウトって転校生がいるって話はしたよね？」

「ああ。」

「彼もレアメダルに選ばれた人間の一人なんだ。」  
「それで？」

それがどうした？といわんばかりのカラスを改めて見つめなおしイツキは深呼吸する。

「彼はヘブンスゲートを襲った連中を追ってるみたいなんだ。」

「っ！？どういうことだ……………!？」

「とりあえず僕が彼から聞いた情報を話すよ。レアメダルを持っている以上、カラスも当事者らしいから……………」

そしてイツキは今までのことをカラスに語りだした。自分達の近くで異形のメダロットが暴れていたこと。そのときの自分とメタビーでは全く歯が立たなかったこと。そんな相手をユウトは相棒のロクシヨウと共に造作も無く倒したこと。更には彼が語ったミュータントとレアメダルの関係。そのミュータントが今回の騒動の原因であること。そしてカラス達が戦った少年はミュータントの中でも幹部クラスの『悪魔』と呼ばれる存在であること……………自分が知っているであろうことを全て話し終えたとき、室内は再び沈黙が支配していた。ただ時間を知らせる針の音だけがやけに大きく聞こえる……………

「……………やっぱり信じられない？」

今度はイツキが沈黙を破った。この問いはカラスだけでなく自分自身にも問いかける質問だった。

「信じてない……が、信じざる得ないだろう。宇宙規模の戦いがあつたかどうかは分からないが少なくとも俺は人知を超えた敵に遭遇してる。その強さも。そして突如覚醒し、真正銘の死神を出したG・Oデスを……」

やっぱりカラスのメダルはすでに覚醒しているのか。確認する必要もなくカラスは答えを言った。

「だが……」

「だが？」

「そのユウトという男は何者だ？何でそれほどのことを知ってる？ ミュータントとレアメダルについてはデカイ図書館や研究所にでも行けば分かるかもしれない。だが悪魔と名乗るヤツラの情報は？そもそもなんでヤツラを追ってる？」

次々と出てくるカラスの疑問。だがイツキは答えられず首を横に振る。自分も知らないから。

『ずっと探してるんだ。あいつを。ガキの頃からずっとずっと……』

ユウトが口にした『あいつ』という言葉。間違いなく人の事を指しているんだろう。そしてヤツラの存在が旅を始めるきっかけだといっていたから『あいつ』とは悪魔の誰か？

『俺はあいつに会わなきゃいけない。見つけ出して、会って。そし

て………』

そして、どうするんだろう。分からない。何も分からない。唯一言えるのは、ユウトはその『あいつ』を探していてそのためならどんなことでもするだろうということだ。

「それでカラス。僕の考えならこの大会に間違いなく《悪魔》は出てくると思うんだ。」

「だろうな。恐らくやつらは俺達がレアメダルを所持していると知った以上俺達のこと調べ上げているはずだ。俺達が出ないわけが無いと考えるだろう。出なければ出なければ何も知らない者達をレアメダルが見つかるまで襲うだろうな。これは世界規模だからそうならかなりの被害が出る。」

カラスは冷静に推理する。僕と考えることは同じだ。

「だがこれはチャンスでもある。ヤツラが介入してくるということ。ヤツラをそこで叩き潰してユウキさん達の居場所を聞き出す。覚醒したレアメダルが相手なんだ。全員とはいわなくても最低一人は『悪魔』が出てくるだろうしな。」

「うん。だからカラス。」

「分かっている。ひょっとしたらベルフェゴールが来るかもしれないしな。俺もお前のチームで参加させてもらう。」

決意に満ちた表情でそう宣言する。その瞳に迷いは無かった。

「ああ！―一緒にあいつらをぶつとばそう！―！」

「ふん。せいぜい足を引っ張るなよ。」

そう言いながら右手を差し出す。イツキはそれに答え二人は力強く

握手を交わした。

「それじゃあ僕もそろそろ帰るよ。」

「ああ。いつになるかは分からないが大会までには退院してみせる。」

「頼むよ。期待してるからね。君は強いんだから。」  
「褒めても何もでないぞ。」

実際イツキは彼に期待している。二年前戦ったときの彼の實力は今まで戦った中でも五本の指に入るほど強かった。彼が一緒のチームで戦ってくれるのはものすごく心強い。

「じゃあな。気をつけて帰れよ。」

「カラスも体ちゃんと治してよ。それじゃー!!」

そう別れを告げてイツキは病室から出て行った。

「うわあ、こんなに経ってたのか……」

外に出てみると真つ暗ではなかったがほとんど夜に近かった。家に連絡はしてあるが急いで帰った方がいいな。と、そのとき

「ハア……ハア……ハア……ハア……イツキ!!」  
「うわあっ!?!」

大きな声で呼ばれ思わず飛び上がってしまった。

「なんだ、コウジか……びっくりさせないでよ。帰ったんじ

「やなかったの？」

「それどころじゃ……ハア、ねえよ。ハア、ハア……  
カリンが……ハア……カリンが……っ!!」

その言葉を聞きサーツと血の気が失せていく。

「カリンちゃんに、カリンちゃんに何があっただつ!？」

コウジの肩を掴み強く揺する。頼む、僕の考えとは外れてくれ……  
……!!

「カリンが……拉致られたらしい。」  
「なっ!？」

拉致された……?カリンちゃんか?

「一体誰に!？」  
「わからねえ……家まで送って別れた後だったんだ。俺が家に帰る途中悲鳴が聞こえて、それで急いでカリンの家に戻ったら……」  
「いなくなっていた……くそっ!!」

それでは八方塞がりだ。誰が何の目的でカリンちゃんをさらったんだ!?

トウルルルル!!……トウルルルル!!……

突然イツキの携帯に電話が鳴る。慌てて番号を見ると



「カリンちゃん!?!」

「何っ!?!」

カリンからだった。急いで通話に入る。

「もしもしっ!?!カリンちゃん無事なのっ!?!」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

返事は無い。まさか・・・・・・・・

「カリンちゃんっ!?!返事をしてっ!?!カリンちゃんっ!?!」

『・・・・・・・・・・うるさいなあ。電話をするときは大声出すなって習わなかったの?』

返事が聞こえた。しかしこの声はカリンではない。この声は男?いずれにしても聞き覚えは無かった。

「お前は誰だっ!?!カリンちゃんをどこにやったんだっ!?!」

『さあねえ。そんなことよりさあ、今からおどろ山に来てよ。僕お腹空いちやって。』

「何を言って・・・・・・・・」

『来ないんならこの子食べるよ。雑食なんだよねえ僕。この子もメダルも凄くおいしそうだし・・・・・・・・』

「・・・・・・・・おどろ山だな?待ってる、五分で行く。」

『フーン。まあ期待しないで待ってるよ。じゃあねえ〜』

ブツッ!?!ツ、ツ、ツ、ツ・・・・・・・・

どうやら電話が切れたらしい。震える拳を必死に押さえつけイッキは風の翼の準備を……

「待てよイッキ!! どういうことなんだよこれはっ!? 俺にも分かるように……」

「これは……カリンちゃんがさらわれたのは多分、僕のせいだ。」

悔しさを隠し切れない声でそう言う。

「それは……どういうことだ?」

対するコウジはどういうことなのか理解しかねるといった様子だった。イッキはなぜ自分のせいでカリンがさらわれたと……

「ごめんコウジ、何も言えないよ。でも絶対にカリンちゃんは取り戻して見せるから!!」

風の翼を転送しすぐに飛び乗る。そして一瞬の内に上空へと舞い上がる。

「待てよ!! 何言ってるのかわかんねえよ!! イッキ!! イッキー  
ーッッ!!」

コウジの静止を聞かずイッキ、は怒りを必死に抑えておどろ山へと飛び立った……

第12話：迫る悪意（後書き）

ようやく日常パートは終わり彼らとの戦いが始まる・・・は  
たしてカリンの運命は！？そしてイツキは勝てるのか！？次回をお  
楽しみにお願いします。

### 第13話：激突、暴食の悪魔！！

「さつきは失敗したなあ」

廃工場。誰も使わなくなったはずのこの工場は一人の研究員のとある野望によって大勢の大家族でも暮らせる快適空間となっていた。もっともその研究員は失恋(?)し、今ここにはいない。そんな快適空間を一人占めしながら神田ユウトは後悔していた。

「あれじゃアイツキにもヒカルさんにも心配かけさせちゃったかもなあ。さてどんな顔して明日会いに行こうか……」

先程、ヘブンズゲートでの出来事をヒカルから聞いたとき自分はあの表情を出してしまったらしい。あいつを追っているときによく見せるあの表情を……失敗だった。

「あれじゃあ誰でも普通気にするわな。しかもその後の俺の行動ときたら……」

と、独り言をブツブツと続けていると

「ッ!?この感じ……!?!」

何かが見えたわけでも聞こえたわけでもない。ただ感じた。何とも言えないこんな感覚は……

「ミュータントメダロットかつ!?しかもこの気配のデカさ……  
・何で《悪魔》の幹部レベルのヤツが来てんだよ!?!」

だが驚いてばかりもいられない。もしかしたらあいつがいるかもしれないから。

「メダロット、転送!!」

確かめるべくロクシヨウを転送する。ロクシヨウの方も事の重大さをすぐに理解し索的を開始する。そして、

「感じるぞユウト。あいつの気配をな。」

そう答えた。ロクシヨウは過去にあった事件以来、特にミュータンの索的能力が上がっている。間違い等あるうはずがない。

「ハハッ。ようやく会えるってわけか。どのくらい待ったかな?」

そう言いつつその顔には狂喜の笑みが浮かぶ。もう逃がさねえ・・・

「それで場所は?」

もう待ちきれんとばかりにロクシヨウを急かす。が、

「ちょっと待てユウト。あいつとは別にもう一人幹部がいる。」

「んだとっ!?!」

この町に二人も幹部クラスのヤツが・・・!?!?

「こいつはおどろ山にいるらしい。あとこれはメタビーか?どうやらイツキ達もおどろ山に向かっているようだ。」

「イツキ達も?荷が重いかもしれねえけど多分大丈夫か。覚醒した

メタバビーの力はお前にも並ぶし、イツキの腕もかなり高い。うん、大丈夫だな……ってなんで深刻そうな顔してんだ？」

安心してあいつの元に行けると思ったんだがどうやらそうでもないらしい。不安要素はないと思うんだが？

「ユウト、冷静に聞け。実はな……」

疑問に思うユウトに、ロクシヨウはとんでもないことを言い出した。

「ハアツ！？ちよつ、それまずいだろ！？」

「ああ。それにあいつの気配は感じるが場所は特定するのに時間がかかる。」

「なら行くしかねえな。イツキ達のところへ！！」

「いいのか？」

「時間かかるんだろ？それに、あんなのはもうゴメンだから……」

そう言っつてすぐに廃工場を出ようとする。しかし、

ドゴオオオオオンツツツ！！！！

「なんだっ！？」

「グゲゲゲゲゲゲ！！」

廃工場に数えきれない程の異形のメダロットが侵入してきた。

「クリア・トルーパーだと……？それにワームまで……こ

りや俺達の居場所がばれた且つイツキ達のところに向かわせねえ魂胆だな。」

そう冷静に分析している間にもどんどん敵が入ってくる。数は多すぎて分からない。

「じゃあねえ……ロクシヨウツ!!準備運動だ。こいつら急いでカタしてイツキ達のところに行くぞ!!」

「承知!!」

二人は臨戦体制に入り異形の軍団に向かっていった……

「ようやく着いたな……」

あの電話から5分後、イツキはおどろ山に到着していた。しかしそこにはイツキ意外誰もいない。畏か?だとしても……

「おい、出て来い!!約束通り来たんだ!!早く姿を現せ!!」

返事は無い。ただイツキの叫びだけが虚しく響く。

「いないわけじゃないだろう!?さっさと出て来いって……!!」

「本当、君はうるさいね。調べた感じだとそんなに熱いキャラじゃなかったんだけどなあ。」

非常にめんどくさそうな声が聞こえてくる。それと同時に今まで感じられなかった凶悪な気配がイツキに浴びせられた。

「あつ……………!!」

声を上げることも出来ない。声が聞こえる。ただそれだけなのに。しかしイツキは自身に活を入れる。ここに何しに来たんだ？カリンを救い、さらったヤツをブツ飛ばすためだろう!?

「こ、声だけじゃなくて、姿……………見せるよ……………!!」

「はあ、やだなあ。まだ食事してる最中なんだけどなあ。けど急かされたなら仕方ないか。」

イツキの必死な状況などお構いなしにあくまでもマイペースだ。そしてゆつくりと男は姿を現した。

「初めましてかな？天領イツキ。僕の名前はベルゼブ。よろしくね。」

太った、いや太ったというよりはデカイ。身長が高いわけでも恰幅がいいわけでもないのにベルゼブと名乗った少年からはデカイという印象を受けた。

「な、き、君は……………」

しかしイツキはそんなことよりも彼のとっている行動が信じられなかった。何かを食っている。石だ。いや石ではない。それはメダルだった。メダルをバクバク食っている。異常だ。普通じゃない。しかしそれ以上に彼を異常たらしめているのは、彼の足元に転がる人体模型で見たことがあるような人の腕の骨が転がっていたことだっ



た。

「ああ、これ？君の推測どおりさ。電話で言わなかったけ？僕は雑食だって。」

やはり普通の人間ではない。そしてベルゼブブという聞きなれない名前。そこからイツキの辿り着いた結論は、

「『悪魔』だね？」

「まあ名前言えば分かるよね。うん、そうだよ。僕は『暴食の悪魔』さ。」

やはりそうか。しかしますます安心できなくなった。

「カリンちゃんはまさか……」

「ああ、安心しなよ。彼女と彼女の持つメダルはまだ食べない。僕はね、ここにはレアメダルがたくさんあるって聞いたから祭りまで待ちきれなくて食べに来たんだよ。」

祭り？大会のことか？だとするとやはりこいつらは……

「でも全然見つかなくてさあ。もうそこらへんの物で我慢することにしたんだ。あと格別おいしそうだったから彼女は見晴らしのいいここで食べようと思ったんだけど、何とこの子は君の知り合いだった！！だから彼女を利用すれば君のレアメダルも現れると思っただんだ。そして泣き喚く君の前でレアメダルと彼女を頂く……最高じゃないか！！」

狂ってる。イツキがまず最初に感じたのはそこだった。そして次に来るのは怒り。まさかそんな理由で多くのメダルや人を？カリンち

やんをさらったのか？

「……けるな。」

「ん？なんて言ったの？」

「ふざけるなあああっつっ！！！！」

イツキは吼えた。目の前でニコニコしてる残酷な少年に。人やメダルを食い物としか見ていない怪物に。

「お前は絶対許さない……！！メダロットを出せ！！望み通り相手してやる。お前を倒してやるっ！！！」

「僕を倒す？へえ〜面白いこと言うね君。レアメダルを持つてる程度で付け上がったちゃって。いいよ。出してあげる。その方が君の苦しむ顔が見られそうだからねえ！！！」

ベルゼブブは顔を歪ませ右手を掲げる。

「闇より出でし我が悪魔よ………汝、『暴食』の名を持ちて眼前の敵に恐怖を与え、その全てを暗い尽くせ！！！」

ベルゼブブに詠唱が唱えられそこに悪魔が現れる！！

「汝が名は『グラ』！！！」

「ぐおおおおおおお！！！！！」

現れたのは黒い巨人。その手には鉄槌が握られ、その顔は正に全てを暗い尽くす悪魔に相応しい凶悪な牙と口が備わっていた。

「だからなんだ！！メダロット転送っ！！！」

それに対し、イツキは臆することなく自らの相棒を呼び出す!!

「おおー……メタビー様、久々の登場だぜ!!なんかやばそうな奴が出てきたがこっちもムシャクシャしてるんでねえ。ぶつとばさせてもらうぜっ!!」

メタビーもやる気が有り余っている。どうやら手加減できそうに無い。

「それじゃあお互いパートナーも出したし……」

『ロボットル開始!!!!』

「じゃあっ、飛ばしていくぜえ!!バリスター!!」

先攻はメタビーだった。イツキの心を読み取りすぐに求められた行動をとる。これは強い絆で結ばれている二人だからこそ出来ることだ。

ドガーーーーー!!!!!!

ミサイルがグラに炸裂する!!鬱憤が溜まっていたのかその威力はいつもの比ではない。

「メタビー!!気を緩めるな、メダフォースチャージ!!」

「うおおおおお!!!!」

すぐにチャージを開始する。グラはまだ爆発から出てこず、メダフオースは簡単に満タンに溜まった。

「メダフオース発動！！威力全開っ！！」

相手の出方など気にしない。全力で叩き潰すのみだ。そのためにカブトメダルの第二のメダフオース『威力全開』を発動する。それも一回ではない。二回、三回と重ねて発動させていく！！だがその間によろやくグラが爆発から出てきた。相当装甲が高いのだろう。大したダメージを負っているようには見えない。が、

「へっ、ノロマ野郎が、いつまでもボサツとしてんじゃねえぞ！！」

メタビーはグラが出てくると同時にメダチェンジを完了させ更にクロス攻撃を四つ設置していた。このスピードは、早すぎる。イッキ自身もそう感じた。だがこれが覚醒したということならば心強いことこの上ない！！

「いつくぜええええ！！クロス攻撃・ファイアツ！！！！」

ドガガガガガ！！！！

四つのクロス攻撃が火を噴きグラに追い討ちをかける。だが今回はグラも反応し、

「うおおおお！！！！」

その手に持つ戦槌で攻撃を全て叩き落す。

ゴオオオオオオン！！！！

しかしクロス攻撃が全て叩き落されたとはいえ爆風は止まず、グラの視界を覆う。

「フンツ！！！」

視界を確保するため戦槌で爆風を吹き飛ばす。しかしその視界の先には………

「終わりだ、あつけない幕切れだな」

全身が輝くメタビ-の姿があり、

『いつせいしやげき！！！！』

その砲門全てが開きグラに襲い掛かった！！

ズゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンツツツツツ  
！！！！！！！！！！

さすがにこの連撃には対応できずグラは全ての攻撃をその身に浴びた。辺りが爆炎に包まれ、熱風が吹き荒れる。

「どーよ！！これが俺様の實力だ！！」

「さすがにこれなら・・・」

敵がどれほど強力だとしても威力全開を三回重ねて発動し、尚且つ変形した状態からクロス攻撃四連打と無防備なところを狙ったいっせいしゃげき・・・これを受けて無事で済むはずが無い。

「・・・・・・・・」

そしてグラは倒れ伏していた。ピクリとも動かない。

「ハッハッハッハッハ！！！！ざまあ見る！！」

勝利を確信しメタビーが高らかに笑う。

「びつくりだよ、まさかこれほどとはね・・・」

ベルゼブブのほうも驚きを隠し切れずにいた。

「だろー！！テメエらなんざ俺様の敵じゃねえってことよ！！」

メタビーは更に笑う。だがイツキは妙に思っていた。ユウトがあメダロットを倒したとき、そしてカラスがベルフェゴールのメダロットを倒したときも相手は消滅したはずではなかったか？

「うん、本当にびつくりだ・・・まさかこんなに弱いなんてね。」

「  
がっかりした様な表情をこちらに向ける。瞬間イツキは悟った。

「下がれ、メタビー!!!」

「へ?」

わけが分からないという風だったがとりあえず下がろうとしたメタビーに目掛けて巨大な戦槌が迫ってきた。

「うおっ!!!」

間一髪で直撃は避ける。が、

「があああああああああ!!!」

かすっただけのはずなのにメタビーは絶叫を上げた。

「メタビー!?!」

「今のは褒めてあげるよ。よく避けたね。もし直撃を受けていたら、あるいは変形していなければ今の一発で粉々になってたよ。」

涼しい顔でベルゼブブはそう告げる。もはや自分達など敵じゃないとでも言うつように。

「本当にびっくりだよ。完全に覚醒もしていないのに挑んでくるなんて。それで勝つ気でいたのかい? そんなんで勝てるなんて僕らを雑魚レベルと一緒にしてただろ。」

「完全に……覚醒していない?」

そんな、ではメタビーはまだ《悪魔》の幹部クラスとは渡り合つどころか戦闘すら成立させられないのか？

「けどおいしさは変わらないだろうし。グラ、もう喰らっていいよ。」

ベルゼブブの命令に従いグラが歩を進めてくる。

「ツツ……またかよ!？」

メタビーは先の一撃が相当響いたらしくまだ遅い。これでは……

「じゃあね。君はここで敗れてマスターの絶望に満ちた顔の前で食ってあげ……」

「そんなことはさせねえっ!！」

まだベルゼブブの言葉が言い終わらないうちにメタビーの元に高速で突っ込む機体がいた。この速さはロクシヨウ!？いや、これは……

「大丈夫ですか、メタビー？」

「スミロドナット!？何でここに……?？」

それはコウジの愛機。トラ型メダロット・エクサイズ - 通称スミロドナットだった。

「事情はよく知らねえが、これ以上俺のダチに手を上げるんなら俺が相手になってやるぜ!！」

「コウジ!！」



そこには先程別れたはずのコウジが身構え立っていた。

「辛口コウジかい？悪いけどここは子供の遊び場じゃないんだよ。」

「俺とそう変わらない顔して何言ってやがる！！」

「ダメだコウジ！！こいつらは……」

君の敵う相手じゃない！！と言おうとしたが、

「イツキ、俺達は友達じゃねえのか！？何で相談してくれないんだよ！？何で一人で全部抱え込むんだよ！？俺達に力を貸せって頼めよ！！！」

コウジがイツキに怒鳴る。その声は震えていた。

「コウジ……」

「アイツがやばいってことは分かるさ。けどアイツは俺のダチを二人も傷つけた。絶対許さねえ！！スミロドナツト！！！」

「イエスマスター！！」

「ダメだコウジ！！！」

イツキの制止を振り切りコウジ達はグラに突っ込んでいく。

「ハハハハハ！！身の程知らずは面白い。いいよ、まずは君から食ってあげる！！」

愉快気に笑うベルゼブ。もはや興味は完全にコウジに移っていた。

「うおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「ダメだコウジ！！コウジ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「！！！」

状況は違えど、再びイツキの絶叫が木霊する。図らずしも、コウジの参戦により戦いは激化していった……

**第13話：激突、暴食の悪魔！！（後書き）**

コウジ参戦！！果たしてこの戦いの行方は！？そしてメタビーの覚醒は！？とナレーター入れてますがそれよりもなんか効果音の辺りがすごく幼稚に思えるような・・・どうしましょう？

## 第14話：コウジVSベルゼブフ

「っけえっ！！シンソード！！」

イッキの目の前でまだまだ戦いは続く。スミロドナットのスピードがグラを翻弄し、その右腕が引き裂く！！が、強靱な鎧の前にスミロドナットの爪は弾かれる。

「ハハハ！！無駄ってわからないのかなあ。君はレアメダルの使い手じゃない。そして……」

ブウンツ！！！！！！

グラの戦槌がスミロドナット目がけて振るわれる！！

「僕達のメダロットはレアメダル以外には敗れない。」

戦槌がスミロドナットに直撃……せず紙一重でかわされる。このやりとり、これで既に十度目だ。

「大した逃げ足だなあ。グラの一番苦手なタイプだよ。これが本来のロボットなら判定勝ちが出来るのに残念だねえ」

ベルゼブブが笑う。確かに先程からずっとこんなやり取りが続いているが、スミロドナットの攻撃はグラには全く通じていない。どんなに切り裂こうとしても、どんなに殴ってもグラの鎧に阻まれるのだ。確かにグラの装甲はかなり高いがそういうのとは別にスミロド

ナットの爪が届いていない。それにさっきから避けてこそいるがグラの対応スピードも徐々に上がっている。このままでは動きを捉えられその一撃に粉碎されることは必至。

「やっぱりダメだ。コウジ達じゃミュータントメダロットには勝てない……!」

イツキは唇をかむ。どうして僕は自分で戦わずにコウジに戦わせているんだ!! さっきの一撃で倒れたメタビーがまだ戦える調子じゃないことに、そして自分の不甲斐なさのせいで親友が今命懸けで戦っていることがどうしようもなく悔しかった。

「全く、お前ら俺が勝てないと思ってるんだろ? 舐められたもんだぜ。こっちはただ動いてたわけじゃねえのによ。」

だが、こんな不利な状況でもコウジは諦めていなかった。まるでここからが本番だとも言うように……

「コウジ?」

「イツキ、俺だってどんどん強くなってんだぜ? そんな簡単には負けねえよ。」

イツキの方を振り向かず力強くそう言うコウジ。

「何ブツブツやってるの? それより僕飽きたからいい加減負けを認める気に……」

「マスター、チャージ完了です。」

ベルゼブブの言葉より先にスミロドナットがコウジに告げる。

「ん？何か策でもあるというの？」

スミロドナツトの言葉が理解できずベルゼブブが首をかしげる。

「よくやったスミロドナツト！見てるよ、イッキ。お前らが倒せなかったこいつを今から俺達が倒すからな！！」

コウジの目が光っている。まさか本当に策があるというのか？グラを倒す………

「なに馬鹿言ってるの？君じゃそんなことは出来ないって……」

「だがベルゼブブの言葉は続かなかった。何故なら、」

「準備が整ったんだ。今からこのスピードに加えて力も上げる。その為の準備が！！」

スミロドナツトの体が輝いていたから。しかもこの色は、先程イッキが使ったものに似ている？

「そうか！コウジのスミロドナツトはエースメダル。だから！！」

ようやくイッキはコウジの考えに気付いた。あれらを使ってもレアメダルでない以上、勝ち目は無い。だが今のイッキにはそんなことは関係なくコウジが勝つ気がした。

「いくぜ！！俺達の本気を見せてやる！！メダフォース・光学化3！！火薬化3！！重力化3！！」

一つのメダルが覚える3つの奥義たるメダフォース。それらを全て発動させる！！

「能力変化か。でもそれら3つ全部合わせて同時に使うとは中々だね。けど逆にがっかりしたよ。」

「何？」

「そのメダフォースは全て射撃タイプの技だ。だが君のエクサイズはどう見ても格闘タイプじゃないか。腕のあるメダロッターだと思つてたのにこんな初歩的な相性も分らないとはね……」

心からガツカリした様子でベルゼブブが続ける。確かにエースメダルとエクサイズのパーツとの相性は悪くない。しかしそれ以上にエースメダルは射撃タイプなためにパーツの相性があつていたとしても格闘タイプのパーツをつける者は普通はいない。しかしイッキは知っていた。いい意味でこのコウジにはそんな常識が通用しないことを。

「ガツカリかどうかは……」

スミロドナットはメダチェンジを完了させ、攻撃態勢に入る。コウジはその様子を見て叫ぶ！！

「これから決めるっ！！」

言葉と同時にスミロドナットの姿が消える！！変形前も速かったが今は更に速い。

「さすがにエクサイズは速いね。でもただ速くてもグラには……」





にレアメダルでないスミロドナットが目にも映らぬ速さでグラの体を切り裂き続け、それによりこちらが不利になっているという異常。

「ウオオオオオオ!!」

グラが戦槌を振り回す、が全くスミロドナットの反応を捉えきれていない。

ズシャッ!!ザクッ!!ザンッ!!ズバッ!!

そうこうしているうちにグラの体はどんどん切り裂かれていく。

「すごい……!!コウジが圧倒してる!!」

コウジがレアメダルの資格者で無い以上、彼らには敵わないと思っていた。しかし今、その相手を、その中でも上位の幹部に位置される『悪魔』の一人を圧倒している。

「いける……!!コウジが勝つ!!」

イツキはそう確信する。

「これで最後だ!!スミロドナット!!」

「ハイッ!!」

更にその輝きを増して最後の一撃がグラを貫く!!その刹那、

「調子に乗らないで欲しいなあ。雑魚が。」

バキイツ!!

「なっ!?!」

「嘘!?!」

君の悪い音と共に吹き飛ばされたのはスミロドナツトの方だった。その先にはグラが戦槌を振り上げている。

「そんな!?!なぜ急に対応が追いつく!?!」

「簡単さ。君は最後の一撃を加えるつもりだった。つまり狙いは頭だ。なら待ち構えて返り討ちにすることくらいいけないよ。」

涼しげにそう言うベルゼブブ。だがその目は最早笑っていないかった。

「しかしますます妙だ。今の一撃直撃したはずだ。なのに粉々になっ  
ていないなんて……こんなこと覚醒したレアメダルしかあり  
えないはずなのに。」

必死に立ち上がろうとするスミロドナツトを見て更に疑問を浮かべ  
るベルゼブブ。そして突如思い出したように、

「そうか、レアメダルとはマザーメダロットが作り出した強力なメ  
ダル。だから他のメダルは危険視していなかったけど……」

スミロドナツトがグラ目掛けて飛び出す!!だがそのスピードは先  
程までとは比べ物にならないほど遅い。

ドゴッ！！！

「ぐああアアッ！！」

「スミロドナット！！」

呆気なく吹き飛ばされるスミロドナット。もう戦える状態じゃない。

「ハハハ！！こんな軽い一撃とはいえ壊れないとはさすがだね。エクサイズ。いや、スバルの力を宿せし者。」

「き、貴様……！！」

「えっ、スバルの力！？」

ベルゼブブの出した言葉にイツキは驚きを隠せなかった。なんでスミロドナットにスバルの力が……？

「何言つてやがんだ！！」

「おかしいとは思っていたんだ。ただのメダロットじゃあグラに傷一つ与えられないからね。けど君は普通じゃない。二年前、ブラックデビルの元へ向かう君達の前に立ち塞がった三原則の外れたメダロット。君達は他の仲間を先に行かせて二人で足止め役を行った。

しかし狙われた君を庇ってエクサイズは大ダメージを受け、危険だと判断したエクサイズは君も先に行かせて一人で足止めをした……

「な、何であるときのことを知ってる……！！？」

コウジの顔に驚愕の色が浮かぶ。あのときの自分達のことを全て知っているということに驚きを隠せなかった。

「そして残ったエクサイズは一人で敵に立ち向かった。感動ものだよねえ。けどロボロボの状態で敵う相手じゃない。そんな時君達に協力していたもう一人のマザー・スバルが君に力を与えた。そしてその圧倒的な力で立ち塞がる敵を一掃した……そういう話だったよね？」

「……………」

スミロドナットは何も言わない。しかしそれは肯定に他ならなかった。

「あ のとき、そんなことが……………」

知らなかった。コウジ達が道を開いてくれてその先に進んで……だからコウジ達に何があったのか、それはコウジの口から断片的に話されたこと意外知らなかった。コウジの方を見る。彼はじっとベルゼブブを睨みつけていた。

「そのときの力は無いと思っただけだなあ。まさかメダルに記憶されて自在に引き出せるようになってるなんて……………つまり君のメダルはレアメダルとほぼ同じ力を持つメダル。いや、むしろ後天的に出来た覚醒せしレアメダルと言える……！」

ベルゼブブが歓喜の笑みを浮かべる。マズイ！！本格的にコウジ達に興味が移ってしまった。

「後天的なレアメダル……………君はさっきまでのよりずっとずつとおいしそうだ！！ああ、グラ喰らい尽くすんだ！！カケラも残さず綺麗に……！」

命令を受けグラがスミロドナットの元へ歩み寄る。

「やめろおおおおおおお！……！」

「っ……ダメだっ、コウジ……！」

イツキの言葉を聞かずにコウジはグラの前で行く手を阻む。

「スミロドナットにはこれ以上触れさせねえ……！」

「ま、マスター……ダメ、です。逃げて……ください。」

「バカ野郎ッ……お前は俺の相棒だぞっ、見捨てられるわけねえだろっが……！」

逃げるよう懇願するスミロドナットに向かってコウジが叫ぶ。

「しかし……！」

「いいか……お前はこれからも俺の相棒として一緒に戦うんだ……仲間達と一緒にロボトルするんだよ……！」

なおも叫ぶコウジ。彼はスミロドナットを失わないために必死にグラの前に立っている。しかし……

「美しい絆だ……けど僕が欲しいのはエクサイズなんだ。君は  
いない。」

ブンッ……

「ガッ……！」

「マスターッ……！」

「コウジッ!!」

コウジがグラに殴られ、吹き飛ばされる!!三原則が存在しないため躊躇無く振るわれたその拳は、コウジを簡単に吹き飛ばした。

「ガハッ!!」

「さて、とこれでようやく・・・」

「ま、て・・・!!」

吹き飛ばされたコウジが立ち上がり再びグラの前に立つ。

「い・・・つたる・・・!!スミ・・・ロド、ナットには・・・  
触れ・・・させねえ・・・!!」

「グラ。」

ブンッ!!

「ガアッ!!」

再び吹き飛ばされるコウジ。しかし尚も立ち上がりグラの前に立ち塞がる。

「ああ、もうございなあ。とっとと死んでよ。」

ゴッ!!バキッ!!ブンッ!!ドガッ!!

「ガアアッ！！グフッ！！アアアッ！！」

何度も何度も殴られる。容赦の無い一撃。元々人間にメダロットが殴りかかったら怪我ではすまない。そして相手は『悪魔』の使う危険なメダロットだ。その容赦のない拳は簡単に人を殺す。しかしコウジは何度殴られても立ち上がりグラの前に立ち塞がる。

「ま、マスター！！もう止めて下さい！！このままではあなたの命が……！！」

「う……るせ……え。相……棒……一人……守れ……ねえ……ヤツ……だけが……逃げる……なんて……許され……ねえ……んだ……！！」

フラフラになりながらもそう言う。もういつ死んでもおかしくない。

「もう、やめろ！！コウジ達には手を出すな！！」

イツキが叫ぶ。だが相手は見向きもしない。

「もうイヤだなあ。きみは不死身かい？グラ、もう叩き潰せ。」

遂にそう命令を下す。グラはその手に持つ巨大な戦槌を高々と振り上げる。

「や、やめろ……そんなことしたらコウジが……！！」

イツキは震える。このままでは大切な親友が死んでしまう。自分の目の前で。

「メタビーツ！！起きてくれ！！このままだとコウジ達がっ！！」







## 第14話：コウジVSベルゼブフ（後書き）

どもつす。しつかり読んでくれましたか？？

コウジとスミロドナツトのこのエピソードはメダロット3をやっている人なら分かりますよね？俺はクワガタバージョンだったんでウオーバニツトだったんだけど。

ちなみに分かりにくい人のために。この話では「結構キャラの名前がチガクない？」とか「なんで旧式なのに変形できるの？」と言う疑問があると思いますが

メタビー⇨サイカチス

ロクシヨウ⇨ドークス

スミロドナツト⇨エクサイズ

と言った風になってます。他のキャラは今んとこ大丈夫だと思うんですが疑問があったら教えてください。では次の話で^^^/

## 第15話：覚醒のメタビ

「っ！？あの光は……！？」

立ち塞がったミュータンメダロット軍団を全て葬ったときと同時に、おどろ山から巨大な光の奔流が出てきているのがユウトの目にはつきりと見えた。

「あそこには《悪魔》が一人とイツキたちがいたはずだ。……ん？何だこの大きな力を持ったメダルは？」

「あいつか！？」

「いや、見慣れないやつだ。少なくともミュータントではない。」

ユウトの問いに対しロクシヨウは首を振る。それを聞いて胸をなでおろす。もしあいつだったならイツキ達は間違いなく死んでいるから。だが、だとするとそいつは一体？

「何かやばいことになってんな。急ぐぞロクシヨウ！！」

「承知！！」

光の奔流が消えたとき、グラの前には何もいなかった。

「一体何が……？？」

訝るベルゼブ。なぜならコウジもスミロドナットもグラが戦槌を

振り下ろす前に消えていたのだから。

「……………二人ならこつちだ。」

「ん？」

声をかけられ振り返る。そして……………

ヒュッ！！ドガッ！！！！

「なっ！？？」

グラが吹き飛ばされていた。驚き、グラを飛ばしたヤツの姿を見る。メタビーだった。メタビーがその右腕でグラを殴り飛ばしたのだ。しかし、

「違う……………さっきまでとは全然……………！！！」

メタビーは先ほど負ったダメージを完全になくしていた。それだけでなく光っている？つまりこれは……………

「覚醒！！そうかようやく覚醒したのか……………！！！」

「ああ、なんだか分かんねえが体の底から力が溢れてくる……………！！まるで常にメダフォースが満タンの状態みてえだ！！！」

覚醒し、力が溢れている。その事実にはベルゼブブは再びメタビーに興味を変え、メタビーは自身の力に喜んでいた。

「コウジ、しっかりしてくれ！！コウジ！！！」

先程の場から離脱させたはいいがコウジは重傷だ。早くしないと・  
・

「イ……ツキ。お……前……」

「喋らないで!!すぐに医者を呼ぶから……!!」

「んな……こと……より……!!あ……いつ……  
を……カリン……を……助……け……ろ……  
……!!」

途切れ途切れだが強い口調でイツキに伝える。イツキは何か言いた  
そうに口を開くが何も言い出せず、

「……分かった。ちょっと待っててくれ。すぐにあいつを倒  
してカリンちゃんを助け出すから。」

代わりにそう答えた。

「スミロドナット。コウジをお願い。」

「もちろん!!イツキさん達はあいつを倒してください!!」

「分かってる。」

スミロドナットにコウジを任せイツキはベルゼブブに向き直る。

「君は本当に面白いねえ。君自身もレアマダル使い。そして君の  
周りには君と同じような人間がよく集まる。そして怒りで覚醒させ  
る、ときだ。フフフフ、本当に君は……」

「黙れ。」

短くそう言い捨てる。その言葉でベルゼブブが眉をひそめる。

「……今何て言ったの？」  
「無駄話をするつもりはないよ。僕はあの時以上に今怒ってるんだ……!!」

拳を震わせ、目には怒りの炎を灯し、ベルゼブブを睨みつける。その目を見てベルゼブブは一瞬呼吸を忘れた。

「お前は絶対にしちゃいけないことをしたんだ。カリンちゃんをさらい、コウジを傷つけ、そして罪のない人達の命を奪った……!!  
!!ベルゼブブ、お前だけは絶対に許さないっ!!」

今までにない怒りがイツキを支配する。そしてそれがそのまま力となりメタビーの力が更に増幅する!!

「これだこの感覚だ!!久しぶりだよ僕に恐怖を与える存在は……!!  
!!ああっ!!今の君達は素晴らしく美味だろうな!!」

イツキの目に恐怖を感じながらもそれを喜ぶベルゼブブ。そして、

「喰らい尽くせえっ!!グラッ!!」  
「あいつをぶっ飛ばせメタビーッ!!」

お互いの指示が飛び、二人の戦いが切つて落とされた。

「ぐおおおおおっ!!!!」

意外にも先手はグラだった。襲い機動力だがメタビーは動かなかつたため簡単に捉えられたのだ。

ブンッッッ！！！！！

凶悪極まりないその戦槌が高々と振り上げられそして、

「うおおおおおおおっ！！！！！！」

メタビーへと振り下ろされるっ！！

「オイオイ何だよ。こんなもんなのか？」

だがメタビーは粉々になるどころか右手で戦槌を抑えていた。ダメーじーっ負わずに。

「ヤル気があんのかないのか……」

そしてそのまま左腕を腰まで持つていき……

「はつきりしやがれっ！！！！」

グラの胴体めがけて思い切りぶん殴る！！

ドゴオッ！！！！

メタビーの拳がグラにめり込む！！更にその状態から、

「ブラスター発射！！」

ガトリングを炸裂させる！！力が溢れ出しかなりの威力になっている拳とガトリングの二連コンボ。これにより、

ドガアアアンツッ！！！！

「そ、そんな……！！？」

グラの装甲が弾け飛ぶ！！胴体とつながっている頭パーツのほとんどが粉碎された。

「休むなよっメタビーツ！！」

「おうよっ！！」

まだまだ猛攻は止まらない！！体勢が整っていないグラの体に更に右腕、左腕、右腕、左腕……といったようにパンチと射撃の嵐が続く！！

「オラオラオラオラオラオラオラオラアッ！！！！」

ドガガガガガガガツッ！！！！

正に嵐のごとき怒涛の攻め。

「ぐがあっ！！ぐおっ！！ぐああっ！！」



そのスピードについていけず成すがままに殴られ続けるグラ。先程までの優勢さは欠片もない。

「ちいつ!!飛べ、グラッ!!」

その言葉を聞き、隙を突いてグラが高く飛び上がる!!

「うおっ!!たっけー……!!」

「感心してる余裕はないよ。遊びはこれで終わりだ!!」

空高く飛び上がったグラが空中で戦槌を振り回す!!

ブオンツ!!ブオンツ!!ブオンツ!!

振り回された戦槌からは強大な衝撃波となり、ベルゼブブを除く全てに襲い掛かる!!

「これで君達はぺしゃんこだ!!」

「この程度で?」

勝利を確信したベルゼブブに対しイツキが冷たく言い返す。

「何?」

「やれっメタビーツ!!」

「おおおおおおおおお!!……!!」

『いつせいしゃげむっ……!!』

キユイーーーーン・・・・・・・・ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンツツツ！！！！！！

「ぐおおお！！！」

グラが墜落する。

ドオオオオンツツ！！！！

その巨体が地面に叩きつけられ一時的な地震が起こりすぐに治まった。

「こ、これほどの力を・・・・・・・・！！？」

それはいままでのいつせいしやげきをはるかに超える威力を持っていた。そう、相手が『悪魔』のメダロットでなければ存在が跡形もなく消されるほどに・・・・・・・・

「ぐっ、ぐおおおおお・・・・・・・・！！！」

だがグラは、全ての攻撃を浴びてもなおやられてはいなかった。もともと立っているのがやっとでこれ以上戦いは続けられない状態だが。

「これで僕達の勝ちだ。さあカリンちゃんを返してもらおうか。」  
そのことを確認しイツキはベルゼブブに詰め寄る。

「決着はついたんだ!!早くカリンちゃんを……!!」  
「……冗談じゃない……!!僕が負けるなんてことはない!!あっちゃいけないんだ!!」

ドンッ!!

もう戦えないはずのグラがイツキに攻撃を仕掛けようとする!!が、

ドンッドンッドンッドンッ!!

「ぐおおおおああ!!!!」

ガトリングを横から撃たれてグラが倒れる。

「これで完全に僕達の勝ちだ。見逃してやるからカリンちゃんを……」  
「ふふふふ……くっくっくっく、アーハッハッハッハッ!!」  
「!!!!」

言葉を終えるより早くベルゼブブが笑い出す。

「終わり？違うね、ここからが始まりなんだよ！！」

先程までのふざけた態度は完全になりを潜め、憎悪と殺意に満ちた視線へと変わる。

ブオオツツ！！

「なツ！？」

「一体何がおきてやがんだっ！？」

噴出される殺気。そして、

「褒めてあげるよ。君達はグラの真の姿を出させる实力を持っている。この姿を見せるのは君達で二人目だ！！」

「真の」

「姿だと！？」

驚愕する二人。さっきは圧倒したがあのグラがこれ以上に實力を秘めているというのか！？

「アハハハハッ！！もう、食わなくてもいいや。君達は全員ここで……！！」

「それぐらいにしろ、ベルゼブブ。」

『っ!?!?』

「な、なんでここに……!?!?」

突如割つて入る一人の男。背は高く黒ずくめの衣装を身に纏っていた。だがそんなことはどうでもいい。それよりも、

「こいつ……!?!?」

「ただ立つてるだけなのに何て威圧感なんだ……!?!?」

その場にいるだけで誰もが死を感じずにはいられない程のプレッシャー。いや。もし一瞬でも気を抜いていたら本当に死んでいたかもしれない。そう感じるほどの存在だった。今さっきまで暴走しかけていたベルゼブブですら冷汗をかいている。この男はベルゼブブ以上に強いということなのか……?」

「ベルゼブブ。少々独断行動に走りすぎだ。あまりにも多くの敵に感付かれている。」

「なら、この際にこいつらを……!?!?」

「それは出来ない。どうやらあの少年が近づいてきている。急がねば……」

一体何を話しているんだ?あの少年って……

「イツキー!!無事かー!?!?」

そんな中、近くで声が聞こえた。

「ユウト……!ロクシヨウ……!」

「どつやら無事のようだな。」

「心配したぜ。こつちで『悪魔』と交戦してたる。平気か？」

イツキの体が大丈夫か調べるユウト。なんかいつもと違う気が。

「僕よりもコウジを！！」

「コウジ？」

「友達なんだ！！すごい傷で……」

「分かった！！とりあえずこれをコウジに当てとけ。少しはよくなると思う。」

そういつてイツキにメダル型の水晶を渡す。

「まあ、応急処置くらいにしかなんねえがなよりはマシだ。

「ありがとうユウト！！」

「礼は後だ。すぐに運ば……」

二人でコウジのすぐ傍まで行き水晶を当てながら運ぼうとしたとき、ユウトの体が止まった。

「ユウト？どうしたの！？」

彼は答えない。ただ一点だけを見つめている。

「ふう、だから早くこの場を立ち去りたかったのだが……」

黒装束の男が溜息をつく。こいつユウトを知っている？

「ふふ。ふふふふふ……ハハハハハ！！アッハッハッハッハッハッ！！」

そして爆発する哄笑。その笑いはユウトが出していた。

「ゆ、ユウト？」

「見つけた、見つけたぜ！！ようやく会えた。久しぶりだなあ、オイ。なあ？ルシファアツツ！！！」

ザザザザザツツ！！

言葉と同時にロクシヨウがルシファアに斬りかかる！！

だがルシファアと呼ばれた男はロクシヨウの剣を掴んでいた。そしてそのままピクリとも剣は動かない。

「相変わらず恐ろしいな。しかもますます腕を上げたようだ。」

「ああっ……この日をどれだけ待ち望んだことか………テーマを殺すこの日をツ！！！」

しかし、そのままの体勢でロクシヨウの体が輝きを放つ。マズイ、あの光は………！！

「殺せロクシヨウ！！！」

『たていつせんっ！！』

止められている剣を強引に動かしそのままメダフォースを放つ！！  
そして辺りが再び光に包まれる！！

カツ！！

何も見えない。一体何が起きたんだ？何でユウトはいきなり……

「フム、思い切りはいい。だが頭に血が上りすぎているぞ。」

ようやく光がおさまったとき男は無事だった。ロクシヨウの剣を一体のメダロットが止めていたからだ。

「とりあえず成長したな俺。あんたに愛機を出させたんだから。」

「ああ。しばらく見ないうちにずいぶんと成長したな。」

そうしている間もロクシヨウは相手のメダロットを叩き斬ろうと力を込めている。だが相手のメダロットは大した力を入れているわけでもなさそうなのにピクリとも動いていなかった。

「ルシファアーツ！！撤退しよう。そいつは何をするか分からない！

」！

「……そうだな。楽しみは後に取っておくでしょう。」

ベルゼブブの声を聞きルシファアはメダロットを戻す。そしてどういふ芸当か一瞬でベルゼブブの隣に立っていた。

「今度行われるという大会。そこで再び会えるかもしれないな。」

「テメエ……ようやく会えたつてのに逃げんのかよ！！」

ユウトが怒りを露にする。どうしたんだ？あの男を見てからユウトの様子がおかしい。

「逃げはしないさ。ただもう一度私に追いついて来い。」

「ふざけんなっ！！今ここで戦えっ！！そしてユネを返せよっ！！」



ユネ？女の人の名前なのか？

「案じずとも彼女とはいずれお前は会う。必ずな。……その少年。」

突如イッキに向き直られる。殺気は出していないがそれでもこのプレッシャーはキツイ。

「な、何だ！！」

「今回は私の仲間が迷惑をかけたな。君の大切な少女はお返ししよう。」

そういつて眠っている人を投げてくる。

「あっ！！」

急いで抱きとめる。カリンだった。どうやら何もされていないようだ。

「しかし、もしかしたら君こそが『異端』なのかもな。ほかの異端どもを引き寄せる『真の異端』」

「何を言っ……？」

「まだ知らなくていいことだよ。では諸君。これで失礼する。」

そういつて黒い球体を取り出す。それを掲げたとたんルシファーとベルゼブブの姿が霞んでいく。

「待て！！まだこっちの用事は済んでねえんだよ！！」

(さらばだ。再び出会えることを祈っているよ……)

どンドン姿が薄れていく。ユウトが消え行くその姿に手を伸ばすが届かなかった。そして彼らは消えた。

「はは。何だよ。ようやく、ようやくだと思ったのに……！！」

「ユウト……」

ロクショウが傍による。しかし今のユウトは何も聞いてはいなかった。

「戻って来いよ……！！戻ってきて俺と戦え！！ルシファー————————ッ——ッ——！！——！！」

暗く広いおどろ山にユウトの慟哭が虚しく響き渡った……

## 第16話：イツキ、生徒指導室へ

あの夜の出来事から数週間が経つ。カリンちゃんは無事に帰ることが出来た。ただあの夜に何があったかは覚えておらず、僕らは貧血で倒れたとしか言っていない。コウジはかなりロボロボだったけど今はもう大丈夫だ。病院のベッドの上で「ロボトルしてえ〜」とダダをこねている。もう少し安静にしているよう言われてるけど。そしてコウジには今何が起きてどうなっているのかを全て伝えた。少なくともベルゼブブの興味がコウジにまで移った以上もう隠すことが出来ないと思ったから。全部話し終えたとき巻き込んでゴメンと謝り殴られることも覚悟した。けどコウジは、

「もつと早く言ってくれよ。そうすりゃきつと勝てたぜ。」

なんて冗談を言いながら笑ってた。

僕を責めるつもりはないって。これからは、また一緒に俺も戦うからって。本当にいい友人を持った。それだけに今の状況が辛いんだけど。

そしてユウト。彼は翌日、あの夜の事が嘘のように笑っていた。学校にも来て昼寝をしてはリュウコ先生に怒られたり、途中何度かロボトルの授業もやって僕達と同じような圧倒的な強さで皆の注目を集めたり、アリカと一緒に楽しく談笑してたりして学校にもサボらず毎日笑ってた。でもやっぱりあの夜以来時たま思いつめた顔をするようになって……

今から一週間前に姿を消した。もちろん学校にも来ないし廃工場にもいないのだ。博士は引越してないって言ってるけど。けどあの時のユウトは普通じゃなかった。あのルシファーという男を見た途端、別人の様になってしまった。まるで今までの姿は全て仮面であるユウトが本当のユウトのような……いや、そんな

ことはない。学校でも一緒にいて時にも分かったけど彼はメダロツトが大好きなんだから。でももう一度話をしたい。あれからミュータントは出てきていないし大会についても何も進展がないが、友達に会えないのは寂しかった。

「ホント、どこ行つたんだろユウト……」

誰も座っていない隣の席を見つめイツキは呟く。

「本当にどうしたんだろユウト君。イツキは何も聞いてないの？」

「聞いてたらこんなに悩まないよ……」

アリカの問いに元氣なくそう答える。

「それもそうね。あんた達初対面だったのにすぐ親友みたいになつてたし。何かあればあんたに言うわね。でも彼、不登校なんかしうにないんだけどなあ。いや、サボリ癖はあるけど。」

何も知らないアリカは一人分析を続けている。イツキはその様子を眺めながらもユウトの事を考え続けていた。

「天領君、甘酒さん。ちょっといいかしら？」

放課後、帰り支度を済ませたイツキ達をリュウコ先生が引き留めた。

「……何かやりましたか、僕？」

優等生とは言われないが問題も起こさずに学生生活を送っていたはず

だ。自分一人なら成績が悪いことで呼び出されるかもしれないが、こう見えてアリカは結構成績がいい。もっとも騒ぎはよく起こすが、そんなアリカも一緒に呼びたされた以上アリカが起こしたトラブルがイツキを巻き込んでいるとしたか……

「とりあえず付いて来て。」

リュウコ先生は何も言わずさっさと歩いていく。

「ちょっと！もしかしてイツキが起こした問題に巻き込まれるんじゃないでしょうね！？」

「そのセリフは僕が言いたいよ……」

とにかく後で更なる呼び出しを受けないためにも二人はリュウコ先生に渋々付いて行った。

「おっ？」

「へ？」

「なっ！？」

「ちよつと！？」

「フッフッフン」

リュウコ先生に付いて行き真っ先に見つけたのは、

『なんでお前達がいるのっ！？』

学校一の問題児集団スクリューズだった。

「はあ？どうなってんだ！？」

「こつちが聞きたいよ……」

ああ、スクリューズまでいるなんて僕は一体何をしたんだろう？

「全員いるわね？それじゃ中に入ってちょうだい。」

こちらの様子を見て妖しく微笑しながら部屋のドアを開ける。部屋名は

『生徒指導室』

……もはや何も言うまい。

「ちょっと！！納得出来ない！！なんであたしがこいつらと一緒に生徒指導室なわけ！？」

「こいつらって……僕も入ってるんだ。」

「うるさいわねえ。さっさと入りなさいよお。」

アリカの悲しき叫びをよそに、慣れた感じで部屋に入るキクヒメ。一体何回ここに入ったんだ？

「とりあえず中に入ろう。」

覚悟を決めてイツキも中に入る。そこには、

「相変わらず騒がしい奴らだ。」

「み、ミズチ！？」

リュウコ先生の弟でイツキの友達であるミズチが座っていた。彼は元々は四天王の『青竜のミズチ』と呼ばれていた天才メダロッター

だ。一般には知られていない大きな事件に関わっており何度も激突したが今は競い合うライバルだ。その隣には見慣れた顔が二人。温厚そうな少年とイツキが会いたくない人物のトップに立つであろう人物。

「やあイツキ君。久しぶり。」

「ハクマー!!」

温厚そうな少年が笑みを浮かべてイツキと握手をする。彼はハクマ。二年前にここから西の方にあるトラニシ学園でカリスマ的指導者として君臨し、ミズチと同じく『白虎のハクマ』と呼ばれた四天王の一人だ。当時イツキと友達になりながらもメダロットに対する考えが対立し激突したが、考えを改めて側近のビヤクヤと一緒に一時的な旅に出て最近ではトラニシ学園の近くにあるシンラそうぞう村で店を開いている。イツキ達もちよくちよく店に遊びに行っているが、落ち着きたい店だ。そんな感じでハクマと旧交を温めていたのだが、この部屋にいた最後の一人が立ち上がったためそうもいかなかった。

「会いたかったぜえ。メイド少女お〜。」

「……………少女じゃないしイツキだよ。相変わらずだねコクエーン。」

コクエン。彼もまた例外なく四天王だった人物で『玄武のコクエン』と呼ばれていてイツキが最も苦手とする人物の一人だった。不良のような外見？乱暴な言葉使い？そんなことはどうでもいい。イツキが何よりも苦手とする理由は……………

「ここで会ったのも運命の導きだっ!!俺と付き合えっメイド少女っ!!!!」

「絶対に嫌だっ！！」

これだった。二年前初めて会ったとき彼も例外なく敵だったのだが、そのときの出会いがまずかった。敵のアジトに怪しまれず潜入し頭を叩くという作戦であることがイツキは女装させられたのだ。元々（いらぬ才能だが）女装の才能があり抗議の声も虚しく女子の皆さんに強制的に女装させられた。イツキは思う。「なぜ厄介ことがあるたびに毎度毎度女装させられにやならんのだ」と。とにかくメイド少女の格好をさせられコクエンのアジトに行ったとき一目標れをされてしまつて以来、男だとバラした筈なのに「メイド少女くっつ！！」と追いかけてくるようになったのだ。……余談だがコクエンはこのときまで町の支配をしていたのだがこれを機に止め、『メイド少女ファンクラブ』なるものを設立し会長として日夜メイド少女の素晴らしさを世界に伝えている。今では会員数は1000人を超えたとか……。ちなみにこれにより町の支配から解き放たれたためメイド少女（つまりイツキだがなぜか別人と思われる）は英雄として町の人々から崇められている。もちろん皆会員です。

「少し落ち着けコクエン。ここに来た目的はそれじゃないだろう。」  
「けっ！！相変わらずだよなお前はよ！！」

ミスチが諫めてようやくコクエンが離れてくれる。正直助かった。

「あれ、ミスチ君にハクマ君？何でここに……？」

アリカ達も入ってきた。どうやらこれで全員らしい。

「ふう、本当は神田君もいればよかったんだけど……」  
「ユウトも？」



つまりここにはイツキ、アリカ、キクヒメ、イワノイ、カガミヤマ、ミズチ、ハクマ、コクエン、それにここにはいないユウトがいる予定になる。

「で、何も知らされずにここに来たわけだが難なんだ姉貴？」

どうやらこの状況をミズチ達も知らされていなかったらしい。けどこのメンバーが集まっていることから考えられる結論は一つ。

「ひょっとして大会に関係してるんですか？」

イツキの問いにリュウコ先生が静かに頷く。それを見て先程までの騒がしさが消え皆静かにリュウコ先生の次の言葉を待った。

「今回の大会、あなたは数少ない学生のみグループとして大会に参加することになる。そしてこの世界には今まで大会に出れなかっただけでとてもない実力を秘めている者が大勢いる。」

「つまり何が言いたいんですか先生？」

リュウコ先生の言葉の意図がわからずアリカが質問する。

「その中にはおそらくあなた達の力をもってしても勝てない者も多  
くいる。例えば伝説のメダロット・あがたヒカル。彼も参戦する  
ようよ。」

「えっ！？ヒカルさんも！？」

驚いた。やっぱりミュータントも大会に参戦すると聞いて参戦を決意したのだろうか？

「へえ。なあ姉貴。快盗レトルトは出ないのか？」

「彼は不明よ。けれど多分出ないんじゃないかしら。」

「そうか。」

ニヤリとミズチが笑う。そういえばこの二人も色々あってレトルトさんの正体を知っていた。そしてレトルトさんではなくあがたヒカルの参戦。ひよっとしたら全盛期のヒカルさんと戦えると思って嬉しいのだろうか。

「強い相手が大勢いるのは分かったけどお。この場に何で集められたのかの説明になってないんじゃない？」

「……僕たち全員のバトルロワイヤルによる特訓ですか？」

キクヒメの疑問に今度はハクマが答えた。

「察しがいいわね。ええその通りよ。ここにいるメンバーのほとんどは同じレベル。こういうのはね、圧倒的に実力差がある相手と戦うより自分と大体同じ実力の相手と戦うのが強くなる一番早い方法なのよ。」

ハクマの答えに肯定し詳しい理由を語るリュウコ先生。しかし、

「はあ？同レベルだあ？あんた目がおかしいんじゃないのか？」

コクエンが真っ向から否定した。

「どづいつことかしら？」

「俺ら元四天王組とイツキならそう実力差はねえだろう。けどよ、その女達との間にや実力差がありすぎるだろうが。」

そう言いながらアリカ達四人を指差す。

「相変わらずム力つくわねあんた……！！けど確かにそう思います先生。イツキはともかくあたし達は……」

「そうでもないと思うがな。」

コクエンの言葉に怒りを覚えながらもその言葉に肯定してしまうアリカに対し言葉を投げたのは意外にもミズチだった。

「お前は誰よりも長く誰よりも傍でイツキの戦いを見、そして共に戦ってきた。二年前のメダリンピックだってイツキと一緒にお前も出ていた筈だ。イツキだけの力では優勝できなかったと思うがな。」

「そうだね。それにイツキ君がこの大会でも真っ先にメンバーに選んだんでしょ？少なくともコクエンが考えてるほど弱くはないよ。もちろん僕も君は強いと思ってる。」

ミズチに続きハクマまで励ます。その言葉には嘘はない。二人とも決して過大評価しているわけでも気休めで言っているわけでもなく心からそう言っていた。

「ミズチ君……ハクマ君……」

それが分かったからアリカの表情は明るくなった。

「そうだね。アリカは自分で考えてるほどずっと強いよ。ユウトだつて言つてたろ？『お前達二人と組めるなら優勝は確実だ』って。僕と組めればじゃない。僕とアリカ二人と組めたらって言つてたろ。自身を持ちなよ。」

「ありがとうイツキ。」

「けっ！！お前ら揃いも揃ってなんなんだよ。もう好きにしてくれ

よな。」

その様子を見てコクエンがイラついた様子を見せるがそれ以上突っかかっては来なかった。

「そうねえ。アリカはともかくこのあたしは弱いつてことはないわあ。ここにいるやつら全員倒して優勝すんのはこのスクリューズなんだからねえ!!!」

すっかり空気扱いされていたキクヒメも闘志を燃やしていた。

「話は纏まったみたいね。それじゃあ校庭に出ましよう。とりあえず各々好きな相手と戦って。」

リュウコ先生の言葉を受け皆が校庭に向かう。久々にまともで充実した時間が過ごせそうだった。

## 第17話：回りだす歯車

「そろそろ答えてもらえないかな？月のマザー・ブラックデビル。いや、今はマーブラーと呼ぶべきかな？」

深く暗い闇の空間。その中でマーブラーは鎖に繋がれていた。どのくらい長い間ここに繋がれているのだろうか？彼は誰の目から見ても衰弱していた。

「……何のことがさっぱり分からないんだけどね。」

「とぼけるのもいい加減にしておうか。全てのメダルの原点とも呼べる『コクーン』。君達マザーの力の源にもなっている究極のエネルギー……マザーである君が知らぬはずはないのだがな。」

何のことが分からないと言うマーブラーに対してルシファーが低く続ける。

「何度言われても知らないものは知らない。てゆうか何なのそれ？俺そんなもの今まで気にしたことないんだけど。」

衰弱しているというのにマーブラーの態度は相変わらずだった。真正面からルシファーを睨みつけている。

「……まだそのようなことが言えるとは。さすがはマザーといったところか。しかし本当に知らないのなら、なぜもう一人のマザーを逃がした？」

「はあ？逃がしてなんかいないよ。スバルとはケンカしただけ。まあ俺のほうが強いからアイツ宇宙の遠くに飛んでっちゃただけだな。」

「そついやアイツあの後どうなったんだろつな」

「全く悪びれることなくそう続けるマーブラー。しかしその無邪気な顔は、」

「そうかケンカしたのか。ならば悪いことをしたな。彼は我々が保護させてもらった。」

この言葉で凍りついた。

「な！？なんだよそれ……お前、俺と同じことをあいつにもやってたつて言うのかっ！？」

ガシャンッ！！ガシャンッ！！

繋がれている鎖が恨めしい。この鎖がなかったら今すぐこの男を……

「どうしたマーブラー？顔色が変わったな。余程この言葉が効いたと見える。」

対するルシファーは冷静だった。だが目に見えぬ変化だが、マーブラーの動揺ぶりを見てほくそ笑んでいる。

「スバルを解放しろっ！！マザーが必要な俺がいる！！あいつを今すぐ……！！」

「先程の言葉はどうしたマーブラー？『コクーン』のこと等知らないといつていたではないか。」

「そんなことはどうでもいいんだよっ！！早くスバルを解放しろっ  
！！！」

『コクーン』のことは知らない。だがスバルは解放しろ、か。

「幼稚だなマーブラ。成程、確かに月のマザーは子供のようだ。」

「頼むっ！！俺のことは煮るなり焼くなり好きにして構わないから  
！！だからスバルを……」

「僕がどうしたの？」

マーブラーの叫びに合わせて一つの人影が出てくる。その姿は

「す、スバル……どうして……？」

「紹介しよう。我らの新たなる同士。スバルだ。」

マーブラーの問いにルシファーが答える。同士？スバルが？そんな  
馬鹿な！！あいつがそんなことを

「お前！！スバルに何をしたんだっ！！内容によつては絶対に許さ  
ないっ！！」

「ふむ。彼のほうは君より頑固そうだったんでね。それなら彼のマ  
ザーとしての圧倒的な力を利用できないかと考えたわけだ。」

「マザーの力を馬鹿にするな！！そんなことが出来るわけ……」  
「出来る。君は身をもって体感しているだろう。この空間内ではマ  
ザーの力は弱まっていく。この闇に君たちの体は耐えられないのだ。  
今の君の力など普通のメダルにも劣る。故に弱った彼を我々の陣営  
に引き入れることなど造作もない。」

淡々と説明するルシファー。その傍らにいるスバルは先程からピク  
リとも反応していない。言葉も最初しか発さず今は人形のようにだっ

た。

「お気に召してくれたかな？それにしてもやはりマザーというのは素晴らしい。我々の闇に囚われ、本来の10分の1の力もないはずなのにこの溢れ出すエネルギー。過去にアンドロメダ星がマザーを所有していなければ結果は変わっていただろうな。」

「スバルを、どうするつもりだ……!!」

「さてどうしようか……近頃地球で大規模な大会が行われる。そこに参加でもさせてみるか？」

「そ、そんなことをしたら……!!」

「力が抑えられているとはいえマザーだ。どのような事態になってもおかしくはないな。」

愉快気に、楽しげにルシファーが答える。そして今の自分はこの空間に幽閉されている以上止めることは出来ない。ならば心苦しいが地球にいる友人に止めてもらうしかない。そしてその為の協力ならば俺は……

「お前、さつきから笑ってるけどさ。一つ誤算があるよ。」

「ほう、それは何かな？」

「決まってるじゃないか。マザーの力を舐めすぎてることだよ。」

「愚かな。この空間ではお前は手が出せない。マザーとは名ばかりのただの飾りだ。」

嘲笑される。しかしそれは好都合だ。なぜなら相手が油断している今こそが……!!

「お飾りでもこんなことは出来るんだ、よ!!」

「む!？」



マーブラーの体が輝きだす。そしてその光が、

「頼む、あいつを助けてやってくれ。」

闇の空間を貫き地球へと飛んでいった。

「……………何をした？」

ここで初めてルシファアの表情から笑みが消えた。

「さあ、なんだろうね？」

今度はマーブラーが余裕を見せる。先程とは立場が逆転していた。

「そうか……………マモン!!」

ルシファアの怒声が響く。

「なんだ？」

そして一人の男が現れる。長身の丸いサングラスをかけた若者だった。

「こいつから『コクーン』の情報を聞き出せ。どんな手を使ってもだ。」

「けっ!!言つとくが大会が始まるまでだぞ。」

「構わん。その頃にはこいつの口も割れているだろう。」

「OK」

マモンに指示を出した後ルシファアは身に纏っていたマントを翻し、

スバルと共にその場を後にする。

「・・・・・・・・ゴメン、イツキ・・・・・・・・」

また巻き込むことになってしまったこの場にはいない地球の友人に、  
マーブラーは小さく謝った・・・・・・・・

「そ、そんな馬鹿な・・・・・・・・」

驚愕した声は誰だったか。強風が吹き、砂埃が舞う校庭。そこで膝  
を突いてうなだれているのはコクエンに他ならなかった。

「だから言っただろうが。」

「コクエン、君は彼女達を侮りすぎたんだよ。」

口々に攻め立てるのは四天王の東西組。そしてその横では、

「フン、だらしない男だねえ。イワノイたちに勝ったからってあ  
たしに勝てると思ってたのお？」

「あ、あたし勝っちゃった・・・・・・・・」

そして勝利は当然だと言いたげな少女と勝利が信じられない少女が  
一名ずつ。つまりコクエンは弱いと侮っていたアリカとキクヒメに

負けたのだ。

「ありえない……！！この俺がこんなやつらに……！！」

「うわあ、キクヒメのやつ前に戦ったときより強くなってるなあ。アリカも中々だったし、こりゃうかうかしてられないな。」

未だ負けが認められないコクエンをよそにイツキは苦笑する。コクエンは決して弱くない。仮にも四天王の一人として一つの町を支配できたのも本物の力を持っていたからなのだから。

（もっとも今回はそこから来る驕りが敗因なんだろうな）

強くなるがゆえに生まれる余裕と驕り。それは仕方のないものだが、あんまりにもそれらを持ちすぎるとこんな結果になる。まあ今回はアリカもキクヒメも当初と比べて圧倒的に強くなっていたのだが。

「やっぱりイツキ君の周りはすごい人ばかりだね。僕らにとってもいい勉強になるよ。」

「そんなこと言ってもハクマはやっぱりみんなに勝ってるじゃないか。」

「君とミズチ君意外にはね。けどかなり危ないところだったから。まだまだ修行が足りないよ。」

コクエンに対し、ミズチやハクマは余裕や驕りをほとんど持っていない。相手の力量をきちんと見極め、確実に勝てる相手でも油断せず戦える。イツキはだからこの二人は強いんだなと思っている。

「残る組み合わせは……俺とイツキか。」

組み合わせ表を見ながらミズチが呟く。恐らくこのメンバーの中で1、2の実力者二人。どちらが勝ってもおかしくない戦いだ。

「腕を上げたのかどうかは実際に相手しなきゃ分からないからね。全力で行くよ!!」

「ああ。いつでもいいぜ。」

お互いがメダロッチを構える。その様子を見てはしゃいでいた者、うなだれていた者、更には下校途中の生徒までが注目した。

「それじゃあ……」

『メダロッチ、転そ……』

「そこまでしておきなさい。」

今まさに始まる!!という瞬間にリュウコ先生が割って入った。

「今日はもう遅いわ。残念だけど次の機会にしましょう。」

「それはないだろ姉貴。まだこんなに明るいんだ。あと一戦くらいなら……」

「だめよ。あんただけじゃなくてハクマ君たちだっているんだからわがままは認めないわ。」

ミズチの抗議をやんわりとダメだしする。

「あのリュウコさん。僕らなら平気ですよ。まだ一戦くらい続けても。」

「これ以上というよりこの二人を今戦わせるといつ終わるかわからないわ。周りもとんでもないことになりそうだしね。」

そう言っぐるりと周りを見回す。明らかにギャラリーができてい

た。しかもここ最近では一番多い。

「………つたく分かったよ。イツキ、この続きはまた今度な。」  
「そうだね。名残惜しいけど………」

肩を落としながらも渋々二人が折れる。

「うそだ……俺が。俺が………」

まだコクエンは落ち込んでいた。

「そういえば三人同じチームで出るんだよね？シユリは入らないの？」

他メンバーはすでに帰宅し、イツキとミズチ、ハクマしかいない中、片づけを済ませ帰り支度をしているときイツキはふと疑問を口にした。他メンバーはすでに帰宅していたのでイツキたちしかいなかったからちよどいいと思ったのだ。あの三人は元四天王だ。だから最後の一人である「朱雀のシユリ」も入ると思っていたのだが……

「あいつは別チームで出るとか言ってたな。チームメイトには不満があるらしいが。」

「もしかしてキノコちゃんかな？意外だ。あの二人が組んだんだ〜」  
キノコというのは四天王が色んな町を支配していたときに反抗していたレジスタンスグループ「リバイーズ」のリーダーだ。（余談だが、メンバー内の合言葉は「お茶しない？」）もちろんロボットルの腕も高い。なぜか変装の達人でシユリと顔を合わせたら最後、周



絶叫した。そんな……リュウコ先生が？あの人確かに結構な実力者だった気がする。しかし一体なぜ？

「声大きい……！！実はさっきの俺達の戦い見てヤル気に火が点いたらしい。迷惑極まりないがな……」

「そ、そうなんだ……」

どうしよう。強敵だ。

「なんで二人とも嫌そうにしてるの？結構いい人じゃないか。」

何も知らないハクマがニコニコしている。

「お前は姉貴のやばさを知らないからな。羨ましいよ。」

「？」

疑問符を浮かべるハクマをよそに歩き出すミズチ。

「どうしたのかなミズチ君？」

「さ、さあ……」

ハクマの問いには答えず、イツキも歩き出した。

「それじゃあねイツキ君。今日はためになったよ。」

「じゃあなイツキ。大会で会おうぜ。まあその前にまた来るかもしれないけどな。」

「ああ、待ってるよ。二人とも気をつけて帰ってよ。」

イツキを残し、二人が去っていく。ハクマは大会が終わるまでビヤクヤと一緒にミズチの家に居候しているらしい。

「さて。僕も帰ろうつと。今日は週間メダロットの日だったし。」  
イツキもまた自宅に向かって走り出した。

「それではお大事になさってくださいね。」  
「色々ありがとうございます。」

病院の玄関。看護師たちに見送られながらカラスは今日退院した。ほとんど入れ替わりにコウジが入院しているが。

「《悪魔》か……………」  
へブンズゲート、それに今回のコウジの怪我。そのどちらもやつらの作業だという。そして撃退こそできたが自分の力はやつらにはまだ及ばない。

「くそつ……………!!」  
無力さが嫌になってくる。だが今度の大会にはやつらが出るかもしれない。それまでに相棒の力を使いこなせるように……………」

「退院おめでとう……………って顔じゃないな。」



そんなことを考えていると見知らぬ少年が現れた。

「渡鳥カラスだよな？なるほど、イツキが認めるのも分かるな。まったくコウジといいお前といいなんであいつの周りにはこう凄い連中が集まるのかねえ。」

「誰だ、お前。イツキの知り合いか？」

少し言葉にとげを含む。初対面の相手にいきなりお前はないだろう。

「悪い。気にさわったなら謝るよ。俺はユウト。イツキの友人だ。」

「お前がイツキの話していたクワガタ使いか。」

カラスは納得したように頷く。ならば自分たちのことを知っているのも分かる。

「それで何の用だ。チームメイト候補に挨拶しに来たのか？」

「いや。カラス、俺はお前に話があるんだ。ちょっと付き合ってくれねえか？」

「……手短に頼む。」

「OK。けどここじゃまずい。俺んちまで来てくれ。」

カラスは頷きユウトに付いて行く。歯車はようやく回り始めた……

## 第18話：大会前夜

「遂に明日の日曜日ねっ！！」

アリカの大声が響く。ちなみに放課後の校庭で叫んでいるため帰宅途中の生徒たちの何人かが何事かと振り返ってきた。

「大声出さないでよ……ホラ皆こっち見てるじゃないか。」

「細かいことは気にしないの！！あんたは楽しみじゃないの？大会。」

そんな幼馴染の様子をイツキは迷惑そうにしていたが、急に話題を振られ困った顔になる。

「そんなことないよ、すごく楽しみさ。コウジやミズチ、それにヒカルさんとも戦えるんだから。」

「だったらもつと喜びなさいよ、はしゃぎなさいよ、盛り上がりなさいよ！！」

グイグイ顔を近づけてきながらアリカがそうまくし立てる。

「で、でもさ……」

「ユウト君のこと？大丈夫でしょ、彼こういうお祭りは好きっぽいしカラス君からもちゃんとするって言われたんだし。」

「うん……」

そう。気になるのはユウトだった。結局あの夜からユウトとは会っていない。家に行っても会えないし、どこにいるか分からないのだ。ついこの間カラスがイツキ達のチームメイトとして参加するという

返事とともに、たまたまユウトと初対面を交わして仲良くなりちやんと大会に出るとい言葉も伝えてきてくれたのだが……

(でも本当に大丈夫かなあ……)

そんな風に考えてしまう。大会は明日。そして《悪魔》との戦いが本格的に始まるだろう。

「……だから来てくれよユウト。」

「ん？なんか言ったイツキ？」

不思議そうな顔をしてアリカがこちらを見ている。

「なんでもないよ。」

そう返事をした後イツキは明日の大会について本格的にアリカと話し始めた。

「……やっぱりすごいな。このメダロットの性能は。」

ハクマは心からそう思った。目の前には圧倒的な性能を持つ自らのパートナーの、そしてそれすら超える調整相手のパートナーの高さを裏付ける光景が広がっていた。

「さすがミズチ君だね。さすがに簡単には勝てないなあ。調整はバツチりみたいだね。」

「いや、こいつの最終調整はお前がいなかったらできなかった。イツキ達を除けば俺とまともになれるのはお前だけだしな……」  
本当にありがとう。こいつはお前の力を借りてようやく完成した。」  
勝利を喜ぶわけではなくむしろハクマに感謝するミズチ。俺のとおきおきは並のメダロッターとの戦いでは練習にもならないから調整できない。ハクマの高いロボットセンスがあつてこそ完成させることができたのだ。

「僕はお礼をされることなんてしてないよ。こっちの調整もさせてもらったし。お相子さ。」

「ああ、明日の大会も期待してる。」  
「こちらこそ。」

ガツチリ握手を交わす二人。俺たちの力が揃えば優勝も難しくはない。

「でもコクエン君はどうするの？彼なんかまた性もないこと考えるみたいだけど……」

「気にするなよ。正直あいつがいようがいまいが俺たちの間には何の支障もない。今となってはな。」

「……さりげなくひどいこと言ってるねミズチ君」

ミズチの答えにハクマは苦笑する。まあコクエンが迷惑をかけるのは分かりきってたからなあ。

「そっちの調整も済んだみたいね。」

そんな二人の様子を見てリュウコ先生が上がってきた。

「そつちの調整もすんだのか姉貴？」

「ええ、やっぱり扱いづらいのは変わらないけどね。扱いづらいといえばハクマ君は大丈夫なの？あのメダロット、性能は折り紙つきだけど性格が……」

「大丈夫です。実際に付き合ってみると中々面白いパートナーです。馬は合いそうですよ。」

「さすが『白虎のハクマ』と呼ばれたメダロッターね。となると問題はなにかしら？」

リウウコ先生の愛機、ミスチのとおき、そしてハクマに託したあのメダロット……その全ての調整が済み彼らのコンディションは万全だった。

「ああ、後は大会を待つのみだ……。いいか？この大会は俺たちが絶対に勝つからな！」

「フッフ、あなたって本当に変わったわね。前はそんなに熱くなかった。」

「イツキ君のお陰かな？まあ僕は今のミスチ君の方が好きだけどね。」

クスクスと笑う二人。そんな二人に苦笑して、

「ああそうかもな。今まで俺たちはあいつに助けられてばかりだった……。この大会はあいつへの礼だ。全力で行くぞ！」

「ええ。」

「もちろん!!」

そうして三人は『打倒イツキ!!』を胸に明日の備えた……

「メイド少女おおおおおおおおお．．．．．！！！！！」

コクエンは部下たちとテーブルを囲んでそんな声を出していた。

「いいかつ！！明日の大会で、なんとしてもメイド少女のハートを俺様に釘付けにさせる．．．！！そして全世界に『メイド少女ファンクラブ』を設立し、メイド少女率を100%にするのだつー！！！」

『オオオオオオオオオオオツツ！！！！』

騒ぐ野郎ども。正直、異様な光景だった。

「残念なことに俺はミズチ達なんかと組まねばならない．．．．．しかしつー！！我々の目的は常に一つだつー！！おまえら！！頼んだぞつー！！！！」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ！！！！！！』

更に騒ぐ野郎ども。彼らの夜はまだ明けそうになかった．．．．．

「．．．．．OK。あいつも大丈夫だつて。」

とある町の公園。そこで一人の女性が携帯片手にそう答えた。その

姿はどことなくキクヒメに似ていなくもない。

「……すまない。苦勞をかける。」

その言葉に感謝しているのはヒカルだった。大会出場を決め、最後のメンバーを集めていたのだが最後の一人の返事が大会前日の夜になつてしまった。

「気にすんじゃないよ。昔のよしみだし、久しぶりの祭りだ。あたしら三人組が揃うのも久しぶりだしね。それに久々に見れるんだろう、あんたの本気が？」

むず痒そうに頭をかく女性・イセキはニヤリと口元をゆがめる。

「ああ……『メタルビートル』と『ヘッドシザース』。その元となつた僕の全盛期の愛機・初代メタビーとロクシヨウを解禁する。」

「今はアークとティレルつて呼んでるよね、あんた。にしてもそこまでするつてことはやっぱりあの坊ちゃんがやばいことに巻き込まれたつていうあんたの話は真実なわけだ。」

「本当にすまない。この大会はそれだけ危険だというのに僕は……」

尚も謝ろうとするヒカルをイセキは制する。

「あんたに頼まれたから出るんじゃない。なんていうの？あたしもヤンマもクボタもあんた達にちよっかいかけまくつてたけどそれなりの付き合いはあるじゃない？一応悪友つて括りでさ。だつたらそれを助けてやるのは当然だろ？」

「……ありがとう。」

友達だから助ける、イセキらしくない発言だがヒカルにとっては嬉しかった。

「それじゃ明日、会場で。ヤンマ達にもそう伝えてくれ。」

「ああ、言つとくけどあたしらの足引つ張つたらただじゃおかないからね。」

そんなイセキの憎まれ口を背中に受けながらヒカルは闇の中に歩を進めた……

「絶対に、絶対にイツキ達を倒してカラス様に認めてもらうわよ

！……！」

『お………』

おみくじ町の公園。そこでスクリユーズ（むしろキクヒメのみだが……）は気合を入れていた。

「なあにい？その気のない声はあ！？もっと気合を入れなさい！

！」

『へーい………』

「もっと……！」

『へーい……！』

もはやヤケクソだ。そうしてイワノイ達は考えていた。



(なんでこんなことになってるんだよお……………!!)

その答えは誰も知らない……………

「ふっふっふっふっふ……………ついに明日に迫ったねウオナちゃん。」

「そうね。明日は私達マーメイド学院のシーフェアリーズと……………」

「僕たちマーマン学院のシードラゴンズが協力して戦う初の大会っ……………」

「負けられないわね……………!!」

海底都市アンダーシエル。ここでも大会に優勝するべく気合を入れる者達がいた。アンダーシエルの2大学校、そのうちの女子校である『マーメイド学院』のメダロットチーム・シーフェアリーズ。そして男子校の『マーマン学院』のメダロットチーム・シードラゴンズだ。二年前は両学院の学院長達のイザコザのせいで険悪な雰囲気だったこの両校も、とあるちゃんまげのメダロットの活躍により当時の険悪さが嘘のように仲良くなっていた。

「おいこらラブレター男!! てめえ一人だけ彼女持ちだからって調子のんなよ!!」

「ラブレター男って言うな!! 俺にはちゃんと名前が……………!!」

そんな両学院の初カップルがシーフェアリーズのリーダーであるウオナと通称『ラブレター男』と呼ばれているこの少年だった。一応

今は彼もシードラゴンズのリーダーなのだが本名で呼ばれたことはない。

「しっかしあの弱かった男子たちが私達にも勝てるくらい強くなるなんてね。」

「フツ、我々には素晴らしき先生がいた。先生のためにも弱いままでいられるわけがないっつ！！！」

シードラゴンズの男子の一人が大声を張り上げ、他の男子たちもウンウンと頷いた。ちなみに先生とは某ちょんまげメダマスターのことである。

「僕も先生がいてくれたからウオナちゃんと呼き合えたんだ。感謝しても仕切れないよ。」

ラブレター男が懐かしげに虚空を見上げた。

「君も覚えておくといいよ。先生は本当にすごい人なんだから。」  
「へえ。みんながそんなに言うんだから本当にすごい人なんだろうな。僕も会ってみたいよ。」

ラブレター男の言葉に一人の少年が頷く。青髪眼鏡をかけた温厚そうな少年で、最近転入してきたシードラゴンズの新人りだった。そのロボトルの腕も恐ろしく高かった。もしここにイツキがいたら驚いていただろう。なぜなら、

「それじゃあ僕らはその先生に強くなったところを見せてあげないとね。」

この世界にはいないはずの浦島カイという少年だったのだから。

「コウジ君その辺りでやめておいたほうがいいですよ。」  
「そうそう。君は病み上がりなんだから。」

メダロポリスの名物の一つメダロッターズ。そこにあるマシンを利用してコウジは特訓を続けていた。

「るっせえ!! 大会は明日なんだ!! 鈍った勘をサツサと戻さねえといけねえんだよっ!!」

二人の忠告も聞かず一心不乱に特訓を続けるコウジ。その様子を見てメダロポリスのボンボンであり友人のハチロウがカリんに小さく尋ねた。

「ねえいったい何があったの? 彼が無茶するのはいつものことだけどこれはちよつと・・・」

「さあ・・・退院してからずっとあの調子ですから・・・」

カリンも分からなかった。コウジのその姿はどこか狂気すら感じる。あの姿は大会に向けて急いで調子を戻しているにしても・・・

「コウジ君・・・」

一体何があったのだらう。多分全ては私が眠っていたあの夜から始まっている。根拠は無いがそう感じた。事実あるときからイツキもコウジも平静こそ装っているがどこかおかしくなった。

(もう二度と、無様なことにはならねえ……!! なんてたま  
るかっっ!!)

コウジはあの時の敗戦を思い出し、がむしゃらに特訓を続ける。そ  
の様子をカリンは黙って見ているしかできなかった。

「ふう、何とか間に合ったわい……」

メダロット研究所の特別室『パンドラの箱』。そこで博士はある研  
究の完成させていた。

「本当にありがとうございますアトムさん。これであいつらの思う  
ようにはならなくなる。」

ユウトが博士に頭を下げる。この研究の開発を頼んだのは彼だった。

「いやなに。わしとていつまでも後手に回るわけにはいかんからの  
う。しかしこれは気休め程度にしかならん。完全には……」  
「充分です。カラスもありがとう。君の力が無ければ間に合わな  
っただろうから。」

後ろの壁にもたれかかっているカラスにも礼を言う。退院した日、  
協力してもらいたいと頼んだのだ。

「俺はこれでユウキさん達を助けられる確立があがると思ったから

協力しただけだ。」

「それでもいいさ。まったくマジでイツキの友人はスゲエやつばっかだよ。」

「お前もな。」

「俺はそうでもないよ……まあとにかくお疲れさん。明日もチームメイトとしてよろしく頼むわ。」

それだけ言っただけでユウトは部屋から出ようとした。

「ユウト。」

しかし博士は呼び止める。

「何？」

「もう戻れんのかお前は？あの頃のように……」

苦しげな声で静かに聞いた。あの頃。それはユウトがまだ純粋なメダロットだった頃の話だ。今のユウトは違う。

「今ならまだ引き返せるじゃろ？全てはわしが背負う。だからお前はあのときのことをもう忘れて……」

だがユウトは首を振った。

「……無理だよ。もう引き返せない。」

「ユウト……」

「アトムさんを恨んでるわけじゃないよ。あれは仕方が無いことだったんだから。けどアイツだけは許せない。メダロットを兵器として扱うあいつを倒して親父の仇を討つ。それでユネを助け出す。そ

うしなけりや俺は前に進めない。そのために得た力だ。そのためだけに今まで強くなったんだ。ただのメダロッター・神田ユウトにはもう戻れない。戻るとしたら全部終わった後だよ……」

そして今度こそ部屋を出て行く。博士は引き止めることができなかつた。

「全て終わった後、か……」

沈黙に支配された室内でカラスはユウトの言葉を反芻していた……

「ダメだ、ルシファー。あいつ全然口を割らねえよ。」

闇の空間。その中で忌々しげにマモンはルシファーに結果を伝えていた。

「もう抵抗する力なんかこれっぽっちも残ってないのによ。まったく驚異的だぜ。」

「……そうか。」

なるほど、マーブラーの言うとおりどうやら自分はマザーの力をまだ過小評価していたらしい。

「わざわざすまなかった。お前は地球に行き大会に参加して来い。」  
「いいのか？」

「ああ、そういう約束だったからな。ただし連れて行ってほしい者たちがいる。彼らを任せたい。」

「そんな位ならかまわねえ。ちなみに『悪魔』は他に誰が行くんだ？」

ふと出た疑問を尋ねるマモン。ルシファーが出ないとなると……

「アスモデウスだけだ。存分に楽しめるだろう。」

「へえ……あいつらノリノリだったくせに出ねえのか。まあベルゼブブは負傷したから仕方ねえし、ベルフェゴールは気まぐれだからな。けどサタン達は？」

「興が乗らなくなったそうさ。」

「あつそ。」

その答えに納得しマモンはニヤリと笑う。

「んじゃ行ってくるわ。あんたの分少しは土産として持ってきてやつから待ってな。」

「気を遣わなくてもいい。好きにしろ。」

それだけ言っただけでルシファーは踵を返す。少年に関してはあの者を出す以上問題あるまい。彼のあのなんとも言えない顔が見られないのは少し残念ではあるが……

(問題はマザーだ。さて、どうしたものか……)

如何にしてマブラーの口を割らせるか。それがルシファーの今一番の問題となっていた。

「いよいよ明日だ……！！！」

自宅の自室。下校時は落ち着いていたのに今はそわそわして眠れそうに無かった。

「まったく今からそんなんでどうすんだよ。」

「メタビーだって落ち着かないだろ？」

呆れたように言ってくるメタビーに対してイツキが口を尖らせる。いつもメタビーはこういう前日からテンションが高いのだから。

「それはそうだがよ。なんつーか……その冷静なんだよんか。」

「は？」

「確かに気分は盛り上がってるんだが……どこか落ち着いてんだよ。そこが落ち着かない。」

一見矛盾している言動。だがイツキはなんとなく分かった。

「いつもと何か違ってて冷静なんだけどそんな自分の反応がらしくなくて落ち着かないってこと？口に出すと難しいな。」

多分分からない人のほうが多い。自分自身なんとなくなのだから。

「やっぱりあいつらが出てくるんだよな？」

「……うん。」

「勝てると思うか？」



「さあね。」

「オイオイオイ……そこは嘘でも勝てるって言えよ。」

ミュータント。圧倒的な力を持ちメダルを食らう化け物たち。その実力は身にしみて知っている。だから勝てるとは自信を持っては言えなかった。

「勝負は時の運って言うしね。だけど僕らはいつも全力でぶつかっていただけさ。そして勝つんだ。」

「……さつきは勝てるか分からないとか言ってたか？」

「勝てるか、じゃないよ勝つんだ。それにユウトやカラスもいるんだよ？負けるはずは無いさ。」

「そうだな。」

それで会話が途切れる。だが不思議といやな気はしなかった。

「そろそろ寝ようか。明日は早いしね。」

「そうだな。」

そして二人は眠りについた。明日起こるであろう激戦に備えて……

第18話：大会前夜（後書き）

お久しぶりでございます。あと遅ればせながら新年明けましておめでとございます^^今年も蒼騎士とメダロットをよろしくお願ひいたします。

さていきなり大会前夜なわけですが・・・なんか色々出てます。なんかメダロット全部持つてる人には懐かしいキャラたちも出ちゃってます。ちなみにまだ参加者は増える予定。乞うご期待！！してくれとありがたいです。

## 第19話：大会開始？

大会当日の日曜日。誰もが心待にして止まなかったロボット大会。

「まさか会場がこことはね……！！」

イッキ達参加選手が集まった会場はなんとフューン要塞だった。イツキにとっては数年前に初めて経験した激闘の場所でもあり、誰よりも思い出深い場所だった。

「いつの間に大会会場になってたのかしら？なんか前より中が広くなってる気がするし。」

イッキと同じく、普通の人達よりこの場所に思い出深いアリカが咳く。

「確かに。でもそれより早く受付済ませなきゃ。」

「そうね。ってユウト君達は？」

本来ならこの場所にいるはずの二人のチームメイト、ユウトとカラスの姿が見当たらずアリカが周りを見渡す。

「カラス達は先に受付を済ませたみたいだよ。チーム登録は個人個人が登録した後でチームリーダーが一人いれば出来るみたいだから。」

「そうなの？だけど二人とも私達と一緒に登録すればよかったのに。」

「そうだね……」

アリカの言葉にイツキも頷く。カラスとは特訓こそしなかったがしよっちゆう会つてはいた。しかしユウトとは結局今日まで会うことが出来なかった。登録は済ませたと言うのもカラスから聞いたことでユウトからは何も聞いていない。

「っと。こうしてる間にもなんか大勢集まってきた。僕達も急いで登録を済ませよう!!」

フューンに集まってきた大勢の参加者を見てイツキ達は参加登録を急いだ。

「ではご確認します。メンバーは天領イツキさん。甘酒アリカさん。渡鳥カラスさん。神田ユウトさんの4名。リーダーは天領イツキさんで構いませんか?」

「はい。お願いします。」

かなりの人垣をかきわけ受付で登録を済ませる二人。この人波では仕方ないかもしれないがカラス達を見つけるのは難しそうだった。

「ではチーム名を決めてください。」

「うーん……どうしようアリカ?」

「好きな名前でもいいんじゃない?リーダーはあんたなんだから。」

「そうかな。それじゃ……普通にイツキチームで。」

しばらく思索した後イツキはそう言った。

「うわあ、もう少しまともなの無いの？」

「アリカが自由に決めろって言ったんじゃない・・・」

不平を漏らすアリカに力なく反応するイツキ。自分でももう少し何  
かなかったのかと思うのだが、中々思いつく名前はなかった。

「ではイツキチームでよろしいですね？登録完了しました。」

チーム名が受け付けられたようだ。

「では奥の扉へお入り下さい。」

「ありがとうございます。行こうアリカ。」

「OK。さっさと二人とも合流しましよ。」

受付を済ませイツキ達は奥の扉へと向かった。

オオオオオオオオオオオオオツツツ!!!

「うっわー・・・」

「す、凄い人数だね・・・!!!」

扉を開けて最初に聞こえてきたのは轟音にも思える声だった。まだ開会式すら始まっていないと言っのに凄い熱気だ。

「これだけ人が多いと二人を探すのも大変だね!!!」

周りの声に負けられないように大声を張り上げる。年齢制限を設けていないからメダリンピックのときより人も増えると思っていたがまさかこれほどとは!!

「お?おーいイツキーツツ!」

なんとか声がちゃんと聞こえる場所に辿り着いたとき、遠くから手を振ってくる一団がいた。

「コウジにカリンちゃん、それにハチロウも!」

コウジ達だ。どうやらこの三人チームで戦うらしい。

「いよいよ始まるな大会!!お互い全力で戦おうぜ!」  
「もちろん!ってコウジ、ケガは平気なの?」

コウジは以前ベルゼブブと戦い大ケガを負ったはずだ。退院はしているようだが……

「えっ!?!コウジ君ケガしてたの?」  
「久し振り、アリカちゃん。まあケガしてたのは事実けどもう平気だ。心配ないよ。」

そう言って笑うコウジ。確かに元気のようだけど、

「ねえカリンちゃん。コウジ本当に大丈夫なの？」

イツキは常にコウジの隣にいるカリンに尋ねずにはいらなかった。

「え？え、ええ。コウジ君のケガは完治しているようですよ。」

「そうか・・・ならいいかな。」

イツキは安心して胸を撫で下ろす。

「あの・・・イツキ君。聞きたいことが・・・。」

「ところでイツキ。お前に聞きたいことがあるんだが。」

カリンの言葉より先にコウジの言葉がイツキに届いた。

「この大会の参加条件は三人〜十人のチームだけ。他のメンバーはどうしたんだよ？カラスとか、お前が前言ってたユウトってやつとか。」

「ああ。その先に登録済ませちゃってたみたいで今探してたんだよ。この会場のどこかにいるはずなんだけど・・・。」

コウジの当然の疑問に答える。だがこの人込みの中では見つけることは難しいだろう。

「そっか。ならいいんだけどよ・・・。」

こっそりイツキの耳元に顔を近づけてくる。どうやらこちらが本命の話らしい。

「あいつらもこの大会に参加してるんだよね？」

『あいつら』。それは間違いなく《悪魔》のことだろう。

「確認してないから何とも言えない。けどあいつらがこんなに多くのメダルが集まる機会を逃すとは思えないよ。」

「そうか………」

イツキの答えに満足したのか口元を歪めるコウジ。この前の敗戦がまだ強く残っているらしい。その顔はどこか飢えた獣めいていた。

「コウジ、その………」

自分はなんと続けるつもりだったのか？分からない。気がつけば口が開いていた。だがそれと同時に、

パチンツツ!!!

会場から光が消え辺りが真っ暗になった。

「な、何!?!」

「大丈夫ですわよ、アリカさん。」

驚くアリカとは対照的に冷静な対応を見せるカリン。気がつけばあれだけ騒がしくなっていた会場が静まり返っていた。

「どうやら始まるみたいだぜ。」

「みたいだね。」

そう。遂に本格的に始まるのだ。



パチンツツ!!

今度はある一点にのみ光が集約される。言わずと知れたミスターうるちだ。

「皆さん、よくお集まりいただきましたツツツ!!!」メダロットバトルグランプリ』これは我々メダロット連盟とアンドロメダル星が共に手を取り合って行う最初のイベントと言えるでしょう!!!」

ザワツツツ!!!

場の静寂が一気に破られる。今の発言で皆一様に騒ぎ出したのだ。

「アンドロメダル星!?!」

そんな中ミスターうるちの言葉にイツキも驚いていた。確かに前にあった宇宙人のイメージでは友好的な星に見えたが……

「この大会、いろんな意味で一筋縄じゃいかねえかもな……」

どうやらコウジも同じような感想を持ったらしい。暗くてよく見えないがアリカ達は口をポカンと開けたままだった。

「正直信じられない、けど優勝商品がアンドロメダル星へのチケット

トだということを考えれば……」

ハチロウは不審に思っているようだ。そんな彼の疑いに答えるようにミスターうるちは言葉を続ける。

「信じられない、そう思いかたも居られるかもしれませんが。確かに、初めに聞いたときは私も驚き、そして信じられませんでした。しかしこれは事実なのですっつ！！！」

納得の得られる答えではないがミスターうるちに嘘を言っている様子は無い。それでも多くの参加者は不審の目を向けていた。

「ウーン、ヤツパリロデ伝エルヨリモ、実際二会ツテ確カメタホウガ納得シマスヨネエ。」

そんな中、片言な言葉を喋る不思議な人が割り込んでくる。

「えっ!?!」

「嘘!?!」

「オイオイ……!?!」

「あ、あの人は!?!」

前回、メダリンピックに優勝し宇宙にいった経験のあるメンバーは皆卒倒しかけた。あの片言言葉。のほほんとした雰囲気友好的な態度。そして明らかに人間でもメダロットでもない体。その人物は二年前に出会った本物の宇宙人だった。

「おい、あれなんだ?」「人間……じゃないよね?」「まさか本物の宇宙人!?!」

再び騒ぎ始める会場。いきなり姿を現した怪しい存在に怯えているようにも、好奇の視線を向けているようでもあった。

「静粛にお願いしますッッ！！えー、こちらの方こそが今回の『メダロットバトルグランプリ』の企画者であり、アンドロメダル星からの代表。『セラフィム』さんです！！！」

「ア、ドウモ。『セラフィム』ト申シマス。本当ハモット長イ名前ナンデスガ、地球ノ言葉ダトコウ読ムヨウデス。マア、堅苦シイ挨拶ハ止メニシマシヨウ。」

そう言っただけで自分が本物の宇宙人である証明なのか手を広げる。するとその手の中からメダルのような形をした石がたくさん出てきた。

「初メマシテト、ヨロシクオ願イシマストイウ意味ヲ込メテ皆サンヘ贈リマス。」

その言葉と共に石が勝手に宙に浮かび会場内を回り始める。そして回りながら淡く、それでいて力強いそれぞれ違う色に輝きだした。

「綺麗……！！！」

カリンの眩きが漏れる。本当に綺麗だ。まるでさまざまに輝く星のよう。それはとても神秘的で幻想的な光だった。

「私たちハコノ大会、勝ち負けヨリモ楽シンデ頂ケタラト思ッテイマス。モチロン私たちの星ニ遊ビニ来タイト思ッテクレルコトハトテモ嬉シイ。ダカラコノ大会ヲキツカケニ地球ト我々ノ星ガモット分カリ合タイト思ッテイマス。デスカラ皆サン。勝ち負けニコダワラズメイ一杯楽シンジャッテクダサイ！！！」

セラフィムの話が終わったようだ。

パチ・・・・・・パチ・・・・・・  
パチパチパチパチパチパチ！！！！！！

彼の演説が終わった後会場は拍手の嵐に覆われていた。

「やっぱりあの星の人たちって皆友好的なのね。」

嬉しそうに笑うアリカ。なにやら気合がはいつたらしい。

「ま、優勝が目標なのは変わらねえけど、それよりも楽しまなきやな。」

さっきまでの鋭い視線では無く苦笑いでそう言うコウジ。

「そうだね。ミュータントのことも重要だけどだからこそ今楽しむべきなのかな・・・。」

少し楽観的過ぎるのかもしれない。けど不思議とそんな気がしていた。

「それでは、これから行う大会のルールについて説明させていただきます。」

しばらくしてミスターうるちの声が再び響いた。

「今回の大会、単なるロボットのトーナメントだけを行うわけでは

ありません。これより行う予選、それをクリアすることが出来た上位16チームに本戦に出場して戦っていただきます。」

やはり、か。これだけの人数だ。確かにずっとロボトルのトーナメントをしてもいいかもしれないがそれだとあまりの時間がかかりすぎる。恐らくは数百は超えているであろうチーム数。そのうちのたった16チームのみが本戦に進める。一体どんな予選なんだ？

「これより一週間。皆さんにはサバイバルを行っていただきます。」

ザワツツツ!!

「サバイバル？」

言葉の意味が分からず首をかしげるイツキ。大会とサバイバルに何の関係が？

「皆様わけが分からないといった様子ですね。しかし善は急げといます。というわけで早速始めましょう。説明はまず場所を変えてからということぞ。」

「へ？」

今なんて言った？早速始める？場所を変える？そう聞こえたのだが……

「それでは皆さん、頑張つて生き延びてくださいっっ!!」

「皆さん、応援シテマスヨ〜!!」

不吉な言葉と呑気な声。その二つが聞こえた次の瞬間！！

カツツツツツツツツ！！！！！！

「!?!」

会場が真っ白な光に包まれる！！

「うわっ！！なんだこれは!?!」

「ま、まぶし……!?!」

コウジとアリカの声が聞こえなくなる。それだけじゃない。僕の体が消えていく?

「ちょっと待ってよ!?!これってどういうこと!?!」

どんどん消えていく自分の体に恐怖する。しかし叫んでもこの現象は消えそうに無い。

「イツキ君!?!」

あわててこちらに駆け寄ってくるカリン。しかし彼女の姿もまた消えかけていく。

「カリンちゃんっつ!?!」

急いでカリンに手を伸ばすイツキ。それに答えてカリンのほうも手を伸ばす!?!

「くっ、もう少しだ!！」

思い切り手を伸ばすイツキ。しかし触れ合う瞬間、

「キャアアアッ!！」

カリンの姿が消える!!

「カリンちゃああああん!！」

絶叫するイツキ。そして、

キュイイイイイン・・・・・・・・カッツッ!!!

イツキの姿が、いや会場にいたはずの全ての人間が、ミスターうるちとセラフィムを除いて会場から姿を消した・・・・・・・・

第19話：大会開始？（後書き）

まことに申し訳ありません！！！！どうやらMyパソコンが故障してしまつたらしくて今修理に出してます・・・そのせいで本来ならすぐに続きを書けるハズの予定が大幅に狂つてしまいここまで遅れてしまうことになりました・・・今は一応家族全体のパソコンを使っているので何とかなっています。次の話も少し遅れるかもしれませんが。けどなんとかしてこの遅れを取り戻そうと思うのでメダロットを待つてくださっている皆様！！まことに申し訳ありませんが気長に待つてくださるとありがたいです。本当にすみませんでした！！！！



第20話：予選本格始動！！

「ん……………」

イツキの目が開かれる。どうやら今まで気を失っていたらしい。

「ここは……………」

徐々に鮮明になっていく景色。そこに広がっていた風景は…………

「へ？」

思わずマヌケな声を出してしまった。

「な、な、な……………」

「なんじゃこりゃああああああああっつつつつつ！！！！！！！！」

だってそこはジャングルだったのだから。

「ったく。るっせえぞイツキ！！！！」

余りにも声が大きかったのかメダロツチから怒鳴ってくる相棒。しかし今はそれどころではない。

「めめめめメタビー！？ぼ、僕達さっきまでフューン要塞にいた

んだよね!？」

「あ?何当たり前のこと言ってるんだよ。」

呆れた声を出すメタビー。どうやら夢ではないらしい。

「じゃ、じゃあここは一体……?」

「オイオイ……お前本格的に頭悪くなったのか?見渡す限りのジャングルに決まってんじゃねえか。」

さも当然と言うように言葉をつむぐメタビー。……てゆうか、

「なんでそんなに落ち着いてるのさ!？」

いきなり未開のジャングルに場所が変わったというのにメタビーのこの落ち着きよう。なんでこんなに落ち着いていられるんだ?

「落ち着けよイッキ。さっきあのおっさんは何て言ってた?」

「何て言ってたって……」

『これから一週間サバイバルをおこなっていただきます。』 『場所を変えますか。』

「……そういえば何か物凄い不吉な言葉を聞いた気が……」

ミスターうるちの言葉を思い出して思わず顔をしかめてしまう。

「じゃ、じゃあここが予選会場ってこと?」

「ま、そうゆうことだろうな。サバイバルの意味が分かるな。」

なんとなく状況は理解出来た。けど疑問が二つ残る。

「ところでメタビー。僕達さっきまでフーン要塞にいたのに、どうやってここまで運ばれたんだろう？」

「さあな。けどアンドロメダル星人が関わってた。メダルを作り出すほどの科学力があるあいつらなら出来ないことはないんじゃないかねえか？」

そういえば今回の大会はアンドロメダル星人が関わってるんだった。

「まあそれは置いておくとして。他の皆は？」

それが一番重要だ。さっきの疑問は後で考えよう。

「さすがにこのジャングルにいるのが僕らだけってことはないんだろっけど。」

「確かにな。ったくなにすりゃいいん……」

そこまでいいかけてメタビーが口を閉じる。

「メタビー？」

「どうやらお前の疑問の答えが返ってくるっぽいぜイッキ。」

「え？」

疑問符が出たのと同時だった。

「えー、皆さん聞こえていますか？私はミスターうるちです。」

空から大きな声が響いてくるミスターうるちの声。

「突然場所を変えてしまい申し訳ありませんでした。あなた達が今いる場所。そこが予選会場です!!」

「いや、そんなことは分かってるんだけど……」

思わずツッコミを入れそうになってしまう。しかし本当の内容はここかららしい。

「今皆さんは自分以外のチームメイトとは離れ離れになっています。その状態で一週間、残り16チームになるようにバトルロワイヤルを行っていただきます!!」

「バトルロワイヤル？」

その説明に一瞬疑問符を浮かべるが、すぐに納得した。なるほどつまりは……

「各々リタイアする、あるいは自分の愛機が機能停止になった時点で即脱落と判定します。またこの一週間で、チームメンバーが二人以下になったチームは即失格です!!」

要するにチームメンバーと合流しない限り一人で複数人と戦うこともありうり、更には連絡手段が無い以上メンバーの無事を確認する方法はない。だがメンバーが二人になった時点でそのチームは失格早めに皆と合流すべきだな。

「まあ、ユウトやカラスがそんなに簡単に負けるわけないしあの二人は心配ないな。問題はアリカか……」

実力は平均以上とはいえ、やはり自分達と比べるとどうしても劣ってしまう。それにミュータント達が参加している場合、アリカが一人でうろついていたら格好の餌となってしまうだろう。コウジやヒカルさんが側にいてくれれば一時的に協力してくれるかもしれないが……

「この一週間、あなた方の生活は我々運営側が全面的にサポートします。寝床や食料も用意してあるので生活には困らないようになっていくはずですよ。」

それはありがたい。だが寝ているところを襲われる可能性も無きにしないはずだ。油断は出来そうに無い。

「分からないところはあなた方がいるエリアの見回りに聞いてください。それでは本格的に予選を始めさせてもらいますっっ！果たして一週間に及ぶ激戦を潜り抜け本選へと駒を進める16チームは

「一体つつ!? それでは皆さん、ロボットファイトオオオツツツ  
!!!!!!」

それで声が聞こえなくなった。

「……まだ分からない部分があるけどそれは自分で調べると……  
……」

一人ジャングルに残されポツンと呟くイッキ。

「ん? よく考えてみれば僕達がいるのってジャングルだよな? 寝床とか食料なんてどこにも無いんですけどっ!?」

「ここ以外に町とかのエリアもあんのかな。とにかくじっとしてても埒があかねえってことだろ?」

「それもそうか……アリカのこと心配だしとりあえず歩くか。」

20分後。

「……何だか歩くのが馬鹿らしくなってきた。」

一向にジャングルから抜け出せる気配がない。歩いても歩いても周りにあるのは木、木、木、木!!!

「だらしねえぞ。まだ20分位しか歩いてねえじゃねえか。」

「メタビーはメダロツチの中にいるからそんなことが言えるんだよ．．．．」

メタビーからの言葉に棘を含ませて返すイツキ。こんな状況なのでから仕方ない。

「だいたい何でジャングルなのにバナナとか果物とかないのさ？歩いても歩いてても景色なんて全く変わらないし．．．．」

そこまで愚痴っていたときだった。

ガサツ！！

「ん？」

近くで何かが動いた。へび？サル？それとも．．．

「気を抜くなよイツキ。もしかしたら．．．．」  
「分かってる。」

短く答え、メタビーを転送する。今動いた何か。それが大会参加者ならば自分を潰しに来るかもしれない。イツキとて不意打ちされれば対応が少し遅れる。すぐに襲ってこない以上ミュータントではないだろうが、

「そこに誰かいるんだろう！？出てきてくれないかな？」

声を張り上げて先程動いた存在に告げる。これはバトルロワイヤル

だ。一瞬も気を抜けない。

・・・・・・・・ガサツ！！ガサガサツ！！

「・・・・・・・・」

果たして誰だ？アリカか？もつとも彼女ならこちらを視認したらすぐ声をかけるはずだから違うチームの人間だろう。いや、もしかしたらこちらの姿を視認できていない可能性もある。

「・・・・・・・・どっちにしても後手に回るのは危険な気がするなあ。」

敵ならば危険だが、アリカでもなんやかんやで色々されそうな気がする。そう考えるが早いかイツキはすぐに行動に移ろうと・・・・・・・・

ガサガサツツ！！！！

「・・・・・・・・イツキ君？」

「・・・・・・・・カリンちゃん？」

草木の中から出てきたのはカリンだった。



「そっか。じゃあコウジ達とは……」

お互いが持っていた警戒の念を解きお互い落ち着いたところで会話を始めた。

「ええ。コウジ君もハチロウ君も見当たらず……イツキ君もアリカさんたちは……?」

「うん、はぐれちゃったみたいだ。カリンちゃんに会うまでは他の人とは会うどころか見てもいないよ。」

どうやら予選が始まってから自分に会うまでカリンも誰とも会わなかったらしい。

「さて、どうするかな……」

正直イツキはここでカリンと戦うつもりは一切無い。コウジのチームとは誰にも邪魔されない本選で真剣ロボットをしたいのだ。となるとここはカリンと一緒に行動して本選に進むと……ん?よく考えてみればカリンちゃんと二人きりの状況。今までも何回かあったが今回は下手すれば一週間も一緒にいることになる。それも二人きり!!マズイ。なんだかマズイ気がしてきたぞ!!

(もちろん変なことにはならない、いやしないつもりだけど……  
……だけど僕の理性は果たして保つのか!?)

自分だって年頃の純情少年なのだ。可愛い子、それも自分の好きな子と二人きりなこの状況。果たして自分は大丈夫なのか!?

(かといって一人にさせるわけにもいかないしなあ……)

カリンは元々体が丈夫な方ではない。熱血でもしかしたら風邪も引いたことが無いかもしれない健康児であるコウジとは対照的なのだ。こんなところで一人放置させておくわけにはいかない。ましてや他の血気盛んなチームやミュータントたちに見つかったら格好の餌食だ。それにコウジやカリンのお父さんとの約束もある。彼女は僕が守ると。二年前にコウジ達に託され、自分が自ら望んだことでもある。だから……

「あの、イツキ君。」

「は、はい!？」

色々なことを考えていたせいか声が裏返ってしまった。振り返るといつに無く真剣な表情でカリンがイツキを見ている。

「あの、こんなことを聞きたくはないんですけど……」

そこで一呼吸をおく。イツキはその質問の内容がなんとなく分かる気がして黙ってその続きを待った。

「コウジ君、退院してからおかしいんです。何かに取り付かれたかのように一心不乱に過激な特訓を始めて……」

「……」

「イツキ君も知っているとありますが、確かに前からコウジ君はロボトルのことになると熱かった。けれどあんなに鬼気迫る感じじゃなかったんです。大会が近づいているから?いいえ私はそうは思いません。だって思えばコウジ君の様子が変わったのは彼が入院してからだったんです。……多分私が眠って何が起きたのか分

からないあの夜から。」

そう言いながらカリンの体が震え顔は俯いている。ずっとコウジの側にいた幼馴染であるカリンにはコウジの様子が怖く見えたのかも  
しれない。

「カリンちゃ……………」

「あの夜のこと、コウジ君は曖昧にしか答えてくれません。お父様は何も知らないようで……………でもイツキ君は知ってるんですね、あの夜のことを……………」

再びイツキを見たその顔はまるで泣いているようだった。

「……………教えてくれませんか？あの夜、私の身に本当は何が起きたのか。そのせいでコウジ君とイツキ君は何か大きなことに巻き込まれているんじゃないですか？」

「カリンちゃん……………」

クソッ。僕は相変わらず馬鹿だ。皆を巻き込ませないために黙っていたのに帰って心配させてるじゃないか。

「……………ゴメン。実は……………」

もう隠し通すことは出来ない。そう考えて全てを話そうとしたときだった。

「イツキ、どうやら囲まれたらしいぜ。」

カリンと合流してからずっと黙っていたメタビーが口を開いた。

「囲まれてる？」

「はつきりとした数は分からねえが……友好的な感じじゃねえな。」

その言葉でようやく自分達のおかれた立場に気付いた。確かに敵意を持つ人が何人もいる。ロクシヨウやブラスのような索敵能力があればもっと良かったのだが今はそんなこと言っていられない。

「カリンちゃん、話は後にしよう。今はちょっと無理みたいだ。」  
「……分かりましたわ。」

そう言ってカリンもブレイブナース カリンのパートナーだ を転送する。戦闘には向かないが、補助役としてはこれ以上ない戦力だ。

「どうするメタビー？」  
「決まってるだろ？ 先手必勝だよ！！」

嬉しそうに答えるメタビー。どうやら予選が始まっているのに今までなにも起きなかったことでストレスが溜まっていたのだろう。

「……OK。それじゃあ行こうかっ！！」

言いが早いかイツキとメタビーが駆ける。こうして大会は本格的に始動しはじめた……

## 第21話：それぞれの動向

「成程、バトルロワイヤルか……好都合だな。」

ザザザーっと波が押し寄せ、砂浜。そこにボサボサの寝癖少年、神田ユウトは一人佇んでいた。

「それにしてもこのリアリティ……宇宙人ってのは本当スゲーな。」

足元の砂を一掴みしてそう呟く。先程のフーン要塞はミニミニマシンの応用で大勢の人間を入れたようだがこのエリアには一体どんな仕掛けが……？

「ユウト。イツキ達と合流しなくていいのか？」

危うく想像の世界に飛んで行きそうになったユウトを相棒である口クシヨウの言葉が連れ戻した。

「ん？あ、ああ。イツキもカラスも実力は申し分ないしな。『悪魔』クラスの誰かと当たらない限り二人は絶対生き残るよ。」

「だがアリカは……」

「確かに彼女は心配だな。けど大丈夫だろ。」

全く心配した様子もなく相棒に答える。

「何故だ？彼女はお前達とは違う一般のメダロットだ。『悪魔』どころか下級のミュータントにも見つかったも……」

心配した様子を一切見せないユウトに苛立ちを覚える。自分のマスターたるユウトは誰よりもミュータントの恐ろしさを知っているはずなのだが……

「だから大丈夫だよ。『アレ』は既に発動してるはずだし、俺の勘が正しければ彼女は一人で行動していない。」

「何？」

ユウトの勘が大丈夫だと告げたことにロクシヨウは驚いた。何せ彼のマスターの勘はほとんど外れたことがない。行き当たりばったりでも勘だけで切り抜けてきたような男と言ってもいいだろう。しかし一人ではないとは一体？

「結構頼りになる人じゃねえかな。ま、だから俺のメンバーの心配はいらないよ。……それより俺達だ。コイツの為にわざわざイツキ達とはしばらく距離を置いてたんだからな。」

そう言って自分達の秘密兵器を持ち上げる。

「俺達が駄目ならイツキ達にも託せねえんだからな。」

「……そうだな。ではユウト。」

「ああ。始めるぞ、行動開始だ。」

そう言ってユウトは砂浜を歩き出した。

ズガガガガガッ！！！！

「グハッ！！」「駄目だやられた！！」「クソッ！おいつ、そつちから回り込め！！」「ダメだ、間に合わない！！」

飛び交う怒号と悲鳴。ここに集まった者達は皆腕に覚えのあるメダロットばかりだ。だが既に十数体。たった一機のメダロットによって彼らの愛機は機能停止に追い込まれていた。

「メタビー、右だ！！」

「OKマスター！！」

左腕のガトリングが火を吹きまた一体仕留めた。

「クッ、これがメダリンピック優勝者にしてメダマスターである天領イツキとメタビーの実力だということか……っ！？」

彼らの一人が悔しげに叫ぶ。正直悔っていた。例えメダマスターであるうとも、例えメダリンピック優勝者であるうとも、不意をつけば簡単に倒せる。それが間違이었다。先程まで隣にいた少女と楽しげに話していたから狙える。そう確信したが彼はすぐにこちらに気付いた。慌てて行動を開始したがそれらは全て無駄に終わり……

「くっ……！！さっきの少女もよく見ればメダリンピック優勝チームのメンバーじゃないか！！」

あの少女も天領イツキほどではないが有名だ。戦闘には全く向かないが、補助役に徹すればこれほど適した機体はいない……

その代名詞とも言えるブレイブナースを完璧に使いこなしている少女、純米カリン。まさかかつての最強チームが再び組まれているとは……っ!!

「イツキ君、メタビーちゃん危ない!!」

ブウウウン……

メタビーの避けきれなかった攻撃をブレイブナースの守りが阻んだ。

「ありがとうカリンちゃん、ナースちゃん!!」

「やっぱり頼りになるな!!」

ブレイブナース、全てのパーツに攻撃部装が備わっていない女型メダロット。しかしこのメダロットにはそれを補って余りある力が備わっている。

『完全防御』・メダロットの防御パーツの中でも究極の力だ。自分以外の仲間への攻撃を全て無効化する。無論強力な力故の回数制限も備わっているが、ブレイブナースの完全防御の回数制限は他の機体に比べて圧倒的に多い。これがブレイブナースが補助系メダロットの代名詞とも言われる所以でもあった。

「攻撃は俺達任せな!!」

だからこそ厄介なブレイブナースから潰しにかかるのが望ましいのだが、バリバリの攻撃型であるメタビーがそれを許さない。

「強い……っ!! 噂以上の強さだ……っ」



メタビーが撃退した機体の数は既に十体を超える。これにより開始早々に何組かのチームは失格になったはずだ。天領イツキを潰しかかるどころか逆に反り打ちにあっってしまった……!!!! やがて実力の差を感じとり生き残った敵達は散り散りに逃げ出した。

「ふー……どうにか追い払ったな。」

「追わなくていいのかよ？」

「まだ時間はたくさんあるし、もしかすると罠が仕掛けられてる可能性もあるからね。とりあえず今はいいや。」

ようやく敵がいなくなりその場にはイツキ達だけが残った。

「お二人とも大丈夫ですか？」

二人の様子を見にナースちゃんことブレイブナースが駆け寄ってきた。

「大丈夫だよ、ありがとう。カリンちゃんもお疲れさま。」

「いえ、私達はほとんど何もしていませんわ。イツキ君また腕を上げましたわね。」

ニツコリとそう言うってくるカリン。なんだか照れくさい。

「さて、余計な邪魔もいなくなっただし……カリンちゃんさっきの話の続きをしようか。」

「いいんですか？」

「今更隠し続けるのもなんだしね。ちょっと長くなるけどいいかい？」

「私は構いません。」

そう言って地面に腰を下ろす。

「分かった。メタビー、見張りお願いね。」

「OK。」

メタビーに見張りを任せイッキも腰を下ろす。そしてカリンに今までのことを語り始めた。

「ねえ一つ聞いてもいい？」

「？えっと……何をですか？」

何故か周りに魚が泳いでいる空間。と言っても息が普通に出来るので海中ではないのだろう。とにかくその空間の中、

「あなた私を倒すつもりがないの？」

アリカは目の前の少年に尋ねた。無論イッキでもユウトでもカラスでもなければコウジやハチロウでもない。青い髪をした穏和そうなメガネをかけた少年だった。

「倒す気がないのかと言われれば今はありませんね。そちらからかかって来るのなら別ですけど。」

「つまりあなたから仕掛けるつもりはないってことね？」

「ええ。」

コクリと小さく頷いた。本気で自分と戦う気はないらしい。

「これはバトルロワイヤルよ。他の選手は潰しておくに限るんじゃないの？」

意外そうにアリカは呟く。かといってアリカから仕掛けるつもりもない。この少年は底が見えないのだ。迂濶に仕掛ければこちらがやられる可能性がある。

「そうかもしれませんが・・・でもあなたは天領イツキ君のチームメイトなんでしょう？万が一あなたを倒してイツキ君のチームが失格になったら困りますし、何より一緒に行動してたら早くにイツキ君に会えるかもしれませんからね。」

少し困ったような表情を浮かべる少年。底が見えないという点では恐ろしいがそれ以上に変わった少年だ。

「それにしてもイツキ大人気ね。知り合いか何か？」

「いえ。僕の学校の皆がイツキ君の事を先生って慕ってて。それでどんな人なのか気になるんです。」

「ふーん・・・。」

そういえば二年前にイツキって何か色々やってたなあ・・・

「ま、戦う気がないならそれでいいんだけどね。それであなたはどつするの？」

「出来れば一緒に行動できるといいんですが・・・ダメですか？」

少年の言葉を聞きアリカは暫し考え込んだ後、

「いいよ。さすがに一週間も一人きりだと大変そうだし。どうやら本当にあなたは私に危害を加えるつもりはないみたいだしね。」

そう答えた。楽観的と言われるかもしれないが、多分間違っていない。

「本当ですか！？ありがとうございます！！」

「いいっていいって。それにタメ口でいいよ。年変わらないでしょ？ええつと……」

そういえば名前を聞いてなかった。するとこちらが名前を聞くより早く

「僕の名前は浦島カイ。マーマン学院の二年生だよ。」

「カイ君か……。私は甘酒アリカ！！さっきも言ったようにタメ口でいいからね。」

「うん、分かったよ。」

すっかり砕けた口調になり手を差し出してくる。アリカもその手をとって握手に応じた。

「って冷たっ！！カイ君、君って手冷たいんだね……」

「よく言われるよ。自分じゃ全然分らないんだけど……」

「いいよいいよ。手が冷たい人は心が温かいつて言うし。それじゃあとりあえず行こっか。」

「そうだね。」

こうしてアリカとカイという奇妙なコンビが誕生した。このコンビが約一名を除き他のメンバー達に衝撃を与えることになるのだが、それはまだ先の話である。





場所は変わり荒地。そこにはサングラスをかけた大柄の男が悠然と立っていた。

「オイオイオイオイ、頼むぜ。こっちは最近退屈してたんだ。こんなもんじゃ満足できねえんだよ……!!」

そういう男の周りには無数のメダロットがゴミくずのように転がっていた。そしてそのマスターと思われる人々も……

「お前はこいつらと違って俺を楽しませてくれるんだよな？え？」

「う、う、う……うあああああああああああああ  
ああっっっ!!!!」

恐怖し彼の眼前の少年が走り出した。

「ったく、んだよ腰抜けが……」

目の前の逃げ去った獲物を追いかけず忌々しげに愚痴る男・マモン。この大会に参加している『悪魔』の一人であるのだが……

「どいつもこいつもどいつもこいつも……っ!!!!」

なんなんだこの物足りなさは!?腕のある獲物が一人もいない。それどころかまともに戦おうという者さえ……!!

「つまらねえ……!!俺はこんなつまねえことを経験する為にわざわざ足を運んだわけじゃねえってのにつ!!」

叫びは大気を震わせる。しかしそれでもこのイラつきは止まらない。

「にしてもどういうことだ？ぶっ倒したヤツラからメダルが消えてやがる。それに人間どもにも必要以上の攻撃が出来ねえ……」

何よりも不可解なその事実更に怒りが募っていく。強い相手は現れず、メダルも喰らえない。こんなことでは何のために大会に……

『フツ……大分苛立ってるみたいねマモン。』

そんな中突如声が響いてきた。無論周りには倒れ付している者達を除けばマモンしかない。だが確実に声が響いてきた。

「あー？何のようだアスモデウス？俺は今機嫌がワリいんだよ。」

『声を聞けば分かるわ。だからあなたの前に姿を現してないんじゃない。』

「ケッ！！相変わらず用心深いこつて。」

あくまで愉快気にそう言ってくるアスモデウスに対して更に苛立ちを見せるマモン。この場にいたならば同じ『悪魔』でも手をあげていたに違いない。

『その様子だと思つように狩りができてないみたいね。あなた強面だもんね。』

「るせえっつ！！さつさと本題に入れや。そんなクソくだらねえ話するために声聞かせた訳じゃねだろ？」

『つれないわねえ。ま、それもあつただけどお望み通り本題に入つてあげる。どうやらあなたが苛立ってる要因のいくつか。その力ラクリにあの坊やが関わってるみたいよ。』

「何？」



途端、空気が変わった。先程までの辺り一面に振り撒いていた殺気や怒気は消え、マモンの顔にわずかな歡喜の色が浮かぶ。

「あのガキか？そっついこの町にいるんだっただな……この大会にも出てるって見ていいんだよね？」

「さあ？でも多分出てるんじゃないかしら。こういうお祭り騒ぎには出てくるんじゃない？わざわざ私達の対策にも関わってるくらいだし。」

「そっただよなあー！！」

肩を震わせ、歡喜の色を隠し切れなくなったマモンの声が響く。さつきとは別の意味で再び大気が震える。

「そっかそっか、あのガキがいるのか……こりゃようやく俺好みの展開になってきたぜ……っ！！」

『喜んでもらえてなによりだね。それじゃどっちが先にあの子を見つめるか、勝負する？』

「面白え……受けて立つぜ。」

『それじゃ、コンタクト切るわよ。私に負けたからって泣かないでね。』

「ほざけ。 temeエこそ俺に土下座しねえよう頑張れよ。」

そしてアスモデウスの声が途絶える。どうやら話は終わったようだった。その場に再び一人残ったマモンは先程とは打って変わって上機嫌だった。

「フフフフ、クツクツクツク、アーッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！ハハハックツクツクツク……っ！！

「!!」

轟音に近い歓喜の笑い。その目は獰猛な野獣のそれに変わっていた。

「これだっ!!これこそが本当の祭りってヤツだっ!!ようやく面白くなってきたぜ……!!」

狩るべき獲物は見つかった。後は……

「待ってるよ……今、会いに行くぜ……っ!!」

そう言い残してマモンは狩りに向かった。

## 第21話：それぞれの動向（後書き）

どうもっ！！蒼騎士ですっ！！！！まだマイパソが戻ってきていないため相変わらず更新遅いですハイ。さて、本編ですが・・・題名考えるのってムズイっすね。中身よりそこに頭捻る俺、けど捻った割には大したことない題名・・・

そういえば、皆さんありがとうございましたっ！！評価感想読ませていただきました。いやー自分自身まだまだだと思っっているこの小説にあんなに熱いメッセージが贈られているとは・・・っ！！俺マジで嬉しいっす。中には出版されたら買う！！とまで評価してくれている人もいて・・・本当にありがとうございます！！メダロット はまだまだ続くんでどうか最後までお付き合いください！！これからも頑張ります！！

## 第22話：死闘の直前（前書き）

この話のからメダロット本編よりも更に残酷な描写や過激な表現が入ってきます。こんなのメダロットじゃねえ！！と思う方は今の内にお引き返してください。

## 第22話：死闘の直前

「そんな・・・っ！！最近三原則が外れているメダロットが出てきているという話は聞いていましたけど、でも・・・」

「うん。嘘だったら本当にいいんだけどね。でも事実なんだ。そして僕とコウジはそれに十二分に関わってしまった。」

今までのこと、そして自分とコウジが何に関わっているのか。その全てを話終えたときカリンはひどく驚いていた。

「ごめんね。本当は皆を巻き込みたくなかったんだ。だからカリンちゃんに話すつもりもなかったんだけど・・・それが逆に心配させちゃったんだね。本当にごめん。」

深く頭を下げる。どうして自分はいつもこんなに無器用なんだろう。もっと上手いやり方があったかもしれないのに。そしたら心配をかけることもコウジを巻き込むことも・・・

「イツキ君。ひよっとして自分を責めているんですか？結果的に私達を巻き込こんでしまったと。」

「まあ、ね。本当にごめ・・・」

パシッ！！

小気味よい音が周りに響いた。そして同時に頬に感じる熱と痛み。イツキはカリンに叩かれていた。

「カリンちゃん……?」

カリンが人を殴るのは初めての筈だ。だからイツキは一瞬何が起きたのか把握出来ずにいた。が、すぐに思考が戻る。なぜなら、

「カリンちゃん泣いているの?」

肩を震わせて目を真っ赤にしてカリンが泣いていたから。

「泣いてなんか……いませんわ。泣いてなんか……っ!!」

「カリンちゃん……?」

カリンが泣きながらそう言う。そして、

「悔しいんです……」

「悔しい?」

言葉の意味が分からず思わず聞き返す。

「一人で何もかも抱えこんで、自分だけ辛い思いをして……どうしてもっと私達を頼ってくれないんですか?そんなことで私達が喜ぶと本気で思ってるんですか!？」

「カリンちゃん……」

それはコウジにも言われたことだった。もっと頼れと。けど……コウジは結果的に大怪我をおった。あの後ユウトが来てくれなかったら死んでいたかもしれない。皆を信用していないわけじゃない。むしろ信頼している大好きな仲間達だからこそ巻き込みたくなかった。

「けれどそうやってイツキ君が傷つくのは私達だって嫌なんですよ。だからそうやって何でも一人で抱え込むのは止めてください。でないと私達皆……本気で怒りますわよ？」

こ、怖いっ！！あれは既に本気の目だ。物凄く可愛いからこそ逆に怖い。

「それに……今度は本当に泣いてしまつかもしれません。だから……！！！」

必死な目でこちらを見つめてくるカリン。コウジもカリンも自分のことをこんなに心配してくれて、自分に協力してくれて……

「分かった。今度からはちゃんと皆を頼るよ。」

本当にいい友達を持った。彼らと出会えて本当に良かった。

「本当ですか？」

「うん。もうカリンちゃんに泣かれるのは御免だしね。」

「そうですよ。私を含めて皆を泣かさないために……そういえばイツキ君。頬は大丈夫ですか？」

さつきイツキをひつ叩いたことだろう。悪いと思っているのか少しままりが悪そうにカリンが尋ねる。

「ああ。このくらい大したことないよ。……結構こたえたけどね。」

冗談めかして笑うイツキ。それを見て恥ずかしさなのかさつきとは違う意味で真っ赤になるカリン。

「ほ、本当にごめんなさい！！わ、私つい手が……」  
「だから大丈夫だよ。むしろありがとう。僕にはいい薬になったよ。」

多分僕はさっきのビンタで目が覚めたんだ。感謝こそすれ責める気はなかった。

「もしかしてイツキ君、そういう趣味が……!?」  
「無いよっ!!」

変な想像をし始めたカリンに慌てて否定する。全く、相変わらずの天然ぶりだ。

「話は済んだか？」

そんなやりとりの最中、見張り役のメタビーがこちらに来た。

「敵さんは全く来る気配がねえ。なら今の内にこの予選ステージがどうなってるのか把握しとかねえか？」

「そうだね。ここでじっとしてても埒が明かないし。」

そう言ってイツキは立ち上がる。

「カリンちゃんも行くこう。一緒に行動しておいたほうが都合がいい。せめてコウジ達と合流するまでは。」

「そうですね。私もその方が嬉しいです。」

先程の泣き顔は既に消え、カリンの顔には笑顔が広がっていた。



「よし、じゃあ善は急げだ。今の内に動こう。」

イツキはメタビーを戻し、カリンを連れてその場を後にした。

時は進んで夜。

「バクバクバクバク……!!!!」

「……いつになく物凄い食べっぷりだね。」

予選ステージ唯一の町中フィールド。ここはメダロポリス等の都会をイメージして作られているのか大勢の人が賑わっている。そこに運よくコウジと八チロウは一緒に飛ばされていた。

「強いヤツと当たんなかったとはいえ、流石に疲れたからな……  
・おつ、この魚。家の料理人達が作るのより旨いかもしれない……  
・ん？どうした八チロウ？」

さつきから呆れたようにこちらを見るだけで一切料理に口をつけていない八チロウに問掛ける。

「食欲無いのか？だとしても少しは腹に何か入れた方がいいぞ。いざって時に腹が減って力が出ないなんて洒落にならないからな。」  
「……コウジ君は心配じゃないの？カリンちゃんのこと。」

カチャ………ッ

ハチロウの言葉にコウジは食べていた手を休めた。

「僕はコウジ君と一緒にの所に飛ばされたからいいよ。でもカリンちゃんも……」

「ハチロウ。」

ハチロウの言葉をコウジが遮り言葉を続ける。

「カリンは強い。確かに戦闘に向かない力だが、それでも並のメダロットじゃ話にならねえ。お前もわかってるだろ？」

「そうだけど……」

歯切れ悪くハチロウが返事をする。頭では理解していてもどこか納得出来ないようだ。

「ま、お前の気持ちも分かるよ。カリンは身体が強くないし女の子だ。一人で動いてたら危険だしな。」

「だったら……」

「けど。」

何か言おうとしたハチロウを遮りコウジは更に続ける。

「俺達以外にもカリンを守ってくれるヤツならもう一人いるだろ？」

ニツと笑いながら。

「イツキ君のことかい？でもカリンちゃんと一緒にいると思うかい？多くの参加者がバラバラに振り分けられているこの状況で。」

ハチロウとてイツキの人となりは知っている。彼ならばカリンを守ってくれるだろう。少なくとも一人にしたり不意打ちをしたり、ましてやいきなり襲いかかるなんてこともないだろうが、

「参加人数は百や二百じゃきかないよ。イツキ君とカリンちゃんが  
出会う確率なんて……」  
「一緒にいるさ。」

しかしコウジは心配した様子もなく言い切った。

「イツキ、アリカちゃん、カリン、それに俺。今までこの面子がバラバラにはぐれたときはさ、ほとんどイツキとカリンが一緒になるんだ。きつと今回もそうなってる。」

「だから……心配してないの？」  
「ああ。それに心配したり焦ったりしてても状況が変わるわけでもねえしな。」

「そう、だね。」

どこか釈然としない部分があるがコウジがここまで言い切る以上本当に大丈夫なのかもしれない。

「まあ、カリンと合流すべきではあるけどイツキと一緒にいるなら合流出来なくても大丈夫だろ。だから俺達は俺達で一週間生き延びるために食える時には飯食つとこうぜ。本戦でイツキ達と戦うためにもな。」

「分かったよ。」

ようやく安心できたのかハチロウも箸を進め始めた。

「それにしても変わったねコウジ君。」  
「ん？そうか？」

ややあつて八チロウが口を開いたのでコウジは再び手を休めた。

「そうさ。前ならカリンちゃんに何かあつたら後先考えずに行動してたじゃないか。だから成長したなあつて。」

「……お前。さり気なく酷いこと言わなかったか？」

顔をしかめるコウジ。だが、

「……まあ、本当にはつきりしちまったからな。あいつを守つてやれるのは俺じゃないって。」

すぐにしかめ面ではなくなった。どこか諦めた様な顔で。

「コウジ君？どうしたの？」

「……何でもねえよ。」

思わずそつぽを向いてしまう。と、

「ん？」

「今度は何だい？」

コウジがそつぽを向いた方向。そつちには丁度外の様子が見える窓がある。そして見えるボサボサ寝癖頭の自分達と同じ年代そうな少年。

「あいつは確か……」

イツキがユウトと呼んでいたやつだ。最近転入してきたのだが凄腕のメダロッターとイツキが言っていた。そして誰よりもミュージタントと関わっていて瀕死の俺を助けた男。

「そついやまだ礼言っでなかったな。」

全く会う機会がなかったせいもあってくれた礼を言い忘れていた。丁度良い機会だから挨拶がてら礼を言っておこう。

「ちょっとコウジ君。どこに行くんだい？」

「すぐ戻る。お前はそのまま飯を食っててくれ。」

やや小走り気味にコウジは店の外に出た。が、

「いない……」

既にその姿は見えなかった。

「パクパクパクパク……」

「はむっ……ムシャムシャムシャ……」

イツキ達は夕食を採っていた。ご飯を食べる音だけが辺りに響き、どちらも言葉を発していない。

「それにしても……」

そんな沈黙を破ったのはカリンだった。

「不思議ですわね。町は全く見えないのに夕食は頂けるなんて。」

「そ、そうだね。」

あれから歩くこと数時間。別チームからの襲撃は無かったが、歩けど歩けど、この森から抜けることは出来なかった。森といっても自分達以外は動物も虫もないので正直不気味だった。

「でも本当にどうなってるんだろう？僕らが今いるここも何か突然出てきたし……」

そう。イツキ達が流石に歩き疲れ、食べ物も泊まる所も見つからず参っていたとき、突如小屋が目の前に現れた。中には温かい食事と寝床があったが、不思議なことに誰もいなかった。

「これが運営側が言っていた生活の保証なのかな？」

「でしょうね。とりあえず今日はここで休ませてもらいましょう。明日からの行動を考えないと……」

確かに。一週間生き延びねば本選には進めない以上、今の内にどう動くのか計画を立てておくべきだ。

「……やっぱりコウジやアリカ、ハチロウとの合流かな？ユウトもカラスも簡単には負けないだろうからあんまり心配ないしね。」

「ええ。でもそのミュータント？でしたっけ。彼らが動いてるならやはりカラス君たちとも合流すべきだと思います。」

「いや。多分ユウトは本選まで合流しないと思うよ。カラスはカラスで群れるのは嫌いみたいだし。」

苦笑いしてしまう。あの二人とも合流できれば確かにいいんだが、それでも彼らは個々で動くだろう。

「そうですか……ではとりあえずコウジ君たちとの合流。これを第一に行動しましょうか。」

「うん。でもあんまり目立たないよう行動しよう。なんか僕いろんな意味で目立つみたいだから……」

しかし、彼らの動きも虚しくコウジ達とは合流できずに四日目が過ぎ五日目に入ることになる。だがこの四日間の間、二つの大きな戦いが起きていた。一つはカラスとりんたるうの真剣ロボット。そしてもう一つは……

「これで五日目か……」

場所は移り変わり五日目の昼。今はもう移動していないが、ユウトは丁度イッキやカリンが合流した地点で一人作業を進めていた。

「必要な作業はあらかじめ片付いた。後はイッキたちと合流してこいつを渡す。」

ユウトが単身、イッキたちと合流せず行っていた作業は『悪魔』を倒す最終兵器だった。既に自分達で危険性と性能は確かめている。

後は彼らが使いこなせるかどうかだ。

「うっし。そんじゃ早速……………」

キユイイイイイ……………」

「!?!」

バアアアアアアアアア!!!

突如目の前に広がる閃光。ユウトは紙一重でそれを回避する。

「あつぶねえ……………!!!」

雄図が元いた場所の近くの木々が消滅していた。数瞬反応が遅ければ自分もあぁなっていただろう。

「もろ俺を狙った一撃……………三原則が外れてるって事は。」

そして表情を変えロクシヨウを転送する。

「ユウト。」

「ああ……………出てこいよ。まさか怖気付いたとか言わないだろう?」

閃光が放たれた先を真っ直ぐ見据える。その目には戦闘意思と別に



明確な殺意が浮かんでいた。

「オーオー……いい感じじゃねえか。まさかあんとときのガキがこんなに成長してるたあな。嬉しいぜ。」

パチパチと拍手をしながら出てくる人影。大柄でサングラスを掛けた青年だった。傍らには真っ黒い異形な姿のメダロットが控えている。

「アワリティアの一撃を避けたこともそうだが、いい目だ。怒り？ いや違うな……。そいつは憎悪か。何にせよいい感じに育ってくれたみたいだなあ？」

「大柄にサングラス。そしてアワリティアという名のメダロット……。そうか、『悪魔』一の強欲者・マモンだったのか。まあルシファーじゃねえのは分かってたけどさ。」

口元を吊り上げ凶悪な笑みを浮かべるユウト。かつてルシファーと相对したときの表情よりはマシだが、それでも憎しみの色がありありと浮かんでいた。

「覚えてくれてたのか？ そりゃありがてえ。名乗る必要がねえから。」

「ルシファーはどこだ？」

マモンの言葉を遮りユウトの言葉が辺りに響く。

「あ？」

「同じ『悪魔』ならあいつの居場所くらい知ってんだろ？ ルシファーの居場所を言えば今回は見逃してやってもいいぜ。」

「デメエ……ッ」

マモンの顔から笑みが消えうせる。

「ちつとは利口になったかと思えば相変わらぬのガキだな。実力の差つてやつが分かってねえ。」

「一応もうあんた如きに遅れをとるつもりはないけどね。」  
「言ってくれるじゃねえか。」

ブオツ！！

マモンの言葉と共に強風がユウトに叩きつけられる。が、それを意に返さず平然とユウトは立っていた。

「なあるほど。口だけじゃあねえようだな。あの女はお前にとって相当大事な存在だったんだな。」

「・・・・・・・・」

そこで初めてユウトが顔を伏せた。

「ユネって言ったっけな？あの女も中々だったよなあ。あのとき力が無さ過ぎてズタボロだったお前の身代わりになるんだもんなあ。いやいや中々に面白かった。ルシファーに止められてなきや俺の物にしてたんだがなあ！！」

尚も続けるマモン。ユウトもロクシヨウも微動だにせず黙って聞いていた。

「まあ生意気ではあったがそこも良かった。そういうヤツほど苦し

め甲斐があるってもんだからな。まあ流石にきつかったのか『助けてユウト……助けて……!!』なんて言っただときはもう……」

ザンッ!!

「……少し黙れ、下種野郎。」

マモンの頬から血が流れ落ちていた。ロクシヨウの目に見えぬ斬撃がかまいたちを起こしたのだ。

「あんどきお前からユネを守りきれなかったのは俺の弱さだ。そのせいであいつは辛い目にあってるんだよな……」

空を見上げ悔しげにそう言うユウト。

「けどそれとは別にお前は絶対にしちやいけないことをした。」

そしてマモンを真っ向から見据える。

「っ!？」

その目を見てマモンは一瞬呼吸が出来なくなった。それどころか一瞬後には死んでいると錯覚させられるほどの威圧感。

(この俺が恐怖しただと!? バカな、ルシファー以来だぞ……!!)

「お前、ユネに手をあげたって言ったな？」

ロクシヨウが構える。言葉こそ発していなかったがずっとメダフォースを溜めていたのだ。

「楽には死なせねえ………引き裂いて引き裂いて引き裂いてっ！！死ぬほうが楽だって位の目に味合わせてやるよ！！」

そしてユウトとロクシヨウは駆けた。

## 第22話：死闘の直前（後書き）

どんどんメダロット本編のような話から離れていく……やっぱり年をとったせいと元来の性格が災いしてるんでしょうか？とにかくこの話からどんどん危険になっていきます。前文にも書きましたがここからは本当に先を読みたい人だけで構いません。メダロット本編を大事にしたい人でこの作品がメダロットへの冒険だと思っ人はここまでにしといたほうがいいです。

そしてそんな方々へ。今まで俺の作品を読んでくれてありがとうございませした。願わくはメダロットが後世に語り継がれ再び彼らに会える日が来るよう皆さんの手でメダロットを広めていってください。付いてきてくれる人たち。それでは次の話で会いましょう。

### 第23話：『悪魔』との戦い

ザザザザザ・・・ツツ!!

現存する全ての機体を凌駕する圧倒的なスピードで駆けるロクシヨウ。これほどの速さ、捉えられる者は地球のメダロットには存在しない。

「ハッ!! 確かに速えな。まだまだ見えるレベルだけだよお!!」

しかし目の前にいる男は地球の者ではない。彼の愛機・アワリティアは容易くロクシヨウを捕えた。

「ッ!!」

「速さと切れ味が自慢のロクシヨウも形無しだなあ。こうなった以上ロクシヨウとアワリティアの力比べになるが・・・ま、結果は見えてるな。」

ロクシヨウとアワリティア。組み合いに持ち込んではいいるが、

「・・・」

「ぐう・・・つつ!!」

パーツとティンペットが悲鳴を上げながら、徐々にロクシヨウが組伏せられていく。

「アツハハハハアツツ!! どうしたんだ、さっきまでの威勢は!?! まさかこれでおしまいとか言うなよ?」

「…………つく!!」

「ああ!？」

「アツハツハツハツハツハ、アーツハツハツハツハツハツハアツツ!!」

今度はユウトの爆笑が轟いた。

「これで、終わり?ククククク……!!まだまだ始まったばかりじゃん。それよか俺ガツカリだよ。『悪魔』ってこんな弱いっけ?」

「な、に?」

ユウトの言葉の意味が理解できない。むしろ圧されているのはロクシヨウだというのに…………

「めっちゃ短い時間だったけど芝居はもういい。もうデータ取れたる?」

「無論だ。俺を誰だと思っている?貴様のパートナーだぞ。」

「ヘッ、そうだな。…………んじやいぜ。ユネを苦しめた奴だ。遠慮はいらない。」

「承知したぞマスター。」

その言葉で、

「何いつ!？」

アワリティアからロクシヨウは解放され、5m程の間合いでロクシヨウが構えていた。いや。その言い方は正しくない。消失していたのだ。アワリティアの手首から先が両腕とも。

「アワリティアの装甲を切り裂いただとっ！？いや、それ以前に・・・」

一体いつの間に？圧倒的な力を持つ『悪魔』たるマモンとアワリティアですら斬られた瞬間どころか腕を動かす仕草も、いつの間にかこれほどの間合いをとったのかも分からなかった。

「なんかイレギュラーが起きない限りもうアワリティアじゃロクシヨウに勝てない。あんたらの攻撃位ロクシヨウは全部かわせるし、なによりもうアワリティアのデータは調べ終えた。」

淡々とそう告げるユウト。その目と声は嘘を言っている訳でないことを物語っていた。が、

「何勝手ほざいてんだガキい。アワリティアがロクシヨウとまともにぶつかったのは精々一、二回。それ以外にデータ取らせるような真似はさせてねえ。たった一、二回の攻防でデータはとった？笑わせんな。大体そんな力はこの星のメダロットには存在しねえ。」

真っ向から否定し鼻で笑うマモン。

確かにどんな実力者でもたった一、二回の攻防でデータを完璧に取ることなど圧倒的な実力差でもない限り不可能だ。そして現存するメダロットに相手のデータを記録するメダロットは全くいないわけではないがほとんどいないし、ましてや戦闘も出来るなど珍しいを乗り越えて最早いないだろう。しかしユウトは・・・

「まあ、お前らが知ってるようにロクシヨウのレアメダルとしての力は『全てを切り裂く圧倒的な切味』だ。速さもデータ収集能力もロクシヨウの分野じゃねえ。事実そついうのに特化した奴を一人知ってるしな。」



淡々と言葉を紡いでいる間も一切隙を見せない。それどころか、

「だが現に俺はアワリティアの性能は完璧に把握した。見るよ。」

ユウトに促されマモンは今まで注意を外していたロクシヨウ達に目を向ける。

「シッ!！」

ザザザザツツツ!!!

『悪魔』の愛機であるアワリティアの性能はとても高い。並のメダロットはおるかレアメダル相手でも優位に立てるだろう。しかしそのアワリティアは今

「ゲツ……ガアアア!!!」

その体を切り裂かれ続け、今や防御が精一杯だった。

「が、ガキ……テメエこれはどういうことだっ!？」

「どうもこつも見たまんまだろ?力を持つてると勘違いしてた雑魚の愛機がお前らを倒すためにメダロットを辞めた男の愛機にやられてんだよ。」

その言葉に、

「メダロットを、辞めた?まさかお前は……!?!？」

「どっかの漫画のヤラレ役みたくデータが全てとは言わないけどさ、けどデータで計れない強さなんて出せるのは本当に強いイッキみたいなやつなんだよ。そういうタイプじゃないお前がどんな奥の手隠してるかは知らないが、これで終わりだ。」

最後の言葉を聞きロクシヨウは最後の一撃を放とうと……

「 汝は強欲者。全てを己が物としても、それでもまだ満たされない……」

声が、否歌が聞こえた。何も知らない者が聞けば美しいと感じ、その声に聞き惚れていたことだろう。しかしユウトには死に行く者へ捧げる鎮魂歌にしか聞こえない。

(ヤバイ。これは……!)

知識を持っていたわけでも何でもない。ただ感じた。これはおぞましく異怖すべきものだ。

「 奪って奪って、満たされるまで奪い続けよう。この渴きを潤すために、全てを壊してしまおうとも……」

「 退けっロクシヨウ!!なんかヤバイッ!!」

「 言われなくとも……っ!!」

ロクシヨウもアワリティアから離れる。このおぞましき歌の主マモ



一つの答えに辿り着きコウジは走りだした。

「ちょっとコウジ君!？」

「すぐ戻るっ!お前は先に宿に戻れっ!！」

「えっ、ち、ちょっと!！」

同刻、荒れ地

「今のは……………ユウトか？」

走るのを止めてカラスが呟く。とりあえず自分をしつこく追い回していたロボットル馬鹿を倒し、イツキ達と合流しようと休み休み走っていたのだが、

「ユウトだけじゃない?この感じ……………ミュータント。それも『悪魔』か……………」

コウジとは対照的に冷静に状況を分析する。

「さて、あいつは『悪魔』をひどく憎んでいた以上助けを必要としないだろうな。だが……………」

先ほどから感じるこの感じ。果たしてユウト一人で……………

「あいつなら大丈夫だな。」

あっさりそう結論する。退院してから大会前日まで行動をともにしていたカラスはイツキ以上に彼の強さと覚悟を知っていた。普通のロボットならいざ知らずことレアメダルの力を引き出したのロボットではユウトが圧倒的に強い。故に余程のことが無ければ遅れを取りはしないだろう。

「それより上手くいけばイツキ達と合流出来るか。」

結局カラスも叫び声が聞こえた方向に向かうことにした。

「これは……」

同刻、浜辺でカイもまた異様な気配に気付いた。

「どうかしたのかイ君？」

隣に歩くのはアリカ。何故か分からないがアリカはこの感じに気付いていないらしい。だがそれで正解かもしれない。アリカが気付いたところでどうこう出来るレベルではないからだ。

「いや、何でもないよ。」

一人ならば彼もまた向かっていたことだろうが、アリカを巻き込ませないためにあえて無視した。

「っ!?!? な、何……!?!?」

「カリンちゃん!?!?」

同刻。時折襲ってくる参加者たちをけちらしながらイツキ達は町を歩いていった。しかしこのカリンの様子は一体?

「っ!?!? これは……!?!?」

だがすぐにイツキもなぜなのか分かった。一番初めに自分達がいた場所。そこから何とも言い難い難い気配が出てきているのだ。そして微かに聞こえる叫び声。

「……ユウトっ!?!?」

何故かは分からない。だが自分の友達が今危険だと分かった。

「嫌、嫌、嫌、嫌、いやあっつつつつつ!?!?!?!?!」

「カリンちゃんっ!?!?」

何が起きたのかカリンは叫びながら気絶した。

「一体何が……」

「イツキ君!?!?」

そこへ聞き慣れた声が聞こえてきた。

「ハチロウっ!!」

「ハア……ハア……こ、コウジ君とはぐれちゃって……良かった〜イツキ君に会えて。」

息も絶え絶えにハチロウが心底安心したように笑う。

「ハチロウちょうど良かった!!カリンちゃんをお願い。」

「えっ?カリンちゃん!!イツキ君と一緒にいたの?でも何で倒れて……」

「後で話すよ。とにかく頼んだよ!!」

「ええっ!?!ちよつとイツキ君まで……!!」

何かハチロウが言っているが、それどころではない。

(ユウト……!!)

今危ないであろう友達の元へイツキは急いで向かった。

「は、ハハハハハハッツツ!!!なんだよこれは……!?!」

第一声は笑いを含む驚きだった。目の前にいるその余りの現実味の無さに最早笑うしかなかった。

「よお……まさかこんなところで真名唱えることになるなん

「ざ考えてなかったぜ。」

先程までアワリティアだったその上にマモンは立っていた。

「ヨルムガンド。こいつが本当の俺の僕だ。ま、お前らが言つところのメダチエンジってやつだ。」

「っざっけんな!!原形留めてねえどころかでかさが違いすぎるだろうが!!」

ユウトの叫びはもつともだった。目の前にいるのは短く見積もつても体長15mはあるだろう巨大な黒い竜のような大蛇だったのだから。

「そうかあ?ならメダモルフオーゼってことにしようや。」

「誰が上手いこと言えって言った……..よっ!!」

「ザッ!!」

先手必勝。決断も早くユウトはロクシヨウを向かわせる。

「斬っ!!」

渾身の力を込めてロクシヨウが切りつける!!が、

「言い忘れてたがよお。」

その長い尾によって体ごと弾き飛ばされた。



「ガアッ!!」

「ロクシヨウ!？」

「真名を明かした『悪魔』の僕の力は、明かす前より10倍は強くなってるぜ。」

実際にその通りかもしれない。現にロクシヨウはかなりの傷を受けている。とはいえ咄嗟に避ける行動をとったのでダメージも少し抑えられたが……

「まともに受けるとやばいよな？」

「そうだな。メタビーやG・Oデスならともかく、俺はスピードタイプだ。パーツ自体の装甲は高くとも『なぐる』と『がむしゃら』行動ではあまり意味を成さないしな……」

悔しそうに言うでもなく答えるロクシヨウ。確かに格闘行動が主なロクシヨウではこいつの攻撃を受けすぎるのは危険だろう。

「つつてもなあ。攻めなきゃ勝てねえし、攻めすぎたら防御がおろそかになってバーンだし……」

実際これ程強力な相手になった以上、攻めすぎて避けられない防げないなんてことはかなり有り得る。

「俺のスピードでいつまで避けられるか……せめて話に聞くスミロドナット程の速さがあれば……」

「オイオイ、そんだけ速くてまだ足りないのかよ？」

思わず苦笑してしまう。実際ロクシヨウの速さはずば抜けている。これ以上の速さは余程でもなければ必要ないだろう。

「まあ、今がその余程かもな……」

「おいおいおいおいっ！っ！いつまでくっちゃべってりゃあ気が済むんだあ！？さっさと立てや。俺は雑魚なんだろう？俺を八つ裂きにしてくれんだろう！？」

痺れを切らしたのかマモンが声を荒げる。確かに少し余裕を見せすぎたな。

「最初のあまりの弱さに当初の目的忘れてたな。んじゃ、そろそろ……」

「反撃か？」

「ああ。つっても『ドークス』のパーツじゃあ今のこいつに勝つのはムズい。だから……」

そこで言葉を切りロクシヨウを見る。

「あれ、かますぞ。いけるか？」

「時間はかかるな。最悪、頭と右腕だけは死守しよう。」

「頼むぜ。こいつに秘密兵器は使いたくねえからよ。」

その言葉に頷き、ロクシヨウは再び駆けた。

## 第24話：奥義発動！！

「ハアアアアッ！！！」

巨大化したアワリティア、『ヨルムガンド』に向かってロクシヨウが剣を突き立てる。しかし

キインツッ！！

「っ！！！」

「ハッハアッ！！ヨルムガンドにその程度の攻撃が効くかよおっ！！！」

ヨルムガンドの装甲はロクシヨウの剣を阻む。確かにアワリティアよりも遥かに硬い。

「離れるロクシヨウ！！！」

ユウトの指示は早い。ヨルムガンドが行おうとしている攻撃が危険だと分かったためだ。それに従い全力でロクシヨウがその場から離れる。

「いい判断だガキ。と、言いたいが甘かったなあ。その程度じゃヨルムガンドの攻撃は避けきれねえよ。」

「何っ！？！」

「見せてやるよ。ヨルムガンドの真の力を！！！」



「な、何が起きたの？何か黒いのが見えたけど。」

「どうやら相当ヤバイことになってるみたいだぜ。見てみるよ。」

メタバビーが促した方向を見てみる。そこには何も無かった。その一帯だけが元から何も存在していなかったかのように消失していたのだ。

「下手すりゃ巻き添えになってたな。」

メタバビーがしみじみと呟く。だがイツキにそんな余裕はない。ユウトは果たして無事なのか？

「急ごうメタバビー！！ユウトが心配だ！！」

「確かに。これはヤバすぎる相手だな。」

その様子を見てイツキ達は先を急いだ。

「ゲホツゲホツ……！！うえ、砂埃吸い込んだ。ロクシヨウ無事か？」

「……全てのパーツが壊れかけている状態を無事と言うならな。」

奇跡的に難を逃れていた。彼らの目と鼻の先の光景は消失していたが。

「マジでギリギリだったな。さすがの俺も予想外だわ。」

圧倒的な力を見せつけられて尚、ユウトは余裕を見せていた。

「見たか？これがお前らの言うところの下種の力だ。」

「……言ったのはユウトだけだな。」

「てんめっロクシヨウ！！今更良い子ぶんのかよ！？」

「事実だろう……」

マモンの言葉からいつヨルムガンドの攻撃が始まるか分からないというのにユウトとロクシヨウには焦りも危機感も見えない。その様子にマモンの苛立ちがさらに募る。

「オイ。さつきから何余裕かましてんだテメエら。まだ実力の差が分かってないみたいだなあ……！！」

完全に舐められている。目の前で笑う一人と一体は自分はおるかヨルムガンドも見てはいない。だが、

「……ロクシヨウ、どんな感じだ？」

二人は余裕を見せているわけではない。虚勢を張っているというわけでもない。マモンの性格を利用し、攻撃に正確性を無くさせるための芝居。そしてさらにそれを利用してこいつらを倒すための準備をするため。

「……6割、といったところだな。もう少し早められないか？」

「お前ほどじゃないとはいえ、こっちも命がけなんだがな……」

ま、やってみる。だからお前は……」  
「皆まで言うな。承知している。」

そう言つて二人はマモンに向き直る。

「待たせたな。漫才休憩は終わったから再開しようぜ。」

無論態度はふざけたままだ。全てはマモンを怒らせ冷静な判断をさせなくするため。

「ガキ……。テメエあの時一回限りの地獄じゃあ身に染みなかったみたいだな？」

そして予定通りマモンの怒りはさらに募る。

(もっと怒れ……。お前が怒れば怒る程俺たちの勝ちが近くなる……!!)

「もういっぺん見せてやるよ……。地獄をなあつっ!!」

そして主の怒りに呼応するようにヨルムガンドはまた動き出した。

『ギイヤアアアアアアアアアアアアアア!!』

「ロクシヨウ!!」

「ハッ!!」

ユウトが名を呼ぶと同時にロクシヨウは高く跳躍する!! 狙うは頭。

「あまり好きではないのだが……な!!」

落下するときの重力を利用して、右腕のソード、頭の索的能力に続





それだけでなく……

「クツ、判断を誤った……!!」

脚部パーツが破壊されていた。ただでさえロクシヨウのような格闘タイプは一撃貫えば大きなダメージを受ける。それが『がむしゃら』行動を行った後だったため通常以上の威力となる一撃となってロクシヨウの体を襲ったのだ。

「クハハハハ!! さすがのロクシヨウも形無しだなあ。その足じゃあ、もうさつきみたいに逃げ回れねえだろ？」

マモンの哄笑が響く。その通りだった。普通のメダロットよりはまだ速いが、少なくとも今までのようにヨルムガンドの攻撃を自由に避けるなんてできないだろう。

「フム。確かにそうだが……」

しかしロクシヨウはすぐに態勢を立て直す。

「まだいけるな……それにあと2割といったところか……」

脚部は壊されたが、それでも行動さえ誤らなければヨルムガンド程度の攻撃ならまだかわせる。それにまだ自分の右腕は壊されていない。

「まあ、メダチェンジしていなかったのは失敗だったが何とかかな。」

「はあ!？」

「ではもう一度行かせてもらおう!!」

ザツと今度はヨルムガンドの死角から攻撃を開始する。

ザザザザザザザザ・・・!!!!

斬って斬って斬って斬って斬りまくる。上段切りから逆袈裟に。横切りから突きに。ありとあらゆる角度から目にも止まらぬ斬撃を繰り出す!!

キンキンキンキンツツ!!!!

弾かれても、通用しなくともひたすら斬りつける。索的を利用し、最もガードが薄い箇所へ・・・

「甘えっ!!」

ガッ!!

再びヨルムガンドの尾がロクシヨウを襲う!!しかし、

「やはりな。」

ロクシヨウはひょいと飛び上がって避ける。

「元々パワータイプだった貴様だ。それほどの巨体になった今、先程の全体攻撃か今のような尾を振りまわす攻撃しかあるまい。ならばその二つのどちらが来るかさえ読めれば脚部が壊れていようと普通に避けられる。」

「へえ………」

その言葉にマモンが眼を細くする。

「ならかわしてみろよ。」

ニヤリと笑ったのと同時、

「!?!」

ブワアア!!!

ヨルムガンドの口から何か煙のようなものが放たれる。

「クツ……!!これは……!?!」

「『悪魔』の僕がそんな単調な攻撃しかねえと思ったのか？馬鹿が。テメエはあのクソガキと違ってマシだと思ってたんだがな。」

身の危険を感じロクシヨウは攻撃を止めてヨルムガンドから離れた。しかしほんの僅かな煙がロクシヨウに触れてしまい……

「ガアアアアツッ!!!」

ロクシヨウは絶叫を上げた。よく見ればロクシヨウの左腕が骨組みたるティンペットごと溶けている。

「今のは……毒か……!?」

「そうだ。俺たちの僕がこの星のメダロットの常識に縛られるわけねえだろう!? こいつがヨルムガンドの真の能力の一つだ。『闇の奪い手』はちいっとばかり強すぎて多用出来ねえからよお。骨のある相手の中でも俺達に拮抗するような相手にしか使わない特別な力だ。光栄に思え。」

確かにこの毒煙は危険だ。煙に触れたものは木も草も、そしてメダロットのティンペットすらも溶かす。もしこんなものをユウトが受けたら……!!

「はっ!? ユウトッ!」

しまった!! ヨルムガンドの攻撃から逃れるのが精一杯でユウトに気が回らなかった。そう思いユウトがいた場所を見る。

「あ……」

そこには既に大量の毒煙が充満していた。木々も草も地面もその毒に侵され、溶解していく。

「なんだ、あのガキそこにいたのか? テメエに集中しててすっかり忘れてたぜ。悪かったなあ!! あのガキはもう、お終いだ。アーツハツハツハツハ、アーツハツハツハツハア!!!」

ロクシヨウは何をするでもなくそこに立ちつくしたままだった。そ

の顔は俯いている。

「なんだあ？ご主人様がなくなった途端ダンマリかよ？ヤル気が失せちまったのかあ？」

「・・・・・・・・」

ロクシヨウは答えない。だが諦めたとしても無理はない。自由に動き回るための脚部パーツは破壊され、毒を浴びて左腕と頭の角の一本は無くなっている。まともに使えるのはヨルムガンドに通用しなかった右腕の剣唯一つ。しかも余りにも素早すぎ被弾率が低かつたせいで、ダメージは大きいものの必殺技たるメダフォースを放つためのエネルギーも溜まりきっていない。おまけにロクシヨウのパートナーたるユウトはいない。これ程の悪条件が揃っている以上、ロクシヨウに勝機はない。

「以外と呆気ねえ幕切れだが仕方ねえな。そろそろテメエのメダル頂くぜ。」

少々悲しげにマモンは呟く。ヨルムガンドを使わせたとはいえ、こいつらも所詮は口だけのザコだったか・・・・そんな思いが彼を失望させていた。数年前に、そして今さっき見せたあの少年の目に強い決意を感じ期待してしまっていたために、彼への失望はとても大きかった。

「・・・・・・・・あばよ。期待外れだったが、テメエのレアメダルはありがたく頂かせてもらうぜ。安心して死ねや。」

ブウンッ！！！！

呆気なく、本当に呆気なく、まるで赤子を撫でるような調子でヨルムガンドの尾がロクシヨウに振り落とされた。

「……………残念だったぜ。もう少し楽しめるかと思ったんだがな……………」

残されたマモンの心には空虚さのみが残っていた。最早この大会に強者はいない。例のベルフェゴールが気に入っていた少年やベルゼブブを倒した少年、そしてツインレアメダルの使い手も、恐らく彼に満足を与えてはくれないだろう。そう思ってしまうほど彼は神田ユウトとロクシヨウに失望していた。

「あいつらの言う『あれ』っていうのは見たかったがな……………そうすればもう少し楽しめたのか？」

答える声はない。その場に立っているのはマモンとヨルムガンドだけなのだから。

「もう忘れるか……………ヨルムガンド、そいつを溶かしてレアメダルを……………」

異変はその後。

『グウウウ……………?』

ヨルムガンドが唸っていた。尾を振り下ろしてから微動だにしないヨルムガンドだが、急に体を震わせて唸り始めた。いや、唸っているというより何かに脅えているのか？







「ま、条件はようやく揃った。お前らの負けだよ。」  
「何?」

「今度こそ、な。ああそうそう。大切な相棒を失くしたくないなら30秒あげっからその間に逃げることを勧める。」

そう言うてあるうことかその場に座り込むユウト。……どうやらこのガキは本当に自分を怒らせるのが好きらしい。

「さつきからテメエは……成長したのは口先だけか!?!」

「ハイ10秒経過。」

マモンの怒りも気にせず呑気にカウントしている。その様子をロクシヨウも黙って見ているが、表情が分かるのなら呆れ半分面白半分な顔をしていたことだろう。

「ザコが!! テメエに期待してたことがバカみたいだぜ……!!  
!! レアメダル置いてとつとと消えろつ!!」

ブワツと体勢を立て直したヨルムガンドの口から毒煙がユウトめがけて放たれる。

「悪いが……」

ブオツ!!

しかしロクシヨウが前に立ち、超速の斬撃から生み出される風が毒煙を吹き飛ばす!!

「それはもう通じない。最も通じたところで意味はないんだが・・・」  
「クソがつ!! 使えない僕だ・・・!! もういいつ!! レアメダ  
ルごと消し去って・・・!!」

ヨルムガンドを罵り最早見境が無くなりかけたマモン。そんな様子を見てユウトがゆっくりと立ち上がる。

「・・・時間だ、30秒経過。」

その言葉と同時に、ユウトの体もロクシヨウと同様に光りだした。

「やっぱお前ダメだわ。メダロットのこと何も分かつちやいねえ。」  
「ああんっ!?!」

今のマモンにはどうでもよかった。ユウトの体が光っていることも、ロクシヨウの力が更に増大していくことも。今の彼にあるのはただただ巨大な怒りだった。

「ガキが説教垂れてんじゃねえっ!! ヨルムガンドツ!!」

叫びヨルムガンドも力を溜め始める。それは先ほど放ったあの大技。

「お前じゃ絶対俺には勝てないよ。・・・ロクシヨウツ!!」  
「いつでもいいぞ。」

応えロクシヨウの体が沈み必殺の構えをとる。その姿は縦一閃を放つときに酷似しているがどこか違う。





第24話：奥義発動！！（後書き）

どうも久しぶりの蒼騎士です^^ようやくパソコンが直ったんでよ  
うやくペース取り戻せるかも？

さて相変わらず下手な戦闘シーンなんですが如何でしたか？かなー  
ー！ー！最後のほうですがユウト達の奥義炸裂です！！オリジナル  
技です！！しかあし、この後とんでもない展開が・・・前々回  
の前・後書きを見た後も最後まで付き合ってくれる方々！！ありが  
とうございます！！楽しませますよー！！

## 第25話：秘密兵器

「あらら、マモンの奴やられちゃったわねえ。」

そこは砂漠。大会予選のフィールドの一ステージではあるが、そこに佇むものはどこか妖艶な女性のみ。他には一人いなかった。が、彼女は遠く離れているはずのマモンとユウトの戦いをすぐそばで見ているかのように言葉を紡ぐ。

「頭に血が上り過ぎっこともあるんでしようけど……それでも真名を解放したアワリティアを倒すなんてね。そんなことが出来たのはゼロ様やルシファーくらいだったんだけどねえ……」

クスクスと笑う女。その姿を誰か見ていたら性別問わず心を奪われていただろう。しかしこの女はその美貌の中に危険な毒を持つ人ならざるものだった。

「それにしてもあの子達男らしくなったわね。思わず私だけの物にしたくなっちゃう。ルシファーが気に入ってたのも分かるわあ。」

神田ユウト。そしてマザー自らが作った中でも幻と呼ばれるレアメダルの一つ、クワガタメダルを宿したロクシヨウ。

「……これで見つてられるわけないわよね。」

そう一人ごちるとその女・アスモデウスは何の手品かその場から消えた。

「痛っ……!!」

ヨルムガンドを倒した後、ユウト達はその場に座っていた。『悪魔』と彼らの象徴ともいえるメダロットは何か繋がっているのか、マモンは今気を失っていた。

「……やっぱ零牙出すのはきつかったかなあ。」

「当然のことを言うな。仮にも奥義だぞ。」

呆れたように言うロクシヨウ。彼はユウトの怪我を治療しているところだった。

「もう『ドークス』で同調するのは止めたほうがいいな。フォーバイス、もう使えないだろ?」

フォーバイスというのはロクシヨウの右腕パーツの名前だ。鋭い剣で相手を斬り裂くのだが、今は刃が粉々に砕けて最早修復も不可能になっている。

「俺はメダルさえ残っていればなんともなる。パーツの予備もあるしな。だが……」

そこで言葉を切る。

「貴様は生身の人間だ。いくら頑丈でもお前は普通の人間なんだ。」

同調はメダロットだけではなくパートナーにも影響を及ぼす。俺にとって大したことのないダメージもお前にとっては重症になりえるということをお忘れな。」

「ああ……分かってる。」

今回は少し遊びすぎた。無駄口を叩かずすぐに倒していればこんな状態にも奥義たる零牙を見せることもなかったらう。

「ま、今回はさすがに反省だな。いや、奴らに奥の手があると分かっただけでも儲けもんか……？」

「バカに何を言っても無駄か……。」

半ば諦めた声でロクシヨウが呆れていた。

「よし、こんなものだろう。最も、ちゃんとした場所で治療を受けたほうがいいだろうが……。」

「いんや充分だ。サンキユ。」

グツと体の調子確かめて立ち上がる。

「じゃ、ちよつと待ってるよ。今からお前のパーツとティンペット交換しなきゃな。」

「それよりもこいつはどうする？」

ロクシヨウが倒れているマモンを指し示す。

「この男は放っておけば必ず俺達を襲うぞ。ならばいつそ……」「負けた相手をどうするかは勝者が決める。放っておこうぜ。こいつの機体は壊したしな。確かにユネに手を上げたみたいだけど俺達が倒さなきゃいけない奴は別にいる。」



「しかし……!!」

「俺はともかくお前にそんな真似させらんねえよ。お前は兵器じゃない、やるとしたら相手は別にいるしな。」

そう言ってその場を後にしようとしたとき、

「おろ?」

「はあっはあっはあっ……ユウト!!」

森の向こうから見知った顔が出てきた。

「おー!! イツキじゃん!! なんか久しぶりだな〜ちゃんと生き残ってたか〜」

「無事で何よりだ。」

「久しぶりじゃないよ!! 二人ともボロボロじゃないか……!!」

二人の姿を見てイツキが取り乱した。

「それよりも二人とも大丈夫なの!? 『悪魔』が出たんじゃ……」

「ああ、それならホレ。そこに倒れてる。」

そう言ってマモンを指で指し示す。

「え? じ、じゃあユウト勝ったの!??」

「当たり前だろ。じゃなきゃこうしてお前と話してないっつーの。」

ニツと笑ってイツキを安心させる。どうやらかなり心配していたようだ。

「よ、良かった〜・・・心配したんだよ？」  
「悪い悪い。って立ち話もなんだしここから離れようぜ。こいつが目覚ましたら面倒だし、ロクシヨウの補修しないといけないんだ。」  
「う、うん!!」

「イツキ!?!」  
「どうやら二人一緒だったようだな。」

森を抜けて出た場所は山頂。その脇にある一般通路からコウジとカラスが駆け寄ってきた。

「コウジ!?カラスも!!」  
「お、なんだなんだ?」

イツキは嬉しそうに、ユウトは少し困惑した様子で二人を出迎える。

「なあ、『悪魔』は!?出たんだろ!?!」  
「俺達は何か大きな力を感じてここに来たんだが・・・お前らもか?」

二人はイツキにそれぞれの質問を投げ掛ける。

「うん。僕も何か大きくて危ない気配を感じたんだ。やっぱり『悪魔』だったみたいだよ。」

「そ、そいつはどうなったんだ!？」

『悪魔』という言葉聞き、物凄い剣幕でコウジが問いつめる。イツキが考えている以上にコウジの『悪魔』に対する思いは大きいようだ。

「えーっと……俺達が倒しちゃったんだけど……」

今まで少し困惑気味だったユウトがおずおずと手を上げる。

「え？あんたが？」

「……何かスマン。」

イツキにはかり目がいつていたせいかユウトに気が付いていなかったようだ。ユウトもそれが分かったのか、どこかバツの悪そうな顔をしている。

「やはりお前か……負けるとは思ってなかったがポロポロだな。ロクシヨウも、メダロットとしての原型留めてないな。」

「ハハッ、ちょっと遊び過ぎてさ。でもまあ比較的軽い方だ。腕も折れてないし、ロクシヨウも最悪メダルしか残らないの覚悟してたから。」

「成程な。」

親しげに話すカラスとユウト。そういえばこの二人が一番長く一緒にいたんだよな。

「えっと、確か神田ユウトだっけ？あんたらだけで『悪魔』を？」

あまり接点を持たないためか少し緊張気味に話しかけるコウジ。ユ

ウトは暫く見定める様にコウジを見た後、

「ま、あいつらとは何回か戦ったこともあるし比較的やりやすい相手だったからな。あとコウトでいいよ。俺もコウジって呼ばせてもらうからさ。」

晴れやかなまでの笑顔を浮かべてコウジに答えた。

「最初に見定める様に見たことは謝るよ。他の二人はともかくコウジとはほとんど初対面だったから。癖なのかどうも初対面の相手はそんな風な目で見ちゃうんだ。」

「ああ、別に気にしてねえよ。俺もそうゆうのはたまにあるから。」  
別段気にするでもなくコウジも笑い返す。どうやら二人とも打ち解けたようだ。

「ところでお前らだけで来たのか？」

「どういふことだ？」

「いや、他に連れがいるのかなあって。」

コウトの問いに何の意味があるかは分からない。カラスもコウジも頭の上に疑問符が浮かんでいた。

「変なヤツが途中まで追い掛けて来たがそれだけだ。まあそいつは倒したし、他にはいないな。」

「変なヤツ？」

「………何も聞かないでくれ。」

いつになく深刻そうな顔をしてカラスが呟く。何も思い出したくないという態度だがそんなに嫌な相手だったんだろっか？

「俺はハチロウって連れがいる。けど今は町エリアにいるはずだ。」  
「ああ、それならみかけたよ。今はカリンちゃんと一緒のはずだ。」

コウジの言葉にイツキも肯定する。

「カリンって確かこの前の女の子だよな。一緒にいたのか？」

「うん。でもさっき突然倒れちゃって……だからハチロウに任せてきたんだ。」

「倒れた？」

コウジの疑問にイツキが頷く。どこか心配している以上の感情が見えたのはコウトの錯覚ではないだろう。

「それは心配だな……けど逆にありがたい。」

「どういうことだ？」

カラスが当然の疑問を挟む。

「言い方が悪いのはスルーしてくれ。けどレアメダル所持者しかない間にやっておきたいことがあるんだ。」

「レアメダル所持者しかない間について俺もか？」

コウジは驚いていた。それもその筈、彼はここにいる誰とも違うレアメダル所持者なのだから。

「まさか……あれ』が完成したのか!？」

カラスは何か思うところがあるのか別な意味で驚いていた。

「ああ、そのまさかだ。本当なら本戦で渡すことになると思っただけだな。手間が省けた。」

驚きを隠せないカラスに笑いかけ、ユウトは頑丈そうで綺麗に輝く箱を4つ取り出した。それぞれ赤・銀・金そして青の四色に色分けられている。

「これがイツキの。んでこいつがカラスのな。そして最後にコウジのぶん。」

赤い箱をイツキに、銀の箱をカラスに、そして金の箱をコウジに渡す。カラスはどこか確かめる様に箱を見つめているがイツキとコウジにはさっぱりだった。

「ユウト、これ何？」

「只の高そうな箱……じゃあ無さそうだな。」

イツキとコウジはユウトに問いかけた。只の箱をユウトが渡すわけがないので何か意味があるはずだが……

「ああ、そっかそっか。お前らには言っただけな。こいつはな、アトムさんとナエさんが設計して、俺の手で完成させた秘密兵器だ。」

「博士やナエさん。そしてユウトが作った秘密兵器？」

頭に疑問符が浮かぶ。秘密兵器が箱？

「その箱はメダロッチを応用したもんだ。俺がお前らに託すのはその中身。」

コンコンと自分の青い箱を叩き説明するユウト。

「中身って？」

「パーツ。それもレアメダル用の、だ。」

答えたのはユウトではなくカラスだった。いつになく声を弾ませているように聞こえるのは気のせいではないだろう。

「レアメダル用のパーツだと？」

「ああ。それもかなり強力な。」

意外そうなコウジに対し、どこかユウトは面白そうだ。

「『悪魔』に対抗すべく最新の科学技術と天才的な科学者達が結集し、それらが生み出した俺達のレアメダル専用パーツだ！！」

「バーンッ！！と効果音でも聞こえてきそうな勢いだ。しかしイツキ達が驚いたのはそこではない。

「レアメダル専用！？」

「ああ。正確に言えばレアメダルの力を使うことを前提とした、だけだな。俺達の使うパートナーメダロットの特徴を受け継ぎ、レアメダルの力を合わせることで圧倒的な力を引き出せるパーツ。普通のメダルでも使えないことはないが……それはパートナーを殺すことに繋がりがねん。」

この箱の中にそんな危険なパーツが……

「なんでこんな物を？ユウトだってレアメダルの危険性は知ってるだろ。下手をすればメダロットが兵器になりかねない代物じゃない

か!？」

「おい、イツキ。」

思わず声を荒げるイツキをたしなめるコウジ。イツキとて今自分達が危険な戦いに身を投じているのは分かっている。だがレアメダルの力を利用してメダロットを兵器のように扱われかねないことは納得出来なかった。

「……お前の言いたいことは分かる。けどなイツキ。『悪魔』と戦うためにはレアメダルの力を最大限発揮出来ることが最低条件なんだ。さっきの戦いで改めて痛感した。」

「けどっ!!！」

「軽いノリで紹介したのは悪かった。さっきの戦い、最後は結構きつかったからちよつとテンション上げてかないといけなかったんだ……」

あんな風に紹介したけど、もちろん俺だって出来ることならこいつを使わないに越したことはないって思ってる。けど『悪魔』の真の力は俺の想像を遥かに超えてた。かなり倒しやすい敵だったのに口クシヨウがここまでボロボロにされたことも、まして奥義を出すことになるなんて思わなかったからな……。断言するぜ。いくらレアメダルの力に覚醒しようとも既存のパーツでは『悪魔』には勝てない。特にイツキとコウジはまだ奥義にも辿り着いてないんだから。」

「……」

納得したわけじゃない。だが返す言葉がなかった。この中で一番『悪魔』を良く知り、レアメダルの力を一早く覚醒させたユウトがここまで言うのだ。つい最近力を覚醒させた自分達がどうこう言える事ではない。



「ま、通常のロボットでは俺とカラスはこいつを使わないけどな。こいつを使うには相手がミュータントであること、またはレアメダルのときだけと決めてる。お前らもそうなんじゃないか？もっとも、メダロットを兵器として使うんなら別だけどな。」

「んなことに使うわけねえだろ。けど『悪魔』相手にこいつを使うとして、周りへの被害はねえのか？」

「それも平気だ。こいつを使うと自分と相手のみに作用するロボットフィールドが出来る。ケリがつくまで外には出れない檻みたいなもんだがな。」

コウジの懸念もユウトはしっかり対策しているようだ。

「ユウト。僕は……」

「そいつをどんな風を使うかはお前次第だ。使いたくないならそれでいい。」

「……分かった。」

出来れば使う日が来ませんように。そう思いつつイッキは箱をしまった。

「話が終わったところで一旦戻ろう。カリンのことも心配だし、コウジも連れを待たせてるんだろ？」

「ああ。行こうゼイッキ。ユウト。」

「うん。」

「ああ、少し待ってくれ。ロクショウウの補修すぐ終らせっから……」

「クソツクソツクソツ．．．．．！！クソオツ！！！！」

誰もいなくなつた森の中。マモンは元に戻り横たわっているアワリティアを見つめながら怨嗟の声をあげていた。

「あのガキイ．．．．．！！そしてロクシヨウ．．．．．！！この俺をコケにしたこと許されると思うなよ．．．．．！！クソがああつつつ！！！！この痛み、奴らにさらなる恐怖と地獄を見せ付けるためにも忘れねえ．．．．．つつ！！！！」

傷が癒えるまでまだしばしの時間がかかる。一応自分はロボットに負けたことにカウントされるのだから、大したことでもない。自分の部下が只のメダロットに負ける訳がないのだから、決勝トーナメントでこの借りは返せるだろう。

「うわあ。本当にボロボロなのね．．．．．手、貸してあげましょうか？」

「．．．．．アスモデウスか。」

突如、先程まで砂漠にいた妖艶な美女・アスモデウスはマモンの前

に立っていた。

「別の場所から見てたけど……完敗ねえ。真名を唱えて負けたなんて。」

「うるせえ……!!この借りは必ず奴らに返す!!今までにない苦痛と恐怖と絶望を与えてな……っっ!!」

「それは無理なんじゃない?」

マモンの言葉にあっさり否定を示すアスモデウス。その顔は笑みで歪んでいた。

「何!?!」

「あんたの部下、もう二、三人しか残ってないわよ。全員レアメダル使いにやられてる。」

「バカな……!?!」

あの少年以外にもレアメダル使いがこの大会に参加しているのは知っている。しかしマモン達『悪魔』の部下はヘブンスゲートを壊滅させたり、おみくじ町で暴れまわっていたミュータント達とは格が違う。ましてやレアメダルの力に目覚めたての連中に敗れるような者たちではない。そんな部下達の中でも選りすぐりに選んだ九人の部下達が後二、三人しか残っていないだと?

「実践レベルで既に戦えるレアメダル使いは一人じゃないみたいね。だから提案んだけど手を組まない?残りのあんたの部下達は私が守って本戦に進めてあげるわ。」

マモンとアスモデウスは別チームとして登録している。それは互いにどちらがより多くの獲物を狩れるかというゲームを楽しむためでもあるが、『悪魔』である自分たちが一緒のチームにいたら狩りが

簡単すぎて楽しくないためでもある。だからアスモデウスの提案は少々意外だった。

「テメエ何考えてやがる……」

「この大会にいるレアメダル使いにはとても興味があるの。そのうち何人かは私が頂かせてもらおうわ。本当ならあの子も貰いたいんだけど……それは本戦の組み合わせ次第、つまりは当たったものの勝ちにさせてもらうわ。」

「……」

マモンは暫し考えた。自分がこの大会に参加したのは多くのレアメダルを一気に頂くためだ。自他共に認める『悪魔』中一番の強欲者としてはこの提案は本来呑むことはできない。しかしこのままでは自身の部下達がやられて本選に進めない可能性もある。今回シフアーから「公式なルールに乗っ取って戦え」と命じられている以上、予選落ちすれば敗者復活戦でもない限り自分は本戦に進めない。彼の命令に逆らえばどうなるか、それが例え同じ『悪魔』でも彼は容赦しないだろう。なにより今の自分にとって一番重要なのはあのガキとロクシヨウを八つ裂きにすること。そのためならば百歩譲って他のレアメダルはあきらめるとしよう。

「……いいだろう。あのガキ以外は知らん。好きにしる。」

「交渉成立ね……いいわ、それじゃああんたはゆっくりしてなさい。ちゃんと本戦には進ませてあげる。」

交渉が成立した以上、マモンを本戦に進めるためには彼の残りの部下を守る必要がある。アスモデウスはマモンに背を向け、

(予定通り……これであの子は私の物……!!)

邪悪な笑みを浮かべてその場から消えた。

「嫌な胸騒ぎがする……………」

遠くで何か嫌なことが起き始めている。それも恐らくは自分たちが大きく関わっているのだろう。

「皆、無事でいてくれよ……………」

倒れているミュータントを見渡し他に敵がないことを確認して、あがたヒカルは駆け出した。

第25話：秘密兵器（後書き）

と、いうわけで25話終了〜！！いやぁどうも長くなりそうです。  
予定以上に長いドラマになりそうです。さてさてようやく次回で予  
選は終了！！物語は本戦に移行します。勝ち残ったチームは！？そ  
して組み合わせは！？それは次回のお楽しみ〜^^ノ

## 第26話：予選終了

「今日を含めあと二日生き残れば本戦に進めるとはいえ……」

ユウトとマモンの戦いから翌日、予選フィールド町エリアのとある宿で食事をとっていたところでハチロウが染々といいだした。

「どうしたハチロウ？」

「いやかなりの人数で行動を共にしてるな〜って。」

箸を進めながらハチロウが溜め息をつく。

「突っ込むなハチロウ。俺達だって予想してなかったことなんだ。」

コウジはそう言うが、ハチロウはなんだか肩身が狭かった。

総勢六人。しかも内三名はメダリンピック優勝チームのメンバーでかなりの実力の持ち主。その筆頭はメダマスターという最高の称号付きだ。そして彼らに匹敵する実力を持つ天空の覇者にして総理大臣の息子。これだけでも豪華過ぎるパーティーだ。ハチロウ自身並のメダロッターとは一線を画する実力だと自負しているが、それでもこの四人と比べると霞んでしまう。

（彼は……良く分からないけど。）

ハチロウは隣でバクバクと凄い勢いで箸を進める最後の一人に目を向ける。

「うめえうめえうめえっ！！うおっ！？何だこの料理は！？昨日も

思ったけど町に飛ばされてたヤツは一日目からこんなに旨い飯を食えたのか!？」

「……落ち着いて食べ。食事中は静かにしろと習わなかったのか？」

「ばっべさあ、ばばす……」

「……飲み込んでから喋れ。」

「ばあっぱ。」

ガツガツガツガツ……

なんだろう。とても凄そうには見えないのに凄いと思えるのは。彼、神田ユウトはイツキの学校に転入してきた凄腕のメダロットらしい。あのカラスともここまで打ち解けている等かなりの大物なだろう。

(それにしても神田か……何処かで聞いたことがあるような……)

ありふれた名字だが、どこか引つ掛かる。いったいこれは……？

「そっぴやコウジ。イツキとカリンさんの姿が見えねえけど、どした？」

「ああ。まだカリンが目を覚まさないらしいんだ。だから今さっきイツキが様子を見に行った。」

「なるモグモグ……ほどなバクバク……」

こうしている間にもユウトは手を休めない。カラスは言うだけ無駄と思ったのか完全に無視していた。コウジもそんな二人の様子を見



て苦笑している。

「けど大丈夫なのかい？ 僕らはチームメイトが揃った以上よっぽどの相手じゃない限り本戦に進めるし、君達も四人中三人が揃ってる。実力の高さは知ってるから君達も本戦に進めるだろうけど……でもアリカさんは一人で行動してるってことだろう？ なまじ強いぶん大変なんじゃないのかい？」

八チロウのその言葉に場の空気が少し重くなる。確かにここにはいつもならイツキ達と一緒にいるはずのアリカがない。もう既に一旦敗北扱いされているのかもしれないが、もしまだ生き残っているとすればかなり大変なはずだ。

「確かに……今回の大会は結構ヤバイやつらも集まってる。アリカちゃんの身に何かある可能性も……」

「ばば、ぼへばばはいぼぶぼ。」

コウジの言葉に対し、ユウトが応える。……口をモゴモゴさせながら。

「……(ギロリ)」

「ばびばび……(ゴクン)ふうーっ!! ええと、アリカちゃんなら平気だぜ。」

カラスに睨まれ飲み込んでから再び答えるユウト。今度はコウジにもはつきり聞こえた。

「大丈夫って何で分かるんだ？」

当然の疑問だ。連絡手段もないのに、ここにいないアリカが無事だ

となぜ言い切れるのか？

「んなもん決まってんじゃん。勘だよ。」

その言葉にカラスを初めコウジ達も黙って食事を進める。

「おい……誰も信じてくれないの？俺の勘は結構当たるんだぜ？」

「お前の言葉を聞いた俺たちがバカだったよ。」

「……さりげなくひでえなカラス。けど本当に大丈夫だって。きつと二人で行動してるだろうし。」

「二人？」

誰かアリカと行動を共にしている者がいるということか？しかし一体なぜ……？

「少なくともこっちから出迎えなくてもアリカちゃんは元気な姿で本戦に来る、絶対だ。賭けてもいい。」

「……何か妙に説得力あるな。」

断言するコウトに自然とそんな言葉がもれる。まあとりあえず彼がここまで言う以上、アリカは心配ないのだろう。

「一つことで飯食ったら行くっぜ。」

『はっ』

コウジとハチロウの声がハモる。何が、というわけでなんだ？いやそれよりも、

「行くってどこに？」

「とりあえず大会参加者がいそうな場所。こっちもそろそろ重い腰上げねえと。」

なんてことを言ってきた。

「つまり他の参加者を潰しに行こう、と?」

「そのとお~~~~~りっっっ!~!~!」

大袈裟な仕草をしながらニツコリ笑うユウト。しかしコウジはどこか納得できなかった。

「待て待て。わざわざ俺達が動く必要はないだろう?別に他の連中を潰してまわることはない。」

「いんや違うね。忘れたのか?本戦に進めるのは何百とあるチームの内、わずか16チームだけ。だが現状残っているのは16チームどころか恐らくはまだ何十とある。このままだと本戦に行くためにめっちゃ面倒なことになるかもしれん。」

「だとしても……」

「それに、」

ピシヤリとコウジの言葉を遮るユウト。

「今回の大会は普通じゃない。ヤバい奴らは倒すに限るし、そうでなくとも本戦に進んで来るであろう敵の実力は把握しておいたほうがいい。そいつが強いとヤル気が出るだろう?」

「お前はそういう状況を利用して俺達、いやコウジ達の実力を知りたいだけだろう?」

「ははっ……バレた?」

軽口をたたいているがユウトのやろうとしていることは正しい。確かにイツキや参加しているであろうヒカルの実力は知っているが他の連中の実力はほとんど知らない。その中に本戦に進んでくるであろう相手がいるならば今の内に実力を量っておくべきかもしれない。作戦を立てて戦うならば性に合わないが、メダマスターであるイツキや二年前彼と同じチームで戦っていたアリカやカリン、それにコウジの実力はかなり割れているのだ。この二年で実力は少し上がったかもしれないが、基本戦法や愛機はあまり変わっていない。対等な条件で戦うならばこちらも相手の情報を調べてようやく、といったところかもしれない。

「分かった。飯を食ったら行くぞ。」

「よしっ！！お前ならそう言ってくれると信じてたぜ友よ！！」

馴れ馴れしくサムズアップなんてコウジに向けてるユウトに最早何度目か分からない溜め息をカラスは吐いた。

「前から思ってたんだが……まだ会って間もないヤツでも気に入ったら馴れ馴れしいよなお前？普段や気に入らない相手には今とは別人に思えるほど無口なくせに。」

「ふっ、カラス。それは俺なりに対等以上の相手として認めてるって証拠だよ。ま、それはいいとして……」

いつもの悪戯っぽい笑みを浮かべて、

「久々に普通のロボットを楽しませてもらうぞ。」

ユウトはそう言った。

「分かった。でもなるべく早く帰って来てよ。まだ目が覚めてないし、僕だけじゃカリンちゃん心細いだろうから。」

「了解だリーダー!!!」

「じゃあ悪いけどカリンを頼む。」

「留守は任せだよ。」

「もし見つかったらアリカも連れてくる。」

口々にそう言っていてイツキとカリンを残してユウト達は外に出た。

「それにしても………」

奇しくも再び二人きりの状況になってしまった。しかし急にカリンが倒れてから一日は経ち、尚目覚める様子は見えないカリンが心配なのでムードなんて全く無いが。

「ただ眠っているだけみたいだけど………」

熱もなければ、どこか悪そうにも見えない。普通に見たらグッスリ眠っている様にしか見えない。だが、

「あの時のカリンちゃん、普通じゃなかった。」

『嫌、嫌、嫌、嫌、いやあつつつつ!!!!!!!!!』

あの時の光景。あの時間帯から考えて、恐らくユウトとロクシヨウが『悪魔』と交戦してたときだ。

「『悪魔』、もしくはユウトがやるうとしたことがカリンちゃんに何か影響を及ぼした？」

確かにあの時感じた気配は並じゃなかった。以前戦ったベルゼブブの扱うグラもかなりの力を持っていたが、あの時感じた気配は強さ以前に何か別の、恐怖や恐れに似ているけど何かが違っていた。

「本当に、何があったって言うんだ……………」

「ん、ん……………」

「っ！？カリンちゃん！！」

うつすらと目を開けるカリン。どうやら目を覚ましたようだ。

「あれ…………？イツキ君？私は……………」

「良かった…………大丈夫？どこか痛いところとか具合が悪いとかは？」

口からマシンガンのようにたくさんの言葉が出てくる。それで心配だったということなのだがカリンは少々混乱しているようだ。

「え？ええ……………」

そしてキヨロキヨロと周りを見回し始める。

「イツキ君。ここは……………」

「あ…………話すと長くなるんだけど……………」

そこでイツキはカリンが倒れてから後の出来事を話し始めた。カリンが倒れた後ハチロウと会ったこと。嫌な予感がしていたのでカリンをハチロウに任せて引き返したこと。そこでコウジやカラス、そしてユウトと合流したこと……

「……では私は丸一日は眠っていたのですね？」

「うん。」

「そうですね……すみません心配をおかけして。」

「いや、気にしないで。それよりカリンちゃんにあのとき何があったの？」

気になるのはそこだった。あの時、一体何がカリンちゃんに起きたのか。

「……イツキ君。もしあなたが大切な友達と争う事になってしまったらどうしますか？」

「えっ？」

カリンの問いは唐突だった。それでいて真剣な……

「カリンちゃん。それはどういう……？」

「あの時、嫌な叫びが聞こえたときに見えたんです。まるで予知みたいに、」

イツキ君とイツキ君の友達らしき人が泣きながら戦っている光景を。

「……」

一瞬何を言われたのかよく分からなかった。僕と僕の友達が戦って

いる？それも泣きながら？

「二人とも泣いていました。何でこんなことになったんだろう。何でこんな悲しいロボットをしてるんだろう。私にはそう見えませんでした。」

その光景を再び思い出したのだろう。カリンの顔は酷く辛そうに歪んでいた。

「ただの夢だよ。気にすることはないよ。」

「でも……!!」

「大丈夫。」

震えるカリンの手をそつと握り締める。

「僕は本当にいい友達に恵まれてる。カリンちゃんはもちろん、アリカにコウジ。ユウト、カラス、ミズチ、ハクマ、りんたろう。それにスバルにマーブラー。他にも沢山。例え喧嘩しても、次の日には笑って仲直り出来る。今までも、そしてこれからも……だからそんな悪い夢のようにはならないよ。絶対にね。」

ニッコリと精一杯の笑顔を作る。カリンを不安にさせないためでもあるが、何よりも絶対にそんな夢のようにはならない自信があった。

「だから大丈夫。ね？」

「……はい。」

ようやくカリンも微笑み返してくれた。後はユウト達が帰って来るのを待つばかりだ。



「あの……」  
「ん？」

カリンの顔が微かに赤くなっている。そしてその視線はある一点に注がれていた。

「ああっ!!」「ゴゴゴゴめんっ!!」

慌てて手を引つ込める。自分でも自然にあんな行動をとっていたとは……!!

「こここれはその、決してやましい気持ちではなくて……だからそのう……ええっと。」

「……クツ。クスクス。」

「へ?カリンちゃん？」

余りにも慌てふためくイツキを見てカリンは笑っていた。

「クスクス……ご、ごめんなさい。でもイツキ君おかしくてクスクスクスクス……!!」

「はははっ!! 本当に何やってるんだらうね僕。」

つられてイツキも笑い出す。よかった。カリンちゃん元気そうだ。笑いながらそう思っていたときだった。

『え〜。皆さん聞こえますか?』

突如上からミスターうるちの声が聞こえてきた。

時刻は少し遡り……

「おかしい……」

「どうしたのカラス君？」

ユウト達一行は他の大会参加者を探していた。だがカラスは突然怪訝そうな顔になっていた。

「やっぱお前も分かるか？」

「ああ。参加者の姿が全く見えない。」

ユウトとカラスは口々にそう呟く。

「え？参加者の姿が見えないのは当然のことだろう？どこかに隠れてる人たちのほうが多いはずじゃない？」

「いや。だとしても静かすぎる。正直どこから不意打ち狙いの連中の気配があると踏んでたんだが……」

そう言いながら周りを見渡すユウト。しかし周りにはユウト達以外誰の姿も見えない。

「なあ。もしかして俺達の読みが外れてんじゃないか？」

「と、いうと？」

「俺達は参加者がほとんど生き残ってると思ってた。けど実際には既に決勝に進めるだけのチーム数になってるんじゃないかってことだ。」

コウジの言葉にユウトはしばし考える。確かに逃げ回ってるやつらばかりとは限らない。積極的に行動し、潰しあっているチームが多くても不自然ではないだろう。しかしこの辺り一帯は人の気配はしないが、それでも先ほどまで大勢の人たちがいたような……

「っ！しまったっ！読みを誤った！！」

「どうしたんだユウト？」

「説明は後だ！！早くこっから離れるぞ！！」

突然叫ぶユウト。彼は気づいてしまったのだ。ここはさっきまで戦闘が行われていた場所で、たった一人と一機に大多数のメダロットが全滅させられたことに。

「『悪魔』の配下の可能性もあるな。」

「ああ。とにかく一旦こっから……」

「悪いが、それは認められんな。」

『っ！？』

驚愕も束の間。

ヒューン……………ドゴオオオオオオオオン！！！！

遠距離から放たれたナパーム攻撃がユウト達に降り注ぎ、辺り一帯を燃やしつくした。

「これで四人リタイア……………結局今の奴らの中にもいなかったか……………」

攻撃の方向から出てきた男はその様子を見て少し落胆した様子を見せた。

「……………ちよつと待てや。」

しかしそんな男の呟きを否定するかのよう炎の中から見える影が四つ浮かんで来た。

「ミュータント以外にも普通に三原則外してるメダロット使っやつがいるとはな。少しびっくりした。」

「ほお……………」

ユウト達は無傷だった。正確には彼らを囲むそれぞれの愛機達によつて守られたのだ。

「平気ですかマスター？」

「悪いなスミロドナツト。助かった。」

「それにしても今のナパーム。三原則を外していることを差し引いても並の威力じゃなかったな。あと一步遅ければ全員無事では済まなかつたらうな。」

カラスは先程の攻撃を冷静に分析していた。あのナパーム、並の威力でないどころかまるで兵器だった。それだけで一つの町を破壊できるかもしれない兵器。そんなものを組み込んでいるメダロットとはいったい……………

「とんだ挨拶じゃねえかおっさん。下手すりゃ死んでたぜ俺達。」

「今の攻撃をかわしきるとは……………久しぶりに見たぞ。貴様たちのような実力者を。かれこれ約十年ぶりか。」

昔を懐かしむかのように虚空を眺める男。その仕草を見てイライラが頂点に達したのかユウトが切れた。

「どうでもいいけどよ……メダロットは人を傷つける道具じゃねえんだよ。んなことも分かんねえ奴が最近多いぜ……！構えるよ。テメエぶちのめして今みたいな真似、二度とできなくしてやる。」

「まあまあそう焦るな少年。名前くらい名乗ったらどうだ？メダロットとして最低限の礼儀は守るべきだと思うがな？」

「メダロットじゃねえてめえみたいいな奴に名乗る名前はねえよ。さっさと構えろ……！」

ユウトは本気で怒っていた。『悪魔』でもない只の人間が三原則を外したメダロットで今さつき行った行動に対してもそうだが、下手をすればこの場にいたカラス達が無事ではなかったかもしれないことへの怒りでもあった。

「くつくつくつく……威勢がいいな。よかろう。貴様に見せてやろう。我がメダロットを……！」

瞬間、

ビーーーーッッ！！！！

極太のビームがユウト目掛けて放たれる……！！

「ユウト……！」

コウジが叫ぶ。しかしその時には既にユウトの姿は無い。

「ロクシヨウ。遠慮はいらない。叩き斬れ!!」

「承知!!」

いつの間にか男の後ろに移動していたユウトの指示を受け、攻撃が放たれた場所へ向かってロクシヨウが駆ける!!

「もらったっ!!」

ヒュンツ!!

高速で放たれた斬撃が敵のメダロットを捉える。が、

ガキンツ!!

「これは……!!?」

「その機体を見た以上、楽には停止できんぞ。」

ロクシヨウの驚愕、そして男の言葉と同時にそのメダロットの目が赤く輝き……

ビイイイイイ!!!!

至近距離でビームが放たれた!!

ドゴオオオオオンツツ!!!

「うわあ!!」

「ハチロウ、こっちだ!!」

余りの大規模攻撃の余波がハチロウ達にも襲いかかる。ギリギリのところでは余波は免れたがもし直撃を受けていたら……

「な、なんなんだあのメダロット!? 一撃一撃の威力が大きすぎる!!」

「ああ。まるでキララさんが使うゴッドエンペラーみたいな……」

シューウウウウウウ……

ロクシヨウの姿が消え、その向こう側からメダロットが出てくる。多脚型だが、もはやメダロットとは思えないフォルム。破壊兵器のような右腕の砲塔と左腕のビーム砲。そして自我の欠片もなさそうな無機質な顔。その正確な姿を確認し、カラスとコウジが驚愕の声を上げる。

「あれは!?!」

「やっぱりゴッドエンペラーなのか!?!」

ゴッドエンペラー。それは数年前メダロット博士に並ぶ天才科学者・ヘレケ博士が作った三原則を持たない兵器型メダロット。しかし結局は制御しきることができずに暴走し、辛くもイツキが倒したと聞いている。その後は三原則を取り付け、メダロット博士やヒカルの古い知り合いであるキララが愛機として使っているものしか存在しないはずだ。だが目の前にこうしているということはどこからデータが流出した？

「いや。」

そこで少しの間黙っていたユウトが首を横に振った。

「あれはゴッドエンペラーじゃない。ある意味もつと性質が悪い機体だ。」

「え、どういうことだよ？」

「ゴッドエンペラーが神帝ならばこの機体は獣王。ゴッドエンペラーの元となり、世界で初めて三原則を外されたメダロット・ピーストマスターだ。破壊力と扱いにくさで言えばゴッドエンペラーよりも上の正に兵器型メダロット、いや現役時代のヒカルさんの最後の敵だった機体だからラスボス型メダロットと言ったほうが正しいか。」

淡々と言葉を紡いでいくユウトだったが、その顔には冷汗が浮かんでいた。

「実物を見るのは初めてだが……クソツッ！ある意味『悪魔』より性質悪いじゃねえか！』」

「ほう……！！さつきから思っていたが中々詳しいな少年。その通り。こいつはピーストマスター。私が作り上げた究極にして最強のメダロット！！以前はあがたヒカルに敗れたが今回はそう



はいかない。新たな力を手にいれ、ビーストマスターはいまや神と  
なった!!」

狂気的笑みを浮かべ叫ぶ男。その顔はもはや破壊兵器と呼ぶにふさわ  
しいビーストマスターの主人にふさわしい顔だった。

「んなヤバい相手ならユウト一人で何とかなる相手じゃないだろ！  
！スミロドナツト!!」

「YESマスター!!」

「確かにこの敵は危険だな……ハチロウは下がっている。俺  
達に加勢すれば周りに気を配る余裕はないからな。」

ことの危険性を把握しコウジとスミロドナツトが、そしてカラスと  
G・Oデスが加勢に……

「来るな!!俺は平気だから。」

「しかし!!」

「こんな奴に大人数で挑むことはねえよ。それに俺達はまだ負けて  
ねえ。」

二人を制止しながらユウトはまっすぐビーストマスターだけを見て  
いる。その眼は微塵も気遅れなどしていなかった。

「いい眼だ。しかしもはや神に等しいビーストマスターに挑むなど  
愚かにもほどが……」

「俺は神様ってやつを信じてないんでね。だいたいそいつが神だっ  
てんなら自分の状態くらい把握しとけよ。」

「何？」

「左右非対称なのは当たり前だけど、右腕と左腕のバランス悪すぎ  
だろ。」

クイツとビーストマスターを指差し、その後親指で自身の後ろを指差す。そこに傷一つないロクシヨウがビーストマスターの左腕パーツを携え佇立していた。

「なっ!?!いつの間に……!?!」

コウジの目にはおるか、カラスの目にも、もちろんハチロウの目には見えなかった。一瞬の早業。相手がいかに強くてもそれを微塵に感じさせないほどの強さがユウトとロクシヨウにはあった。

「ビーストマスターにもゴッドエンペラーにも言えることだが、この二機は頭が重力系、右腕が火薬系、そして左腕が光学系の攻撃パーツだ。右腕はあくまで命中率を重視しているから気をつければ一発じゃあやられない。んで頭パーツは基本的にどのメダロットも攻撃力が一番高いんだが回数制限があるから頻繁には使えない。残った左腕はバリバリの威力重視。相手を一撃で消せる威力を秘めてる凶悪攻撃だが壊しちまえばどうってことねえ。つまりあんたは頭と右腕のみで戦わにやならん訳だが、頭パーツを確実に決めたいなら右腕で隙を作るしかない。けどその程度の威力じゃロクシヨウの隙は作れねえよ。もっとやばい攻撃をつい最近食らったんでね。」

長々とした説明だったが要はユウトは負けなと言っていた。対する男はユウトをしばらく見つめた後、

「ロクシヨウ。そしてその自信満々な姿勢。なるほど。彼らが要注意人物の一人として名を挙げていた男はお前だったのか。」

「あ?」

「ふむ。少々失礼が過ぎたかも知れん。ここからは慢心なく、貴様を危険存在と認識して戦わせてもらおう。」

「上等だー!!」

ザアツと風が吹き、カラス達が声も出せずに見守る中ロクシヨウと  
ビーストマスターが再び構える。そしてどちらからともなく動き出  
し………!!

『え〜。皆さん聞こえますか?』

その場に不釣り合いなミスターうるちの声が響いた。

「へ?」

「何だ………?」

すっかり毒気を抜かれ呆然とするユウトと男。そんな彼らに構わず  
声はさらに鳴り響く。

『本来ならば一週間以内に16チームが残るように設定し決勝へと  
進む予定だったのですが、予想以上に16チームが決まってしま  
いました。よってここで予選を終了し、今生き残っているチームの方  
々に決勝進出の権利を与えます!!!』

「なっ!?!」

「16チーム決まったと?」

「ちよつと待て、俺全然戦ってないぞ!」

突然のミスターうるちの放送に啞然とするユウト達。今の今まで戦

っていた緊迫な空気は消え、そこには呆気なさだけが残っていた。

「どうやら貴様との決着は後でのお楽しみらしいな。」

「……………やっぱそうなるか。クソッ！！いいところだったのに。」

男の言葉に心底残念そうに愚痴るユウト。どうやら決着をつけられなかったことがかなり不満らしい。

「決勝に進む以上、どちらかが負けない限りいずれ当たるだろう。せいぜい勝ち上がってくることだな。」

「はっ！！俺のチームは最強だぜ？テメエこそヒカルさん辺りにやられないよう気をつけな。」

「ふっ……………俺の名はタイヨウだ。覚えておけ。」

男 タイヨウはそう残してその場を立ち去った。

「すごいなユウト。お前の実力って思ってた以上に高いんだな……………」

「別に最初の一太刀と左腕を獲ったときの二回だけだ。あんなもんじゃねえよ。」

心底不機嫌なのだろう。ムスツとした顔で皮肉気な返答しか返さなかった。

「とりあえず一旦イツキ達の元へ戻ろう。状況を整理しないとな。」

「うん。」

「ああ。ほらユウトも。」

「……………分かったよ。」

こうして予選は終わり、舞台は決勝へと移る。予選とは比べ物にならないほどの強豪、そして暗躍するアスモデウスとユウトへの復讐に燃えるマモン。果たして決勝はどのような戦いが繰り広げられるのか？

第26話：予選終了（後書き）

すいません。なんかいろいろ詰め込みすぎちゃいました……。  
・なんか駆け足になっちゃったな。気を付けます。

さて、メダロット ファンさん、毎度毎度高い評価ありがとうございます  
います！！今回は少し駆け足になってしまいました。メダロット  
ファン さんの期待にこたえられる作品になるよう一層の努力を  
続けていきたいと思えます！！

## 幕間2：本戦前の・・・

「ふう・・・・・・・・」

大会本部でミスターうるちは一人溜息をこぼしていた。

「本当にこれでよかったですか？参加チームは決勝へ進むことができる16チームに絞られましたか・・・」

「エエ。コレ以上続ケテ八無駄ニ被害ヲ増ヤスコトニナリカネマゼンカラ。」

うるちの問いに答えを返すのはこの大会の主催者にしてアンドロメダル星の代表、セラフィムだ。彼は現在残っている16チームのメンバーのそれぞれの情報を眺めていた。

「やはり全員残ッテイマスネ。前回ノメダリンピック優勝メンバー達ハ。」

「そうですね。彼らは皆これからのメダロット界を引っ張っていく時代の流れですからね。イツキ君達だけではなく他のメンバー達も期待の星だと私は思いますが、やはりイツキ君や再び帰ってきたあがたヒカル君には敵わないかもしれませぬ。」

うるちもぎつと眺めてみる。前回のメダリンピック優勝チームは半々に別れているようだが、どちらも当然のように生き残っている。他にも波島りんたろう率いるチーム、元四天王たる闇雲ミズチ率いるチーム、四天王に対抗すべく生まれたりバティーズのリーダー・舞茸キノコ率いるチーム、前回のメダリンピック二回戦まではイツキ君達のチームメイトとして戦っていたキクヒメ率いるスクリューズ、そして初代メダマスター・あがたヒカル率いるチーム・・・

うるちが知っている実力者達が目白押しだ。

「それにしてもイツキ君のチームメンバーのこの少年。どこかで見た覚えが……」

うるちが興味を持ったのはイツキのチームにいる最後のメンバー、神田ユウトという少年だった。他の3名は当然の如く知っているうるちもこの少年については何のデータも持っていないかった。分かっているのはクワガタ型のメダロット使用ということだけ。しかし彼の名前には聞き覚えがあった。

「天領イツキ。ソシテ神田ユウト。彼ラ八果タシテ……」

「え？」

「……」

セラフィムは沈黙し、再び残ったチーム達を眺めた。

「ちょっと燃え足りないな……」

「まあいいじゃない。僕らも本戦に進めるんだからさ。」

予選が終了した直後、途端にフィールドが消えて一番最初にフューン要塞に来た時の広場にユウト達は飛ばされていた。その直後案内人に連れられてそれぞれのチームの個室が与えられた。ちなみにま



だイツキ、カリン、アリカ達は戻ってきていないのでコウジのチームの個室にユウトとカラスもお邪魔していた。

「しっかし案外呆気なかったな……なんつーか戦ってもいないのに俺達本戦に進めるし。なんかこう、物足りないっていうかちよつと俺達ずるいつていうか。」

「過ぎたことを言っても仕方ないさ。その気持ちは本戦で思う存分晴らせばいい。それに戦って進んだやつの中にも不完全燃焼者はいるぞ。」

「あ……………」

カラスの苦笑にコウジも頷いた。同じ部屋ではあるが、他の皆と離れたところでユウトはふてくされていた。

「あいつそんなにさっきの奴と決着付けられなかったのが悔しいのかな？」

「多分それだけじゃないだろう。あいつもイツキに負けないメダロットバカだ。そんな大好きなメダロットを平然と兵器として扱うやつがいること、そして助かったから良かったもののが下手をすれば俺達に被害が及んでいたこと、そういうものが重なって今のあいつの状態を作っているんだろう。」

カラス自身あの時同様の思いを抱いた身であるし、自分の考えが間違っているとは思わなかった。いつもお茶らけているようでいてユウトは大切な友人達、大好きなメダロット達を傷つけられた時はかなり感情が爆発するタイプだろうから。

「……………そろそろかな。」

「ん？どうしたユウト？」

急にユウトが立ち上がったのでコウジは声をかける。

「悪い。ちょっと散歩行ってくる。イツキ達が来たらそう言っ  
てくれ。」

それだけ言うとユウトはスタスタと扉に向かって歩いて行く。

「ん？あ、ああ分かつ……」

バタンツッ！！

コウジの返事が最後まで紡がれることなく、扉が閉まる音とともにユウトは部屋から出て行った。

「さて、僕は自分のチームのほうに戻ります。アリカさんとはこ  
でお別れですね。」

「そうだね。ここまでありがとうカイ君。」

「いやいや。僕も前回のメダリンピック優勝チームのメンバーの  
一人の人となりと実力を見ることができたし。おあいこだよ。」

ユウト達がフューン要塞に戻ってきてからしばらくしてアリカとカ  
イも戻って来た。実はアリカもこの六日間カイと共にイツキやユウ  
トに負けなくらいの数の戦いをこなしていたのだ。そうしてお互

いの実力の高さを認識し、出会った当初よりも深い友情を築いていた。

「次に会うときは対戦相手としてかな？どっちが勝っても恨みっこなしの良い試合をしましょうね！！」

「もちろん。でも僕達は負けませんよ。」

「こっちこそ！！」

お互いニツコリ笑いながらどちらからともなく握手を交わす。

「じゃあアリカさん。本戦で会いましょう！！」

「うん。またね！！」

そうしてカイとアリカは別々の方向に歩いていった。

「甘酒アリカさんか・・・さすがはメダリンピック優勝メンバーの一人だったな。イツキ君達と戦うのが楽しみだ。」

自身のチームの個室に向かいながらカイは自然と笑っていた。アリカと共に過ごしたこの数日は中々楽しかった。それを思い出すだけで自然と笑みが溢れる。だからだろうか。

「お前が浦島カイ。それで間違いないよな？」

声をかけられるまで人がいることに全く気付かなかった。

「いきなり声かけて悪かったな。俺は神田ユウト。イツキやアリカちゃんのチームメイトだ。」

「アリカさん達の・・・？」

ボサボサ頭の眠たげな少年だった。しかしこちらを見定めるような目が鋭く光り、何か底知れない物を感じる。

「その反応から見るに……やっぱアリカちゃんはあると一緒に行動してたんだな。」

「だとしたら何ですか？」

「ありがとな。」

「は？」

ユウトの態度からものすごいことを言われると思いき身構えていたカイトにとって、ユウトの行動は意外だった。

「俺イツキ達とは最近知り合ったばかりかなんだけどさ、でもあいつら良いやつだし俺としてはもう親友なんだよ。だからこの大会に潜んでいる『悪魔』がこの予選中に行動してアリカちゃんがヤバイ目にあう可能性もあつた以上結構心配だったんだ。だから彼女を守ってくれてありがとな。」

「純粋で裏のない笑みを浮かべてユウトが礼を言う。カイトは少々戸惑ったが、

「守つたなんて大したことはしてないよ。だからお礼を言われるほどのことじゃあない。」

と、それだけ言った。

「ところで悪魔ってなんだい？この大会にそんな物語の存在がいると……」

「誤魔化さなくてもいい。俺はお前が何者なのか知ってるからさ。」

「え？」

先ほどまでの笑みではなく、ユウトは意地の悪い笑みを浮かべてい

た。その様子からは敵意こそ感じられないものの内面を探られるような感じがする。

「時空が変わった影響を受けてないのは当人たちだけじゃないってことさ。いや違うか。お前は一度影響を受けたけど……ま、いいやそんなことは。ともかくそういうことだからお前が何者なのかも知ってるし、この大会に参加してる理由もなんとなく予想がつく。」

「君は一体何を言ってる……」

「分かっているかもしれないがこの大会にいる『悪魔』は二人だ。その配下も合わせると相当な数の敵が潜んでるだろう。それに俺も色々あるからあいつらを守りきれないかもしれない。だからもしそうになったらあいつらのこと、頼むよ。」

それだけ言ってるユウトはクルリと踵を返して一人去っていく。

「……」

カイはそんなユウトの背中をじっと見つめていた。

「……ここは、フューン要塞？」

さらに遅れること数分。イッキとカリンもフューン要塞の中に立っていた。

「無事戻れたみたいですけど……他の皆さんは？」

「多分先に戻ってるんだと思うけど……あっ誰か来るよ。」

イツキの視線の先から黒服を着てサングラスをかけた いかにもS  
Pと思われる格好だ 男性がこちらに向かって歩いてきた。

「大会参加者の天領イツキさんと純米カリンさんで間違いありませんね？」

「あ、はい。」

「それぞれのチームに個室が割り当てられています。案内しますのでどうぞこちらへ。」

そう言われてイツキとカリンを連れて歩きだした。

「あの、他のメンバーはどうなりましたか？」

「イツキさんのチームもカリンさんのチームも全員揃っていますよ。甘酒アリカさんはいさつき戻ってきましたが。」

「ということは私達が最後なんですね……」

歩きながらそう呟くカリン。しかし、その顔は何か別のことを考えているように見える。

「カリンちゃん、どうかしたの？何か考えているように見えるけど。」

ひよっとして例の夢について考えているのか？そのことについては大丈夫だと思っていたが……

「あ、いえ。その……私達以外にどんなチームが本戦に進ん

だのか気になって。」

「ああ……。」

確かにそれは気になる。一体他にどんなチームが……？

「あの、僕達以外にどのチームが本戦に進んだんですか？」

気になりだしたので前を歩く黒服の男に尋ねてみる。

「じきに分かります。本戦に進むチームが全て戻ってきたら集まることになっていきますから。」

結局教えてもらえないってことらしい。けどまあすぐ分かるみたいだしいいか。

「この部屋とその部屋がお二方のチームの個室となります。」

それでは、と言って黒服の男性が去っていく。案内された部屋は隣同士になっていた。それぞれイツキチームと猛虎チームというチーム名が割り当てられている。

「猛虎チーム……ひょっとしてコウジの愛機スミロドナツトのモチーフからとったの？」

「ええ。他にもいくつか候補があったんですけど、最終的にはこれに落ち着きました。イツキ君のチームは分かりやすくいいですね。」

ああ、カリンちゃん。やっぱり変だよね。それは自分でも分かっているんだ。でもね、他に思いつかなかったんだよ……なんてことを心の中で呟きながら自分のチームの扉のノブに手を回す。

が、

「あれ？誰もいない………？」

「イツキ君。きつと私達の部屋に集まってるんだと思います。」

「あつ、そつか。隣同士だもんね。」

納得してカリンの後に続いて隣の部屋へ。

「お、やっと来たな。」

「イツキ、遅いわよ！！！」

「アリカも今さつき来たばかりだと思いが………」

「カリンちゃんも一緒だね。二人ともお帰り。」

四者四様の言葉に迎えられイツキ達は中に入った。

「皆、やっぱりこっちにいたんだ。」

「まあな。まだ全部のチームが帰ってくるまで時間があるみたいだし。退屈だと思っで。」

「ふーん………」

そして部屋の中の空いている椅子に座るが、そこでふと疑問が浮かんだ。

「あれ、ユウトは？コウジ達と一緒にじゃなかったの？」

「ああ、ユウトなら散歩に出かけた。多分頭を冷やしに行ったんじゃないか。」

「どうやら私と入れ違いだったみたいよ。」

疑問に思うイツキにカラスとアリカが説明してくれた。



「頭を冷やす？ユウト君でしたっけ。彼何かあったんですか？」  
「ああ、実は……」

「礼を言っぜ、アスモデウス。お陰で俺はあのガキに借りを返せる。」

同刻。フューン要塞の外の砂漠でマモンとアスモデウスが立っていた。

「別にお礼を言われるようなことじゃないわ。それよりも約束、忘れてないわよね？」

「ああ気に入ったレアメダル使い達はお前が頂くってやつか？構わねえよ。俺はあのガキさえやればそれでいい。他は全部くれてやるよ。」

「それならいいわ。」

マモンは気づいていない。今の返答がアスモデウスにとってどれだけ大きな利点であるかを。

「そういえばあなたがこの星にきて手駒にした人間。役に立つの？」  
「ああ。あいつ中々いい機体を使いやがる。人間にしておくのがもつたいねえ。」

クツクツと笑いだすマモン。例の男をかなり気に入っているようだ。

「どうやらアイツには復讐したい相手がいるらしい。例の二個持ちだ。」

「へえ。まあ、その子は私の目当てじゃないしどうでもいいわ。好きにすれば?」

アスモデウスは興味無さそうにそう答える。

「なあ、前から気になってたんだがお前のお気に入ってどいつだ?」

例の二個持ちでもなければクワガタ使いのガキでもない。他に候補がいるとすればベルゼブブが苦戦したというカプト使いと後天的なレアメダルの使い手。そしてベルフェゴールお気に入りのヘブンスゲートの生き残りだが、その中で歯応えがありそうなのは最後の一人だけだ。最初の二人はレアメダル特有のそれぞれの奥義に辿りついてすらいないのだから。

「フツツ、秘密よ。」

「何だよ気になるじゃねえか。」

「女は秘密を多く持つてる方がいいでしょ?」

「ハッ、人間じゃねえくせに良く言っぜ。まあいい、とにかく本戦は楽しませてもらうぜ。テメエのお目当てを盗ることになっても恨むなよ?」

アハハハハと笑いながらマモンは立ち去っていく。

「それはないわよ。だって貴方ごときに負けるような相手が私のお目当てのわけないから。」

最早マモンの姿が見えなくなった後アスモデウスは一人呟いていた。

「どうやらヒカルさんやイツキ君を含めてレアメダル保持者達は全員本戦へと駒を進めたようです。」

「そうか……!!」

孫娘であるナエからの報告を聞いてホッと溜め息を吐くメダロット博士。この数日はそれが気にかかって色々なことに手がつかなかったのだ。

「よかったですね、お祖父様。はい、お茶です。」

「おおスマンの、ナエ。」

ズズズ……

「ふう……ようやく一息つけたわい。皆無事なんじゃろ?」

「ええ。イツキ君もヒカルさんも、もちろんユウト君も無事ですよ。それにあの装置もちゃんと働いているから一般のメダロッター達も幸い大事には至っていないようです。」

「そうかそうか。」

本当に安心した様子でお茶を飲み進める博士。

「ただ……」

しかしナエは急に真剣な表情に変わる。

「ユウト君が『悪魔』の一人と戦い奥義を発動したと。」  
「ぶつつつ！……！」

ナエの突然の言葉に思わずお茶を噴き出してしまった。

「お祖父様お行儀が悪いですよ。はい、タオルです。」  
「す、スマン……。そ、それよりも今言ったことは本当なのか!?!」

「ええ。ユウト君本人が連絡してきましたから……。間違いないかと。」  
「そうか……。奥義を使ったのか……」

急にその場の空気が張り詰める。『奥義』については実のところほとんど分かっていない。メダフォースの強力版という印象を博士たちは抱いているがユウトはどうやら違う感想らしい。レアメダルに込められたマザーの力を全開放するというようなことを言っていたがユウトやロクシヨウも詳しいことは分かっていないようだ。ちなみにこの話から考えると奥義使用的是レアメダルのみ。そして現状使えるのはユウトとロクシヨウ。そして一度きりではあるがヘブンスゲートで『悪魔』に使って見せたカラス達だけらしい。更には奥義を使った後は代償としてメダロットの機能が限りなく機能停止に近づき、つつかれただけで完全崩壊もあり得るらしい諸刃の剣だという。

「それともう一つ。完成したレアメダル専用メダロットのパーツをすぐに使うことになるかもしれない。」

「……………そうか。」

ユウトにそこまで言わせるとは、それほどまでに強力な相手ということか。『悪魔』とは。

「ナエよ。どうやら僕もしばらく研究所を空けることになりそうじゃ。」

「お祖父様も？」

「お前さんはどうする？もし残るといっているのであれば……………」  
「いえ、行きます。」

間髪いれない返事だった。

「イツキ君もユウト君も弟みたいなものですから。それに久々に見てみたいんです。ヒカルさんの本気を。」

「……………そうじゃな。ではすぐに仕度せい。会場へ向かうぞ。」  
「はい！—！」

「フム。どうやら役者はそろった様だぞマーブラー。」  
「……………」

相変わらず闇よりもなお深く暗い空間で鎖に繋がれたままのマーブラーを一瞥しルシファーが言う。

「無論我が同胞たちも、だ。どうだマーブラー、貴様が『コクーン』の在りかと解法手段さえ話せば貴様の友人達には危害は加えんが？」

「ふ．．．ざけるな。スバルを．．．元．．．元．．．戻せ！」

「やれやれ傲慢だな。私とは相容れそうにないが。」

最早あきらめに近い苦笑を浮かべるルシファー。既に力は残っていないというに．．．．．

「マザーというのはつくづく興味深いな。しかし残念だよ。貴様のその頑固さが貴様の友を苦しめるのだ。」

「イツキ．．．達は．．．お前らなんかに負けるほど．．．．．  
．．．弱くない．．．．．!!」

ジャラジャラッ！！

鎖の音を響かせながらマーブラーは叫ぶ。

「それに感じるぞ。お前たちの仲間には既にやられてるじゃないか。ざまあみる!!」

「違う。」

マーブラーの言葉に対し、ルシファーはクツクツと笑い出す。それだけあの少年・ユウトの成長が嬉しいのだ。だがそんなことよりも．．．．．

「このままでは埒があかな．．．．．」

マーブラーは強情すぎる。果たしてどのような手段を用いねば．．．  
．．．．．？

「仕方ないな。次なる手は．．．．．」

そうしてルシファーは考え出す。マーブラーの口を割らせる手段を。

「．．．．．」

大丈夫だ。マーブラーはそう信じていた。イツキの元へはアイツがいるだろう。きっとアイツならイツキを助けてくれる。それにアイツには自分の持てる力をすべて託した。だから信じるしかないとはいえマーブラーに不安はない。

「ごめんな、イツキ．．．．．こんな戦いに巻き込んでごめん．  
．．．．．」

最早何度目かもわからない謝罪。誰に届くでもなくマーブラーはずっと謝り続けていた．．．．．

幕間2：本戦前の・・・（後書き）

だいぶ間が空いちゃいましたね。スイマセン・・・さらに申し訳ないことにまた次まで間が空くかもしれませんが。申し訳ありませんが気を長くして待っていてください。



## 第27話：組み合わせ決定！！

「本戦出場チーム全て帰還しました。」

「そうですね……」

大会スタッフの報告を聞きうるちは深く頷く。

「いよいよ始まるうとしている……」

そう、遂に始まるのだ。人類初のアンドロメダル星行きを賭けた世界規模のトーナメントが。しかし真の意図は別にある。果たしてセラフィムが求めるメダロッターは現れるのか？

「では全チームに伝えて下さい。本戦の説明の為に広場に集まるようにと。」

「分かりました。」

うるちの指示に従いスタッフがテキパキと仕事をこなしていく。うるちはその様子を眺めた後その場を後にした。

「やっぱりやれば減るもんだなあ……」

「当たり前だろう。数百といったチームが16チームにまで減ればな。」

「

周りをキョロキョロと見回すユウトに向かってカラスがそう答える。

「ま、そりゃそうだ。けど俺が見た感じ骨がありそうなチームは大体半分くらいだな。」

「そんなの実際に戦ってみないと分かんないよ。隠れた実力者だっているかもしれないんだから。」

ユウトの言葉にイツキは抗議する。確かに自分達はレアメダルという普通のメダロッター達は持っていない力を持っているが、だからって普通のメダロッター達より強いとは思わない。普通のメダルだろうがレアメダルだろうが結局のところ強さというのはお互いの絆や思いといったものだからだと経験しているからだ。

「そういう意味じゃねえんだが……. . . . . やっぱこの分だと大丈夫そうなのは……. . . . .」

そうブツブツと呟きながらユウトは周りを見渡す。つられてイツキも周りを見渡し始めた。半分以上は見知らぬ人たちだ。だがもう半分は……. . . . .

「やっぱりミズチ達は残ってるみたいだね……. . . . .」  
「つーか何でリュウコ先生までいんだ!？」

二人の目線の先。そこにはミズチ達四人が悠然と佇んでいた。その中にはやはりリュウコ先生もいたため何も知らないユウトは驚いている。

「あ、そっか。ユウト君は知らないんだっけ？」

「知らん!! まあそんなことはどうでもいいんだ……. . . . . おっ! ?  
なあなあなあ、あの三人って俺が転入してきた前日にイツキがまと

めて相手してたやつらだよな？あのキツそうな女のチーム。」

ユウトの指さす先にはなんとスクリーンーズがいるではないか！？

「あいつらも残ってるの！？」

「へえ・・・あいつ結構強くなつたみたいだな。」

ものすごく嫌そうな顔をするアリカとは対照的にカラスは嬉しそうに顔をゆがめる。

「ん？カラスって学校違うよな？イツキ達と知り合いなのともかくとしてあいつらのことも知ってるのか？」

「ああ。といつても顔見知り程度だな。」

「??？」

顔見知り以上の間柄に見えたのかユウトの頭に疑問符が浮かび上がる。

「なあなあイツキ？いったいどんな関係だ？」

「恋する乙女と見守る少年・・・かな？」

「は？」

ますますユウトの頭がこんがらがってしまったようだ。そんなユウトに後で説明すると言って他に知り合いがないか探し始める。そんなときいきなり肩を叩かれ、

「お茶しない？」

と聞き覚えのある声が聞こえた。

「キノコちゃん!!」

「はあくいいツキ。久しぶりね。」

にっこりと笑顔を浮かべて挨拶する少女は舞茸キノコ。二年前、四天王と敵対すべく生まれたレジスタンス組織『リバティーズ』のリーダーだった少女だ。ロボットの腕も確かだが、それ以上に変装が得意だという恐るべき人物だ。イツキとはもちろん友人だ。

「当然あんた達も残ってたわね。」

「そつちこそ。あ、そういえばシュリも出てるんだよね？彼女は？」

「向こうでおじ様と一緒にいるわ。意地張っちゃってイツキとは今敵だから会いに行かないってさ。」

クスクスと笑いながらそう言う。

「そつか。じゃあこつちから会いに行こうかな。ところでキノコちゃんはシュリとアカガネ教授の三人で出るってこと？」

「そ。あたしはともかくシュリは大騒ぎだったわよ。いきなり『あたしと組みなさい』だもん。」

「ははっ!!シュリらしいや」

三人ともかなりの手練れだ。この大会ますます面白くなってきた。

「それより見た？あがたヒカルさんのチーム。」

「ううん。やつぱりヒカルさんも残ってるの？」

「当り前じゃない。彼は伝説のメダロッターよ。って言ってもまだ私も見てないんだけどね。」

「そつか……」

ヒカルさんの実力からして予選落ちということはないだろう。しか

しユウトが戦ったように『悪魔』と戦った可能性もある。何よりヒカルさんが大丈夫でも他のメンバーがやられれば意味はない。果たして……………」

「ってあれ？ユウトは？」

「さっきイツキと話してた人？それならあっち行っちゃったけど。」

キノコと話していたうちにユウトがふらふらとどこかに行ってしまったらしい。キノコの指すほうにユウトはもう見当たらなかった。

「ってカラスもいない！？」

「カラス君ならユウト君について行ったけど。」

話によればカラスはユウトに連れられてどこかに行ったらしい。

「ま、いいか。別段騒ぎになるでもないし。」

イツキはそう考え、アリカ達と一緒にシユリ達の元へ向かった。

「タイヨウ……………！！あいつは脱獄していたのか！！しかもビーストマスターまで……………！！」

「ああ。正直な話、元はただの人間だから問答無用でぶつとばせないぶん『悪魔』より性質が悪い。しかもリミッターが外されて本来の実力をフルに発揮できるビーストマスター、タイヨウ自身の圧倒

的なロボットセンス、そして何者かから与えられた闇の力……  
・対処できるのがレアメダルくらいってのが痛い。」

ユウトとカラスはイツキ達から離れ、ヒカルと情報交換をしていた。  
『悪魔』の情報にもかなり興味を示していたが、とりわけタイヨウ  
についての情報がヒカルの興味を強くひいた。

「ユウト、あのタイヨウのビーストマスターに宿っていた力……  
・あれは『悪魔』が与えたと考えるべきでいいんだよな?」

「ああ。他に考えられねえし。さて、俺達の報告はこんなもんです。  
ヒカルさんの方は?」

自分たちの持っている情報を出しつくし、ヒカルの方を向く。

「僕は比較的被害を少なくするためにミュータント達と戦っていた。  
勘も鈍ってたしね。ただ……」

「ただ?」

「うるちさんの放送がある少し前まで僕も『悪魔』を名乗る女性と  
その配下らしき人と戦ったんだ。」

「なっ!?!」

「大会にいる『悪魔』は一人じゃないのか!?!」

ヒカルの言葉にユウト達は驚愕した。『悪魔』と交戦した、という  
ことは……

「無事そうなところを見ると……ヒカルさん。あんたは勝  
つたんだな?」

「いや、戦ってる最中にうるちさんの放送で中断された。けどあの  
まま続いていたら負けていたかもしれない。」

カラスの言葉にヒカルはそう答える。ヒカルをしてそう言わせるほどの実力者ということか。

「ヒカルさん。その『悪魔』はアスモデウスって名乗ってなかったか？女の『悪魔』ならそういう名前のはずなんだけど。」

何か思い出したようにユウトがそう言う。やはりというべきかその『悪魔』に心当たりがあるらしい。

「ああ、確かそう言っていたな。両腕の鋭い爪でソード系の攻撃を仕掛けてきたメダロットを使っていたよ。確か……ルクスリアと呼んでいた。」

「やっぱりか……」

納得したのかユウトは顔を下に向き何かを考え始める。

「その配下とやらはどんなメダロットを使ったんだ？」

「ああ、確かそっちの方はブラックスタッグだったはずだ。」

ブラックスタッグ……それはロクシヨウやドークスといった純粋なクワガタメダロットと対をなす闇のクワガタメダロット。メダチエンジ機能搭載の女型の機体で、その性能はドークスを凌ぐ。以前イツキがアンダーシエルでマブラーの作りだした水のスピリット・セルリアーノと交戦したときに使われたブラックビートルと同じ種類のメダロットだ。このブラックビートルもカプトメダロットと対をなすメダロットで、性能はサイカチスを凌ぐ。このときイツキは辛くも勝利をおさめることができたが、正直負けていてもおかしくなかった。そんなブラックビートルと同種類のブラックスタッグを扱うミュータントか……

「正直彼女たちは強い。ツインレアメダルを扱う僕でも今のままでは勝つのは難しかった。」

「あなたにそこまで言わせるとは……ベルフェゴールといひユウトが戦った『悪魔』といい奴らは本当にバケモノだな。」

忌々しそうにカラスが唇を噛む。実際『悪魔』は強い。そしてその配下もブラックスタッグを使う奴や、ビーストマスターを使うタイヨウといった強敵がいる。正直今のままでは勝つのは難しいだろう。

「僕からの報告はこんなものだ。とりあえず状況をまとめよう。」

・今回の大会に参加している『悪魔』は二人

・その二人とは光学系の攻撃を使うアワリティアの使い手マモンとソード系の攻撃を放ってくるルクスリアの使い手アスモデウス

・『悪魔』の配下にはブラックスタッグを使う者やリミッターが外され100%の実力を発揮できるビーストマスターを操るタイヨウがいる

・更に『悪魔』のメダロットは『真名』と呼ばれるものを唱えることで異形の姿に変わり元より10倍近い力を発揮する

・マモンはユウトが倒したが、本戦に進んでいる可能性は皆無ではない。また決着をつけられなかったタイヨウは本戦に出てくることは間違いない

・ヒカルはアスモデウスとブラックスタッグ使いと交戦したが決着はつかなかったためこちらも本戦に出てくることは確定

「……こんなところでもいいかな？」

ヒカルの言葉にユウトとカラスは頷く。

「ま、手持ちの情報だけ見りゃ俺達がかなり不利かもしれない、け





に作られていたのだろう…… 観客席は既に人いっぱいでもう熱いったらなかった。

『予選から勝ちぬいた16チームにはこれより8チームずつA、Bの二つのブロックに別れて戦ってもらいます!!なお、どちらのブロックでどの相手と対戦するかはただいまよりくじを引いて決めさせてもらいます。』

その言葉と同時にうるちの傍にスタッフらしき男の人がメダル型のくじが入った箱を持ってきた。

『ではそれぞれのチームの代表者は前に出てきてください!!』

「てなわけで行ってこいイッキ。」

「僕!？」

ユウトにボンと背中を押されてイッキが驚く。

「僕!??ってお前がリーダーだろうが。」

「安心しろ。どんな相手と当たっても恨まないから。」

「行つてきなさいリーダー。」

三者三様の言葉がイッキに向けられる。

「……………分かったよ。けど本当にどうなっても知らないからね。」

イッキは大きく溜息をついたあと前へ進んでいった。

(ええっと他のチームの代表たちは……………)

イツキの知っている人物はコウジ、ミズチ、キノコ、キクヒメ。それに……

( やっぱり勝ち残ってたんですねヒカルさん。 )

ヒカルだ。隣には別チームの代表としてロボットルバカで有名なりんたろうもいる。ヒカルはイツキの方を見るとニツコリ笑い、りんたろうは溢れんばかりの笑みを浮かべていた。

「お久しぶりです。先生。」

「へ？」

そして背後からかけられる懐かしい声。

「僕を覚えていますか？」

「き、君は……！！ラブレター男ッ！！君のチームも残ってるんだね！？」

イツキに声をかけたのは以前成り行きで恋の架け橋(?)をしたときに知り合った少年だった。ちなみに名前は知らないのでラブレター男と呼んでいる。

「せ、先生まで……！！いやまあそれは置いておこう。先生！！この二年間、俺達はあなたという目標を超えるために血のにじむような努力を重ねてきました！！あなたがいなければ俺達はきっと強くなれなかったでしょう……だからこの大会であなただに勝ち、俺達は恩返しをさせてもらいますっ！！」

まるでりんたろうを彷彿とさせる燃えるような眼。ものすごい気迫だ。

「分かった！！僕も絶対勝ち上がるよ！！」

イツキがその言葉を聞きラブレター男は笑みを浮かべてイツキから離れた。

ゾクリ・・・・・・・・！！

「!?!」

なんだ・・・・・・・・？今の得体の知れない殺気は・・・・・・・・!?!?辺りを見渡すが変った所は無かった。気のせい、なのか？

「あの・・・・・・・・イツキさん？抽選初めてよろしいですか？」

「え？あつ！！」

よく見ると自分以外はいつでも始められるように準備を終えていた。

「す、すみません・・・・・・・・つてあれ？」

周りをよく見渡してみる。1、2、3、4・・・・・・・・14？

「うるちさん、2チーム足りないと思うんですけど・・・・・・・・？」

「ああ、その方達は先ほど辞退されました。これによりA、B両ブロックに1チームずつシード権ができました。」

辞退？せっかく勝ち上がってきたのに？いったい何で・・・・・・・・

「ではこれより抽選を始めます。ここは……メダリンピック優勝者であるイツキさんから引いてもらいましょうか。」

「はい……って、ええっ!!！」

「ではくじをどうぞ。」

「ち、ちよつと僕の意味は無視ですか!？」

必死の抗議も虚しく、一番最初にくじを引くことになってしまった。

ガサガサガサガサ……

「……………1番です。」

箱から取り出した1と書かれたメダルを見せる。

「……はい。1番はイツキチーム、と。さてお次は……………」

「俺が引かせてもらっていいか？」

ミズチだ。誰も反論はない。

「……………俺は4番だ。」

4と書かれたメダルを見せる。

「次は私が行こつかな。」

そう言ってキノコが取り出したメダルは10番だ。

「……………!!！」

ラブレター男は無言ながらもすごい気迫でメダルを取りだし・・・

「先は長い……………」

11番だった。

「んじゃ次は俺が、と。」

コウジは5番のメダルだ。

「次はあたしよお。」

そう言ってキクヒメが引いたメダルは……………

「お、ようやく一つの組み合わせが決まりましたね。」

9番。つまりキノコのチームとぶつかることになった。

「へえ……………イツキの知り合いか。面白そうじゃない。」

「お手柔らかにね。」

笑ってこそいるものこちらは既に見えない火花が飛び散っている。その後2番、3番、12番、14番のメダルが引かれイツキとミズチ、ラブレター男のチームの対戦相手も決まった。知らない顔とは言え本戦に進んできた人たちだ。油断はできないな。

「では私が引かせてもらおうわ。」



「俺達の相手は、ヒカルさんか……!!」

きついなあとという気持ちと強敵と戦える喜びを顔に浮かべてコウジが呟く。まさか一回戦でコウジとヒカルさんが潰しあうなんて……

「チツ……!!」

もう決定しているのだが残った大柄の男がメダルを引き抜く。そこに書かれていた数字は7。つまりシードだ。

「決まりましたね……!!」

うるちが完成した対戦表をスクリーンに映し出す。

『皆さん!! 大変長らくお待たせいたしました!! これよりトーナメントの組み合わせを発表いたしますっ!!』  
そして映し出されたのは、

一回戦

・ Aブロック

・ Bブロック

第一試合・イッキチームVSUSAチーム

第一試合・スクリューズVSリバティーズ

第二試合・四天王VS呪騎士団

第二試合・チームアンダーシエルVSセレクトファンズ

第三試合・猛虎チームVSチームカイザー

第三試合・メダロット部VSメイド少女ファンクラブ





会場の中央からロボットフィールドが形成される!!どつやらの脚部タイプにも相性の良いサイバーステージのようだ。

「ごめん皆。第一試合になっちゃって……」

イツキは戻ってくるなり全員に謝る。第一試合になるなんて思わなかったから尚更だ。

「気にすんなって。決まっちゃったもんは仕方ねえし。」

「そうそう。こういうのは早めに戦うのが一番よ。」

ユウトとアリカは全く気にしていない様子だ。カラスも黙って頷いている。

『イツキチーム、フィールドに集まってください!!』

うるちの声が聞こえる。既に相手チームはフィールドに集まっているようだ。

「よしっ!!行こうか皆!!」

『オオーツ!!』

バトルグランプリ本戦。その戦いの火蓋が今まさに切って落とされようとしていた。

第27話：組み合わせ決定！！（後書き）

お待たせして申し訳ありませんでした！！！ずーっつとパソコンから更新できない状況に家がなっていたもので……さていよいよ始まりますよ本戦が！！実のところ対戦相手の組み合わせは結構悩みました。どうしても名前が出てくるキャラは一回戦で潰しあうことになるのでどこどこにしようかなと。けどそれ以上にチーム名を考えるのがもう大変で……今更ながら自分のネーミングセンスのなさを痛感しました。さていよいよ始まる一回戦。次から本格的に描いていきます。今回みたく更新の間が空かないよう頑張ります！！！

## 第28話：一回戦開始！！圧倒的な勝利！！

バトルグランプリ本戦……基本的に1対3のロボットのタ  
イマン（チームロボットで行われるが、対戦前にお互いの合意があ  
れば特殊な条件の下でロボットが行われる。

（例えば1対1の射撃禁止ロボット・9対9のサバイバルロボット  
等）

「……んで今回は普通の3対3のチームロボットなわけだけ  
ど、誰出る？」

グルリと皆を見渡してユウトが尋ねる。イツキ達のチームメンバ  
数は4人。その中から3人を選ばなきゃいけないわけだが……

「とりあえずイツキとカラスは出たいだろ？予選の時あんまり暴れ  
られなかったっぼいし。」

「まあ……そうだな。」

カラスは出たがっているみたいだ。となると後は……

「んじゃイツキとアリカちゃん行ってこいよ。俺は結構予選で暴れ  
たし、今回は出なくてもいいからな。」

「え、いいのユウト？」

「ああ。だから今回は……」

「うっん。」

ユウトがイツキ達に残りのイスを譲ろうとしたときだった。

「ユウト君が出なよ。私も予選で結構戦ったし、それに私が出て二人の足引つ張っちゃいけないから。」

アリカがユウトに最後のイスを譲ろうとしていた。アリカ自身このメンバーの中で自分が一番弱いと思っているためどうしても足を引つ張ってしまうと考えているようだ。

「んなことないと思うけどな………アリカちゃんは自分の力を過小評価しすぎだって。」

「そうかな？」

「そうそう。俺のことなら遠慮することないからさ。思う存分やってきたらいい。」

ユウトは笑いながらそう言う。

「でもやっぱいいよ。」

「?なんでまた。」

「だってイツキ達は知ってるみたいだけど私はあんまりユウト君の実力知らないんだもん。この際見ておこっかなあと。」

アリカがはにかみながらそう答える。カラスはともかくイツキですらユウトが普通のロボットをした場面を見たことがほとんどというか全くと言っていいほどないのだからそれもそうかもしれない。

「ホント………にいいの?」

「うん。」

「オツケ。んじゃ二回戦でアリカちゃんが思う存分暴れられるように行ってくださいかね。」

ニツと笑ってユウトがサムズアップを決める。これでメンバーは決

まった。

『両チームとも準備はよろしいですか？』

イツキ達がステージに上がると同時に相手チームも上がってくる。見るからに外人っぽい恰好の面子だが……

「なあ、イツキ？あからさまに外国人すぎる恰好じゃね？」

「……やっぱりそう思うよね。」

長い金髪、サングラス、怪しげな長身……どこかおかしい。むしろ普通の人が外国人っぽい恰好をしていると言ったほうが……

「ふっふっふっふ……見てみるあいつらの顔。」

「僕たちの格好に啞然としてるでちゅ。きつと気押されてるんでちゅ。」

「ふむ。やはりこの格好をして正解だったな。」

……どこことなく聞き覚えのある声。てゆうか「でちゅ」なんて言葉を使う知り合いに一人しか心当たりがない。

「まさか……」

『それでは一回戦Aブロック第一試合、イツキチームVSUSAチームの試合を始めます！！両チームともメダロットを転送してくださいー！！』

うるちの声が響く。まあ戦えば分かるか。

「ユウト。最近危険なロボットばかりだったが……大丈夫か？」

「ん？ああ、平気だ平気。力の制御に関しては慣れてっから。」

カラスの問いにユウトは笑って応じる。どうやらロクシヨウの力でもんでもないことになるのはなさそうだ。

「よし、みんな行くよ！！メダロット転送！！」

チュインチュインチュイン！！！！

メタビー、G・オデス、ロクシヨウが転送される。リーダーはもちろんメタビーだ。

「よし、行くぞお前たち！！メダロット転送！！」

チュインチュインチュイン！！！！

相手が出した機体はそれぞれ首なし騎士型メダロットのデュラホース、ガーゴイル型のチェンジカーゴ、グール型メダロットのパスグールだ。こいつらを愛機にしているということは……！！？

「ふふふふふ……遂に、遂にこの時が来たな小僧よ！！」

デュラホースを転送したリーダーらしき男がイツキを指差し笑い声

をあげる。

「その声、やっぱり……!!」

「そうだ……外国人のような姿は仮の姿。その真の姿は……!!」

チユドーンツッ!!!

煙が巻き起こり相手チームの姿を覆い隠す。

「な、なんだなんだ？」

突然のことにさすがのユウトも驚いている。しかしイッキは溜め息をついていた。

407

「ふははははは!!俺こそは真なる悪役、サケカーズ様だ!!!」

「最強の幼稚園児（今年で卒業だけど）、サラミでちゅ!!!」

「まだまだ若いもんには負けんぞ!!!シオカラじゃ!!!」

サングラスに、頭にアンテナのようなものがついた全身黒のタイツスーツ。そう、その正体は元ロボロボ団幹部であるサケカーズ達だった。

「……」

「……」

「……」

イッキは呆れ、カラスは目を丸くし、ユウトはじいっとサケカーズ



達を見つめている。

「ふははははははは！！！余りのすごさに声が出ないか！？」

何を勘違いしたのかサケカーズが勝ち誇ったような笑い声をあげる。  
・・・いや、呆れて声が出ないだけなんだけど。

「なあなあ？」

そんな中沈黙を破ったのはユウトだった。

「ん？よく見れば貴様らは見慣れんガキだな。なんだ？」

「お前らさ、その格好恥ずかしくねえの？さすがの俺もその格好はちよつと・・・」

・・・  
シーーーーー

「ユウト。さすがにストレートすぎないか？」

「え、カラスはあんな格好したいのか？」

「いや、出来れば遠慮したい・・・」

「だろだろ！！やっぱあんな格好よりレトルトさんの格好の方がいいよな！？」

「それもどうかと思うが・・・」

サケカーズ達そっちのけでユウトとカラスが盛り上がっている。やっぱりあの格好はないよな・・・

「き、貴様！！このスーツの素晴らしさが分からのか！！どんな環境でも活動できるこのスーツの機能を！！」

「そつえばその服って海底でも宇宙空間でも普通に活動出来てた

よね……………」

そう言っただけは過去を振り返ってみる。アンダーシエルの時と言いついで宇宙での旅行の時と言いついで、ロボロボ団はあの格好で活動出来たかな……………」

「なん、だと……………」

その言葉にユウトがピクリと反応する。マズい、変なスイッチが入ったか……………」

「前言撤回だ。俺たちが勝つたらその機能を付けた俺専用のスーツを作ってもらおう!!」

「ふふふ……………」

ああ、何か周りそつちのけで白熱し始めた……………」

「とゆうか、お前達ロボロボ団止めたんじゃないの？それにUSA全く関係ないよね？」

「ふつ、やはり俺様クラスとなるとロボロボ団のような大悪党でないと治まらないのだ!! USAもちゃんと関係しているぞ!! U（ウルトラで!!）S（素晴らしい!!）A（悪党!!）だ!!」

「ちなみに僕達は何となくでちゅ。」

「右に同じじゃ!!」

「お前達は黙ってる!!」

……………」

「……………」

いい加減面倒になってきたのかカラスがそう呟く。

「む、それもそうだな。俺達はいつでもいいぞ。」

「僕達もいつでもいいよ!!」

準備ができた旨をつるちに伝える。つるちはこっくりと頷き、

『両チームとも準備はいいですね？それでは、ロボットルウウウウウ・・・・・ファイトオオオオオツツツ!!!!!!』

第一回戦の火蓋が切って落とされた!!

「行けデュラホースよ!!標的はメタビーだ!!」

サケカースの指示を受けデュラホースがメタビーの元へ動く。

「パスグール、お前もメタビーを狙うんじゃ!!」

「チェンジカーゴは残りの足止めでちゅ!!」

パスグールもメタビーへ、チェンジカーゴはロクシヨウ達の元へ行く!!

「カラス、お前はまだ下がってる。サクリファイスは連射出来ねえからな。」

「分かってる。まずは任せた。」

「了解!!ロクシヨウ!!」

ユウトの指示を受けロクシヨウはチェンジカーゴへ走る!!

「中々速いでちゅね。でも速いだけなら・・・！！！」

「ロクシヨウをなめんなよ！！行けっフォーバイス！！」

「ハアアアアアツツツ！！！！」

一気に距離を詰め・・・

「なっ！？は、速すぎるでちゅ！！！」

ガキーン！！

ロクシヨウがチェンジカーゴの右腕を完全にとらえ破壊する！！

ドドドドドドーン！！！！

「まずは一つ。」

チャキンとソードを構えなおす。

「又ウ・・・中々やるの、あの小僧。」

「よそ見してんなよ！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオンツツツ！！！！！！

「グツ、何じゃこのメタビーの力は!? この小僧、前よりもさらに腕を……!?」

「……まあメタビーが久々の活躍なんで暴れてるのが大きいんだけどね。」

実際にメタビーの力は凄まじかった。パスグールのメルトやカウントダウン攻撃をことごとくかわし、至近距離からガトリングを連射それを受けてパスグールがささずメダチエンジをするがそんなこと関係なく、ライフルで的確に撃ちぬいていた。

「オラオラオラオラオラ!!! どうしたどうした!!! こんなんで俺様に勝てると思ったのかよ!?!」

「……少しやりすぎな感は否めないが。」

「シオカラ!!! クソ、メタビーめ!!! デュラホース!!!」

パスグールに更なる追い打ちをかけようとするメタビーをデュラホースが右腕のソードで後ろから斬りかかろうと……

「おっと。」

キイイイイイイイイイイン!!!

横から伸ばされたフォーバイスが火花を散らせながら防ぐ!!!

「な、貴様!!! さ、サラミは!?!」

「チビならカラスが相手してるよ。ま、もう終るだろうけど。」



「うおっしゃああああ!!!大勝利いいいいいいいい!!!」  
「メタビー……やりすぎだよ……」

勝利のVサインをするメタビーに頭を抱えるイッキ。

「も、申し訳ない……サケカース様。」

サケカースに弁解するシオカラ。残るはサケカースのデュラホースしかない。

「ええい!!役立つまでもが!!」

「オイオイ、さっきの俺の話聞いてなかったのか?おっさん『達』  
つつつたる?」

部下のふがいなさを叱責するサケカースに向かってユウトが言う。

「何……?」

「おっさんてのはあんたも入ってたよ!!!」

その言葉にハツとしデュラホースの方を振り返る。

ギギギギギギ……

バキイイイイツツ!!!

「なっデュラホースのソードが!?!」

長い鍔迫り合いを制し、ロクシヨウのフォーバイスがデュラホースのソード・ゾリゾンを叩き折る！！

「いいパーツだな。右腕のソード攻撃パーツの中では充填や放熱の数値も低く、威力や成功値も最高クラスだ。ただ使い方がダメだ。それではせっかくの名剣もナマクラと同じになってしまう。」

ロクシヨウはそう言って左腕のインテンスビートを振り上げ……

「メタビー、トリはお前が決める。譲ってやる。」

デュラホースに思いっきり叩きつけ、メタビーめがけて吹き飛ばした！！

「偉そうに指図すんじゃないやねえ！！けどま、俺様の見せ場を作ったことは褒めてやるぜ！！」

キュインキュインキュインキュイン……！！！！

「イツキー！！」

メタビーの声にイツキが頷き……

「ま、待て……やめるおおおおお……！！」





愕然としているサケカースに向かってユウトがにんまり笑いながら近づく。

「……………本気なのユウト？」

「当然！ーあー、別にあんたが来てるそれで我慢してやらんこともないぜ？さあ、さあ、さあー！！」

「……………」

「おいおい。いい大人がまさか今更になって約束破るなんて……………  
……………」

すぐ近くまで来てユウトが怪訝そうな声を上げたと同時に、

ボンッ！！

「うおっ！？」

突然サケカースの体が煙に包まれ、

「ハッハッハッハッハア！！誰が貴様みたいなガキとの約束なんて守るかバーツカ！！俺様は真の悪役だぞ！？」

「うわ、きつたねえぞ！！約束破んのかよ卑怯者！！」

「ハッハッハッハッハ！！卑怯者！！いいな、最高の褒め言葉だ！！もっと言ってくれ！！」

「小悪党小悪党小悪党小悪党！！！！」

「小悪党って言うなあ！！」

……………なんか煙の中でいろいろ起こってるみたいだ。

「悔しいけど完敗でちゅ。ま、精々頑張るんでちゅね。」  
「って、お前たちもう帰るの？」

てつきりなんか悪戯起こして帰るのかと思ってたけど。

「言ったじゃろう暇つぶしじゃと。まあ久々に昔の面子で集まりたかったという気持ちもあるがな。そういうわけでワシらは観客席で色々楽しませてもらうことにするわい。」

「最初から商品にも何にも興味無かったってこと？」

「ワシらは普通にいつでも宇宙に行こうと思えば行けるんでな。さて行くぞサラミ。お前たちのことはとりあえず応援してやるから精々頑張るんじゃな。」

そう言っつてシオカラとサラミは本当に何をするでもなく帰って行った。

「……何か拍子抜けだ。」

「ま、悪さをしないのならそれにこしたことはないだろう。」

「そうだね。」

そうカラスと頷きあつてステージから降りる。

「二人ともお疲れ様！！楽勝だったわね。」

「まあ、な。まあ二回戦は今回よりもきつくなることは間違いないが……」

「ま、この調子で次も頑張ろう。」

そう言っつて3人は会場を後にする。

「オラオラ！！その服でいいって言っつてんだからよこせや！！もし

くは俺専用の服作れ!!」

「誰が貴様みたいなガキに……つてこらやめる!!引つ張るな!!」

ステージで未だにユウトとサケカースの乱闘が続いていた……

「彼ら二回戦に進みましたよ。あなたは最後まで見ませんでしたけど。」

「当たり前だ。レアメダル使いならあの程度の奴に勝って当然。そんな下らねえ戦いなんざ見てられるか。只でさえ他の奴らより戦う数が少ねえつてのに。」

フーン要塞内のある通路でマモンとフードを被った人物が会話していた。ヒカルが戦ったブラックスタッグ使いで声質からは女性だと思われる。

「アスモデウスは気にしていませんでしたが……?」

「あの女は何考えてるかわかんねえからな。それにしてもあいつら……. . . . . 気を使ったつもりだろうがおかげで退屈なシードなんざ引き当てる羽目になったじゃねえか……!!」

「本戦に進んだ場合棄権するよう指示したのはあなたですよマモン。八つ当たりはよしてください。」

「チツ!! そうだったな……クソツ!!」

『悪魔』がマモンとアスモデウスしか参加していない以上、配下であつたとしてもフードの人物は『悪魔』ではないだろう。にもかかわらずマモンはそれを咎めることなく当たり前のように聞いている。そんな扱いを受けるこの人物は一体……?」

「まあいいではないですか。あなたが戦うのは間違いなく二個持ちですよ?あなたのお目当てと戦う肩慣らしになるじゃないですか。」

「だとしても、だ。退屈なんだよ。なんならお前とやってもいいんだが?」

ゴツツツツ!!!

マモンの体からとてつもない殺気が膨れ上がりフードの人物に叩きつけられる。その傍らには今すぐにでも攻撃できそうな態勢でアワリティアも立っている。しかしそんなことなど意に反さずその人物は平然としていた。

「テメエはルシファアのお気に入りだからな……一度は戦つてみたいと思つてたんだぜ?だから……」

「死に急ぎたいのですかマモン?」

ゾクツ……!!!

今度はフードの人物が殺気を出す番だつた。圧倒的な量で相手を押

しつぷすマモンの殺気とは違う、指一つでも動かした瞬間体中を切り刻まれるような鋭く洗練された殺気。その質にマモンの顔が思わず歪む。小さな恐怖と大きな歓喜に。

「私は仲間同士の潰し合いは望みませんが……自分には敵意を持つ相手には容赦しません。それが例え『悪魔』たるあなたでも。」

そう言つて左腕（その腕にはメダロッチがつけられている）を掲げて……

「カハツ！！冗談だよ冗談！！相変わらず冗談が通じないねえ。俺だつて仲間同士潰しあうのは本意じゃねえ。お前との戦いは今度にとつとくぜ。」

「賢明な判断ですね。」

「テメエの上から口調も今になって考えると心地いいな。まあ礼を言っておくぜ、いい暇つぶしになった。」

それだけ言つとひらひらと手を振つて歩き去っていく。

「仲間か……私たちに仲間意識なんて本当にあるのかな？」

残されたフードの人物は自嘲するようにそう言つとマモンとは逆の方に歩いて行った。

## 第29話：開戦！！スクリーンズVSリバイーズ！！

「あーあ……あのスーツ欲しかったな……！！」

「いい加減忘れる。第一お前があんな格好していたら俺達が恥ずかしいだろうが。」

一回戦を難なく通過し、イツキ達は参加チームの会場特等席から他のチームの戦いを見学していた。

「でも、今の試合も結構呆気なかったわね。やっぱりあなたの影響かしら？」

「だといいいね。ラブレター男も張り切ってたし、戦えるといいんだけど……」

一回戦第二試合は予定が変わり、ラブレター男達のチームの戦いだった。皆二年前よりも遥かに実力を高めていて、相手チームを全く寄せ付けずに二回戦の進出を決めていた。

「まあ、あいつらも前回のメダリンピック経験者達だからな。こういう大会の雰囲気もつかんでるんだろう。」

「かもな。けどそれ以上に相手チームと比べて地力が違う。こう言っちゃ可哀そうだが、今戦ってたチームは最初から勝ち目がなかった。」

ユウトの言う通りだと思う。決して弱い、ということではない。しかし予選の方式はある種の運の要素も含まれている。実力が無くても運さえ良ければ本戦に進めるのだ。恐らく今のチームもそう言ったパターンで勝ち残ったチームだろう。どの面子も負けて当然とい

う顔をしている。

「でも本当に呆気なかったわね。チームのエースも出してないし。」  
「チームのエース？」

アリカの知り合いに彼らのチームで一番強い人がいるのか？そこでイツキはふと二年前に友達になったあの少年のことを思い出す。今はもうこの世界にいない少年。いや、元々存在しておらず今となつては自分以外誰も覚えていない一人の友達のことを……………

「……………そういや次はどこどこだ？一回戦の大目玉、ヒカルさんとコウジ達の試合はラストだろ？」

その声に考えに意識を飛ばしかけていた思考が現実に戻ってくる。そうだ、次は僕達の二回戦の相手になるだろう……………

「ミズチのチームだね。ハクマやリュウコ先生がいる。」

そう、次の試合はミズチ達だ。相手チームにどれだけの力があるかは知らないが、イツキは間違いなくミズチ達が自分たちの相手になると踏んでいた。

「『青龍のミズチ』と『白虎のハクマ』か……………ずーつと旅して回ってて世間から離れてた俺だけど、その二人の噂は聞いてるぜ。その実力もな。」

ユウトが神妙な顔でそう呟く。やはりユウトの耳にも四天王についての情報は入ってきていたのか。

「『朱雀のシユリ』と『玄武のコクエン』、それに四天王の上に立



ち彼らを束ねる『ビーストキング』……けどその中でも俺が興味を引かれたのはミズチとハクマだな。ロボットができなくても話だけでもしたいって思ってたし。特にミズチは過去に大切な存在を失ってるから……」

「って、ユウト？君は一体どこまで知ってるんだ？」

今の発言からミズチの過去は知っているみたいだ。ということはミズチの父親であるオロチことビーストキングの目的も知っているのか……？しかしイツキのそんな疑問には答えずユウトはニヤリと笑ってさあなと返したただけだった。

『お待たせしました！！これより一回戦第三試合・四天王VS呪騎士団の試合を始めます！！』

「お、いよいよみたいだな。」

うるちの声とともに両チームがステージに上ってくる。ミズチ、ハクマ、コクエン、そしてリュウコ先生だ。そんな中、突如ミズチが上を見上げ何かの仕草を取る。

「ん？イツキ、どうやらお前に向けられているようだ。」

「え！？」

言われてみれば。ミズチは自分たちを指で示したあと、こちらを指差して何かを言っている。

「へえ……おいイツキ。これ、どうやらお前への宣戦布告らしいな。」

ユウトが笑いながら小突いてくる。

「分かるの?」

「ああ。二回戦でお前をぶっ潰すだとさ。」

「うわあ……」

「イツキ君に通じたかな?」

「物分かりが妙にいいヤツいるからな。大丈夫だろ。」

「そうだね。」

「で、誰と出んだ? 姐さんか? 俺か? ハクマか?」

「姉貴は却下だろ。そうなると必然的にハクマとお前だ。」

「あら、私は最初から頭数に入っていないの?」

「姉貴を出すと相手にトラウマ植え付けんだろ。暴れて相手ビビらせるのは次に回してくれ。」

「ハイハイ。」

「ハクマ、コクエン。まだ『アレ』は出すなよ? 出すのはイツキ達からだ。」

「分かってるっての。」

「うん。」

「よし。行くぞ!」

「全く、博士もナエさんもいいんですか？こんなところで油売って。」

「何、構わんよ。それに儂が近くにいた方が都合がいいじゃろ？」

「それはそうですが……」

同刻。ヒカルは一人博士やナエと会っていた。

「久しぶりにヒカルさんの本気が見れますしね。付き合いは長いですが、私ほとんどヒカルさんの本気見たことないんですよ。」

「そういえば……そうだったね。」

ナエとは小学3年生の時に研究所で知り合ったのだが、彼女はその時から秀才だったので既にメダロット博士の補佐をしていたため滅多に外で会うことはなかった。レトルトとしての実力なら何度か見せているはずだが、それは彼の本気には程遠い。

「まあいいですけどね。でもそれ以上にイツキ君達が心配なんですよ？特にユウト君が。」

「否定はせんよ。あの子はお前さん達とは違うからな……」

やはりか。普段顔に出すことは少ないが博士は常にユウトのことを考えている。それはまるで自分の息子を見守るようにも見えるが、それ以上にどこか申し訳ないと思って何かを償おうとしているような……

「そういえば聞きましたよ。一回戦コウジ君達らしいですね。大丈夫ですか？」

「どつだろっ……彼は強いからね。でも僕は負けるわけにはいかない。今のコウジ君では二回戦で当たるであろう。『悪魔』に敗北することは必至だ。ロボトルの腕以前に心の問題で。」

そう。コウジは以前『悪魔』にやられてからどこか鬼気迫っているところがある。それは時にひどく脆く、そして辛い結果を引き起こしかねない。そんなコウジ君が元に戻らない以上『悪魔』に勝てるはずがない。だから僕は……

「とりあえず僕は少し動いてみます。まだ試合までは時間があるし。」

「分かった。儂らは運営本部にいるから何かあったら訪ねてこい。」

「分かりました。」

「頑張つて下さいね、ヒカルさん。」

そう言つて別れる三人。だがその三人を物陰から一人見つめる影がいるのは誰も気付いていなかった……

「……圧勝だな。」

「ここまですらとむしろ清々しいわね。」

ミズチ達は全く相手を寄せ付けなかった。それどころかどの機体もダメージと呼べるものすら負っていない。

「まったくますます強く、厄介になってんな。俺としてはあのオモシ

口攻撃を使うチームともやりたかつたんだが……」

ミズチ達の相手は弱くない。否、むしろ強かった。その実力は今大会でも上位に入るだろう。正直自分達では圧勝など出来まい。

「運も実力の内。対戦相手が強すぎたなんて言い訳にもなんねえが……それでもよくやったよ。あのオッサン達なら開始から一分保たないだろうしな。」

「同感だな。流星は四天王。その実力は伊達じゃない……イツキ。どうやら二回戦は楽な戦いじゃなさそうぞ?」

久々の強敵と戦えるからなのか、カラスはいつになく嬉しそうにイツキを見る。

「ミズチ……」

イツキの視線の先にはこちらを見上げ好戦的な笑みを浮かばせるミズチ達がいた。

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツツツ!!!

会場はとてつもない熱気に包まれていた。それはそうだろう。これほどの大規模な大会、滅多にあるものではない。特に今回は前回のメダリンピックには出れなかった実力者達も少なからず参加している。もしかしたら歴史初のメダマスター対決も有りうるかもしれないのだ。

「ま、あたしにはそんなこと関係ない……」

そう、彼女にとってそんなことはどうでもいいのだ。

彼女の目的は優勝ではなく、アンドロメダル星行きチケットも手に入ればラッキーという位の価値しかない。彼女にとって最大の目的は、彼らと戦うこと。否、彼と戦い強くなったと証明することだ。それまでの過程など彼女には眼中にない。最も今から戦う相手は楽な相手ではない。無論彼女もそれは分かっている。だから全力で叩き潰す。彼の元へと繋がる道を歩むためにも。

「……いよいよか。」

今しがた行われていた試合が終つたらしい。これで残りは後二試合。あがたヒカルとの試合とそして……

「アタシは……負けられない……っつ！！」

そう気合いを入れて彼女 キクヒメは仲間が既に待機しているであろう会場へと歩き出した。

「アイツも残つたのか……」

ミズチの試合の後に行われたりんたるうの試合。こちらもりんたるう率いるメダロット部が勝利し、二回戦へと駒を進めた。

「嫌そうだねカラス。てゆうか、りんたろっの事知ってるの?」  
「……………まあな。」

イツキの問いにカラスは言葉を濁す。思い出さたく無いほどの何かがあつたらしい。

「にしても何だったんだ?今の連中、『会長の為にも!!』とか『メイド少女に続け!!』とか。二回戦に進める奴らの中にメイド少女なんていたか?」

ギクツ!!

「ああ、それは俺も思ってた。何かこちらを向いていたような……………?」

ギクギクツ!!

イツキは溢れ出す汗を止めることが出来なかった。

自慢したくもないがメイド少女とは自分のことだ。二年前、女装が似合うという理由だけでメイド少女に女装させられコクエンの砦に潜入し、そのまま撃退。以来メイド少女は生きる伝説となり、とある町では英雄扱いされているのだ。更に前にも話したことがあるがコクエンには惚れられてしまい、コクエン親衛隊はメイド少女ファンクラブへと名前を変えた……………カラスもユウトもそのエピソードは知らないので不思議に思ってるんだろう。ユウトなら何らかの形で知っていてもおかしくないが……………

「ああ、それはね二人とも。実はい……」  
「そう言えばさあ！！次の試合ってキノコちゃんとキクヒメだったよね!？」

アリカが変な方向に話を持っていくとするのをイッキが慌てて話を逸らす。カラスは突然の大声に少し驚いていたようだが、ユウトは何か悟ったようにニツコリ笑っていた。

「ああ、そうだな。今はそっちに注目しよう。」

今はの部分だけやけに強調してユウトがそう言う。後が怖いが今は注意を反らせたようだ。

「皆は今回の試合、どっちが勝つと思う?」

「キノコちゃん達に一票。間違い無いわね。」

当然でしょ?とでも言わんばかりにアリカはそう断言する。確かにアリカはキノコ達の実力を知っている。それを考えればそういう結論になるだろうな。

「どっちが勝つもないだろう?強い方が勝つ。それだけだ。」

対するカラスは興味ないとはかりに頭を振る。最もキクヒメがどの程度強くなったのかは気になっているだろうが。

「キノコちゃんって子の実力は知らんけど多分勝つのはその子のチームだろうな。なんせ元四天王の一角+リバイースのリーダーだ。まあこの二人は仲悪いからそこを突けば少し位は勝ち目があるだろうが……」



「ユウトが言うとかその通りに聞こえるよ。」

イツキはそう苦笑する。だがシュリもキノコちゃんも仲は悪いが互いの実力は認めあっている。勝敗を左右するような致命的なミスはしないだろう。

「ま、これは俺が前見た時のスクリューズの実力から出した結論だ。今のあいつらの実力によつては面白い事になるかもしれん。キクヒメだけの実力ならかなり高いしな。」

最後はそう締め括り、どこから持ってきたのかポップコーンをバクバクと食べ始めた。

「まあ実際に戦ってみないと分からないしね。」

「そういうモグモグことだモグモグ。」

キノコちゃんとシュリ、対するはキクヒメ……一体どっちが？

「始まるぞ。」

カラスに肩を叩かれる。いよいよだ。

『では続きまして、一回戦第五試合・スクリューズVSリバティーズの試合を始めます！！』

うるちの声が響き、両チームが会場に入ってきた。

「全く。ここにいる者達は美しくありませんわね。」

そう忌々しげに言うのは元四天王のシュリだ。美しさが全ての彼女にとってここはあまり好きでは無いらしい。

「そう言うな、シュリ。これほど大規模なお祭りがあれば誰だって騒ぐよ。」

「さすがおじ様！！話が分かる！！」

続くのはシュリの父アカガネ教授とリーダーのキノコだ。

「おじ様はお祭りの醍醐味が分かっていらっしやるわね。それに引き替えこのワガママ箱入りお嬢様は……」

「キノコ！！お父様に馴れ馴れしくしないで！！それに私を哀れむような目も止めなさい！！」

自分の父が気に入らない相手と親しくしているのに苛つきシュリがキノコに怒鳴りつける。

「ハイハイ分かったわよ。けど少し落ち着きなさい。そんなことだと負けるわよ。」

「イツキの知り合いでしたわよね？けれど前に会った者達やカリンとは比べ物にならないくらい弱いですわね。それに美しさが欠片も感じられませんわ。」

やんわりと受けながし注意をするキノコだが、当のシュリはさほど相手を気にかけていないようだ。

「やれやれ。知らないわよ？後で泣きついても。」  
「そんなことは有り得ないから安心なさいな。」

ハア〜どうやら聞く耳持たないらしい。まあキノコ自身最初は視界にすら入れていなかったのだが。しかし敵のリーダーである女を見て認識を改めた。このチームは強い、と。

「あねご〜……………あいつら俺たちなんて眼中にないみたいですよ。」

「気にすることはないわよお。精々今の内にわめかせておきなさい。」

気にした様子等全く無くキクヒメはそう言う。キクヒメの方も相手等眼中にないようで、フフンと笑っている。

「あいつら、イツキの知り合い。凄く強い。あねご勝てる？」

「何マヌケたこと言ってるのかガミヤマ？勝てるか？じゃなくて勝つんだよ！！カラス様に認めてもらう為に！！」

そう言っバシツと子分達の頭を叩きステージに上っていく。

「……………あねご気合い入ってるよな？」

「負けたら泥んごどころじゃ済まないな……………」

ハア〜ツと二人溜め息を吐きキクヒメに渋々付いて行った。

『両チームとも準備はいいですか？』

「いつでもどうぞ〜」

「あたし達もいつでも行けるけどお。」

両チームとも既にメダロットを転送し、戦闘態勢は整っていた。

「まあ、やはり品がありませんわね。その言葉使いといいメダロットといい。余りにも醜いわ。」

キクヒメを見てシユリがあからさまに挑発する。アカガネ教授もキノコも頭を抱えているが言っても無駄と分かっているのか何も言わなかった。

「あなたの連れも。全くそんなことで良く……」

「お喋りな女程醜いのはいないと思うけどお？それにあなたがあたしより美しいとも思えないわねえ。」

「なっ!?!」

今度はキクヒメの番だった。最もプライドの大きさ故か与えるダメージはキクヒメの方が大きく、シユリは震えているが。

「格好なんて後から幾らでも付いて来るもんでしょお？何自分が美人みたいと言ってるの？あんだも大変ねえ。こんなのがチームメイトで。」

「分かってくれる？それは嬉しいんだけどあんまり言わないであげて。こう見えて以外にも繊細なの。」

「キノコ！あんだどっちの味方なの!?!」

「あんだの味方じゃあないわね。」

「おのれ……!?!」

『あ、あのう……』

最早女性達の口論はヒートアップし、男達の声は届かない。

「言わせておけば……!! よろしいわ、強い者こそ美しい。この試合で貴方に自らの醜さを重い知らせてあげる!!」

「無理でしょお。強さこそ美しさならあたし醜くならないわよお？むしろあんたが醜いってことになるかもねえ。」

「~~~~っっ!!!! 審判っ!!!! さっさと試合開始の宣言を!!!!」

口では決着がつかぬと悟りシュリはうるちに喚きたてる。元々の発端はシュリなのだが大人のうるちはそれには触れなかった。

『では……ロボットルウウウウ………ファイトオオオオオツツツ!!!!』

「イワノイツ!! カガミヤマツ!! 分かってんだろっね!？」

試合開始直後、キクヒメはイワノイ達に確認の合図を送る。

「もちろん!!」

「いつでも。」

「よし、なら……」

『メダチエンジツツ!!!!』

キクヒメ達の命令でダークパンサーが、ストレイウオルフが、ブラウンバイソンが変形する。装甲が一体化し性能が上がるレクリスモードへ。

「装甲の低いメダロットだからこそその対応か。それともあたしのスポアーパラソルの能力を知っての……?」

「どうしても良いことだわ。この試合、貴方の出番はないということよー!」

シユリにとってはどうでもよかった。だが彼らのメダロットが全て変形した以上キノコの出番は無いだろう。好都合だ。こいつらは私一人で………

「舐められたもんねえ。よそ見してる暇なんてあんの?」

シャツッ!!

ダークパンサーの爪・ドライブBがシユリのクウワイバーンに迫る!!

「あら、速い。でも………!!」

シユリは慌てずクウワイバーンに指示を出す。直後、

ピラリーンッッ!!

クウワイバーンの右腕が巨大な翼のそれから姿を変える。これぞ変化系パーツの能力。ランダムだが行動する部位と同じならばあらゆるパーツに変化し行動出来る。そして今回選ばれたのは………

「ハアッ!」

クウワイバーンの変化した右腕・現在はフレクサソード、スミロド  
ナットの右腕になっているそれがダークパンサー目がけ振るわれる  
!!!

(このタイミングなら私の方が速い……!!)

シユリはそう確信していた。そして実際にもクウワイバーンの右腕  
はダークパンサーよりも速く……

(捕えた!!)

確実にダークパンサーを捕えた。如何に変形していようとモダーク  
パンサーの装甲の低さは致命的だ。まともに食らえば二発ともたな  
いだろう。だが、

「舐めんじやないわよっつっ!!!!」

吠えるキクヒメ。それに応えるかのようにダークパンサーは敵に呼  
吸を合わせ、確実に捕えたと思われた一撃を紙一重でかわす!!そ  
して……!!

ザシュウウウウツツツ!!!!

ドゴオオオオオン!!!!

ダークパンサーのドライブBがクウワイバーンの右腕にクリティカ  
ルヒット!!一撃で粉碎した。

「な!？」

「今のが『がむしゃら』行動の攻撃じゃなきゃ無事だったかもねえ。」

思わぬ反撃につるたえるシュリに対しキクヒメニヤリと笑う。

「こ、こんなことが……グッ!！」

ザシュツツ!!

休む暇なくクウワイバーンに更なる攻撃が加えられる!! 今度はイワノイのストレイウオルフによるものだ。

「これはチームロボットだぜ!! 一人で暴れないで下さいよ姐御。」

「今の隙を付いてもパーツ一個壊せないヤツが生意気言っんじゃ無い。」

「無理言わないで下さいよ姐御……」

無理だと言わんばかりに首を振るイワノイ。しかし今の一撃でパーツを壊せなかったのは痛いかもしれない。

「まあいい……カガミヤマ!!」

キクヒメがカガミヤマに向かって叫ぶ。そのときにはカガミヤマは既に準備を整えて……



キュインキュインキュインキュイン……！！！！

「お洋服が汚れてもおおおおおおつつつつ！！！！」

ビイイイイイイ！！！！

ブラウンバイソンのレーザーが火を噴く！！

「あれほど言ったのにあのお嬢様は……！！！！」  
「シュリ！！クツ！！」

間一髪。クウワイバーンにレーザーが当たる前にアカガネ博士の愛機・アンノーンエッグが行動変化で完全防御を行い身を呈して攻撃を防ぐ！！

ブンッ！！

「なんとか間に合ったね……」  
「すみませんお父様……」

キノコにあれほど言われていたのに油断してしまい、更にはピンチを招いてしまった……。そこからくる自責の念でシュリが頭を垂れてしまう。

「何、気にすることはないよ。ただキノコちゃんの言う通りだよ。

彼らは強い。」

「……………ですわね。」

正直悔っていた。元四天王の一人として君臨していた自分が後れを取るとは……………!!

「少しは頭冷えた？」

「キノコ……………」

「ならいいわ。もうこれで油断はしない。今度はこっちから攻めるわよ。」

「……………ええ!!！」

「チツ!!惜しかったわね。まあいい。どっちにしろこれで一体潰せるわ。」

本当ならあのムカつく元四天王を真つ先に潰すつもりだったがそれは後に持ち越らしい。しかしこちらは無傷。そして相手の一体が行動変化によりとった行動は「完全防御」。つまりは「援護」の行動だ。これはこちらにとってはこれ以上ない有利条件だ。

「行けそうですね姉御。」

「ああ。あいつはあなたに任せるよ。カガミヤマ。あなたはあたしと一緒に敵リーダーを叩く!!いいね？」

「もちろん。」

イワノイ、カガミヤマが頷く。既に二人とも次の指示を出し終えている。

「相手に付け入る隙を与えんじゃないわよお！！行くよお前たち！！」  
『オウ！！！！』

かくしてスクリューズとリバッテリーズの戦いは幕を開けた。最後まで生き残るのは果たしてどちらか……！！？

### 第30話：続く激闘

「まさかあの体勢から攻撃をかわすなんて……本当にスクリューズが勝っちゃうんじゃない？」

開始早々の凄まじい攻防。スクリューズは彼女達に一步も引けをとっていないどころかむしろ押している。本当にこれは……

「いや、今はシユリが悪い。スクリューズの力を過小評価しすぎてたんだ。まあ今ので頭冷えたるうが……3対2、しかも一個パーツが壊れてる状況でどう戦うかな？」

今までの戦いを分析しユウトはそう感想を漏らす。

「え？3対2ってまだどっちも一体もやられてないけど？」

「今から一人脱落するって事だよアリカ。アイツらならこのチャンスに逃す訳がない。」

アリカの疑問に今度はイツキが答える。イツキもユウトと同じ感想だった。

「それって……」

「まあ見てれば分かるよ。」

まだ良く状況が呑み込めていないアリカにそう言うイツキ。その間カラスはずっと試合を見ていた。

「シャアッ!!」

ダークパンサーのドライブBがスポアーパラソルに向け放たれる！  
！今度は一気にリーダーを潰すつもりだ。

「ま、普通はそう来るわよね。でも……!!」

スポアーパラソルは敢えてかわさず真っ向から受け止める!!

ザシュッ!!

攻撃は届くもののその装甲には大したダメージを与えられない。

「元からクリティカル頼みのそんな攻撃じゃあスポアーパラソルには大したダメージは与えられないわよ。」

「フンッ!! 全く厄介なメダロットねえ……!!」

スポアーパラソルの装甲は思ったより高い。ダークパンサーの攻撃ではクリティカルが発生しない限り確かに大したダメージは与えられそうにない。ならばカガミヤマのブラウンバイソンなら？とも思うがそれは出来そうにない。なぜならメダチェンジ前のスポアーパラソルのパーツは……

「火薬無効、重力無効、そして光学無効……頼みのアタッカーの攻撃はスポアーパラソルには何一つ通じない。どうやってあた



「無駄だと言っておくよ。」

もしイワノイの狙いが『がむしゃら』行動のリスクである自身への絶対命中とクリティカルを狙っているとしても、アカガネ教授のアンノーンエッグは『がむしゃら』行動を行わない。

「なんで言い切れんだよ……」

「変化系メダロットを完全に使いこなせる者はね、自分の意思で次の行動を選択出来るんだ。正確に言えば完全にランダムで決まっていると思ってしまう膨大な行動の中から一定の法則性を導き出す。

それによつて次の行動を任意で選べるんだよ。」

「なっ!?!」

そんなことが出来るのか!?!いやこの男はメダロットを博士達とは違う分野から調べていると聞いた。ならばその過程でその法則性に辿りついていてもおかしくはない。

「私達の次の行動に『がむしゃら』は行わない。悪いが……」

「勝手に話を進めないでくれよ……俺は最初から『がむしゃら』行動の後を狙うなんて考えてねーし。」

勝手な想像をするなどばかりにイワノイは言葉を遮る。

「違うのかい?ではどうやって……」

「ここでやらなきゃ俺が姉御に殺されちまう。だからあんたのメダロットが行動する前に仕留めさせてもらうぜ。」

それは不可能だ。アカガネは即座にそう判断する。アンノーンエッグ1パーツ1パーツがストレイウォルフ一式並の耐久力の装甲だ。万が一クリティカルが出たとしてもストレイウォルフの攻撃力で破

壊できるようなパーツはない。それなら『がむしゃら』行動後の隙を突く方がまだ可能性がある。

「『変化』行動の規則性は見えてもそれぞれの行動の弱点は分か  
つてねーみたいだな。」

「弱点？」

「基本的にメダロットの行動は全て弱点が存在するんだよ。俺も姉御達と特訓して最近知ったけどよ……これといった弱点が存在しないのは『うつ』行動だけだ。『狙い撃ち』行動の後は攻撃をかわせず『殴る』行動の後は防御が出来ない。そして『がむしゃら』行動の後は回避ができず、必ずクリティカルになる……  
・けどそれは防御系パーツにも言えることだ。」

「……………」

確かに全てのパーツに存在するライフルやガトリングの『うつ』やソードやハンマーなどの『殴る』行動にはそれぞれ異なるリスクがある。しかし防御系のリスクなど……

「天才ハッカーが直々に教えてやるよ！！ストレイウォルフ！！」

「っ！？」

話はここまで。ストレイウォルフはアンノーンエッグに向かって駆ける！！その速さは鈍重な戦車タイプであるアンノーンエッグより遙かに速い。

「確かに速さで負けている以上先手は取れないね。だがアンノーンエッグの装甲を君のメダロットのパーツで傷つけられるのかな？」

何度も説明したとおりアンノーンエッグはかなりの装甲の高さをもつ。後手に回っても十分対応できる……………！！



「あんだ、さつきとらせた行動何か覚えてるか？」

「何？」

「完全防御。つまりは『守る』行動だ。経験ないか？普通の防御をして他のメダロットをかばった場合自分は防御できないってことに。」

「まさか……！？」

アカガネ教授の顔が驚きに変わる。そうか！！つまりは……

「それってさ、『防御』の行動をとったメダロット自身を攻撃しても言えることなんだよ！！」

ストレイウォルフの鋭い爪がアンノーンエッグに伸び……

ザシユウウウウツツ！！！！

アンノーンエッグの頭に深々と突き刺さった！！！！

……つまりはこういうことだ。どのメダロットも相手の攻撃に対し攻撃を最小限に抑える防御行動や攻撃をかわず回避行動をとる。だが前述の通り『殴る』や『狙い撃ち』といった行動の後はこれができるなくなるのだ。

そしてメダロットのパーツの中には味方を相手の攻撃からかばい自身でその攻撃を受ける『守る』行動のパーツが存在する。これらのパーツは例外なく装甲が高いため余程の攻撃が無い限り破られることはない。しかし味方をかばい攻撃を受けるとき、自分に与えられる攻撃に対して防御行動が取れなくなるのだ。更に防御系パーツの圧倒的装甲を破るべく加えられる攻撃は威力を増す（最もそれでも



イワノイの叫びが通じたのかその一撃はクリティカルヒットとなり  
アンノーンエッグの頭を破壊していく!!!

「耐えるんだアンノーンエッグ!!!」

だがアカガネ博士も場数を踏んでいる。自らの愛機を信じ……

ザシユウウウウ……!!!

「この攻撃が通れば……!!!」

「この攻撃をしのげば……!!!」

ザシユウウウウ……!!!

『俺（私）達の勝ちだ!!!』

そしてストレイウォルフの攻撃はアンノーンエッグの頭を……

キイイイイイインツツツ!!!

「……終わった。」

先に口を開いたのはアカガネ教授だった。

「君の勝ちだよイワノイ君。」

ストレイウオルフの爪はアンノーンエッグの頭を真つ二つにして半分をその手に掴んでいた。

「へへへ……これで姉御からのノルマは達成だな。」

これで叱られないぞとばかりにイワノイは笑う。そして……

『頭パーツ破壊確認!!!アンノーンエッグリタイア!!!』

うるちからアカガネ教授の戦線離脱を意味する審判が下された。

「そ、そんな……お父様が？」

「あたしの子分もやればできるじゃない。あんまりあたしらをなめてると痛い目見るわよお?……てか呆けてると本当に終わるわよあんた?」

ドゴオオオオオオオオン!!!!!!

ダークパンサーのドライブAたるハンマーがクウワイバーンに見事直撃し脚部パーツを破壊する!!

「あつ………!?し、しまつ………!!」

「こいつで止めよお!!」

うろたえ冷静な判断ができず性能を發揮しきれないクウワイバーン目掛けダークパンサーが………

(やられる………!!)

「姉御危ない!!」

だがシュリを救ったのは意外にも彼女のチームメイトだった。血迷ったのかダークパンサー目掛けブラウンバイソンがタツクルをかます!!

ドゴオオツ!!!!

体格差は圧倒的だ。ダークパンサーは軽々と吹っ飛ばされる!!

「クツ!!何をやってんのよカガミヤ………」

だがキクヒメの目に映ったのは………

「ぐわあああああああ!!!!」

まともに攻撃を浴びて絶叫を上げているブラウンバイソンの姿だっ

た。

「な、これは……」

「なんだ。途中からまたシュリに標的変えちゃったからわざわざメダフォーを溜めて使ったのに違うのに当たっちゃたか。」

ガクンッ!!!

攻撃が止まったのかブラウンバイソンが倒れる。その後ブラウンバイソンから何か球体が出てきて別の機体へ……

「やっぱり大したダメージ受けてないからあんまり意味ないか。でもみんな変形してるからメダフォーくらいしか対応策無いのよねえ……」

「あれは……生命ドレイン!?!」

間違いない。ブラウンバイソンに攻撃を与えた後、機体から出てきた球体をスポアールパルスが吸収した。あれは相手に大ダメージを与えた後そのダメージ分を自らの体力に変換する強力メダフォー。生命ドレインだ。まさかキノコのメダルにそれが使えたとは……

「それにしても本当にあんた達のチームって強いよね。おじ様が敗れるなんてビックリ。」

「あんたこそそんな奥の手を隠してたなんてねえ……!」

キノコは軽口を叩いているのかもしれないがキクヒメにそんな余裕

はない。やはり元リバイターのリーダーだけのことはある。

「それにしてもだらしないわねシュリ。あんたそれでも元四天王なの？だらしないったらないわね。」

「なんですって……」

「あんたさあ、ヤル気あんの？ないんならとつとと抜けて。元々今回の大会、あんたがあたし達の所に来たから入れてあげたってこと分かってる？あたしはこう見えてあんたの力は認めてただけど……わがままばかりで自分の仕事果たせてないじゃない。というより弱くなったわよね？おじ様と再会してから。まあそのことに関しては素直にいいと思うけど、でもそのせいであんたが足を引っ張ってるってこと分かる？」

「……」

シュリは何も言えなかった。キノコの言うことは全て正しいからだ。自分はこのチームの足を引っ張っている。

「けど……もしヤル気があつてこいつらを倒したいって言うんなら……根性見せなさい。あんたはあたしのライバルなんだから。」

「え？」

ぶっきらぼうにキノコはそう言い捨て、

「それじゃあ第2ラウンドといきましょう？言っとくけどあたしの本気は二人と違って優しくないわよ？」

「望むところよお……」

「本当に3対2になった……」

アリカは呆然と試合の成行きを見ていた。まさかイワノイが……

「にしてもきれいなバラには棘があるとはこのことだな。あんな可愛い顔して……恐ろしい。」

「それにしてもキノコちゃんの生命ドレインってカラス君が使うやつより弱く見えただけど。熟練度の問題？」

「多分。何気カラスは場数踏みまくってるし。ある意味最強メダロッター達の一人だしな。」

本当はカラスのレアメダルがレアメダルということもあるのだが……もちろんそれは言わない。

「……ユウト、イツキ。お前たちはこの後をどう見る？」

そこで今まで沈黙を守り続けてきたカラスが口を開いた。

「この後？」

「ああ。どう見る？」

「うーん……」

その問いにイツキは少し考え込む。

「え？キクヒメ達が優勢だし……スクリューズが勝つんじゃないの？」



やはりアリカにはそう見えるのか。だが……

「そんな単純じゃない。むしろここからが本番だ。」

「え、どういうこと？」

「カガミヤマはまだ戦えるけど実際問題もう余り戦闘には参加できないと考えていい。シュリにしか攻撃が通じないんだから。」

「そっか……キノコちゃんのメダロットってブラウンバイソンの攻撃全部無効化出来るんだもんね。」

ユウトの言葉にアリカはフムフムと納得する。

「それにスクリューズのメダロットは全員に致命的な弱点があるんだ。装甲の低さって言うね。」

「確かに全員装甲低いわね。」

「特にダークパンサー。彼女なんて全メダロット中で5本の指に入るくらいに装甲が低い。どんなに弱くてもビームやレーザー一発で終わる。加えてキノコちゃんは前メダフォース中最強クラスの力を持つ生命ドレインは持つてるし装甲も高い。キクヒメ達には悪いけど正直キノコちゃん一人でもスクリューズ全員とやりあえると思うよ。機体の相性的な問題でね。」

「かといって判定勝ちを狙うには相手が悪すぎる。時間は有り余ってるし実力が高すぎる。つまりこの後の戦いは……」

「あんたが強いってことくらい分かってんのよお!!メダフォースを使う間は与えない!!」

そう、相手は攻撃手段がメダフォースしかない以上メダフォースを溜める前に倒す。だが攻撃を加えれば加えるほどメダフォースは溜まる。つまり一撃で潰す!!

「やっぱりそう来るわね。でも……!!」

スポアパラソルの両腕が伸び、ダークパンサーの両前足を掴む!!

「こつというのは別に反則じゃないわよね?」

そしてそのまま遠心力を利用して……

ブーン!!!

ブン投げる!!!

「舐めんじゃないわよお!!!」

だがダークパンサーは器用にバランスを保ちながら着地し、落ちた時の衝撃を利用して……

「行けえつつ!!!」

「シヤア!!!」

弾丸の如くスポアパラソルに突っ込む!!!

加速した分その一撃は申し分ない。これが当たれば最低でも1パーツは壊せる!!

「中々やるわね。けど……!!」

キノコは不敵に笑う。そして……

フワツ………

「何!？」

まるで踊っているかのように完璧にタイミングを合わせ、ダークパインサーの攻撃をかわした。

「避けた!?あのタイミングで!？」

「それ、行くわよ。」

キュインキュインキュイン………!!

「しまっ……!!」

キノコは動きながらもメダフォースを溜めていたのか!?このタイミングは………

(今度はあたしの方が避けきれないじゃないさ!!)

「メダフォース・生命ドレイン」

超至近距離から生命ドレインを……

「姉御おおおおおおおおお！！！」

それは誰の声だったか。ダークパンサーは巨大な光に包まれた。

第30話：続く激闘（後書き）

ども、蒼騎士です^^いやあロボットルって書くの相変わらず難しい。  
あ、ちなみに本編でアカガネ教授が言ってるようなことは普通  
できません。余程のゲーマーや改造愛用者なら別ですが……………  
・  
まあとりあえずキクヒメとキノコの戦いは次回で終わる予定です。  
思ったより長引いてしまっただけですが。まあその後は大本命が待っ  
てますから。楽しみにしていただけるとありがたいです^^

第31話：決着 勝者は……

シューウウウウウ……

至近距離から放たれた生命ドレイン。その余波で会場は煙に包まれていた。

『一体……？』

煙で中が良く見えない以上うるちには判断が出来ない。もしこれでチームのリーダー機であるダークパンサーが機能停止していればリバイザーズの勝利が確定する。しかしまだ立っていたなら……

『……煙が晴れてきましたね。』

徐々に徐々に煙が晴れていきその中で見えたのは……

「まったく、本当にしぶといのねあんた。シュリ以来よ。それに……」

「言っただでしょお？あたしは負けるわけにはいかないって。」

右腕を前方に突き出し、ボロボロになりながらもスポアパラソルの左腕を破壊してダークパンサーは立っていた。

『ダークパンサーの起動を確認！！試合続行です！！』

『あ、姉御おおおおつつつつ！！！！』

うるちの宣言とイワノイ達の歓喜の叫びが同時にこえました。

ウオオオオオオオオオツツツツツツツツツツ！！！！！！

「あの距離でやられないとはな。キノコは油断もしていないし手も抜かなかった。キクヒメやるじゃないの。」

正直ユウトはこの一撃で全て済んだと思っていた。

ダークパンサーの装甲の低さと至近距離からの生命ドレイン。だがキクヒメは右腕を前方に突き出し、スポアーパラソルに攻撃することで自分と相手の体勢をずらし、多少なりとも生命ドレインの威力を下げた。加えて生命ドレインにメダフォースを回していた為に左腕の防御力が無くなり破壊されるに至った。

(本当にイツキの知り合いは面白いヤツが多い……………！！)

ミュータントと戦うため、もう無くしたと思っていたユウトの中のメダロッターとしての熱い思いが反応してしまう。もう自分にはそんな資格はないというのに……………

「でもこれでスクリューズの勝ちは決まりね。スポアーパラソルの左腕が壊れた今、ブラウンバイソンも戦闘に参加できるし、イワノイのストレイウォルフはまだまだ行けるし、シュリさんのクウワイバーンはかなりのダメージだし……………」

「でもそれはキクヒメにも言える。直撃は避けたとはいえ元々ダークパンサーの装甲は低い。むしろ直撃じゃなくてもアレを受けてダ

ークパンサーが立つてられるのが奇跡なんだ。ブラウンバイソンも相当なダメージを負ってるし、この戦いまだ分からないよ。」

そう、まだ分からない。恐らく次の一撃で決まる。

「さて、スクリューズは……いや、キクヒメ。お前はその後どうする?」

カラスは静かにそう呟いた。

「姉御。今ならブラウンバイソンのブレイクが通用する。クウワイバーンもあんまり役立たないみたいだし勝てるよ。」

ブラウンバイソンもボロボロだがダークパンサーと比べると大したことはない。それよりスクリューズで最も破壊力のあるブラウンバイソンがまともに参戦出来るのだ。これは大きい。

「問題はあいつのメダロットだけど……」

「そうねえ。正直あと一発でも生命ドレインを喰らえば終わるわ。けど……」

と、そこで言葉を切りキクヒメはスポアーパーソルを良く観察する。そして、

「けどさっき出したのでメダフォースは尽きたみたいねえ。つまり



また生命ドレインを使えるだけのメダフォー스를溜められる前に叩く。幸いあいつは攻撃型じゃない。特徴的なあの腕で相手を捕まえたり叩いたりはするでしょうけど元々が攻撃型じゃないからダメーシなんてほとんどないわあ。」

「じゃあ……」

「イワノイ！あたし達の中で一番無事なのはストレイウォルフよねえ！？いざつて時は体張ってでも盾になりなさい！！あたしと力ガミヤマで片をつける！！」

「またそうゆう役は俺ですか……」

「……けど分かりました！！」

ザツ！！

バチバチバチ……！！

イワノイの力強い返事を聞き、ダークパンサーは駆け、ブラウンバ  
イソンが攻撃体勢に入る！！

「悪いけど勝たせて貰うわよお！！」

シャアツツ！！

ダークパンサーのドライブAがスポアーパラソルに……

「悪いけどあなた達はここで負ける。これは変わらない事実よ。」

そんな声が聞こえたと同時に……

ゴゴゴゴゴゴ……!!!!

「これは……!!?」

「地形効果ですってえ!?!」

よりもよつてこのタイミングで!!キクヒメは唇を噛む。

地形効果。それは全ロボットフィールドでランダムに発生しロボットを行っているメダロットの内一体に効果を及ぼす。

フィールドの種類によつてその効果は多種多用（例えば森林フィールドなら猿が現れランダムでその猿がいずれかのメダロットに取り付き行動を遅くしたり、氷河フィールドなら巨大な雪玉が現れ、それに当たったメダロットを一定時間動けなくする等）、効果によつては大きなメリットとなるが大抵はデメリットが付加される。しかもその効果を与えられるメダロットは完全にランダムなのだ。もしこのステージのフィールド効果を受けたら……

フワンフワンフワン……

「ちいっ!!」

キクヒメの懸念が見事的中し、サイバーステージのフィールド効果たるUFOがダークパンサーに標的を定める!!

「このステージの地形効果はUFOの邪魔による転倒、行動失敗・  
.....!!」

転倒とはその名の通り対象を転ばせ、直後に行う行動を忘れさせる効果だ。これを使えるメダロットは何体かいるのだがそう多くはない。決めれば相手の行動を一時的に防ぐ強力技なのだ。

「地形効果か.....ラッキー!!って言いたいけど助かったわシユリ。ようやくやる気になったみたいね。」

ニコリとキノコが地形効果を引き起こした人物を見る。

「まあ、あれだけコケにされて黙ってるっていうのは酌なので。あなたこそさつさとメダフォースを溜めなさい。」

「分かってるわよ!!」

シユリの言葉に後押しされてスポアパラソルはメダフォースのチャージを再開する!!

キューーーーーン.....

「させねえ!!ストレイウオルフ!!」

「ブラウンバイソン、ドライブA・ブレイク!!」

再び生命ドレインを出させてしまえば完全に詰んでしまう。だが逆に言えば生命ドレインさえ撃たせなければ勝機はある!!だが.....

.....

フワンフワンフワン……………

「クソッ!！」

再び地形効果が発動し、二機とも転倒させられてしまう。

「何度やろうと無駄よ。四天王のメダロットは全て頭にパーツに地形効果を発動させる力を持っているの。それも地形効果を相手にも及ぼせる。ここから先あなた達は無様に転げ回り散っていくのよ。」

「それにシュリの時間稼ぎのお陰でメダフォースも溜った。これで終わりよ。」

既にメダフォースのチャージを終えたスポアパラソルが転倒して一時的に行動を忘れているダークパンサーに近づく。万事急須だ。

「やらせるかよ!!! ストレイウォルフ!!!」

未だ起き上がれないダークパンサーの元へストレイウォルフが駆ける!!! 生命ドレインを放たれる前に潰す気だ。

「させない!!! クウワイバーン、地形効果!!!」

ゴゴゴゴゴゴ……………!!!

再び地形効果が発動し、転倒を引き起こすUFOがストレイウォルフ

フに……

「こいつを待ってた!!」

「何ですって!？」

「走れストレイウオルフ!!ダークパンサーを連れ去るんだ!!」

イワノイの指示は攻撃の物ではなかった。それはダークパンサーをその場から離れさせること。だがそれは逆に、

「的が変わるだけ。どちらにせよ、これで一体……!!」

ダークパンサーではなくストレイウオルフに照準が変わるだけの行動。だがそれでも……!!

ダッ!!ガシィッ!!

生命ドレインを放たれる前にダークパンサーを連れ出すことには成功し、そのまま全速力で逃げる!!

「無駄よ!!逃がさな……っ!？」

異変はその時。そう、

フワンフワンフワン……

「な、何で!？」

スポアーパラソルに標的を定め、UFOがスポアーパラソルの頭上を飛んでいた。

「かかったぜ！！あんたはお仲間が発動させた転倒で終わりだ！！」

実を言えばこれはかなり勝算のある賭けだった。

転倒は無敵の妨害技ではない。

相手が後ろを向いていないと発動できない絶対破壊攻撃・デストロイと同じように、転倒は相手がまだ何らかの行動を終えていない状態ではないと発動しない。今ストレイウオルフはダークパンサーを連れ出すという行動を既に終えている。この時点ではイワノイが次の指示を出さない限りストレイウオルフに転倒行動は行えないのだがスポアーパラソルは違う。この機体はまだメダフォース・生命ドレインを放つという行動を済ませていない。

そしてクウワイバーンが自ら発動させた地形効果。これにより発生するフィールド効果はほとんど相手に作用するが絶対ではない。今回の様にまだ何らかの行動を終えていないメダロットがスポアーパラソルのみの場合、例えクウワイバーンと同じチームだとしてもその効果を受ける。イワノイとしてはスポアーパラソルよりストレイウオルフの方が遅い筈はないと確信していたので、心配はしていなかった。

「まさか地形効果をスポアーパラソルが受けるなんて……直ぐに次の行動を……！！」

「無駄だぜ。ほとんど放つ直前だったところを転倒で無効にされたんだ。チャージしないと次のメダフォースは放てねえ！！」

イワノイの言う通りスポアーパラソルのメダフォース残両はほぼ0だった。これでは生命ドレインは撃てない……！！

「あんたの敗因は俺達の力を甘く見すぎてたこと。メダロットの行動の特性を把握しきれてなかったこと。攻撃手段が生命ドレインし  
かないってこと。けどなによりも……………」  
「相手があたしだったってことよお。」

既に転倒の効果は切れ、ダークパンサーは攻撃体勢に入っている。  
そう。今しがた発動させたダークパンサーのメダフォースにより強  
力無比となった破壊の一撃を。

「よくやったわイワノイ。あんたが作った最後のチャンス。これで  
片つけるよ!!!」

ダークパンサーが発動させたのはダメージ一定。そのロボトルの間、  
全てのパーツによる攻撃ダメージを等しくする大技。強力無比な攻  
撃を有り得ないほど貧弱に変えたり、逆に貧弱な攻撃を必殺のもの  
に変えたり……………」

「今度の一撃はわけが違うわよお。なんせ正真正銘最後の一撃なん  
だからあ。」

キクヒメが使った効果は後者だった。今ならば全パーツ中最強の威  
力を誇る『プロミネンス』だって越えるだろう。

「これで……………終わりよっ!!!」

ダッ!!!

そして最後の一撃を叩き込むべくダークパンサーが駆ける！！スパ  
アーパラソルもそれに合わせて行動するが、メダフォースが0で攻  
撃手段が無い以上これで……………

「キノコツ！！」

その時シュリの声が響く。同時にクウワイバーンの唯一無傷な左腕  
が変化していき……………？

「最後あんたが決めなさい！！」

その変化した左腕から緑色に輝く光球がスパアーパラソルに放たれ  
る！！

「これは……………！！？」

「後あんた次第よ！！任せたわよ！！」

シュリの言葉に振り返らずに大きく頷く。そう、シュリのサポート  
のお陰で最後の悪あがきが出来る！！

「お互いこれが最後の一発……………」

「当たれば即死。チームは負ける。」

渾身の一撃を似て飛びかかるダークパンサー。狙うは頭。そして最  
後の技が出せる様になり、待ち構えるスパアーパラソル。果たして  
勝つのは……………？

「オオオオオオオオツツ！！！！」





倒れ、

ピー……………ドゴオオオオオオンツツツツ！！！！！！

機能停止した。

「……………あなたの勝ちよ。」

二人とも自らの愛機に駆け寄り、もう勝負がついていることを確認する。その言葉を聞き、

『リーダー機、機能停止確認！！勝者

！！』

うるちの口から試合終了のコールが響き渡り、長かった戦いに終止符が打たれた。

「すごい戦いだった……………」

試合が終わるなりアリカは感嘆したのかそう呟く。

「本当にどっちが勝ってもおかしくなかったからね。」

「ああ。正直シュリの予想以上の足手まといっぷりにはびびったけどな。」

さっきの試合を思い出したのかユウトは苦笑いをうかべている。

「あ、そういえばキクヒメは？」

「……多分一人閉じ籠ってるよ。あんなに頑張ってたし……」

「そうね。今はそっとしてあげようか。」

コンコン

「……」

「……」

コンコン

「……」

コンコンコ……

「……誰よお？イワノイ？それともカガミヤマ？どっちでもいいんだけど今は一人に……」

「悪いが入るぞ。」

ガチャツ！！

暗い部屋で一人佇むキクヒメ。そんな彼女の部屋に入ってきたのはカラスだった。

「カラス様……」

「お世辞でも平気とは言えそうに無いな。」

キクヒメの表情を見てカラスがそう言う。泣いてこそいないし、不安にさせるような顔をしていたつもりもなかったのだが、今は相当酷い顔をしているらしい。

「試合、惜しかったな。」

「……」

「最後の交錯、本当にあれは紙一重だった。だが結果は敗北。運に見放されたんだな。」

「あたし……駄目なのよ。」

カラスはその言葉に振り向く。初めてキクヒメが感情の変化を見せていた。

「イツキやカラス様の様に強くなれない。確かに昔と比べれば強くなった。実力はかなり高いってそう思ってる。」  
「・・・・・・・・」

カラスは何も言わずただ黙って話を聞いている。

「けど、それは私の勘違いだったみたいね。よく考えてみると私は本当に強い相手には一度だって勝ったことはないもの。私は・・・」

「メダロットに一番大事なもの。何か分かるか？」

今まで黙っていたカラスがそこで口を開く。

「メダロットとの、大切な相棒との絆だ。」

「絆？」

そのまま疑問を返してくるキクヒメに頷く。

「ただメダロットの地力を上げれば強くなるわけじゃない。むしろそんなものは戦い続けてれば嫌でも身につく。本当に大事なものは絆、相棒との強い信頼だ。少なくとも今まで会った奴の中で、俺が一番強いと感じた男は自分の相棒と強い絆で結ばれていた。」  
「・・・・・・・・」

今度はキクヒメが黙る番だった。彼女も分かっていたから。

「お前は強くなる事に気をとられ過ぎて相棒との絆が弱まっていたんだ。最後の敗北はそこから来たんだろう。」  
「・・・・・・・・」

キクヒメ自身それは自覚していた。確かに自分は強くなる事ばかり考えてダークパンサーを……

「だがそれでも……」

そこまで言つてカラスはポンツとキクヒメの肩に手を置き、笑いかける。

「強くなつたな。本当に。」

「あつ……」

それはキクヒメがずっと待ち望んでいた言葉だった。カラスに認めて欲しい。その思いが自分を駆り立ててきた。そして今カラスが認めてくれた。

「あつ……ああつ……!!」

なぜだろう？負けて悔しかったはずなのに。それとは別に涙が出てくる。

「ああつ……!!あああつ……!!うわああああん!!」

「やれやれ……」

何がまずかったのか号泣するキクヒメ。そんな彼女をカラスは苦笑いしながら見守っていた。

「さて、次はいよいよメインイベントだな。コウジとヒカルさんがあゝ・・・・・・・・・・」

ユウトは本当に楽しみにしているようでどこか落ち着きがない。

「どっちが勝つと思う？」

「コウジ。」

だがアリカの質問にはあっさり即答する。

「え、即答!？」

「ああ。いつものコンビニ店員のヒカルさんじゃ話にならない。言っちゃ悪いが俺とロクシヨウなら機体の特性抜きにしても30秒と経たずに勝てる。」

それは自意識過剰でもヒカルを過小評価しているのでもない。ユウトはその事実を淡々と口にする。

「まあそれで当然なんだけどな。今のヒカルさんは未来のメダロッター達を育成することに重きを置いているし。ただレトルトさんなら分かんねえ。あれは完璧戦闘モードだからな。コウジにもつけない隙はあるかもしれんが・・・・・・・・・・」

「じゃあ、ヒカルさんとコウジ君の戦いはレトルトさんが出ない限りコウジ君が勝つってこと？」

「ああ。まあレトルトレディとか他のメンバー達の實力にもよるけど。」

これチーム戦だしなと付け加える。

「じゃあ勝つのは……」

「まあ多分一人で十分だとは思うがな。コウジ達クラスが相手なら」

「……え？ユウトは今何て……」

「それってコウジがユウトから見て弱いつてこと？」

いくら友達とはいえ、そう言う言い方をされてしまうと少し言葉に棘が入ってしまう。ユウトもそれは自覚したのだろう。スマンと言つてから続けた。

「いや？むしろ強いだろ。俺コウジ相手に圧勝できる自信ねえし。」

「じゃあ……」

一体どういうこと何だ？カリンちゃんもハチロウも結構ロボットの腕高い。その上コウジまでいるのに一人で十分相手できるって……？

「確かにヒカルさんとコウジならコウジの圧勝だ。レトルトさん状態なら6：4位の割合でコウジが不利。レトルトレディ達を含めたら総合力としてはコウジ達はかなり不利だろうが。」

「それはまあ……確かに。」

レトルトさんもレトルトレディも実力のケタが違うからなあ……

「だがそんなの関係なしに、ヒカルさんのチームにはコウジ達をま



とめて相手しても普通に勝てる奴がいる。」

「だからそれは誰なのさ？」

「『あがたヒカル』だよ。」

「はい？」

「一体何を言ってるんだユウトは？ヒカルさんとコウジならコウジの圧勝ってさっき自分で言ってたのに。」

「それってどういうことなのユウト君？」

「ああやっぱり分かんない？ま、そりゃそうか……お前から『あがたヒカル』を見たことねえもんな。」

「ヒカルさんならいつも見てるけど？」

「ああ違う違う。そう言うことじゃない。ってかイツキ。お前ヒカルさんと『あがたヒカル』をこっちゃんにしてるだろ？」

「だって同一人物だし……イツキはユウトの言葉の意味が分からず頭に疑問符を浮かべてしまう。」

「お前メダマスターだよな？最終試験のメダリンク1位となった相手は？」

「……あつ全盛期のヒカルさん!？」

「そ。俺がここで言ってる『あがたヒカル』はコンビニ店員のヒカルさんじゃなくて全盛期の英雄と呼ばれたころのヒカルさんだ。」

その言葉でようやく納得できた。確かに全盛期のヒカルさんは強い。イツキ自身メダリンクでのCPUと対戦した一度だけだが、その力は圧倒的だった。

「お前はそれに勝ってメダマスターになれたわけだがまさかその時戦ったのが『あがたヒカル』の全力だと思ってるんじゃないよな？」

・・・・・・・・え？あれで全力じゃない？

「思ってたのか・・・・・・・・あんなもん力の一端だよ一端。俺もアトムさんに頼んでやらせてもらったけどあんなもんじゃねえんだよ。

『あがたヒカル』って男の底はな。」

「・・・・・・・・ユウト君は知ってるの？」

話になんとかついていくことができているが、ユウトがここまで言うのだ。イツキもアリカも少し緊張していた。

「知ってるってほどじゃねえけどな。ただ一つ言えることは・・・・・・・・

・・・・・・・・」

「言えることは？」

「俺の知ってる『あがたヒカル』の実力は歴代最強。コウジやカラスやミズチ、もちろん俺やお前よりも、だ。」

「準備はいいのヒカル？」

「・・・・・・・・ああ。いつでも行ける。」

選手控室。自分達のチーム用に割り当てられた個室でヒカル達は集まっていた。

「なあヒカル？お前大丈夫か？現役から離れて久しいだろ？」

「今なら俺達にも勝てないかもな。」

「心配無用だヤンマ、クボタ。予選でかなり厄介な奴らを相手してほとんど昔の感覚は取り戻してるよ。」

初代の悪ガキ3人組のうち二人、ヤンマとクボタの問いにニコリと笑ってヒカルはそう答える。

「けどさっき言ったこと本当にやる気なの？」

「ああ。コウジ君には悪いが今の彼を次の相手にぶつけるわけにはいかない。それはみすみす見殺しにするようなものだ。」

「ふーん。まあいいけどね。」

そっけなく言って初代悪ガキ3人組の女リーダー、イセキはつまらなそうに対戦表を見る。

「ミュータントだっけ？やっぱ実感わかないわねえ。あんたが本気出すって言わなかったら信じられなかったわね。」

「その点は私も同感よイセキ。でもこれは紛れもない事実。ユウキ君やパティちゃんは……………」

そこで途絶えてしまう。やはりキララにとっても受け入れがたいのだろう。

「まあ今は目の前の敵を倒すことに専念しよう。彼も中々だからね。勝てるかなあ……………」

「お前が勝つって言ったんだろが。」

「まあ、ね。……さてそろそろ時間だ。行くつか皆。」  
『オオツツ!』

仲間たちの気合いの入った返事を聞き会場へと歩き出す。

(コウジ君。今の君を『悪魔』と戦わせるわけにはいかない。悪い  
がここで潰させてもらうよ。)

後にこの試合は人々の間で語り継がれることとなる。そう、一線を  
退いたはずのあの伝説の男が再び降臨したと……

### 第32話：開戦！！コウジVSヒカル！！

「やあコウジ。調子はどう？」

「バツチリだぜ。いつでも行けそうだ。」

コウジ達の控室。イツキはそこにお邪魔していた。試合前に皆を見ておきたかったのここに来る前にユウトに言われたことが気にかかったからだ。

『俺個人としてはどっちにも頑張っしてほしいと言いたいんだがな．．．．．だが今のコウジにはここで負けて頭を冷やしてほしい。なぜかって？お前なら分かるだろイツキ。あいつは今普通じゃない。恐らく奴らと相対したとき、今のままじゃあいつは死ぬな。』

見た感じはそう変わった所は見えないが．．．．．だがユウトの言っていた奴らと言うのは十中八九『悪魔』達の事だろう。確かにコウジはかつてベルゼブブに敗北を喫し、一度死にかけている。今思えばあれがきっかけでメタビーの力が覚醒したとはいえ、コウジとしては許せないことだったろう。

「次の相手はヒカルさんだけど．．．．．大丈夫？」

「まあな。気楽に行かせてもらおうよ。」

「ユウトの話だと昔の実力をほぼ取り戻してるって話だったけど．．．．．」

「プレッシャーかけるなよな．．．．．けどラッキーだぜ。なんせ生きる伝説と呼ばれるほどのヒカルさんと戦えるんだ。相手にとって不足なし！！」

これだけを見ていると大丈夫そうだな。いや、油断は禁物だ。ユウ

トの言葉が正しいのなら『悪魔』と会った時が一番危ないはず。その時になってからじゃ遅いんだから………

「ううう〜イツキ君………僕試合前なのに何か緊張してきたよ………」

………ハチロウの方が重傷っばいな。

「コウジ君、何で一回戦でヒカルさんのチーム引いちゃうかなあ………」

「クヨクヨすんなよ。過ぎたことだろ？それに逆の発想で行こうぜ？今のヒカルさんは実力がほとんど戻ってるらしいから、ある意味伝説のメダロットとやれるって自慢できるぜ？」

「そうかもしれないけどさあ………」

未だにハチロウはブツブツ何か唸っている。まあ一回戦の相手が相手だからなあ………

「でもイツキ君、出来れば応援して下さいね」

「もちろんだよ」

「お前は………」

カリンに可愛い声でそんなこと言われたら応援しなきゃいかんだろ。イツキは思わずそんなことを考えていた。

「ここだな………」

どうやらこの中に辛口ロウジがいるらしい。一目見ておこつと扉を・  
………

「不意打ちでもする気か？落ちるとこまで落ちたつて感じたな。」

今にも扉を開けようとしていたところをその言葉で邪魔されマモンは振り返る。そこには自分に土をつけた忌々しい男が立っていた。

「まあお前らが今更場外乱闘しても何もおかしいことないけどな。

けど中にいる奴とやりたいならまず俺とケリつけねえ？今度は完全に止め刺してあげるからさ。」

「ありがたい申し出だな。願ってもねえ。けど悪いがこっちはルーにのつとて参加するよう命じられてるんでね。今すぐメエをぶち殺したいが………そいつは後だ。」

「じゃあなんでその扉を開けようとした？」  
「次戦うかもしれない相手に挨拶するのに理由が必要か？」

ニヤリと悪意のある笑みをマモンが浮かべる。そう言われてしまつては言い返せないのかユウトは黙ってこちらを睨んでいた。

「………確かに理由はいらねえな。けど出来れば止めてくれないかな？その中にいる奴は今、『悪魔』に過剰反応するようになってっからさ。無駄死にさせたくないんだ。最近会ったばかりだぞそいつもいい奴なんでね。」

「カハッ！！お前が心配するつてのか！？もう自分とは関わり合い

のない世界の住人を！？こりゃ滑稽だ！！クハハハハハハ！！！」

心底おかしいのか腹を抱えてマモンが笑い出す。ユウトはそれに気分を害した様子はなさそうだが、その笑い声がうるさいのだろう。耳を塞いでいた。

「安心しろよ。試合で当たるまで手は出さねえ。ま、その面白君じゃあ歯ごたえねえだろうがな。あの二個持ちが相手になるとしても………やっぱダメだな。てんで相手になりそうもねえ。まあどっちも俺にとっては取るに足らない、いつでも食えるおやつみたいなもんだしな。」

そしてまたクハハハと笑いながらその場を立ち去っていく。

「………いくつか言っとしてやるよ。」

耳から手を放しユウトはマモンを呼び止める。

「お前はいつから相手を選び好みできるくらい強くなったんだ？」  
「………何？」

その言葉でマモンの顔が凍りつき二人の間に流れる空気も変わる。二人ともお互いへの敵意を隠そうともしていない。

「お前が今けなしてたのは両方ともメダロッターだぜ？しかも両方とも並のメダロッターじゃない。実力云々だけじゃなくてな。まあコウジの方は今不安定だが………」

そこまで言っユウトの表情はふっと和らぐ。だが逆に二人の間の空気は先ほどより険悪になった。



「俺ごときに勝てなかった奴が、メダロッターであるあいつらに勝てるよと本気で思ってたのか？俺以上にメダロッターでも何でもないお前が？だったらお前は何べんやっても俺には勝てねえな。帰って他のミュータントに『悪魔』代わってもらえば？」

「デメエ………！！！」

「ほらほら、また熱くなる。ハハハハッ！！滑稽過ぎてもう腹がいてえよ。熱くなるってことは必死なんだもんな？いやあ昔はお前ら全員殺したいくらい憎かったけど、少なくとも今お前に対してだけは違うね。面白いピエロだわ。アハハハハハッ！！！」

完全に立場が逆転し、今度はユウトが爆笑する。それに短気なマモンの怒りに火がついてしまう。

「言わせておけば………！！！」

ガチャッ！！

「廊下で騒いでるの誰！？うるさいんだけど！！！」

途中から笑い転げていたユウトの声がるさかったのだろうか。あるいは先程からうるさかったがもう我慢できなくなったのか。どちらにせよ扉が開かれ中からイッキが出てきた。

「ってユウト！！こんな所で何爆笑してるんだよ？」

「クククッ………！！！！ああいや悪い悪い。あんまり可笑しくって………ハハハッ！！！」

何がおかしいのか再び笑い出してしまった。でも目が笑って無いよ  
うな………

「他には誰も……いないよね？」

既にマモンは立ち去った後で、廊下にはユウト以外誰の姿も見えな  
かった。

（でも……あれは話声だった。しかも険悪な。一体………  
）

「イツキ。そろそろ試合始まるからコウジ達にエール送ったんなら  
もう行こうぜ。特等席も用意してあるからさ。」

「あ、うん。分かったよ。」

何か釈然としないものがあるが、コウジの試合に近いのは確かだ。  
イツキはユウトも伴って改めてコウジ達に挨拶した後会場へと向か  
った。

『では皆さん！！これより一回戦最終試合・猛虎チームVSチーム  
カイザーの試合を始めたいと思います！！！』



(それに何より、これは覚醒したレアメダル同士の激突……  
一体何が起こるか俺にも把握しきれねえ。万が一のことがあった場  
合、対抗できるのは俺たちしかない。)

ユウトにとってそれがこの観客席にいる一番の理由だった。何か起  
きたとしてもすぐに対処するために。最もユウトとしては何も起こ  
らないでくれるのを祈るしかない。まだ秘密兵器は出したくないし、  
ここで本戦前に『悪魔』となんて戦いたくないのだから。

(けど……な〜んか嫌な予感すんだよな……)

だがこんなときに限って良く当たる勘は不吉を告げていた。

「覚醒したレアメダル同士の戦い。それも幻と言われた『ツインレ  
アメダル』とマザーの力を新たに与えられた唯一の『後天的なレア  
メダル』……どちらが勝つと思う?」

「さあ、どうでしょう?どちらにせよこの戦いの勝者がマモンと戦  
います。まあ私はどちらが勝ってもマモンは負けると思いますが。」

「あ??この俺があんな雑魚どもに負けるってのか?」

先程のユウトとの会話のせいだろう。マモンはかなり苛立っており、  
仲間であるうと牙を剥いてしまうような状態だった。

「あなたといいいベルゼブブといい、前科がありますから。」

しかしそれを意に返さず、黒いフードを見に纏ったミュージタントは冷静に返す。マモンもそれを言われては何も言い返せず膨れ上がった怒りが徐々に沈静化していった。

「喧嘩はよしなさい。私達は今あくまで観客なのだから。」

それを見てクスクスと笑いながら二人をたしなめる。彼女としてはもつと見ていたのだが、今はそれより重要な事があるため自重することにしているのだ。

「重々承知しています。しかしどちらが勝とうとあまり関係ないのでは？確かにレアメダル同士の激突で彼らは更なる段階に上がるかもしれません。が、やはり今のところ脅威になりそうなのは『悪魔』であるマモンを退けた神田ユウトに『ツインレアメダル』保持者のあがたヒカルのみ。その二人だけならば我々全ての力なら造作もなく潰せます。残りの者にしても本当に脅威になりそうな者など……」

いない、と言いかけてそこで言葉を止める。彼らは全員只者ではないことを思い出したのだ。正直な話レアメダル使いがこんなに一カ所に集まるなど普通ではありえない。

それを考えれば少なくともレアメダル使い達の中心にいる天領イッキは一番の脅威となりうる。そして彼はスバルに認められ、マープラーを退けたこともあるのだ。更に彼にはどこか周りの者を惹き付ける不思議な力がある。そんな彼の周りにいるレアメダル使い達はいずれもこの星では相当な実力者だ。『悪魔』に興味を持たせた男に、スバルの力を後天的に与えられたメダルの使い手。考えように

よって彼らも充分脅威になりうる……

「ハッ！関係ねえよそんなこと。大体 teme らは考えすぎなんだよ。あいつらが脅威？有り得ねえよ。」

「しかし……」

「俺らにとつてあいつらは極上の獲物。それ以上でもそれ以下でもねえ。気にすることはねえよ。こんなちんけな勝負の結果もな。」

「……」

マモンは彼らを甘く見すぎている。その油断が敗北を招いたというのに。やはりルシファアの言っていた通りかもしれないな……。そんな事を考えつつマモンから視線を外し、これから先脅威になるかもしれない二人の戦いにアスモデウスとともに目を向けた。

様々な思惑が入り乱れる会場で、いよいよ試合は始まるうとしていた。

『ではこれより一回戦最終試合・猛虎チームVSチームカイザーの試合を始めたいと思います!!』

「いいいいいよいだね、ココココウジくくくん……!」

「ただ緊張してんだお前は……」

さつきよりも更にひどく八チロウは緊張にその身をガクガク震わせている。

「二人とも良く平気でいられるよね．．．．しよっちゅう会ってるから？」

「そうでもありませんわよ。でもそうですわね．．．どちらにせよいつかは当たってしまう相手ですし、早いうちに痛めつけてあげるのも悪くないと思ってるだけですわ」

「怖いよカリンちゃん．．．．」

心優しい少女のはずなのだが、今の言葉は冗談に聞こえない。まあそれでこそ純米カリンだが．．．．

「カリンの言う通りだ。大体ヒカルさんに勝てなきゃ今のイツキ達に勝てるほしょうもないんだぜ？タイプは違えど全員実力にそう大差はない。むしろ一回戦があいつらじゃなかったただけまだマシだ。」

「言われてみれば．．．．」

「確かにヒカルさんは強敵だ。けど俺達がヒカルさんより弱いなんて事はない。だから．．．．」

チラリとステージが上がって来た対戦相手を見やる。傍らにいるのはキララさんに加えて見慣れない三人だ。遠目から見てもお世辞抜きに全員強い。けど俺は．．．．!!

「勝とうぜ。イツキ達が待つあの場所までな。」

二人に向かいその決意を表す。

(そうだ．．．．．そして『悪魔』を．．．．!!)

その時コウジの顔に一瞬狂気が走ったのをカリンは見た気がした。

『両チームとも準備はいいですか？』  
「いつでもいいぜ!!」

既にコウジ達はメダロットを転送し終えている。言葉通りいつでも戦う準備は出来ている。だが意外にもヒカル達は誰一人として機体を出していないかった。

『あの〜・・・ヒカル君・・・?』  
「どうしたんだヒカルさん? 怖気づいたってわけじゃないだろ?」

うるちとコウジが早く準備するよう催促する。しかしヒカルは首を振り、

「・・・りダメだな。」  
「え?」  
「やっぱりダメだ、危険すぎる。皆も、そして君もこのままでは・・・」  
「いきなり何を言って・・・?」

機体を出さなかったかと思えば今度は妙なことを口にする。これには会場内の全員が疑問に思っていた。



「一体どうしたんだヒカルさん？」

「これは……………やっぱ会場に来て正解だったかもな。」

「え？」

「イツキ、アリカちゃん。驚くのはまだ早いぜ。ヒカルさんもつとんでもないこと口にするだろうからな。」

「コウジ君、うるちさん。提案があるんですけどいいですか？」

『なんでしょう？』

「この試合、お互いに使う機体は一機のみリーダー同士によるタイムンロボットにしませんか？」

「タイムン……………！？」

『ロボットですってええええええええ！？』

ユウトの考え通り、確かにヒカルはとんでもない提案を口にした。つまりヒカルは……………

「俺と一対一で戦いたいって？」

「ああ。その方が色々都合がよくないか？お互いにとってね。」

「……………」

ヒカルが何を企んでいるかは知らないが確かにその方が都合がいいかもしれない。あがたヒカルは伝説のメダロット。快盗レトルトでもコンビニ店員のヒカルでもなく、コウジはその生きた伝説と一度戦いたいと思っていた。恐らくコウジだけでなく世界中のメダロットなら一度は思う願いだろう。そんな中わざわざヒカルの方からタイムンの申し込みが来るとは……………願ってもない。

「俺は構わないぜ。最もこいつらが許してくれればだけど……………」

・・・」

チラリと二人の方を見る。

「それもそうだね・・・カリンちゃん、ハチロウ君。それで構わないかな？僕の仲間は既に了承してくれているんだが。」

既にそこまでしているとは・・・まさか最初から一対一を望んでいたのか？

「うーん・・・僕は構わないけど。カリンちゃんは？」

「・・・私も構いません。その方がコウジ君も喜ぶでしょうし。」

やや間を置いてカリンもそう答える。

「悪いな二人とも。それとありがとな。」

「気にしないで。存分に楽しんでください。」

カリンはそう言ってニツコリ笑う。

『えー・・・本来なら止めるべきなのかもしれませんが、このミスター・うるち。熱き少年達の思いに応えるべく、その願いを聞き入れましょう!!』

「ありがとうございます、うるちさん。」

『いえいえ。前例もありますしね。ではお二人とも準備を。』

フィールドにコウジとヒカルのみを残して他は皆降りていく。

それを見計らい、ヒカルも相棒を転送する。そう、あの激闘時代に共に戦った愛機の一体を・・・その機体名は『メタビー』。イツ

キがメダチエンジン対応の『サイカチス』を手に入れる前まで使用していた『メタルビートル』。そのプロトタイプと言える機体だ。真正銘、今はヒカル以外誰も所有していない幻のメダロットだ。

「それが、あがたヒカルの真の愛機……!!」

「今はもう旧式も旧式。かなりの年代物だけどね。」

「感動だぜヒカルさん……夢みたいだ!!」

「喜んでくれたのなら何よりだ。」

ヒカルは笑いつつもアーク（この『メタビー』のメダルは現在使っていたアークビートルDに装着されていたため）を臨戦態勢に構えさせる。準備は万端のようだ。

「確かに感動してばかりもいらねえよな。スミロドナット!!」

コウジも既に待機させていたスミロドナットをいつでも闘えるよう本格的に構えさせる。

「……………」

「……………」

まだ試合開始していないというのに二人の間には今までにない緊迫した空気が流れている。どちらも試合開始と同時に一気に攻めるだろう。その空気につるちも吞まれかけるが、大きく頭を振り遂に運命の一戦を幕開けさせた。

『それではこれより、一回戦最終試合・コウジVSヒカルの試合を行います!!両者とも準備はよろしいですね?それでは……………ロボットルウウフアイトオオオ!!!!』

### 第33話：コウジ覚醒

「ハア……ハア……!!!」  
「……………」

こちらを見下ろす目はどこか哀れむようだった。

「これが……実力の差ってやつか……!?」  
「……………」

それには答えずアークは更なる攻撃の準備に入る。スミロドナットはどうにか体勢を立て直したばかりだというのに。

「まだまだ……!!ギブアップには早い!!」  
「……………そうか。」

ヒュッ!!とアークの姿が消え、スミロドナットの真横に現れたと思えば、その無防備な横っ腹に……………

ドンドンドンドンッ!!

左手によるガトリングが撃ち込まれた。

少し遡り……試合が開始して直後だった。スミロドナットはすかさず変形し、すぐに射撃トラップを張った。

「これで攻撃は塞げる!!」

射撃トラップとは、相手が射撃攻撃（例としてはミサイルやガトリング、ライフル等）を使用したときに発動する罠だ。

旧式ということもあり、今アークが身に付けている『メタビー』は現在の『メタルビートル』や『サイカチス』よりも装甲が低い。スミロドナットのしかけたトラップはかかれれば中々のダメージを与えられるため、一度でもかかれれば最低1パーツは破壊できる。これを張った以上、メダフォースによる攻撃以外ヒカル達に攻撃手段はない。そのはずだった。

「悪いがコウジ君。この程度のトラップではアークを止める事など出来ないよ。」

その言葉からすぐ、アークは何の躊躇もなく右腕のライフルを放った。

「なっ!? 躊躇いなくだと!？」

「言っただろう? この程度ではアークは止まらない。」

不意をつかれはしたが、スミロドナットの運動性能でギリギリ避ける事が出来た。直後ライフルが撃たれたことに反応し、射撃トラップがアークに向かって牙をむく!! だがアークは……

ガシャンッ!!

「強制解除だと!?!?」

まるで最初からそんなものなかったかのように、簡単に解除した。確かにお互いの間に余程のレベル差があったり、熟練度が低ければ強制解除されることも珍しくない。だが射撃トラップの属性『設置』の熟練度は極めていいと言ってもいい。ではアークとスミロドナツトの間にはとんでもないレベル差があるというのか?有り得ない!!

「ロボット中に気を抜くなんて、感心しないな。」  
「っ!?!?」

気が付けば最早攻撃を避けられない程の距離まで接近を許してしまっていた。

「クッ、迎撃だスミロドナツト!!ドライブC!!」

コウジの指示を受け、スミロドナツトの攻撃がアークに向かって牙をむく!!ここまで距離を詰めた以上、こちらだけでなく向こうも攻撃をかわす術はない筈だ!!

「さすがに早いな。けれど……」

対応しきれないであろう早さ、完璧なタイミング、そして避けようのない位置に放たれた申し分の無い威力の攻撃はしかし……

ガシィッ!!

アークの左腕により簡単に止められていた。

「もっと強力な拳をティレルなら繰り出せるよ。もっとも……」

そしてその体勢から少し体を捻り、スミロドナットを蹴り上げる！！

「グッ！！」

「スミロドナット！！」

それだけではない。蹴り上げと同時に掴んでいた手を離し、支えを失ったスミロドナットの体が宙に浮く。それに合わせアークも跳び上がり……

ズガガガガガッ！！！！

イッキのメタビーがグラに放ったときのように、拳を入れながら同時にガトリングを放つ！！

「この位の威力ならアークでも出せるんだ。」

ドサッ！！

空中から叩き落とされ、スミロドナットの体が地を跳ねる。

「冗談だろ……まだ一撃も入れてねえのに……!!」

あまりにも一方的なワンサイドゲーム。そんな目の前の光景を見てコウジは啞然としていた。

「……………一方的すぎる。あのコウジがこうも呆気なく……………」

観客席から見ても、ヒカルの強さは圧倒的だった。カラスでさえ目の前の光景を何度冗談と思ったことか。しかもそれは今も現在進行系で行われている。

「うん、本当に強い。強いことは強いんだけど……………」

イツキはどこか違和感を感じていた。確かにお世辞抜きにヒカルは強い。だが自分の知るコウジは果たしてここまで弱かったか？そう思えてしまうくらいコウジ達の動きが悪く見える。ヒカルが強すぎてそう見えるのかそれとも……………」

「ヤバいなこりゃ。コウジ大丈夫かなあ〜」

「? どういうこと?」

どうも負けそうだからそう言っているようには見えない。

「試合が始まる前にコウジには負けて頭冷やして欲しいって俺言っ



たよな？」

「うん。」

はつきり覚えている。ユウトは確かに試合前にそう言っていた。

「俺がそんな風に言った理由は多分、お前が考えてる通りだ。ヒカルさんもそれは知ってたから、なぐんか穏やかに倒すのかと思っただんだが……まさかこうも一方的に攻め立てるとは……」

「なんかマズイの？」

「お前が前に言ってたろ？あの夜の戦いについては。」

「あっ！！！」

そうだ。あの夜最初はコウジに分があるように見えたけど、実はそう見えていただけで……

「最後は一方的だったんだろ？ならもしここでコウジが今の状況をあの夜にみたててしまったら？」

「しまったら……」

言葉にせずとも容易に分かってしまった。コウジ……！！

「こりゃ、嫌な予感の中かもなあ……何考えてるんだヒカルさん？」

そして現在に至り……

「さすがと言うべきかな？アークの放った全ての攻撃を全て紙一重でかわし、ダメージを最小限に抑えるなんて。恐らくはスミロドナットの尋常ではない運動能力あつての芸当か。」

常に優位を保ちながら驕ることもなくヒカルは冷静に状況を分析している。コウジの方はダメージを最小限に抑えるだけで精一杯だというのに。

「……………どうでもいいけどなんかキャラ違うなヒカルさん。いつもの少し抜けてる様な感じがしない。」

「そうかな？確かにどうでもいいね。ただそんなこと言ってる暇あるのかい？コウジ君、君はこのままだと何も出来ずに負けるよ。」  
「負け、る……………？」

それは端から見ても分かりきったこと。しかしそれは……………

「また……………俺は負けるのか？」

脳裏に浮かぶはあの夜の事。『悪魔』と対峙し、完膚なきまで叩きのめされたあの夜。そう、俺が弱かったからスミロドナットは食われかけた。あの夜から何も変わっていないのか、俺は……………！？

「……………だ。」

「ん？」

「嫌だ嫌だ嫌だ！！俺は……………負けたくねえっ！！」

そして……………

キュイイイイイイイイイイイッッ!!!!

スミロドナツトの体が眩いばかりの黄金に包まれた!!

「これは……………!?!」

ヒカルの目が驚愕に見開かれる。この光、ヘブンスゲートでカラスが見せた……………!!

「そっだ……………力だ。ハハハハハ!!!!みなぎってくるぜ……………この力があれば俺は負けない……………誰にも負けない!!!!」

スミロドナツトと同様コウジの体も光り始めている。そしてそんなコウジの顔には、ユウトが、そしてイツキヤカリンがたまに感じていた異常とも言つべきコウジの狂気が広がっていた。

「クソが!!!!マジで的中しやがった!!!!あんのバカ暴走しやがった!!!!」

ステージに満ちている光を見て、いつになくユウトが焦る。イツキやカラス、そして極普通のメダロッチャーでしかないアリカでさえ危機感を感じていた。

「ちよつと、コウジ君どうしちゃったのよ!？」

「これは……!！」

アリカはよく分かっていないようだがイツキは知っている。これはレアメダルが力を解放したときの輝きだ。会場の間は一部を除いてこの状況の恐ろしさを理解していないようだが、もしこの力がこのまま暴走し続けられれば……!！」

キュインキュインキュイン!!

「やべえぞイツキ!!状況抜きで!!！」

メタビーもこの異常に感付いたらしい。指示を出していないにも関わらずメダロッチャーから出てきた。

「行こうメタビー!!このままだとコウジもカリンちゃん達も危険だ!!！」

言うが早いかイツキはメタビーを伴って……

「……どうしてなんだユウト。」

走り出そうとしたイツキ達の前にユウトが立ち塞がる。

「コウジ達が危ないんだ！！君も分かっているだろう！？そこを通し  
・・・」

「お前はアリカちゃんと一緒にここにいろ。」

「えっ！？」

何を言われたのか理解できずイツキの思考が停止する。

「二度も言わせんな。俺とカラスが止めに行く。お前もメタビーも  
ここにいろ。」

「！？」

「デメエ何言って・・・！！」

なんで僕らだけ・・・！？そう続ける前にユウトが口を開く。

「これが普通のロボットで、単にコウジが頭に血が上ってるだけなら確かにお前が行くのが一番だ。が、これはレアメダルの暴走だ。恐らくこれでコウジは『奥義』に辿りつく。まだその境地に辿りつけてないお前らはむしろ足手まといだ。」

それは今の自分達の立ち位置を確認させるのに充分すぎる言葉だった。レアメダルの暴走。こういう普通では遭遇しえない状況をユウトは何度も経験してきている。そしてそんな彼が足手まといと言うのならそうなのかもしれない。けど・・・

「僕は黙って見てるだけってこと・・・？」

そんなのは嫌だ。僕だけ何もしないなんてそんなの・・・！！

「イツキ、お前までここを離れたらアリカはどうなるんだ？」

「え？」

「アリカは何も知らないんだ。そんな中、俺達全員がここを離れたらどうなる？誰もアリカを守る者はいなくなるんだぞ？コウジを元に戻せてもアリカが大変な目にありました、じゃ意味ないだろう。」

カラスなりの気遣いなのかもしれないがそれには一理ある。敵はもうこの大会に潜んでいる。アリカが人質にならない保証はどこにもないのだ。

「…………まあそういうことだ。お前はここでアリカちゃんを守れ。最悪ここで『悪魔』と相對した場合、お前しか戦えるやついなえんだから。」

「…………分かった。」

心から納得することはできない。だが自分が行くことでかえって事態が悪化するというのがならここに残るしかないだろう。

「安心しろ。コウジは俺達が必ず止める。まあ二回戦には出れなくなるかもしれないが……………」

「んなこと気にしてらんねえよ。行くぞカラス！！時間が無い！！」  
「ああ！！！」

そのまま二人は全力疾走で試合場まで駆けていく。

「…………イッキ、一体どういうこと？何がどうなってるの？」

残されたアリカはイッキにそう尋ねる。もう隠すことはできない。

「…………今から話すことは本当のことだよ。」

そう切り出してイツキはアリカに全て打ち明けることにした。

「あれは……！！？」

「あんたを倒した坊やが出した技、それと同じ光ね。」

「ああ、間違いねえ……。」

異常を感じ取っていたのはユウト達だけではなかった。無論彼らも・  
・・・

「神田ユウトは渡鳥カラスとともに止めに入るようです。どうしま  
すか？」

「放っておけば？どうでもいいし。」

「ああ。今さら止められるようなもんじゃねえだろ。それにしても・  
・・・取るに足りないと思っていたが食いごたえがある奴  
だったようだな……！！！」

クツクツとマモンは歓喜に打ち震えている。あるときユウトが言っ  
ていた言葉が分かる気がした。

タッタッタッタッタッタ………！！！！

『ユウト！！どこにおる！？』

「カラスと一緒にコウジの所に向かっている！！けど………」

博士と通信しつつも走りは止めない。が、

ワアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

「人が多すぎる！！着くのは時間がかかるかもしれない！！」

大規模な大会は観客の数も半端ない。予想以上のな人込みでタイム  
ロスを余儀なくされていた。

『スタッフフルムを通ってゆけ！！何か問題を起こしてもわしが対  
処してやる！！』

「助かります！！カラス、こつちだ！！」

来た道を途中まで引き返し、関係者のみが入れるスタッフフルムか  
ら会場へ向かう！！スタッフ専用なだけあって、会場まで最短距離  
で進めそうだ。





っ飛ばぞー！！それこそ俺たちみたいな普通じゃない奴ら以外全員な  
！！」

そう。俺は昔それで・・・・・・・・もし今回もそんなこと  
になったら被害は甚大だ。生き残る人間なんてほんの一握り。そし  
てコウジは自分を責め続けるだろう。多くの人を殺した後悔に押し  
つぶされる。何よりあいつも俺と同じになるかもしれない。それは  
ダメだ！！

「俺みたいなやつは・・・・・・・・俺だけでいい・・・・・・・・！！」

そうだ、コウジにそんな思いをさせる訳にはいかない。あんな悲劇  
を再び引き起こすわけにはいかないんだ！！

「クックック・・・・・・・・きつとユウトもこの力で戦ってきたん  
だろうなあ・・・・・・・・今ならあなたにも負ける気がしねえ。」

コウジは既に正気ではなかった。スミロドナツトの方は何も言わず、  
ただただ巨大な力を巻き散らしていた。二人とも恐らく力に吞まれ  
ている・・・・・・・・！！

「さて、ここまでやった方がいいが・・・・・・・・」

正直予想以上だった。これほどの力とは……………

「これは……………アークだけで対応出来るかな？」

普通なら出来ない。ヒカルのカブトメダルであるアークは二個一対クワガタメダルであるティレルと共にいない場合、ユウトの言うところの『奥義』が使えないのだ。対するスミロドナットは間違いなくその領域に達している。あの速さと合わさる以上、対抗できるのはロクシヨウくらいかもしれない。

「けどそれはメダロットの機体性能だけを考えた場合の話。いくら性能が高くても……………!!」

これはあくまでロボットだ。ならば戦いに必要なのは機体の力よりもパートナーとの連携!!今のコウジに一番教えてあげるべきことだ。

「まあ、このままだと少し不利だろうから……………アーク。」  
「いつでもいけます。」

愛機の力強い言葉に頷く。これを使うのは久しぶりだ。

キュインキュインキュイン……………!!!!

「メダフォース?今更そんなもの通用しないぜ?本気出せよ?」

「それならすぐに見れるよ。生憎と本気を出すにはこれを使う必要があつてね……………先に言っておくけど僕達も、今から使うメ

ダフォースもイツキ君達の様に甘くはないよ。」

そう言つてヒカルはメダフォースを発動させる！！もう彼ら以外使える者のいない技を……！！

「今の君に欠けているもの。それを教えてあげるよコウジ君。メダフォース発動！！バーサークツ！！」

二人の戦いは佳境に入ろうとしていた……………

### 第34話：負けられないんだ……

「本当に大丈夫なの？ヒカルの実力は知ってるけどこれは普通じゃないでしょ。」

イセキもこの戦いの異質さに気付いていた。そしてヒカルが敢えてこの状況にしたことも。

「心配してくれてるの？」

「知ってるヤツに目の前で死なれでもしたら目覚めが悪くなるだけよ。ま、言う程は心配してないけど。」

実際イセキはあまり心配していなかった。それでも万が一ということはある。

「心配ないわ。昔のあいつに戻ってる以上、勝てる人なんて私は二人しか知らない。」

そう。今のコウジではヒカルには勝てない。今のヒカルに勝てるのは……

「それにどっちにしろこれはアイツ自身が撒いた種、自業自得よ。私達が心配する必要はないわ。」

「あんたも相変わらずよね……」

キララの言葉に苦笑を浮かべつつ、イセキは再び戦いに目を向けた。

「コウジ君……」

一方こちらはこちらで心配していた。それも当然だろう。この異常な力、それをコウジ達が出しているのだから。

「いつものコウジ君じゃない……一体何が起こってるの!？」  
「……分かりません。けれどヒカルさんがこれを見越した上で一体何を望んだのなら……ヒカルさんを信じるしかないですわ。」

そう、自分達はこの戦いを見守ることしか出来ないのだから……  
……

「バーサーク? そんなメダフォース聞いたことないぜ?」

ヒカルがアークに発動させたメダフォース・『バーサーク』。コウジはそんな技を聞いたことが無かった。いや、恐らくうるちや博士を除けばヒカルのチームメイトしか知らないだろう。

「知らなくても無理はない。僕自身メダフォースを使うことは滅多

にないし、あつたとしてもアークには『一斉射撃』しか使わせてない。ティレルには『縦一閃』と『横一閃』を状況に応じて使わせているけど……」

そう言いながらヒカルはコウジを見つめる。いつでもかかれるようにし、隙を見せないために。

「基本的にはイツキ君達が使つような『威力全開』とそう大差はない。まあ同じなのは根っこの部分だけでかなり違うんだけど……」

確かにアークの姿は先程とは少しだけ違う。目つきは数段鋭くなり両腕も鋭い鎌爪のようだ。その立ち姿はまるで飢えた獯猛な獣。バ―サークの名の通り危険な荒々しさを宿しているように見える。

「確かに『威力全開』にはないあぶなつかしい感じが出るな。だがバ―サークって大げさな名前に反して、ちつとも暴走するような感じはないぜ？」

「それが『威力全開』との明確な違いさ。コイツはおいそれと重ねて使うわけにはいかないからね。まだ一回目だから理性もちゃんと残ってる。もつとも、今の状態だと無口になるんだけどね。」

「へえ……ま、どつちでもいいさ。ただ俺も今ならスゴい技出せそうなんでね。今のアークが文字通り化け物じみた強さを持つてることを期待するぜ。」

話はこちらまでと言わんばかりにスミロドナットを改めて構えさせる。先程まで体から放たれていた大量のエネルギーは既に沈静化し、今は全てスミロドナットの体内に収まっている。その影響かスミロドナットの体は未だに何か起こっているようだが……

「レアメダルの力が完全に覚醒しつつあるからかな？さっきまで追い詰められていたことを忘れてらしい。」

いつになくキツイ言葉を吐き、ヒカルもまたアークを構えさせる。

「それじゃあ改めて……………」

「始めるぜ！！」

タッタッタッタッタ……………！！

「ゼエツゼエツ……………！！っ、着いたあっ！！」

試合会場。全力で走り息を切らせながらもユウト達はようやく辿り着くことが出来た。

「えつとこつちは……………ヒカルさんの側だな。」

脇目も振らず一心に駆けてきたので、どちらのチームの側に着くのか分からなかったのだがこちらはどうかやらヒカル達の近くらしい。好都合だ。こちら側は話が分かる人間が多い。

「ユウト。スミロドナットの体から放たれていた光は収まってるが、まだ安心できないのか？」



あんなに膨大な光が収まっている以上、心配はいらないのではないか？それは疑問ではなく期待。

今だに状況は好転しておらずむしろ悪化しているということをカラスは生物の本能で察している。

さつきから頭の中で警鐘が鳴り響いているのだ。危険だと。これ以上近付くなど。それはヘブンスゲートでベルフェゴールに感じたものと同じ。いや、力を制御しきれない以上今の方が危険だ。それでも期待を抱かずにはいられなかった。もうコウジは大丈夫なんだと、この不安を否定したかった。だが、

「まだまだ。今のこの状態は暴走第二段階の前振れだ。危ないのはここから。今の中に止めねえと、マジでコウジは墮ちる。そうなりや最悪の場合……!!」

首を横に振り、悔しげにそう答える。それを聞きカラスも今感じている不安が間違いで無いことを確認した。

「試合の最中とか、んな呑気なこと言ったらんねえ。行くぞカラス!!コウジを止めるんだ!!」

「ああ、分かっている!!」

二人ともコウジとはイッキほど親しくはない。だが仮にも友人である以上、そして今まさに危険な状況である以上放つてなどおけない。

「行くぜ!!メダロット転……!!!!」

「待つて。」

だが二人の行く手を阻む者が四人。二人を囲むようにして立っていた。

「……………何のつもりだ？俺達を除く会場の人間全てとコウジを見殺しにする気か！？」

コウトは声を荒げ叫ぶ。だがキララ達の方は平然としたままで、

「これはヒカルとコウジ君の真剣ロボトル。邪魔は許されない。」

平然とそう口にした。

「ざっけんな！！あんたら分かってるだろう！？これは暴走だ！！このままだとコウジ達は墮ち、レアメダル使いの俺達以外全員死ぬ！！早くしないと……………！！！」

「それが？」

……………耳を疑った。イセキの言葉に。平然と言われたその言葉に。

「この程度で終わるようならこの先も戦力になりえない。ヒカルも、あのガキも。そんなんいたところで足手まといでしょ？」

「言い過ぎよイセキ。でもその通りだと私も思う。私達はレアメダル使いではないけれど、そのくらい分かるわ。貴方も分かってるんじゃないの？」

イセキを勇めつつキララも同意する。そして彼女達はコウトも同じ横に考えていると思っていた。だが、

「……………この試合ごと止める。」

短くそう答えロクシヨウを転送する。

「悪いけど手出しはするなって頼まれてるからね。通さないわよ。」  
ユウトを止めるのは無理と悟ったのだろう。キララ達もそれぞれの愛機を転送してロクシヨウを囲む。イセキの愛機マゼンタキャット、クボタの愛機、イエロータートル、ヤンマの愛機シアンドッグ。そしてキララの愛機の……

「ゴッドエンペラーを含む四体か……上等だ。四人まとめて相手してやるよ!！」

キララ以外の愛機は学生時代から今も使い続けられている旧タイプだが、だからと言って弱いわけではない。むしろ彼らの実力の高さにより圧倒的な力を発揮できる。そしてリミッターが付けられているとはいえゴッドエンペラー。同じく実力の高いキララが操る以上リミッターが付いていることなどあまり意味はない。ここで戦えばどちらが勝つにせよ悲惨な結果が待つのは必至。しかしユウトは止まらない。完全に冷静さを欠き、本気でまとめて相手をする気だ。そしてロクシヨウに指示を出そうと……!!

ドガ!!

「落ち着けユウト!!こんなところで無駄に力を使う気か!？」

正にぶつかり合う直前、カラスがユウトを殴りその場を黙らせる。ユウトも止まり、少しは冷静さを取り戻したようだ。

「落ち着いたか？」

「……ああ、キレイな一発だったよ。まったく本気で殴るなよ。」

「  
憎まれ口を叩きながらもやはり先程と比べかなり落ち着いているよ  
うだ。」

「悪い。」

「いや、謝んのはこっちだ。こん中じゃ一番事態を治められる俺が  
こんなんじゃ殴りたくもなる。」

パンパンツと頬を叩きキララ達を再び見つめる。

「ヒカルさんの実力は知ってる。あんたら程じゃねえけどな。だか  
ら戦いに集中させるために余計な邪魔をさせたくねえのも分かる。」

「なら……」

「けど、」

キララの言葉を途中で遮るようにしてユウトが続ける。

「経験上この状況がヤバイことに変わらない。しかもコウジのメダ  
ルは普通と違う。だから5分 何かあればもつと早いけど 以内に  
ケリがつかない場合はあんた等全員再起不能にしても止めに入る。  
それでいいだろ？」

「……こういう状況に一番詳しいのはあなただっけ聞いてる  
わ。いいわよそれで。ま、5分もかからず決着つくと思うけどね。」

それぞれ愛機を収め、その場の緊張が解ける。それを見てユウトも  
ロクシヨウをメダロッツチに戻し、コウジ達の試合に目を向ける。

「あれは……バーサークか？そういやヒカルさんのメダル  
は第一世代だったな……いや、それよりもスミロドナッ  
トのあの変化は一体……？」

ユウトが疑問に思っているのはメダチェンジを既に行っているスミロドナットの姿がゆっくりだが徐々に変化していることだった。特に頭と足に淡い光が集まり、新たな装甲に……………

「まさか……………!? クラファイティモードか!? あれはサイカチスとドークスにしか使えない2段階目の変形、しかも専用の追加パーツが無いとできない代物だぞ!? なんてそんなもんなしにエクサイズのパーツで……………」

そこでふと思い出す。スミロドナットのメダルはスバルに力を与えられ後天的なレアメダルになったのではなかったか? もしそこで手に入れたのがレアメダルとしての力だけでなくクラファイティモードへの自在な変形能力だとしたら、

「カラス、思った以上にヤバいわ。」

「何?」

クラファイティモードの力は強力すぎる。レアメダルでなくても、リミッターを外したビーストマスター並の力が引き出せるかも知れない代物だ。イツキもユウトもロボットで使用したことはない(それに今はクラファイティモードにするための追加パーツが使い捨てであるため持っていない)が、コウジは今使おうとしている。

「マジで5分経たずに止めに入ることになるかもな……………」  
……………」

ガンツ！！ガキイツ！！ガガガツ！！ザシュツ！！  
ギヤインツツツ！！！！ザザザツ！！！！

何合か打ち合った後アークとスミロドナツトが互いに離れる。先程までのワンサイドゲームと違い、お互い一進一退の攻防だ。

「見かけ倒しじゃないみたいだな、そのメダフォース。確かに威力全開なんてもんじゃない。」  
「それはこっちのセリフだよ。バーサークを使ってもやや押されるとは……………」

ヒカルは溜め息をつく。コウジの中にある危険な闇を取り除くためにあえて挑発し、この状況を出したのだが……………

「強くなりすぎだ。甘く見すぎてたな。」

念のためにバーサークを使ったのだが、もし使っていなければ瞬殺されていただろう。しかも相手はまだ力が上がっている。バーサークで対応できなくなるのも時間の問題だろう。

「……………ヒカルさんは力使わないのか？それとも特殊だから使えないのか？」

コウジの質問はレアメダルとしての力の事だろう。確かに今はティレルを出していない以上、その力は半分程度しか使えないだろう。だが、確かに使えばコウジを倒せる自信はある。それこそバーサークを使わなくても。だが、

「使うつもりはないな。」

そう言つてアークを構えさせる。その言葉通りヒカルはレアメダルの力を出すつもりはなかった。今のコウジにレアメダルの力を出して勝つたとしても彼の闇は払えない。故に使うつもりはない。幸いミュータントと違いレアメダルにはレアメダルの力を使わないと勝てないなんて条件はないので、本気を出せばギリギリでも勝利できるだろう。……かなりきついが。

「へえ……まあいけどさ。そんなんで俺達に勝てるのか？」

「今の君は力に吞まれている。彼らじゃあるまいし、それでは僕らは強くなれない。」

コウジの問いにそう答える。気に入らないのか、コウジの顔が険しくなる。

「……そんな詭弁、力がなきや意味ないと思うけどな。

俺はあいつに負けてそう実感した。」

「じゃあ、尚更力を使わないよ。」

「おもしろえっ！！！」

コウジが吠え、スミロドナットの爪がアークへと振り下ろされる！突然の攻撃、だがアークはバーサークの効果により全能力。それは射撃攻撃の威力だけでなく反応速度や、運動性能までが上がる

ている。いきなりとはいえ……………

「っ……！」

シュッ……！

「もう追いついてきたのか。バーサークの反応速度に……………」

「掠りちよつとした傷がついた程度。だが確実にアークの動きを捉え始めていた。それだけでなく……………」

「……………クラフィティモードか。」

たった一度。二年前、ブラックデビルの元へコウジ達を先に進ませるためにただ一人残り、レアメダロット達と戦うスミロドナットにスバルが与えた力。その時の姿が再び降臨していた。

「あの姿は……？」

カラスが驚きに声を上げる。見るのは初めてなのだろう。通常のメ



ダチエンジン対応型の機体ではありえない変形なのだから。

「……どうする？行動すべきか……いや、クラフティモードになられた以上レアメダルとはいえ止めるのはキツイ本気で零牙を……クソッ！それしか手はないのか！？あのときみたいに、俺はまた……！！！」

隣ではユウトが何か葛藤している。これほどまでに動揺するユウトは初めてだ……

「ユウトっ！！」

そこに観客席にいたはずのイツキが現れる。ここまで同じように走ってきたのだろう。ゼエゼエと息を切らしている。

「イツキ！？アリカはどうしたんだ！？」

「一緒に来てる。キララさん達の所にいるよ。」

そうして顔を向けた先にはキララ達に守られるようにして囲まれているアリカの姿がある。彼女も話を全て聞いたのだろう。この試合が危険だと分かっていることが表情からうかがえた。

「にしても何で来た？足手まといっって言っただろうが。」

「……やっぱりじっとしてるなんてできないよ。それにスミロドナットのあの姿、クラフティモードだろ？今のコウジが使ったら……」

本当に心配なんだなコウジの、友達のことを。ある意味羨ましい……

「でも、僕達が何かする必要はないよ。」  
「何？」

イツキの言葉にユウトとカラスが驚く。イツキの性格ならこの現状は見過ごせないはずなのに……

「ヒカルさんが出てるんだ。あの人に任せれば大丈夫!!」

ザシュザシュザシュ!!! キンツツ!!

「ハア……ハア……ハア……!!」

最早バーサークなど意味を成さない。クラフィティモードとなったスミロドナツトは最早目にも映らない。アークもなす術もなく切り刻まれていく。

「にしてもしぶといな!!! いい加減倒れるよ!!!」

ヒュッ!!! ザシュウウウウ!!!



「こいつ……!!」

「参った。まさかバーサークがこうもあっさり破れるとは……  
・・レアメダルの力は本当にすごい。」

ヒカルは軽口を叩いているが、内心は冷汗が止まらない。先程からの一方的な攻撃。そしてバーサークを使ったことでの反動。もうアークは立っているのがやっとだ。だが、

「けどコウジ君。こんなものかい、君の力は？」

「何？」

「スミロドナツトは確かに強い。ここまでアークが追い詰められるんだから。でもこれはあくまでメダルの性能によるところが大きい。これじゃあまだ前の方が強かったように思うよ。」

「負け惜しみか？案外せいんだな。」

そうは言いつつヒカルの言葉にコウジは少し動揺し始めていた。メダルによる力は強い。だが君は弱くなった……

「そんなこと……ないはずだ!!」

「なら……次の一撃で決めよう?」

ヒカルはニツコリ笑ってそう言う。その言葉とともにアークが右腕と左腕を前にあげ、光が溢れ出す!!

キユイイイイイイン……!!

「僕も疲れたし、見ての通りアークも動くのがやっとなんだ。だか

らてつとり早く次で決めよう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ハツタリ・・・・・・・・ではないだろう。確かにもうアークはポロポロだ。動ける力なんて残っていないだろう。なら、

「いいつすね。受けて立つぜヒカルさん！！」

コウジはニヤリと笑いスミロドナツトも先ほどとは比べ物にならないくらいに輝きだした！！

「決着・・・・・・・・ヒカルさんは大丈夫か？」

もしイツキの言うとおりヒカルが勝てるのなら自分達はスミロドナツトを破壊せずに済む。だがいくら伝説のメダロツターと言えど、一対一に持ち込んだ時点でヒカルが勝てるとは思えない。特にスミロドナツトの力は予想を遥かに超えていたのだから。

「大丈夫だよ。」

だがイツキは心配していないようだ。ユウトに向かってニッコリと笑い言葉を紡ぐ。

「ヒカルさんは本当にすごい人だもん。コウジを元に戻してくれる

だろうし、悔しいけど勝つさー!!」

(後一発・・・・・・・・この一斉射撃に賭けるしかない。)

最後の勝負。正直スミロドナツトの力がこれほどまでとは思わなかった。メダルは強くなっても、今のコウジは力に呑まれかけている。そしてそれゆえにコウジ自身の戦いが出来ていない。メダロットと心を通い合わせられていない。スミロドナツトが一言も発していないのがその証拠だ。そんな状態で出される攻撃などでは自分達は倒れない。

「問題はどうか当てるか、だな・・・・・・・・」

スミロドナツトのあのスピードに当てる方法。真っ直ぐ直進するだけだとしても放つ前に終わっているなんてこともあり得る。

「って、こんなんで悩んでたらイツキ君やキララに笑われるな。」

それにユウキにも・・・・・・・・そうだ、四の五の悩んでいる暇なんてない。僕達は前に進むしか無いんだ!!

「準備はいいか？ヒカルさん。」

「……………いつでもいいよ。」

コウジの声に短く答える。スミロドナットの最後の一撃。覚醒を果たした以上、ユウトやカラスと同じように『奥義』を出してくるのだろう。だが……………

(僕は負けられないんだよコウジ君。あいつを助けるまではね。)

キュインキュインキュイン……………!!!  
ゴオオオオオオオ……………!!!

アークとスミロドナット。二体の気がぶつかり合い火花を散らす……………

「……………行くぜ!!!」

そしてスミロドナットが駆ける!!!牙と爪、全身を使った一撃必殺の攻撃。それが……………

ブンッ!!!ブンッ!!!ブンッ!!!ブンッ!!!

1、2、3、4……………10はゆうに超える数となってアークに襲いかかる!!!残像と本体が見えたのはほんの一瞬。瞬きする間もなくスミロドナットは消え……………

「終わりだ。」

ズシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!!!!

アークの体を引き裂いた!!!

「アーク!!!」

ヒカルの切なる声が響く。だが、もうアークは動けない。

「.....圧倒的な速さは無数の残像を生み光速を超える。  
これで勝ったぜ.....!!!」

コウジは勝利に震える。そうだ、俺はヒカルさんに、何かをさせる  
間もなく勝ったんだ!!! そう信じて.....

「ようやく.....捕まえられたよ。」

「なっ!?!」

アークはスミロドナットに抱きつくようにして倒れていた。だがま  
だ機能停止はしていない!!

「危険な賭けだったけどね、肉を切らせて骨を断つ。こうでもしな  
きゃスミロドナットは捉えなれなかったんだけどね。」

良く見ればアークは銃口をスミロドナットに向けている。まさか・  
.....!!

「二度も幸運が続くなんて思わないけどね。でもレアメダルの力を



使わずに勝つにはこんな方法しかなかったから……ごめんなアーク。」

「気にしないでくださいヒカル。俺はあなたに従います。それに俺なら大丈夫です。あなたと同じようにまだ倒れる訳にはいきませんから。」

そう言つてヒカルとアークの呼吸が合わさる!!そして……

「止めるおおおおおお!!!!」

『一斉射撃・ゼロ距離発射!!!!』

アークを中心に光が会場を呑み込んだ……

第34話：負けられないんだ……（後書き）

お久しぶりです。長らくお待たせいたしました！！いやあ疲れた・・・でも少し焦ったからただでさえひどい文章力がさらにメチャクチャに・・・あとで読み返したとき変なところがあつたら即訂正せねば。さて、これでようやくコウジとヒカルの戦いは終わりです。長かった一回戦もこれで終了！！でも物語はまだまだ終わりません。下手すりゃあと一年くらい続くかも。まあとにかく今後ともよろしくお願いします。次の話でまた！！

### 第35話：ユウトと四天王の関係？

シューウウウウウウ……………

光が晴れ、最後まで立っていたのはアークだった。そして彼の足元には全パーツが破壊されて横たわるメダロットが一機。

「アーク……………よくやったよ。」

「ハハハ、言ったでしょう？俺はこのくらいじゃ倒れません。けど……………流石に限界です。」

そう言うと同時に、

バアアアアン！！！！

アークのパーツも全て壊れ、機能停止した。バーサークを使い、耐久力も強化していたこと、スミロドナットは覚醒していたがそれでも一撃一撃はまだそれほど危険でなかったことから今まで平気だったが、それでもバーサークの使用、それほど危険ではないとはいえスミロドナットの猛攻に『奥義』の直撃、更には一斉射撃の零距离発射。スミロドナットより先に機能停止しなかったのが不思議なくらいだ。しかし、結果はヒカル達に軍配が上がったことに変わりはない。

『りよ、両機ともに機能停止を確認。しかし、時間差で……………ヒカル選手の勝利です！！！！』

うるちによる勝利宣言も行われ、ヒカルはようやく息をつくことができた。レアメダルの力を使わずに勝つ。運よく今回は勝利できたが、一つ間違えば負けていたのは自分達だった。やっぱり無理はするものじゃない。

「……はあく。負けちゃったな。」

「コウジ君……」

敗戦のショックか、試合中るときと比べてコウジは多少冷静になったように見える。

「あいつに負けてから、ちょっと熱くなりすぎてたみたいだな、俺。スミロドナツトのこと全然考えてなかった。」

言葉こそ穏やかだが、コウジは唇を噛んでいる。先程までとは違い、スミロドナツトに無理をさせ過ぎた自分への怒りだ。この戦いでスミロドナツトは確かにレアメダルの力を覚醒させたが、一歩間違えば永遠にパートナーを失いかねないほどの急激な成長だったのだから。

「過ぎたことを悔やんでも仕方ないさ。それよりもすまないと思っている。敢えて覚醒させるような状況を作ってしまった。」

「いいよ。ヒカルさんはさっきまでの俺が危ないと思ったからあぁしたんだろ？」

「それもある。でもそれ以上に別の理由からだ。」

「別の理由？」

コウジは怪訝そうな顔をするが、ヒカルはそれ以上何も言わない。

「……まあいいか。それよりヒカルさん。気を付けてくれよ。俺に勝ったってことは次は……」  
「分かってる。大丈夫だよ。」

そう言っただけで微笑み、ヒカルはステージから降りていく。

「コウジ……！」

「コウジ君……！」

ヒカルと入れ替わるようにして、イツキやカリン達がコウジに駆け寄っていく。後は彼等に任せよう……

「ところで君は行かないのかい？」

「分かってるでしょう？俺はあんたに聞きたいことがある。」

ギリギリと、基本的に敵にしか見せない好戦的な目をヒカルにする。今の戦いでユウトには納得がいかない部分があったのだ。

「コウジに何をやったんだ？」

「何のことだい？」

「俺には隠し事は通じないよ。確かにここにいる皆さんが信じてたとおりあんたはアーク一体だけ、しかもレアメタルの力も使わずにスミロドナットを倒した。確かに相手がレアメタルであろうとメダロットなら、腕に覚えのある実力者なら苦しいだろうけど勝てるかもしれない。」

そこまで言っただけで一息つく。

「じゃあ何が気になるんだい？」

「コウジが無傷なこと。」

間髪入れずにそう答える。

「俺の経験だと、『奥義』の発動のためにはメダロットとパートナーの間に高いシンクロ率が必要。つまりスミロドナットがダメージを受けたらコウジの方も同じとは言わないまでも相応のケガを負う筈なんだ。けどコウジは全くの無傷……もちろんそれにこしたことはねえけど少しおかしいだろ？」

「……………」

「あれは『奥義』じゃない、なんて嘘は通用しないよ。正直に言ってもらえると俺としてはありがたいんだけど……………」

そこまで聞いてヒカルは改めてユウトを見る。この少年には誤魔化しはきかないだろう。自分よりも場数を踏みかなりの知識を持っているし、それに……………」

「……………場所を変えようか。僕の方も聞きたいことがあるからね。」

「? いいけど……………」

ヒカルはキララ達に先に戻ると伝え、ユウトと共にその場を後にした。

「残念だったねコウジ君。最初はともかく後半は押してたのに。」  
「いや、いいんだよ。色々ためになったし。それより悪いな。負け

ちまつて。」

カリンとハチロウに向かい深く頭を下げるコウジ。

「そんな、頭を上げてくださいコウジ君！！気にしていませんから。」

「そうそう。残念だけど仕方ないよ。相手が悪かった。」

本当に気にしていない様子で二人が慌ててそう言う。それを聞き、再びごめんと saying からコウジは頭を上げた。

「でも良かったよ。コウジも大丈夫みたいだし、ユウトの危惧してたようなことにもならなかったし。」

「そうだな。結果的にはプラスの方向に働いたことの方が多い。」

「まあ……そうかもな。」

苦笑いを浮かべながらイツキ達の言葉に賛同しておく。

「まあ何はともあれ、お前らは頑張れよ。俺達は負けちまつたけどお前らなら絶対勝てる。」

「うん！！任せてよ！！！」

ガツチリと握手を交す。これでとりあえずは……

「……楽しそうなところ悪いんだけど、イツキ。あんたまだ私との話終わってないこと忘れてないわよね？」

「あ、アハハハ……」

しまった。肝心なこと忘れてた……

「もう一度キチンと説明してもらおうよ」  
「い、いやあああああ!!」

「やはりあがたヒカルが勝った……当然のことですが。どうですかマモン？楽しめそうですか？」

「ああ。正直甘く見すぎてたぜ……ククク、お前嬉しいかタイヨウ？」

黒衣の問いに答えつつ、傍らに控える男にも話を振る。

「当然。ヤツはこの俺に初めて土をつけた男だ。この時をどれだけ待ちわびたことか……」

タイヨウもマモン同様、かなり機嫌がいいと見える。まあ無理もないが。

「私はルシファー様に今の状況を報告してきます。二人とも監視がないからといってハメを外さぬよう。」

「心配すんな。そんなことしねえよ。」

「……」

少し不安は残るが仕方ない。黒衣はその場を立ち去った。



「うっうっ……何もここまでしなくても……」

「うっさいわねえ。あんたが悪いんでしょあんたが!!」

「だからって……」

イツキ達は会場を出た後、フューン要塞の中、自分達のチームの控え室（もはや個室と言ってもいい）に向かって歩いていくのだが、今までのこと、その全てを話終えた後イツキの両頬は真っ赤に腫れていた。一昔前風に言々と紅葉型に。

「……大変だったなイツキ。」

「カラスも見てないで助けてよ……」

ポンッと憐れみを込めてイツキの方を叩いてくるカラス。一昔前から考えられなかった親しげな行為なのだが、今はこの行動が恨めしい。

「いや、その……アリカは怒らせると怖いことが分かったんでな。さすがに俺までそんな目にあうのは……」

さっきのことを思い出したのか徐々に語尾が弱まっていく。カラスは慣れていないから仕方ないし、僕でさえ鬼気迫るものを感じたからなあ……けどもつと恐ろしいものがあるんだよカラス。

「……こんなことで腰が引けてたらカリンちゃんが怒ったとき身がもたないよ。」

そう。彼女が怒った時はアリカの比ではない。イツキとしては怖い

ものランキングで間違いなくTOP3に入るだろう。

「……………肝に銘じておく。」

イツキの真剣な顔で語られる事実にはカラスも重々と頷く。そう、可愛らしい人、おとなしい人ほど怒った時は恐ろしい。カリンは正にそのことを体現しているのだ……………

「ま、まあとにかく今は次の試合について考えるぞ。次は四天王だったな？」

今までの話は打ち切り、次の対戦相手であるミズチ達について話し合うことにする。

「うん。まあ四天王って言ってもシュリはなくて代わりに僕やアリカの担任でミズチの姉でもあるリュウコ先生が入ってるけど。」

まあだからこそ逆に更に危ないチームになったともいえるが……………

「四天王の噂は俺も聞いたことがある。俺はずっと空にいたから直接の面識はないが……………全員が一人一校、東西南北に位置されている代表ともいえる学校を支配できるほどの地位と権力に加え、ロボットにおいても凄腕と聞いている。もっともさっきの試合を見る限り『朱雀のシュリ』は余り強いとは言い難いが……………」

確かにさっきまでの戦いを見る限りそこまで強い印象は受けられないだろう。だがイツキは知っている。二年前、何の慢心もなくイツキの前に立ちふさがったシュリの実力を。南を守護する朱雀の二つ名に

恥じぬ実力を。

「まあ少なくともまだシユリは俺達とは戦わないからいいか。」  
「だけど油断は禁物だよ。四天王にはミズチやハクマがいる。」

そう、コクエンは確かに強敵だがシユリ以上に慢心しやすい。それに最近ではアリカも勝てるようになってきたし、ユウトやカラスが後れをとるなど考えられない。だが、残りの二人は違う。ロボトルの腕もセンスも今まで戦ってきた中でもトップクラス。何より彼らはほとんど油断しない。

「でもさ、ミズチ君が敵チームのリーダーならすぐに勝てるんじゃない？」

それまで会話に参加せず一人で先に進んでいたアリカが会話に交じってくる。

「すぐに勝てるって……ミズチの実力はアリカもよく知ってるだろ？」

「だってミズチ君の愛機ってミリヴァイアサンでしょ？潜水型メダロットの。」

ミリヴァイアサンとは青竜型の（というよりリヴァイアサンだが）を模したミズチの愛機である。相手の装甲を4分の1まで下げるスタティックと言う攻撃を得意とする潜水型メダロットだ。

「こつちにはユウト君のロクショウがいるじゃない。ロクショウのつけてるパーツはドークス。対応防御のエキスパートよ。」

確かにドークスは様々な機体に対応できるメダロットだ。メダチエ

ンジ後は、特に潜水型や飛行型のメダロットに対して絶対的な強さを見せつけることができる。その理由はその2タイプに対して弱点とも言うべきアンチ攻撃を持っているからなのだ。確かにそれを使えばミズチのメダロットを瞬殺出来るだろう。

「……………それも確かに戦略の一つだが、少し卑怯な気もするな。」

「何言ってるのカラス君？これも立派な戦術よ！！でしょ、イツキ？」

イツキに向かって意見を求めてくる。確かに普通の相手なら通用するだろう。だが……………

「ミズチがそんな甘いわけがないじゃないか。それに……………」

「それに？」

「ミズチが本当にミリヴァイアサンを使ってくかどうかも分からない。」

そう、ミズチは果たして本当にミリヴァイアサンを使うのか？確かに彼の愛機ではあるが、イツキは表現しがたい何かを感じていた。

「それに一回戦では出なかったお前らの担任教師。その実力も未知数だしな……………」

『出来れば試合に出ないでほしいなあ……………』

思わずイツキとアリカの声がはもってしまふ。カラスには分からな  
いだろうこの恐ろしさ。あれを味わうのは学校だけで十分すぎる……………

「それは残念だったな。悪いが姉貴はお前らと戦いたくて仕方ない

らしいぜ？」

そんな二人への死刑宣告にも等しい事実。ロボットのようには首を力クカクと動かし声が出た方に向き直ると……

「まあ一回戦は我慢させた以上、どのみち二回戦にくらい出してやらないとスネルからな。」

「ミズチ？家に帰ったら覚えておきなさいよ？」

そんなことを言いながらミズチ達が立っていた。

「調子はどうだ、イツキ？」

「ねえミズチ？もしかして今までの会話聞いてた？」

気付いていなかったとはいえやはり他人に、それも次の試合についての会話を本人達に聞かれてしまったかもしれないということは、どこか決まりが悪く思わず声が震えてしまう。

「ああ、心配しないでよイツキ君。僕ら君達の会話なんて耳にしてないから。」

ハクマがにつこりとその考えを否定する。どうやら何も聞かれていないみたいだ。

「そ、そう？ならいいんだけど……」

「変なヤツだな。どうせ次の俺達との試合について考えていたんだろっ？」

な、中々鋭い。まあ普通はそこに答えがたどり着くよなあ。

「まあいいさ。ところでお前とは初対面だよな『天空の覇者』殿？  
あんたのことは色々耳にしてる。」

ミズチがカラスに向き直り、挨拶を行う。カラスも改めてミズチに  
向き直り、

「こちらこそ初めましてだな『青竜のミズチ』。元四天王のリーダ  
ーにしてイツキにも引けをとらない実力者。一目見ただけでもそこ  
いらのメダロッターとは風格が違う。」

手を差し出して握手を交わした。

「オイ、社交事例なんざどうでもいいだろ！！メイド少女、四人目  
はどこにいる？」

「イツキだつてば……」

もはや何度目かも分からない訂正（もう諦めすら入っている）をし  
ながらふと疑問に思う。

「四人目ってユウトのことだよな？知らないメダロッターだから気  
になるの？」

「いや、知らないわけじゃない。俺達は全員アイツとは顔見知りだ。」

「え!？」

それは意外だ。リュウコ先生ならいざ知らず、ミズチ達までユウト  
と知り合いなんて。だが言われてみれば、ユウトはミズチ達の試合  
を見ているとき彼らへの反応がかなり馴れ馴れしかった気が……

「けど一体どこで？」

「ああ、それはな……」

と、ミズチが口を開きかけたときだった。

「なんだ、四天王（三人だけだけど） + じゃんか。」

前から軽いノリでユウトが歩いてきた。

「久しぶりだなあ。けど相変わらず鉛筆は小物オーラ出しまくってんのな。」

「コクエンだ！！お前もそのヘラヘラした態度は相変わらずだな！！」

どうやらユウトは相当コクエンに嫌われているらしい。まあユウトの方もコクエンを見る目だけはどこか冷たいものがあるのだが。

「ええつと……」

「あ、イツキ達にはまだ言っていなかったっけ？俺達は二年とちょっと前、多分お前が四天王に関わる結構前に知り合ったんだ。」

困惑しているイツキに向き直りそう教える。

「知り合った？そんな優しい出会いじゃなかったと思うが……」

「思う、じゃなくて実際そうだったよ。まあ印象的ではあったけど。」

ミズチとハクマがどこか遠くを見ている。そんなに印象的だったのか？

「……ちなみにどういう出会い方を？」

恐る恐る聞いてみる。するとよくぞ聞いたとでも言いたげにコクエンがユウトを指差し、

「コイツがいきなり俺達にケンカふっかけてきやがったんだよ!!」  
吐き捨てるようにそう叫ぶ。まあなんとなくそんな気はしていたので、イツキを始めアリカやカラスと一緒にジトーツとユウトを見る。それに対し、

「あ!!? テメエなに自分に都合いい記憶捏造してんだよ。身の程をわきまえないでケンカふっかけてボロ負けしたのはお前だろ!!」  
心底嫌そうにコクエンを見ながらそう反論するユウト。お互いのことをかなり嫌っているらしい。ユウトもコクエンもさっきから睨みあっている。

「俺は負けてねえだろうが!! そっちこそ勝手に記憶を捏造してんじゃねえ!!」

「はあ? 何言ってんだ? あれはお前の完敗、いや惨敗だろうが。応援来てうやむやになっただけで!!」

「そもそもケンカふっかけてきたのはお前だろうが!!」

「俺は穩便に話し合ってたろうが!! そこにお前がだなあ!!」

「ストーーーーップ!!!!」

果てしなくヒートアップしていきそうな二人に我慢できずアリカがわって入る。

「ミズチ君かハクマ君かどっちでもいいから教えてくれない? この



二人だと分かるものも分からないから。」

イツキにユウトをカラスにコクエンを押しさえつけながら尋ねる。ちなみにリュウコ先生はクスクス笑いながら事の成り行きを黙って見守っていて役に立たない。ミズチもそれに頷き、語り始める。

「そ、そうだな。あれは確かアネキがイツキ達のがクラスからメダロツチのデータを奪った後のこと、珍しく四天王が一同に会していたときだった……。」

「ミズチ、俺達はいつまでこんな下らねえことしてりゃあいいんだ？」

四天王として支配体制を敷いたはいいものの、早くも飽きたのかコクエンが愚痴をこぼしていたのを覚えている。

「全然強えやつもいねえし、退屈だぜ？」

「相変わらず美しくありませんわねコクエン。でも確かにただ支配体制を敷いているこの状況は暇でしかありませんわね。最近キノコの奴が色々動いているようですけど……。」

シユリもそんな愚痴をこぼしていたかな。まああの時は確かにただ支配体制を敷いてるだけだったからな。親父の命令に従いさまざまなメダロツチ達的能力を計測していても暇なのに変わりはないな。た。

「そういえばコクエン。一緒に来ていた君の部下達は？」  
「ん？30分前に見回りに出たはずだが……なんだまだ戻ってねえのか？」

まあしかし、退屈を吹き飛ばす嵐なんていつも突然吹いてくるもので、

「こ、コクエン様……」

「おせえぞ！！ちょうどお前らの話をしたところだ。何してやがった！？」

「あ、アイツ強すぎます……」  
「バケモンだ……」

見回りから帰ってきたコクエンの部下達が突然倒れたんだ。流石のコクエンもこれには驚いてた。まあ、あいつにとっては一番使える部下達だったらしいからな。

「なっ！？どういうことだこれは!？」

「落ちて着けコクエン。お前の待ち望んだ強敵の登場らしい。」

まあ、ここまで話せば分かるよな？その部下達を倒した侵入者こそ……

「やっぱバレた？まあこっちは隠すつもりもなかったんだが……  
・普通に正面から入ろうとしたらそこにのびてる奴らがからんできたからさ、ちよっと遊んでやった。あ、もちろん口ボトルでだぞ？」

軽いノリだった……今考えてもな。

「……反応なし。つーか落ち着いてんなあ……まあいいや。初めまして、『朱雀のシユリ』『白虎のハクマ』そして、『青竜のミズチ』。会えて嬉しいよ。」

「おいテメエ！一人忘れてんだろっつが！！」

「ん？ああ、そういえばさつきから気になってたけどお前誰？四天王じゃないよな……ん？そういや四天王のはずなのに三人しかいない……なあ玄武の二つ名の四天王は今日休みか？」

あの質問をしたときの顔は今でも覚えている。本気でそんなことを聞いている顔だったからな。

「いや、そこで騒いでるヤツが最後の四天王だ。」

「うっそだあ。あ、でも言われてみればそんな気も……ええつと名前は鉛筆だっけ？」

「『玄武のコクエン』様だよ！！バカにしてんのか！？」

「いや、黒鉛ならやつぱ鉛筆でいいじゃん。それに自分を様付けなんてすんなよ。この節操無しが。」

「何！？」

「名前こそ覚えてなかったけどお前のやってることは何かムカついてっから知ってるんだよ。花嫁探し……だっけ？小学生のくせに気が早いにも程があんだろ。」

「なん……！！」

「ところでこんなところに何をしに来たんだ？友好の挨拶……・と云うわけでもないだろう？」

「もちろん。ちよつとお前らの親玉が企んでる計画さ、俺としてはちよつと認められないんだ。メダロット三原則についてのお前らの考え方には共感できるところもある。けどエコー装置とかはちよつとなあ……」

「……どこまで知っているんだ？」

あの時は本当に驚いたな。見ず知らずの少年が一体……  
つて。

「知りたい？けどダメ。まあ俺としてももうチヨイ時間はかかるし、どうせならここでお前ら潰しとくのも悪くないかな。」

そう言ってロクシヨウを召還したそいつはものすごく黒い笑顔をしていた……

「ユウト……」

「何やってるんだお前……」

「この話本人の口から聞いてたら笑い話にしか聞こえなかったわね……」

三者三様の反応をしているが、全員の共通点としては皆呆れかえっていた。ていうか結局先に仕掛けたのはユウトだな……

「ユウトって最初っからコクエンのこと嫌いだったんだね……  
……そう言えばカリンちゃんをさらったのも嫁探しの一環だったっけ……」

「え？カリンちゃんも鉛筆にさらわれてたのか！？お前つくづく最低だな……」

そこまで話を聞きイツキは過去にカリンがさらわれた時のことを思い出す。ユウトは知らなかったらしく（まあ当然だが）コクエンのことを更に見下したような視線を送った。

「うるさい！そんな女はもうどうでもいいんだよ！俺の嫁はそこにいるメイド少女だ！」

「勝手に決めないでよ……それに僕は男だ！」

ていつか本気で僕を嫁にしようとしてるのか！？もうコクエンに近づかないようにしよう……

「まあお前らの馴れ初めは大体分かったが……そもそもなんでユウトは四天王に会いに行っただ？」

話を聞いてもまだ消化されない疑問。カラスはそれをユウトにぶつける。

「うーんと……カラスは知らないだろうけど、四天王はミズチ達の父親オロチがS-R計画のために用意した駒なんだよ。四天王が四方に配置されていたのはその計画の一環としてメダロットを支配し操るエコー装置を配置し守るため あ、ちなみに四天王が子供なのはメダロットとのシンクロ率がその方が高いからな。んで、そのS-R計画はオロチがヘレケ博士に師事したため生まれたものなんだが、まあ俺にとってもそんな話は無視できるもんじゃない。俺は信頼できる筋からその話を聞いててリバティーズとは別に行動してた。まあ最終的には俺の目的を優先して四天王のことはイツキ達に任せただけ。」

「じゃあミズチ達を止めるために殴りこみに？」

「ま、そんなところだ。」

あつげらかんとユウトは言うが、中々すごい。それはつまり四天王全員をまとめて相手したってことで………

「まあそこで鉛筆を筆頭に四天王全員を片付けようと思ったんだけど……鉛筆はともかく予想外にミズチ達は強くてな。正直俺自惚れてたつて思ったね。あつちの戦いはもちろん、普通の口ボトルでも俺はそれなりに強い自信があつたんだぜ？それがあそこまで苦戦して、しかも決着つかずで援軍は来るし、さすがに俺もその場は逃げだした。」

今でも悔しいのか地団駄なんて踏んでいる。よっぽど悔しかったんだろうけど四天王全員とまともに張り合うなんて………

「いや、でも僕らはそんな有利な条件でも君を仕留めきれなかったんだけど………」

「タイムンでやってたら負けてただろうな………」

「いやそれはない。そんな時の俺は多人数戦に慣れてたからな。タイムンでやりあつてたらお前ら二人とはどっこいどっこいだと思うぜ？」

コクエンへの態度とは対照的に二人にはイツキ達と同じように友好的に接している。一度は敵対してた仲だというのに。まあそれは自分にも言えるか。

「まあともかく次はお前らなんだよな。きつそうだなあ………」

「心にもないことを言わないですよ。」

「いやいやマジだつて。ところで先生も強いんだよね？鉛筆と代わつて出るの？」

隣で叫ぶコクエンを無視しながら全く会話に参加していないリュウコ先生に向かつて問い掛ける。それは質問ではなく確認。しかし尋ねられた本人は、

「さあ?どう思う?」

と珍しく悪戯っぽい笑みを浮かべただけで、肯定も否定もしなかった。

「……まあいいさ。出てくれないなら逆にありがたいし。ただ……」

今度はユウトの方が意地の悪い笑みを浮かべ、

「隠し玉があるんなら出した方がいい。実力を隠していたとはいえ一回戦の様な編成だと簡単に崩せる。例外が一部あるけど俺とロクシヨウは同じ相手には二度と遅れはとらない。それに見てみたいしね。アレを。」

「!?!」

ミズチ達が予想もしていなかった言葉を吐いた。

「……全く、お前何者だ?どこまで知ってる?」

「警戒するほどじゃない。一回戦を勝ち抜いたチームはどこも何か奥の手を隠してると思っただけさ。その様子だて当たりかな?」

「最初から目星はついていたんだろ?油断できないヤツだな。」

「???」

ユウトとミズチの間で交される会話が良く理解できない。つまりはミズチ達はまだ何か隠して射いて、ユウトはそれが何か気付いてい

る？

「いいのかミズチ？」

「下手に隠してもコイツは誤魔化せない。それに分かったからといって俺達が不利になるわけじゃない。」

コクエンの問いにそう答えミズチはイツキに向き直る。

「イツキ。」

「何？」

「明日の試合、俺達は負けない。今持てる力を全てぶつけてやる。だからお前達も全力で来い。」

「ミズチ……」

ものすごい気迫だ。気押されそうになってくる。けど……！

「望むところさ……！僕達だって負けないよ……！」

「フツ。期待しているぜ。」

そしてミズチは仲間を引き連れその場を立ち去る。

「ねえユウト。」

「ん？」

「ミズチ達が隠してる奥の手について何も言わなくていいからね？」

「お前らしいな。安心しろ、ちょっと考えれば簡単に分かる問題さ。わざわざ俺が言う必要はないよ。」

「ありがとう。」

そう言ってミズチ達が去った方を見つめる。明日の試合、苦戦は必至だ。けど、



「皆。明日も勝とうねー!!」

「当然よー!!」

「ああ。」

「今からワクワクするぜ」

決意を新たに明日に備えて控室でもう休もう……………

## 二回戦

・ Aブロック

・ Bブロック

第一試合・イツキチームVS四天王

第一試合・チームアンダーシエルVSリバティーズ

第二試合・チームカイザーVSチームマモン

二試合・メダロット部VSチームアスモデウス

第

二回戦、この戦いも激闘が繰り広げられることだろう。宿敵との戦いを喜ぶ者、復讐に燃える者、未だ実力を隠したままの者、真意が掴めない者、友を救うため力を取り戻した者、一線を踏み越えてしまった者、純粹に大会を楽しむ者、そして誰よりもメダロットを愛する者。様々な思惑と陰謀が今交錯しあい、更なる波乱が巻き起る……………!!

第35話：ユウトと四天王の関係？（後書き）

えー………色々詰め込んでしまったせいでしょうか、今までで一番長くなってしまいました………ちよつと反省。  
ところで今回S・R計画等、メダロット4ネタをふんだんに使っております。詳しいことを知りたい方はメダロット4をやってみよう！！  
では、今回はここまでで。

### 第36話：再戦！悪魔型メダロット！！

「……………それで不審な点は？」

そこは暗闇よりもなお深く暗い闇。ルシファーは一人この空間に佇み黒衣からの定期報告を受けていた。

「……………マモンとあがたヒカル。この対決以外目欲しい物は特に無いな。」

次の試合の組み合わせを改めて確認し、フムと一人納得する。しかし解せない。マブラーが地球に届けた『何か』は恐らくレアメダル使い達に渡っている筈……………というよりはあの少年、天領イツキに送られている筈だ。だがそんな様子は微塵もない。なぜだ？マブラーがあのような行動を起こす相手は天領イツキ以外にいないはずだというのに……………

「何かを失念している？だとすれば何を……………？」

待てよ。マブラーは確か四代元素をそれぞれ受け持つ四体の片割れがいると聞く。無論あのように弱っている状態では全員を送るのには不可能だろうが、一体だけなら？

「『何か』ではなくスピリットを援軍として向かわせたのか!？」

なぜこの可能性を考えなかった!?!少し考えれば分かることだというのに!?!

「お前に新たな命を下す。援軍として潜んでいるだろうスピリット

を見つけたし、抹殺しろ。何か持っているようなら回収も忘れるな。

「  
黒衣に向け新たな命を下す。その気になれば、スピリットの気配を探り当てる事など黒衣には造作もない。」

「スピリットも強力なレアメダルの一種。黒衣の機体の力を持つてすれば……………」

だがその力はある少年のロクシヨウも持っている。つまり先に接触されている可能性もある。この仮説が正しければ我々はゲーム進行に重要な先手を取られたに等しい。だが……………」

「まだ計画に支障はない。残念だがマーブラーよ、貴様の思い通りにはさせんよ……………」

珍しくクツクツと笑いながらルシファーはその場から姿を消した。

「オツハヨー皆！！良く眠れた？」

「まあ、そこそこな。それにしても随分とテンション高いなアリカ。」

「いつものことだよ。」

翌日、アリカの元気すぎる挨拶に既に起きていたイツキとカラスが返事を返す。

「珍しいわねイツキ。あんたがあたしより先に起きてるなんて。」  
「そうかな？まあカラスはもっと早く起きてたけどね。」

実際カラスはかなり早起きだったと思う。少なくともイツキが起きるより30分は早く起きていた。

「ふーん。ところでユウト君は？」

「どうだろう？まだ見てないけど……」

イツキ達もまだ姿を見ていないので何とも言えない。

「あいつは結構朝が弱いからな。まだ寝ていてもおかしくは……」  
「。」

「うるせ〜ぞカラス。お前らが早起きすぎんだろーが。」

そんなことを話しているうちにユウトも起きてくる。まだ目がトロンとして眠そうにしているが、それよりも……

「ユウト。寝癖すごいね。」

普段からボサボサつとしているが今はその比じゃない。爆発していると表現してしまう程にあっちこっちに広がっている。

「気にすんなよ〜。それより『濃い』お茶『ない』？あれで俺の朝は始まるんだけど〜。」

「ホラ。」

カラスがペットボトルを投げユウトが片手でキャッチする。

「お〜!!サンキュ〜。」

そのまま器用に片手で蓋を開けてグイツと飲み始め、

「……………っし!!目え覚めたあ!!」

「……………」

……………いや、もう何も言うまい。

「さて、いよいよミズチ達とロボットルわけだが……………皆落ち着いてんなあ。俺なんか興奮して中々寝つけなかったぜ?」

「僕だつて。特にミズチとは最近戦つてないし……………」

結局学校での合同ロボットルではミズチとは戦えず仕舞いだつた。だから互いにここ最近の実力を肌で感じていないため詳しい実力は把握しきれていない。

「それでもミズチは強い。前よりもずっと強くなつてる。」

「へえ……………なんだ、顔に出てないだけで内心ワクワクしてんじゃない。良いことだ。」

ウンウンとユウトは頷いている。がすぐにその顔が氷つき、

「ところで先生の實力は?」

なんてことを聞いてきた。

「それは俺も気になる。ミズチの実姉だから強いと決めつけるわけじゃないが、相当の實力者なんだろ?」

「そうそう。ビーストキングの右腕として動いていたこと以外知ら

ないからさ。実際どうなんだ？生徒達の目から見て。」

「うーん……………」

いや、そんな目で見られてもねえ……………」

「実際のところ僕達が先生とロボットをしたことはほとんどないと思う。『メダスピードキング』や『ダークロボット』なら結構あるんだけど……………」

そう。イツキでさえリュウコ先生と戦った記憶はごくごくわずかしかない。『メダロットはロボットが全てではない』、その言葉通り様々な競技は教わったのだが……………」

「でも、強い弱いというよりリュウコ先生は上手いんだ。ロボットも自分の愛機の性能も熟知してるみたいで。」

「成程。まあ、ミスチやハクマがいりゃあ決め手になる必要はないしサポートに徹するのかな……………」

そう、上手い。そしてユウトの読み通り間違いなくサポートに徹する筈だ。あの人ミスチやハクマと組んで戦う。あの二人のサポートとして動かれたら面倒だな……………」

「だがなイツキ。熟知しているというのは有り得ないぜ。」

突然、黙って話を聞いていたカラスが口を開く。

「え？」

「メダロットは本当に奥が深い。メダルの特性、相性、進化、メダフォース……………宇宙人の贈り物は今もその大部分が解明されていない。一つ謎を解明するたびに新たに2、3の謎が立ちほだけか

る。俺はユウキさんの元でそれを改めて実感した。」

興奮こそしていないが、嬉しそうにカラスは語っている。

「それに合わせてパーツやロボットも日々進化している。どんな人間もこれらを完全に理解するなんて不可能だ。」

「そうだな・・・同じメダル、同じ機体でも人によってその戦いは十人十色だ。それら全てを知り尽くすのは極めて難しい。俺もたまに思うしな。『このメダロットにこんな戦い方があったのか！?』ってな。」

確かに。どんなメダロットも色々な可能性を秘めている。イツキ自身まだ知らない未知の可能性がたくさん転がっているんだ。

「おっと。いつの間にかメダロット談義になっちまったな。この話はこれでおしまい!! 考えてみりゃあ、まだ朝飯も食ってないしな。」

「そうね。今日もあたし達の試合からだし、早く食べて支度しないよ。」

そのまま朝食をとり、イツキ達は会場へ向かうことにした。

「ようイツキ!! 負けんなよ!!」



「イツキ君、頑張ってくださいね。」

会場へ行く途中にコウジ達の声援を受けながら、いよいよ到着する。

「昨日の試合で負けたチームかな？なんか観客の数が増えてる気がする。」

「それだけじゃないだろうがな。昨日の試合が余程盛り上がったんだろう。」

イツキとカラスはヒソヒソとそんなことを言っているが、ユウトはジーツと試合表を見つめている。

「どうかしたのユウト君？」

「ん？ああ、ちょっと気になるチームが二つ程ね。」

そうして答えながらも視線は表から外さない。

「ふーん。実はあたしもあるんだそういうチーム。予選で知り合った人のいるチームなんだけどね。」

「知ってる。次シユリ達と当たるチームの未だ姿を見せない男だろ？俺もすれちがい程度にしか知らないけど、そいつには個人的に興味がある。」

「勝てると思う？イツキやユウト君達が巻き込まれてる戦いの敵も紛れ込んでるんでしょ？」

それを聞いてようやく視線を上げアリカを見る。そういえば彼女は昨日イツキに全部説明されたんだった。あのときのひどいイツキの顔が思い出されるなあ。と、そんなふざけてる場合ではなく、

「まあ、予選で俺がやりあった相手。つまり今日ヒカルさん達が相

手するチームの筈だけど　なら多分大丈夫だと思う。そいつの正体が俺の読み通りならね。けどヒカルさんが負けない限り俺達ともぶつからないし、何よりそいつのいるチームはもう一人の敵に先にぶつかる。Bブロックにはヒカルさんみたいなメチャクチャ強いってやつもいないし・・・」

「つまりどうなの？」

「分からんねこればかりは。」

肩をすくめ、複雑そうな顔を浮かべる。・・・いや、そんな目で見ないでよ。

「悪いが分からんことは本当に分からんよ。恥ずかしながらBブロックにいる敵についてはほとんど何も知らないんだ。」

「・・・そつか。」

「ゴメンな。役に立てなくて。」

「ううん。気にしないでよ。」

不服そうではあるが一応は納得した様子でアリカは引き下がる。

「しかし最近の女の子はロボットに強くてカッコイイ男が好みなの？」

「え？そんなことないと思うけど。どうして？」

突然の脈絡のない質問に？マークを浮かべるアリカ。そんなアリカにユウトは、

「いや、だって例の少年に気があるんでしょ？いやあ青春だねえ」

なんてことを言ってくる。

「いや、何でそういう発想に行くのよ……」  
「あれ、違うの？つかしいな……俺の読みが外れた？」  
「……どうでもいいがそろそろ始まるぞ。用意できてるか？」

呆れたようなカラスの声を聞き、ユウト達は顔を上げる。向こうも到着し、いつでもいけるようだ。

「鳥の巣頭！！今日はテメエに俺様の偉大さを刻みつけてやろう！！」

「……向こうでアホが何か叫んでんな。つか鳥の巣頭って俺のことか！？アアッ！！」

「お、落ちていてユウト。気にしない方向でいこうよ。」

ガルルルとまるで猛犬の様にコクエンと威嚇しあうユウトを急いでなだめる。ああ……試合前からこの二人の仲の悪さが……

「審判。イツキ。ここにいるバカ二人はさておき、提案したいことがある。」

そんな二人を気にも止めずミズチが言葉を発する。ちなみに二人はミズチの言ったことが聞こえていないようで、カラスやハクマに押しさえられながらまだ睨みあっている。

『おや、なんでしょう？』

それを聞いてようやく出てきたうるちが疑問府を浮かべる。

『ひょっとして、昨日のヒカル君のようにリーダー同士のタイマン

ロボットを行いたいと?』

「いや、その逆だ。」

「逆?」

逆とは一体どういうことだ? ミズチは何を?

「つまり……」

「チームメンバー全員同士でぶつかり合う総力戦、というわけか?」

ミズチの言葉を受け継ぐようにカラスが答える。成程総力戦か。へえ………って!!!

「ええええええええええっ!?!」

『総力戦。つまるところどのようなの?』

「単純だ。普通なら1対1、3対3等で行うチームロボットをお互いのチーム全員で行うだけのこと。幸い俺達のチームもイツキ達のチームも4人ずつ。数が合って丁度いい。」

『成程。』

フム、と何か思索するような顔でうるちがつつむく。

「まあこれは俺達全員が、今回だけ譲れないと駄々をこねてな。別にお前らが嫌だと言うなら強制はしない。こっちの勝手だしな。」

「うーん……」

正直に言えば別にかまわないのだが、4対4ロボットなど今までの例が一つもない。6体ロボットや9体ロボットというものはあるが、それは通常の3対3ロボットを行いつつ一機やられたら次の一機を出して戦いを続け、戦闘可能な機体が一機もいなくなった方が負けというリレー方式だ。いっぺんに4体でロボットするルールなんて

無いし……

「おもしろえじゃん。受けようぜイツキ。」

「ユウト。」

見れば目を輝かせながら期待を込めてこっちを見ている。

「3人でやんのも4人でやんのも大した違いはないし、なんだっただらマンツーマンで相手すりゃあいい。俺その方が得意だし。」

今回は誰とやっても楽しめそうだしなと付け加え、

「ま、ここは皆に任せる。本当なら今回は俺出ないつもりだったしな。名残惜しいけど。」

カラス達に意見を求める。

「どっちでもいい。ユウトの言った通り大した問題じゃないしな。」  
「そうね。まあ実際は意外に違うんだろうけどそれならそれで面白そうだし。」

結果、

「僕達はいいよミスチ。うるちさんが反対しない限りね。」

「フツ、分かった。審判俺達はこういう答えだが、本部としてはどうなんだ？」

『……私が熱き少年少女達の意見を無視できるはずないでしょう。認めます！』

「おっ！！話が分かるねえ」

異例の4対4ロボットが行われることになった。

「クツクツクツ……さあ、誰が俺達の相手をしてくれるのかな!？」

「……ユウト、喜ぶのは分かるが抑える。戦いに支障をきたしかねん。」

喜びすぎてハイテンションなユウトを諫めるロクシヨウ。最早声に諦めが入っているが……

「悪い悪い。けどさ、本当嬉しくね？」

「まあ、な。嬉しくないと言ったら嘘になる。」

「ケツ!!どうでもいいけどよ、俺の邪魔だけはすんなよ!!」

二人の会話に、同じく転送されているメタビーがまざる。ロクシヨウに對抗心ありまくりだ。

「メタビー、いい加減あのことは忘れなよ。」

「いや忘れねえ!!いつか絶対コイツをギャフンと言わせてやる!!!」

未だにあのビリビリがトラウマなのか。いくらメタビーでも、もう忘れてると思っただけだなあ。

「そつか。まあこの試合で足を引っ張らないならいつでも相手をしてやるぞ。」

「ハツハ〜ン。言ったな？」

「ロクシヨウ、それ位にしとけ。」

「御意。」

「メタビーもだよ。」

「ハンツ！！」

ようやく落ち着いた…………ユウトと目配せあい、ともにハア〜と溜め息をつく。

「そういや今回はアリカちゃんのプラス、ラストセーラーじゃなくてギヤラントレディなんだな？」

「まあね。今回はこっちの方が良いと思って。」

「良い判断だ。確かにラストセーラーじゃ危なかったらうから。」

つまりイツキ達の編成はリーダー・メタビー（サイカチス）、ロクシヨウ（ドークス）、G・ODES、プラス（ギヤラントレディ）の4機だ。

「戦略としてはメタビーとロクシヨウが前線に出て、G・ODESが後方からの止め役。プラスは全員のサポートというところか。」

「んな作戦必要ねえよ。各々が好きに行動すればいい。あいつらに作戦が通用するとも思わねえしな。」

「……………それもそうか。」

「あっさり納得したねカラス。」

意外に思いカラスの顔を覗き見てみる。

「どうせ作戦を立てても無視して動く奴が一人いるからな。それをすっかり忘れてた。」

「っせえなあ。団体行動は苦手なんだよ。それよりお出ませませ？」

あいつらの本当の機体達がな。」

「え？」

ユウトの指し示した方では、ミズチ達が今正にメダロットを出そうとしているところだった。

「イツキ。俺はお前とメダロット博士に本当に感謝してる。お前達がいなければ俺はまだ……。」

「ミズチ？」

「だからこそ、こいつでお前と戦いたかった……行くぜ。メダロット転送!!!」

チユインチユインチユイン!!!

「……え？」

「そんな!？」

「!？」

「へえ……そいつが。」

四者四様の反応をその機体に示してしまう。

カラスは何も知らないとはいえその圧倒的な存在感に、ユウトは目を輝かせながら興味深げに見入っている。が、イツキとアリカは絶句していた。その機体は二人と、観客席や控え室にいるだろうコウジ達やヒカル達にとって忘れられない敵。場合によってはビーストマスターやゴッドエンペラーをも凌駕する最恐のメダロット。

「知らない奴もいることだし、改めて紹介するか。この機体こそ俺の真のパートナー。大悪魔型メダロット・グレインだ。」



「喜べミズチ君！！グレインのメダルを、君のパートナーを生き返らせることに成功した！！」

「ほ、本当なのか！？」

それは約半年前のこと。二年前に壊れてしまったグレインのメダル、つまりミズチにとって心から信頼しあえる本当の相棒をメダロット博士に預け修復すること早一年以上。絶望的だったそのメダルを遂に救うことに成功したのだ。

「あいつは今どこに！？」

「メダロットに装着させ、ケースの中で休ませておる。心配はいらんじやろう。ただ、長い間眠りについておったからな。完全に元に戻っているかどうかは……」

「そうか……」

それは半ば予想できていたことだった。長い間眠っていたままだった相棒。ひよっとしたら自分のこともほとんど覚えていないかもしれない。それでも今は嬉しかった。パートナーが蘇ってくれたことが。

「博士。親父が作り出したグレイン。あんたが回収していたはずだよな？今どこに？」

「ブロッソメールと同じく研究室に保管してある。出力もキララ君のゴッドエンペラーと同じように普通のメダロットと同じくらいに下げている。まあそれでもゴッドエンペラーと同じように従来のメ

ダロットと比べ強すぎることに変わりないが……。受け取るかね？」

「いいのか？」

「元々は君の父上の残した物じゃ。それにリミッターさえ外さなければ強すぎるだけの普通のメダロット。問題なくロボトルも出来る。それにあれば君にとっても君の相棒にとっても特別なメダロットじゃと思う。わしが持つよりも君達が大事に使ってやる方がグレインも喜ぶじゃろうて。」

その言葉に嘘は見えない。そんな博士の言葉にミズチは頷き、

「ありがたく受け取る。それからあいつを助けてくれて本当にありがとう……!!！」

その目から大粒の涙をこぼしながら深く礼を述べた。

「安心しろイツキ。メダロット博士がリミッターをつけてくれる。普通のメダロットと何ら変わりはない。」

「でもその機体は……っ!!！」

さすがにアリカは動揺を隠せないようだ。確かにあんな間近でその力を見た人間としては受け入れがたいだろう。が、対するイツキは

「良かったねミズチ!!君がグレインを使ってるってことは、君の本当の相棒も治ったんだらう？」

「ああ。お陰さまでな。」

「良かった……！！本当に良かった……！！！」

本当に嬉しいのだろう。目頭を熱くし、嬉し涙まで流しながらイッキは喜んでいた。

「ってそうじゃないでしょ！！忘れたのイッキ！？あの機体は……！！！」

「グレインだってメダロットだ。確かにリミッターをつけてもその性能は普通のメダロットと比べてかなり高いだろうけど、でも兵器じゃない。メダロットが大好きな一流のメダロッターが扱う一人のメダロットだ。問題はないし僕は嬉しいよ。」

「あんたは……」

相変わらずと言うべきかイッキはグレインをメダロットとして受け入れていた。アリカとしては釈然としない気持ちもあるが渋々引き下がる。

「これがグレインか……いい機体じゃん。何より一目見て分かるくらいパートナーから愛されてる。いい試合になりそうだな。」

ユウトもグレインを見てそう感想を述べる。

「お前がグレイン……ってことは先生が？」

「ええ。あなたの推測通りよ。」

意味深な二人の会話の直後、

チュインチュインチュイン!!!

先生が転送したのは、

「赤い悪魔。まあ女型だし先生がもってる方が違和感無いわな。」

「ブロッソメールまで!？」

リュウコ先生が出したのは赤い悪魔型メダロット・ブロッソメール。ブラククビートル・スタッグのデータをベースにイツキ達から取り上げた様々な機体のデータを組み合わせ完成させたビーストキングの最高傑作の一つ。二年前最後の事件にイツキとヤミクモ兄弟が倒し、その後博士が引き取り修理していたのだが……

「君も治ったんだね!?良かった……!!」

彼女も研究による被害者。それが分かっているイツキは彼女の存在も快く受け入れることができた。

「イツキ、まだ驚くには早い。」

「まだあるの!？」

「俺達が協力して倒したのはブロッソメールだけじゃない。だろ？」

「まさか……」

彼らも?いや、確かにまだハクマとコクエンはメダロットを出していないが……だからと言って『あっち』はともかく『あれ』がいる訳が……

「ハッハー!!!鳥の巣頭!!!テメエに良いもんを見せてやるぜ!!!」

「イツキ君も想像がつくと思うけど。僕らが新しくパートナーに

した機体改めて見せてあげるよ。」

チュインチュインチュイン!!!

そして最後に現れたのは……………

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「ギャツハツハツハツハツハ!!!血が滾るぜえ!!!ヒヤツハア!!!」

吠える黒い悪魔と無駄にテンションが高い白い悪魔だった。

「やっぱり……………」

イツキを除き他のメンバーは皆ポカンとしていた（なんとユウトでさえも!!!）。コクエンが召還した黒い悪魔型メダロット・ブラックメイル。これはかなり古いタイプの機体で、ヒカルのメタバィやロクシヨウと同じくらいのレトロモデルだ。しかしその力は強力無比。当時のヒカルでさえ「ビーストマスター並に手強かった……………」と言わせたほどの力に、ブロッソメール開発の過程で生まれたデータを組み込んだパワーアップ版だ。イツキもミスチも倒すにはかなり苦労した……………

「いや、問題はそれよりこっちなんだけどね……………」

まだ何もしていないのに疲れきった声が出てしまう。その原因は……………

・・・

「ヒャッハアッ!!ピンピン感じるぜ!!強えヤツがゴロゴロいやる。血が湧くぜえ!!」

相も変わらず妙なテンションのまま騒ぎ続けていた。

「・・・ミズチ。何故にベルゼルガまで？」

ベルゼルガ。

それが狂っているんじゃないか 実際狂っている気もする と思っ  
てしまうような、ハクマが出した白い悪魔型メダロットの名前だっ  
た。

彼もブラックメールと同じく、ブロッソメール誕生の過程で復活し  
た機体だ。

ブラックメール以上の力を持ち、イツキもミズチも幾度となく戦っ  
た。だがこのメダロットの恐ろしい所はそこじゃない。なんと全て  
のメダロットをこよなく愛するメダロットバカなイツキをして、二  
度と関わり合いたくないと思わせる程のおかし過ぎる性格こそが危  
険なのだ。ミズチの通うリュウトウ学園で今は性格を含め傷を癒さ  
せていたはずなのだが・・・

「・・・スマン。こいつの性格は俺達のカじゃ治せなかった。と  
いうより誰がやっても不可能だ。」

そう言うミズチの声にも疲れが見える。彼も苦労したんだろうなあ。

「ただ・・・ハクマのことをえらく気に入ったらしくてな。ハ  
クマもハクマで来る者拒まずって感じだし。結果としてこうなった。」

「

「……ハクマ凄いな。」  
「同感だ。」

ベルゼルガと毎日一緒にいるなんて、例え夢でも僕には有り得ないし耐えられない。それを簡単にやってみせるとは……さすがは元トラニシ学園指導者と言ったところか。

「まあ何にせよ、俺達は過去にイツキでさえ苦戦した悪魔軍団を倒さなきゃならんわけだ。ワクワクすんなあ。」

「私は少し不安になってきた……。」

「全員暴走、なんてオチは勘弁したいな。」

……三人とも気楽でいいなあ。

「あのクワガタ野郎はともかく、アイツの意見には賛成だな。特にグレインとは嫌な体でしか戦ってないからな……!!!!」

メタビーにまで変なスイッチ入ってるなあ。

まあ確かに前回グレインと戦ったとき、リミッターが外れたグレインに対抗出来るのは大天使型のパーティクルしかなかった。しかも女の子タイプのメダロット。メタビーとしては男たる自分が仕方ないとはいえ女型メダロットに組み込まれたこと、自分の本当の力でグレインを倒せなかったのが今も不満なのだろう。

「もう待ちきれねえ……早くやろっぜ!!」

「おうよ!!俺達はいつでもいけるぜ!!」

……ユウトとメタビーってかなり気が合いそうだな。そう思いチラッとロクシヨウを見ると疲れたような顔をしている。考えてみればロクシヨウも苦労人なのでは?そう考えるとロクシヨウに親

近感がわいてきた。

「そうだな……挨拶はここまで。俺達もいつでもいける。試合の宣言を頼む。」

『分かりました。』

つと、いよいよ始まるみたいだ。僕達が戦ってきた四天王や悪魔達。彼らが一体となって戦う……その力は間違いなくあの頃より数段上の筈。果たしてどれ程の力が……

「イツキ、手加減はしないぞ。」

「望むところさ。」

そして、ミスターうるちにより開戦の合図が落とされる！！

『それではこれより二回戦第一試合・イツキチームVS四天王の試合を始めます！！それでは皆さん！！ロボットルファイトオオオオオオオオオオオ！！！！！！』



### 第37話：戦闘〜序盤〜

「ヒヤッハアツッ！！久々に暴れさせてもらっぜ！！なあ！？」

一番初めに動いたのはベルゼルガだ。過去の事を覚えているのか、迷うことなくメタビーに突っ込んでくる！！

「ハッ！！テメエの技は覚えてるぜ。両腕はサクリファイス、G・オデスのと同じパーツ犠牲攻撃だ。いくら何でもこんな序盤から放つ技じゃねえ以上、ビビることはねえ！！」

ジャキンとメタビーは右腕を上げて照準を、

「駄目だメタビー！！かわして！！」

イツキが慌てて叫ぶ。と、同時にG・オデスとは別の黒い死神がメタビー目がけ放たれる！！

「コイツ・・・！！」

イツキの指示が早かったのが幸いしたのだろう。かなり驚かされたがメタビーは余裕を持って回避することが出来た。

「なんて考えてんじゃねえだろうなあ！？」

「っ！？」

安心したのも束の間。なんと二発目のサクリファイスが再びメタビーに向け放たれていた！！

「メタビーー!!」

先程とは違い、かわした場所を計算に入れた攻撃だ。かわしきれない!!

「クソツ!!」

かわせないのなら受けるしかない。大丈夫、一発だけなら……そう普通は考えるかもしれない。だが悪魔型メダロットの攻撃のほとんどは一撃で相手を粉碎出来る物ばかり。それは目の前のサクリファイスとて例外ではない。

(一か八か。防ぎきるしかねえ……!!)

そしてサクリファイスは……

シュツ!!

誰にも当たることなく過ぎていった。

「成程。予想以上にキレているな。」

「デメエ……!!」

「また貸し一つ、だな。」

間一髪、ロクシヨウがメタビーを抱えてその場から離脱していた。

「流石ですね。ロクシヨウの動きが更にキレを増している。」

「そりゃこっちのセリフだ。涼しい顔をしていながらベルゼルガの

手綱はしっかり握っている。『白虎のハクマ』の二つ名はやっぱり伊達じゃないな。」

そう言いながらロクシヨウにいつでも攻められる態勢をとらせる。

「今の攻撃はあまり意味がなかった……これは少し間違えませんでしたね。」

そう言った直後ベルゼルガの頭が淡く光り、

「ベルゼルガのパーツが!？」

「こりゃ、予想以上だな。」

サクリファイスの反動で壊れた筈のベルゼルガの両腕が元通りに再生していた。

「最初からサクリファイスを迷いなく撃てたのはこれがあるからか。G・Oデスと違って性能だけ見れば扱いやすそうだ。」

「君達に二度も通用するとは思いませんがね。」

そうして互いに均衡状態に入る。微笑み合いながらも一切緊張は緩めず隙も見せない様子見。しかしその均衡状態は、

「何止まってるんだよ？ロクシヨウさんよお!!」

「っ!!」

上から攻撃を仕掛けてきたコクエンのブラックメールによって破られた。

ズガアアアアン！！！！

フィールドごと破壊しかねない凶悪な一撃。まともに浴びれば良くてもパーツが二つは持つていかれるだろう。

「ったく。そういやいたんだっけな、鉛筆！！」

だが、上からの攻撃とはいえ流石はロクシヨウ。難無くかわしてブラックメールとの間に距離をとる。

「これは団体戦だけ？ハクマにばっか構うなよ。」  
「同感」

シャッ！！

今度は槍がブラックメールを突かんと飛び出てくる！！アリカのギヤラントレディだ。

「チツ！そういやザコがいたな。だがそんなチンケな攻撃でブラックメールを……」

「あんたバカ？良く見てみなさいよ。」

「あ？……っ何い！？」

その槍はブラックメールの右腕をしっかり貫いていた。

「誰が見てもそいつの攻撃『がむしゃら』行動じゃない。避けきれぬわけないでしょ。」

余談だがブラックメイルの攻撃は頭・右腕・左腕全てが『がむしやら』行動のハンマーである。その一撃一撃は確かに強力にして凶悪。だがそれは一撃で倒しきれない場合は逆に絶体絶命に陥るリスクの高すぎる攻撃ということでもあるのだ。

「だがパーツを壊すまでには至ってねえな。絶対のチャンスを逃したな!！」

それも事実。確かにギヤラントレディの右腕に握られている槍はブラックメイルの右腕を貫いているがそれだけだ。クリティカル之恩恵があつたにも関わらず壊しきれなかつた以上、対した攻撃力は望めないだろう。

「そうね。でも私にはこれで充分なの。」

勝ち誇るコクエンに対し、アリカはニッコリと返す。直後

ピキピキピキピキ……!!

ブラックメイルの右腕から氷が広がり全身を覆いつくそうとしている!!

「ギヤラントレディの右腕の攻撃は『殴る』行動のフリーズ。確かに威力は低いけど、一回でも当たれば動きは封じられるの」「何い!?!」

そして遂に氷はブラックメイルを完全に包みこみ……

ピシィッッ!!

「これでコクエンはしばらく戦線離脱ね。」

完全に動きを封じられた。

「っし!! 良くやった、流石はアリカちゃん!! うるさい鉛筆はとりあえずこれで無視できる!!」

「うん。ギャラントレディのフリーズは停止時間が長いからね。たとえブラックメイルといえど、そう簡単には出てこれない!!」

そう。アリカとロボットをすればイツキはほぼ確実に勝てる。だがそれはほとんどギリギリの勝利なのだ。特にアリカがギャラントレディを使った時は、同じステージで戦うのならカラスだって苦戦するだろう。元々アリカの実力は決して低くない。イツキやコウジの様な実力の高すぎる者達に囲まれて余り目立たないが、彼女は誰よりも多くイツキの側で戦い、イツキを手助けをしてきたのだから。

「さて、鉛筆をアリカちゃん達が押さえてくれてる今、ようやく誰の邪魔も受けずにボスキャラとやれるな。」

そう言ってユウトが見据えるのは先程までとは違い迎撃態勢をとるハクマとベルゼルガの更に奥。紫と赤。それぞれ最強の悪魔を一機ずつ従えているミズチとリュウコ先生だった。

「……………イツキ。お前達はどっちとやりたい?」

「どっちって……………」

「鉛筆を見事封じたアリカちゃんだ。もちろん強いことは俺が保障する。けどこいつらは別格だ。相手が悪い。G・Oデスもあいつらには相性が悪すぎる。なら王道だが俺達があいつらの相手するしかない。で、俺としてはどっちでも楽しめそうだからどっちでもいいぜ。」

確かに決定的な攻撃手段がサクリファイとメダフォースしかなくメダチエンジンも出来ないG・Oデスでは分が悪い。決定打に欠けるギャラントレディもまたしかり。だとすればメタビーとロクシヨウ、この二機がグレインとブロッソメイルを相手にするのが一番だ。だがどちらも強力な相手だ。どう相手をするべきか……

「ま、あいつら強いし決めにくいわな。んじゃ俺が決めるけどいいか？」

「構わないけど……どっちにするの？」

「そうだなあ……」

ユウトは少し考え、

「調べてから決めよう。」

言うが早いかロクシヨウの体が輝き出す！！最早同じみとなったこの光景。間違いない、これは！！

「いきなりメダフォース!？」

「やること派手だなアイツ。」

そのままロクシヨウは一息でグレインまで間合いを詰める！！

「速い!!--」

とった！！完全にロクシヨウの勝ちだ。

「俺はグレインについて噂程度しか知らんからな。ロクシヨウ、縦  
いつ……………！！！！」

ロクシヨウの十八番・縦一閃！！音も越える速さで振り上げられた  
疾風の剣は、

フツ……………

グレインに届く事なく霧散した。

「いきなりメダフォースを使うとはな。だがグレインにメダフォー  
スは届かない。何一つの例外もなく、な。」

「そんな！！」

今の縦一閃、本来なら確実に決まっていた筈だ。だというのにグレ  
インに届く前にメダフォース自体が効力を無くした。これはもしか  
……………

「フォース制御。これがお前の持つ能力の一つか。」

ロクシヨウは冷静にそう判断する。縦一閃を無効化されたはずなの  
に少しも動揺していない。むしろ、

「メッキが一つ剥がれたな。あと二つ、いやメダチェンジ後を含め  
ると五つか……………」



「グレインの力を知るための行動だったのか？随分余裕だな。」

最初から攻撃ではなかったのだ。故にメダフォース制御に驚くことなく平然としている。

「けど、メダフォース制御があるってことは……残り行動誘発にチャージドレイン系かな。んで、ラスボスらしく変形後に攻撃の鬼になんのか？」

「知りたいなら実際に食らってみるか？」

「冗談、遠慮しとくよ。それに何かもつとヤバそうな放置してたみたいだしな。」

その視線の先には黙って佇立しているブロッソメールと相変わらずの笑みを浮かべるリュウコ先生。ユウトはその姿を改めて確認し、

「イツキ、やっぱグレインという名のラスボスはお前に譲るわ。俺は隠しボスでいい。」

「へ？」

「何かあっちの方が面白そうだしな。フォース制御されてるのにずつとメダフォースを溜めてる……導かれる答えは一つだろ？」

「パワー変形……！！！」

本来サイカチスやドークス、エクサイズ達の様なメダチェンジを『シフト変形』と呼ぶ。このメダチェンジはパーツが壊れていない限りいつでも変形出来る。

対して『パワー変形』は、基本こそシフト変形と変わらないが、大きな違いとしてメダフォースを消費して変形する。ただ立っているだけでメダフォースを消費していく為、予め一定量のメダフォースを溜めておかなければすぐに変形が解けてしまう。完全に上級者向

けのメダチエンジン。だがそれ故に、条件さえ満たしてしまえばその力は『シフト変形』によって得られる力とは比べ物にならない！！

「『パワー変形』機は『シフト変形』機と比べて数が少ない。俺も今までに十体も見たことが無いからな。そんな稀少な機体が目の前に……こりゃ一度は戦ってみんといかんだろっ。」

ユウトの興味は完全にプロツソメイルに移っているらしい。なら、

「分かったよ。僕とメタビーがミズチ達を、ユウトとロクシヨウがリュウコ先生達をそれぞれ相手しよう。」

「ハクマはカラスとアリカちゃんでなんとかしてくれ。お互い援護するなんて余裕は無いからな。」

ユウトの言葉にカラス達が無言で頷く。

「メダフォースはグレイン自身が解くか、フォース制御の効果が消えるまで使えない……つまり互いに必殺技的な物が使えない今、火力や戦略が物を言う。皆押し負けんじゃねえぞ！！」

「了解！！」

「お前が仕切るな……」  
「行くぞメタビー！！」

プロツソメイルをロクシヨウ。グレインをメタビー。そしてベルゼルガをギャラントレイとG・Oデスで迎え撃つ布陣。ミズチ達もそれに応じてくれたことでしょうか様子見ではなく、本当の戦いが始まるうとしていた。

「てなわけで、よろしくつす先生。相手すんのは初めてなんで出来ればお手柔らかに頼みます。」

「意外ね。あなたはミズチを担当するのかと思っていたわ。」

「あんま驚いてないのによく言うよ……まあ向こうはお互いに戦いたくてウズウズしてましたから。割り込みはいかんと思って、珍しく空気読ませて貰いました。」

ユウトはそう軽口を叩いているが、その目は真剣さと今から始める戦いへの期待で満ちている。この時既にユウトの目には相棒であるロクシヨウとリュウコ先生達以外写っておらず、イツキ達チームメイトの存在すらなかった。

「自分で言うのもなんだけれど、あなたは私が苦手ではなかったの？」

「苦手ですよ。決まってるじゃないですか。」

あっさりとイツキ達では口に出来ないことを言っただけのける。尋ねたリュウコ先生の方もここまであっさり言うとは思わなかったのか苦笑しており、言葉を発していないがロクシヨウも頭を抱えていた。

「苦手なのは嘘じゃないですよ。ただビビる程じゃないですけどね。知り合いに普段はおとなしくせに怒ると恐ろしいヤツがいたんでそれに……」

「それに？」

「楽しめるなら相手が誰だろうと関係ないんで。」

ニヤリと子供つてばい笑顔を浮かべながらそう言う。それに、

「成程、正論ね。私も個人的にあなたには興味があるからこの展開はありがたいわ。二年前に四天王全員と一人で互角以上に戦いなगरらも、データベースにハックして、私が天領君達から集めたデータをコピーするだけの技量と余裕を持っていた。そんなあなたの本気はどれ程なのか、ね。」

「ハハッ！！やっぱ気付かれてたか！！いいですね、益々面白くなってきた。」

その言葉でロクシヨウが構える。

「その様子だと見せてくれるのかしら？」

「さあどうでしょう？俺は素直な人間なんで先生たちが強けりや本気出すし、弱いのなら即効で片して他の連中でピンチそうな奴に加勢するだけです。まあ、後者の方はないと思いますけど。」

その言葉に、

「あなたの本気がどれほどのものか益々興味が湧いたわ。嫌でも見せてもらうわよ？」

「上等です」

微笑みあう二人。それは戦いの合図。

「フフッ………ブロッソメール、メダチェンジ。」

「来るぜ………行くぞロクシヨウ！！」

赤い悪魔と白き剣士。その戦いが遂に切って下された。

「お前と戦うのはいつ以来かな？」

「最近じゃないね。結局学校でもロボットは出来ずじまいだったし。」

「こちらもまずは軽くお喋りを交えていた。メタビーとグレインを間に挟み、相手の出方を窺い合っている。」

「変形させないの？グレインの真価は変形後だったはずだよ？僕は一度グレインと戦ったことがあるの忘れたわけじゃないだろう？ユウトと違ってグレインの性能はほぼ把握してるよ。」

「そう。イツキは過去に唯一グレインと戦い、そして勝利した。それは紙一重の勝利だったかもしれないが、だからこそ逆にグレインの力を、その性能を把握出来ている。」

「そうだな……お前達には知られているんだった。出し惜しみる必要は無い。だが、あの時お前にはグレインと対をなす大天使・パーテイクルがいた。リミッターがあるとはいえ、未だ圧倒的な力を持つグレインに今のお前達が果たして勝てるかな？」

「ったりめーだろ！！あん時は慣れない女型メダロットの体に入れられて、やりにくいことこの上無かつたんだ。むしろ今の方が楽に勝てそうだぜ！！」

「ミズチの言葉に答えたのはメタビーだ。その目と声には偽りない自信があった。」

「さっさと始めようぜ。向こう他の連中はもうおっぱじめてる、もう待ちきれねえよ!!」

「相変わらず威勢がいいな、お前のパートナーは。だがそうだな・・・いつまでも相手の出方を窺うなんて性に合わないしな。」

言葉と同時にグレインの目が輝く!!

「互いにメダフォースは使えない以上、力と技、戦略に勝った方が勝つ。さっきあいつが言っていたことだが、それはそう力量が離れていない者同士での話だ。」

「・・・・それは僕とミスチじゃ力量が離れすぎてること？」

別段気を悪くしたわけでもなく、ミスチに尋ねる。ミスチは首を振り、

「俺とお前のメダロッターとしての力量は互角か、お前の方がやや上だろう。だけどそんな事は関係ない。見せてやるよ。親父が使っていた最終兵器のグレインじゃない、俺のパートナーメダロット・グレインの圧倒的な力をな。」

その言葉が合図となり、グレインはメタビーに向かってゆっくり歩き出した。

「話はまとまったかあ？って俺様の相手は余り物二匹かよ。出来れ

ばメタビーに借りを返したかったんだがなあ!!」

メタビーに向けてサクリファイスを放つてからずっと沈黙を守っていたベルゼルガはアリカとカラスを見て心底残念そうに嘆いていた。

「アリカ、お前のギャラントレディの力でサクリファイスに対応出来るか？」

「……ゴメン無理。サクリファイスとかデストロイってダイレクト判定にだから『守る』行動じゃ防げないの。ちなみに頭パーツの力も意味無いわ。」

だが二人はベルゼルガの言葉など気にすることなく、冷静に対策を練っていた。

「そうか……こういうときG・Oデスの能力が不便に感じるな。大抵は平気だが、相手が強い程二発じゃ仕留めきれないからな……」

「元々サクリファイスを使うメダロットは回復支援系メダロットと組ませて戦わせるのがセオリーだからね。まあ最近はそのテンション高いヤツみたく両方使えるのが増えてきてるけど……」

「ヒヤッハア!! 打つ手ねえだろ!?! ヒヤッハッハッハア!!」

ベルゼルガが自慢げに叫んでいる。だが二人とも反応するのは面倒なのであえてそのままに、対策を練る。

「……メダフォースが使えるのならプラスの力でパーツ回復が出来ただけだね。」

「ヒヤハハハハハハハハハハ!!」

「今更それを言っても仕方ない。とりあえずはG・Oデスのサクリ





「……お前、意外と黒いな。」

「そうでしょうか？」

「まあいいが……。それよりもいいのか？考えてみればお前はここまでのやり取りで何度もあつたG・Oデスとギャラントレディを仕留める機会を放棄しているんだぞ？確かにベルゼルガの性能の高さは認めるが、見たところ威力と発動までにかかる速さならG・Oデスの方が勝っている。お前達にはその頭パーツの復活があるからG・Oデスよりも多くサクリファイスを撃てるが、時間をかければ対策の一つくらい見つかる。みすみす俺達を有利にしているということなんだぞ？」

カラスらしくない意地の悪そうな笑みをハクマに向けてそう聞いてみる。

「別にあなた方を有利にさせてるつもりはなかったんですが……。ひよっとして迷惑でした？」

「迷惑とかそういう問題じゃない。ただ敵に手を抜かれて勝ったとしても、そんなものは勝利と呼べないしなによりそんな真似をした相手が許せなくなる。それだけだ。」

昔より丸くなったとはいえ、この辺りは昔と変わらない。やはり勝負は真剣の実力で勝ち取りたいのだ。それに対してハクマは、

「なるほど、あなたという人物が少しわかった気がします。ですが、

……」

「なんだ？」

「油断大敵、ですよ。」

ハクマが意味深げに微笑む。その言葉と笑み。一瞬にも満たない時

間カラスが思案するが、すぐにその意味を察知し、

「アリカ!!! ブラスを下がらせる!!!」

アリカに向かってそう叫ぶ。そうだ、なぜ気付かなかった? この状況で愛機が凍つてるとはいえ、ずっと静かだった奴が一人いたということに。そしてブラックメールも強力な力を持つ悪魔型メダロツトの一角だということに!!! そう、つまりは.....

「俺を差し置いて楽しいことになってんじゃねえか!!! ええっ!？」

「グオオオオオオオオ!!!」

ブラックメールは既に停止を解き、静かに隙を狙っていたのだ。カラスもアリカも、あっさり停止状態にできたこと、ギャラントレディの停止効果の強力性を知るが故に油断していたのだ。ブラックメールが動けるようになるのはもう少し先だと。

「え?」

完全に不意を突かれたアリカは指示を出すのを遅れてしまい.....

.....

「グルアアアアアアアア!!!」

その文字通り悪魔の左腕を防御することもできずもろに受けてしまった!!!

「きゃあああああああ!!!」

「ブラス!!!」

間一髪左腕のグレイスシールドに攻撃を当てさせることができたが、ブラックメイルの攻撃は並大抵の防御なら簡単に打ち砕く!!

バアアアアアン!!!

道端の小石よりも簡単にグレイスシールドが砕かれ、更に脚部にまでダメージが及ぶ!!

「クソッ!!G・Oデス、ブラスを……………!!」

「いいんですか?そんな風に隙を見せて。」

「!?!」

突然の登場でブラックメイルに一瞬でも注意が移ったのがいけなかった。ブラックメイルにサクリファイスを構えた時に生じた大きな隙。その隙に、

「ヒヤッハア!!!くたばっちまえ、ザコが!!」

その両腕のサクリファイスをG・Oデスに向けて一気に放つ!!

キキキキキキ……………

「しまっ……………!!」

「言ったでしょう?油断大敵ですって。」

そしてG・Oデスに放たれたサクリファイスによって、辺り一面が

爆発に包まれた・・・

第37話：戦闘〜序盤〜（後書き）

．．．．．壊滅的に戦闘シーン書くのが下手ですね俺．．．  
．．．．．正直自分自身嫌になってきます。それでも頑  
張ってるつもりだけどまだまだ未熟だなあ．．．．．出来る  
限り善処しますんで広い目で見守っていただけるとありがたいです。  
あと今回お試しで目次の背景にイツキ・メタビー・ロクシヨウの画  
像を張って見たんですが、こうした方がいいとか止めてくれとかこ  
のままでもいいよとかそういう意見をくれるとありがたいです。

### 第38話：攻防・プラスと黒き悪魔

「っ！？カラスー！！アリカ！！」

爆発音がした方向、そちらではカラス達がハクマ達と交戦しているはずだ。状況をちゃんと把握できないが、まさかカラス達は今押さ  
れている……………？

「オイオイ、余所見している暇があるのか？」

「！？」

「オワッ！！」

声と同時にメタビーが飛んできた『リンゴ』を避ける！！

「この！！」

ズガガガッ！！とメタビーもライフルを撃ちまくるがグレインの  
高い装甲の前にはあまり意味を成さない。

「ちつくしよお！！相変わらず装甲がかてえ……………」

悔しそうにメタビーは地団駄を踏んでいる。完全な防御系メダロツ  
トでないにもかかわらず、グレインの装甲はかなり高い方だ。メダ  
フォースが使えない今、アークビートルのような強力な火力の無い  
メタビーにはクリティカル狙いでしか大きなダメージは与えられな  
いだろう。

「クツ……………カラス達が心配だけ……………」

今は目の前の敵に集中しなければ確実にやられるだろう。元々ミズチとイツキに実力の差はない以上、どちらかが油断したり、万に一つ起きてしまった偶然などで勝負の天秤は一気に傾いてしまう。そんな戦いでカラス達に注意を向けることは自殺行為以外の何物でもない。

「メタビー、今のままじゃグレインに決定打を与えられない。カラス達も心配だし、メダチェンジして決着をつけるんだ!!」

「そうだな……メダフォースが使えない以上このままだとキツイ。変形していい気に終わらせてやるぜ!!」

確かに今のメタビーではグレインの装甲に傷をつけるのは難しい。だが変形したならば別だ!! そう考えてメタビーはメダチェンジを……

ズガガガガガ!!

「ええええええええええ!!」

「って何やってんのメタビー!?!」

メタビーの左腕のガトリングが火を噴き、グレインはそれを事も無げにかわす。

「変形どころかガトリングって……これじゃあ次の攻撃がかわせなくなるじゃないか!! しかも外れたし……」

って、外れた? グレインがさつきから放っていた『リンゴ』は命中したとき相手のパーツの一つの装甲を(メダチェンジ後ならば一体

化している装甲を) 4分の3削る、止めは刺せないがつなぎの攻撃としては最高のスタティックだ。『狙い撃ち』行動のため使えば相手からの攻撃をかわせなくなる。大したダメージが与えられてないとはいえライフルが全て当たっていたのもそのためだ。なのにここにきてかわされた……?」

「……おいイツキ。マズイことになったぞ。」  
「え?」

いつになく神妙そうにメタバビーがイツキに振り返り、

「左腕……ブラスターしか使えねえ……」  
「つまり……?」

「メダチエンジをしようとしても、ライフルを撃とうとしても、ミサイルぶつ放そうとしても、ただメダフォースを溜めようとしても!! 強制的に左腕しか使えなくなっちゃった……!!」  
「まさか……行動誘発!？」

変形前のグレインの能力、フォー制御・スタティックに続く第三の能力。それは相手に使う行動を一定時間強制させる行動誘発だ。一見地味な能力だがこの能力の恐ろしさたるやフォー制御の比ではない。相手の行動を強制させる。それはつまり思うように行動できなくなるどころか、制限された行動を利用してタコなぐりにされる恐れもある。そしてこの行動誘発は強制された行動を使うパーツが例え壊れていたとしても使わなければならない。当然パーツが壊れていたならそのパーツによる行動は行えないため、その場合何もしないで終わる。つまり今メタバビーが左腕を破壊されてしまえばなす術もなくやられてしまうのだ。

「お前らが悪いんだぞ。仲間が心配なのは分かるが、それを俺との



戦いで気にするとうる愚行を犯したんだ。あいにく俺はその隙を見逃すほどお人よしじゃない。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言い返せない。一瞬とはいえミスチへ隙を見せてしまった以上これは僕の失態だ。

「メタビー、解けそう？」

「・・・・・・・・・・しばらくは無理っぽいな。流石はグレインってことだ。」

「・・・・・・・・・・仕方ないね。このままで行こう。」

左腕一本。どこまでやれるか分からないがやるしかない。それにフォー制御が使われてから時間も経っている。うまくいけば行動誘発が解けている頃にはメダフォーも使えるかもしれない。

「俺がそんな隙を見せれば、な。」

「・・・・・・・・・・希望薄いなあ。」

「左腕一本しか使えない状態にさせてしまったが、仕方ないか。そろそろ終わりにさせてもらおう。せいぜい足掻けよ？」

その言葉と同時にグレインの体が変形していく！！大悪魔型メダロット・グレイン。その本来の力をフルに発揮できる形態へと。

「充分時間も稼げた。約束通り見せてやるよ、グレインの力をな。」

シューウウウウウ．．．．．

「クツ．．．．．！危ないところだった．．．．．」

「．．．．．驚きました。まさかあの状況での判断．．．．．  
！！正直あなたの実力をまだ低く見積もっていたらしい。」

砂煙が晴れた時、G・Oデスは右腕を失っていた。対して、先ほどサクリファイスを放ったベルゼルガも当然の如く両腕は壊れていたが、その脚部に相当なダメージを負っていた。

「ギリギリ成功したな．．．．．もつとも腕を一本犠牲にするこ  
とになったが。」

そう、ベルゼルガが至近距離でG・Oデスに両腕のサクリファイスを放った時、G・Oデスも右腕のサクリファイスを放ち相殺させていたのだ。ベルゼルガのサクリファイスよりも早く放つことができたこと、そしてベルゼルガのサクリファイスを上回る威力を誇るG・Oデスのサクリファイスだったからこそ、相殺だけでなくベルゼルガの脚部にも大きなダメージを与えることができたのだ。

「クツクツクツクツク．．．．．オモシレエ、オモシレエ、オ  
モシレエ！！！前言撤回だ、楽しませてくれるじゃねえか雑魚だと思  
ってたのによお！！予想以上だぜ、ヒヤハツハアア！！！」

ベルゼルガは脚部にダメージを受けたことで逆に火が付いたらしい。元から厄介だったのがさらにきつくなる。

「奴の両腕はまた復活するとしても、脚部へダメージを与えられただけよしとしよう。……………こちらが不利なのは変わらないがな。」

そう、いくらダメージを与えたとはいえベルゼルガはサクリファイスをまだ二発以上撃てるのに対し、G・Oデスは後一発しか撃てない。威力は上回っていても回数が違う。こちらは残ったサクリファイスで確実に仕留めなければならぬのに対して、ベルゼルガの方にはまだ余裕がある。それに……………

「アリカの方は……………どうなっている？」

先ほどギヤラントレディはブラックメイルの左腕をモロに受けてしまった。なんとかギヤラントレディのパーツの中で最も装甲の高い左腕のグレイスシールドを構えていたようだが、そんなものに意味はなく完全に破壊され、更に別のパーツにもダメージを受けていたはずだ。不意打ちでさえなければギヤラントレディとブラックメイルの相性は悪くないとはいえ、果たしてそれだけの余裕があるか……………？

「心配しないでカラス君。プラスは無事だから、あなた達はハクマ君に集中して。コクエンは私が何とかするから。」

少し離れた所からアリカがそう言うてくる。どうやらプラスもまだ動けるらしい。だがプラスは左腕が破壊され、右腕もかろうじて繋がっているような状態だった。

「ハッ！脆い脆い！脆すぎるぜお前のメダロットはよお！！そんなんで俺様に勝とうなんざ笑わせてくれるぜ。ハクマあ！！さっさとお前も片付けちまえよ。」

「コクエン、油断しては駄目だよ。君は彼女に何度か負けているのを忘れたのかい？」

「あの時は機体が悪かったんだよ。今はもうザコ共に遅れは取らねえ！！」

それは新たに手に入れた愛機、ブラックメイルの力を知っているが故の発言。成程、確かにこの機体は強力無比、悪魔型メダロットの一角として申し分のない力を有している。事実、この場の誰もイツキやユウト、リュウコ先生辺りは別だろうが 知らぬことだがこの機体は過去、あがたヒカルをビーストマスターと同じかそれ以上に苦戦させた相手なのだから。だが当時と違いブラックメイルの繰り出す攻撃は変わっている。もしその時の攻撃を今でも使えるのなら勝ち目はなかったろう。しかし今のブラックメイルの攻撃は単純なハンマー。シンプル故にとつもない破壊力を持つが、それゆえにアリカには勝機がある。問題があるとすれば、

「……さっき言ったように私は自分で何とか出来る。コクエンとの相性は悪くないしね。でもカラス君は……」  
「……大丈夫だ。こちらもちらで何とかする。」

カラスはそう言っているが、かなり不利だということは否定できないだろう。G・Oデスが放てるサクリファイスはあと左腕の一発のみ。対するベルゼルガの方は頭パーツの復活能力により回数制限はあれど最低でもあと二発以上は撃てる。更に言えばベルゼルガは無傷。つまり勝つためには左腕のサクリファイスを確実に当て、尚且つその一撃で頭パーツを破壊せねばならない。長期戦に持ち込めば同じ土俵に持ち込まれかもしれないが、ベルゼルガのパートナーが

ハクマである以上それは難しいだろうし何よりそれまで生き残って  
いられる保証もない。だがかといってコクエンに集中せねばならな  
い以上アリカ達が増勢するのは不可能。それはイツキやユウト達に  
も言える。

「安心しろ。負けるつもりはない。イツキやユウトになんて言われ  
るかわかったもんじゃないしな。だからお前たちはコクエンに集中  
しろ。」

「……分かった。」

心配ではあるがここはカラスを信じるしかないだろう。だから信じ  
る。彼はイツキと互角に戦えるメダロットーなのだから。

「話はすんだか？わざわざ待っててやったんだ。そろそろ再開した  
いんだがなあ？」

見ればブラックメールが今か今かと待っている。これ以上は待つて  
くれそうにない。

「ええ、構わないわよ。じゃあカラス君。気をつけてね。」

「ああ、お前もな。」

カラスは振り向かず、ハクマとベルゼルガと向き合いながらそう言  
った。



ブラックメイルの突進を避けるべく素早くブラスに指示を出す！！  
全ての攻撃が必殺の威力を持つ以上掠るわけにもいかない。

「オオオオオオオオオツツ！！！」

右腕が振り上げられステージを挟る！！だが大きく振り上げられた  
右腕をギャラントレディはゆうゆうとかわし、そのまま右腕の槍で  
貫く！！そのまま停止状態に追い込み、

「まだまだ！！！」

二撃、三撃と隙を一切作らず叩き込む！！フリーズ攻撃である槍は  
一撃一撃に停止効果が備わっている。一撃一撃は弱いが、連続して  
攻撃することで相手に反撃の隙さえ与えずダメージを蓄積させるこ  
とができる。結果、

「まずは一パーツ！！！」

ブラックメイルの右腕を時間はかかったが何とか破壊することに成  
功する！！

バアアアアアアアアアア！！！！

「グオオオオオオ！？」

「よし、このまま一気に……………！！！」

そのまま続けようとして、

「……よお？気は済んだかよ？」

パリーイイインツツ！！

停止状態が解かれ、ブラックメイプルが左腕を振り下ろす！！

「ブラックメイプルほどのメダロットになりやあそんなちやちな停止状態なんざいつでも解けんだよ。今までののはあえて食らっててやっただ。右腕も破壊出来たしもう充分だろ？もう終れよ。」

「冗談！！」

さっきの経験からブラックメイプルに停止状態が長く続かないのは分かっていた。だからそろそろ反撃に出てこられるだろうということも。故にギヤラントレディは左腕をかわすことができた。しかし流石は悪魔型メダロットというべきだろう。直撃こそしなかったが爪の先の方がギヤラントレディの右腕に引っ掛かり破壊されてしまった。

バアアアアアン！！！！

「あっちゃあ………かわしきれなかったか。」

これでギヤラントレディは攻撃手段を失ってしまった。残るパーツは頭と脚部のみ。



「まだ頭は残ってるが、終わりだな。なんか言い残すことはあるか？」

既に勝利を確信しているのだろう。ニヤリと笑みを浮かべながらそんなことを言ってくる。

「言い残すことって……私まだ負けてないんだけど？ ブラスもまだ戦えるし。」

対してアリカは呆れたように溜息をついている。もうギャラントレディに攻撃パーツはなく、次の攻撃を食らえばそれだけで終わってしまう状況なのに彼女は焦っていない。いや、その姿には余裕すら見える。それを見てコクエンは再びその顔を怒りに歪ませて、

「いいだろう………。テメエのメダロットには止めとしてとっておきを入れてやるよ。全メダロット中最強を誇る格闘攻撃パーツ、『デビルボディ』をなあー!!」

デビルボディ……。ブラックメイルの頭パーツにしてコクエンの言ったとおり最強の格闘攻撃パーツの名だ。その威力は正に強力無比。純粋な数値上の攻撃力ならば、皆が最強と言うであろうあのアークビートルの頭パーツ『プロミネンス』をも上回る。頭パーツ故に隙が無く頭パーツ故に絶大な破壊力を持つこのパーツは、一回のロボットにつき一度きりしか使えず、装甲も数ある頭パーツの中ではかなり低い部類にカテゴライズされる。だがその圧倒的な攻撃力を前にして生き残ることのできるメダロットはほとんどいない。それこそ全メダロット中最高硬度を誇る『ガンキング』でもなければ耐えられないだろう。だからこそコクエンはこれまで使おうとは



『デビルボディ』を受け止めようなんざバカじゃねえのか!』

アハハハと豪快に笑う。あんなに威勢が良かったと思っただら最後は潔く敗北を選んでやがる。避けようともせず真正面から……  
……ん? 真正面から?

( どういうことだ? 確かに避けきれるような状況じゃねえ。だが…… )

ギヤラントレイがさっきまで行っていた行動は全て『殴る』行動のフリーズ。次の攻撃がかわせなくなる『がむしゃら』でも『狙い撃ち』でもない。つまりは避けようと思えば避けられるのである。確かにダメージを負った体では完全には避けきれないだろうがそれでも威力を殺すくらいなら可能だろう。なのにそんな素振りもない。

( 本当に血迷ったとも考えられる。が、あいつの目…… )

あれは自分達が勝つことに絶対の自信を持っている目だった。それにアリカの性格上見栄を張るようなこともないため勝算はあったのだろう。

( 何が狙いだ? メダフォースはグレインが封じてる。まだ解けるほどの時間は経っていないはずだ。それに両腕も既に破壊してある。他に何か手があるか……!?)

何だ? 何か重大な見落としをしている……? ふとアリカの方を向く。ブラックメイユがもうすぐそこまで迫りギヤラントレイに止めを刺そうとしている。そんな状況でしかし、アリカは笑っていた。それは敗北ではなく勝利を確信した笑み。ブラッ

クメールの頭が迫っている状況で……………

(……………待てよ。そういえばあいつの機体の頭パーツはなんだった!?)

前回学校で合同訓練をしたときは、当時のコクエンのメダロットにギャラントレディは頭パーツを使用しなかった。そしてコクエンはアリカと他のメンバーとの対決を興味が無かったために見ていない。ギャラントレディの性能を詳しく調べてもいないし他の四天王にも尋ねていないため、コクエンはギャラントレディの頭パーツが何なのかを知らない。だがこの状況でブラックメールの攻撃をかわそうとしない相手と勝利を確信しているアリカ。そう、ギャラントレディの頭パーツは……………!!

「まさか……………!!止まれブラックメール!!このままだとお前が負ける!!」

どうやらコクエンはアリカのやるうとしていることに気付いたようだ。だがもう遅い。コクエンがブラックメールに攻撃命令を出した時点で、もうこちらの勝利は確定していたのだ。そしてブラックメールの持つ最強の牙がギャラントレディに届く瞬間。

「プラス、『フラックスミラー』作動!!」

ここでアリカはここまで全く使用しなかったギャラントレディの頭パーツの力を遂に発動させる!!

「グオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

最早止まらないブラックメイユはそんなギャラントレディに『デビルボディ』を……！！

キイイイイイイン！！！！

鏡のような透明な壁に阻まれ、ブラックメイユは止まっていた。いや、むしろ押し返されている……？

「デメイユ……！！そいつは……！！」

「気付くのが遅かったわね。まあ最後まで油断してくれたからこそこの状況に持ち込めたんだけど。」

「『反射』行動……！！まさかそんな隠し玉を持っていやがったのか……！！」

反射、それは文字通り相手の攻撃を無効化し、相手に撥ね返す行動のことである。これは『守る』行動とは逆に、発動した機体のみ作用する。相手の攻撃を撥ね返すだけのシンプル極まりない行動だが、これは余程のレベルの差が無い限りはダイレクト判定の無い攻撃にはほぼ全てに作用する。それは今回の『デビルボディ』に対しても例外ではない……！！

「自分の切り札で自爆しなさい。」

カキイイイイイイン！！！！

遂に『デビルボディ』は反射され、その攻撃は逆にブラックメイユ



### 第39話：謎の一端・ユウトが求める物

「……………つと。なんか派手な音がしたな。あつちがカラスとアリカちゃん達が戦ってるから……………流石アリカちゃん、ブラックメイを倒したか。まあ無傷ってわけにはいかないだろうけどそれでも大金星だな。」

少し離れたところでユウトはリュウコ先生と対峙していた。ロクシヨウもブロッソメイもまだダメージは一切受けておらず、お互いが放つ攻撃も全て避けあっているが、ユウトの方もリュウコ先生の方もそれぞれの相棒である二機もこうなることは当然だったとも言いたげで全く焦った様子はない。

「まあ残念つちやあ残念だけど、これで俺が二連戦することはなくなったし、思う存分目の前の相手に集中できる。」

「……………まるで今まで手を抜いていたというふうな口ぶりね？私では役不足ということかしら？」

「まさか。言い方が悪かったですね。こう見えて俺ってアリカちゃんのこと高クエンのことも高く評価してるんです。まあ機体相性的にアリカちゃんが負けることは無いと思ってたけど、万が一って事があるし。そうなると思キはともかくカラスは二連戦出来ないだろうし、アイツは多分俺狙いでくると思うんで。だから先生を甘く見てる訳じゃないですよ。」

「へえ……………」

ユウトの言葉は嘘がないように思える。だが、

「ならドークスを変形させないのは何故？」

「へ？」

「ブロッソメイルの攻撃は変形前こそ『サクリファイス』だけれど変形後は『デストロイ』よ。最初の一撃で分かったと思うけど？」

G・Oデスやベルゼルガが使う『サクリファイス』は一発につき自らのパーツ一つを犠牲にして大ダメージを与える上級者向けの技だ。乱発は出来ないため、大抵は回復系メダロットと組ませたり、ベルゼルガの様にパーツ復活系のパーツを装備させる。対する『デストロイ』は使用者のパーツを一切犠牲にすることなく相手のパーツを問答無用で破壊する攻撃。相手の装甲がいくら高かろうがこの攻撃の前には意味を成さない。だがこの攻撃には二つほど弱点がある。

一つは相手の後ろを取らなければ攻撃できないこと。真正面からでは攻撃することができないのだ。簡単に言えば相手が行動し終えて次の行動に移る一瞬の間に見せられる無防備な背後を狙わなければならない。余程の実力差が無いのなら、上手く戦略を立てないと攻撃を当てるのは難しい。

そしてもう一つ。デストロイは相手メダロットのパーツを破壊する。だが、頭・右、左腕・脚部の全てのパーツが一体化し文字通り一つの体となっているメダチェンジ後ではデストロイで破壊できないのだ。故にデストロイを使うメダロットにはメダチェンジで対抗してやれば恐るるに足りない。

「あー……つまり先生は、何でロクシヨウを変形させなかったのかがずっと気にかかってたんですか？」

「ええ。少なくともそうしておけばわざわざ逃げ回らなくてもいいと思うのだけれど。」

それに対しユウトは頭を掻きながら面倒くさそうに、

「理由は4つあります。」



と言った。

「1つは変形後よりも変形前の方が俺は好きだから。2つ目はこの状況下で変形後の攻撃が有効そうな奴がないから。俺の愛機は対応防御のエキスパートですからね。だから逆に普通の相手への攻撃手段が限られて面倒くさいんですよ。」

「2つ目はともかく1つ目は偉く個人的な理由ね。」

「まあ、この2つはそうたいした理由じゃないんで。重要なのはもう二つの方です。」

苦笑しながら説明を始める。

「3つ目は変形後じゃあ勝つのがめんどいから。ブロッソって装甲低いけどそれを補って余りある機動力があるじゃないっすか。基本的なスピードの基盤となる『推進』はこっちのが上だろうけど回避力の基盤となる『機動』に関してはブロッソは俺の知る中でもナンバー1と言っていい。そんな機体に索的もなしにドライブAのハンマーなんかぶっ放しても躲されるに決まってるじゃないですか。んでもってその後次の行動をするよりもブロッソが変形解いてサクリファイス放つ方が早いだろうし。そうならクリティカルヒットで俺達はリタイア。先生だってそれ狙ってたんじゃないですか？」

やはり飄々としているようでいて冷静に考えている。変形しない方がユウトとしては勝率が高いということか。

「成程。でも変形してしばらく時間を稼ぎ、メダフォースが再び使えるようになってから私たちを倒して他の皆を助けに行こうとは考えなかったの？」

「つまんないっすよそんな戦い。」

どうしても変形させたくないらしい。そんなことを話している間に今まで切り結んでいた二機は離れ、それぞれのパートナーの元へ戻っていた。

「無駄口が多いぞユウト。やる気が無いのか？」

「いや、もう少し話させるよ。こっちはまだ本題にも入ってないんだから。」

「本題？何だまだ話してなかったのか？」

「色々話に華が咲いてね………つて睨むなよ。今から本題に移つから。」

ギロリと睨んでくるロクシヨウに慌てて言い直す。そして、

「ねえ先生？一つ賭けをしない？」

そんな提案をした。

「………あなた仮にも教師である私に賭けを要求するの？」

「そんな大したことじゃないっすよ。これはチームとは関係ない俺と先生の個人的なものですけどね。あ、別に金とかそう言うもんを要求するわけじゃないっすよ。」

そう言うユウトの顔は先程までと同じ飄々とした笑顔のままだ。だが、その雰囲気は全く違う。顔こそ笑っているが、一体………？

「その前に正直に答えて下さいね？先生の親父さんはビーストキング・闇雲オロチ。性格に何はあるが、あの秋葉原アトム、通称メダロット博士と互角の技量を持つへべレケ博士の弟子。ここまでは知

ってるんですよ。」

「え、ええ……………」

何だろう。さっきまでとはまるで空気が違う。姿も声の調子も変わっていない筈なのに、今まで見てきたユウトと同一人物とはとても思えない。

「さて、じゃあ聞きますが……………先生はまだオロチさんがビーストキングだった時に何かを預かりませんでしたか？」

「!？」

「正確には四年くらい前の時と二年前のときに何かを渡されたはずだ。それ、今も持ってますよね？」

「……………」

なぜ、そのことを知っているのだろう。あの事はミスチにさえ知らせていないことなのに……………このまま私の手でずっと保管していくつもりだったのに……………

「……………何を言ってるのか分からないわね神田君。あなたが欲しいものは残念ながら私は……………」

「闇雲リュウゴ。」

ズシンと音がした気がした。さっきまでの調子とは打って変わりその声はひどく重たかった。その眼光も刃のように鋭く、その視線だけで呼吸すら出来なくなりそうなの……………

「あんまり俺を怒らせない方がいい。あんたが持つてるのは知ってるんだよ。そのメダロッチの中に、俺が求める二つのデータがあるってことをな!！」

それは最早叫びに近かった。怒りと悲しみと、それ以外の何かが混ざり合った叫び。そうやって叫ぶ姿は見た眼よりも幼く見え、その姿はある人物を思い出させる。

「あなた……まさか!？」

「気付いてなかったのか？珍しいクワガタ使いのメダロット。あのメダロット博士と親戚でもないのに家族のように親しく、そして苗字は神田……改めて言えば分かるだろ？」

「あの事件の生き残り……」

そうか……噂は本当だったのか。

「当時まだ公表されていなかった『ある計画』のために多くの科学者達が命を落としたあの事件。研究所の人間は全て死んだと言われていたけれど、一人の少年が生き残ったという話は聞いたことがあるわ。それがリーダーの息子だということも……まさか貴方だったとはね。」

薄々そんな気はしていた。だって余りにも特徴が一致しすぎていたから。だけど考えないようにしていた……

「かんだそり神田宙。メダル宇宙学の権威にして、当時唯一アンドロメダル星人と対話出来た男。彼は俺の自慢の親父だったよ……アイツが来るまでは。」

「アイツ?」

それは誰の事だろう。だが答えるつもりはないのかユウトは続ける。

「当時の俺はまだガキだった。だから一体どんな研究を親父たちがしているのかなんて理解してなかったよ。それを知ったの事件の後・



「ユウトはそれに頷くと同時にまた普段通りの顔を見せる。」

「ま、正直勝負はついてんですけどね。」

「……どういこと？」

「言葉通りですよ。本気で俺を倒すつもりなら先生は俺が喋っているときを狙うべきだった。ロクシヨウがブロッソを捉えるには十分すぎる時間でしたよ。噂では氷のような人と聞いてたけど、結構甘いんですね。」

「はあーっと溜め息を吐きながらそんなことを言ってくる。」

「……喋っている最中にロクシヨウに索的を使わせていたの……!？」

「別に攻撃しちゃいけないなんて言って無かったですよ。なのに仕掛けてこなかったのはそっちですから。もう頭の回数0になっちゃいましたよ。けど流石ですねブロッソは。そんならいしなきゃまともには捉えられないらしいですよ。」

つまりこれでロクシヨウはブロッソを完全に仕留められる条件をクリアしたということ。さっきの賭けの話もこれを気付かせないためのカモフラージュだったということか……

「あ、勘違いしないでくださいね。賭けの話は有効です。別に騙したつもりもないですよ。そっちが勝手に引っ掛かっただけなんで恨むなら自分の不注意を恨んでください。」

その言葉と同時にロクシヨウが走る。それに対抗してブロッソも動くが……

「無駄だ。さっきユウトが言っていたろう。俺にはお前の動きが既に読めている。次の行動も、その次の行動もな。」

ブロッソが何かする前にソードで切りつける！！ユウトの言う通り完全にロクシヨウはブロッソの動きを捉えていた。

「先生。さっき俺がメダチェンジさせない理由を聞いてましたよね？それまだ4つ目は言っただけで無かったんで今言っときますね。」

ブロッソが先程のユウトの感情の爆発。そして既にロクシヨウがブロッソを捉えていることでリュウコ先生の顔に汗が流れる。

「それはね、こっちの方が強いからっすよ。少なくとも俺達は変形前が一番強い。要は今の方が本気モードってことです。だからさ、あんまり俺達をがっかりさせないでくださいよ？少なくとも俺達を本気だそっかなあくらいには思わせただからカラス達が決着つけ終わるまでは生き残ってもらわないとね！！」

「……………中々しぶといですね。」

同じ頃カラス達は防戦一方だった。通常確実に決められる時でなければ使わないサクリファイスをバンバン使ってくるなど正直有り得ない。G・Oデスに許される攻撃は左腕一本のみ。しかもまだ確実に決められる状況じゃない。故に躲すしかないのだが……

「……脚をやられたか。」

既に脚部は相当なダメージを負っており、動きが鈍くなっている。これでは先程までのように躲しきるのは不可能だろう。

「……まあ、もう逃げるつもりもないがな。」

今さつき、掠った程度とはいえサクリファイスを食らったことで条件は揃った。攻撃を躲しながらずっと溜めていたメダフォース。確かに必殺技としてのメダフォースはいまだに使用不可だが、だからと言って今までメダフォースを溜めていたことが無駄というわけではない。総メダフォース量の何割かは通常攻撃の威力に上乘せされる。つまり一撃しか攻撃を放てないのならば、敵を確実に仕留めきる威力に上げ確実に決める。幸い残っているのは左腕だ。後はサクリファイスが『狙い撃ち』行動である以上当てるとは簡単だ。問題はクリティカルに持ち込めるかどうか……

「文字通り失敗は許されないな……」

「……本当に凄いですあなたは。」

突然ハクマがそう切り出してきた。

「ベルゼルガを使い始めたのは最近ですが、僕は彼と強い信頼で結ばれている自信がある。ミズチ君以外には負けない自信も。なのに君は……正直ここまで攻めきっているのは自分達の筈な



のにそ、れでも確実に勝てるという気がしない。」

「ハクマは本心からそう言っているのだろう。コクエンと違い素直に相手のことはすごいと褒められる男だ。実力も高いし、そんな風に高評価される気分も悪くない。」

「なるほど。素直に俺のことを評価しているのは素直に嬉しいな。だが……」

俺には理由がある。負けられない理由が。

「決めてるんだよ。俺はもう誰にも負けなとな。あの日の二の舞はゴメンだから……!!」

そのカラスの決意に呼応するようにG・ODESが再び動き出す。左腕がベルゼルガを捉え、今まさにその命を刈り取らんとしている!!

「……分りました。なら次で決着をつけましょう。元々お互いにサクリファイスを主武装とする機体を扱う者。打ち合いなんて柄じゃないでしょう?」

「ああ。一撃必殺。それがこれらの機体を扱いこなすための最低条件だからな。行くぞ『白虎のハクマ』。この一撃でこの戦いに決着をつける!!」

「ヒャッハアアアアアア!! やれるもんならやってみろやああああああああああ!!」

その咆哮が合図だった。死神と悪魔は互いの命を刈り取るべく走り出す!!

「ヒヤッハアアアアア！動きがトロイゼ!?このノロマがああ  
ああああああああああああああ!!!!」

G・Oデスよりも先にベルゼルガの方が速い!!そのまま右腕を打ち出し・・・・・・・・

「粉々になっちまえ!!ヒヤアアアアアアアッホウウウウウ  
ウウウウウウウ!!!!!!!!」

サクリファイスがG・Oデスを・・・・・・・・

「躲せええええええええええ!!!!」

カラスの叫びがその場に木霊する。

「・・・・・・・・!!!!」

感情の起伏さえ見せないが、彼はカラスとともに幾度もの戦いを乗り切ってきた。そんな彼が、自分を信頼するマスターの気持ちに对应しない訳が無い!!

「なっ!?!」

完璧に決まったと思われるサクリファイスをその姿からは想像できないような超反応で躲しきる!!

「やはり、あなた達はすごい・・・・・・・・!!!!」

「だが、本命はこつちだああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああっ!!死ねえええええ  
ええええええええええええええええっ!!!!!!」

ハクマは驚いていたがベルゼルガは全く気にも留めていなかった。そしてそのまま左腕から自身最高威力のサクリファイスを放つ！！

「これで終わりだああああああああ！！ヒヤアツハツハツハツハツハツハツハツ！！！！！！」

勝利を確信し大声で笑うベルゼルガ。確かにこの距離では先程のように躲すことは不可能だ。先程のような奇跡は起きない。だからこそ、

「受け止めるG・Oデス！！」

何とカラスはG・Oデスの脚部と頭でサクリファイスを受け止める！！！！

「なっ！？頭パーツで防御！？」

ロボットにおいてメダロットの核ともいえる頭パーツ。これが壊れてしまったが最後、そのロボットでは負けが確定する。だからよっぽど頭の装甲が高くなければまずあり得ない行動だ。それを……

「今がその余程の時じゃないのか？それに、そんなイカレタ奴のサクリファイス。何度撃とうが俺のG・Oデスを倒せるわけがないだろうが！！」

サクリファイスを受けながらもG・Oデスは前進を続ける。カラスはこう言っているがベルゼルガのサクリファイスは強力だ。G・Oデスの脚部は既に砕け、頭も悲鳴を上げている。だが、それでも……

パンツッ!!!

「な、何iiiiiiiiiiii!？」

サクリファイスを耐えきり、G・オデスの左腕がベルゼルガを捕まえる!!

「何度も使えるからってホイホイ撃ちすぎなんだよ。いくら強力だろうがあれだけ撃たれば軌道は読めてくる。本当の切り札って言うのはここぞというときに使うから切り札なんだよ。俺が何年G・オデスと一緒に戦ってきたらと思ってる？サクリファイスの扱いに関しては俺は誰にも負けないぜ？」

「クツ……!!！」

「無駄だ。この状態じゃあお前が頭パーツを使うよりG・オデスがベルゼルガの命を刈り取る方が早い。終わりだよ。」

「しかし、ベルゼルガの頭も脚部も無傷。クリティカルヒットでもしない限り倒れはしないですよ。」

そう。確かにサクリファイスは確実に当てられるが、もし脚部に先に当たった場合流石にクリティカルヒットなしでは確実性が無い。だがカラスはそれすらも読んでいた。

「忘れたのか？これはチーム戦だ。俺達のメンバーの一人に索的を使えるメダロットを操る奴がいてな。どうやら頭パーツの回数が切れるまで索的をかけたらしい。索的はチーム全体に及ぼすからな。もちろんG・オデスにも。」

今までは起きなかったが、只でさえクリティカル率は高い『狙い撃ち』だ。それに索的が加われれば最早成功率は100%と言っていい。更に索的をかければかけるほど通常攻撃の威力にプラス補正がかかる。

「まさか……時間を稼いでいたのはこのため!？」

「索的に関しては予想外だったがな。だが、これで終わりだ。」

最早完全に詰んだ戦いだった。

「止める。離せって言うてるだろうがよおおおお! 離せ、離せよおおおおおおおおおおおおおおおおおお! 離せ、離せオオオオオオオオオオ!!!」

「……イッキの苦労がよく分かる。お前にはもう会いたくないな。まあこれで最後だ。特別に本物のサクリファイスを見せてやるう。」

ベルゼルガが必死で叫ぶ中、カラスの声が無情に響く。

「止めるおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
」

最後まで叫び続けるベルゼルガ。カラスはその様子に本気で溜め息を吐きながら。

「デスシツクル。」

G・Oデスの左腕の名を唱え、サクリファイスを発動させた。



第39話：謎の一端・ユウトが求める物（後書き）

戦闘パート少なくなっ！なんて言わなくても分かっています。そしてメダロット経験者の皆さん！相変わらず下手ですいません・・・

・・・経験者の方々なら「ここはこうするべきだろ！！」とかそう言うのありますよね？スイマセン・・・メダロットのステータスを適度に調整するのって難しいんです。この作品書くまでは分からなかったけど。やっぱゲームは凄いなあと思いますよ。さてアリカ、カラスと決着ついたところで次はイッキとミズチの戦いを・・・

・・・ってあれ？なんか大変なことになりそうです^^

さてさて今回はここまで！！次の話で会いましょう！！

## 第40話：決着・試合終了

「うおおおおおおお！！！！！」

「……………」

「当たれええええええええええ！！！！！」

「……………」

未だに行動誘発が解除されず、ガトリングしか撃てないメタビー。なので反撃されないように攻めて攻めて攻めまくって、攻撃を受けないことに成功してはいるものこちらの攻撃もほとんど躲かれ意味が無かった。

「ちつくしょお！！こいつウゼエ！！いつになったら解けんだよ！？」

「さすがグレインの行動誘発。持続が長い……………！！！」

そんな文句を言いながらもガトリングを撃つ手は休めない。一瞬でも付け入る隙を与えてしまえばあのグレインだ。確実にやられる……………！！！！

「……………それをかけさせたのは俺だが、想像以上だな。まさかここまで弱体化するとは……………」

当のグレインのマスターであるミズチは呆れたように頭に手をあてていた。

「……………お前らこの手の症状に慣れてないのか？それともふざけてるのか？」

「……………ノーコメントで。」



まあ確かに行動誘発に慣れてないのは事実だけでも。だが、やはりここまで効果が持続しているのはやはりグレインが強力なメダロットだからなのだろう。

「俺は本気のお前らが見たいんだが……すまん、流石にもう我慢できそうにない。」

『えっ？』

思わず声が重なるイツキとメタビー。な、何かまずい予感が……

「グレイン、遊びは終わりだ。」

その言葉と同時にグレインがメタビーにデストロイを放つ！！

「な！？さっきまでの演技かよ！？」

デストロイはまずい！！ただでさえ強力なグレインなんだ。それが放つデストロイは、最低でもブロッソの両腕くらいの威力はあるだろう。しかもこっちは左腕しか使えず、さっきから撃ちまくっているから躲しようが無い！！

「せ、背中だけは絶対に死守する！！」

デストロイを無効にするため、背中を見せないように真つ向から迎え撃つ。それだけでデストロイは消え、メタビーの危機は……

「かかったな。」

「メタビーー！！下だ！！」

回避されなかった。メタビーの足元にある影。それがいつもよりも一回り以上大きくなっていて、

「アサツシン。」

ミズチのその言葉を合図に、影が剣を持った姿に実体化し、メタビーに斬りかかる！！

「やっべえ……………！！」

「メタビー、躲……………！！」

無理だ。『狙い撃ち』の後はいかなる攻撃も回避できない。それに……………

「元々アサツシンはダイレクト判定。防御は不可能だ。それに存在している以上、そこには影が存在する。例え『狙い撃ち』を使っていなくても、影であるアサツシンを躲せるわけがないだろう。」

「クツソ……………！！」

「流石だな、咄嗟に脚部で防御したのか。アサツシンの攻撃力がそこまで高くないことが幸いしたな。もつとも、それなりのダメージを負っているようではあるが……………」

確かに壊れてこそいないもののそれなりのダメージは受けた。だが、

「フッフッフ……………。テメエはミスを犯した。今ので俺を仕留めるべきだったんだ……………」

メタビーの声は歓喜に打ち震えていた。良く見るとイッキの方も笑

っている。

「行くぜイツキィィィ!!!反撃開始だあああああああああ  
!!!!!!」

「もちろん!!メタビー、メダチエー——————ンジ!  
!!!」

二人の叫びとともにメタビーの体が変形していく。アサツシンを受  
けた衝撃で行動誘発の効果が解けたのだ。

「へへッ。これでようやく対等に戦えるな!!」

「フツ、ようやくか。」

変形したメタビーを見てほくそ笑むミスチ。これでようやくまとも  
な戦いになる……!!

「見せてみるイツキ、メタビー!!お前たちの本気を!!」

それを合図として互いに仕掛ける!!

ドシュドシュッ!!

まずはメタビーのドライブA・ミサイルがグレインに向かう。火薬  
属性を持つミサイルは絶対に外れない。逸れることなく真っ直ぐに  
グレインへ……

「……!!」

対するグレインも先程と同じようにアサツシンを発動する。こちら  
も回避不能の影の斬撃。互いに避けきれぬ攻撃は……

ドオオオン！！

ザンツ！！

互いに直撃する！！

「ツツ！！」

「……ツツ！！」

苦悶の声を上げる両機。だがダメージの大きさならばグレインの方  
が受けていた。メタビーは回避不可能なアサツシンこそ受けたもの  
の威力は小さい影の斬撃。対してグレインが受けたものは同じく絶  
対命中のミサイルだが、斬撃と違いミサイルは攻撃の後に爆風と煙  
が更なる追い打ちをかける！！

（ダメージを与えつつ目くらましで次の行動を悟らせないようにす  
る、か。どおりで今の一撃が僅かにグレインの下に放たれていたわ  
けだ。）

今の一撃はむしろこちらに重きを置いている。おそらくはこの隙に  
変形後のみ使えるクロス攻撃を発動するための準備を整えているの  
だろう。

（設置攻撃だから発動までには時間がかかる。そのための目くらま  
し……だが分かっているのかイッキ？時間が経てば経つほ  
ど有利になるのは俺の方だぞ？）

アサツシンは『がむしゃら』行動だから多用はできない。デストロイも変形後の相手には意味が無い。だがグレインの真の攻撃はそのどちらでもなく……

ウィーーーーーン……………ツツツ!!

メタビーの車輪の駆動音が聞こえてくる。どうやら仕込みは済んだらしい。

(そろそろ煙も晴れる……………仕掛けるか。)

まだまだグレインもメタビーも動ける。ここからが本番だ。

「……………」

そして煙が晴れ……………

ウィイイインツツツ!!!

「ドライブC・クロス攻撃ファイア!!」

「ドライブC・タイムアタック!!」

メタビーの砲撃とグレインの光線、そのどちらもが敵を打ち砕かんと火を噴いた。

キイン！！ザシュザシュツツ！！ガキイン！！キンツキンツキンツ！！ザシュウツ！！！！

「クツ……！！！」

イツキとミズチの戦いとは対照的に残るもう一方の戦いは一方的だった。

「どうしました先生？ロクシヨウは変形してません。一発でもデストロイを当てれば先生の勝利ですよ？」

そんなことを言っている間もロクシヨウは傷一つ負うことなく、目にも止まらぬ速さでブロッソメールを斬り続けている。頭の回数が無くなるほどに索的をかけ、ブロッソメールの動きを捉えられるようになったロクシヨウの攻撃はブロッソメールの回避力を持ってしてもほとんど回避できなかった。

「ロクシヨウ、次は右だ。」

「御意。」

ザツ！！

指示された場所に右腕を突き立てる。ギリギリ躲してブロッソメイ  
ルも次の攻撃に移ろうとするが、

「次は左斜め45度。誤差は2、3度つてところだ。」  
「充分な数字だ。」

ザシュウツ！！

まるで未来が読めているかのようにブロッソよりも先手を取り攻撃  
を加えていく！！今度は避けきれずまともに食らってしまうブロッ  
ソ。高い機動力の代償ともいえる低い装甲がさらに悲鳴を上げてい  
る。

「こ、これが神田ユウトとロクシヨウの本気だというの……………  
！？」

いや、さっきのように軽口が叩けるような状態ならばまだ余裕があ  
るのだろう。だがそれでも的確にロクシヨウに指示を飛ばし自分達  
を追い詰めるその実力。紛れもなく本物だ。もしあの事件さえ起き  
なければイツキヤミズチの良きライバル、良き友人になれただろう。

（いや、まだ遅くはないはず。あなたはもうあの事件から解放され  
るべきなのだから！！）

ユウトの強さは天性の才能によるものだろう。だがそれ以上にあの  
事件に未だに囚われ、そこからくる部分が大きい。故に危ういのだ。  
何かの弾みで爆発しかねない。ここで止めなければ……………

「余計なこと考えてる暇あるんですか？そろそろチェックかけますよ？」

突如聞こえるユウトの止め宣言。恐らくはこの一撃で決着がつく。ブロッソはロクシヨウの一撃を喰らって……

「!?？」

それは奇跡に近かった。今までの攻防からようやく見えた活路。今のブロッソメールとロクシヨウの位置。ブロッソに攻撃を加えた後の残心でロクシヨウの背中ががら空きだった。今ならデストロイを当てられる……!!

(これが最後のチャンス……!!)

ロクシヨウがこちらに振り返る前にブロッソメール最強の一撃を放つ。まともに当たれば全メダロット中最硬の装甲であるガンキングでさえ全パーツ破壊できる最恐の必殺技だ。

「ブロッソメール!!」

チャンスはこの一瞬だけ。リュウコ先生の意思が伝わりブロッソがかすかに頷く。

「しまった……!!ロクシヨウ、その位置はまずい!!」

ユウト達も気付いたようだ。だがもう遅い。ロクシヨウが何か行動を起こすよりブロッソがデストロイを放つ方が早い!!



「ブロッソメイル、ドライブA・デストロイ!!」

そして……

ズズ……ズズズズズズ……!!!

「ははっ……!! すっげえ……」

「これが、ブロッソメイル最強の一撃……!!」

今までとはケタ違いのプレッシャーを放つデストロイ。それを見て乾いた笑いを浮かべながらユウトは悟っていた。一度発動してしまえばもう関係が無い、と

「終わりね神田君。最後の最後でツキは私に回ったようよ。」

「どうかな？俺達は悪運は強いから勝ち誇るにはまだ早いと思えますよ。それにこの程度、これから先に待つ『悪魔』にも、死神カラスにだって程遠い。ここで倒れるようなら俺達はアイツには一生届かない……!!」

「ああ、そうだな。」

チャキツ……

そして何の決意か、ロクシヨウが右腕を構える。向かってくるデストロイに向けて。

「……何を考えているの？まさかデストロイを斬るつもり？」

馬鹿げてる、そんなことができるはずが無い。デストロイは破壊攻撃だ。そんなことをすれば逆に食い殺されるのがオチだ。そう言うリュウコ先生に対してユウトは笑いながら、

「さあどうでしょう？ただ格好つけてるだけかもしれないよ。まあこのデストロイを躲す、またはぶった斬れば俺達の勝ちがほぼ決定、逆にこの一撃でロクシヨウがやられれば俺達の負けってだけだと思いますけどね。」

そんなことを大真面目に言っていた。

「さあ、こっちはいつでもいいですよ。もうデストロイ発動してるから前向いてようが後ろ向いてようが関係ないでしょう？なら、恐れることなくバーンと撃ってきてください。」

確かにここでこうしていても埒があかない。この一撃で決着をつけるのだ。

「……………いいでしょう。ブロッソメール!!」

その一声で遂にブロッソメール最恐の一撃が動き出す!!一刻一刻とロクシヨウへと放たれたその一撃に対してユウトは、

「ロクシヨウ、躲すなよ?」

自分の愛機に向ってありえない指示を出した。

「なっ!?!」

「フッ、安心したぞユウト。それでこそ俺のマスターだ。」

その指示にロクシヨウも笑い自らデストロイに突っ込んでいく!!

「まさか……本気!?!」

「言っただでしょ?ここで倒れるようじゃ俺達はアイツには一生届かないんですよ!?!」

そのまま、ブロッソの放った悪魔デストロイとロクシヨウはぶつかり、そして・  
・  
・  
・

その頃もう一方は……

「ウオオオオオオオオ!!!!」

ドンドンンドンンドン!!!!

メタビーの咆哮とともに放たれるクロス攻撃の嵐。対して、

「……………!!!!」

ビィィィィィッ!!!!ビィィィィィッ!!!!

無口ながら的確にメタビーをタイムアタックで狙い撃つグレイン。片や素早い機動性で攻撃を回避しながら、片や高い装甲に物を言わせて重戦車のように、互いに相手を破壊するという一点で砲撃と光線をそれぞれ撃ち続けていた。

「メタビー次が来る！！急いで！！」  
「分かってらあ！！！」

移動を続けながらクロス攻撃を発動するための準備を整えていく。息の合ったコンビプレイと余程の経験が無ければできない荒技だ。

「流石だな！！俺はこういう戦いを待っていた！！」

だがミスチも馬鹿ではない。今までの行動パターンからメタビーの次に移動するであろう場所を予測しては狙いをつけてタイムアタックを放つていく！！

ビィィィィィ！！！！

「オワツ！！やべえぞ、また威力が上がってやがる……！！」  
先程放たれたものよりもより太く、強力になっている。タイムアタックは文字通り時間が経てば経つほど威力が上がる攻撃だ。戦闘が長引けば長引くほどその威力は際限なく上がっていき、精度も上がる。ミスチが時間をかければかけるほど有利になると言ったのはこのタイムアタックがあるからだ。そして現に、

ジュツッ!!

「ツツッ!!クツッ、だんだん躲しきれなくなつて来たぜ……」

メタビーはグレインの攻撃に対して徐々に、だが確実に追い詰められつつあった。

(時間が経てば経つほど不利だ。ここまででもう威力はグレインの方が上。ならそれ以上の威力を持つ攻撃で一気に決着をつけるべきだけど……)

通常攻撃でダメならば必殺技しかない。つまりはメダフォース・一斉射撃を。変形後である今ならば変形前よりも強力な一斉射撃を放てるはずだ。そこまで考えてイツキはメタビーの現在の状態を確認する。

(装甲は現在6割と言ったところかな。頭 ドライブA の回数は残り二回。現在溜まっているメダフォース量なら一斉射撃二発はいけるな。)

悲観的な数値ではない。相手がグレインだろうと二発撃てれば十分倒せる。だが……

(一発目はともかく、あのミズチが二発目をすんなり撃たせてくれるわけが無い。使ったら最後、警戒されて二発目を出す前にこっちがやられる。それにまだ……)

そう、今このフィールドにはグレインが変形前にかけたフォース制御の効果はまだ続いているはずだ。まだメダフォースは使えない。だが発動されたのは試合開始直後。時間的にもうすぐ解けるのも確かだ。

「……後は僕達がどこまで保つか、だな。」

知らず、つい口元が緩んでしまう。楽しいのだ。心の底からミスチとの戦いが。

「やっぱり、ロボットはこうでなくっちゃね!!」

言うが早いかメタビーに素早く指示を飛ばし一気にグレインとの間合いを詰める!!

「仕掛けてきたか!!」

距離を詰めてくるメタビーに対してグレインはタイムアタックを乱射する!!それを最小限の動きで全て避け、頭部の角をグレインに押し当て、

「ドライブA・ミサイル!!」

至近距離からぶっ放す!!爆風がメタビーにもダメージを与えるが、そんなことは予想範囲内だ。対するグレインは至近距離からのミサイルに一瞬怯んでしまい、動きが鈍くなっている。だがメタビーの攻撃はまだ続く!!

「まだまだあつっ!!」

カブトムシがその角で敵を投げ飛ばすように、メタビーもその要領でグレインを持ち上げ、

「ウラアアアアア！！！！」

ブン投げる！！

「意外にも力技で来たか。だが甘いぜ。」

変形後のグレインは浮遊型だ。投げ飛ばされようが空中で姿勢を保つことくらいいけない。だが、ミズチは気付いていない。グレインが投げ飛ばされた場所。そこは……………

「ドライブC・クロス攻撃ファイア！！」

クロス攻撃を放つための仕掛けがたくさん仕掛けられていたことを！！

「なっ！？無茶苦茶な！！！」

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドン！！！！

大量に浴びせられる砲撃の嵐。決して低くはない機動性を駆使して何とか避けようとするが、やはり全ては避けきれない。

「よしっ！！後は一気に……………！！！」

「悪いがこっちも仕掛けてるんだよ！！！」

そのまま猛攻に出ようとしたメタビーの足元に伸びる影が実体化し、メタビーを切り裂く!!

「ガアアツ!?!」

「流石だな、と言いたいが詰めが甘いぜ。全てを躲すことはできなかったがこちらの行動を制限されるほどじゃない。……中々楽しい戦いだっただが、ここまでだな。」

砲撃の嵐から抜け出たグレインがタイムアタックの照準をメタビーに合わせる!!この位置と態勢……躲しきれない!!

「クツソ……!!こんなところで終われるかよ!!」

「メタビー!!」

この瞬間、フィールドを支配していたフォース制御が解かれる。一定時間が経過し、グレインの支配が及ばなくなったのだ。だがそれも虚しく、先程までよりさらに強力な光がグレインの目の前に溜まっ  
つていき……

「終わりだイツキ、メタビー!!グレイン、ドライブC・タイムアタック!!」

メタビーに向かって放たれる!!

ビィィィィイツツツ!!

どんなに硬いメダロットでも一撃で破壊できそうな一撃。メタビー



では確実に生き残れない!!

「仕方ない……!!メタビー、メダフォース!!」

「無駄だ!!一斉射撃じゃ間に合わない!!」

その通りだ。いくらこの二人と言えども一斉射撃を放つよりもタイムアタックの直撃を受ける方が早い。だからこそイッキが選んだのは一斉射撃ではなく、

「『威力全開』!!」

キイイイイイン……!!

メダフォースの発動とともにメタビーの体が金色に輝く。

「威力全開だと!!?だが今更もう遅い。どう足掻いてもお前たちの負けだ!!」

その言葉通りタイムアタックはもうメタビーのすぐ近くまで迫っている。

(けどこの状態なら回避は無理でも、まだ攻撃なら間に合う!!)

「ドライブA・ミサイル!!」

ドオオオン!!ドオオオン!!

メダフォースの恩恵を受け、威力を増したミサイルを向かってくる光に向かって放つ！！それも二発、残りの回数の方だ。無論、威力全開を使ったミサイル二発でもここまで時間の経ったタイムアタックの威力には及ばない。だがイツキの狙いは別にある！！

ボオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

タイムアタックの威力の前に撃墜されるミサイル。だがこのとき生じた爆風がメタビーを吹き飛ばす！！

「まさか、ミサイルにより生じる爆風、それも威力全開を使い威力を増した二発のミサイルによる爆風を利用して緊急離脱を図ったのか！？確かにそれならばタイムアタックの威力を削ぎながら回避できる……だが、一歩間違えばむしろ自分が木端微塵だぞ！！」

「へへ、僕とメタビーなら出来るんだよ。こいつとは何度も修羅場をくぐってきたんだから！！」

そして、吹き飛ばされボロボロになりながらも態勢を整え直し、メタビーがグレインを照準に収める。

「さっきの言葉、そっくり返すぜ。これで終わりだ！！」

キュンキュインキュインキュイン……！！！！

そして、メタビーの体が光り輝き……

「メダフォース・『一斉射撃』!!!!!!」

メタビーから放たれた必殺技が、大悪魔型メダロットに炸裂した。

「……………なぜ、避けなかったの？」

同じ頃、もう片方の戦いも終局を迎えていた。

「あなたらしくもない指示だったんじゃない？自らの相棒を自滅させるような命令なんて。」

問いかけるのはリュウコ先生。先程ブロッソが放ったデストロイ。文字通り、自身最強最後の一撃をあるうことが目の前の少年は自らの愛機に受けさせた。そんなことをしなければ、楽に勝っていたにもかかわらず。そんなユウトがそのような無謀な指示を出したのは、いわゆる一つのプライドだった。

「……………俺はバカですからね。相手が放った全力の一撃。それを躲して止めを刺す、戦略的には正しいかもしれないけど俺はそん

な勝ち方はしたくない。弱かろうが強かろうが、相手の気持ちがいかに  
もった全力の一撃を受け止めて、その上で勝たなきゃ意味ないでし  
よう?」

「……………」

「……………本当、何やってんのかな俺は。」

自嘲気味に目の前の少年は笑う。普段の人懐こい笑みでも、挑発的  
な笑みでもなくどこか悲しそうな笑みだった。

「……………受け止めた上で勝つ、か。その結果がこれというわ  
けね。」

そう言うリユウコ先生の前には全パーツが破壊され、ティンペット  
が剥き出しになり倒れているブロッソメールとそれを見下ろすボロ  
ボロのロクシヨウがいた。

「フッフ、まさかあのデストロイを叩き斬るなんてね。もうメチャ  
クチャとしか言いようが無いわ。」

もちろんロクシヨウの方も無事というわけではない。脚部も左腕も  
砕け、頭の角の片方も、右腕の剣もポツキリと折れている。だがそ  
こまでボロボロになっても生き残り、デストロイを切り裂き、あま  
つさえブロッソメールまで破壊したという事実。余りの出鱈目さと  
敗れた悔しさと、その他にも色々な感情がごちゃ混ぜになり笑うし  
か出来なかった。結局自分ではこの少年を止めることはできなかつ  
た……………」

「……………賭けは私の負けのようね。仕方ないけど約束通り……………」

「いえ。」

リュウコ先生の言葉を途中で遮り、ユウトは言葉を紡ぐ。

「……………賭け、無効にしてもいいですよ。」

「え……………っ!？」

「よく考えれば『あの計画』のデータはともかくもう一個の方は先生がアトムさんに同じようなもの渡してるでしょうし、アトムさんから貰えば済むことだった。それにどうしても必要ってわけじゃなかったし。だから無効です。生意気言ってますいませんでした。」

そう言つて深く頭を下げる。突然のことに理解が追い付かない。

「見た感じ……………イツキ達を含めて他は全部終わったっぽいな。とりあえずこれでベスト4進出だな。」

クルリと背中を向けてロクシヨウを伴いながらスタスタと歩き始める。その姿に向かつて、

「どうして!? あなたはデータが欲しかったんじゃない!? あなたは勝つたのよ!! なのにどうして!？」

本音は今も変わらずあの忌まわしき過去にこだわり、そのせいで自分を見失つてほしくない。だが、彼はあんなに感情を露わにしまで賭けを持ちかけてきたのだ。それなのに勝つた後はいらぬという。そのことを問わずにはいられなかった。

「……………ブロッソが放った最後の一撃、良かったですよ。」

歩くのを止め、背中を向けたままユウトが切り出す。

「俺に関わって欲しくないって。あの事件に心を囚われたままになつて欲しくないって。そう言う気持ちかメダロットを通じて深く伝わってきました。．．．．．会ってそんなに時間が経つてるわけでもないのに、先生には全く関係ないことなのに俺のことを真剣に考えてくれるのが分かったんです。そんな相手から自分から持ち出した話とはいえ、景品受け取るわけにはいかないじゃないですか。」

「．．．．．」

「だけど、出来ることなら渡してほしい。俺の目的のためにも、何より先生たちのためにも．．．．．」

「どういう．．．．．？」

そこでようやくユウトは振り向き、懐から何かを取り出し投げてる。それは予選でイツキ達に渡した物と同じ箱だった。

「これは．．．．．？」

「レアメダル専用パーツのプロトタイプです。先生なら完成させられると思いますよ。」

「これを、何で私に？」

「．．．．．あの計画』のデータを持つてるなら遅かれ早かれ先生やミズチ達の所に『悪魔』がやってくる可能性が高い。いや、それ以前に俺に関わった時点でそうなるのは決まってるんです。それはあいつらを倒すための最終兵器。恐らくはグレインの力をあそこまで引き出せるミズチとあいつのメダルならその完成形も使いこなせるはずです。アイツらから身を守るためにもそれは持っている方がいい。出来れば完成させた物を．．．．．でも、使わないで済むように願ってます。先生にもミズチにもイツキ達にも、俺がいる場所には堕ちてほしくないから。」

つまり、ユウトが追っている敵が自分の持っているデータを狙って

いる……?ということとは、

「じゃあ、あなたがデータを欲しがってた理由って……?」  
「危険な目に合いたくないなら俺に渡すか処分した方がいい。そろそろアイツらもデータの存在に気付いてるはずですから。」

渡そうが渡すまいが俺は止まりませんがね、と付け加えてじっと見つめて来る。

「……私はともかく、ミスチ達もその敵に狙われる可能性はあるのよね?」

「恐らく。」

「そこまでするものなんだからこのデータには何か特別な意味があるのよね?」

「はい。」

だったら迷う必要はない。それに元々自分は負けたのだ。賭けとはいえど約束はきちんと守らねばなるまい。

「そこまで重要なものなら私よりもあなたが持っている方が安全そうね。お互いのためにも。」

ピッピツとメダロッチを操作してユウトのメダロッチにデータを転送する。

「……これでデータは送ったわ。『あの計画』のデータよ。もっとも、プロテクトが固いところがあって私でもその内容は半分程度しか知らないのだけれど。」

「そうでしょうね。ともかくありがとございました。」

再び頭を下げ今度こそイツキ達の所へ向かって歩き出す。

『リーダー機機能停止！！試合終了です！！勝者・イツキチーム！  
！！！！』

ユウトの後ろ姿を見つめるリュウコ先生の耳に、ミスターうるちの  
試合終了の宣言が一際大きく響いていた……………



#### 第40話：決着・試合終了（後書き）

よ、ようやく少しはまともなバトル描写書けた……いや、まだまだ下手なんですけどね。けど今までに比べれば少しは前進したかな？

ちなみに作中ではデストロイをぶった切るとか、めちやくちゃやってますがゲームではそんなことは出来ません。もっともこれは分かりやすくするためにゲーム版のルール、ストーリーで戦闘はアニメよりって感じなんですけど。(……まあアニメでもデストロイをぶった切るなんて真似はやってなかった気がしますが。)

それと『通りすがりのドークス使い』さん。なんかメッセージの返信ができないようなのでこの場を借りて返事を返させて下さい。質問の内容「バリスタや奥義の音の描写はどうしていますか？」というのですが、バリスタ等のミサイル系は状況などによりますが、見ての通りドオオオン等で通しています。そして肝心の奥義ですが……正直考えてませんでした(汗)元々そっちの方は普通のロボットで使うことが無いので余り考える場面が無く、いつそ音を入れないで見ようかな等と現在も考え中です。説明が下手ですみませんがこれでよろしいでしょうか？まだ疑問があるようでしたらまたメッセージを送ってください。疑問でも、ここはこうした方がいい等の指摘でもいつでも受け付けています！！他の皆さんもそう言うことがありますたら是非メッセージを送りつけてきてください！！返信を送るのは無理でも今回のように後書きなどを利用して返事を返させていただきますから。

さて、長々となりましたが今回はここまで。また次の話でお会いできたら嬉しいです。ではでは(^^)ノ

## 第41話：降臨する黒きメダロット

「まったく、まさかあんな無茶苦茶な方法をとるとは思わなかったぜ。」

メダチエンジが解け、ティンペットだけとなり機能を停止させたグレインを見つめつつミズチは苦笑していた。

「威力全開を発動させたミサイルをあんな至近距離から二連射。下手をすれば自滅していたぞ？」

「ハハハ……確かに今思えば我ながらメチャクチャな策だったね。でも不思議と失敗するとは思わなかったよ。」

「……本当、相変わらず面白い奴だよお前は。」

イツキの発言に苦笑するミズチ。その顔は悔しそうではあるがそれ以上に楽しそうな笑みだった。

「なににせよ、リーダーの俺がやられた以上お前らの勝ちだな。」

そして、

『リーダー機、機能停止確認!!!勝負あり!!!勝者・イツキチーム!!!』

ミスターうるちの掛け声で試合が終了した。

「しかし、終わってみれば情けない話ですね。全員敗北とは……  
・僕も人のことは言えなませんけど。」

「いや、そうでもない。本当に紙一重だったからな。事実、俺とアリカはお前とコクエンにかなり押されていた。ロクシヨウの索的がかかっていなければ俺はお前に勝てたかどうかも分からない。」

「まあ、確かにハクマ君は強かったわよね、ハクマ君は。でも相変わらずコクエンは……。」

「つるせー！！次やれば俺達が勝つんだよ！！！！」

「バーカ。今のお前じゃ何億回やってもアリカちゃんにもカラスにも、もちろん俺にも勝てねえよ。」

「ああっ！？喧嘩売ってんのか鳥の巣頭っ！？」

ワイワイと皆で会場を後にする。勝ち負けは最早関係なく皆仲良く盛り上がっていた。

「……………」

「……………」

約二名を除いて。

「ミズチ、先生？二人ともどうしたの？」

試合終了後、ミズチとリュウコ先生は黙ったままそれぞれ何かを考えていた。と、思ったらチラチラと皆と一緒に騒いでるユウトの方をしきりに見ている。

(試合が終わって、ミズチと先生が何か話してからだよな……………)

・・・?)

そつだ、ハクマ達から少し離れたところでリュウコ先生がミズチに向かつて何か言つていた。最初は面倒くさそうにしていたミズチだったが途中から真剣な表情に変わつて・・・

「イツキ。」

そんなことを考えているとミズチが話しかけてきた。

「少し話がある。ちよつといいか？」

「別に構わないけど・・・」

「時間はあまりとらせないようにする。次の試合は俺も興味があるからな。」

次の試合はイツキを師匠と崇めるアンダーシエルの面々とキノコ率いるリバティーズだ。やはり同じ四天王だったシユリが出ている以上、ミズチも気になるのだろう。

「分かつた。ちよつとだけなら。」

「悪いな。」

そしてリュウコ先生を除き、他の皆には先に行つてもらつた。皆が何も気にせず先に行く中、ユウトだけは何かを悟っているようだった。

「さて・・・話というのはあいつ、神田ユウトのことだ。」

「ユウト？ユウトがどうかしたの？」

その質問にミズチはどこか複雑そうな顔をしながら、

「あの男には気をつけた方がいい」

そんなことを言い出した。

「気をつけるって……?」

「あいつは危険だ。確かにあいつからお前たちに何か手を出すようなことはないだろう。今お前たちが直面している問題……ミュータントだったか? お前たちは成り行き上そうなってしまったが、恐らくは関わって欲しくないと思っっているだろうしな。」

「なら……」

なら気をつけるとはどういう事だろう。危険とはどういう……?  
・?

「天領君。彼自身が話していないことを私達が話すわけにはいかない。けどね、彼は彼自身のある過去に今も囚われている。その過去に関係しているある人物を追っている。そしてそれが今あなた達が直面している問題にもつながっている。」

「どうやらあいつはその男を必死に探しているらしい。そいつに繋がるであろう手がかりは一つ残らず集め、しらみつぶしに探しまわっている。その男のことにすると我を忘れてしまうほどに……」

探しているある男……それはもしかして、

『もしかしたら君こそが『異端』なのかもな。ほかの異端どもを引き寄せる『真の異端』』

あの夜、僕達の前に現れたルシファーと呼ばれていた男か……  
・？その前まで僕やコウジと戦っていた『悪魔』を超えるプレッシャー。戦意が無かったにも関わらずその場に現れただけで他を圧倒していた。そしてそれを見たユウトは確かに普通じゃなかった。周りのことなど目に入らずただ一心に目の前の男を殺そうと……

(え……？ちょっと待て。それはどういうことだ……！?)

おかしい。あの時のユウト、そしてロクシヨウ。あの二人の行動は今から思えばありえなかった。

『殺せロクシヨウ!!』

確かにユウトはそう言っていた。そしてロクシヨウも迷いなくルシファーを殺そうとメダフォースを……

「いや、それ以前にロクシヨウはあの男の姿を見た瞬間にルシファーに斬りかかっていた……!!」

それが有り得ない。ロクシヨウはレアメダロットだし、異形のメダロットと何度も戦っているだろうがメダロットなのだ。そしてメダロットである以上、リミッターであるメダロット三原則がかけられている。

- ・第一条『わざと人間を傷つけてはならない』
- ・第二条『人間に危険が降りかかるのを見過ごしてはならない』
- ・第三条『第1条と第2条を破らない範囲で他のメダロットに致命

傷を与えないこと』

これがあるからメダロットは故意に人を傷つけることができず、また相手のメダロットをロボットルで破壊してもスラフシステムで自己治癒できるのだ。だがあの時のロクシヨウは迷いなくルシファーを殺そうとしていた。いくらユウトの指示があつたとはいえ、自分から攻撃した以上それはロクシヨウが故意に傷つけようとしていたことに他ならない。いや、最初の攻撃は指示すら出されていなかった。

「まさか………!？」

そこから導き出される結論をイツキは一つしか知らない。だが、それを言葉にすることはできなかった。してしまえば認めてしまう気がして。

「イツキ、大体のことはあいつが姉貴に話したらしいから知っている。そしてお前のその言葉から察するに………」

そしてミズチはイツキが頭で分かっているも信じたくない現実を突きつけた。

「………神田ユウトは、自らの愛機のリミッターを外しているのかもしれない。」

「遅いなアイツキ。もうキノコちゃん達の試合始まっちゃうのに。」

その頃アリカ達は観客席で次の試合の観戦をしようとしていた。

「ミズチとの話が盛り上がってるんだろ。もうすぐ来るって。」  
「だといいけど……………」

観客席で試合を見てくれたコウジ達とも合流し、試合が始まるまで少々雑談をする。コウジはアリカと他愛無い話をしながらイツキを待ち、カラスはハクマと親しげにしながらさっきの試合についてお互い分析し合っている。コクエンはどこかにいなくなったと思ったら遙か遠くの方でメイド少女ファンクラブの面子と一緒に反省会を行っていた。

「モグモグ……………モグモグ……………」

ユウトはまたもどこから持ってきたのかポップコーンを食べながら試合表を見つつ、たまに会場の方も眺めていた。

「……………」

そしてカリンはそんなユウトをジーッと眺めている。失礼だとは分かっていても、ユウトから目が離せなかった。

「ん？どうかした？俺の顔に何かついてる？」



「あ！い、いえ。その……」

「ハハッそんなに緊張することないって。ポップコーン食う？」

人懐こい笑みを浮かべながらポップコーンの入った容器を差し出してくる。一応二人ともまともに顔を合わせたのは今回が初めてなのだが、ユウトはそんなことを全然気にした風でもなく親しげだった。

「……では、少しだけ頂きます。」

差し出された容器からポップコーンを二つ頂き口に運ぶ。バターと塩味が効いていて中々美味しかった。

「お、さすがはお譲様。やっぱりポップコーンを食べる姿も優雅だなあ。」

からかうように言いながらニコニコ笑っている。それにつられてカリンもクスクスと笑いだしてしまった。

「？」

「あ、すみません。でもイツキ君が言っていた通りの人だなんて。」

「そっか。ねえねえイツキ俺のことなんて説明してたの？」

興味を持ったのかニコニコした顔のままカリンに聞いてくる。その笑みに裏はなく、どこまでも純粹だった。

「そうですわね……」

だからカリンもそれに応える。良かった、彼はとてもいい人だ。そんなことを思いながら自分が前に見たのは所詮夢だったのだと実感する。最初は警戒していたのだ。だってカリンが予選の時イツキに

語った夢の内容。イツキと泣きながら相對していたのは他ならぬユウトだったのだから。

(でも、それも考え過ぎだったようすわ。)

見ただけで分かる。彼はイツキ達ととても仲が良いのだろう。そんな彼とイツキがそんな風になるわけが無い。そして頭からそのことを完全に振り払いユウトと仲良く話しているうちに次の試合の開始時間となった。

そしてチームアンダーシエル控室。

「先生のチームは勝ちあがった!!! ならば我々もこんなところで負けるわけにはいかない!!!」

控室で大きく宣言するラブレター男。だがチームメイト達はかなり弱気だった。

「けど相手も手練れだろ。しかもあのリバイーズのリーダーと元四天王の一角だ。前回の試合で先生のご学友と戦ったおかげで、慢心もなく全力でぶつかってくるだろうし.....」  
「俺達勝てんのかな.....」

口々にそう言うチームメイト男Aと男B。普段ならばここで女子の

皆が叱咤激励するのだが……

「……………」

「ハア……………」

その女子メンバーも今回ばかりは強気になれなかったようだ。

「お、お前ら！！そんなことじゃ勝てるものも勝てないだろ！？先生に恩返しするためにも俺達はここで勝つんだ！！第一この試合に勝てないようじゃ先生にだって勝てないんだぞ！？」

ラブレター男がそう言ってもチームの士気は低い。そんな中、ただ二人だけ同じくこの状況を悲観していない者がいた。

「たく、だらしないわねえ。まあ仕方ないと言えば仕方ないけど、あんた達がそんな様子じゃあたしが出るしかないじゃない。」

アンダーシエルでの女子チーム、そのリーダーたるウオナだ。ラブレター男の彼女にして恐らくはアンダーシエル一番のメダロッターだ。だがそれは、彼が来る前までの話。

「リーダー、僕も出るよ。あなた方の先生のチームとは是非戦ってみたいし、それまで控えのままなのもつまらないからね。」

浦島カイ。最近転入してきたメダロッターにして瞬く間にアンダーシエル最強の座を手にした男。リーダーであるラブレター男も認めるその実力と温和さ、そして内に秘める闘志はここでは心強い。

「ウオナちゃん……………カイ……………やっぱりいざって時に頼れるのは君達だけだ……………！！！！」

「コラ、仮にも男がメソメソするな！！それより時間だよ。」

ウオナの力強い言葉に頷き、会場へと向かう。先生である天領イッキは勝ちあがった。そこに辿り着くまでにはあと二回勝ちあがらなければならぬ。

「行くぞー！！」

「お、出てきた出てきた。ようやく次の試合だなー！！」

身を乗り出して会場を眺めるユウト。いつも以上にニヤニヤしているその顔はアンダーシエルのある人物に向けられていた。

「あ、カイ君だ。おーい頑張つてねー！！」

「あれ？アリカちゃん知り合い？」

その人物に向かって手を振るアリカとそれを疑問に思っているコウジ。そんなコウジにアリカは予選での出来事を軽く説明している。

「へえーそんなことがねえ……」

「困りましたわ。この場合は素直にシユリさんを応援をしているのでしょうか？」

そんなことを隣では話し合っている。そんな中、

「……ユウト。あいつは何者だ？」

カラスはカイに対して感じるところがあるのかそんな質問をしてきた。その質問にユウトが一瞬、虚をつかれたような顔をするがすぐにニヤリと笑う。

「やっぱりお前の目は誤魔化せないみたいだな。ある意味未恐ろしいよ……」

「茶化すな。お前は奴が何者なのか理解しているんだろう？」

「うーん……口で説明するよりは目で見た方が早いぜ？百聞は一見にしかず、まあこの試合でそれが見えるかは分からんけどね。」

「？」

「ま、少なくとも敵じゃねえよ。味方かどうかは分からんけど……」

そんな意味深な言葉はカラスに更なる疑問を生ませたが、それ以降カラスが何かを聞いてくることはなかった。ユウトの顔が笑いながらもいつになく真剣になっていったからだ。そしてそれがイツキ達が話している内容と関係があることをカラスはまだ知らなかった。

「で、でもロクシヨウがリミッターを外されてるなんて……  
・だってロクシヨウは誰かを傷つけることもメダロットをにダメー  
ジを与えすぎたこともないよ!？」

そうだ。今まで見た中でロクシヨウが相手にダメージを与えすぎた  
りしたことはない。たまに有り得ないほどの強さを見せはするが、  
それは元々がレアメダルだしマスターがあこのユウトだからだ。あの  
夜ルシファーに攻撃を仕掛けたのだって今から考えればメダロット  
三原則のルールを破らないと判断したからかもしれないじゃないか。  
あの『悪魔』達が人間かどうかすら分からない以上そちらの方が説  
得力がある。

「……確かにな。あいつが俺達とロボットをしにきた時も、  
俺達四天王全員を相手にしても尚互角以上に渡り合える強さを誇っ  
てはいたが、決して再起不能になるようなダメージを負わせてはい  
ない。だが……」

と、そこで再び言葉を切りまっすぐイツキの目を見つめてくる。

「イツキ、お前は奴のロボットを何回見た？」

「え……?」

そういえば……すぐに気が合ったから気にもしていなかつ  
たが僕とユウトが出会ってからほとんど時間が経っていない。そし  
て彼のロボットをきちんと見たのは恐らくこの大会本戦での二回と  
学校での授業で一、二回だけだ。最初に助けてもらった時のあれは  
ロボットとは言えないし……

「……片手でも余るくらいにしか見たことが無い。」

それに一緒にいたリュウコ先生がびっくりしたような顔をするが、すぐに納得がいったような顔になる。

「でもっ、それはユウトが転入してきてから色々であったからで！  
！だから……！！！」

必死なイツキを手で制しミズチが続ける。

「俺はあいつとはお前たちほど付き合いがあるわけじゃない。だから全部推測にすぎないし、ロクシヨウにだってちゃんとリミッターはかけられたままなのかもしれない。だが、あいつは今も過去に囚われていて俺達はそんなあいつのことを何も知らない。」

「……」  
「だからこそ注意してやれ。アイツが何か無茶をするようならお前らが止めてやるんだ。」

それでミズチは口を閉じた。

「どうして、ミズチは……？」

「そこまでアイツのことを気にかけるのかつて？ そうだな……程度は違えど、同じく過去に囚われていた経験者の同族意識といったところかな。後は、いつになく姉貴が心配してるからな。普段の姉貴を知っている俺からすれば鬱陶しくてたまらないんだ。」

「ミズチ……！！！」

慌てたようにリュウコ先生がミズチの口を塞ぎにかかる。それを鬱陶しげによけるミズチ。何だかんだ言ってもこの二人は仲がいい。

「……ありがとうミズチ。先生、ユウトのことは任せて下さい。彼を止めることはできなくても絶対に一人で無茶はさせません。」





イツキ達が急いで観客席に着いた時、試合は中盤にさしかかった。急いで皆の姿を探して……………」

「皆遅れてごめん!! 試合は……………」

「イツキ君!! それが……………」

「遅いじゃない!! 早く見なさい、ものすごい試合よ!!」

その言葉にカリンとアリカだけが振り向き、他は皆食い入るように試合を眺めている。もしかしたらイツキが付いたことにも気がついてないのかもしれないと思えるほどに凝視している。だからイツキも皆にならって試合の様子を見ようと……………」

「……………え?」

瞬間、思考が停止した。会場で繰り広げられている試合、それはたった一人を相手にキノコ達が押されていたのだ。だが今回は変則ルールではなくちゃんと他のメンバーであるラブレター男の愛機・バンチューやウオナの機体・ブルーハウステンも試合に参加している。だがこの二人は後方支援担当。実際には残りの一人がキノコ達を相手にほとんど一人で相手をしていたのだ。それもリーダー機として

「嘘……………だつて、そんな……………!!」

だがイツキが驚愕したのはそこではなかった。キノコ達を圧倒するメダロット博士に預けていたはずの機体。そしてラブレター男達とともに試合に参加しているメダロットはイツキにとって忘れられない、二度と出会えるはずのない友達だったのだから。

「なんで……………君が……………一体どういうこと何だ、カイツツツツ!!!!」

「そ、そんな……」

一方で試合を行っているキノコ達は動揺を隠せなかった。漆黒の機体を操る一回戦には出ていなかったメダロット、その彼一人に自分達は傷一つつけないことができずに圧倒されていたのだから。既にクウワイバーンは左腕と脚部を、アンノーンエッグは両腕を破壊されかなり不利な状況だ。

「何なのよあの機体は……あれじゃまるで……!!」

「ボウツとしないでキノコ!!次が来ますわよ!!」

「分かってるわよ!!」

一回戦の時とは違い、最初から油断など微塵もしていないシュリがキノコに激を飛ばす。キノコも返事を返し、自身の愛機に新たな指示を送る。現在スポアーパラソルは既に変形を終え、メダフォースを溜めている。キクヒメ達を苦しめ、そして倒したメダフォース・『生命ドレイン』を発動するための準備だ。そしてシュリのクウワイバーンとアカガネ教授のアンノーンエッグがスポアーパラソルを守るようにして、それぞれ右腕をゾリゾンに、頭をプロミネンスに変化させ目の前の敵に仕掛ける!!どちらもこの場ではハズレではなく、むしろ最高の引きだ。

「行きなさいクウワイバーン!!」

ゾリゾンに変化したクウワイバーンの右腕が漆黒の機体に迫る!!

「.....」

ガキーン!!!

だがカイはそれに動じることなく自らの愛機に無言で指示を飛ばし、ゾリゾンを受け止めさせていた。

「流石は右腕格闘系パーツの最高峰。でも『変化』系の機体じゃあその力は十分に発揮できませんね。」

「私だってそんなことくらい分かっていてよ。お父様!!」

シュリがアカガネ教授に向かって叫ぶ!!それを合図にプロミネンスに変化したアンノーンエッグの頭から強力なビームが放たれる!!

ビィィィィィイツツツ!!!!!!

自らを囿にしたこの連携攻撃。流石にカイでも反応が間に合わない!!

「リーダー!!!」

「待ちくたびれたぞカイ!!!ようやく僕の出番だな!!!」

だが横からラブレター男のバンチューが割って入る！！更にバンチューはその右腕を前にかざし、

「ライトメリケン！！」

そのパーツの名を叫び発動させる！！瞬間バンチューの右腕に透明な壁のようなものが生まれ……

カキイイイイン！！

プロミネンスを放ったアンノーンエッグへと『反射』させる！！

「何……！！？」

反射されたプロミネンスはアンノーンエッグの頭に直撃し、その機能を停止させる！！

『アンノーンエッグ、機能停止確認！！戦闘不能！！』

うるちのコールが響く。

「お父様！！」

「余所見をしている暇はないと思うよ。」

その声に急いで振り返るが、遅かった。

「ブラックバリスタ！！」

漆黒の機体の頭パーツからミサイルが放たれクウワイバーンに直撃する！！

「クウワイバーン！！」

「終わりだ！！」

シュリの叫びに更に追い打ちをかけるかの如く右腕の銃口を向け、

「ブラックヒューザー！！」

放たれたライフルが頭を正確に撃ち抜き、クウワイバーンを機能停止させる！！

『く、クウワイバーン機能停止確認！！戦闘不能！！』

あっという間に二人がやられる。残されたキノコは目の前の光景が信じられなかった。だがあの二人のおかげでメダフォースは溜まった。絶望的な状況だが、リーダー機であるあの漆黒の機体さえ倒せば試合には勝利できる。

「おじ様、シュリ。あんた達の犠牲は無駄にはしない！！」

そしてスポアーパーソルの機体が輝く！！メダフォースを放ちこの試合に勝利するために。

「流石はリバティーズのリーダー。真つ直ぐ僕達を狙いに来るか・・・  
・・・受けて立つよ。ウオナさん、お願いします！！」

それにウオナが頷きブルーハウテンの左腕からカィに機体に向けて光の球体が放たれる！！メダフォースチャージ、カィもまた、自





「私はキノコ、舞茸キノコよ。今度私が強くなったらまた相手してくれる?」

メダロッターとしてそんなことは関係ない。知りたければロボトルで聞けばいいのだから。

「もちろん。それは構わないよ!!」

最初はびっくりしていたカイもニコリと頷いて了承する。そしてチームのメンバーとともに会場を去って行った。

「キノコ……」

「シユリ、私ちよつと自信無くなっちゃったかも。」

それは諦めではなく、今までの自分を超えてあの高みに届きたいという意味。キノコはこの大会でカイと戦えたことを感謝していた。



第41話：降臨する黒きメダロット（後書き）

どうも蒼騎士です！！ついにカイもロボトルを行いました！！彼の愛機はメダロットシリーズを知っている方には分かりやすかったかもしれませんがねwwちなみに次の話あたりで詳しく説明すると思いますが、ブラックビートルと、彼（彼女？）につけられているブラックカプトメダルは一つしかありません。つまりこの話がメダロット4の二年後が舞台である以上ブラックビートルは本来イツキが所有しているはずなのです。まあさっきも書いたとおりその話は次あたりで明かすので楽しみに！！

それから『通りすがりのドークス使い』さん！！わざわざお返事ありがとうございます！！ありがとうございました！！もちろん質問も感想もいつでもウエルカムですよ！！疑問などがあつたらいつでもメツセージ待ってます！！

それではまた次の話で会えることを！！

## 第42話：開始直前、暗躍する『黒衣』

ダッ！！

カイ達の試合が終わった後、イツキは走り出していた。理由はただ一つ。

(カイ……！！)

メダリンピックの試合のためアンダーシエルに足を運んだときに出来た友人、浦島カイ。だがその正体はマーブラーの作りし四体いるスピリットの内、水を司るスピリット・セルリアーノだった。まだマーブラーとは敵同士、いやまだその存在も把握していなかったときだが、あのときはセルリアーノの策略でアンダーシエルが崩壊の危機に陥った。それを救うべく時を支配するマザー・スバルの力で過去に飛び未来を変えることでその危機は救われた。だがそれにより『浦島カイ』という人物はこの世に存在しなかったことになり、彼の事を覚えているのはイツキだけになったはずだった。

(その君が今になってどうして……?)

初めて見たときは人違いだと思った。

あるいは存在するかもしれない、本当に人間の『浦島カイ』なのかもしれないとも。

だが違う。先程の試合で使っていた漆黒のカブト、間違はなくあれはブラックビートルだった。マーブラーが生み出したメタビート対を成す機体にしてリミッターを外されたメダロット。スピリットが使用し、イツキを何度も苦しめたその機体はイツキがメダロット

社へと引き渡すことでリミッターが掛った一般的なメダロットに生まれ変わり、以後はイッキのメダロットとなっていた。最も二年前の四天王騒動で一時は奪われてしまったが、その後のミズチ達と共で行った暴走メダロットを止める戦いで再びイッキの元に戻り、半年位前に『暫く旅をして来る』なんて言っただけだったのだが……

（あれは間違いなく本物のブラックビートル。完全に使いこなす事が出来るのはスピリットだけだ。）

このことについてイッキは確信を持っていた。そしてあそこまでブラックビートルの性能を引き出して以上あの『浦島カイ』がただのメダロットである筈がない。何よりあのブラックビートルが本人である以上、普通のメダロットに力を貸すわけがないのだ。

「だから、確かめなきゃ!!」

そう意気込み、アンダーシエルの皆がいるであろう控室へと急いだ。

「うわあ……カイ君の実力は予選で分かってたつもりだったけど、やっぱり凄いなあ……」

「シユリもキノコさんもあっさりやられてしまいましたね……」

そう感想を述べるアリカとハクマ。今の試合を見てミズチ、カラス、

コウジの三人も驚きを隠せなかった。

「けどあの機体は確かイツキが持ってたブラックビートルだよな？  
なんであいつが……？」

「いや。それよりもあの強さ……コウジは気付かなかったか？  
あの機体もレアメダルだが、それ以前にあのカイという男。何か  
が違う。」

「ああ。それはなんとなく感じたぜ。しかもまだ実力は隠してる感  
じもした。何者なんだ？」

カラスとコウジはカイの異質さに気付いたらしい。二人とも完全には  
分かっていないようだが、コウジの言う通りカイはまだ実力を隠  
していた。ならばそんな些細な事にも気付いた二人を誉めるべきだ  
ろう。

「お前の言う通り、確かに見た方が早かったな。だがあいつは一体  
何も……」

そこまで言っただ隣のユウトがいないことに気付く。その隣にいたはず  
のカリンの姿も見えず、二人ともいつの間にか離れていたらしい。

「カリンは恐らくシユリの所に行ったんだろう。ユウトならイツキ  
を追い掛けたんじゃないか？あのイツキがカイって男を見た瞬間、  
珍しく動揺してたしな。」

「そうか……ところでなぜミズチは手にポップコーンの箱を  
持ってるんだ？」

何食わぬ顔でポップコーン片手に立つミズチにカラスが思わず質問  
してしまう。

「あのツンツン頭に渡されたんだよ。ところで問題なのは次だな？」  
対戦表を指してミズチが聞いてくる。指し示された所にはヒカルの  
チームとマモンのチームの試合があった。

「あがたヒカルの対戦相手……こいつが噂の『悪魔』なんだ  
る？」

「ああ。予選でユウトが一度倒したらしいが……」  
「らしいが？」

カラスがそこで言葉を切り、続きをコウジが引き継ぐ。

「あいつもロクシヨウもボロボロだったんだ。特にロクシヨウはパ  
ーツもティンペットも駄目になってた。信じらんねえよな。俺はあ  
いつのロボットしてる姿を三回位しか見てないけど、どれも圧倒的  
だったぜ？それこそさっきのカイってやつみた。そのあいつがあ  
んなにやられたなんて……正直ヒカルさんもかなり苦戦する  
と思うぜ。力に目覚めきつてなかったとはいえ、俺達も別の『悪魔』  
にこっぴどくやられてるしな。」  
「……」

コウジは一回戦でヒカルと戦い、『あがたヒカル』の強さを肌で感  
じている。レアメダルの力が解放され、クラファイティモードになっ  
たスミロドナットをレアメダルの力を使うことなくアーク一体で倒  
したその力は本物だ。だがその力を生で感じているはずのコウジが  
それでも勝つのは難しいと言っている。

「それほど危険な相手ということか……」

改めて危険さを悟らされる。そしてイツキ達はそんな連中を相手に

少なくとも一度は戦っているのだ。五体満足で無事な今は、どれ程幸運なのだろう。

「これは姉貴が心配するのも無理ないな。」

そうミズチは一人ごちた。

「よく来てくれました先生！！後一回勝てば先生達と戦えますね。楽しみです！！えっ、カイですか？アイツならさっき何処かに行きましたか・・・しかし先生。カイと知り合いだったんですか？」

バタンツ！！

控室にはカイはいなかった。が、祝いがたらラブレター男に確認した情報である『浦島カイ』については少し分かった。どうやら大会が始まると全国に伝えられる数日前に転入してきたらしい。温厚かつどこか人を惹き付ける人柄、そして凄まじいロボットテクニクで瞬く間に男女問わず人気者なったらしい。ラブレター男もウオナも絶大な信頼を寄せているようだ。

「けどブラックビートルについての情報は分からなかったな・・・  
・まあ一般的には知られてないもんな。」

やはり本人に直接確認するしかない。一応大会の舞台であるこのフューン要塞の内部構造は熟知しているつもりだし、カイもそう遠くには行っていないだろう。そう結論を出して……

トントントンッ！

「ワヒヤアツツ！？」

「ウオオウツツ！？」

突然肩を叩かれ、思わず叫んでしまった。それは向こうも同じだったようで……

「ってなんだユウトか……脅かさないでよ。」

「……っ！そ、そりゃ俺のセリフだタコ……耳元で奇声上げんな……!!！」

余程堪えたのか耳を押さえて床に蹲っているため、ゴメンと謝りつつ手を差し出して立ち上がらせた。

「うー、まだ耳がキンキンしてるぜ……」

「どっしたのさこんなところで？」

なぜユウトがここに？イツキの質問に対しユウトは、

「お前を探しに来たに決まってるんだろ。間違いなくこっちに向かっていると思ったからな。」

当然の様にそう返事を返す。

「カイを見た時のお前の反応が面白いくらいに分かりやすかったかな。あいつに確認したいんだろ？お前が知る『浦島カイ』と同一人物なのかどうか。」

「ち、ちよつと待って。君は何を言ってるんだ？」

まるで僕とカイが友達だったことを知っているかのような物言い。それが疑問になって現れる。

「俺はお前が思う以上に色んなことを知ってるんだよ。時のマザー・スバルに月のマザー・ブラックデビル、地水火風の四大スピリットのこと。前にも話さなかったっけ？」

「・・・・・・・・」

この口調、少なくともユウトはイツキの友達だった『浦島カイ』について知っている。だが何故だ？スバルの力で過去を書き換えている以上、あの事を知るのは僕とメタビー、そしてスバルだけなのに……

「あんま深くは聞かないでくれよ？面白い話じゃないしな……ま、代わりに一つ良いことを教えてやるよ。浦島カイの居場所をな。」

「

「本当にこつちで合ってるのユウト!？」

「おうよ!!!ロクシヨウに探らせたからな、間違いないぜ!！」

ユウトに先導される形でカイの元へ向かうイツキ。しかし、



「……………どう見ても人気が無さそうな場所に向かっているよね？」

「オイオイ、お前の方がここ（フーン要塞）については詳しいだろ？大丈夫、この先は単なる広場だよ。人気がないのは単に大会が盛り上がってるのにわざわざそこに集まる物好きがないってだけだろ。」

「言われてみれば……………」

ユウトの言葉には確かに納得出来る。納得出来るがしかし、

（なんだろう？さっきから嫌な予感がヒシヒシと……………）

気のせいだと信じたいがこういう時のイツキの勘は良く当たる。伊達にトラブル人生を送ってきてないぜ！！

（誇れることじゃないけどね……………）

「っと、あの角曲がったとこだな。覚悟できてつかイツキ？」

「……………大丈夫。」

本当は自信を持って言い切れるほど大丈夫じゃない。だけど、

「行こう、カイの所へ！！」

「いい目だ……………っし！！行くぜ！！」

二人でそう意気込んで角を曲がろうと……………

グイッ！！

「へっ……!?!」

横から手が伸びてきてイツキを引っ張り……

「ユウ……!?!」

助けを求めようと手を伸ばすが、先を歩くユウトには届かなかった。

「……」

その頃カイはフューン要塞の中でも一際広い広場のベンチに腰かけていた。周りには誰も居らず独り占めの状態になっている。メダロツチの中にある相棒も今は静かだった。

「……」

無言で手を握ったり開いたりを繰り返す。大丈夫だ、まだちゃんと動く……

「だがあまり時間がない事もまた事実。楽観は出来ない。」

今が楽しすぎて、時々忘れてしまいそうになる自分の目的。それを果たすためにも。

「今が楽しい、か……何故なんだろう……?」

「さあな。ま、それはそれでいいんじゃない?」

「っ!?!?」

声に驚いて振り返るとベンチに寄りかかるようにしてユウトがニコニコしながら立っていた。

「いやあ、やっぱりロクシヨウに探らせて正解だったね。すぐ見つけられたよ。」

「……」

「それにしてもそんな悩む必要ないって。今が楽しいのはいいことだぜ?世の中にあっ貴重な学生時代を無駄に過ごして後で泣く人間だっているんだからさ。」

「……趣味が悪いね。全部聞いてたんでしょ?」

ギロリと睨みながらカイが吐き捨てる。前に会った時もそうだがどうもこの男が良く分からない。

「気を悪くしちまったんなら謝るよ。どうも話しかけていい空気じやなかったらしいな……やはり俺は空気が読めないことを生まれたときから義務付けられているのか……!?!?」

ブツブツと今度は一人言に移っている。カイはそんな様子をジト目で見つつ立ち上がる。

「……用が無いなら僕は行きます。そろそろ『あがたヒカル』さんの試合も始まるので。」

出来るだけ早くこの男から離れたい。カイ自身からないのだが、

彼はユウトに対して常に警戒していた。それを、

「まあ待ちなつて。俺がいない方がいいなら俺が離れっから。けどあいつとはちゃんと話してやんな。」

呼び止めある方向をユウトが指差す。そこには、

「……誰も居ませんが？」

「へ？嘘おっ！？マジでいねえアイツ！俺が何か物分かりのよさそうなカツコいいキャラ演じてみたつてのに……」

本来ならイツキがいる筈だったのだが、そこに立つ者は誰もいない。その事実にかいは拍子抜けし、ユウトは憤慨していた。

（つてもイツキが土壇場で逃げ出すような奴なのはよく知ってるし……何かあつたのか？俺はあいつと一緒にいたからもし何かあつたとすれば……）

最後の曲がり角を曲がつたときだけだ。となると遠くへは行っていない。

「……ま、いいか。こっちはこっちで話すことあるし、場所は教えてんだから後からでも追いつくだろ。」

そうしてカイへと向き直り、

「さて、本当なら後回しにする予定だったんだが……ちつとばかり話は聞かせてもらつぜ？」

「……」

ここで逃げても無駄と悟り、カイはユウトに頷いた。

「まったく仕方ないとはいえ、今度もお前とキララだけか？分かったこととはいえマジで只の人数合わせじゃねえか。」

「ごめんヤンマ。でも……」

「謝るなよ、冗談だから。今度の相手がとてつもなくヤバい奴ってことぐらい、流石の俺でも分かるっての。口で言うほど気にしてねえんだよ。ま、徐々に暴れたいつてのはあったんだが……」

「一回戦といい今回といいツイてないぜ。」

「その気持ちは……分かる。」

ヒカル達がいる控室ではチームの男組が話し合っていた。クボタは無口でほとんど口を開かず、主にヒカルとヤンマだけで会話しているがそれはいつものことだ。今更気にすることではない。

「確かにこの組み合わせにはどこか悪意を感じるね……でも大丈夫、次の試合はイツキ君達とだから。皆メダロットが大好きないい子達だし、ヤンマ達も安心して自由に暴れられるから。」

「……お前は大丈夫なのか？」

にこやかに言うヒカルとは反対にヤンマの声は少し緊張を帯びる。

「今回はあの坊ちゃんと空中都市を丸ごとさらった連中の中の精鋭

の一人なんだろ？お前の凄さは当時を知る俺達が誰よりもよく知ってる。けどそれはあくまでロボットでの話だ。聞いた話とか一回戦のお前の試合とか……もうロボットじゃなくてメダロット同士の殺し合いじゃねえか。それなのにお前は……」

「……珍しい、ね。ヒカルの心配なんて……」

「そんなんじゃねえ!!」

クボタの相槌に怒鳴りながらヒカルに指をさす。

「そういうのはお前が一番嫌ってただろ！？お前自身が傷つくよりも自分の大好きなメダロットが兵器として使われることの方が痛い、そう言うやつだったろお前は？だが仕方ないこととはいえお前はそんな世界に首突っ込んでる。それなのにお前自身は大丈夫なのかよ!?」

「……そうだね。正直メダロットを使って傷つけ合うのは好きじゃないな。ロボットはあくまで遊びだけどあれは違うからね。」

「……」

「けどだからって放っておけば間違いなく大勢の人が、メダロットが傷つく。いや、既に多くの人々が傷つき、そして悲しんでいるんだ。もうメダロットを殺し合いの道具にしたくない、戦いたくないなんて次元の話じゃないんだよ。止められる人が止めないと本当に取り返しがつかないことになる。それこそ『魔の十日事件』の比じゃない……心配してくれるのは嬉しいけどね。」

「……本当にあの頃から変わってねえな。ま、それでこそ『あがたヒカル』なんだけどよ。」

「全く……だね。」

「ヤンマ、クボタ……」

「ま、乗り掛かった船だしな。俺らだって出来る範囲で協力してやるよ。あの坊ちゃんに貸しもつくれるしな。」

それはヤンマなりの照れ隠し。ヒカルにはもちろんそれが分かっていたので、

「本当にありがとう二人とも。」

そう、短く礼を言った。

コンコンッ!!

「ヒカル、時間よ。準備して。」

「……分かった。」

キララが部屋に入って来たことでいよいよ次の試合だと実感する。今度の戦いは一筋縄では行かない。ヒカルは覚悟を決めて控室を後にした。

その頃……

【 珍しいな。定期報告とは別にお前が私に連絡をよこすなど。】  
「申し訳ありません。しかしご報告したいことがあります。」

『黒衣』はアジトにいるルシファーと交信していた。ルシファーから与えられし任務、その手掛りを見つけたからだ。

【構わんよ。それより報告とは？まだマモンの試合とは関係ないの  
だろう？】

「はい。御報告したいのはマブラーが送り込んだであろう刺客についてです。」

【ほう……見つけたのか？】

「今まで巧く隠れていたようでしたが間違いないでしょう。こつもあつさと正体を見せてくれるとは予想外でしたが。」

そう。『黒衣』にとってそれが一番の疑問だった。彼女でさえ今まで見つけることが出来なかった程に巧く隠れていた。ならば普通はそのまま隠れ続けてイツキ達に接触するべきなのだ。だがイツキ達を見るかぎりその様な素振りは一切ない。なのにこのタイミングでこつもあつさと正体を自分達に晒した……何か裏があると思えない。

「本来なら見つけ次第すぐに仕留めるべきだったのかもしれませんが……指示を仰ぎたく先に御報告致しました。」

【そうか……】  
「申し訳ありません。」

【いや、むしろ良く報告してくれた。こちらはまだ手間取っている。生け取りにもらう必要があるかもしれん。それより……】



そこでルシファアの声が低くなる。

【率直に言っただけの強さはどれ程のものだ？】

「正確には測りかねます。まだ実力の半分も出していないようでしたし……しかし断言できることは『悪魔』で彼に対抗できるのはルシファア様を除けばベルフェゴールくらいだと思います。少なくとも自身の愛機を出しながらも一度負けを経験しているマモンとベルゼブブでは話にもならないでしょう。」

そう、『悪魔』の中でも上位の実力を誇るベルフェゴールとリーダーであるルシファア。この二人でなければあの男に絶対勝てるとは言えない。

【お前がそこまで断言するとは……ということとは操る機体は】

「はい。私のブラックスタッグと同種にして闇のカブト、ブラックビートルです。そして私と同じようにあの暴れ馬を完全に御しており、神田ユウトと同じようにレアメダルの力の制御にも長けています。それに何よりもあの男は人間ではありません。神田ユウトでさえ持つ情けや優しさといった物をあの男は持っていない。恐らくは现阶段では一番厄介な相手でしょうね。」

【ということはやはりマブラーが送り込んだ刺客はスピリットか】

納得がいったのかルシファアはフムフムと頷いている。確かにブラック系のメダロット（ビートルとスタッグしかいないが）を本当の意味で操れるのはスピリットだけだ。イッキもロボット等では扱いこなしているが、それはリミッターをつけた制限された状態での話。他のメダロットと違い最初からリミッターを付けないことを前提としたメダロット故にリミッターをかけられた時にかかる制限が他の

機体よりも大きいのだ。それにしてもスピリットにしか操れないはずのそんな危険な機体を同じ条件で扱いこなし御することの出来るこの『黒衣』は一体何者なのか？

【問題はそのスピリットが四体の内の誰だということだな。火か 水 ならば厄介なことこの上ない。】

「……残念ながらその厄介極まりない 水 のスピリットです。」

【何と……！！マープラーめ、つくづく厄介な相手を用意してくれたものだ……！！】

そんな忌々しげに言葉とは裏腹にルシファアの顔は笑っている。それは歓喜なのか、それとも……

「指示をくださいルシファア様。スピリット・セルリアーノ、人間名『浦島カイ』を始末する指示を。」

遂に『黒衣』の口からその言葉が発せられる。そしてルシファアも口を開き……

「……分かりました。では手筈通りに。」

【任せたぞ、我が右腕よ……】

今までおとなしかった『悪魔』達が本格的に狩りへと動き出した。

第42話：開始直前、暗躍する『黒衣』（後書き）

はい！！メダロットDS化のお知らせで舞い上がっちゃってる蒼騎士です！！本当は次の話と同時に上げたかったんですがね……

さて気付いた方もいらっしやるかも知れませんが前話の番外編と登場人物紹介は削除しました。理由は余りにも話が長くなってきたため別の枠をとってデータベースを作りそこに移すためです。まだ作っている最中ですが人物だけでなくメダロット本体の情報も載せる予定ですww

それにしてもメダロットの新作についての情報こそ出回っていませんが着々と世界のメダロッターがその情報をキャッチし、歓喜に打ち震えているようですね……俺と兄ももちろんその一人です^^いやあ、いつ発売なんだろうなあ

つとそれでは今回はこの辺で。次回とデータベースはなるべく早くに上げられるよう頑張ります！！

### 第43話：激突、それぞれの戦闘

さて同時刻、ヒカル達は適度に緊張した空気で会場に向かい、水面下では《黒衣》が暗躍し始めているこの状況にカイに真実を問い詰めようと走り出していた我らが天領イツキ君は……

「つかしいわね、こっちから嫌な感じがしたんだけど……」  
「……あの、いつになったら解放してくもらえるんでしょうか？」

「ん？ああ、もう少ししたらね。」

「はぁ……」

年は恐らくヒカルやキララと同じくらい。雰囲気はキクヒメの大人版といった感じの女性に拉致（連れ回）されていた。

（なんでこんなことに……？）

僕はただカイに会いに行きたかっただけで、もうすぐで会える所まで来てたのに……

（そういえばこの人ヒカルさんのチームメイトだったような？もうすぐでヒカルさんの試合始まるのにいいのかな？）

「……ねえアンタ？」

「へ？僕ですか？」

突然声を掛けられてビックリした。相手の方はそう聞きながらも前を向いたまま何処かに向かっているが。

「アンタ以外に誰がいるのよ。それより名前なんだっけ？」

「イツキ。天領イツキです。」  
「ふうくん……」

今度はジロジロと見られ始めた。少々美人且つ目つきが鋭いせいで正直、居心地が悪くなってくる。

「……成程。昔のヒカルとは似ても似つかないわね。アンタの方がまだ可愛いげがある。」

「ハハハ、どうも……（これは誉められてるのかな？）」

何か釈然としないなあ……

「ところでえ〜と……」

「イセキよ。名字の方は覚えなくていいわ。」

「じゃあ……あのイセキさん。もうすぐ試合始まりますけどいいんですか？」

「あー、別にいいのよ。どうせ今回もヒカルとキララだけしか出ないって決めてたしね。まあ久しぶりにあいつの本気は見たいけど、多分見せないだろうしね。」

つまらなさそうにそう言うイセキはヒカル達のことを心配してなさそうだった。

「え、じゃああなたは試合会場に行かないんですか？」

「ただの応援なんて昨日で飽きたしね。それにそもそもそう言うのは観客席でやるものなのよ。」

つまり彼女は自由にフラフラつろつろつくりらしい。

「し、心配はしないんですか？今度の相手はかなり……」

「危険らしいね。ヒカルと互角の筈のあの坊ちゃんを拐った奴の仲間らしいし。だけどそれでアイツらがどうなるうが知ったこっちゃないわ。」

「なっ……!?!?」

思わず反論しかけるイツキだがイセキはそれを制し、

「あんたもアイツらのことなら全然心配しなくていいわ。だって相手が悪い。すぐに決着が着くつまらない試合になるからね。」

そうニヤニヤと笑うイセキ。それは諦めではなくむしろ……

「なんて話している間に標的発見ね……悪いけど自分の用事は後回しにして貰うわよ。アンタの力が必要だからね、現役メダマスター?」

そうイセキに言われてイツキが見る先には、多くのミュータントメダロットを従える《黒衣》の姿があった。

【それではこれより二回戦第二試合・チームカイザーVSチームマモンの試合を始めます!!--】

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
ツ!!--!!--!!--!

今までの試合の中でも一際大きな歓声。下手をすれば耳をおかしくしかねない多くの声に包まれて、ヒカル達は姿を現した。

「こりや凄い歓声だな……声を張り上げてても聞こえるかどうか分かんねえ。」

物凄い歓声に少し圧倒されつつヤンマがそんな感想をもらす。正直ここまでだったとは……

「心配いらない、ちゃんと声は響いてるって。それよりイセキの方は大丈夫かしら？」

「それこそ大丈夫だ。アイツは俺たちのリーダーだった女、簡単にはやられねえよ。」

「……そうよね。イセキなら……」

「それよりお前らこそ気をつけるよ。一般人の俺でも分かるぜ、ヤバイってな……」

自分達がいること遠く向かい側には殺意をギラつかせるマモンとタイヨウ。気を抜いたらすぐにやられそうな雰囲気流石に軽口を言えるような状況じゃない。

「分かってるよ。ヤンマとクボタは危ないと思ったらすぐにこの場を離れてくれていい。ここはもつと危険な場所になるからね。」

「ふざけんな。本来なら現役を引退してる筈のお前が体張ってんだぜ？逃げずに最後まで見届けてやるよ。」

「……（コクコク）」

強がりだとはつきり分かる二人の反応。だけどなんだか嬉しかった。

「了解。じゃ、何かあっても自己責任だからね？」

「当たり前だ。んなことよりさっさと行ってこい。」

ヒカルは頷き、キララと一緒にステージへと上がる。そこには既にマモンとタイヨウ、そしてマモンの部下と思われる三人が待機していた。

【ん？ヒカルさん、今回は二人だけですか？】

「はい。僕が二人分で参加します。許可を貰えませんか？」

【……分かりました。と、いうより今回は彼等からそうしてくれという要望がありましたからね。お互いがそのつもりなら止める理由はありません。】

それはつまり……

「クツクツク……お前はツインレアメダルに選ばれた男なんだろう？ならちゃんと楽しめる状況にしねえとなあ。」

「成程ね……」

（僕の本気が見たいと言うわけか……面白い。僕もこの二体を同時に使うのは久しぶりだし、相手にとって不足はないな。）

元からそのつもりだったし、お望み通りにしよう。だが今の様子を見るにユウトの言う通りマモンは御しやすいそうだ。それよりも……

「あがたヒカル……この日を待ち詫びたぞ。今日このときが貴様らの命日だ！！再び貴様にパートナーを失う苦しみを与えてやる……！！」

「タイヨウ……」



約十年振りの宿敵。そして今や《悪魔》の手先……

(流石に二人同時に相手が出来るとなレベルの相手じゃない。さて……)

【では両チームともメダロットを転送して下さい!!】

うるちの声が響き、ヒカルはアーク(めたびー)とティレル(ろくしょう)を、キララはゴッドエンペラーをそれぞれ転送する。

チュインチュインチュイン!!

対する相手もそれぞれのメダロットを転送する。タイヨウはビーストマスター、三人目はクリア・ワーム。そしてマモンは、

「……それが噂の。」

「《アワリティア》俺様の忠実なる僕だ。」

いざ目の前で見るととてつもない。使い手であるマモンはともかくこの機体は……

(向かい合うだけで分かる。なんて禍々しいプレッシャーなんだ……!!ユウト君達は本当にこんな化け物を倒したのか……?)

真に恐れるべきは使い手ではなくその僕という事実を改めて認識させられる。それはヒカルが今まで出会ってきた敵の中でも最凶の存在だった。

「クツクツク……声も出ねえか？まあ仕方だねえ事だ。いくら  
デメエが二個持ちでも……」

「ごたくはいい。さっさと始めよう。」

途中でセリフを妨害されたせいか、マモンの顔が怒りに歪む。だが  
それ以上は何を語るでもなくただ黙っていた。

「……すみませんうるちさん。既に準備は出来てるんで開始の  
コールを。」

【は、はい分かりました……で、ではこれより、ロボトルウ  
ウウウウウ……ファイトオオオオオ！！！！】

いつになく真剣なヒカルの目に少したじろぐが、ここに試合は開始  
された。そして、

バアアアアンツツツ！！！！

「……は？」

開始から僅か一秒、いやもっと早かったかもしれない。

「悪いね。先手はもらったよ？」

ティレルが相手の間合いに入り、クリア・ワームを切り裂き、破壊  
していた。

【き、機能停止確認！！この機体は試合の続行は不可能です！！】

遅れてうるちの声も響く。目の前の光景に反応が追い付いていない。それは彼等も同じだった様で、

「テメエ……！！いきなりやってくれるるじゃねえか。」

開始前よりもマモンの目が更に危険な色を帯びている。タイヨウも宿敵の強さは今だ健在だと分かり喜んでいた。

（速い……！！私でも見切れなかつたなんて。）

だがその驚愕は敵だけでなく、味方であるキララも同じ。ヒカルとは長い付き合いである彼女でさえ見えなかつた今の速さはユウトのロクシヨウ並だ。余りにも速すぎる。

「さて、ティレルのウォームアップも済ませた。本番といこうか？」

「……上等だよクソガキが！！」

ヒカルとマモン。二人の戦いが幕を開ける……

その頃、

「イセキさん。あそこにいるのは一体……？」

「……ヒカルが予選で苦戦したっていう奴よ。《悪魔》の一人と行動を共にしてたブラックスタッグ使いだって。」

イツキ達が見据える先には多くの配下を従える《黒衣》がいる。どこか不気味で得体の知れない使い手が。

「ブラックスタッグってブラックビートルのクワガタタイプですよね？ヒカルさんが苦戦したってことはやっぱり……？」

「そ。浦島カイだっけ？アイツと同じで完全に使いこなしてる。ヒカル曰く側にいた《悪魔》より厄介だったそうよ。」

やはりか。しかし敵か味方が分からないカイと違い、敵なのは間違いない。そこまで考えてふと一つのことを思い出す。

「あのイセキさん。思い出したことがあるんですけど……」

「ん？」

「ブラックビートルって性能は上だけど能力はサイカチスと同じじゃないですか。つまりブラックスタッグも能力はドークスと同じってことで……」

瞬間、

バチチチッ！！

「うわっ!?!」

突然イセキのメダロツチからマゼンタキャットが飛び出てきてイツキの背後にサンダー攻撃を放つ!!やはり相手の方はこちらの存在に気付いていたらしいが、イセキもまたそのことを分かっていたようだ。

「成程、不意打ちは通用しないというわけですね。流石にあがたヒカルがチームメイトに選んだだけのことはある。」

「そっちこそ、まずは手下けしかけてアタシの実力を測ろうなんて舐めたマネしてくれるじゃない?」

マゼンタキャットが襲ってきた敵を倒したことを確認し、ギロリとイセキが睨みつける。話しの相手は傍らにブラックスタッグを出し、いつでも仕掛けられるように準備している《黒衣》だ。イッキが気付かないうちに近付いていたことからかなりの使い手であることが分かる。

「あ……」

しかしそんな敵を目の前にしても何故かイッキは戦う気が起きなかった。確かに驚きはしたがそれも一瞬のこと。では何故戦う気が起きないのか?まるでここで戦ってしまったら取り返しがつかないことになりそうなの……

「ボサツとすんじゃない!!来るよ!!」

イセキの声にようやく我に返る。《黒衣》の周りにいたクリア・ワーム達が一斉に遅いかかってきたのだ。

「くっ……!!来い、メタビー!!」

急いでイッキはメタビーを転送し、

ドゴオツッ!!



『へえ、やっぱ化け物とはいえ普通のメダロットと同じく頭を潰せば終わりなわけか。分かりやすくして良いぜ』

「メタビー、後ろ!!」

『つと危ねえ!!』

不意打ちに来た相手に対しても怯むことなく正確に撃ち抜き、敵の数も一気に半分以下にまで減らす。一番最初に戦ったときは比べ物にならないくらいの強さだ。

(流石はカブトのレアメダル。マスターの指示も殆んど無しにこの強さ……もうクリア・ワームでは何体で攻めても勝ち目はないか。)

《黒衣》も認めるその強さ。一度《悪魔》を退けた時点でこのくらいは出来て当然なのだが、やはりこの強さは……

「あつちはわざわざ片付けてくれてるし、そろそろこっちも始めない?」

「!?!」

バチチイッツ!!

《黒衣》の注意が完全にメタビーに向いている隙を見逃さず、イセキのマゼンタキャットが《黒衣》の傍らに控えるブラックスタッグに向かってサンダーを放つ!!無論ブラックスタッグとて攻撃をただ受ける為にぼろっとなっとなっ立ってるわけではなく、

ガキインッ!!

火花を放ちながらもマゼンタキャットのサンダーを軽く右腕の《ブラックバイス》で受けきりつつ反撃を試みるが、イセキの的確な指示によって難無くかわされてしまった。

『面白いなあネコちゃん。この俺に剣を抜かせるなんて、さ!!』

まるでメタビーの様なはしぎ様で、ブラックスタッグも完全な戦闘態勢に入る。剣と雷が今正にぶつかる……

『どけえっ!!ソイツは俺が倒す!!』

ことなくメタビーがブラックスタッグに殴りかかり、二人は再び引き離される。下手をすればマゼンタキャットにもダメージが及びかねなかつた攻撃に、

「イツキ、あんたの相棒何やってんのよ!?危うく私のマゼンタまでやられかけたじゃない!!」

「す、すいません!!こらメタビー!!お前は何やってんだよ!!」

イセキとイツキが猛抗議する。しかしメタビーはそれ対して、ピシイッとブラックスタッグに向けて指を指し、

『コイツは俺が倒すぜ。それを邪魔したり、俺の代わりに倒そうとする奴も同様だ。分かったらさっさとこのネコ女を下がらせる!!』

( ) (無茶苦茶だコイツ……)( )



それは全く同じ感想で、理不尽を感じずにはいられないが、こうなつたメタビーはもう止められない。

『おいこの黒クワ（黒いクワガタだから）！！』

『ああっ、黒クワあ！？』

変なあだ名をつけられたことに対して抗議の声をブラックスタッグは挙げるが、メタビーはそれを完全に無視し、

『いいか！？お前は存在してるだけでこの俺を不機嫌にさせる要因が二つもある！！まずはお前を見てるとあのム力つくクワガタ野郎を思い出すこと、もう一つは……』

「もう一つは……？」「」

『キャラ被つてんじゃん俺と！！お前のキャラがさあ！！』

「……」「」

……もう、何を言えはいいのだろうか？確かにキャラがどことなく被っているかもしれないけど！！

『一目見たときから感じていたぜ……姿も互いの立場も関係ねえ、間違いなくこいつは俺と全く同じキャラのタイプだってな』

「！！』

『テメエもか……いいぜ、今ここで決着を……！！』  
「そのくらいにしなさいスタッグ。」

白熱しかけたメタビーとブラックスタッグの対立をその一言が沈黙させる。先程までどこか緩んでしまった気が一瞬で張り詰められる程に冷たく、それでいて無機質な声だった。

「ここでのこれ以上の戦闘は無意味だ。我々の目的はあくまで《スピリット》の抹殺なのだから。」

「っ!？」

『……そうだったな。こんなところで油売ってる暇なんてないんだった。』

待て……彼らは何を言ってる?まさか……

「《スピリット》だって……?」

「分かりきった事でしょう?マーブラーが送り込んだ刺客の存在は把握できた。今まで中々見つけることができなかつたが先の試合で確信しましたよ。確かに《スピリット》の中で唯一完璧なまでに人間に擬態できる彼ならば我々の目を欺くことも可能ですからね。もつとも、その完璧な擬態もアレを使ったことであつさりばらしてしまいましたか……」

マーブラーが送り込んだ刺客?それじゃあ、まさか本当に……  
・?

「あのカイは、セルリアーノなのか?」

「?何を当然のことを……成程そう言うことですか。全く、相変わらず甘いんだな……」

ブツブツと一人で納得している様子の《黒衣》に対して、イッキの方は逆に冷静さを欠いていた。カイがセルリアーノだったということだけではない。何故ここでマーブラーの名が出てくるんだ……  
・?

「どういうことなんだ……カイがマーブラーの送り込んだ刺客ってなんなんだ!？」

「へえ、それも伝えられていない？これは嬉しい誤算ですね。どうやらあなたはまだセルリアーノと接触していないだけでなく自らを取り巻く周りの状況についてもほとんど理解していないようだ。そしてセルリアーノと接触していないのなら……このゲームは我々がかなり優位に運べる。」

「伝えられていない？どういうことなんだ！？お前たちは何を知ってるんだ！！」

本当に何を言ってる？僕は何を知らないというんだ！？

「知りたければお友達に聞けばいい。私も《彼》が話していないのに話す必要性はありませんしね。ここは退き、元々の目的であるセルリアーノ抹殺へ向かうとします。」

「なっ！？」

セルリアーノを、カイを抹殺する？本気で？

『そういうことだ。悪いがこの辺りで失礼させてもらっぜ。』  
『ざっけんな！！テメエはここでぶっ潰す！！』

ブラックスタッグのその発言に対して、メタビーが殴りかかる！！  
だが渾身の力で放たれた右腕は、

「無理ですね。少なくとも今のメタビーではスタッグの相手は務まらない。」

シュッ……

『ガアアアアッ！！』  
「メタビー！！」

ブラックスタッグの剣によって飛ばされていた。

（全く見えなかった・・・今の剣速はロクシヨウと同じ、いやもしかしたらそれ以上に速い！？）

本当に何者なんだ！？ユウトのロクシヨウと同じかそれ以上の力を持つ機体。こんなので・・・！！

「予想通り。どうやら今は貴方達が一番弱いらしいですね。」

『なん・・・だと！？』

『いいか、今の俺の斬撃は言葉通り挨拶代わりだったんだぜ？少なくともお前らのお仲間 もちろんレアメダル関係の奴らだが なら余裕で躲せる筈だ。』

今のが、挨拶程度だって・・・？

『それなのにお前らは気付く事もなくあっさり斬られやがった。さつきまで相手してた下端程度をまとめて倒せる様になったくらいで満足か？だから・・・そうなるんだよ。』

ズガアアアアアン！！！！

『ウアアアアアッ！！！！』

今度は右腕だけではない。左腕、脚部、そして頭・・・メタビ

ーの全身を斬り刻まれていた。

『今のお前らが誇れんのはその耐久力くらいだ。恐らくはメダルの自衛本能だろうな。俺の刃が普通じゃないと理解し、レアメダルの力を発動させることで俺の斬撃によるダメージを軽減したんだ。』

「因みに今の攻撃、セルリアーノのブラックビートルや神田ユウトのロクシヨウならば完全に見切り、カウンターを仕掛けてきたでしょう。渡鳥カラスのG・Oデスならば肉を切らせて骨を断つという言葉を体現するかのように捨て身覚悟でこちらに攻撃してくるでしょうし、辛口コウジのスミロドナットならば見切れずとも驚異的な運動能力で躲してみせる筈。あがたヒカルならばそもそも私達に攻撃させる隙など与えません。皆我々が全力で戦うに値する者達ですね。」

「僕とメタビーは……本気で戦う価値はないってこと?」

「本来ならば恥じることはありません。これがロボトルという名のゲームならば一人を除き、恐らく貴方は誰よりも強い。メダロットを通じて分かりますからね、貴方のメダロットへの愛が。」

なら、何が足りない? どうすれば?

『逆に言えば、だからこそお前らは弱いんだよ。もうとっくに分かっただろう? これはロボトルなんて遊びじゃない、殺し合いなんだよ。勝てば生き、負ければ死ぬ。割り切れよ、メタビーの潜在能力から考えれば既にロクシヨウに近い実力に育ってる筈なんだぜ?』

そんなこと、僕は……!!

「貴方だって頭では納得できているんでしょう? でも心が拒否する、どうしても。しかしベルゼブブを撃退した時を思い出して下さい。」

大切な少女が危険な目に合い、自分を救うために現れた親友は殺されかけた。その時に貴方は覚悟を決めていた筈ですよ？友のために、レアメダルの力で相手を殺す覚悟を。」

「クッ……！！！」

違う、そのたった一言が言えなかった。イツキ自身分かっていたから、《黒衣》とブラックスタッグの言葉が正しいと。自分は覚悟が出来ていないのだと。

「言っておきますが、別に私はマイナスの感情が強ければ強いほど力が強くなるなどと言うことは言いません。それでは一回戦の時のスミロドナットと同じになってしまいますからね。必要なのは覚悟そしてそれを貫き通す意思とパートナーとの絆です。ですが今の貴方達にはベルゼブブと戦った時のような覚悟が無い。そんなことで我々に勝つことはできない。」

「俺達とやるってことはつまりそういうことなんだよ。今回は特別に見逃してやる、次に会った時俺達と戦うってんならお前たちも覚悟を決めてこい。やるかやられるかの、な。」

そのまま《黒衣》はブラックスタッグと共に身を翻す。止めを刺されなかったのは幸運だが、メタビーには屈辱以外の何物でもなく、イツキは何も言い返せずじまいだった。

「話は終わったかしら？じゃあ始めるわよ。」

だがそんな二組の間に走る雷光一閃。メタビーをあっさり倒したブラックスタッグに回避行動をとらせたその攻撃の主はもちろん、

「……………どうやら貴方の方は逃がしてくれそうにありませんね？」



『・・・・・・・・』

ビィィィィィイツツ！！！！

「ひゃっはっはっは！！！！楽しいなあオイ！？」

「こっちはかなりきついんだけど、ね！！！！」

アークとティレル、自身の愛機の二機を操りながらの戦闘は慣れている。ヒカルにとってこの二機を同時に操ることは今や一体ずつ操るのと何ら変わらず、本来の実力に戻っている以上例え《悪魔》であるうと負ける道理はない。そう、相手がマモンだけならば。

「素晴らしいぞあがたヒカルよ！！それでこそ我が宿敵！！」

グオンツツ！！

「クツ、《プレス》か！！アーク！！」

『分かっていますヒカル！！』

ズガガガと地面に向かって乱射し、迫りくる重力の塊に向かって壁を作る！！僅かな時間稼ぎにしかないが、その隙に乗じてなんとかその場を離脱することには成功した。

「ティレル対アワリティア、アーク対ビーストマスター・・・・・・・・  
上手いことばらけてしまったが、きついな。」



本来ならばアークとティレルの二人がかりでアワリティアを抑えるのが理想なのだが、タイヨウが操るビーストマスターの凶悪な性能によってそれも出来ない。ユウトから相手の情報は貰っているのでティレル一体でも何とか対抗出来ているが……

『クッ!』

並の機体よりは遙かに速いが、ロクシヨウやスミロドナツトのような圧倒的なスピードには流石に劣る。徐々にだが確実に不利になっており、攻撃もほとんど加えられず防戦一方だった。

『……………』

ビィィィィッッ!!

先程と同じ、赤い閃光がアワリティアの腕から放たれ再びティレルを襲う!!それをギリギリ躲し、右腕の《チャンバラソード》を叩きこむべく高速で斬撃を加えるが、

ガキインッッ!!

横薙ぎに払われ斬撃を左肘と膝で挟み込まれる。更に空いている右腕から……………

キュィィィィィ……………

『舐めるなあっ！！』

ティレルも一撃でも喰らったら粉々に破壊されることは分かっている。右腕の剣は挟ませたままその場で飛び上がりつつクルリと回転しながらアワリティアの右腕に蹴りを打ち込む！無論大したダメージなど与えられないが方向を変えることには成功し見間違いの方向にビームが放たれ、更にその反動を利用して拘束から抜け出すことにも成功した。

『ハア、ハア、ハア、ハア……化物め。』

(流石にティレル一体だけじゃきついかな……だがタイヨウがいる限りアークの方も身動きが取れない。まずいな……)

長い時間はいらぬ。少しの間だけでもアワリティアにのみ集中することが出来れば……！！

「なら決まりね。」

「へ？」

ドンッドンッ！

間の抜けた声に答えるように、ビーストマスターに向かってミサイルが撃ち込まれる！！その威力はアークの《ミサイル》よりも高い。この場でそんな攻撃が撃てるのは……

「全く、あたしのこと忘れてたでしょ？一応あたしだって参戦して

るんだから忘れないでよね。」

「キララ………」

そう、キララとゴッドエンペラーもこの試合には参戦している。今まで彼女が何の行動も起こさなかったのは起こさなかったのではなく、すぐに自分達を置いて三組が戦闘を開始したので行動したくてもできなかったのだ。

「全くだらしないわね。それでもメダマスター第一号なの？」

「きつい言葉だね………けど結構きついんだ。タイヨウが予想以上に強くなって。ユウト君の言うとおり下手すれば《悪魔》よりも厄介かもしれない。」

「ふうん。」

返事とは裏腹にキララの目もかなり真剣になっている。その視線の先にはミサイルを受けても平然と立っているビーストマスターの姿があり、別段気にした様子もなくアークとの戦闘を再開していた。

「成程ね………ならヒカル、あたしに考えがあるんだけど？」

「考え？」

訝しげなヒカルにこくりと頷く。そして、

「あたし達がタイヨウを仕留める。あんた達は《悪魔》に集中しなさい。」

そんなとんでもないことをキララはヒカルに提案した。

### 第43話：激突、それぞれの戦闘（後書き）

いやあ遅くなってしまいました！！本来なら一週間前には挙げる予定だったんですが……次はすぐに挙げます。シルバーウィーク中には必ず。

さて、前回のかデータ集に載せていた「メダロットDS」の続報をここでお伝えしようと思います。

まず一つは公式サイトが更新されましたああああああああああああああああ！！！！

いや、遅いのは分かってるんですよ？もう皆調べてるだろうし。まあそこで見たら分かるんですがキャラ紹介に加えて新型主人公機のカブト&クワガタ機や新型ライバル機のトラ&ライオン型メダロットが絵で載せられています。中々カッコいいデザインじゃねえか……！！しかしロボロボ団の服が1の時の奴に戻ってるんですよ〜俺は2〜4までの団員服好きだったのに……

そしてもう一つ。デンゲキニンテンドーDSを見た人は知ってるでしょうが、参戦する機体が続々と紹介されました！！ニンニンジャにアタックテイラノ、ブルースドッグ等に加えて……

最強機体アークビートルも参戦決定だああああああああああああああああ！！！！

凶悪頭パーツ《プロミネンス》が再び唸る！！ゲームバランス崩壊  
しかねん設定にはなっていないだろうな……。？更にはベルゼル  
ガも参戦決定！！これは嬉しい情報ですね

今のところはこのくらいしか把握してません。まあ中情報が出て  
こないってのもあるんですが、新しい情報が出たら即伝えていきま  
す！！支離滅裂な文章ですいませんでした！！

**第44話：兵器激突・獣王VS神帝！！（前書き）**

シルバーウィーク中には絶対挙げると言っておきながらかなりおくれで、本当に申し訳ありませんでした。今後はもっと計画的に書いていきます……

#### 第44話：兵器激突・獣王VS神帝！！

「なっ、それはダメだ！！見たらどう？タイヨウ元々高い実力を持つメダロットーだし、使う機体も最強クラスのビー・ストマスターだ。しかも《悪魔》と手を組んだお陰かレアメダルでないと対抗できない程の力を手に入れている。キララ達の実力の高さは知ってるけど流石に……………」

無理だ、そう言おうとした瞬間、

バチィィンツツッ！！！！

「グアッ！！」

「ゴチャゴチャ言わない！！殴るわよ？」

「殴ってから言うなよ……………」

なんて理不尽な。よくこんなのと何年も幼馴染をやってこれたなあ……………

「心配ならさっさとあの黒いの片付けて加勢してくれればいいでしょ？そうすれば問題ないじゃない。」

「だけど……………！！」

「大丈夫よ、あの子の作ってくれたシステムは作動してるしこっちだって腕には自信がある。むしろあなたが駆けつける前にあたしが倒しちゃうかもね？」

確かにキララの強さは誰よりも自分が良く知っている。そして彼女の操るゴッドエンペラーの恐ろしさも。だがそれでも、例えキララが全力で戦ってもタイヨウに勝てるとは思えない。

「悩んでる暇なんて無いでしょ？さっさとやるわよ。」

「待ってくれキララ。やっぱり無理だ、キララ達は後方支援を・・・」

「・・・」

「《悪魔》倒せるのはアンタだけ。だけどタイヨウが邪魔で現在劣勢。さて、この状況でアタシの案よりマシなのがあるなら一秒以内に言いなさい。」

「それは・・・」

確かにキララが言っている方法が一番良い。それ以上の案を出せと言われてもすぐは出ない。

「・・・それしかないか。仕方ないな、無茶だけはするなよ？」

「アンタが言わないの！！けどこれでまとまったわね。」

言うが早いかキララはゴッドエンペラーに指示を出して、

「やりなさい、アトス！！」

自らの名を呼ばれたゴッドエンペラーがビーストマスターに向かって左腕の《デスレーザー》を放つ！！

「小娘が・・・邪魔をするなっ！！」

タイヨウもまたビーストマスターに指示を飛ばし左腕の《デスビーム》を放たせる！！レーザーとビーム、お互いに《光学》属性の攻撃は空中でぶつかり・・・

バアアアアアアンツツ！！！！



激しい音を響かせながら相殺しあった。だがこれでいい。今の攻撃は純粹にダメージを与える為のものではなく隙を作り出すためだったのだから。そしてその隙をアークは見逃さない。

『っ!』

アークもまたティレルだけではアワリティア相手に長くは保たないことに気付いている。そしてキララ達がビーストマスターの相手をしてくれる以上、ティレルと共にアワリティアを叩く!!

『キララさん、アトスここはしばらく任せます!』

「すまないキララ!」

ヒカルはそのままアークをアワリティアに向かわせて、

『ハアアアアッ!』

ドンドンドンドンドンドン!

アワリティアに向かってガトリングを連射させる!!

「ようやく来やがったか……待ちわびたぜ!!アワリティア!」

ようやく《ツインレアメダル》の真の実力が見られる。まるで子供の様に顔を輝かせながらマモンはアワリティアに指示を出し迎撃させる。

『・・・・・・・・』

アワリティアは向かってくる弾丸を全て受けきってみせアークへと向き直るが、今度はその隙にティレルが斬り込む！！

『セエエエイツー！！』

「ハッ！！見えすいてんだよっ！！」

だがマモンもアワリティアもこの攻撃を読んでいる。先程と同じ様に防ごうと

ザシュウウウウツツッ！！！！

「！？」

驚愕は一体誰のものだったのか。さつきは難無く防げた筈のティレルの刃はアワリティアの左腕を深々と斬り裂いていた。

（さつきより速く、鋭くなってやがる・・・・・・・・！！今のは最初にクリア・ワームをやったときに迫るスピード。成程、これが《ツインレアメダル》の真の力か！！）

さつきまでアークはビーストマスターと戦っていた為ティレルとは離れていた。対して最初と今はすぐ側にアークがいる。互いが近くにいるときに真の力を発揮する《レアメダル》ということか。

「けどこんなもんじゃねえよなあ？ルシファーもベルフェゴールもどんな《レアメダル》よりも《ツインレアメダル》を警戒してたん

だ。二体が同時に戦うことで力が発揮されるなんて当たり前でつまんねえ力だけじゃねえだろお!？」

「言われなくてもすぐに見せるよ。悪いけど君に長い時間はかけてられないからね。アーク、ティレル!!」

ヒカルの指示でアークとティレルがアワリティア再びへと突っ込む!! ヒカルとマモン、《ツインレアメダル》と《悪魔》の一騎打ちが幕を開けた。

「小娘が……!! 私とあがたヒカルとの戦いに水を差しおって生かしては帰さんぞ!!」

一方タイヨウは激怒していた。ヒカルとの10年振りの決着を邪魔されたのだ。タイヨウにとっては許しがたい行為である。

「あのねえ……ヒカルは全然本気出せてなかったじゃない。アークの動きも鈍かったでしょ? ティレルがいないとアークは……」

「分かっているいな小娘。元々10年前の戦いではヤツは《クワガタメダル》など持っていなかった。今はアークと呼ばれているその《めたびー》だけでこの私を、ビーストマスターを倒してみせたのだ!! 《ツインレアメダル》などどうでもいい!!」

どうやらティレルはいてもいなくてもどうでもいい存在らしい。タ

イヨウにとって戦いたいののはヒカルとアークだけということか。

「・・・仕方ない。面倒だが貴様らを葬ってからヤツとの再戦を続けるでしょう。」

「随分余裕ね？あたしに倒されるってことは考えてないの？それにあつちはあつちでもう盛り上がりつつあつてるけど？」

「邪魔をするならマモンごと消しさるだけの話だ。元々あがたヒカルは私の獲物だったのだから。それに・・・」

ドオオオオオオオオオオ！！！！

「きゃっ！！！」

『グウツ！！』

「お前たちでは話にならん。やはりあがたヒカルには遠く及ばんな。」

ビーストマスターの右腕より放たれしナパームは《火薬》属性。絶対命中と絶対貫通という二つの効果を持つこの攻撃は元々避けきることなど不可能。それはいい。しかし、

（嘘でしょ・・・！！？何よこの威力！？）

確かに《火薬》属性のナパームは強力だが、それでもビーストマスターの攻撃の中では最も威力が低い。例え綺麗に決まったとしてもゴッドエンペラーの装甲ならば耐えきれぬ筈なのだ。だが、今の威力は何だ？直前にこちらにもミサイルで威力を少し軽減していなければ最悪《頭》をもっていかれて終っていた・・・

「貴様のその機体、《ゴッドエンペラー》とか言ったか？フン、神ンペラー帝が聞いて呆れる。この程度で獣王ビーストマスターの後継を名乗る気だったのか？」  
驚きを隠せぬキララとは対照的にタイヨウはつまらなげに続ける。  
お前では相手にならないと。

「まあ、それも仕方がないか。元々ビーストマスターは世界初のリミッターを外した兵器型メダロット。現在普及されている量産型とは違い、私のオリジナルはメダルが引き出せる力そのものが他を圧倒しているのだよ。それに引き換え……」

「ゴチャゴチャ五月蠅い!!」

ドンドンドンドンツツ!!!

お返しにとばかりにゴッドエンペラーもまた《デスミサイル》でビーストマスターを狙い撃つ!!無論《火薬》属性であるミサイルを避けきれぬわけがなく全てその身に受けるビーストマスター。だがタイヨウの方は全く動じた様子はなくチラリとゴッドエンペラーを一瞥し言葉を続ける。

「やはりこの程度が限界か……ビーストマスター獣王の後継を名乗りながらリミッターが外れておらんじゃないか!!そんな機体では神も帝も名乗る資格はない。兵器ではなく、所詮はロボット等という子供のお遊びレベルの玩具ではなあ!!」

ビィィィィィィ!!!

再び放たれるのはビーストマスターの中で最も威力の高い《デスビーム》だ。極太の光線は絶対命中こそしないがマトモに浴びればひとたまりもない。

「だから五月蠅いって言うてるでしょこの極悪人!!」

ビイイイイイ!!

キララもまたゴッドエンペラーの《デスレーザー》を発動させる！  
！先程も相殺出来たのだ、大丈夫……

「本気でそう思っているのか？青いな小娘!!」

そんなキララに対して鼻で笑うタイヨウだが彼の言っていることは間違いではなかった。ビーストマスターのビームはレーザーを呑み込み、更に勢いをつけて迫ってきたのだ!!

「っ!?!」

「やはり甘いな……先程の攻撃で相殺出来たから今回も、とも思ったのか？馬鹿が、それはあくまで私が貴様らの攻撃から身を守る事が前提で、且つその威力を正確に測るため威力を抑えていたにすぎん!!この程度で我々の相手をしようなどとは片腹痛いわ!!」

極太のビームは尚もゴッドエンペラーに迫る。だがいくら巨大でも《光学》属性である以上躲すことは可能だ。なんとか回避して態勢を立て直そうと……

ジジジジジジジジ………ツツ!!

「なっ!?!」

躲した位置にプレス攻撃!?!いや違う、初めから誘導されていたのか!?!

「どうした?見せてみる、その機体の力はこんなものではないのだから?」

「言われなくても………!!」

向こうがプレスならこっちだって………!!

ジャジジジジジジ………ツツ!!

キララの指示が飛び、ゴッドエンペラーの頭から斥力が発生しディスク状に形作られていく。これこそがゴッドエンペラーの頭パーツ《デスブレイク》から放たれるブレイク攻撃だ。ビーストマスターが使うプレスと同じく《重力》属性で他のどの攻撃よりも《成功値》が高くクリティカルを発生させやすい。その上元々パーツの威力の高いゴッドエンペラーだ。クリティカルによって得られる恩恵はかなり大きい。

「成程。確かに、貴様のブレイク攻撃は私のビーストマスターのプレスよりも威力は高いな。元々平均的に見てブレイクはプレスより

も攻撃力が高いのが大半だからな。」

「そんなこと言ってるていいのかしら？そんなこと言ってる間にあんたの自慢の獣王さんはやられちゃっわよ？」

キララの言つとおり威力ならばゴッドエンペラーの方が上だ。流石にぶつけ合わせて相殺させることは出来なかったが、互いに放った攻撃は各々に直撃し……

ズウン……ツツツ!!!

ジャジジジジツツ!!!

強力な二つの《重力》属性の攻撃により会場を大きな地震が襲った。

同時刻

『フシヤアアアツツ!!!』

バチチチイイツツ!!!



『ウオツと！！危ねえ〜・・・当たれば痺れて動けないなんてレベルじゃねえな。』

ブラックスタッグとマゼンタキャット。この両機の戦いは今もなお続いていた。

「すごい・・・」

そしてイツキは倒れふすメタビーの傍らでそれを見ていた。恐らくはロボットならばどちらも実力は自分達と互角か自分達の方がやや上だろう。だが目の前で行われているのはロボットではなく本当の意味での戦闘だ。そしてその場において自分達は戦いの土俵にすら上げられなかった・・・

（覚悟、か・・・）

今戦っている彼等はそれが出来ているのだろう。ユウトも、そして《黒衣》の言葉が本当ならばカラス達も。

「成程、やはり貴方達の方はロボットと戦いとこの区別がついているようですね。攻撃に迷いも躊躇いもない。」

「全くと言っていいくらい攻撃が届いてないけどね。ったく、ムカつくったらないわ。」

《黒衣》の言葉に対して吐き捨てるように言うイセキ。事実マゼンタキャットの攻撃はことごとくブラックスタッグに躲され全く通用していなかった。

「あまり変わったようには見えませんが、こうしてスタッグと互角に渡り合えている力・・・やはり彼の仕業ですね？」

「……そこが一番ムカつくんだけどね。まあ、お陰であたしでもあんならとやりあえるんだからいいんだけどさ。」

「そのせいで私達の方はかなりの時間を潰されてしまいました。どうやらここは……」

「一旦引くって？冗談でしょ？」

《黒衣》の言葉を遮りイセキは人の悪い笑みを浮かべる。そして、

ヒュウウウウウウ……！！

先程まで使っていたサンダーとは違う、凄まじい冷気の風がマゼンタキヤットの体を覆い始める！！同時にその体も輝き始め……

「あなたを捕まえるのが今回のあたしらの仕事なの。本当ならまだ使いたくはなかったんだけどね、今度は絶対に躲せないのを喰らってもらおうわ。」

『あ？絶対にかわせない……ってちょっと待て！？』

《黒衣》とブラックスタグはイセキ達が何をやるうとしてるのが気付いたようだ。しかしイツキは皆目見当がつかず……

「イツキ！！怪我したくなかったら伏せてなさい！！絶対に頭を上げるな！！」

「え……！？わ、分かりました！！」

何かヤバい攻撃が起こる。イセキの口調と周りの空気からそう判断してイツキは言われた通り体を伏せた。

「今からこの場はかなり冷え込むわよ？マゼンター！」

『ニャー……！』

そして、

「『メダフォー・オールフリーザー』！』」

ビュオオオオオオオツツツツ！！！！

マゼンタキャットを中心に猛吹雪がその場を支配する！！それは伏せていたイツキや戦闘不能なメタビー、マスターであるイセキ以外の全てに襲いかかり、

カチイイイイン！！

「う、嘘……！！？」

吹雪が止んだ後、そこは一面銀世界になっていた。室内には有り得ない雪景色、イツキは目の前の光景が信じられなかった。

「これがイセキさんの、ヒカルさんが認めた人間の實力……」  
「その様子だとあんた達は無事だったみたいね？つて、そんなびつくりしなくてもいいわよ。《レアメダル》じゃあるまいし、すぐに消えるわ。」

「え？」

シューウウウウウウウウン……………

イセキの言葉通り、メダフォーエスにより作られた銀世界は偽りだったらしく、みるみる溶けていき最終的には元の景色に戻っていた。ただ一つさつきと違うのは、

『ク……………ソ……………!!』

ブラックスタッグだけは氷に完全に捕われ、《停止》状態に陥っていたことだ。《黒衣》も流石にこれは予想外だったらしく、

「まさか、これほどとは……………申し訳ありません、どうやらまだどこか貴方を侮っていたようです。」

と、驚きを隠せていない。

「マゼンタはヒカルのみたくレアメダルじゃないし、あたしもあんたら相手には初めて使ったけど……………予想以上だわ。」

「私もです。もしこれがメダフォーエス2か3なら流石にきつかったかもしれませんね。」

「何？負け惜しみのつもりかしら？みつともないわね。」

現に今ブラックスタッグはマゼンタによって停止させられている。それも並の停止ではなくメダフォーエスによる停止だ。抜け出せるはずが……………

「ええ、確かに危なかったのは事実ですね。その辺りは天領イッキ

さん、貴方に感謝しています。」

「僕に？」

「どういうことだ？僕はいつの間に彼らを有利にしてしまったんだ！？」

「イセキさん、貴方手を抜きましたね？側にいる彼らを巻き込ませない為に。」

「何のことよ？」

「スタッグを本気で止めたいなら万全を期してメダフォー3を使うべきでした。それが分からない程貴方は愚かでも馬鹿でもない。」

「が、貴方は本能的に気付いていたんでしょう？その危険性に。」

「そう言いながら顔はブラックスタッグの方へ向ける。確かにメダフォー1であればほどの力なのだ。もしこれが2か3だったなら・・・」

「我々と戦えるといっても貴方達はメダルのリミッターを外しているわけではない。しかし三原則がかかったままでも万に一つ、億に一つの確率でメダロットの攻撃による流れ弾が偶然人間に当たり傷付けることがないわけではない。ましてやロボットではない本当の意味での戦いであるこういう場なら尚更です。だから貴方は戦えない彼らに少しでも被害が及ばないよう一番弱いメダフォー1を使用した。」

「そう、なのか？だったら僕達はこの場において足手まといに他ならないじゃないか。」

「そういう意味では第一世代のメダルは実に分かりやすい。何せ覚えるメダフォー3はそれぞれのメダルが最も得意とする行動を極めた物ですし、覚えるのが遅い物ほど強力になっていく・・・」

かし、だからこそこの程度ではスタッグは押さえきれない。」

瞬間、

ピシィ……ツ!!!パリィィィィィツツツ!!!

『フウ、氷だけにヒヤツとしちまったぜ。』

ブラックスタッグが停止から解かれた。同時に風が巻き上がり《黒衣》のフードをずらして……

「ふうん、まあ性別は予想ついてたけど、フードの下はそういう顔してたんだ。」

《黒衣》の下にあった素顔。それはイツキと同じ年位の女の子だった。

「え?えええええつつつ!?!」

じ、じゃあこの女の子がヒカルさんを苦戦させ、メタビーを圧倒したブラックスタッグのマスター!?

『なあ、もういいだろ?こいつら黙らせよつぜ?』

「そうね。私達の任務は浦島カイの抹殺、長居は無用だから。」

『ヨツシャ!じゃあ行くぜ』

そして今度はブラックスタッグの体が輝き出しそして……!!!

バチィッ！！バチチィィィッッ！！！！

「これは……雷!?」

「それでは皆さん、我々は失礼します。決着は大会の決勝で行いましょう?」

そう言っている間も雷はどんどん広がっていき……

「最後に一つ。このままだと秋田キララは無事では済みません。タイヨウに殺される姿を見たくなければ試合を見に行かない方がいいですよ。」

バチチチィィィ………  
ツツッ！！！！バアアアアアアア  
ンッッッ！！！！

イッキの意識はそこで途切れた。

第44話：兵器激突・獣王VS神帝！！（後書き）

兵器対決とかいつときながらまだまだ始まったばかりと言った感じのラスボスメダロット達。片や過去にヒカルと互角以上の戦いを繰り広げた完全無欠な《本当の悪》だったロボロボ団のボスだった男、片や誰よりも近くでヒカルと共に戦ってきて今も現役のメダロット初期ヒロイン。この二人の決着や如何に！？

ちなみに今回から『黙する者』さんからの指摘でセリフとナレーションの間を一行空けるようにしました。ご指摘ありがとうございます！！

それにしてもメダロットDSの体験会に行きたかったなあ・・・  
・・知り合いによれば結構直してほしい部分とかあったみたいだけど完成品はどうなるんだろう？



第45話・猛る獣王、そして……（前書き）

か………なり遅れてしまいましたすみませんで  
した………よつやく第45話目です………



「……こっちはこんなにキツイのにそっちは平然としてるとか割り似合わないなあ。」

「それについては謝ろう。一応私も《悪魔》と契約している身なものでね。お陰で普通のメダルの力ではどうあがいても勝てなくなっってしまったよ。」

ビイイイイイイイツツ！！！！

再びゴッドエンペラーの左腕からレーザーが火を吹く！！が、

「分かりきってはいたがやはりつまらんな。ビーストマスターの後継と知ったときはもしかしたらとも思ったが……」

ブウウウウン……！！！！

ビーストマスターにぶつかる直前、レーザーが霧散する。それはもう何度も何度も繰り返された現象で……

「やっぱり届かないか……」

「何度やっても結果は変わらんぞ？だから貴様では相手にならないと云ったろうが。」

そうさつき放ったブレイクもこうして無効化されてしまった。対するこちらはプレスをもろに受けてしまったのだが、クリティカルヒットではなかったために何とか無事だったのだ。しかし相手は無傷、こちらはパーツこそ壊されていないがかなりキツイ状況であること



「全く反則ね。もうロボトルの常識を完全に無視してるじゃない。」  
「まるでこの能力が無ければ勝てる、とでも言いたげな発言だな？  
残念だがこれはもう私の意思ではどうしようもない。だが……」

「そこまで言っただけで初めてタイヨウがちゃんとキララを見た。」

「……筋は悪くない。その後継機もちゃんと扱いこなせている。流石はあがたヒカルと長年共に戦っているだけあるな……」

「まどろっこしいわねえ。ハッキリ言いなさいよ。」

「と思っただけで今度は何かを真剣に悩んでいる。その様子にキララはいい加減イライラが募り……」

「リミッターを外せ。」

「思考が、停止した。」

「……は？」

「聞こえなかったようだな……ならばもう一度だけ言ってやる。その機体の制御は貴様が握っているんだろ？それを今すぐ解除しろと言っている。」

「ちよっ……待ちなさい、何言ってるのあんた!？」

「急に変になったと思えばいきなりリミッターを外せ？何を言っているんだコイツは!？」

「同じ土俵に立ちたいならそうする必要がある。この力はレアメダルやそれに類する力を持つ者には意味をなさないらしいからな。それは予選でも確認できた。」

「それがリミッターを外すことと何の関係があるのかしら？それにアトスのメダルはレアメダルじゃないんだけど？」

「レアメダルかそれに類する力を持つ者と言った筈だ。そもそもいくら制御されているとはいえ所詮ソイツは兵器以外の何者でもない。前の試合で使っていた小僧の機体、グレインと同じだよ。並のメダルではそれは動かせん。」

つまりそれはゴッドエンペラーのメダルが普通のメダルより強力であるからに他ならない。確かにゴッドエンペラーの凶悪な性能を御するにはキララの技量だけでは足りないのは事実。

「だがやはりレアメダルの格には及ばないのもまた事実。本来ならばあの生意気な小僧が作ったシステムの力によって通常のメダルでも《悪魔》に対抗できうる力を持たせていたらしいが、あいにくとビーストマスターのメダルは特別性でな。そのシステムが作動していたとしてもレアメダルでなければまともに戦うことはできん。しかし……」

「リミッターを外して、メダルの持つ力を全て引き出せば……  
……そういうこと？」

「無論大抵のメダルではそんなことをしても敵ではない。が、貴様のメダルの体はゴッドエンペラー。王の力を受け継ぎし帝だ！！先程までの力を見て確信した……力を完全に開放すれば、我がビーストマスターをも上回る可能性があると！！」

タイヨウが言っていることはあなたがち間違いでないだろう。元々ゴッドエンペラーはビーストマスターの発展型後継機。純粋な攻撃的性能では劣るかもしれないが、バランス面や総合能力ならばゴッ

ドエンペラーの方が遙かに上だ。タイヨウは《悪魔》と手を組んでいるしピーストマスターのリミッターも外しているが、それも言う通りこちらもリミッターを解除すれば少なくとも今以上にはまとも  
に戦えるだろう。だが……………

(タイヨウは《悪魔》から貰った力で暴走させてないみたいだけどこっちは違う。もしゴッドエンペラーのリミッターを外してしまつたら……………!)

間違いなく制御しきれない。数年前の様にゴッドエンペラーは暴走し、最悪の場合はここフューンストーンが悪夢と化し最早大会どころの騒ぎではないだろう。もっとも《悪魔》だのリミッターを解除したメダロットだのせいで既に普通の大会ではなくなっている  
だ。

「その顔、制御できる自信が無いと見えるな。まあ10年前は私もこいつの手綱を握りきれずに暴させた経験があるから何も言えんがな……………だがそれこそが真の兵器であるコイツらの本当の姿だ。今の貴様は三原則でソイツを縛りつけているんだよ。」

「ふざけないで、メダロットは兵器じゃない。もちろんアトスだって……………」

「だとしても、ソイツのリミッターを外さない限り貴様には万に一つの勝機もない。その事実是不変変わらないがな。」

つまりタイヨウが提示している選択は二つ。一つはリミッターを外して少しでもまともな戦いにするか、それとも……………

「……………そんなの、答えは分かりきってるじゃない。」

そうだ、そんなもの……………

「リミッターなんか外さずに勝ってやるわよ!!」

ドシューッ!!ドシューッ!!ドシューッ!!

間を置かずにゴッドエンペラーからミサイルが乱射される!!だが先程までと変わらずやはり届かない。

「学習しないなお前は。何度やっても……」

ビイイイイイイッッ!!

言葉を最後まで聞かず更にレーザーを発射!!タイヨウはそれを煩わしげに見て、ビーストマスターもレーザーを難無くかわし、

「そろそろ舞台から降りろ。」

ドオオオオオンッッ!!

獣王の右腕から無慈悲なるナパームが……



「キララー!!」

「よそ見してていいのか? ああっ!?!」

ビィィィィィィィィ!!!

アワリティアの両腕から赤いビームがアークとテイルを襲う!! 見るからに禍々しいそれは、下手をすればアークビートルの《プロミネンス》に匹敵しかねない。

『これしきの攻撃……!!!』

『喰らうものか!!!』

体を捻りながらなんとかそれをかわす二機。だが相手もそれは見越していたのか、まずは一氣にアークとの間合いを詰めて……

『……』

ガシィッ!!!!

そんな効果音が出るくらい強くその腕を掴む。更にそのまま持ち上げて……

『クツ、離せ!!!』

ドシュードシュードシュー!!

右腕を連射しなんとか引きはがそうと必死になるが、アフリティアは意にもかかずそのまま……

ブウン!!

空中へとアークを放り投げる!!更に追い打ちをかけるように、

「空中じゃあかわせねえよなあ?」

『っ!!!』

ビイイイイイイツツツ!!!!

アフリティアの腕から空中で動けないアークへと、赤い光が放たれた。

「アーク!!」

『貴様……!!』

それを見て動かないほどティレルも落ち着いてはいない。そのまま

一息でアワリティアとの距離を0にし、

『斬ッ!!』

一気に決着をつけるべくその首を……

「阿呆が。」

落とせなかった。その巨体からは考えられないほどの反応速度によつて剣が阻まれたのだ。

「何度も見てりやあ、このくらいわけねえな。俺はあのクソガキの愛機とも既にやりあってんだぜ？聞かなかつたのか？」

『馬鹿な……!!?』

先程は確かに届いたはずの刃が届かない。いや、違う。先の刃は届いたのではなく届かされていたのだ。まだ実力の全てを見せていなかった故に。

「情けねえ話だわなあ。あんなんで負けた俺も俺だが、それ以上にあの程度で勝つたと思つてやがるアイツが許せねえ……!!!けど安心しな。テメエは強い、出し惜しみなんざしねえからよお!!!」

言葉と同時に、ティレルの刃を止めていたアワリティアは空いているもう片方の腕でティレルの頭を掴み……

「いつちまいなあ!!!」

ドゴオオオオオツツツ!!!!

ステージに叩き付けられる!!

『ガッ……!!!!』

メダロットとて痛覚はある。そして今は頭からモロに受けた一撃だ。そのダメージ決して軽くはない。

「なんだ、まだ終わりじゃねえだろ？おら立てよ、わざわざ待ってやってんだ。さつさと本当の力を見せてみる!!」

「……っ!!」

やはりあのまま追撃しなかったのはその為か。なにせよ簡単に終りそうもないが……

(力を……いや、駄目だ。まだ早すぎる。まだ……)

それは自分たちの勝利だけではなく周りの人間全ての安全を考慮した上での判断。しかしこの判断を、ヒカルは後悔することになる。最悪の形で……

ビイイイイイイツツ!!!!

ドシューウドシューウドシューウ!!!

ビイイイイイイイツ!!!

猛攻に続く猛攻。キララはゴッドエンペラーにひたすら攻撃をさせていた。無論休む間もなく続く凶弾の嵐はやはり、ビーストマスターには一切届いていない。

だがそれでもキララは攻撃を止めなかった。決定的な瞬間、そのときこそ……

「……哀れだな。無駄と知りつつまだあがくか。」

「さあ、どうでしょうね!!!」

ビイイイイイイツツツ!!!

会話をしながらもゴッドエンペラーへの攻撃指示は途絶えない。なるほど、確かに効果がないわけではない。これほどの猛攻、今のビーストマスターには傷など毛筋程も与えられないが、それでもビーストマスターの攻撃を抑え込む事には成功している。先ほどこちらに向けられたナパームもぎりぎり先手を取ることによって抑え込むことに成功していた。

「つまりは時間稼ぎ。あがたヒカルが勝利するまでの俺の足止めというわけか……。実に下らんが、これも試合である以上有効な戦略ではある。ソイツを預かるに値する実力はあるというわけか。」

この試合、リーダーはそれぞれヒカルのアークとマモンのアワリテ  
イアだ。ロボットは普通リーダーが機能停止してしまえばそれで終  
わる以上、当初の目的通りタイヨウにヒカルの邪魔さえさせなけれ  
ば勝ち目はある。つまりタイヨウに、ビーストマスターに勝つので  
はなく倒されずに生き残る。自分たちさえ生き残っていればタイヨ  
ウはヒカル達に参戦できないのだから。そう、それがこの場で一番  
の………

「……でもなんでかな？負けっぱなしって性に合わないのよ  
ね。」

誰にも聞こえないくらい小さな声でキララはそう呟く。いや、ゴッ  
ドエンペラーにだけは分かっていたかもしれない。長い間パートナ  
ーとしてともに戦ってきた彼ならばキララが今考えていることも・  
・・

「つまらんな。足止めだと？リミッターを外しもせずにそんなこと  
が出来ると思っているのか？」

それが合図だった。未だに続くゴッドエンペラーの猛攻。それを受  
けながら（もつとも何一つとしてダメージを与えられていないが）  
もビーストマスターは左腕を振り上げ……

「最後のあがきもこれで終わりだ。消えろ。」

ビイイイイイイイッッッ！！！！

心なしが今までよりも太いビームがゴッドエンペラーに放たれる！  
喰らえば間違いない一撃。だというのに、

「アトスツ！！」

キララは笑っていた。これを待っていたと言わんばかりに。そして、

「《デスブレイク》！！」

ジャリリリリリリッ！！！

ゴッドエンペラーの頭から円状の斥力が発生し、ビーストマスター  
へと放たれる！！

「無駄なことを……そもそも威力が……！！？」

嘲笑は驚愕へと変わった。ビーストマスターの武装の中でも最強の  
攻撃。それが、

ズパアアアアアッ！！！

「切り裂いた、だと！？ブレイクの形状からそれは可能かもしれん  
がまさか……！！？」

有り得ない。いったいこれは……？

「っ！！そうか、ゴッドエンペラーのメダルは《ビークル》。そしてビーストマスターのビームを切り裂く威力……《光学化》か！！」

そう、コウジの《エース》メダルのメダフォースと同じく自身の攻撃に属性を付加する技。その中でも威力に働きかける《光学化》だ。コウジが使うのとは違い、こちらはレベル1なので威力は通常の数倍に上がる。同じ光学属性の条件に持ち込んだのだ。

「って言っても元の威力だってそっちの方が上なのは変わらない。だから私はどの位置で、どの態勢から撃てば勝てるのかずっと計算してたの。」

「最初からから仕掛けてこなかったのはそれが理由か……！！」

「こっから見えても私メダロット社の若きエース（笑）だし？後は少しでも威力を上げる為にメダフォースを溜める時間が欲しかったって言う理由もあるけどね。」

そう言っている間もブレイクがビーストマスターへと迫っていく。

「でも良かった。そっちから攻撃してくれないとこの攻撃は成立しないから。」

「何？」

「十中八九ビーストマスターの無敵バリアって攻撃の瞬間から発動後の数秒間はタイムラグが発生して解けるでしょ？ていうか大抵はそういうものだし。まあもし外れてたら洒落にならないから暫くは攻撃させないようにしてたけどね。」

それを聞いてタイヨウの顔が険しさを増していく。そして、





「してやられたな。まさか私のビーストマスターが……」

元々ビーストマスターがいた場所から大きく磁場が広がり、獣王安否は見えない。だが《光学化》により威力を底上げし、元々の《重力属性》の特性によりクリティカルが発生しやすくなっている。確実にクリティカル判定が決まったという確信も。

「これでまだ立ってたら泣くわね……」

文字通りこれは最後の賭けだった。もうこれ以上の策は無いし、同じ手が通用するわけもない。これで倒れていないのなら……

「……そろそろね。」

やがて磁場が消え、徐々に中の様子が見え始める。そして、

『……』

「ハハハ……最悪。」

脚部を無くし、右腕は砕け、左腕も原型を留めておらずもうこの戦闘では武器として使えまい。頭だつてギリギリくつついているようなものでもう虫の息と言っていていいだろう。だが、だがそれでも立っていた。獣王は、最凶の王はその機能を停止していなかった。

『ア……』





バカな。誰よりも長くレアメダルの力を引き出しているユウトでさえそんな真似は出来ていない。たとえレアメダルだとしてもそんなことができるはずが………

「そうか、まだあがたヒカルはそこまでは達していないか。あの小僧のメダルも確か第二世代だったはずだから知らんのは無理もない。」

「どついうことよ？あんた何言ってるのよ!？」

なんだ？まだ知らない何かがあるというのか？

「貴様のゴッドエンペラーは違うようだが、少なくともお前やあがたヒカル達の世代のメダルは全て第一世代のメダル。今普及している第二、第三世代のメダルとは違い使い手の実力が真に必要なとされるメダル達だ。そしてその中でもさらに特殊な第一世代の10枚のレアメダル群。《カプト》《クワガタ》《しのび》《ドラゴン》《エンジェル》《デビル》《せいぎ》《あく》《エイリアン》《ぼとるる》……だがその中でもさらに特異にして異質の3枚のメダル、知っているだろうか？」

そう、未だにその秘密が解き明かされていないメダルの謎。だがその存在自体も謎だらけな3枚のメダル。それは全て第一世代にして究極が3枚。

「《ネコ》《？》《！》……ふざけたような見た目とは裏腹にこの3枚にふさわしい属性を持つ機体は今までも、そしてこれからも永劫存在しないであろう異端。だがそれでいて装着されたメダロットは一騎当千の力をも得られる最強のメダル達だ。力を御し、使いこなすことができれば普通の機体では文字通り傷一つつけ

られない。」

「まさか……!!?」

「気づいたか? そう、我が獣王はその究極の一枚を宿す最強の機体!! この機体の前ではレアメダロットも意味をなさないのだよ!!」

狂喜するタイヨウに呼応してビーストマスターの力もまた上がっていく。そして大量に放出されるメダフォースは、やがて一つの光球となり……

「だからこそ褒めてやろう!! 獣王の後継を名乗るとはいえ所詮は第二世代の凡庸メダル。だというのに我が機体をここまで傷つけた!! 素晴らしい……!! 故に見せてやろう、究極が一つである《?》メダルの真の力を!!」

光球はだんだん物質となつて形作られていく。そして最終的に見せたその姿は……メダル。

「!?!」

だがそれはただのメダルではない。輝くその光はまるで悪魔の微笑みのようで……

「第二世代の中には《遠隔地雷》という必殺技を使えるものもいるらしいが、こいつはケタが違うぞ? 使い手もマスターもすべて巻き込みかねんからなあ!!」

「っ!!」

それを聞き、キララは行動を起こそうとゴッドエンペラーに指示を出そうとする。が、圧倒的なビーストマスターの圧に動くことができなかつた。それはゴッドエンペラーも同じで……



第45話：猛る獣王、そして……（後書き）

説明分かりにくくてすみません………ちなみに第一世代のメダルとはゲーム版メダロット1、2に登場するメダル全てです。基本的に使うメダフォー스는2準拠で。レアメダルの区別は俺が勝手にやっちゃいましたがww第二世代はイツキたちの世代が使っているタイプで3、4に出てくるメダル群です。第三世代は………5以降のメダル群ですがこの小説では出ないと思います、はい。

ちなみついでにこの話で使われている戦いとロボトルの区別ですが、ロボトルは簡単にいえばアニメ版やゲーム版と同じようにお遊び感覚的なもので、戦いはメダルの秘めたる力を解放させて、一歩間違えばメダロッターもメダロットも命を落としかねない命がけの戦いです。っていつても死人はなるべく出さないようにしますが………さっそく出そうな展開です。

キララは果たしてどうなるのか！？次回はようやくヒカルが本気になるます！！マモン&タイヨウ戦決着です！！



第46話：VSアワリティア前編・ヒカルの全力（前書き）

結構早く載せられました！！46話です！！

## 第46話：VSアワリティア前編・ヒカルの全力

「なんであんな真似したんだ？」

それは一回戦が終わったとき、ユウト君と二人で話をしていた時の話だった。

「さっきのコウジ達とのアレ、成功したからいいようなもの・・・  
・・・ふざけてんの？」

「そんなつもりじゃない。ただ僕はレアメダルの力を使って勝ったとしてもコウジ君を元に戻せないと思っただけで・・・」

「だとしても、他にもやりようはあった。イツキやカラスはまだ年齢的にも精神的にも実力的にも未熟だから仕方ない。俺の場合はちよつと例外だからカウントしちやいけないけど、コウジを救う方法ならいくつもあった。勉強はできないかもしれないけど実力も精神も未熟じゃないヒカルさんがあんなメチャクチャでまるで死にたがりな方法しか思いつかなかつたとは到底思えない。」

彼は本気で怒っていた。それは誰よりも早く深くこちら側に入ってきているからこそなのか、それとも自身の経験か。どちらにせよ彼は本気だった。

「やっぱり君の目から見てもメチャクチャだったのかな？」

「ああ。俺も大概メチャクチャやってるし自覚もしてるつもりだけどあそこまでの気は流石にないよ。俺は確かに無鉄砲だし後先考えないけど死にたがりなわけじゃない。てかむしろ死ねない、目的を果たすまでは絶対に。そのためならなんだってするし、もしあの時コウジと戦っていたのがヒカルさんじゃなくて俺だったら迷わず全力で叩き潰してたよ。」

「……迷いが無いんだね。」

「当然元に戻すために俺に出来る手は何だって打つ。且つ俺も死なないために全力を出す。だって死ぬわけにはいかないし、何より本気を出さずに負けてしまったら？あの状態の工事はかなりヤバかったから下手すれば死ぬよ？」

それは脅しても何でもなく事実。相対した僕もそのことは分かっていた。だがそれでもヒカルは最後まで全力は出さなかった。それはつまり……

「俺はコウジにも皆にも友達殺しなんて辛くて重いモン背負わせたくない。ヒカルさんが死にたいなら勝手に他でやってくれ。少なくともあいつらの手を使ってやるんじゃないよ。」

「……」

言い返すことはできなかった。僕にだってユウトと同じように倒れられない事情がある。果たすべき目的がある。だというのに自分がやった事はまるで真逆だ。ユウトの言うとおり他にもっとましな方法があったというのに自分は……

「僕は……怖かったんだ。」

何とか返した言葉は言い訳と取られても仕方がないものだった。だが、それに

「……自分の持つ力が？」

真剣にそう聞いてくれた。まっすぐに僕を見つめて。

「僕の持っている力はね、本当に異質なんだ。今までのメダロット

の常識を壊してしまう、いやそんなものじゃきかないくらいに……

「……………」

「一度ね、予選で使ったんだよ。相手はあの気持ち悪い外見の下級兵みたいなやつだったけどね。」

その時確信した。この力は僕の手に残りすぎる、君達以上に異質で危険な力だつて。だから……………」

「逆にコウジを殺してしまうと思つてしまった、か。まあ強大な力を手にした人間の反応としてはまともなほうだな……………」

俯きながらそう言つて彼はもう一度顔を上げた。

「やつぱは優しすぎるよ、イツキもヒカルさんも。」

「え？」

「相手が本気出してないならともかく、全力でかかってくる相手に対して全力で戦わないつてのはやつちやいけないことだと俺は思うんだよ。それは普通のロボットでもいえるだろ？そんな相手はバカにしてる。それに相手を傷つけるのが怖い、その気持ちは分らないでもない。けど……………」

その目はさつき怒つていたとき以上に真剣で、どこか辛そうで……………」

「けどこつちに来た以上はそうしないと生き残れないし、そうじゃなきゃ自分も相手も傷つけるんだよ。それに何より肝心なところで出し惜しみなんかしてたら……………」  
「本当に大切なものを守れないんだ……………」

それは彼の独白で他の人たちには経験させたくなかつたからで……………」

「だからもしそういう状況になったら躊躇っちゃいけない。たとえ相手が親しい友達でも愛しい恋人でも……もちろんブツ飛ばしていい奴なら遠慮すること無いけどね。」

最後は笑顔だった。この場で初めて見せた笑顔。だけど考えてみればこの少年はどれだけ辛い過去を背負ってきたのだろうか？そんな彼だからこそ言葉には重みがあったし、理解できた。そう、頭では理解していたんだ。なのに……

どうして僕は……？

「あつ……！！」

一瞬だった。その場にいたはずのゴッドエンペラーが文字通り消滅するのは。タイヨウの言うとおり、ビーストマスターが放ったメダフォース・《ブラインドゲーム》は今の人々が知る《遠隔地雷》とは比べ物にならない、有り得ない威力だった。いや、これがまだレアメダルとしての力を発動させていないのならば《遠隔地雷》と効果は変わらなかっただろう。大量のメダフォースを消費する代わりに相手メダロットを一撃で機能停止させる超強力技。もっとも大き

な力のリスクとして《遠隔地雷1》ならば7割、《遠隔地雷2》ならば4割、《遠隔地雷3》ならば1割の確率で地雷が跳ね返り自滅する。リスクの差さえあれど、元々《ブラインドゲーム》も同じような性質だった筈なのだ。そう普通なら。

だがタイヨウは、ビーストマスターは、そもそもこの戦い自体が普通じゃなかった。分かっていた筈だ。そもそも自分が相手をしているこの男もまた普通ではないのだから。だというのに……

「あ、ああ……っ!!」

カラン……ッ

床に落ちる《ビークル》メダルは先ほどまでゴッドエンペラーに組み込まれていたものだった。ティンペットごと破壊された余波か、かなりひび割れいつ砕けてもおかしくない状態だった。そして……

ドサ……ッ!!

無事じゃないのは、メダルだけではなかった。

「キララっ!!!!」

「ハハハハッ!!!!あいつやりやがった!!!!やっぱりおもしれえよ、なあ!!!!」

ドゴオッ!!

『グウ……ツ!!』

キララの元に急ごうとするヒカルを阻むようにマモンのアワリティアの猛攻は止まらない。いまやティレルの剣も全て見切られ他人の心配をしている余裕はない。だが……

『ゴ、ゴッドエンペラー機能停止確認です……その余波でキララ選手もかなりの怪我を負ったもようです!!誰か担架を持ってきてください!!早くしなければキララ選手が危ない!!』

「キララっ!!しっかりしろ、オイ!!」

うるちのコールが響いて外部からキララを助け起こすためにヤンマ達が入ってくる。いつも無口なクボタも、皮肉屋なヤンマもこの時ばかりは顔面が蒼白になっている。外面だけでも見て分かるほどにひどい怪我を負っているのだ。その反応は当然だろう。

「お、おい……冗談、だよな？」

だが、状態はもっとひどかった。ヤンマが体を震わせながら叫んだその一言に……

「キララの奴……息してねえぞっ!?!」

思考が、停止した。

「そ、そんな………そんな!!」

それを聞いてヒカルの心は大きく動揺する。

躊躇っちゃいけない。肝心なところで出し惜しみなんかしてたら………本当に大切なものを守れないんだ………

今になって、なんであの時のことを思い出す!? 彼は忠告してくれたのに、自分はその時頷いたというのに!! なのに、なのになんで僕はキララを守れていないんだ!?

「キララ!! 目え覚ませよキララあ!!」

遠くから聞こえるヤンマの声が大きく響く。もう、ティレルを操る気力も残っていなかった。



「オイオイオイオイ！？どうしたんだよ、女が消えて戦意喪失かあ！？そうじゃねえだる底を見せるよ！！そんな腑抜けテメエをブチ殺してメダルを奪っても面白くねえんだよっ！！」

ドゴオツ、バキツ、ガツ、ダアアアアアン！！！

耳に響くティレルがやられている音がやけに幼稚に聞こえてしまう。戦わなきゃ、このままではティレルまで失ってしまう。だというのに体が、いや心が折れてしまっていた。

「僕は……僕は……！！！」

「ヒカルつつっ！！！」

そんなヒカルに届いたのはいつも無口な友の声だった。

「何やってるんだ！！戦えよ！！！」

「クボタ……」

「キララが、友達がやられたんだ！！悔しくないのか、そんな奴にこれ以上好きにさせていいのか！？」

「ただ、だけど僕は……」

「ヒカルっ……」

「テメエ、何イジイジしてんだよっ！！ふざけてんのか、ああっ！？」

「ヤンマ……」

今度はヤンマもヒカルに向けて声を送ってくる。その目は今にも泣きだしそうで……

「何のためにキララは一人でビーストマスターの相手してくれてた  
と思っただ！？お前がそいつを倒すって信じてたからだろうがっ  
！！それがなんだ？本気も出してねえくせにイジイジとやる気なく  
しちまいやがつて……。テメエこれでもし本気も出さずに負  
けてみる。俺は一生お前を許さねえ！！お前は二体も使っただぞ  
！！まだ本気を出せるんだぞ！！女にはっか仕事させて倒れさせて  
テメエだけ逃げてんじゃねえ！！」

その言葉に、

『…………その通りですヒカル。』

一人の、いや一機がもう一度立ち上がる！！

「アークっ!？」

『ヤンマさんやクボタさんの言うとおりです。我々はまだ自分の仕  
事を果たしていません。そしてそのせいでキララさんが倒れてしま  
った…………!!男としてここで引き下がるわけにはいきませ  
ん。違いますか?』

そうだ、僕は何をしているんだ?このまま負けてしまったらそれこ  
そキララは無駄死に まだ死んでないはずだが じゃないか。それ  
にこのまま本気を出さずに負けてしまったら、次に戦うであろうイ  
ツキ君達に大きな負担をかけてしまう。もしかしたらそのせいで彼  
らも犠牲になるかもしれない。そんなことになったら……………  
!!

「ゴメン、皆…………ヤンマ、クボタ。キララを頼む。」

「…………ああ、任せろ。」

「・・・・・・・・・・（コクっ！！）」

丁度医療班がその場にやってきてキララを担架に乗せて急いで戻っていく。二人は最後にもう一度だけヒカルを見てからそれについて行った。

「おーおーようやく五月蠅いのが消えたか。これで思う存分お前とやりあえるな？」

アフリティアのティレルへの攻撃を続けさせながら、こちらの様子に気づいたのかニンマリと笑う。

「お、やっぱり機能停止しなかったんだなあ、お前。大方さっきのアフリティアの攻撃が直撃する前に標的を自分にしたミサイルを出してその衝撃で躲したってところか？思った以上にダメージがでかくて今まで動けなかったんだろ？」

「・・・・・・・・ええそうですよ。間抜けな話ですが、それ以上にそこまで正確に言い当てられたことになりのショックを感じますがね。」

気分を害したのか、表情が分かるなら唇を尖らせているであろう口調でアークがそう言う。と、

ドゴオッ！！

「ガッ・・・・・・・・・・」

アフリティアに殴り飛ばされてティレルがこちらまで飛んできた。

「……なんだ。私がない間に結構やられてるんですねティレル？」

「はあ……はあ……アークが、いびきをかいてぐっすり寝ている間は大変だったんですよ……！！分かっていきますか、そのせいでキララさんが……！！！」

「分かっています。ですが今は自分たちの不甲斐なさに怒る時ではない……いけますか？」

「……当然。」

アークとティレルは声を掛け合いともに再び戦闘態勢に入る。そしてその後ろで構えるヒカル之眼にはもう迷いも弱気な光もない。

「へえ……ようやく見せてくれるんだな、本気を？」

「ああ、見せてあげるよ。もっともそれをきちんと君が理解できる時間があるとは思えないけどね。」

その言葉にピクリと眉をあげて……

「おもしれえな……おいタイヨウ。こいつは元々お前がやりたがってた獲物だが、悪いな俺が頂くぜ？」

「構わん。元よりもうあがたヒカルと戦う気は失せた。少なくとも彼女の言葉通り今はまだその時ではないではないらしいからな。」

今まで沈黙を続けていたタイヨウはそう言ってビーストマスターを収めて後ろへ下がる。

「OK、ならありがたく……っ！？」

マモンがタイヨウへ振り返ったのはほんとはほんとの少しの間だった。一瞬

というには長い時間だがそれでもごくわずかな時間だったことに変わりはない。それなのに……………

（バカな……………どこへ消えた？）

ティレルはともかくアークまでその姿を消していたという事実。これを驚愕せずにいられるだろうか？

そんなマモンが回りを警戒している中、先に動いたのはヒカル達だった。

ズガガガガッ！！

『……………！！』

最初の一撃はガトリング、ならば少し離れたところにアークがいるはず！！撃たれた方向から、位置と距離を計算しアワリティアがその右腕を向ける！！先ほどの撃たれた状況などから考えて、絶対に躲せない完璧なタイミング。そのまま右腕から赤い閃光を……………

『遅いつ！！』

だが、そこにいたのはアークではなくなんとティレルだった。スピードが売りであるティレルはその一撃を躲し、そのまま残像も残さずに消える！！

「チイツ、またかよ！！」



はもろにその一撃を喰らってしまつ。

『……グッ……!!!!』

「どういうことだ、なにが起こっている!？」

アークが攻撃を繰り出してであろう場所にはティレルがおり、斬撃を繰り出したであろうティレルがいるはずの場所にはアークがメダフォースを準備して構えている。一体これは……？

「さっきの言葉をそのまま返そうか。よそ見していいのかい？」  
「……」

挑発には乗らない。アワリティアの回りをよく目を凝らして、何が起こっているのかを確認する。

まずロクシヨウがアワリティアへと突っ込んでいく。アワリティアはそれに反応して光線を放つが、ティレルはそれを綺麗に躲して右腕から鋭い斬撃を繰り出す。今度はアークが近くにいるためか速さも威力も増しており斬り落とすまではいかないものの最初と同じような深い傷を与える。だが、それに耐えてアワリティアがティレルへとその腕を……

(なっ……!?)

驚愕はその後の異常だった。先ほどまでは確かに格闘武器の《ピコペコハンマー》だった筈の左腕がアークの《サブマシンガン》へと姿を変えていた事実。そしてそのまま至近距離から連射し、ダメージを与えつつ反動を利用して腕が届かない位置まで一気に下がる! その一連の流れを見ての流れを見てマモンは納得する。

「なるほど……《ツインレアメダル》として互に対応し

ているメダルをそれぞれ受け持つ機体同士ならばパーツの交換は自由、それも元々持っていたほうと同じ精度で扱えるってわけか……」

つまりさっきガトリングを撃っていたのはティレルで、ソードを繰り出したのはアーク。元々入れ替わったのではなく単に戦闘中だということにパーツ交換を可能にして意表をついたというわけだ。

「だが種さえ分かればこっちのモンだ。」

そつだ、その程度ならば簡単に……

『行くぞアーク！！』

『仕切るな！！』

だが《ツインレアメダル》の力は無論その程度ではなく……

『《バーサーク》！！』

二機が同時に一回戦の工事との試合でアークが使った第二メダフォース・《バーサーク》を発動する！！

「何い！？」

バカナ、互いのメダフォースも自在に使えるのか！？《バーサーク》の効力は前回の試合で良く分かっている。元々は射撃タイプであるアークを力を解放させ、クラフィティモードとなったエクサイズと互角以上の性能に引き上げたほどだ。元々格闘が専門のティレル



までがこの効力を得たら……

ヒュン……ッ

ズザザザザザッ！！！！

『……………！！……………っ！！』

さすがのアワリティアも速すぎて目が追いついていけない。更にそんなティレルに引つ張られるようにアークも前回見せたとき以上の性能を引き出しており、二機による斬撃、射撃が入れ替わり立ち替わりまるで読めずにアワリティアを襲う！！もはやこの戦いの主導権を握っているのは先ほどまでとは違い、アワリティアではなくアークとティレルだった。

「ふざけんな……………ふざけんなよガキがっ！！」

その事実予選でのユウトとの戦いを思い出したのか、マモンが叫ぶ。

「調子にのんじゃねえぞクソガキどもがっ！！もう遊びは止めだ、全力で殺す！！」

そして、

汝は強欲者。全てを己が物としても、それでもまだ満たされな  
い……!!

「っ!?これは……!!」

ヒカルはそれを聞いて戦慄する。間違いない。これがユウトの言っ  
ていた……

奪って奪って、満たされるまで奪い続けよう……この渴  
きを潤すために、全てを壊してしまおうとも……っ!!

これはおぞましく異怖すべき邪悪な詠唱。アフリティア 魔人のうちに眠る邪竜をヨルムガンド  
呼び出すために、あの時と同じ、いやそれ以上に危険なオーラを身  
に纏い闇よりも深い闇をその身に宿していく……

「いよいよ本気ってことか……」

いいだろう。僕らはもう負けるわけにはいかないんだ。ここでこい  
つに勝てなければ到底この先戦いぬけはしない。

ヒカルは覚悟を決める。そして詠唱も最後の旋律へ……

その呪われし名の元に全てを奪い、全てを喰らえ!!

詠唱が完了する。そして今より、ここに邪竜が降臨する。

「最後だ、気を引き締めるよ一人とも!!」  
『当然!!』』

真名・ヨルムガンド!!

そして、舞台は最終局面へと向かう。最後に立っているのは果たして……

第46話：VSアワリティア前編・ヒカルの全力（後書き）

思った以上に長くなってしまったので前・後編に分けました。明日か、早ければ夜にでも更新します！！

第47話：VSAワリティア後編・決着、そして……（前書き）

決着編PART2です！！長かったヒカルの試合も遂に終了です、  
どっぞー！！！！

第47話：VSアワリティア後編・決着、そして……

真名・ヨルムガンド！！

詠唱が終わり、そこに邪竜が降臨する。アワリティアから変質した  
巨大な邪竜に……

『G Y A  
A  
A  
A  
ああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああ！！！！』

その姿は雄々しく巨大。闇よりも深い漆黒の姿は正に邪竜と呼ぶに  
ふさわしい。その目に映るのは先ほどまで自分を追いつめていた剣<sup>テイ</sup>  
士と銃士<sup>アーク</sup>。その姿はユウトでさえ初めて見たときは戦慄したものだ。  
だというのに……

「これが、ユウト君の言っていた《真名》か………どう思  
う？」

『大きい的、それだけですな。』

『斬り応えのありそうな獲物、といったところですよ。』

「そっか、まあ怖がってなくて何よりだ。」

相棒たちともども全くビビっていなかった。いや、むしろ相棒である二体はバーサークの影響で好戦的になっており、倒しがいがあると喜んでそうだが……………」

「……………君は、悲しそうな瞳をしているね。」

だがヒカルはヨルムガンドに対して全く違う感想を持っていた。それは恐れではなく、憐れみ。

「ハハハハッ!!どうした、あまりりにビビってヨルムガンドに救いでも求めてんのか?残念だったなあ、そいつには感情なんてもんはねえよ。」

もはや勝利を確信しているのだろう。先ほどまでとは違う歓喜の笑みかマモンの顔に広がっていた。

「それとも何か?お前らは……………」

「黙っててくれないか?僕は彼と話をしているんだ。」

「あ”!?”」

マモンのイラッとした声が聞こえたがそんなものは気にしない。それよりも……………」

「アワリティア、いや真名っていうくらいだしヨルムガンドって呼んだ方がいいのかな?君も大変だね、マスターがあんなので。」

『シヤアアア……………!!!!』

ヨルムガンドはいつでも襲えるような態勢をとりながらもじっとヒ





から、

「ゴメンね。僕らは君を倒して……君を救うよ。」

君が元は何なのか、どこで生まれたのか。そんなことは知らない。けど少なくとも僕には君が悪い奴には思えない。そう見える原因は彼の主、だからこそその呪縛から解放したい。そのためには何が必要か、決まっている。全力には全力で……!!

「行くよ《めたびー》、《ろくしょう》!!」

現役から退いて、たった一度しか呼んでいない愛機達の真名。それと呼ぶということは本当の意味で全力を解放するという暗黙の了解だ。

『『YES、マスター。』』

それに応えるのはさっきまでのアークとティレルではない。過去にヒカルとともに歴戦の戦いを潜り抜けてきた最強の戦士だった。

『第三を使う、合わせられるか?』

『無論、そっちこそ足を引っ張るなよ。』

先程までの穏やかな口調ではない彼ら本来の姿。そのやり取りが合図だった。

『『メダフォース3・《ラストフォルム》』!!』







「なっ……!!」

「それがユウト君の言っていた必殺技かい？思っていたより早く使ったね。」

《闇の奪い手》は発動されることはなかった。その前にめたびーとろくしょうの位置がそれぞれ入れ替わり、ろくしょうの刃がヨルムガンドの下顎を斬り裂き横からのめたびーの砲撃で倒れたのだ。

「武装交換、メダフォー共……位置の入れ替えまで出来んのか……!?それにヨルムガンドをここまで……」

「ああ、君はさつき武装交換したからアワリティアが後れを取ったと思ったよ。最初の一撃はそれぞれ本人達が入替わったんだから。それにヨルムガンドを追いつめることくらい簡単さ。こっちは《ラストフォルム》を使っているんだからね。」

自らのメダルを自壊させかねないほどのパワーアップを起こすメダフォー、それこそが《ラストフォルム》。その力は相手に動いていないと錯覚させるほどのスピードを与え、ライフルの一発が相手に致命傷を与えるほどの威力と精度を与える。長時間どころか数分使うだけでもメダルが危ういし、何より普通のロボットで使ったとしても反則クラスになるのは目に見えているので、現役時代のヒカルも使用するのには固く禁じていた。現に今もレアメダルの力を解放しているとはいえヨルムガンド相手に無傷で圧倒している。

「この野郎……あのガキなんざ話にならねえ、テメエが一番のバケモノじゃねえか!!」

「あなたにバケモノ扱いされるのは心外だな……ん？」



頭パーツも半壊してティンペットが見えるほどだ。

「暴走・・・。。。？どういうことだ、なんなんだこれは!？」

「し、知らねえ!! オイ、ヨルムガンド!! 俺の言うことを・・・

・・・」

「AA  
AA  
AA  
ああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああ」

「っ、危ない!!」

叫ぶマモンに向かってアワリティアのときに見せた紅い光線が襲い、  
間一髪でヒカルが助け出す。

「お、俺の言うことを聞かない? 下僕の分際で・・・。。。!!」

「お前は・・・。。。っ!!」

この状況でも分からないのか。マモンを殴り飛ばしたい気持ちにな  
るが今はそれどころではない。

「ヒカル!! このままだと無差別に暴れまくるぞ!？」

「分かっている!! もう自分のマスターのことも分かっていない・・・  
・・・!!」

何が原因かは分からない。だがこのままではヨルムガンドの暴走は  
観客席にいる人々にも向くだろう。そして観客席にいる大半の人間  
はあるうことがキララがやられたあたりから、普通以上の戦いを目  
の当たりにして興奮しており今も歓声など上げている。





こんな最低な奴がマスターだというのに。命じるだけ命じて他者を蹂躪させて、それでいて負けたら罵倒する。そんな存在だというのに、いやだからこそ認めてもらいたかったんだろう。自分必要としてほしくて、もっと見てもらいたくて。

しかし《ラストフォルム》でパワーアップした二人によって苦戦どころか敗北を余儀なくされてしまった。このままではマモンに必要とされなくなると思ったんだろう。そんな気持ちが暴走して、自らの力の源たる《悪魔》の力が暴走し、呑み込まれてしまった。皮肉なことにマスターのことも分からないほどに。

「……めたびー、ろくしょう。」

静かに二人に呼び掛ける。立ち上がる二体は满身創痕だった。それに恐らくは《ラストフォルム》のリバウンドがそろそろ来るころだ。もう時間がない。

「これで終わりにしよう、ヨルムガンドを倒すんだ。」

『……分かった。』

『一発で決めるぞ、もう限界だからな。』

応える二体はそれぞれメダフォースを溜め始める。未だロクシヨウのように《奥義》が使えるわけではない以上、使うのは最強の威力を持つメダフォース。暴走するヨルムガンドを一倒す（救う）にはそれしかない。

キュイイイイイ……！！！！

めたびーの銃口には光が集まっていき、ろくしょうの右腕には《チ

ヤンバラソード》を覆う更に巨大な剣が形成される。対するヨルムガンドはただ咆衝し、無差別に暴れまわっている。だが下顎を失った筈の口は再生しており、黒い光が……

「《闇の奪い手》……あんな状態で放たれるくらいだ、さつきとは規模が違うぞ。」

しかし発動の溜めは先程よりも遥かに遅く、再生した体から黒い霧が噴出している。もうヨルムガンドも限界なのだ。強すぎる力に耐えきれずに自壊を始めている。このままでは決着がつく前に息絶えるだろう。

「そんなのは嫌だ。僕は君を死なせない!!」

敵とか味方とかそんなのは関係ない。少なくとも今このときにおいて彼は既に敵ではなく、救わねばならないメダロットだ。だから、

「救ってみせる!!めたびー、ろくしょう!!」

『メダフォース1・《一斉射撃》!!!』

『メダフォース3・《唐竹割り》!!!』

最強の砲撃と究極の斬撃。その二つが一斉に放たれ……

『……………アリガトウ』

ドオオオオオオンッッッッ!!!!

邪竜が倒れ消えていく。

シュウウウウ……………コト……………ッ

そしてヨルムガンドの姿は消え、メダルだけがその場に転がる。ようやく決着がついたのだ。

『リーダー機の機能停止確認!!勝者チームカイザー!!!!』

ワツと歓声が広がる。長く、それでいて今までで一番危険な試合だったが、観客席は試合ステージとの間に障壁が仕掛けてあるので危険だとは思わずただ興奮したのだろう。

「……………」

だがヒカルは勝利を喜ぶでもなく無言で歩き出して、転がったメダルを拾う。

ヨルムガンドの姿と同じ、竜の様な蛇が描かれている黒いメダル。それは前に見た《Bカブト》メダルのようだったが、力を失っているのかメダル特有の生氣というか活力を感じられなかった。

「……………」

ギユツと、知らずメダルを握り締める力が強くなる。失意、悲しみ、怒り、虚無感……。色々な感情がご茶混ぜになって冷静な思考が出来ない。

「ヒカル……………」

ポンツと肩を叩かれ振り向いた側にはボロボロになりながらも立ち、笑顔を見せる（メダロットは一応とはいえ、ごく僅かしか表情を変えられないので、厳密には笑顔に見えただけが）愛機達がいた。

『終わったな。』

「……………ああ。二人ともありがとう。疲れただろう、ゆっくり休んでくれ。」

そう言ってアークとティレルを収める。余程疲れていたのだろう、メダロットに戻った瞬間に眠ってしまった。

「オイ、そいつを返しやがれ!!」

振り向いた先に喚くのはマモンだ。本当に人を殺しかねない目でヒカルを睨みつけているが、今のヒカルにはそんなものどうでもよかった。

「聞こえてんのか！？そいつは元々俺のモンなんだよ！！さつさと……！！！」

「断る。君のような男に彼を任せることはできない。苦しめるだけだ。」

きつぱりと拒絶しその場を去るべく足を進める。無論そんなことで諦めるような男が《強欲》の名を冠するわけがなく……

「返さねえってんなら力づくで……！！！」

「止めておけ、今のその男は傷を負った獣と同じだ。下手に噛みつけば逆に喰われるぞ。」

それを止めたのは意外にも敵であるはずのタイヨウ。取っ組みかかろうとするマモンの肩を押さえてヒカルを見ていた。

「しかし意外だな、私に襲いかかるとも思ったんだが……」

「今回僕が一番許せないのは土壇場まで実力を出さなかった僕自身だよ。そのせいで結果的にキララも、彼も傷つける結果になった……」

もし最初から全力で戦っていればキララがタイヨウにやられることはなかったし、アワリティアがヨルムガンドとなって暴走する前に止められただろう。なのに僕は途中まで手を抜いていた。そんな自分にタイヨウを怒る資格はない。

「・・・なるほど、いつまでも青い小僧ではないというわけだ。成長したな。」

「そつちこそ途中でビーストマスターを引つ込めてたけど何故だ？あれほどまでに僕と戦いたがっていたのに。」

「今はまだその時ではないのでな。いずれまた近いうちに決着をつけることになるだろう。いずれ、な。」

「？」

自分で決めたというより誰かの導きに従ったかのような言い方に違和感を覚えるがヒカルはそれで追及を止めることにした。今はこんなところで油を売っている暇はない、キララの元に行かなければ。

「オイッ！！俺の下僕を・・・」

「下僕なんて言ってる時点で君はメダロット失格だ。そんなんじやまた彼を苦しめる、しばらく頭を冷やして反省するんだね。」

ヒカルらしからぬ痛烈な言葉を吐き捨て走り出す。傷つき倒れた幼馴染の元へ・・・

「待てっ！！わけのわかんねえことを・・・！！」

「止めろと言ったはずだマモン。いや、芝浦ジュン。」

「!?!」

その名前を聞いてギロリとタイヨウを睨む。

「テメエがなんでその名を．．．いやそれ以前に俺をその名で呼ぶんじゃねえ!!」

「怒ったか？しかし残念ながらアワリティアを失ったお前はもはや《マモン》ではない。《悪魔》である資格を失ったんだよ。」

「なん．．．だと．．．!？」

「場所を変えようか？いつまでもこの会場にいたのではアスモデウス達が困るだろうし、何より目立つ。」

「．．．!」

そう促されて、会場から出てすぐ傍にある広間へと出る。さっきまでとは違い今度はタイヨウに殺意をこもらせた目で睨みつけ、

「調子に乗ってんじゃねえぞタイヨウ。さっきから拾われた分際でこの俺に．．．」

「調子に乗っているのはあなたよマモン。いえ芝浦君？」

どこか人を馬鹿にしたような声でそうたしなめる女性の声。それは．．．

「アスモデウス．．．!」

「あなたは予選であの坊やに負けたでしょう？それを私が恩情を与えたからここまで来れたものを今度はあの《ツインレアマダル》の坊やに敗れてアワリティアまで奪われた．．．あなたは負けたの、《悪魔落ち》よ。」

「ふざけんなっ!!そんなもん俺は認めねえ．．．俺にはまだ力がある、今度はもっと強いアワリティアを作り出してあいつらを．．．」

「本当に力が残っていると思っているの？」

驚いたように目を丸くするアスモデウス。その目は憐れみがこもっていて、

「あなたの、いえ《悪魔》の力の源は対応する下僕の持つメダルよ？あなたの場合はアワリティア、つまりメダルを奪われた今のあなたは口うるさいただの人間にすぎないの。」

そう、当然のように口にする。それを聞いたマモン、いや芝浦ジユンの顔は真っ青になり……………

「嘘を言うな！！そんなバカなことが……………！！」

アワリティアが呼び出せなくてもクリア・ワームくらいなら……………  
……………！そう考え力を込めるが何も起こらない。

「クソツクソツ！！なんでだ、なんで出てこない!？」

「だから言ったのに……………まあおめでとう これでああなたは普通の人間に戻れたのよ。良かったじゃない《呪い》から解放されてこれであなたは自由よ。」

「うるせえっ！！嘘だ……………嘘だあああああああ！！！！」

叫びをあげる芝浦に対して笑顔を見せてアスモデウスはタイヨウを手招きしながら来た道を戻っていく。と、思い出したようにポンッと手を打って、

「時間差だったから言い忘れてたけど、《悪魔落ち》した人間は今まで対応する下僕のメダロットを使って操ってた力がリバウンドして帰ってくるから ごめんなさいね、自由じゃなかったわ。」

「な、何……………?」



「運が良ければ廃人で済むわよ　じゃあバイバイ芝浦君、もう会うこともないでしょうから言っておくわね。あなたは中々の道化で面白かったわ」

ひらひらと手を振ってタイヨウを伴いながら去っていくアスモデウス。そして……

ズ、ズズズズズズ……！！！！

「ひつ、まさか……」

芝浦の周りに闇が集まる。恐らくはそれこそがアスモデウスの言っていたリバウンドで……

「いやだ……死にたくねえ、死にたくねえよお！！！」

今まで他人を苦しめ蹂躪することに快樂を見出し、《悪魔》にまで上り詰めた芝浦だったが、自らが本当に死の危険にさらされる経験はほとんどしていなかった。だからこそ今までの強気な態度もかながら捨てみつももなく足掻く。死にたくない。

「俺はマモンなんだ、強欲者なんだよ！！まだ奪い足りねえんだ、もっともつと苦しめて奪いてえんだ全てを！！なのにこんなところで死ぬ……いやだ、いやだいやだいやだ！！死にたくねえ……俺は死にたくねえよおおおおおお！！！」

しかし命乞いむなくその時は訪れ……



第47話：VSアワリティア後編・決着、そして……（後書き）

さようならマモン……というわけで試合は終わり、マモンが《悪魔落ち》してしまいました。また新たな謎を作ってしまったが……（呪いとか色々）

しかしヒカルの最強っぷりを見せようとしてまたしてもヨルムガンドのすごさが見せられなかった……。てかマジで戦闘描写書くの下手だな自分。まあメダロットのバトルシステムを小説で書くのは難しいから仕方ない、なんて言い訳っぽく書いてみますがそれでも下手なことに変わりはない……。もっと励まねば！！

さて、次は遂にベールを脱ぐアスモデウスとこの小説では全く優遇されてないりんたろう達の試合です！！忘れてる人も多いだろうなあ……。果たして二人の戦いの行方は如何に！？まあ試合前に色々入れちゃうだろうけどね。なるべく早くに上げたいなあ……

では今回はこのあたりで、では！！

イッキ「どつでもいいけど、僕の出番まだ……？」

第48話：キララの容体、そして……（前書き）

48話更新です！！11月はかなりたくさん更新していくつもりなのでよろしくお願いします！！

#### 第48話：キララの容体、そして……

「キララの容態は……？」

「命に別状はないらしいが……まだ意識は戻ってないし実際はなんとも言えないそうだ。」

キララが運ばれた先はフューン要塞内に設置された治療室だった。元々メダロットの大会であるゆえに人間の怪我人のことは気分が悪くなった程度の対応しか予定していなかったのだが、大会開始前に万が一のためにと無視できない要望があったので急遽設置されたのだ。

「これもアイツのお陰なのかねえ。」

「多分。色々動いてくれてたみたいだから……それよりもゴッドエンペラー、アトスの方は？」

「……」

元々重かった空気が更に重くなる。その沈黙が答えを表しているようだった。

「……ティンペットとパーツはもう修復不可能だそうだ。どう頑張っても無理らしい。メダルの方は……」

「……」

「……メダルをメダルたらしめている命とも呼べる《メダルコア》、そのメダルの記憶や感情、性格等を司る一番大事な部分が見られてる。メダル自体も相当やられてるし、博士でも直せるかどうか……」

聞かされた状態はキララよりも重症だった。その事実にはヒカルが唇

を噛んでワナワナと震え出す。

「僕が、僕のせいで……!!」

「あんま自分を責めんな。あの小僧から聞かされてた話よりずっと厄介で強かったんだし、それにもう一人の相手はあのタイヨウとピーストマスターだ。運が悪かったんだよ。」

「けど……」

最初から本気で戦っていれば少なくともマモンはすぐに倒せた。タイヨウは分からないが、それでもキララがこんなになる前に……

「ああ、もうウゼエなあ!!クボタ、イセキに引っぱたいてもらうぞ。今どこにいるか分かるか?」

「連絡はない……イッキという少年と行動を共にしているらしいが……」

「ああっもう!!!《停止》系の攻撃はアタシの専売特許なのに逆に《停止》させられるなんてえ!!!」

「すみません……僕らが足を引っ張ったせいで。」

「別にあんたらのせいじゃないわよ。それも含めてアタシのミス、そもそもここに連れてきたのもアタシだしね。」

《黒衣》のブラックスタッグが発動した《全体停止》によって、イ

ツキ達は《黒衣》を逃がしてしまっていた。その効果たるやイセキの言う通り《停止》攻撃のスペシャリストたるマゼンタキャットをも《停止》させ、更には《レアメダル》の力を発動しているためか、イツキ達もしばらく動けないほどだった。

「まあ捕まえてくれと頼まれてたけど、返って良かったのかもね。」  
「え？それって……」  
「気付いてた？アイツのブラックスタッグ、アンタにもアタシにも直接何かしたのって最後の《全体停止》だけなのよ。それ以外は全部メダロットにしか攻撃してない。」

確かに思い返してみればメタビーを倒した斬撃以外にはこれといって攻撃を仕掛けてはいなかった。マゼンタのときはただ躲すだけだったし、何故か最後まで普通にロボトルをしていたように思える。だがなぜ？

「あのヒカルが警戒するほどの人物、《黒衣》か……何を考えているのかさっぱり分からないわ。」  
「……」

ユウトなら、何か分かるのだろうか？あの黒衣の下に見えた自分と同じ年位の女の子。それにヤケにユウトの事を知っている様な口ぶりだったが……

「って、そうだユウト!!」

すっかり忘れていたが、元々自分はユウトと一緒にカイの元に行く筈だったのだ。色々ウヤムヤになってしまったが、今もユウトはカイがいると言っていた広間にいるのだろうか？

「そういえば急いでたんだっけ？悪かったわね、付き合わせて。」

「いえ、むしろ役に立たなくてすみませんでした。」

ペコリと頭を下げてユウトがいるであろう広間に……

ピリリリリッ！

「ん、もしもし？ああヤンマか、そっちは終わったみたいね。ゴメンこっちは……え、キララが？……うん……うん……うん分かった。今から戻るわ。」

突然の電話を切り、走り出そうとするイツキを呼び止める。

「どうかしたんですか？」

「隠してもすぐに分かるからはっきり言うわね。キララが倒れたわ。かなり酷いらしいわよ。」

「えっ!？」

「キララさんっ!?!」

パンツと扉を勢いよく空けてイツキは病室へと飛込む。



「イツキ!？」

「お前……こんなときにどこ行ってたんだよっ!？」

中には心配して駆け付けたであろうアリカやコウジ、カラスにヒカルのチームメイトが集まっている。そして、

「イツキ君……」

意気消沈し、一瞬誰だか分からないほどに酷い顔をしたヒカルが座っていた。

「ヒカルさん……?」

「試合には勝ったよ。でも結果はこの様だ。」

そう言つて顔を向けた先には隔離され、酸素マスクやらチューブやらを体に沢山つけているキララと、原形を留めているのが不思議なほどにひどく傷付いている《ピークル》メダルがあった。

「キララさんは、《悪魔》に……?」

「いや、タイヨウっていう元ロボロボ団のボスだ。《魔の十日間》でヒカルさんと因縁がある相手で、前に話した予選で俺たちを襲ってきた男だよ。」

「タイヨウ……」

代わりに答えるコウジの言葉に記憶を探ってみる。予選でコウジ達に襲いかかり、ユウト・ロクシヨウと切り結んだメダロッター。世界初のリミッターが外されたメダロッターにしてゴッドエンペラーの元となった機体でもあるビーストマスターのマスターでもある男。現役時代のヒカルにとって忘れられない最強の敵……直接会ったことはないので何とも言えないがとりあえず危険な相手だと

いうことは分かる。

「どうやらそいつもレアメダル保持者らしい。《？》メダル、聞いたことがあるか？」

「！？幻とまで言われる伝説の3枚のメダルの内の一つじゃないか……！！！」

一時期メダロット研究所でもレプリカが展示されていたことがある。絵柄と名前は一件ふざけているように思えるそのメダルは全て第一世代のメダルも、第二世代以降のメダルも全て含めてもなお頂点に立ち続ける圧倒的な力を持つ。相性の合うメダロットが、存在しないメダルだ。無論その全てがレアメダルでもおかしいことなど何も無いが、その一枚である《？》メダルがよりにもよって敵が持っている……！！！！

「どうやら敵は《悪魔》だけとは限らないらしい。いや、ヒカルさんが予選で戦ったっていう《黒衣》のことも考えるとむしろ……！！」

その先の言葉は聞かなくても分かる。タイヨウに《黒衣》、他に何人いるのかは分からないが、何故か凄腕のメダロット達の何人かが《悪魔》に加担している。その強さは今さっき身をもって知ったばかりで……！！！！

「うん、正直危ないね。さっき戦った《黒衣》のブラックスタッグになんて全く歯が立たなかったし……！！！！」

「お前、《黒衣》と戦ったのか！？」

驚愕に目を広げてイッキに詰めよるカラス達。その目は心配とかなんで呼ばなかったのかという怒りとかそんなものがいろいろこちや

混ぜになつて色々怖い……

「で、なんでそんなことになつたんだよ？アンダーシエルの連中の試合が終わつた後いきなり飛び出したのになんか関係あんのか？」

「うん……あると言えばあるし、ないと言えないような……」

「はつきりしなさい!!」

パンパンパンつとアリカ必殺の往復ビンタがイッキを襲う!!その威力たるやイッキに詰めよつていたカラスとコウジがイッキにその場を緊急離脱し、ヤンマヤクボタでさえ顔を青くするほどだった。

「さあ、言いなさい。ていうか言えっ!!」

「わ、分かつた……言う、から……!!」

ようやく解放され尻もちをつく。周りの反応から見ると、きっと今の顔は真つ赤に腫れあがつてるんだろうな……

「……一瞬昔のキララを思い出しまつた。今思えば随分丸くなつたもんだつたんだな。」

どことなく重かつた雰囲気少し軽くなる。結果オーライかな、と思つた矢先に……

「ヒカルウウウウウウウウウウウウツツ!!!!」

「へ？」

イッキが入つてから開きっぱなしだった扉からものすごい勢いで人が飛び込んできて、

「いつまでしょぼくれてんのよこのポケがあああああああああああああああああああ！！！！」  
「グフウツ！？」

イツキがアリカから受けた往復ビンタなどとは比較にならないほどに強烈な飛び膝蹴りがヒカルの顔面にヒットする！！これ以上ないほどに綺麗に入ったその一撃にヒカルは吹き飛んで床に転がりしばらく痙攣した後、動かなくなった。

「何だ！？何が起こった！？」

「え？この人確かヒカルさんのチームメイトの……………」

「最近の女は恐ろしいんだな……………カモメは普通だったのか。」

三者三様の感想を漏らす中、おずおずとイツキは中に飛び込んできた人に尋ねる。

「い、イセキさん？今のはちょっと……………」

「何、文句ある！？」

「いえっ無いです！！」

恐ろしい……………アリカやカリンとはまた別種のこの恐怖。キクヒメに似てるって？いやいやそれは間違いだ。そんなもんじゃないぞこの人の恐ろしさは……………！！

「にしてもイセキ、今のは流石にヤバいつて。ほら動かなくなっせんぞヒカルの奴。」

「大丈夫よ。こいつだって色々修羅場潜ってんだしこんなんで死にはしないでしょ。」

「いや、今のは傍目から見てもかなり危ない一発だったんだが……………」

・・・」

「しゃあないわねえ・・・じゃあ起こすわよ。」

ハアと溜め息を吐きながらヒカルの側に腰を下ろす。そして、

「おらっ起きろヒカル!!」

これまた強力な往復ビンタで思い切り引っ叩いていく。ヤンマ達はそれをやれやれと見ていたが、イツキたちは全員同じことを思っていた。

(( ( (この人怖い・・・)) ))

「さて、元気に目覚めたわねヒカル!!」  
「むしろ死にかけてただけど・・・」

イツキ以上にひどい顔になったヒカルがそう言うのがイセキは全く気にしていない。むしろ清々しい顔だ。

「まあ私も殴るだけ殴ってスッキリしたし、結果オーライじゃない。」  
「全く君は・・・で、どうだった？」

「どうもこうも、逃がしちゃったわよ。どうやら悪い予感当たっ

たみたいだったから、それは未然に防げたけど。」  
「そっか。」

報告を聞いた後また黙りこくってしまう。やはりまだヒカルの顔は晴れていないらしい。それを見てイセキはに、面倒くさそうに頭を掻く。

「ったく、試合に勝って勝負に負けたって感じね。見ててムカつくくらいの落ち込みっぷりだわ。」

「ゴメン……………」

また沈黙。なんとも重い空気に再びなってしまった。

「で、あんた何？慰めの言葉でもかけて欲しいの？」

「……………」

「叱ってほしい？それとも自分の無能っぷりを罵ってほしいの？お生憎様、あたしにはそんな風に甘えてるアンタに付き合っつもりなんてないの」

「……………っ!?!」

その言葉に場の空気が割れるように変化する。

「そうやって『僕のせいだ…………』なんて塞ぎこんじゃって。あんた酔ってるんでしょ、今の自分に。」

「なん、だって……………!?!」

「仲間を守りきれなかった悲劇の主人公…………そんなところね。そうしてれば誰かが何かしてくれるとでも思ってるの?」

「そんなつもりじゃ……………」

「そんなつもりだったの!?!いい?アンタはキララの事を悲しんで

自分に怒ってるんじゃない、それに甘えて悲劇のヒーローを気取ってるだけ!!」  
「っ!?!?」

ヒカルはバツと顔を上げてイセキを睨みつけるが、すぐに自嘲するような笑みを浮かべる。

「そう、かもね。僕は……」

「ヒカルさん……」

「少し、外の空気を吸ってくる。」

それだけ言い残してヒカルは部屋から出て行った。

バタンツ

「ふう、つたく面倒くさいったらありゃしない。」

「流石に言い過ぎなんじゃねえ?俺の目から見ても別に悲劇のヒーローなんて気取ってる様には見えなかったし。」

「アタシだってそんな風には見えてないわよ。けどこうでもしないとアイツずつとこの部屋に籠りつきりで下がってくただけでしょ。少し頭冷やさせないかね。」

そう言っただけで縮こまっていたイッキ達に目をやる。流石にあの空気が重すぎて耐えられなかったらしく誰も口を開かず、カラスでさえ萎縮してしまっている。

「で、坊や達はこんな所に居ていいの?次の試合はもう始まっているみたいけど。」

「あつー!!」

そういえばそうだ。次の試合は二回戦最後にしてりんたろう達の試合だ。イツキ以上のロボットルバカにして、以外にも多くの人々にその名が知られている少年でヒカルの追っかけだ。その性格が災いして色々な罠に引っ掛かることもあるが、彼もまたイツキにとって大事な友達で強力なライバルだ。だが……

「おいイツキ、りんたろう達の相手って……」

「うん、ヒカルさんが会ったって言う《悪魔》だ!!」

それに恐らくは先程出会ったあの少女も……

「あの坊やの実力がどの程度かははっきりとは分からないけど、まあ恐らくはアレを使いこなせるだけの力はあるだろうから、私やキララみたく戦うことはできるとは思っけどね。ただ相手は生粋の《悪魔》だし、ヒカルが倒したのと違って実力も未知数。行ったほうがいいんじゃない?」

「は、はい!!」

三人に一礼してから素早く会場へ向かうべくイツキはアリカ達とともに飛び出した。



「試合は!？」

「まだ終わってはいないようだが……………」

それは会場の熱気が雄弁に物語っている。この様子だと今はいいところなのか？

「つて、嘘っ!？」

「どうしたんだよアリカちゃん……………つてマジかっ!？」

ステージを見た瞬間に二人揃って驚きの声をあげている。その目は驚きに見開かれており、口もパクパクさせている。だからイツキ達もそちらに目を向けると……………

「へっ!？」

「バカな……………!!！」

目の前に広がるのはメタビに酷似した姿を持つりんたろうの愛機、KBT型メダロット・カンタロスと元メダロット部の部長でりんたろうの師匠先輩でもある鮫島ハスケの愛機、シアンドッグのドギーが敵チームのメダロットを床に沈めているという異常な光景。そう、波島りんたろう率いる《メダロット部》はアスモデウス達相手に優位に試合を進めていたのだった。

## 第49話：りんたろう出陣！！

「ちょっと待て！？どうなってんだ一体！？」

「……状況を整理しよう。現在は第二試合最終戦が行われており、戦っているのは波島りんたろう率いるメダロット部とアスモデウス率いるチームアスモデウスだ。無論このアスモデウスは他人の空似でも名前が偶然一致しているわけでもない、紛れもない《悪魔》である本人だ。その実力は未知数だが、予選にてヒカルを苦戦させたという。そしてそんなアスモデウスとともに戦っているのが、同じく予選にてヒカルを苦戦させ、先程自分達と戦い手も足も出なかった少女《黒衣》。今はまた深々とフードを被り直しているため素顔は分からないが、これも本人だろう。どうやら二対二のロボットらしく、戦っているのはりんたろうのカンタロスとハスケのシアンドッグ・ドギー。どちらもレアメダルを搭載されていない普通のメダロットのはずだ。

対する彼女達が操るメダロットもブラックスタッグと恐らくはアスモデウスの専用機。片や《悪魔》で片やヒカルが苦戦し、自分達がボロ負けした相手。だと言うのに……

「なんでりんたろう達が優勢なんだ！？」

そう、《悪魔》達を相手にしているのにりんたろう達が優勢だと言う事実。りんたろう達を過小評価するわけではないが、普通では考えられない有り得ない光景だ。

「いや、確かに『戦えるかもしれない』とは言ってたけどよ……

「あたし達さっきのヒカルさんの試合見てるしね。正直この状況は

予想外だわ。」

カンタロスもドギーも傷だらけではあるが、そう大したダメージは受けていない。だが相手の方は脚部が破壊され、かなり追い詰められている。何故かブラックスタグは傍観するように後ろで控えているのが気になるが、後少しでりんたるう達の勝利だ。

「なんだ、心配するだけ無駄だったわねイツキ。」

「……………」

「イツキ？」

アリカの言葉にも何も返事を返さない。イツキはただ黙ってジッと試合を眺めている。

「どうしたのよ。もう勝負は見えだし、別に心配するようなことは・

……………」

「……………おかしい。」

「え？」

静かに、だがはっきりとそれを口にする。その目は真剣で、

「りんたるうは強い。でも有り得ないんだ。イセキさんが言っていたアレっていうのが何かは分からないけど、それでもあそこまで優勢を保てるわけがない。」

「でも現に勝ってるわよ？あんなにやられてる状態で『ワザと本気を出してない』なんて言われても説得力ないし……………」

「それだ。」

今度はカラスだ。アリカの言葉に何か思い当たる節があるらしく、イツキに続ける。

「ヒカルさんが言ってたんだが、あの女の機体は陽炎の様に現れて陽炎の様に消えたらしい。戦ってる時も何か違和感があったとも言ってたな。」

「陽炎……違和感……手を抜いている……まさか!」

だとすれば、今戦っている相手は、

「やはりそういうことか。クソッ、こっいつときに限ってなんであのバカはいない!」

カラスも同じ結論に達したらしく、唇を噛み苦々しく唸っている。もし二人の考えている通りだとすれば、この戦いは……

「ハッ《悪魔》だか死神だか知らないが、大した事ねえなあ! そうだろ、りんたろう!？」

「燃え足りないだぜえ……」

イツキ達の心配をよそに、試合している二人は不満タラタラだった。実は抽選が終わり二回戦へと駒を進めるチームが全て決まったとき、彼らはイツキから次の　つまり今戦っている相手だが　相手に　ついて聞かされていたのだ。曰く、次の相手は《悪魔》と呼ばれる危険人物達の一人であり、あがたヒカルでさえ苦戦した相手だという。使う機体も企画外の存在で、しかも自分達の相手は実力も未知数だというのだ。そしてもう一人、ブラックスタッグを操る謎の人

物……危険だなんだと聞かされてはいたが、そんな相手と戦えると聞いて、特にこの二人は喜んだものだ。もしそいつらに圧勝したら、俺達ヒカルさんを超えたんじゃないかね？なんて考えまで持つてしまうくらいに期待しちゃってたのだ。だというのに……

「歯応えねえっ！！イツキのヤツ騙したのかよ!？」

「燃え足りないだぜえ……」

ハスケは叫び、りんたろうは戦意喪失している。本当にこいつらはあがたヒカルを苦戦させたのか？確かに弱くはないが精々が一回戦で戦ったコクエン親衛隊もとい、メイド少女ファンクラブの精鋭レベルだ。二年前までならともかく、今となっては相手にならない。もう一体のブラックスタッグに至っては戦うそぶりさえ見せていないし……

「アイツが嘘つくなんて考えられないんだけどなあ……まあ、いいか。これでアイツにまた一步近付いたってことで。」

歯応えはなかったが、なんにせよこれで準決勝進出だ。後一回勝てば決勝、イツキかヒカルと対決できる。

「さっさと終わらせるか。りんたろう、止めさすぞ。」

「あああ……」

「完全にやる気なくなってるな……じゃあねえ、んじゃあドギー、頼む。」

『YESマスター。』

ドギーは左腕の照準をキッチリ敵リーダーの頭に合わせて……

バンッ！！

確実に撃ち抜いた。これで試合終了だろう。

「終わったな。さあて、後一勝で……………」

その瞬間だった。

「部長危ないっ!!」

「なに……………」

ザシュツ!!

『が、は……………!!』

勝利を確信し、目を離れた直後だった。ドギーの頭が、鋭く長い槍の様な物に貫かれていた。

「ドギー!?!」

『大……………丈夫です。まだいけます……………』

幸か不幸かドギーの頭を貫いた槍のようなものはやや右にずれ過ぎていたため、機能停止するまでにはいかなかった。だが致命傷には違いなく、メダロツチを見れば危険だということはすぐに分かった。

「なんだ……………いつたい誰が?」

刺された方向から逆に追っついていき、その犯人を探る。それは……………

「なっ、お前なんで……」  
「ふふっなんでですって？可愛いわねえ あたしのルクスリアはこの程度じゃやられない。不死身なのよ」

その犯人はドギーに頭を撃ち抜かれ、確かに倒したはずのアスモデウスの愛機・ルクスリアの右腕から伸びた爪だった。頭にある筈の銃痕はなく、破壊された筈の脚部も再生していた。

「まさか、仕留め損ねてたのか……！？確かに頭パーツは破壊されてねえけど……けどなんでだ！？あの状態で頭パーツが破壊しないなんて！」

「だから、不死身って言ったでしょ？ほら、ここからが本番よ！」

それが合図となり、ルクスリアが駆ける！！同じ《悪魔》といえど、マモンとアスモデウスの機体は正反対の性質だ。アワリティアはその手からビームのような紅い光を放出し、敵を粉碎しつつ近付いてきた敵にはカウンターを取って攻めるような後の先を得意とする。イツキが以前戦ったベルゼブブの愛機グラは、その手に持った巨大な鉄塊とその巨体を駆使して相手を押しつぶす鈍重なパワータイプだった。だが、このルクスリア、

ス      ツ！！

まるで舞うように、滑るように無音の動きで相手を翻弄し、

シュツ!!ギヤイイイインツ!!!

『ツ!!』

その両腕から伸びる槍のような爪で静かに、それでいて鋭く力強く貫く!!!

『グウツ!!』

「へえ今度は防いだんだ。じゃあもつと早くしないとね!!」

ス

ツツツ!!!

『グッ………舐めるな!!』

ドンドンツドンドンツ!!

一方的にやられる展開を何とかしようとは何とかライフルを当てようと連射するが、翻弄するような動きに対応できず当てることができない。

「速いってわけじゃねえ………なのにこの動き、上手く対応できねえ………!!」

ロクシヨウやスミロドナツトのような驚異的かつ圧倒的な速さとは



また違う。こちらの動きと呼吸に合わせて滑るように間合いを詰めてくる。正に蝶のように舞い、蜂のように刺す動きだ。

「テムエ……こんなに強いくせに何で手なんか抜いてやがった！！」

「あらあら、買い被りよ。私はただお互いが喜ぶ様に動いていただけよ。」

「お互いが喜ぶように?」

つまりそれは……

「俺たちに一度ぐらいは勝ったと思わせてやるうってことか!？」

「嬉しかったでしょ?」

「ふざけてんじやねえぞテムエ!！」

わざと相手に勝たせる、八百長。それは真剣に戦うメダロッターに対する最低の侮辱だ。一度ぐらいは勝った気にさせてあげよう?冗談じゃない。

「勝った気に、じゃなく勝ってやるよ。お前を倒して俺達が勝ってやらあ!!--ドギーイイイイ!!--!」

無論ドギーとてこのような侮辱を受けて平然としていられるほど温厚ではない。マスターの思いに応えるべく、ここからは全身全霊で目の前の相手は雑魚ではなく実力の一端しか見せていない謎の敵。それを認識し、

ドンドンドンドンドンドン!!

狙い撃つ！！それもルクスリアに当たるとはなかったが、しかし動きは何とか掴めてきた。

「へえ、さつきよりもいい動きね。壊し甲斐がありそうだわ」

それを逆に喜び、アスモデウスはニコリと笑う。それは獲物を品定めする狩人の眼、今この瞬間ハスケとドギーは正式にターゲットにされたのだ。

「ルクスリア。」

指示を受け、更に速度を上げてドギーに詰め寄るルクスリア。またも一種で呼吸を合わせられ、その魔手から爪が伸び……………

ギヤイイイイツ！！！！

「え？」

「そう何度も同じ手を食うかよ。捕えたぜ！！」

肉を切らせて骨を断つ。なんとドギーは暴発覚悟で、ルクスリアの爪を右腕の銃口で捕えたのだ。無論無事で済むはずはなく右腕は悲鳴をあげているがしかし、それに見合うだけの成果はあった。

「やれっドギー！！！」

『喰らえッ！！』

ドシューッ！！

至近距離から一番威力の高い頭のライフルを叩き込む！！正確に敵の頭を狙って放った一撃。今度こそ仕留めた！！はずだった。

「残念外れ」

「『っ！？』」

バアアアアアン！！！！

『グウツ！！』

「ドギー！！」

有り得なかった。至近距離から、確実に仕留められる位置から放ったライフルが、あろうことかルクスリアの頭をすり抜けたのだ。そしてそのまま突き刺されたままだった右腕はついに耐えきれず破壊された。

「嘘だろ……すりぬけだど！？」

「だから不・死・身、なのよ！！」

ズシャシャシャシャ！！！！

さらに追い打ちをかけるようにその鋭利な爪を今度は刃のように展開し、ドギーの体を引き裂く！！その鋭さは、一撃で腕を斬り落とし、脚部を破壊する！！

「なっ!!」

「今度はこっちの止めね。」

そして第二刃が振り下ろされ……………

ガシィッ!!

「!?!」

「間に合ったぜえ!!」

後数センチ、というところで、りんたろうの愛機・カンタロスはドギーを襲った爪を掴み取る!! 間一髪のところまでドギーは機能停止を免れたのだ。

「部長大丈夫か?」

「大丈夫じゃねえだろボケっ!! つーか何やってたんだよお前。相手が本気になつた後も何も行動起こさねえし。」

そこが疑問だった。いつもなら誰かが何か言う前にすぐにロボットをする男が今回に限ってはしばらく傍観していた。今回は相手の力量が期待外れでやる気が起きなかったようだが、そもそも普段ならそんなこと気にしないし、今のように圧倒的な実力を見せつけられただなら尚更だ。

「すまねえだぜ部長。でもなんか変な感じがしてて気になって動けなかつたんだぜ……………」

「変な感じ?」

「……………」

ヒュン……………パシィッ!!

「一度ならず二度までも……………しかももしかしてこの子……………」

「部長とドギーは下がっててくれ。後は俺とカンタロスの出番だぜ  
!?!」

一撃で深手を負わされたドギーとハスケの前に立ち、りんたろうとカンタロスがアスモデウスの前に立ちはだかる。ハスケも足手まといと分かっているためりんたろうに頷いて後ろへ下がった。

「アスモデウス。」

「あなたも下がっていいわよ。ブラックスタッグの力はいらないわ」

「……………分かりました。では私も下がっているとします。」

アスモデウスの背後で、じっと戦況を見守っていた《黒衣》もまた、後ろへと下がる。相変わらぬ傍観を続ける事にしたらしい。

「なあ、そっちはやらないのか?」

「ええ。私のことは気にせず続けて結構ですよ。」

「そうか……………」

その答えは不服だったらしく残念そうに肩を落とす。

「じゃあこのお姉さんに勝ったらロボットしてもらっせえ!?!」

すぐに元気を取り戻し、カンタロスが走る！！目標はルクスリアだ。

「行っけえええええつ、カンタロス！！」

メタビーそつくりのカブトは、その身軽さを利用した軽快な動きでルクスリアに迫って行く。迎え撃つルクスリアも先程と同じ、舞う様な動きで翻弄し、今度は左腕を……

パシィッ！！

「三回目も！？」

「ふふん。行くだぜえ！！」

「ダゼエ！！」

またもや完璧なタイミングで攻撃を掴み取ったカンタロスは、遂に反撃に移る！！長い爪を掴んだ状態からルクスリアを振り回し、身動きできない様に空中へ投げ飛ばす。更に自身も飛び上がり、身動きできないルクスリアに強烈なアッパーを叩き込み、更に地面に向けてライフルを放ち、その反動で更に浮かび上がり、今度はルクスリアの上から至近距離でのガトリングを撃ち込む！！

「グッ……」

「まだまだこれからダゼエ！！」

ガトリングを撃ち込まれ墜落していくルクスリアを空中で捕まえ、その状態から上にミサイルをぶっぱなす！！それにより加速がつき、更にルクスリアの背中に蹴りを入れて再び自分は飛び上がり、ルク

スリアは更に急降下していく。しかも時間差で空に放たれたミサイルはルクスリア目がけて落ちていき……

『コイツもおまけダゼエ!!』

カンタロスの体が光り、その砲塔に力が集まる。メタビーと同じそのメダフォースの名は……

「『《一斉射撃》!!』」

当然ルクスリアに回避行動がとれる筈がなく、まともにその一撃を浴びた。

ズガアアアアアンツツツ!!

メダフォースの余波で爆風が広がり、ルクスリアの姿が見えなくなる。が、カンタロスは警戒を緩めずじつと煙が晴れるのを待っていた。

「まさかルクスリアがここまで押されるとはね………それにしても爪を三回も掴み取るなんて、どんな手品かしら?」

「んー………そんなの分かんないぜ。なんとなく感じ取った勘だぜ!!」

「勘、か………ふふ、レアメダルでもないのにまさかこんな面白い子が見つかるとはね。やっぱり来てよかったわね。」

「???」

いきなりクスクスと笑いだし、りんたろうは訳が分からない。だがはつきりと言えることはアスモデウスにとって手ごたえのある獲物と認定されたということ。そして煙が晴れ、案の定ルクスリアも無事だった。あれだけの猛攻を受けたというのにほとんどダメージらしいダメージもないまま。

「うわあ、ちょっとショックだぜえ………仕留めたとは言わないけど、確実に一個はパーツ破壊できたと思ったのに………」

「気にすること無いわ、私の愛機はちょっと特殊だから。それよりもあなたたち面白い。だからちよつとだけ本気で戦っちゃおうかしら？もちろん真名は出さないけどね」

「望むところだぜえ!!」

今までも凄まじかったが、更に本気を見せてくれるという。これを喜ばずにいられるだろうか？このときもしイツキ達ならば、危機感を覚え本気を出される前に決着をつけようとしたかもしれない。だがりんたろうはそこまで《悪魔》に詳しくなかったし、なにより強い相手と戦えて興奮しないほど冷めてもいなかった。

「行くだぜえカントロス!!」

『ダゼエ!!』

そしてりんたろうが指示を出し、カントロスは駆け出した。



## 第50話：ルクスリアの力、錯乱する二人

カンタロスとルクスリアの攻防は続いていた。流れる様に刺突と斬撃を繰り返してくるルクスリアに対して、自らの勘を頼りに全ての攻撃を防ぎ、且つ猛攻を仕掛けるカンタロス。傍目にはカンタロス優勢に思える状況だが、カンタロスの放つ攻撃は未だに決定打どころか対したダメージも与えていない。

「やっぱり無理だ。りんたろうは強いけど、《悪魔》相手には……」

普通のメダルでは《悪魔》の操る機体どころか、その先兵たるミュータントメダロットにも勝てない。それはユウトの談だが、実際にカンタロスの攻撃がルクスリアに効いていない以上、事実なのだろう。

「クッ!!」

「待てイッキ。どこに行くつもりだ？」

痺れを切らし、駆け出そうとするイッキの肩をカラスが押さえる。その目は冷静だ。

「決まってるじゃないか!!この試合を……」

「止めるか?しかしその場合勝つのはアイツらだ。シアンドッグがダメージを受けすぎて。判定結果ではそうなるんだぞ?」

「でもっ、このままじゃりんたろう達が……!!」

今はまだ互角の様に見えるが、いつまでもこのままなわけがない。いつ、ルクスリアの魔手がカンタロスを引き裂くか分からないのだ。

恐らく《悪魔》のメダロットや《レアメダル》の力を解放した状態のメダロットによる攻撃は、喰らった相手のマスターにも影響を及ぼすのだろう。つまり、このままではカンタロスだけでなくなりんたろうも……」

「俺がアイツらなら、例えどんな理由があろうと試合を途中で止められたらお前を許さないだろう。これはエリア内にいる者達だけの真剣勝負、外部から何かするのは侮辱以外の何物でもない。」

「けど……っ!!」

「分かってる、誰も助けるなどと言わないさ。だがまだその時じゃない。俺達が止めに入るとしたらまだ後だ。」

今はまだ助けに入るべきではない。カラスはそういうがしかし……

「それにお前はアイツを過小評価しすぎだ。カンタロスの攻撃が通じていないのはあの機体の能力によるものであって、カンタロスが《レアメダル》を搭載していないからじゃない。」

「……」

「だがまあ、急いだ方がいいのは確かかもな。とりあえずいつでも助けに行ける場所に移るぞ。コウジたちはどうする？」

「一緒に行くぜ。数が多いに越したことはないしな。」

「アタシはここにいるわ。足手まといになっちゃうし。」

各々の返答を聞き、カラスは頷く。

「行くぞイツキ。場所を移さない事には助けに行く事も出来ないからな。」

「分かった。」

そして三人はアリカを残してその場を後にした。

「カンタロス、そこだぜえっ！！」

「オオオオツツ！！！」

遂にルクスリアの動きを見切り、カンタロスはルクスリアに強烈な右ストレートを叩き込む！！文句なしに入った一撃に加え、更に至近距離からライフルも連射する。今度こそ決まった……

「っ！！！」

が、カンタロスが撃ち抜いたルクスリアはグニヤリと空間ごと歪ませながらその姿を消してしまう。まるで最初からいなかったかのよう。その姿はかき消えてしまっ……

「カンタロス、上だぜえ！！」

上からカンタロス目がけて急降下してくるルクスリアに、りんたろうは反応し、何とか防御に成功する。が、先程までと違って反応がやや遅れてしまったために、威力を殺しきれず防いだ右腕のパーツが音を立って壊れてしまった。

「イツキの言ってた通り流石だぜえ……」

「そういう貴方も中々のものよ。まさか本当に勘だけでルクスリアの動きを読んでいるなんて驚きだわ。」

確かにりんたるうもカントロスも純粋な勘だけでルクスリアの攻撃を躲している。だが、ルクスリアの陽炎の様に消える技を破らない限りりんたるう達に勝機はない。

「うーん何か変だぜえ……」

そんな中りんたるうは何を思ったのか、突如考え込んでしまう。

「攻撃が通用しないと言うより、なんだかまるで俺達は最初から戦っていないみたいな……」

「……」

その言葉がスイッチだった。

「あ、あああああああああああああああああああああああああああああああつっつ!!!!」

「っ、何だ!？」

「この声……カントロス!？」

突然響いてきたカントロスの絶叫。その声にただならぬものを感じ、

試合場へと急ぐ。そこで見たのは……

「カンタロスが……錯乱してる？」

「ルクスリアの方を見ているわけでもない。だがあの状態はただ事じゃないな。」

口調こそ冷静だが、イッキとカラスの表情は固い。更に最悪なことに……

「いやだ……カンタロス、皆、いやだ……!!」

ガクガクとりんたろうまで震え始め目が虚ろになっていく。その目はカンタロスもルクスリアのことも見てはおらず……

「ごめんなさいね、本当はもっと遊びたかったのだけれど……  
・貴方危険だわ。下手をすればレアメダル使い達以上に。だから……  
……」

『うわあああああああああああああああつっっ!!』  
あああああああああああああつっっ!!』

「いやだ……いやだ……いやだ……!!!!皆、止めてくれ……皆を……!!!!」

「夢幻の中で眠りなさい、永遠に。」

「りんたろうっ!!カンタロスっ!!」

離れた所からハスケの声が響く。だが彼の言葉でさえ、錯乱している二人には届かない。

「お前……あいつらに何をしたっ!？」

「彼らは後一步のところ私たちの能力について気付きかけていた。こんなところでルクスリアの能力を知られるわけにはいかないの。だから悪いけど彼らには夢幻の檻に閉じ込めさせてもらったわ。」

穏やかなセリフとは真逆の、ゾツとするような声音でアスモデウスは平然とそう口にする。しかもルクスリアをカントアスの前に構えさせて、

「待て……お前何する気だよ!？」

「なにして壊すのよ。跡形もなく、ね。」

ザシュウツツ!!!

言うが早いかルクスリアに指示を出して、錯乱して戦える状態じゃないカントアスを一方的に攻撃していく。もう先程までのような舞い踊るような動きじゃない。ただただ敵を破壊することだけを考えた殺戮の攻撃だ。その爪が振り下ろされる度にカントアスの体は吹き飛び、パーツが砕けていく。このままでは……!!!

「クソッ、早く止めなきゃ！！メタバィッ！！」  
『分かってる！！さっさとあいつを……………！！』

流石にこれ以上はりんたろう達が危ない、だからこそ助けに行こう  
と……………

バチッ！！

『！？』

「これって……………」

メタバィが試合場へと上がろうとした瞬間、障壁が発生してメタバィを阻む。部外者を試合場へ上げないための結界装置が発生しているのだ。

「こっついう時に限って……………！！メタバィ、遠慮はいらさない。破壊してくれ！！」  
『言われなくても！！』

ドンドンドンドンドンドンッ！！！！ズガガガガガガッッッ！！！！

『ダメだ、ビクともしねえ！！』  
「下がってる！！G・Oデス！！」  
『……………』

キキキキキッツッ！！！！

メタビーの乱射に続き、G・Oデスのサクリファイスが放たれる！  
だが……

「ダメだ……今の俺達の力では、コレは破れない……」  
「！！」

「そんなー！！」

障壁はビクともしない。当然だ、元々この障壁はとある人物が中にいる敵を外に出さないよう幽閉し、且つ中で起きた攻撃の余波が外に出ないようになっている。イツキ達は知る由もないが、この障壁は例えタイヨウのビーストマスターでも、レアメダルの力解放状態のメタビーによる《一斉射撃》でも破る事は出来ないのだ。

「メタビーでもG・Oデスでも駄目なのか！？ならスミロドナツドのクラファイティモードで……！！」

「無駄だ。元々スミロドナツドは典型的なスピードタイプ。クラファイティモードになったとしてもこの障壁を破る力があるとは思えない。」

「ならどうすんだよっ！？」

コウジの言葉にカラスは悔しげに黙りこむ。もはや手詰まりで有効的な手が無いのだ。そしてこの間にもカンタロスは攻撃を浴び続けており……

「もう止めるルクスリアッ！！クソッ通してよっ、カンタロスッ！！りんたろっ！！」



『この野郎！！開けてんだよっ！！』

無駄と分かっているにも攻撃を止めることは出来ない。だがどんなに頑張っても障壁には穴すら空く事はなく……

「退いてろ。」

「……え？」

「りんたろう！！しゃんとしろってんだっ、クソッこのままじゃあ  
カントロスが……！！！」

「止めてくれ……もう、もうそれ以上は……  
っ！！！」

既にカントロスは頭が胴体についているだけの状態になっており、ハスケの必死の声もりんたろうには届かない。カントロスのように絶叫しているわけではないが、むしろそのことが逆に不気味でならない。愛機であるドギーも既に戦える状態ではないし、ハスケはこの無力さが許せなかった。



「ルクスリアッ!!」

ガキイイイイツツ!!!

突然、ルクスリアを襲った風の刃をカンタロスに向けて放つはずだった腕で何とか防ぐ。ハスケの叫びでわずかにでも意識が彼に向いたせいだろう、でなければ今の一撃で仕留められていた。

「今のは、まさか………!!?」

この試合で初めてアスモデウスの顔に緊張の色が見える。不意打ちとはいえ、一撃で《悪魔》の機体を破壊できかねない威力を持った斬撃。そんなものが使えるのは………

『やれやれ、刃の使い方が分かっていない。死にかけの機体を屠るのにそれほどまでに巨大な剣は必要ないだろう?』

「全くだ。つーか第一にボロボロの奴をここまで痛めつけるなんて話だよ。」

「っ!?!」

いつの間にか純白の剣士とマスターである飄々とした少年が、ルクスリアの前に立っていた。どことなくつまらなそうに呟くその姿はやはり想像していた通りで………

「ヒーローは遅れて現れる、ってね。」

神田ユウトとその愛機ロクシヨウが、障壁を破り姿を現した。

第50話：ルクスリアの力、錯乱する二人（後書き）

良く分かんないバトルでしたね……。……。なんか自分で書いてる中で一番下手な気がします。ちなみにユウトたちはなぜ障壁を突破できたのかという問いは次で明かされます。

第51話：二回戦終了、カンタロスは……………

医務室にて、りんたろうはベッドで横になっていた。ルクスリアから何を見せられたのか、それは本人にしか分からないがかなりのショックを受けている。だが命にも精神にも異常はないらしく、これからの生活にも支障はないらしい。カンタロスも適切な処置のお陰か、前の試合でのゴッドエンペラー程は酷くなく無事だった。

「ありがとうユウト。おかげでりんたろう達が助かったよ。」

「礼なんていらねえって。俺はただアイツの居場所聞くんじいでに助けただけだし。あの状況を利用してもらったただけだ。」

ぶつきらぼつにユウトは言っつぽを向くが、イツキは感謝の念が消え得ることはなかった。あの時、ユウトとロクシヨウが表れてあの障壁を斬り裂いてくれなかったら。そう思うとゾツとする。

「俺からも礼を言わせてくれ。うちの仲間を助けてくれてありがとうな。」

「いや、だから本当お礼はもういいって。むず痒くて仕方ないし、何より一番の功労者は……………」

時間は試合まで遡り……………

「ロクシヨウ、思いつきり殴っていいぞ。」

『ああ。この程度の輩、やはり左腕で十分だしな。』

ヒュツ……！！ドゴォ！！

左腕から伸びるハンマーがルクスリアの体を捉えて吹き飛ばす！！いきなりの出来事でルクスリアは対応出来ずに攻撃をモロに喰らい、更にロクシヨウはメダフォースを一瞬でチャージし追撃をかける！！が、

『オイオイ、別のチームの試合に加勢するのはルール違反だぜ？なあっ！！』

今までただ傍観していただけのブラックスタッグが、驚異的な速さで肉薄し、乱入者たるロクシヨウに襲いかかる！！

ガキインツツ！！

『貴様か、我が影というのは。』

『まあそういうことになってるな。けどな、俺は影でも偽物でもない。俺は俺だ！！』

シユツ……！！キンキンキンキンツツツ！！！！  
ザザザザツツガキイン！！

互いの右腕に装備されている剣を交え、目にも止まらぬ速さで切り結ぶ白と黒の剣士。互いにまずは小手調べ、実力の半分も出しては

いない。だが、それでもこの速さは異常だ。相変わらずの高速の技を放つロクシヨウは流石だが、その剣速に難なくついていけるブラックスタッグも凄まじい。一方が隙をついたと思えば、もう片方も恐ろしい速さで斬り返してくる。技も力も互いに互角だからこそ見られる光景、だがそれは簡単には勝負がつかないことを意味している。互いのマスターも無論それを承知しており、

「そこまでロクシヨウ。相手を間違えるな、少なくとも今やるべきことはそいつの相手をするんじゃない。」

「貴方も下がりなさいスタッグ。確かにこの試合に全く参加していないから強敵を前に疼くのは分かるけど、今回の相手は彼らではないのだから。」

それぞれの愛機に下がれと命じる。二機は互いにしばし睨み合っていたが、

『……そうだったな。すまないユウト。』

『マスターの指示じゃあ仕方ねえ。命拾いしたな。』

素直に従いそれぞれ後ろに下がる。それを見届け、ユウトはアスモデウスに向き直った。

「久しぶりだね、お姉さん。数年ぶりだ。」

「……強くなったわね。マモンを倒した時のことは知っていたけど、想像以上だわ。まさかビーストマスターでも破れないあの障壁を突破するなんて……」

「あいつとの戦いを知ってんならロクシヨウの性質は把握してるだろ？あんなもん力出しゃあ簡単に突破できる。」

顔こそ笑っているが、お互いに目は笑っていない。ユウトは狙いこ



そ違えど憎き敵を前にしているわけだし、アスモデウスはユウト達の想像以上の強さに珍しく緊張していた。が、それに構わずユウトは続ける。

「で、さっそくで悪いけどそろそろ止めてあげてくんないかな？ さつさと能力解いてよ。」

「貴方の言うことを聞く必要はないわね。もし言うことを聞かせたのなら……」

「私達を倒せつて？ アンタバカか？ 悪いけど今の俺たちはあんたら程度に敗れるほど弱くはない。嬉しいことにどうやらロクシヨウとルクスリアの相性は最高みたいだしな。アワリティアより楽に勝てる。」

それは事実なのだろう。元々ルクスリアとアワリティアでは馬力が違う。ユウトはもしアワリティアを使っていたのがマモンではなくもっと違うヤツが使っていたら勝てたかどうか分からないと考えている。アスモデウスもそれが分かっているらしく、反論をしようとはしない。だがルクスリアはいつでもロクシヨウを襲える態勢をとっていて……

「だから止めとけて。もう《悪魔》で俺が勝てるかどうか分からないのは二人だけ、その中にあんたらは入ってない。まあどうしてもってんなら相手になるけど……」

アスモデウスは無言でユウトを睨みつけるが、ユウトの方はどこ吹く風だ。そのまましばらく時間が過ぎ、埒が明かないと分かったのか何かをルクスリアに指示して……

『……はて？私は……って神田選手、何やってるんですか！？』

「目を覚ましました？だったら試合終了のコールかけてください。もう決着はついてる。」

まるで今ユウトの存在に気が付いたかの様にうるちはびっくりしている。そう、実際にうるちはユウトの存在に今まで気付いていなかった。ルクスリアがかけた能力はりんたるう達だけでなく、この会場内のほぼ全ての人間にかけられていたのだ。これによりうるちは本来なら止めに入るタイミングでも試合を続けてカントロスをつたえ殴り出来ていた。

『え、試合は……いつの間に！？』

「いいからコールして下さい。さっさとしないとこのお姉さんがカントロスを再起不能にしかねない。」

それは誇張でも何でもない事実。現にりんたるうの方は痙攣が収まり、今はただ眠っているだけの状態だがカントロスは違う。既に叫びこそあげてはいないが、胴体だけの体は激しく痙攣しており、むしろ危険な状態だ。恐らく人間にかけた場合と違い、メダロットにかけられた場合はかけた本人を倒さない限り、あるいは戦いに決着がつかない限り消えないのだろう。そのことによろやく気付き、うるちが慌てて頷く。

『わ、分かりました！！メダロット部リーダー機戦闘不能とみなし、勝者・チームアスモデウス！！』

うるちの声が響き渡りようやく試合が終了する。不本意な幕引きとなったが、りんたろう達はここで敗れた。

「まあ、しゃあねえよな………実際俺たちはやられちまつてるし。」

「すいませんね、勝手な真似して。イツキ!!もういいぞ、入ってきて運んでやれ!!」

ユウトの声に頷き外からイツキ達が入ってくる。試合が終わった為、張られていた障壁がなくなったので妨げるものは何もない。そのままイツキはりんたろうに、メタビーがカンタロスの傍まで駆け寄る。

「………りんたろうの方は大丈夫みたいだ。多分だけど。」

ホツと安心したように息を吐く。しかしメタビーの方は………

「………ダメだ、なんかに囚われたように眠ってやがる。このままだとヤバイ………!!」  
「そんなっ!?!」

あわててメタビーの側に駆け寄りカンタロスを見るが、生憎とただの人間でしかないイツキには何も分からない。しかしメタビーが言うなら事実なのだろう。それを聞きロクシヨウは構え直し、ユウトもアスモデウスを睨みつける。

「俺は能力を解けて言ったよな?」

「その子のは無理よ。特別強いのをかけたから………」

「じゃあやつぱり、今からそいつ消すか。」

行動は素早かった。先程と同じくロクシヨウは一瞬で間合いを詰め  
.....

「すみませんがもしここで彼女を倒すつもりなら今度は容赦しませ  
ん。」

「.....」

ブラックスタッグに止められていた。ユウトはチツと舌を鳴らした  
後、

「まあいいけどね。問答無用でそいつを消したらマモンやあんたと  
同類になるし。操ってんのはあんたでルクスリア自身には恨みもな  
いしね。ただそうなると面倒だな.....カラス!!」

「.....何だ。」

「悪いけどG・ODES出してくれ。」

その言葉にその場にいた全員が訝しげにユウトを見る。一体何をす  
るつもりなんだ？

「G・ODES、つまりカラスが共に戦う《マリン》の《レアメダル  
》の力でカンタロスを苦しめてるものを《解除》する。」

「なっ!?!」

「え、そんなこと出来るの!?!」

「理論上は、な。」

そう言うユウトの顔も不本意そうだ。恐らくは確実性が、無い。

「本当は駆けた本人に解かせるのが一番手つとり早いんだけどな・



「ゆ、ユウト。カラスをからかうのはその辺で……」  
「え、今からが面白……。スンマセン冗談です。ま、何はともあれりんたるうもカントロスも無事、カラスは力の別の使い方を覚えたし一件落着かな。いや、結局あいつらが準決勝にコマを進めることになっちまったからそうとも言えないか……」

遂に目を開けたカラスの顔に流石に怖かったのかそこから一転して真面目そうになる。そうだ、今回りんたるう達が負けたことで準決勝に進むチームが完全に決まったのだ。自分達イツキチーム、ヒカル達チームカイザー、ラブレター男が率いカイがいるチームアンダーシエル、そして……

「そう言えばユウト、カイには……」

「ああ、会ったよ。話もしたな。」

あっさりとそう頷く。そして今度はジィッとイツキを見て口を開く。

「で、お前はどこで何やってたんだよ？時間的に丁度ヒカルさんの試合と被ってたし、観戦に戻った……なんてわけじゃないだろ？」

「う、うん。その、実は……」

そこでイツキはイセキに攫われ……もとい一緒に行動した下りを話して……

「……なる。それで急に姿が消えたわけか。ま、カイを前にしてお前が逃げ出すってことはないと思っただけだな。で、イセキさんと一緒にボッコボコにされたわけか。」

「僕達が結構足を引く張っちゃったってことが大きいからイセキさんがやられたとは言えないけど……」

だがユウトの言う通り、あれは自分達の完敗だ。これ以上ない敗北、圧倒的な実力の差を見せつけられた。いや、彼女の言葉通りなら恐らくは自分に覚悟がなかったから……

「けど、その《黒衣》って何者なんだ？ 予選のときはヒカルさんを苦しめ、さっきはユウトとロクシヨウ相手に互角に立ち回ってたブラックスタッグ使い……やっぱタイヨウと同じ様に雇われているってか契約でも交わしてんのか？」

「恐らくそうだろう。もつともタイヨウと違い、何を考えているかはさっぱり分からないが……」

「どっちにしる厄介な相手には変わりないけどね。僕らも今度戦うときは本当に覚悟を決めないと勝てないだろうし……」

彼女と、その愛機に言われた言葉。自分には覚悟がないと、他の誰よりもメダロットを大切に思うがゆえにメダロットを傷つけ互いを傷つけ合う《戦い》が出来ないのだと。それこそベルゼブブのときのような状況にでもならない限り……そんなことを考えるイツキ達の静寂を破り……

「無理だな。」

きっぱりとユウトは言い放った。

「え、無理って……」

「覚悟云々の問題じゃない、お前らじゃあいつには勝てねえよ。ヒカルさんクラスなら別だけどそんな人間他に知らんし。」

それにイツキもコウジもカラスも啞然となる。

「ち、ちよつと待って！！勝てないって……」

「メタビーがスタボロにされた《戦い》じゃなくて、もしロボトルだったとしてもムズイだろうな。あいつに勝てんのはさっきも言ったけどヒカルさんクラスか、《悪魔》の2トップ位だな。」

「2トップ……？」

「俺が追ってる奴とクラス因縁の相手。」

それにカラスが一瞬目を見開くがすぐに元のポーカーフェイスに戻る。それはつまり《悪魔》の半数以上よりも強いってことで……

「ユウトは？ロクシヨウは互角に切り結んでたろ？」

「俺達？やれる！！って言いたいんだがな、多分無理だな。」

「なっ！？」

「イツキ、その《黒衣》の素顔見たんだろ？」

「う、うん。」

あの黒いフードの下にあった素顔。それは、

「僕達と同じくらいの年頃の、可愛い女の子だった。」

「いや、別に可愛いかどうかは関係ないんだが……本当に  
同い年位の女の子だったんだな？」

「うん。」

「そっか、じゃあやつぱり難しいな。アイツを倒すのが目的だし、その前に負けるわけにはいかないから当然勝たなきゃいけない相手ではあるが……2割ありゃいい方だな。」

「……！！」

あのユウトがそこまで言う相手なのか？あの夜会った男を除いて、今までどんな相手に対しても常に余裕を見せていたユウトが、2割



あればいい方だった？

「一体、どんな奴なんだよ……タイヨウと同じ様になってことは、元々俺らと同じ普通のメダロットだったってことだろ？しかも同い年……俺、そんなすごい奴聞いたこと無いぞ？」

「実力者が全員有名なわけじゃない。現にそのバカも相当の使い手だが俺たちは会うまで知らなかったからな。」

「……お前、俺に対しては手厳しいよな？」

軽いノリで苦笑しているが、今の話が事実なら笑い事じゃない。ユウトは何か知ってるみたいだしもつと話を……

「つつても8割くらいしか確証ないんだけどな。もしかしたら俺の思ってる奴じゃないかもしれんし、そうしたらまだチャンスはある。」

「……」

こちらの顔を見てそう言うユウトからは、これ以上話すつもりはないと言っているようだった。

「ま、けどもしお前らが決勝まで残って、あいつらも決勝に進んだら《黒衣》の相手は俺がする。色々ケリつけにやならんしな。」

「お前ら？」

「言わなかったっけ？ああ、お前ら先にりんたろう達連れて医務室行ってたもんな。あのこと知らないのか……」

「ど、どういうこと？」

そんなイツキにユウトは笑って一言、

「俺次の試合、出場停止処分受けてっから。下手すると決勝にも出

れないかもな」

なんてことを呑気に言ってきた。

第51話：二回戦終了、カンタロスは……………（後書き）

今回はユウトが参入してからの話少しと二回戦が終わってからの雑談がメインです。てか、ここまで《黒衣》の説明あるとなんか気づく人いるかもですねww  
自壊もできるだけ間を開けないようにします。

幕間3…ユウト一時離脱(前書き)

今回はいつもに比べると少し短いです。

### 幕間3：ユウト一時離脱

ユウトの衝撃発言からしばらくして、イツキ達は落ち着き、詳しい話を聞いていた。ユウト曰く、

「いかなる理由があろうと、別のチームが試合をしている最中に関係ない俺が乱入するなんて完全な妨害行動だ。あまつさえ、故意に攻撃までしたんだからな。最悪、俺達全員が失格になってもおかしくなかった。」

というわけでユウトは次の試合、大会本部の意向次第では決勝に進んでも出れないかもしれないらしい。

「じゃあ、あの時ユウトとロクシヨウだけで乱入したのは……」  
実はユウトはロクシヨウが障壁を斬り裂いた後、「俺が呼ぶまで入ってくるな」と言ってイツキ達を入れなかったのだ。恐らくはイツキチームのリーダーであるイツキがあの場合にいたら確実に失格になっていたから。それが分かっていたからユウトは一人で……

「勘違いすんなよ。あの場にいたのはイツキ、コウジ、カラスに俺だ。リーダーのお前があのまま入ってくより俺が行った方がチームとしてのダメージが少ないと考えたのは確かだけど、それが全部じゃない。一応あいつらから攻撃された場合は俺だけのがやりやすいと思っただけだ。」

「結局僕らの心配してくれてるんじゃないか。」  
「だから違っつて。」

頭を掻きながら今度は真剣な顔でイツキを見つめる。

「もしお前が乱入したとして、俺たちのチームが失格になってみる。最終的な防衛手段がカイ一人だけになっちまうだろ。」

「あ……………」

そうだ。もし自分達が失格になったら必然的にヒカル達のチームが決勝に進むことになる。が、キララは意識不明、ヒカルは戦意喪失しているしイセキ達だけでアスモデウス達を押さえられるとは思えない。となると《黒衣》が《水》のスピリットだと言っていたカイだけが対抗できることになるが、相手は二人、しかもカイの他のメンバーは一般人だ。つまり……………」

「優勝はあいつらになる可能性が高くなる。お前らは別に問題はないんじゃない？とか思ってるかもしれないが、それは間違いだぞ。奴らの狙いはメダル、特に《レアメダル》だ。あいつらの本拠地がどこかは知らんが、優勝賞品はメダルの故郷・アンドロメダル星へのチケットだ。それが何を意味するか、分かるか？」

「……………」

ユウトの、というよりユウトに色々な事を教えた自称宇宙人の話が本当ならばそれはかなり危ない。《悪魔》率いるミュータントの目的は分からないが、元々アンドロメダル星とは敵対関係だったらしいし、ひょっとしたら宇宙規模の戦争が起こるかもしれない。そうなったら……………」

「まあもし俺達が失格でもしてたら他の手段を使っただけだから、あんま気にすることないんだけどな。」

……………何故だろう？今、心から失格にならずにすんで良かったと思っただけだ。

「今はそんなことを考える必要はない。とりあえず、お前は次の試合には出れない。そうだな？」

最後の確認のつもりだろう。カラスが改めてユウトに尋ね、彼もまた頷く。

「ああ。ま、予選からずうっと戦いっぱなしだったし丁度いいさ。」「けどどうするんだ？まだ知り合って間もない俺が言うのもなんだけど、お前大人しくしてるつもりはないんだろ？」

「んゝ……俺、明日一日はフューン<sup>フューン</sup>要塞離れるからなあ。少なくとも迷惑をかけるつもりはねえよ？」

何故に疑問形？いや、それ以前に……

「離れるって……どうして？」

「まあ、ちょっとした気分転換だよ。最近ちょっと根詰めすぎたからな、そろそろ息抜きしねえと疲れてたまらん。」

そう軽口を叩いているが、それが全てではないだろう。どこかユウトは目が笑っていなかった。

「ま、つつわけで明日の試合はお前らに任せた。コウジも応援頼むな。」

「それはもちろん……」

「ありがとな。じゃ、俺もう行くから何かあつたら連絡頼むな。」

言いながら必要そうな荷物を鞆に入れ、そのままドアノブに手をかける。

「つてもう行くの!?!」  
「善は急げってね、じゃあな」

最後にニヤツと笑顔を見せてそのまま風のような自由さで部屋から去って行った。

「……いつものことながらアイツは落ち着きがないな。」  
「そうだね……」

そんなユウトの後姿を見送った後、イツキとカラスはしみじみとそう呟いていた。

「ん~~~~~!!!」

フーン要塞から外に出て、大きく体を伸ばす。なんとというか大会が大会だけに外に出たのが久しぶりなのだ。やはり定期的に日の光を浴びねば落ち着かない。

「ふう……さて。」

一度目を閉じ、もう一度開く。開かれたその目は鋭く、イツキ達といた時のような人懐っこさは全くない。《悪魔》と対峙した時と同じとは言わないまでもそれに近い雰囲気を出している。

「1日で足りるとは思わないが……ようやく手に入れた手



「がかりだ。ジツとなんてしてらんねえ。」

左腕に身につけているメダロッチの中に収められている《あの計画》のデータ。自分のことを心配してくれたリユウコ先生を説得し、渡してもらったものだ。そしてこのデータを持っているのが敵に知られたが最後、間違いなく襲ってくるだろう。

（今までは後一步つてところでいつも先を越されてた。けど今回は違う。少なくともまだ知られていないはずだし、知られたとしてアイツが来る可能性は極めて高い……！！）

真相が分かれば儲けものだし、もしそうでなくても上手くいけばあの男を引きずりだせる。このデータにはそれだけの価値があるのだ。今までも《あの計画》に関する資料がある場所ほとんどにあの男は現れたのだから。

「って、わけで俺は行くから後は頼む。無理はしないでいいけど、あいつの為にも出来れば勝ってやってくれ。」

最後に少し離れた場所でユウトを見つめる人影に向かってそう言い残し、《風の翼》に乗って空へ舞い上がっていった。

「さて……俺はもう戻るよ。あれから結構経つからカリンも戻ってるだろうしな。」

「分かった。じゃあまたね。」

「オウ！！カラスもまた明日な。」

「ああ。」

コウトがいなくなっしてしばらくした後、コウジもまた自分の部屋へ戻っていった。アリカはまだ戻っておらず、部屋の中にはイツキとカラスの二人だけが残される。

「なあイツキ、聞きたいことがあるんだが。」

「ん、何？」

先に声を発したのはカラスだった。

「明日はとりあえずヒカルさんのチームとの試合だが……  
どう思う？」

それは勝てるかどうかという意味での質問ではないだろう。

「どうだろう。多分今のままじゃヒカルさんは試合には出ないと思う。」

「だろうな。自分にとって一番身近な存在があんな目に合ったんだ。そうなった原因は無論相手にあるが、あの人は自分がもつと早く本気を出してればって自分を責めてる。あの調子じゃあ次の試合は……」

「いや、でも納得しそうにない人が少なくとも一名いそうな予感が……」

強引にイツキを連れ回したあの恐ろしい……もとい、男勝りな女性イセキ。ユウキやキララと同じくヒカルの古い馴染みの一人

らしい彼女の性格からしてヒカルが出なくても彼女は出るだろう。幸いというべきかは分からないが、向こうには後三人の控え選手が残っており、試合にはチームメンバーなら誰が出てもいいのだから。

「あの女か……どこことなくキクヒメに似ているように思うのは俺だけか？」

「カラスもそう思う？でもロボットの腕と性格の凄さはキクヒメの比じゃないよ……」

キクヒメが弱いとは言わない。だがヒカルさんが自身のチームメイトに入れるだけあってその実力は半端じゃない。まだ自分の知らない強者達がゴロゴロいるとは思っていたが、あれは強すぎだ。自分達では歯が立たなかった《黒衣》を相手にして、攻撃こそされていなかったが、あそこまで追い詰めることが出来ていた実力。あれは口ポトルとは言えないのかもしれないが、それでも相当な実力者だということに変わりはない。そして後二人、ヤンマとクボタと名乗る人物達の実力も未知数だ。まあイセキがキクヒメが元々使っていた機体の先行機ということを考えれば、自ずと答えは見えてくるのだが……

「単純に先代スクリューズと考えない方がいいのは確かだね。」

「次の試合が行われればの話だがな。どちらにせよ、ヒカルさんはもう戦えないだろうが……」

どちらにせよ……？何だろうその言い方はまるで……

「これは試合を直に見た俺とコウジの考えだが……あのマモンという《悪魔》、いや奴が操るヨルムガンドは凄まじかった。

後半こそヒカルさんが圧倒していたが逆に言えばそれほどまでの力を使ったということでもある。実際ヒカルさんの《カブト》メダル

の最後のメダフォーは反動が大きいらしいな。」

自分はイセキと、ユウトはカイと行動していたからヒカルの試合についてよくは知らない。ユウトの方は一度戦っているらしいから何となく分かるかもしれないが……

「コウジのスミロドナットもヒカルさんとの試合の後は強制的な睡眠状態に入ったらしい。まあコウジ達の場合は初めて強大な力を解放した反動と取れるかもしれないが……ヒカルさんは一応予選のときに徐々に慣らしていったらしいが、あそこまで大規模なのは初めてなんじゃないか？だとするとスミロドナットのように強制的な睡眠に入り今もまだ目覚めていない可能性は十分にある。」

「あ……」

そうか、確かに今まであまり気にしてなかったが大きな力を使えばその反動もまた大きい。あんな膨大な力を使ったのだ、いくら力を少しずつ慣らしていたとしても掛かる負荷は大きいだろう。

「ユウトが『もし俺たちのチームが失格したら対応策がカイしかいなくなる』と言っていたのも恐らくそのことだったんじゃないか？」

「……」

言われてみれば。ヒカルが一人倒したとはいえ、もう一人の《悪魔》は未だ健在だ。そしてユウトでさえ勝てるかどうか分からないと言っているあの《黒衣》……

「《悪魔》が使ってたあのルクスリアって機体は何とかなるだろう。油断してるわけじゃないが、少なくともあの得体の知れない幻覚にさえ気を付ければ真名を唱えられたとしても今の俺達なら勝てる。」

「うん……」

確かにあのルクスリアは以前戦ったグラと比べてもそこまでの脅威には感じない。速さならロクシヨウやスミロドナツトの方が速いし、攻撃力だってこっちの方が上だ。真名を唱えられたとしても確かに脅威になるとは思えないが、それでも相手が相手だ。何か奥の手を持っていてもおかしくはない。

「《黒衣》の実力は未知数だから何とも言えないが……それでも明日で分かるだろう。あのカイって奴の使ってるのがお前の知ってるブラックビートルならあいつらが見逃すはずがない。」

「そうだね。カイがもしセルリアーノなんだとしたら何か因縁があるみたいだし……」

あのとき《黒衣》はセルリアーノを抹殺すると言っていた。カイがセルリアーノだとも。今のイツキにそれを確かめる術はないが、ともかくにも……

「ま、明日が勝負どころってわけだな。試合をやるのかどうかは分からないが、今日も早めに休んでおこう。」

「うん。」

そう、明日が勝負どころだ。

第52話：準決勝、VS元悪ガキ三人組！！（前書き）

第52話UPしました、どうぞ！！

第52話：準決勝、VS元悪ガキ三人組！！

それは皆が寝静まっていたとき……

【……ここは？】

どこだろう……確かいつも通り明日の試合に備えて眠りにつ  
いた筈なのに。

【ああ、そうか。これは夢だ。】

気付けば何のことはない。だってカラスもアリカもないしそもそ  
も知らない場所だ。なんていうか周りが霧に覆われてるみたいな感  
じだし、夢に決まって……

【ん？なんだろうあれ……】

まるでイツキがここがどこだか理解するのを待っていたかのように  
少しずつ霧が晴れていく。その向こうに見える何か、それは……

「いいかい？これはとても大切な物なんだ。」

「大切な物？」

今のヒカルと同じくらいの年に見える若い男性と、まだ小学校低学  
年らしき女の子と男の子だ。彼らは兄のようにも見えるが手に持っ  
ている何かを見ていて、片方は不思議そうに、もう片方は興味ない  
ようにふるまっているがその目は好奇心でいっぱいだ。

「ああ。まだ謎が全て解明されていない宇宙の神秘、そして同じようにまだまだ謎が多いメダル。この二つの関連性を解き明かすために必要な……」

「細かいことはいいよ。要はそれスッゲーお宝ってことだろ？」

お兄さんの言葉を途中で遮り少し小生意気そうな少年が口を挟む。もはや隠そうともせず、それに興味津津だ。

「もう、またそういうこと言って」

「だってそうじゃん！！なあなあ、どうなの兄ちゃん？」

「その通り！！これはお宝だ。それも価値なんて付けられない位の素晴らしい、ね。」

子供たちの様子を微笑ましく思っているのだろう。お兄さんの方も自慢げに話している。

「でもそんなお宝なんだけど……僕達が持っていて何も役立てられないし、可哀そうだと思うんだ。だから……」

そしてそのまま傍らの子供たちに差し出す。子供たちの方はおっかなびっくり、信じられないといった様子で……

「俺（私）たちにくれるの！？」

「ああ。丁度ホラ、二つに分かれてるし、いつまでも仲良しな二人でありますよんって僕からのプレゼントだ。」

「に、兄ちゃん！！」

「お、お兄さん！！」

からかったお兄さんとは逆に二人は真っ赤になって俯いているが、どこか嬉しそうでどちらからともなく手を繋いでいる。



「でも兄ちゃんの方は？俺達だけもらっても兄ちゃんが……」

「僕はいいんだよ。その代わりさつきも言ったように二人がずっと元気で仲良く幸せになってくれればね。」

「話と全然関係ねえよ……」

少年も少女もお兄さんだけ仲間外れにしているようで気が引けているようだ。それを察したのかお兄さんは微笑みながら二人の頭を撫でて、

「二人はまだメダロットを持ってないだろう？欲しいのは分かるし、叶えてあげたいとも思うけど、僕もずっと構ってあげるわけにはいかないから……これはそのお詫びでもあるんだ。早く二人が自分だけのパートナーを見つけられますようになっていうお守りとしてね。」

「兄ちゃん……」

その言葉に頷いて二人は空いている手をソレに伸ばして……

「ありがたくもらうね。」

「ああ、大切にしてくれよ？」

「もちろんです！」

その場に満ちた三人の笑顔はとても素敵なもので……

【あの人達は誰なんだろう……】

イツキがそう呟いた瞬間だった。

【ウワツ！？な、なんだ！？】

突如自分の周りの空間が歪み始める！そしてイツキもそれに巻き込まれて……………

【うわあああああああああ！！！】

今日はここまでです。また……………

「うわあああああああああ！！！」  
「うるさいっ！！」

バツチイイイイイイイイイン！！と素晴らしく痛そうな音が部屋に木霊する。その一撃と頬に走る熱と痛みでイツキは目が覚め、

「あ、あれ？ここは……………」  
「朝から何大きい声出してんのよアンタは。」

ここ数日で見慣れた部屋で、不機嫌そうな顔でイツキを見下ろすアリカが立っていた。

「え、アリカ？アリカがなんで……………あっ、そうか今は大会の最中でここは……………」

「全く、寝ぼけるにも程があるわよ。ホラ、早く起きて起きて。」

それだけ言ってアリカは出ていく。もうすっかり目が覚めたイツキは起き上がり体を伸ばすが、その間ずっと、さっき見た夢と最後に聞こえた声のことを考えていた……………

「おはよう。目は覚めてるか？」

「おはようカラス。バツチり覚めてはいなかったけど覚めてるよ。」

「？変な言い……………分かった、もう何も言わなくていい。」

一瞬怪訝そうな顔をしていたがすぐに納得したらしい。まるで出来るだけこちらを見ないようにという配慮が見えるようだ。

「……………そんなに腫れてる？」

「腫れてるといふより……………その、痕がな。」

ああ、痕ね。あのカラスがあそこまでこっちを見ないようにしてるってことは、相当すごい痕が残ってるんだろうな。

「でもその様子だと僕の顔を見るまで起きたことに気づいてなかったみたいだね。どこかで出かけてたの？」

「まあな。キララさんの見舞いがてらヒカルさんの様子を見てきた。」

「……………どうだった？」

「キララさんはまだ目を覚ましてないらしい。呼吸は安定してるらしいから大丈夫だとは思うんだが……………」

「そっか……………」

ということとは問題は後一つ。

「ヒカルさんは？」

「・・・・・・・・」

その問いにカラスは苦笑し、

「キララさんがあんなだからな、完全復活とまで行ってない。けど昨日のあの後に何かあったんだろうな。ほとんどいつも通りだったぜ。」

それを聞いてほっと胸をなでおろす。よかった、あのままだったらどうしようと思っていたから。

「けどやっぱり今日は無理らしい。昨日予想以上に力を使いすぎたせいでアーク達がダウンしてるそうだ。」

「あ、じゃあ試合はどうなるんだろう？」

「さてな。けど残念だ、今のヒカルさんは現役時代と同じ実力。あの《あがたヒカル》と一度戦ってみたかったんだが・・・・・・・・」

うわあカラスが戦う気満々な顔だ・・・・・・・・ここまでの顔を見るのもなんだか久々だなあ。

「とりあえず支度が終わり次第行くぞ。どちらにせよ会場に向かわないとな。アリカは？」

「呼んだ？」

既に準備を済ませたアリカが部屋から出てくる。今日も調子は良さそうだ。

「後はイツキだけだな。」

「ち、ちよつと待ってて。すぐ済ませるから！」

支度を済ませ、三人で会場に向かう。今日はユウトはいないためか、大した会話もなくそれがどこか寂しい。

「なんだ、やけに静かだな？」

「あの爆発頭がないからじゃないか？」

「うふふ、静かなのは良いことですわよ。」

そんな声をかけられ、振り向けばコウジ、カリン、ミズチが揃っていた。

「あれ？コウジとカリンちゃんとはもかく、ミズチまで一緒なのって珍しいね。」

「偶然そこで会ってな。」

「一緒に客席に向かうところだったんです。シュリさん達が先に向かつて席をとって置いてくれてるんですよ。」

「へえ〜」

意外に思ったのか、アリカがビツクリしたような声を上げている。まあ確かに意外だが、仲がいいのは良いことだ。

「まあ俺達の場合はお前らの応援っていうより、次の試合目当てな  
んだけどな。」

苦笑しつつもコウジはそう言ってくる。コウジもまた昨日の試合を  
見ているため、ヒカルが今日は戦えないことを知っているだろうし、  
そうなれば《悪魔》であるアスモデウスと謎に包まれているカイと  
の戦いの方に目が行くのは当然だろう。そもそもチームのリーダー  
であるヒカルが戦えないのであれば、イツキ達の試合があるかどう  
かも怪しいのだから。そのまま6人で談笑しつつ歩いて、

「じゃ、俺達は席に行くな。今日お前らの出番あるかどうかは分か  
らないけど頑張れよ。」  
「うん、また後でね。」

会場への入り口の手前でコウジ達は観客席へと向かいイツキ達と別  
れた。そしてイツキ達も会場へと足を踏み入れ……

「遅いつつ……!!」

会場全体に響き渡る程大きな声に出迎えられた。

「あんた達、年上を待たせるなんていい度胸してるじゃない？」  
「い、イセキさん!？」

向こう側に立つのはある意味予想通りイセキ達三人組だった。

「え、え！？これは……」

「何？もしかして不戦勝になってラッキーとか思ってたの？」

「いえっそんなことは！！！」

思わず背筋が伸びてしまう。やっぱりこの人にはまだ慣れない……

「そのこのバンドナとカメラっ娘も！！いい御身分ねえ？」

「バンドナ……」

「カメラっ娘って……」

イツキにだけでなく自分達にまで話を振られたせい、はたまた妙なあだ名をつけられたせい、突然のことに二人も面食らってしまったらしい。隣でアリカが「カメラ出してないのに何で分かったんだろ？」とか言ってるけど敢えてスルーしよう。

「イセキ、あんまイジメてやるな。うるちさんまで困ってる。」

「それもそうね。うるちさん、いいですよ。」

流石にうるちには敬意を払っているらしい。うるちの方はようやくか、とでも言いたげな苦笑を浮かべつつ話を切り出した。

【分かりました。さて、まず第一にイツキ選手達は昨日の試合を見ていましたか？】

「あ、僕は見てないですけど二人が見てました。」

【では何があったのかはご存知ですね？】

「……はい。」

キララ達が倒れ、ヒカル達は力を使いすぎた。二人とも、特にキララ達は試合なんてできるわけがなく……

【本来ならばリーダーであるヒカルさんが出れない以上、イツキ選手達の不戦勝になるのですが……大会本部のある方とこの大会運営においての一番の協力者、そしてチームカイザーの、特にヒカルさんの強い要望により、準決勝を行うことになりました。幸いまだ戦える選手が三人残っているのでルール上は問題ないですね。】

「はあ、まあそれはいいんですけど……」

ヒカルが強く要望した理由はなんとなく分かる。イセキ達にもイツキ達にも申し訳なく思ったのだろうし、イツキ達にとっていい経験になると考えたんだろう。大会本部の考えは分からないが、まあ上には上の事情があるのだろうし深くは考えるまい。だが、

「協力者？」

確かにこんな大規模な大会だ。誰か協力者がいても不思議ではないのだが、何か引つ掛かる。

「博士かなあ？いや、なんか違う気も……」

「あんた有名人なんだし、案外知らない人かもよ？」

「かなあ……ってカラス？」

何故かカラスが苦い顔で頭を押さえている。それでなんとなくピー



ンと来たが……

「え、もしかして……」

「今は何も聞くな。後で説明する。」

イツキが言い切るより前にカラスが素早く遮る。ああ、もう完全に誰か分かったけど……

(……どこまで色々手を回してるんだろっ?)

また新たな疑問が生まれてしまった。

「そういうわけで派手にやり合いましたよ、小童どもっ！」

敵リーダーはどうやらイセキのマゼンタキャットらしい。二番手をヤンマのシアンドッグが、三番手をクボタのイエロータートルがつとめており、やはりどこかで見たようなパーティだ。

「(イセキさんのマゼンタキャットは一度見たけど残りの二体とヤンマさん達の実力は未知数だし、油断できないな。)行くよ皆、メダロット転送!!」

イツキ達もまた自分達の愛機を転送する。今回はセーラーマルチのパーツで出陣のプラス、死神型のG・Oデス、そして……



【それではこれより準決勝第一試合・イツキチームVSチームカイザーの試合を始めます!!】

そしてうるちのコールが響き渡り試合が始まる!! 先手必勝、後手に回ることは避けるべくイツキ達は動こうと……

「じゃ、まずはあんたからね。」

「「「!?!?」「」」

驚愕は三つ。自分達の愛機の誰よりも早くいつの間にもマゼンタキャットがメタビー達の間合いに入っていたという有り得ない事実だ。

「悪いけど驚いてる暇なんてあるの? もう試合は始まっているのよ。」

淡々とした口調のイセキに伝えるように、マゼンタキャットがその右腕を……

「……………ああクソッ、なんだよこのロックはっ!? ムズイにもほどがあんだらうが!!!!」

おみくじ町にある廃工場の最奥でユウトはらしくない怒声をあげていた。そこはメダロット研究所の中にある《パンドラの箱》には劣るもののかんりの設備が搬入されており、ユウトにとって誰にも邪魔されずに作業するのにとっても向いていた場所だ。その点は少し前

までにここを根城にしていたという白玉という研究員に感謝すべきなのかもしれないが、大体の設備はユウトのツテで手に入れたものだ。その全てが最新設備、だというのに………

『落ち着けユウト。元々その中身はトップシークレットだった筈だろう？どのような設備があるかと、そう簡単に解けるはずがない。ましてお前はまだ学生なのだから解析しようという試みが既に無謀だったのだから。』

「分かつてる……分かつてるけど……分かつてるけど……っ！正直高をくくつてたぜ、まさかここまで難解だとはな。これ全部を半分しか解析できなかった？冗談、半分も解析できてる時点であんたはすごいよ先生。」

ここにはいない、データをくれた人に向けてユウトは苦笑する。実際このデータを守護するプロテクトはかなり強固だ。それを全体の半分も解析できたりユウコ先生はかなり、いや世界でもトップクラスの人間だろう。

『とはいってもあの人は数年かけて半分だがな。そう考えればお前はわずか一日で既に二割は解析している。誇っていいのではないか？』

「それこそ冗談だろ？こつからが難しいんだよ。正直普通的手段で何十年頑張っても俺じゃ無理だ。普通的手段ならな。」

『では……』

「ちよつと早すぎっけど、悪いギブ。お前の力も貸してくれ。」

『元よりそのつもりだ。始めるぞ。』

傍らに控えていたロクシヨウが隣の席に座り、猛スピードでデータを解析していく。少しメダルの力を解放し、クワガタ特有の索的能力の応用でデータを解析しているのだ。

「うわあ、やっぱ最初からこうしてりゃあ良かったかもなあ。って、俺も負けてらんねえけど。」

もちろんユウトとてただ黙ってそれを見ている様な男ではない。今度はロクシヨウのサポートに徹することで、ロクシヨウの解析が円滑に進むよう補佐を始める。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

そのまま二人とも黙りこみそれぞれの作業に集中する。そのためかまるで1秒が1時間のように長く感じるようにも思える。そのままどのくらい経っただろう？不意にロクシヨウが口を開いた。

「ユウト、何故イツキ達とイセキ殿達を戦わせるように進言したんだ？お前としてもイツキ達が決勝に残った方がよかつたんだろう？」

「じゃあ逆に聞くが、お前はまだ戦える強敵が残ってるのに不戦勝なんてつままない真似してまで勝ちたいって思うのか？」

「そうは思わん。だがヒカル殿は今戦えるような状態ではないし、あの男も今は利害が一致しているだけで味方ではない。無論俺とてわざわざイツキ達を危険に晒したくはないが・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

恐ろしいことに二人とも会話をしながら全くペースが衰えていない。いや、むしろユウトの方はペースが上がっている様にも見えるが・・・・・・・・

「・・・・・・・・ロクシヨウ、率直に言ってくれ。このペースで解析を続けたとしてどのくらいかかる？もちろんお前の途中の補給時間も

入れてだぞ。」

『……早くても、明日の午後までかかるな。』

ロクシヨウの解析能力、そして途中で調子を落とさぬようにする補給を最短時間で終わらせてもそれほどまでの時間がかかる。明日の午後、それはつまり……

「俺はこれが終わるまで戻るつもりはない。ってことは間に合わないってことだ。カイがあいつらを倒してくれるんならそれでも問題はないが、もしあいつらが決勝へとコマを進めたら？」

『カラス達ならともかく、今のイツキ達では勝ち目はないな。カラスもお前も必要とあらば苦しんでも引き金を引くが、イツキは違う。あいつは優しすぎるからな……』

「そう、優しすぎる。それが悪いとは言わないしむしろそれは誇るべきことだ。けど《悪魔》相手だとそうもいかない。実力的にはアスモデウスに十分勝てる俺は踏んでるが、あいつの能力を利用された場合、あいつのその優しさは単なる甘さに変わって最悪の結果を生みかねない。そうでなくても俺達の誰よりも強いアイツがあのチームにいるんだからな。」

『だからか……』

イツキに優しさは捨てるなんて言っても出来るわけがない。だからこそあいつはあいつなんだし、そもそもそうでないイツキならばユウトはまがりなりに心を開いていないだろう。ならば奴らと戦う上で優しさを捨てられない以上必要なことは何か？単純だ、一地方を底上げしてそういうものがあっても勝てるようになればいい。

「どう転んでも無駄にはならんしな。仮にも現役時代のヒカルさんのライバルにして仲間だった三人組だ、その実力も折り紙つき。聞いた限りだと《悪魔》ともタメ張れるだけの実力はあるそうだし、

力の引き出し方とかも実戦で教われるだろ？アリカちゃんにも、自衛手段くらいは持つてもらいたいし。」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「心配いらねえって、な？」

「だと、いいがな・・・・・・・・」

なんとというかあの三人、特にイセキという人にユウトの考えは甘いんじゃないだろうか？そう思いつつロクシヨウは作業を続けることにした・・・・・・・・

### 第53話：一進一退（前書き）

大っ変長らくお待たせしましたっ  
メダロット 更新再開です！！  
という事で一挙2話掲載します。





「上には上がいることを教えてあげる。」

「っ!?!」

マゼンタキヤットとの距離は充分離れていた、というのにその距離が一瞬にして0になっていたという事実。まるでロクシヨウのような踏み込みはG・Oデスに対して仕掛けたのと同じだ。だが動揺している暇などない。マゼンタの右腕から光がほとばしりメダビーを襲う!!

「避けてメダビー!!マゼンタの攻撃は言葉通り喰らえば一撃で終わる!!」

『言われなくても避けらあ!!』

昨日とさつきマゼンタの行動を見れたのが幸이었다。メダビーはギリギリのところまで右腕をかわし、そのまま逆に自身の右腕をマゼンタの頭につきつける!!

『形成逆転だな?ヒュー……!!』

ビイイイイイツツ!!!!

「『っ!?!』」

間一髪、ギリギリのところメダビーはマゼンタキヤットを殴りつけ、その反動を利用して放たれたレーザーを避ける。

『チツ、そっいや敵は猫女だけじゃなかったな。』

そつだ、今回は個人ではなくチーム戦。相手はイセキだけではないのだ。

「外した……」

絶好のチャンスだったのに仕留められなかった。それに無表情ながらどこか残念そうなくボタだが、すぐに気をとり直したのだろう。すぐにまたいつもの調子に戻る。

「でも把握した……次は逃さない……」

『ハッ、お前の愛機は《戦車》型じゃんか。そんなんでこの俺に追いつけるとでも思ってたのか？』

メタビーやロクシヨウ、ブラスの様に基本的にバランスの取れた《二脚》型の機体と違い、イエロータートルの脚部は《戦車》型。G・Oデスの《浮遊》型と同じ様にどの地形でも安定して戦える有利・不利な地形がないタイプだが、それ以上の特徴として装甲の高さが上げられる。基本的に全脚部タイプの中でも《戦車》型の装甲の高さは群を抜いており、並の攻撃ではビクともしないその強靭さがウリなのだが、その反面に極めて遅い。特にイエロータートルの攻撃は全て《光学》系のパーツ、その威力と引き替えに更にスピードを犠牲にすることになる。確かにレーザーにさえ気を付ければ、メタビーの言う通り追い付かれる心配はない。しかしメタビーの発言にイセキはブツと吹き出して、

「本気でそう思ってるならお笑いだわ。ねえクボタ？」

「……」

クボタは答えず、ただイツキとメタビーを見据えて短く言い放った。

「……………行く。」

同時にイエロータートルの頭部から光が漏れ出す。メダフォースとはまた違う光。それを見てようやくイツキは思い出した。

(そうだ、TOT型メダロットの初期型のイエロータートル。この機体は最初にして最後、唯一頭パーツが《光学》攻撃じゃなくて……!!)

気付いたときには既にイエロータートルの準備が整っていた。そしてメタビーはイエロータートルの能力に気が付いていない。

「お、準備できたか? いいぜ、いつでもかかって……」

「駄目だメタビー!! 下がって!!」

「はあ?」

メタビーが「何を言ってんだお前?」とでも言わんばかりにイツキに振り向いたときだった。

「前を見て!!」

「ん……………ってなにいつ!?!」

イエロータートルがメタビー並の速さで文字通り突っ込んできた。いや、厳密にはメタビーよりも遅いのだろう。だがさっきまで鈍重だった機体が急激に速くなったこと、特にイエロータートルの様な機体が急激に速くなったとあっては感じるプレッシャーは相当なものだ。それは分かかっていてもすぐに慣れるものではない。メタビーにはまるで自分と同じか、それ以上の速さを感じてしまったのだろう。当然そんな状態でまともな反応が出来るわけがなく、イエロータートルの猛スピードな突撃にあっさり上に吹き飛ばされ……

『ウアアアアア！！！』

「メタビー！！」

「追撃……」

空中で身動きのとれないメタビーに向かってイエロータートルの右腕が光り出し、レーザーで追撃をかける！！

『っ、調子に……乗んなあ！！』

ドシューウウウウツツ！！！！

が、メタビーとてやられっぱなしは性に合わない。空中では身動きは取れない以上、普通ならレーザーを受けるしかないが、敢えてメタビーはミサイルを自分に放ち命中させることで強制的な方向転換と加速を行いレーザーを回避、更に今の一撃が正しい具合にスイッチを入れてくれたらしくメタビーの目が完全に本気になったようだ。

『イッキいいいいいいいいいいいい！！！！』

「分かってる！！メダフォース発動！！」

「『《威力全開》！！！！』」

自身の性能、主にパワーを高めるメダフォースを発動し今度はメタビーから仕掛ける。狙いはマゼンタキャット、敵のリーダーにして最も厄介な相手を潰し早々に決着をつける！！

「へえ、悪くない判断ね。」

「イセキさん、貴方を倒して僕たちの勝ちだ!!」

そのままメタビーの拳がマゼンタキャットに向かって振り下ろされる。が、直後

『きゃあああああああ!!』

悲鳴と共に一体のメダロットがメタビーめがけて吹き飛ばされてきて、それに巻き込まれてメタビーも吹き飛ばされた。

『グオワツ!?!?てえな………ってプラス!?!?』

「意外と手間がかかったみたいね。厄介だったの?」

「ああ。同じ頃のキララよりも強くてちよつと本気出しちまった。」

頭を掻きながらそう言うてくるのは今までメタビーへの攻撃に参加していなかったシアンドッグのマスターであるヤンマだった。どうやら今までシアンドッグはプラスと戦っていたらしい。しかも驚くべきことにプラスはかなりのダメージを受けているようだ。シアンドッグには傷らしい傷が一切見つからない。

「イッキだったか?リーダーであるイセキのマゼンタキャットを狙うのは確かに間違いじゃない。けどな、これはチーム戦なんだよ。つまりは敵味方が入り乱れて戦う総力戦なわけだ。こういうゴチャマンの場合最も早く潰すべきは敵の大將じゃなくて最も厄介な相手が最も弱い奴だ。それが出来てようやく大將を狙えるんだよ。」

確かに相手が全員残っているのにリーダーを狙っても、妨害されるのは目に見えている。現に先程からイエロータートルに邪魔をされて、2対1の状況になっていた。ならば確かにリーダーを最後に回

し、他の2体を先に潰すというのは利に叶った戦術だろう。故に今回の戦いにおいて一番厄介なカラスのG・Oデスをイセキは行動不能にさせ、ヤンマは今までイツキ達の中で一番弱いと思われるアリのプラスを真つ先に潰そうと動いていた。

「結果、残りで動けるのはお前らだけだ。」

G・Oデスは行動不能、プラスは機能停止こそしていないが戦力にならないように攻撃パーツの両腕が潰されている。つまり実質上イツキ達の中で戦えるのは……

「『僕（俺）達だけってことか……』」

改めて状況を確認してみれば、マゼンタキャット達が上手い具合にメタビーを囲んでいた。

『へッ、おもしれえ。まとめて叩きのめしてやるぜ!』

そのままメタビーが体に力を入れて……

「下がれメタビー!!」

突如声を張り上げてイツキがメタビーに指示を出して下がらせる。無論それを見逃す筈がなくヤンマとクボタがそれぞれの愛機で追い討ちをかけようと、

「余り俺達を甘く見るなよ?」

瞬間

キキキキキキキキキキツツツ！！！！

「なっ！？」

「っ！？」

獲物の生を奪うべく、狂ったように笑う死神がメタビーに追い討ちをかけようとした二機に向かって放たれていた。

「 余り俺達を甘く見るなよ？」

その言葉を放ったのは当然ながらカラスだった。現在サクリファイスを扱えるメダロットが一体しかない以上、それは当然だろう。故に周りの驚愕はそこにはない。まだマゼンタキャットの攻撃を受けてからそれほど時間が経っている訳でもないというのにG・Oデスが《停止》状態から抜け出し、あまつさえ攻撃を放ったという事実。無論メダルのレベル差が少なければ《状態異常》から抜けるのも早い。だとしても早すぎる。結果としてヤンマ達は不意を突かれ…………

バアアアアアアンツツ！！！！

戦闘不能の機体を一体出すことになる。



「一撃、だと!？」

「俺としてはイエロータートルを潰したかったんだが……まあ、  
一体潰せたことには変わりない。」

狙いとはズレたようだがカラスの目に悲観的な様子はない。むしろ、

「乱戦において一番最初に潰すべきは一番弱い奴から、か。確かに  
な。お前が一番弱いのかは分からないが、少なくとも一番潰しやす  
い相手ではあつたらしい。」

今のカラスには珍しい皮肉っぽい言葉までかけていた。

「って、まさか俺もう終わりか!?!いいとこなしじゃんか!？」

「……一歩間違っていれば、俺達がそうになっていた。ヤンマ  
は運が無かった。」

「いや、ようやく出番が来たつ、て時にあっさり退場とか……  
」

「ヤンマは愛機もメダルも他の奴と被ってるし別に良いでしょ。ホ  
ラ邪魔だからさっさと下がんな。」

「……」

シッシツと邪険に扱われ、ヤンマが不満そうながら後ろに下がる。  
これで戦況は3対2。数字的にも状況的にもイツキ達の優位だ。

「ナイスだ、カラス!!！」

「お前が気付いてくれたお陰だイツキ。狙いが絞りやすくなったたし、相手も油断してた。」

「最初にG・Oデスが《停止》させられたときはヒヤヒヤしたけどね。」

苦笑しつつカラスに向かつて手を伸ばしてハイタッチする。無論油断できる状況ではないが最初に比べればかなり余裕がある。

「アリカ達の方は大丈夫？」

「あんたらと一緒にしないでよ……ブラスはしばらく無理そう。ていうか両腕壊されちゃったしあんた達みたいにメダフォースが攻撃タイプなものないし。」

確かにブラスのメダル・《ヒーロー》は能力的に攻撃型ではない。どちらかといえば後方支援、サポート型だ。ブラスの場合《ギャラントレディ》のパーツを付けているときはリリースで相手の動きを止めつつダメージを与え、《ラストセーラー》のパーツを身につけているときは頭の《索的》で命中率等を上げつつ両腕のライフルとガトリングで攻める。が、どちらにしても威力はそれほどではなくどうしても一対一の状況では不利になってしまう。

「まあ索的を利用して後方支援に徹しさせてもらっわ。元々ロボットの腕とか関係なくあんた達の方がアタッカーには向いてるんだし。」

苦笑するアリカだがその通りだ。後の問題はG・Oデスの残り右腕一発となったサクリフェイスを撃つタイミングだけだがそれはまだいい。

「よし、行くよメタビー。カラス!!！」

「『おおっ!!』」

「……ようやく向こうの準備は済んだみたいね。さあて、面白くなってくれるかしらね？」

「……ヤンマがやられたのは計算外。もう少し後だと思ってた……」

「まあ、あのバンダナの言う通り比較的倒しやすい相手ではあったわよ。機体的には一番普通だったわけだし。でもこの状況は想定内。悪いけどクボタ、あんたも一旦下がってくれない？」

「……」  
「そんな不満そうな顔しないの。でもG・Oデスが動ける状況だとアンタの機体に戦果を期待出来ない。分かるでしょ？」

「……」  
「悪いわね。けど安心しなさい、すぐに終わるから。」

『ん、あの亀野郎下がっちまったぞ？』

「恐らく最初と違ってG・Oデスが動けるからだな。コイツいる限り《光学》系の攻撃は意味をなさない。」

G・Oデスの頭パーツの能力は《光学》攻撃の無効化だ。クボタのイエロータートルの攻撃は全てレーザー、《光学》系だ。試合が始まった瞬間、イセキが迷うことなく一番最初にG・Oデスを《停止

《させたのはそういう理由だ。

「だが俺達を相手に一人で戦う気か？確かに実力が高いことは認め  
るが……」

「油断禁物だよ。イセキさんは《悪魔》も出てくる危険なこの大会  
のためにわざわざヒカルさんが声をかけた人だ。それに昨日僕に見  
せた実力……最低でもレトルトさんクラスの實力者だ。」

イッキの言葉にイセキから目をはなさないままカラスは頷く。G・  
Oデスがいつでも撃てるように腕を掲げ、メタビーも銃口を相手に  
向ける。対するマゼンタキャットも両腕を放電させ……

「……」

「……」

「……」

そのまま微動だにしない三機にそれを見つめるそれぞれのマスター。  
針つめた空気に自然と汗が流れ

ピチャン……ッ!!

『ッ!!』

遂に均衡が破れ、三機は決着を着けるべく動き出した。

## 第54話：イツキ・カラスVSイセキ

「うわあ、イセキの奴イツキ君達を気に入ったみたいだな……  
・まずいな、イツキ君達大丈夫だろうか……」

観客席の中でも一際会場内が見渡せる場所で、ヒカルは試合を見守っていた。

「ヤンマはポカしたしクボタも下がって、イツキ君とカラス君とイセキの戦いになるか。」

正直言つてキツイ状況だ。まともに動けないとはいえアリカのブラスもまだ機能停止はしていないし、イツキのメタビーはほぼ無傷。カラスのG・ODESはサクリファイスの反動で右腕を失ってはいるが、もう片方の腕は健在だ。対するイセキはマゼンタキャットこそ無事だがヤンマのシアンドッグは戦闘不能、クボタのイエロータートルも無事ではあるが下がらせており、彼女の性格からして手出しはさせないだろう。

「イツキ君達が優勢に見えるけど……難しいな。イセキは普通に強いし。」

ヒカル達世代のメダロット達はキララやユウキを除いてほぼ全員が当時の愛機を好んで使用している。それは前回のようにな気を出したヒカルの場合も例外ではない。そして前にも書いたようにそれはつまり使い手に相当の技量が要求されるという事。今のロボットのようにメダフォースもメダチェンジもなかった当時はメダルとメダロットとの相性すら思うようにいくものではなかった。故に当時の経験を乗り越え今も尚第一線で戦える者達の実力は並のメダロッ

ターの比ではない。そしてその中でもイセキの実力は公には知られていないだけでかなり高い。しかも実はイセキ達に、というよりイセキはとある人物からの強い要望によりそろそろあの力も使うだろう。正直今のイツキ達では分が悪い気もするが……

「なんだか楽しそうですね。自分のチームがピンチだというのに。」  
「自分の、って言われてもチーム名はイセキの発案だよ。それにあいつらをチームに誘った条件って『久しぶりに派手に暴れさせてやる』だったし。その上でああなってるんだから本望だと思うよ。  
……主にイセキが。」

現にヤンマは即効でやられてしまいクボタも不完全燃焼で下がらせられたからなあ。ていうかあの三人の力関係まだ変わってないのか。

「でも、出来たらヒカルさん自身がイツキ君達と戦ってみたかったんじゃないですか？」

「それはね。でもホラ、僕の相棒達は昨日の戦いで疲れてるから。」

一緒に観戦している隣人に向かって苦笑いを浮かべつつそう言う。  
後悔は多少あるがそれはキララが倒れたという事一点のみ。昨日の戦いの反動で今日戦えないことに悔いはない。あの一人のメダロツトを救うにはそれしか方法がなかったわけだし……

「ああ、思い出しついでに昨日の悪夢が……」

「確かにキララさんのことは辛かったですね……」

「いやそれじゃなくて。それにその言い方だとキララが死んだように聞こえるけど無事だからね？」

昨日の悪夢。それは隣で一緒に試合を見ているもう一人の幼馴染、ナエからの叱責だ。結果的にキララを助けられなかったせいで落ち

込み、一人で黄昏ていたときに見つかり……そこから思  
い出したくない。

「まあ、お陰で昨日よりはマシになったから結果的にはありがたい  
んだけど……」

「どうしました?」

「な、なんでもないよ!」

キョトンとするナエに慌ててそう言い試合の方に向き直る。どつや  
ら向こうにもそろそろ動きがありそうだ。

「さてイツキ君、君は一体イセキとどつ戦つ?」

真っ先に動いたのはマゼンタキャット、そして意外にもG・Oデス  
だった。

「メダフォース・《横一閃》!!」

メタビー達に向かって駆けてくるマゼンタキャットに向かい、掲げ  
ていた右腕を空間に線を描くようにして真横に振るう。元々格闘能

力に特化したメダルでもない以上その威力は《クワガタ》メダルには及ばないが、イセキヤヒカル等が扱う第一世代のメダロット群共通の弱点として全体的に装甲が低い。無論機体にもよるだろうがマゼンタキャットの装甲は間違いなく一撃でも当てれば吹き飛ばくらい低いだろう。そしてメダフォースによる攻撃は絶対不可避。確実に1パーツ破壊できる!!

「マゼンタの《停止》をすぐに解くだけじゃなくてメダフォースまで放つとは中々じゃない。でも……」

確実に敵を斬り裂く横薙ぎの一閃。それをマゼンタキャットは敢えて左腕を前方に突き出して攻撃を受ける。無論装甲が低いマゼンタキャットの左腕は破壊されるがそれで終わりだ。敢えて左腕を犠牲にすることで最悪の状況、つまり頭を破壊されるという結末を回避する。しかも受けようと思って受けている以上怯むという事がない。マゼンタキャットはそのまま加速してG・ODESに向かう。

「チィ!!」

それに対してカラスも素早く指示を出し、ギリギリまで引きつけながら振るわれた右腕の雷を回避させて、そして右腕から鎌が飛び出しマゼンタキャットへと振り下ろさせる!!

『……………!!』  
『ニャー……………ツ!!』

結果としてこの一撃は躲された。が、G・ODESの右腕は反動で壊れていない。

「へえ上手い上手い、中々に器用だねえ!!サクリフェイスを使う



上での回数制限をこういう形で克服したわけか。」

「……あまり披露したくはなかったんだがな。」

放ったが最後、対象に命中しようがしまいがその反動でパーツが碎ける諸刃の剣。強力な一撃と引き換えに強力なリスクも降りかかるサクリファイスは使いどころが難しい。確実に当てられ、尚且つ一撃で相手を破壊出来る状況でなければ無駄撃ちになるからだ。だからこの攻撃を扱うには、

- 1．回復役の機体をサポートにつける
- 2．ベルゼルガのように回復系のパーツを装備させる

のいずれかの条件を満たすのが理想だ。しかしカラスはそのどちらの条件も満たしていない（逆に言えばその上で高い勝率があるカラスの実力は半端ないという事でもあるのだが）。今まではそれでも何とか戦えたしイツキや他のメダロッターとも互角以上に渡り合えた。

だが前回の試合でのハクマとのロボット、そして何よりも本気どころか愛機すら出されていなかったのに自分を完膚なきまで負かし、あまつさえヘブンスゲートを壊滅させたあの少年。後者に対してはユウトからもらった秘密兵器で対抗できるかもしれないが、これをもたらった者達全員の共通認識として使わないに越したことはないしカラスとしても使うつもりはない。だがまだ見ぬ強者達、例えばタイヨウの様なメダロッター達と相対した時たった二発しか撃てないサクリファイスとタメが必要なメダフォースだけで対抗できるのか？否、それが無理なのは自分自身が一番分かっている。今までは自分と互角か格下の相手が多かったため何とかなつたが世界は広い。あがたヒカル、タイヨウ、そして今戦っているイセキ。彼らは確実に自分よりも格上の相手だ。そんな相手とも渡り合うために考え付いたサクリファイスの弱点を克服する第3の方法。それこそが、

「サクリファイスの性能の一部分、つまり死神の鎌だけを引き出す。それなら反動のダメージも最小限に抑えられるし、多少威力は下がると言え元が強力な分威力にも期待できる。でも随分と繊細で無茶なコントロールが要求されるんじゃない？やれと言われても普通は出来るもんじゃない。」

「あんたほどのメダロッターに褒めてもらえるのは嬉しいが、そう思うなら躲さないでくれるとありがたいな。まだ使いこなせてないし実戦で使うのは初めてだからな、少しキツイ。」

そういうカラスの顔は苦笑いを浮かべつつも確かに辛そうだった。恐らく今尚サクリファイスを出さないようにするのに集中力を削られているのだろう。

「普通に無視して攻撃を喰らわないようにしてたら勝手に自滅してくれそうね。」

「どうかな？そんなことをしようとすれば俺はサクリファイスを放たせるぞ。それにアンタ達は機体が一機停止してる。このまま時間が経てば経つほど有利なのは俺達だけ？」

「……………」

イセキは笑っていて表情が読めないがカラスの言葉は正しい。このまま時間が経てば経つほど有利なのは……………

「まあもつとも……………」

ふとカラスがニヤリと笑い、

「主役がそんなこと認めないようだがな。」

『よく分かってんじゃねえかカラス!!』

ここまで全くと言っていいほど存在感がなかったメタビーがマゼンタキヤットの死角から躍り出る!!

『ようやく来たぜ俺の時代!! 実に数カ月ぶりの久々の出番なんだ、暴れさせてもらうぜ!!』

「ちよっ、メタビーそんな裏話はダメだろ!? 前の話とつじつまが・・・!!」

そんなイツキの叫びにお構いなしにメタビーの右腕からライフルが火を噴く! 既に《威力全開》が発動している為その威力の高さは通常時よりも高い。しかしマゼンタキヤットはそのライフルを華麗に躲し、今度はメタビーに向かって右腕を伸ばす!!

「アンタ達が隙を窺ってたのは分かり切ってるわよ。まだ青いわね!!」

「なら俺達がそれを補うことにするか。」

だがメタビーに向かって伸ばされた右腕を空中からギロチンのように振り下ろされた鎌が阻む。逸早く気付いていたらしくマゼンタキヤットはその一撃を回避するが、その隙にメタビーは即座にレクリスモードへの変形に切り替える。

「助かったよカラス!!」

「礼なら後だ!! 目の前の相手に集中しろ!!」

「分かってる! メタビッ!!」

『オラアアアアアア!!』

言葉を交わすのもその程度にメタビーは急ピッチで砲台を設置する。それはバリスター以上の威力を誇るメタビー・レクリスモードの1番、

『クロス攻撃ファイヤーッッ!!』

この一撃の前ではマゼンタキャットの装甲は紙の様なものだ。当てれば確実にとれる!!

「砲台を設置してから発射までにかかった時間は大体2〜3秒くらいか・・・早いし威力も申し分ない。けど、マゼンタのスピードを舐めすぎね!!」

だがミサイルのように《火薬》属性を持っていないクロス攻撃はマゼンタに容易に躲される。そのすぐ後に先程と同じようにG・ODEスの鎌が襲いかかるが、

『ニヤッ、ニヤッ!!』

躲し、避けて、直撃どころか掠らせもしない。メタビーの銃撃をこごとく躲し、G・ODEスの鎌も避け続ける。それも一度や二度ではない。放たれるガトリングの嵐、切り刻まんと迫る死神の鎌。それらを避けること早数分。決して反撃できるような状況にはしないよう連続攻撃で畳みかけてはいるがこうまで攻撃が意味を為さないのは圧倒的なスピードを持つロクシヨウやスミロドナットでない限り有り得ない。ヒカルの操る《めたびー》や《ろくしょう》でも先日のように《ツインレアメダル》の力がなければ掠る程度の攻撃でも食らうだろう。

だが決して速いわけではない 無論並の機体よりも操作技能の成果もあってか速いが、ロクシヨウなどとは比べるべくもない という



ギリとカラスが歯を食いしばる。イセキの言うとおりそろそろサク  
リファイスの力を制御しておくのは限界が近いのだろう。

「それだけの腕を持っていて今まで水面下に潜んでいたとは本当に  
世界は広いな。」

「当代最強クラスの実力者の渡鳥カラスにそう言ってもらえるのは  
光栄だ、とでも言っておきましょうか？」

「……いや、だが質問に答えてくれ。まるで未来を読むかの  
ようにメタビーの銃撃をことごとく避け、メタビーが動いたと同時  
にサンダーを喰らわせたあの動き、単にあんたの操作技能だけとは  
思えない。レアメダル使いなのか？」

それはイツキも思っていたことだった。過信するつもりでも侮るわ  
けでもなく恐らくメタビーやG・Oデスとマゼンタキャットの間に  
はそうLv差は無いだろうし、自分たちの操作技能がイセキに完全  
に劣っているとは思えない。だというのに自分たちはメダフォー  
スとほぼ不意打ちによるサクリファイス以外ではまともに攻撃を喰ら  
わせることが出来ていない。それはこちらも同様だがそれはあくま  
でなるべく攻撃をさせようとしていないが故。現に最初と今マゼン  
タキャットの攻撃は綺麗に決まったし、アリカのブラスもほぼ戦闘  
不能の状態だ。経験則だけでは納得できないあの動き……

「うん？何言ってるのあんた達。あたしだってちよつと卑怯臭いコ  
レ使うつもりなんてなかったけどそつちの要望でしょ？」

「「は？」」

「は？じゃなくて、言ってたでしょ。」

『お互いの為に対《悪魔》用の戦い方にしましょう。こうい  
う言い方は好きじゃないけど、俺たちのメダロットはレアメダルだからア  
レの全力を使つて暴れても大丈夫ですよ。』

つて。」

「アイツかああああああああああああああああああ！！！！」

話を聞きここにはいない人間に向かってカラスの怒りの雄叫びが木霊する。

「あの鳥の巢頭……！！余程俺を怒らせたいと見えるなあ！！」  
「か、カラス！キャラが変わっちゃってるキャラが！！」

本当にカラスは変わったなあ。昔はもつとクールだったのに。

「チ、このことについてはヤツが帰って来たら片付けるとして……  
・イツキ、お前たちは一旦下がれ。」  
「え？」

「ここからはロボットであってロボットじゃない。互いにマトモだから大事には至らないだろうが、まだ力の引き出し方も満足に覚えていないお前には早い。」

それはつまり先日のユウトやヒカルと《悪魔》、キララとタイヨウの戦いと同じ領域での《戦い》ということ。それが導く答えは、

「だ、ダメだよカラス！！そんな事したらカラスかイセキさんのどつちかが……」

「言ったる、大事には至らない。一応向こうにも良識はあるらしいしな。」

「でもカラスとG・ODESだけなんて……」

「これも言っただはずだ。まだお前には早い。それにそもそもメタビ―だって動けないだろ？」

そう言われれば反論できない。事実メタビーは《停止》で動けずまだ解ける気配もない。どちらにせよ今動けるのはG・ODESだけなのだ。

「安心しろ、ユウトから手解きを受けてたからな。」

「それはそれで何か不安だよ……」

イツキのその言葉にそうだなと苦笑しながらカラスは一步前へ出てメダロツチを操作し始める。今まで単純に支持を出していたのはまるで違う、イツキも知らない操作方法。そして、

「イセキさん、ユウトから受け取ってるであろう装置の力。速めに全開にしたい方がいいぜ。壊すことはないだろうが、この一撃はキツイからな。」

G・ODESからメダフォースとはまた違う黒い光が溢れ出し形を為す。

黒装束に骸骨の頭、そして手似携えるサクリファイスよりも禍々しい一振りの大鎌。その姿その力こそ……!!

「いくぞG・ODES。刻みつけてやれお前の力を。」

ベルフェゴールを狂喜させた《死神》はまるで獲物を見つけた喜びを表すかの如く、静かに震えながら再臨した。



第54話：イツキ・カラスVSイセキ（後書き）

ええと、本当に分かりにくい文面で申し訳ありません。次の話あたりで物語から頻繁に登場していたレアメダルでもないのに《悪魔》やレアメダルに対抗できるという装置や《戦い》についての詳しい説明が入る予定なんでもう少し分かりやk¥少なるかなと思います。で、一応大学受験は全部（色んな意味で）終わったんでこれからは以前と同じペースで上げられると思います。少なくとも4カ月放置とかはないと思いますですw w

ではでは、次の話で会えることを！！

**第55話：力の秘密と【死神】の降臨（前書き）**

お待たせしました！！今回も2話投稿でお届けします。

## 第55話：力の秘密と【死神】の降臨

「じゃあ、ハイ。ヒカルさんにこれ渡しときますね。」

手渡されたのはメダロツチの液晶画面と大体同じ位の大きさのチップだった。説明された感じでは一旦メダロツチを分解して組み込むらしい。

「これは《人工メダル》の力を《レアメダル》に近いものに引き上げる《装置》。俺とアトムさんとで開発した秘密兵器その2です。」  
「効果について、具体的な説明をしてもらっていいかな？」

それに対してユウトは頷く。

「いいつすよ。俺の知る限りの《レアメダル》についての説明って以前しましたっけ？」

「確か……」

《レアメダル》にはそれぞれに普通とは違う力がある。元々《メダル》は種類によって力は変わってくるが、選ばれたマスターの好みの戦闘スタイルや今までどんなパーツを使用してきたかによってその後の成長が大きく影響され、それは《レアメダル》も例外じゃない。そして《レアメダル》はその過程で今までの戦闘経験等から自分に最も必要とされる力を生みだしやがてそれがその《レアメダル》の特性となる力になる……」

「そうそう。ま、俺個人の考えだから確証はないし、そもそもメダルは未だに謎が多いから何とも言えないけどね。」

話を戻すと、例えばコウジのスミロドナット。あれにつけられてるのは元々射撃系統の《エース》メダル。まあ、行動の性格がパーツ

と一致してるから相性は悪くないけども本来ならば格闘系パーツを付けても意味がない。けれどコウジのスミロドナットはずっとそれで通してきたから、本来射撃属性であるはずの《エース》に今は格闘系のパーツが完全に馴染んでしまっている。これはコウジの戦闘スタイルや好みがメダルの成長に反映されたい例だ。何でコウジがこういう組み合わせを考えたのか俺には分からないけど、結果的にスミロドナットも納得してるみたいだし、メダルの能力も下がるどころかただの《人工メダル》だった頃から他のメダルよりも強力になっていったことは過去のデータから実証されてる。正直これだからメダロットっていいよなあ。」

「ゆ、ユウト君また話がずれてるよ。」

その突っ込みにユウトはすいませんと一言謝ってから説明を再開する。

「《レアメダル》の力についての説明もスミロドナットの例を使いますね。知っての通りスミロドナットの戦闘スタイルは圧倒的なスピードで敵を翻弄しつつ、そのスピードによる勢いを利用して両腕の絶大な威力を誇るソードや隙のないハンマーで相手に攻撃していくタイプだ。この点ではロクシヨウも似たようなもんだけど、装甲が軽量化されて薄くなっている分スミロドナットの方が速い。」

そしてイツキ達がマブラーと敵対していたときにスミロドナットが一人でレアメダロット達と対峙しているときにスバルが自身の力の一部を与えて、《クラフィティモード》への変形方法を手に入れ《後天的なレアメダル》へと進化した……元々レベルや経験値は当時の時点で相当なものだったらしいからそこから一気にスミロドナットの《エース》メダルは自身の力に開花し始めたんだと思っよ。

つまりは【絶対的なスピード】、相手は捕えることすら困難でロクシヨウや数々のスピードタイプのメダロットをもはるかに凌駕する

【速さ】こそがあのメダルの特性だ。」

言われてみれば納得できる説明だ。そしてその特性をフルに発揮し、完全に攻撃へ転用した力こそが……

「君が【奥義】と呼ぶ、メダフォースとは異なる《レアメダル》のみに与えられた力なんだね？」

「多分。メダフォースのようにメダルが元々持っていた素養の到達点にある必殺技とは違う、一緒に戦ってきたパートナーと共に積み上げてきた経験から生まれる力。それが俺の考えだよ。」

「それがロクシヨウの場合は【全てを斬り裂く剣】であり、その特性を生かすべく《縦一闪》を究極にまで高め上げた斬撃が【奥義】となったわけだ。そしてスミロドナットは【絶対的なスピード】を活かした神速で畳み掛ける連続攻撃こそが……」

「50点、考え方は合ってるからロクシヨウの部分は正解だけどスミロドナットに関しては多分違うね。ああいや、俺の機体じゃないし確証もないから75点くらい揚げとこうかな……」

違う？それは一体……

「だってスミロドナット、最終的にヒカルさんのめたびーに捕まっただじゃないっすか。まあ捨て身だったとはいえ結果的にはそれで勝負付いたわけだし。あの方法で勝負がついた以上、【絶対的な防御力】とかが特性の《レアメダル》とか《悪魔》がいたらそれで終わっちゃうし。第一コウジの方もダメージを受けてなかった。最初はヒカルさんが何かやったのかとも思ったけどよく考えてみるとあれってまだ【奥義】に達してないと思うんですよねえ。」

「あれでかい？」

「ええ。ま、後天的なもんだし俺の個人的考えだからはつきりと断言は出来なですけど……俺個人の考えならスミロドナット

の【速さ】にはもう一段階上がある。」

あの圧倒的なスピードに更に上が？もしそうだとしたら……

「って、また話逸れちゃいましたね。今はスミロドナットの能力談義じゃなくてその《装置》の説明でした。まあ今までの話で分かったと思いますけど、俺の考えではこと戦闘面において《人工メダル》と《レアメダル》での大きな違いは、

・仮に同じ力を出せたとしても《人工メダル》の場合そのメダルだけの特別な力を引き出せないこと

・そもそもリミッターを外そうが外すまいが引き出せる潜在能力の差が大きいこと

この二つだと思う。けど一つ目の点は克服できなかったから、これは二番目の点を無くそうと試みた結果できたもの。

自分の最も信頼するパートナーのメダルに、自身が他に所有するメダルのエネルギーを重ねる。つまり一枚で数枚分のメダルの力を持たせるための《装置》です。」

「つまり、所有するメダルが多ければ多い程自分のパートナーが扱える力も比例して大きくなるというわけか。下手をすれば《レアメダル》の力を超えるような真似もあり得るな……

けどメダル達に相当な負担をかけるんじゃないのかい？」

「……否定はしない。これは想像以上にメダル達の力を衰弱させる。そして力を与えられる側も多くのメダルの力を注ぎこまれるわけだからかなりの負担を背負うことになると思う。ON/OFFの切り替えは自由に出来るとはいえやっぱり危険なことに代わりはない。けどもし《レアメダル》の力を借りられない状況で奴らが攻めてきたとき、対抗手段はこれしかない。明日の試合はそういう場合もあり得るんだから……」

それがヒカルに渡した理由の中でも最大の理由だった。タイヨウと

マモン、この二人相手にヒカルだけで戦うのは難しい。だがヒカルの持つ《ツインレアメダル》以外で対抗できそうな力を持つ機体はない。ゴッドエンペラーでさえ仮にリミッターを外したとしても戦力としては数えられないのだ。

「この《装置》は全部で三つ。他にも作ってはいるけど現状ではこれだけです。誰に渡すかはヒカルさんに任せます。」

「……分かった。」

抵抗はある。出来れば使いたくはないし、こんなものを作ったユウト達に対して思わず言いかけてしまう事もある。だが今直面してる事態はそれだけ危険なのだ。こんなものを使わなければいけないくらいに。メダロット博士はもちろん、ユウトとて外面では何でもないように振る舞っているが、内心ではかなりキツイのだろう、それがなんとなく分かるからこそヒカルは敢えてこの時何も言わずに受け取った。

「一つ聞いてもいいかい？もしコウジ君が勝っていたらどうするつもりだったんだ？」

「貴方が負けることは予想してなかった。けど物事に100%なんてないから……その場合はコウジとスミロドナット次第だけど、多分棄権させてた。てか、本当ならヒカルさんにもそうしてほしいんですけどね。」

「それは出来ないよ。全てを知り、ユウキのことも関わっている以上キミにだけ任せるなんて出来ない。」

「……すいません。」

これが、コウジとの試合の後に交わされたヒカルとユウトの会話の全て。だがこの時はユウトにすら誤算があったことを翌日知ることになる。そう、タイヨウが《レアメダル》を所有し、尚且つそれが





カラスもこの程度のことは予測していた。むしろこの手のタイプは有り得ないような状況ほど力を増す。すかさず指示を飛ばしG・Oデスを介して【死神】を操作する。まるで指揮者タクトのように振るわれるG・Oデスの両腕の動きに合わせて【死神】の動きも激しく、鋭いものになっていく。目が無い筈の髑髏が笑い、マゼンタキヤットを追いつめていく。振るわれる鎌は鋭く、そして静かでないがらモーシヨンが見えない。否、正確に言えば見えないのではなく存在そのものがまるで陽炎のように朧げで【死神】の位置や間合いが把握しにくいのだ。だがそれをメダル全ての膨大な経験による勘で何とか把握し、右腕に今まで以上に強大な雷を纏わせながら【死神】の死角に回り込みG・Oデスへと駆ける！！

「カラス！！」

「終わりね。意外と手こずらせてもらったわ。」

「どうかな？」

勝利を確信したイセキとは対照的にカラスの笑みが深くなる。直後、

ゾクリ……………ッ

「っ、マゼンター！！」

マゼンタキヤットの背後に音もなく【死神】が立っていた。それもイセキから声をかけられなければ気付かなかったであろう程の気配の無さ。マゼンタキヤットがそこで初めて恐怖らしき感情を体で示し、距離を取ろうとするがそれよりも早く鎌が振り下ろされ……

……

「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何だ？」

「あとの位かかりそうだな？」

「何とも言えんが、考えていた時間よりも早く終わることはないな。」

「そっか。」

そこで会話が途切れる。あれからまだ30分も経っていないのだが、同じような作業を延々とやり続けることは大抵の人間にとって苦痛以外の何物でもない。ユウトもその例には漏れず作業の手は落ちていないものの、やはり少し疲れてきていた。

「あー、目がチカチカしてきた・・・・・・・・お前は大丈夫なのか？」

「俺は機械の体だし、そもそも人間ではないからな。そう苦でもない。」

「ああ・・・・・・・・不謹慎かもしれねえけどこういうときは羨ましいな。」

「俺だって人間の体を羨む時があるぞ？貴様がいつも美味しい美味しいと言っているポップコーン、お陰で一度喰いたくなってしまったがメダロットの食事はオイルだけだからな。」

「ハハッ、お互い様だな。」

「全くだ。」

少し笑ったからだろうか、時間として一分にも満たないが少し目が

楽になってきた。

「さて、さつさと終わらせなきゃな。」

『急ぐ必要はない。イツキ達が勝つことを信じているのだから?』

「信じてはいるけど物事に絶対はないからさ。負けた場合のことも考慮に入れてるんだよ。」

『そしたら尚の事急ぐ必要はないだろう。』

「アホ、ヒカルさんは本調子じゃないし恐らく明日には間に合わない。黒衣あいつがいる以上カイが勝てる確率も激減してるしな。だから急がないと……」

『キララ殿の事、気にしているのか?』

その一言で、初めてユウトの手が止まり感情の無い瞳でロクシヨウを見つめる。ロクシヨウの方は全く手を休めていなかった。

『お前の性格だ、気にするなというのも無理かもしれんが……あれはお前のせいではない。事実タイヨウが《?》メダルの使い手でなければアレはちゃんと作動していた。ピーストマスターに搭載されているのがあの伝説のメダルだったという事に関しては、お前が気付かなくても気に病む必要はない。』

「気に病む?俺がか?それは無いよ。確かに悪いとは思ってるけどさ。」

『……ならいいがな。』

「……お前絶対分かってっつてないだろ?」

『さあな。なにせよお前がそう思ってるのなら俺から言う事は何もない。それよりも急ぐのだろう?手が休んでるぞ。』

「……」

ユウトは不満そうな顔を一瞬見せたがすぐに表情を直し再び画面に向かう。

「ところで……実際どうなんだ？ イツキとカラスは。」

「ん？ ああ、カラスに関してはもう俺から言う事はないな。あいつは天才だ、本物のな。【奥義】が使いこなせるようになるまでそうかかんないと思うぜ？」

「では……」

「イツキに関しては更に言う事ねえよ。なんせあいつは《カブト》に選ばれてるんだからな。今はまだダメだけどすぐに追い付いてくる。ま、そこまで引き上げてくれる相手は限られてくっけどな。」

「だからイセキ殿に？」

「ああ。ヒカルさんがキララさんとイセキさんに渡すのは予想通りだったしな。」

しかしそこでふと考える。もしかしたらイツキはイセキと戦っていないのではないか？ カラスだけで戦っている可能性も……

「ありうるなあ……」

全開で痛感したと思っていたがやはり自分は少し考えが足りていない。これではカラスの訓練はなされてもイツキの方は……

「いきなしぶつつけかなあ。まあ前ので仕組みは掴んでるだろうか  
ら自覚すれば問題ないんだろうが……」

これはやはり、急いだ方がいいかもしれない。

## 第56話：喜べぬ勝利

「外したか……確実に取れた筈だったんだが、やはりまだ精度が甘いな。」

「全く未恐ろしいわね。最近の若いのはこんな奴らばっかりなの？」

あの一撃をマゼンタキャットは先と同じように右腕を犠牲にするこ  
とで躲した。結果的に攻撃手段が回数制限のある頭パーツのサンダ  
ーのみになってしまったわけだがそれよりもあの【死神】……

（まともに食らってたら危なかったわね。いや、右腕を切り離すの  
が数瞬でも遅かったら……）

マゼンタの右腕に鎌が触れた瞬間に悟った。判断を誤れば確実に勝  
敗が付いていた事に。ヒカルは《レアメダル》にはそれぞれ固有の  
能力を持つと聞いていたが、恐らくカラスのG・ODESの能力は、

「一撃……」

「何？」

「【一撃で相手の命を刈り取る死神】それがあんたの《レアメダル  
》の力なんですよ？」

「……違う、と言っても信じないんだろうな。」

イセキの推測は当たっていた。G・ODESの攻撃は犠牲行動のサク  
リファイス。一度使ったらパーツを回復させない限り使用不能にな  
る両刃の剣だが、カラスはこの技を好んでいた。無論、使用回数二  
回という少なさ故カラスはこの技を確実に当てるために命中精度を  
高める訓練は欠かさなかった。そのお陰で命中率に関しての不安は

無くなったが、それでも相手が強ければ強いほど一撃で倒すのは難しい。確実に頭パーツを潰そうとしても決め切れなかった経験も少なくない。

その経験からG・ODESの《マリン》メダルが導き出した答えこそ、一撃で相手を倒す。それを徹底的に追求した幕引きの死神だ。この【死神】を前にし、その一振りを受けたメダロットは一撃で機能停止する。

(これが……カラスの力。)

想像以上だ。だが、それだけに改めて実感する。これは違つと。こ  
とロボットにおいては反則的能力だと。だが、現在押していた筈の  
カラスの方はどうやら違う感想らしく、

(今の一撃で決めきれなかったのはイタイな。)

G・ODESの《マリン》メダルの攻撃の根幹はサクリファイス。その究極系である以上、ノーリスクである筈がない。瞬間、

バキィツッ!!

「っ!!」

G・ODESの脚部が壊れ、右腕と頭にも亀裂が入る。その亀裂は一  
秒ごとに深くなつていき……

「【死神】を出してから大体一分ちよつとか。時間が無いか。」

「か、カラス。これは一体……」

問いには答えずカラスは一旦【死神】の動きを止めて、マゼンタキヤットを睨みつける。やはり【死神】が関係しているのか、動きを止めたと同時にG・Oデスの体の崩壊はおさまった。

「なるほど、時間制限付きなわけね……」

「だから何だ？このままG・Oデスが自爆するのを待つつもりか？悪いがこうして動かさなければG・Oデスに負担はほとんどかからない。ソイツが動けば即座に刈り取るまでだ。何もせずに立っているだけなら判定で俺たちの勝ちだ。どれがいい？」

そう、圧倒的優位に立っているのはこちらだ。少なくともこの状況ではイセキに勝機があるとは思えない……だということになった？この胸騒ぎは。カラスの言葉も現状を的確に表してはいるがまるで虚勢を張っているようにも見える。一体……

(まさか!?)

何故忘れていたんだ!？この戦い、マゼンタキヤットはメダフォースを一切使っていない!!

「カラス!!」

叫んだときには両者とも既に動き出していた。【死神】は再びマゼンタキヤットへと向かっていくが、それよりも先にマゼンタキヤットの体が輝きだす!!

「メダフォース……ッ 間に合うか!？」

「さあ、けど分かってるでしょ？マゼンタの方が速い。」

そしてマゼンタキャットを中心に冷気が溢れ出す。前日にイツキに見せたものよりも遙かに強大なエネルギー、規模はこちらの方が上か!!

そして遂に【死神】の鎌がマゼンタキャットの首を捉える!!だが、既に準備は整っており……

「凍てつきなさい。」

『メダフォース!!オール……』

【そこまでええええええええええ!!!!時間切れ、試合終了です!!!!】

「……へ?」

「何とか間に合ったか。」

「……終わっ、た?」

三者三様の言葉が漏れる。どうやらもうタイムリミットだったらしい。結果的にイツキ達は動けないプラスを含めて機能停止した者は一体もおらず、対するイセキ達はシアンドッグが機能停止している。つまり……

【判定の結果、イツキチームの勝利ですっ!!!!】

うるちの掛け声と会場の大歓声の元、イツキ達は辛くも勝利した。



「あー、よりも寄って判定負けかい……………」

「アンタのせいよヤンマ。」

「俺かよっ!!！」

「結局、イセキシか暴れてない……………」

「あたしだって不完全燃焼だったの!!！」

向こうは向こうで何やら盛り上がっているようだがイッキとカラスの表情は暗い。

(最後、判定で試合が終わって無かったら負けていたのは俺たち……………G・Oデスの攻撃は一步届いていなかった……………  
つつ)

(結局今回も最後はカラスに任せっきりだった……………僕たちは、何て無力なんだ……………)

二人は今の戦いを勝利と感じてはいなかった。判定勝ち、数を見れば優勢、結果だけ見れば確かに勝利と呼べるだろう。だがこの戦いは自分たちの敗北だ。もしマゼンタキャットのメダフォースが発動していたら、間違いなくやられていたのだから。文字通り試合に勝って、勝負に負けた……………

「イッキ、カラス君。思うところがあるのは分かるけど、今は戻るわよ。いつまでもここににいるわけにもいかないんだから。」

「そう、だね。」

アリカの言葉に頷き、勝利ならざる勝ちにももの思う事がありつつもイッキ達はその場を離れることにした。

『……………で、今回も活躍を白スケに全部取られた俺はいつになつたら動けるようになるんだ?』

「まったく、何だよ今は……………カラスといいイセキって人といい、ロボットってレベルじゃねえぞ……………」

観客席で眺めていた大多数の連中にはどう映つたか分からないが、あれはない。通常のロボットという枠から明らかに外れている。見るからにヤバい【死神】にそれらをことごとく躲して見せた普通じやあり得ないような先読みを行い、発動こそしなかつたものの最後にマゼンタキャットが放とうとしたメダフォースによる雷の出力……………

「一応ちゃんと使いこなしてたから危ないことにはならなかつたけど……………ヒカルさんに倒されなかつたら俺はあの力を暴走させていたのかもしれないんだな。」

自分以外の規格外の力を見て初めて理解する。これは普通のロボットの世界にあつてはならないもの、そして出来ることなら関わつてはいけない力だ。

「もつとも、俺はもう関わるって決めたんだ。今更後戻りする気なんてねえけど……………」

この力についてちゃんと考える必要がある。二度とあんな馬鹿な真似はしないように。

「……噂には聞いていたが、凄まじいな。スミロドナットにもあんな力があるんだろ？」

「まあ、な。つてかミズチは見てないのか？」

意外だ。俺に関してはともかく、てつきり本気のヒカルさんの初戦だったからちゃんと見てたと思ってたのに。

「丁度その頃はグレインの最終調整をやってたんだよ。予選前日の時点で最終チェックは済ませてたんだが、やはり実戦だとまだよく動いていなかったからな。イッキ達と戦うのに万全でないグレインを出すわけにもいかなかったし、だからその試合については聞かされた程度で詳しくは知らない。」

「成程な。」

確かにグレインは元々が兵器として作られていた機体だ。現在はゴッドエンペラーのようにパーツ全体の出力を抑え（もっともビーストマスター戦ではリミッターこそ外していなかったが出力は戻していたが）、メダルにもリミッターをかけ直すことで普通のメダロットとして安全になっているが、それでもちよつとした誤差でとんでもないことに発展する可能性はある。そういう理由なら仕方ないだろう。

「まあいいや。それより問題は次だ。」

「へえ、予想はしてたけどやっぱりこうなっちゃったか。」

一旦ロクシヨウの補給も兼ねて作業の手を止め試合を放送しているTVチャンネルに回したところ、っ気たちは勝利したらしい。だが判定勝ちで。

『予想していた？お前はイツキ達を鍛えるつもりでぶつけさせたんだらう？』

「知ってるだろ？俺は肝心なところで何も考えてねえっていう短所があんだ。こればかりは直せねえみたいでな、後になってあいつらの性格とか色々考えてみたらこうなるのも分かつちまった。」

だが別にこの組み合わせが無駄に終わったとは思っていない。恐らくほぼ戦闘はカラスが行ったのだらうし、それならばカラスに関しては本当にもう心配はない。ベルフェゴールが出てきたときも感情をコントロールできるようになっていれば大丈夫だ。イセキに関してもアレの使い方カラスとの実戦でちゃんと学べただらうし、当初の目的とは異なったが予想範囲内だ。後はイツキだけ……

「って、マジで最低だな俺は。自分から巻き込んでおいて戦力になるとかならないとかそういう計算してるんだぜ？俺は本当にあいつらのことを友人だと思ってるのかねえ……」

『ユウト。』

「分かってるよ。けど俺はもう自分の心も良く分かんねえんだ。あの事件の落とし前をつけるためにこうやって行動してるけど、それは本当に俺は望んでいるのか？力に酔っているんじゃないか？あいつらを体よく利用してるだけじゃないか……ってな。」

本当に嫌になる。本当に俺は何をしたいのか……

『……お前自身の事はお前にしか分からん。だが間違ってい

ると思った俺は従わないしお前を諭す。だからとりあえずはやり  
たいようにやればいい。ダメなときは俺がいるからな。』

「……サンキョ。」

やっぱ、お前は俺にもつたいたい相棒だよ。本当に……

「じゃ、俺1時間ほど寝るわ。ちゃんと寝とかねえと集中できない  
しな。」

『お前の事だから作業時間の計算にもちゃんと組み込んであるんだ  
ろうからそれは構わないが……見なくていいのか？カイの試  
合を。』

「どのみちカイが勝とうが負けようがやることは同じさ。解析を終  
えてイツキ達のとこへ戻る、それだけだ。」

そう言って予め敷いていた布団に潜り込んだと思ったら10秒後には  
既に寝息を立てていた。相変わらず驚異的な睡眠速度である。ロ  
クシヨウはそれを眺めてから、TVの電源を切り自らもスリープモ  
ードに移行した。

「皆さんお疲れさまでした。それと決勝進出おめでとございます。」

「ありがと、カリンちゃん。ってどうしたのイツキ、元気ないじゃ  
ない。カリンちゃんが来てるのに。」

「え、ああそんなこと無いよ。ありがとカリンちゃん。」

と言いつつ、イツキの顔は暗いというほどではないものどころか思  
いつめているようだった。

「やっぱり、さっきの試合ですか？」

「それもあるんだけど……それよりも次の試合かな。」

何せ二人目の《悪魔》の試合だ。前回のりんたるうとの戦いでは最後の方で良く分からないことが起きて、りんたるう達が絶叫していたが……

「俺たちの試合は終わったとはいえ、次の試合を考えると観客席にいるわけにもいかないかな。イツキ、俺たちは……！」

ドサツ！！

「カラス！？」

「ちょっと、どうしたのよ！？」

カラスの言葉が言い終わらないうちにいきなりカラスの体が崩れ落ち、イツキとアリカは慌ててカラスの側に屈みこむ。

「大丈夫だ、心配いらない。」

心配する二人を安心させようとカラスは笑顔を浮かべ立ち上がろうとするが、

「……っ」

両腕を支えにして立とうとしても足が全く動かず、更に支えにしていた右腕も急に力を失ったように曲がり、再び倒れこんでしまう。

どう考えても普通じゃない。

「カラス、一体……」

「成程、これがアイツの言っていた反動というわけか。聞いてはいたがここまでとはな……」

イツキの質問には答えず自嘲気味に笑うカラス、だがそれで原因が分かってしまった。つまりさつき発動した……

「悪いイツキ、ちょっと動けそうにないらしい。まあ、別に立てないからつてメダロットを操れないわけではないから……」

「そんなことを言っている場合ではありませんわ！！カラス君、医務室に行きますわよ。」

「いや、俺は別に平気……」

「カラス君？」

平気だと言いつ張るカラスに対して、不意にカリンの顔が凍りつく。マズイ、これは……！？

「カラス君……あんまり聞きわけがないと、私本気で怒りますわよ？」

出たああああっ！！カリンちゃん・怒りモード！！あのミズチですら戦慄し、感情のまま怒鳴り散らしていたコウジやアリカすらも一瞬で黙らせた最恐の存在。まさかカラスに使おうとは……

「あ、いやその……」

うわあ、最近は珍しい姿ばかり見てたけどこれは別格だあ。あのカラスが何も言えずに動揺してるよ。

つてそんな場合じゃない！！このままではカラスの命が！！

「アリカ、任せたよ！！」

「え！？わ、ワタシ！？」

「前に宥めたのもアリカとコウジだったでしょ。じゃあ任せたから！！」

「いや、あのときは状況が違ったって言うか今はワタシしかないっていうか……ってこらイツキどこ行くのよ！？」

後の事は全部アリカに押し付けることにしてイツキはくるりと方向転換。そのまま走り出す態勢に入り、

「イツキ。」

「？」

「ちゃんと話しあつてこい。」

「……ありがとう。」

こちらに顔を向けられてはいなかったが、それでも充分だった。カラスに礼を言い、イツキは目的の場所へと走り出す。……後ろから何か断末魔の叫びとか呪詛らしきものが聞こえた気もしないではないが敢えて気にしない。

（でもカラス良く分かったな……）

イセキ達との試合、誰にも言うてはいなかったが勝つても負けてもイツキはある場所に向かうつもりでいたのだ。それはかつて敵であり、友であり、憎まれても仕方ないことをした相手の元。あのとき同一人物という保証はないし、どちらにせよ合つて何を話したらしいのかなど分からない。だが、せめて……



「確かめたい。そして出来ることならもう一度……」

前回はイセキに拉致されて会えなかったが今回は大丈夫だと信じた。この後の結末がどうなろうと、多分落ち着いて話せる機会は今しかないと思うから。

## 第56話：喜べぬ勝利（後書き）

はい、前回と言い今回と言いメタビーの出番もロボットル描写も少なくてすみません・・・正直なところV S イセキ編をこれ以上延ばすわけにもいかないので少々斬り上げた感は否めません。その事については本当にすいませんです。

で、次はいよいよカイとイツキの再開とカイの試合です。今回はちゃんとロボトれるといいなあ。

それから、風月さんと藤村紫炎さん。長い間お待たせしていたというのに投稿してすぐ読んでいただいた上に感想まで残してくれてありがとうございます！！

特に風月さん、もちろん覚えていますよwwちよつと読めなかった期間があつて溜まつてはいるものの、そちらの小説も引き続き読ませていただいています。今はツバサが何故ダークチップを必要としていたのかという部分でやっぱ面白いです。早く追いつかなければ！！

それから気付いた方もいるかもしれませんが、今回からあらすじの部分ちょつと変えて、最後に投稿した話の中の一文を抜粋して載せるという方法をとっています。果たして今回は誰でしょう??

それでは今回はこの辺りで。では次の話で会えることを！！

『……結局痺れたまんまなんだけど、俺は一体いつになっ  
たら出番が来るんだ？』

第57話・出るのは誰だ？（前書き）

57話目です！！DSの発売日までには65話くらい書いてあるとい  
いなあ

## 第57話：出るのは誰だ？

「……よく聞こえなかった、もう一度言ってくれるかカイ？」

ラブレター男の質問はもつともだった。イツキ達の試合が終わり、次は自分たちの番なのだ。判定勝ちとはいえ決勝に勝ち進んだのはイツキチーム、ならばこんなところで負けるわけにはいかず絶対勝つて決勝に進んで見せる。そうかつてない意気込みを持っていた矢先に、

「だから、リーダー達には今回は出ないでもらいたいです。今回の相手はメダロッターとは言えない危険な相手です。だからヒカルさんの試合と同じで今回は僕だけで……」

「ふざけてるのか！？お前だけで試合に出るだと、そんなこと認められるか……！」

「しかし、前の試合を見ただしょう。今回ばかりは勝手が違う。愛機を失うことだって十分に考えられる。」

「だったら尚更お前一人に任せておけるか。危険なのは全員同じだ。」

まさか、ここまで分からず屋だとは……カイにとってこの状況は極めて良くない。ここに集まっているメンバーはここまで残っているだけあって実力は低くないが、それはあくまで平均以上というレベル。カイ以外の誰一人として今度の相手と渡り合うのは不可能だ。しかもそんな相手が最低でも二人はいる。《悪魔》と《黒衣》を相手にカイ一人で勝つのは難しいだろう。

「こんなことを言いたくありませんが、足手まといなんです。リーダー達と彼等の間にはそれだけの開きがある。」

「なにを・・・っ!！」

「二人ともストップ。これじゃあ埒があかないわ。少し落ち着きなさい。」

ラブレター男が今にもカイに掴みかかろうとしていた状況に見かねて、今まで黙っていたウオナが口を出す。

「最後の発言に思うところはああるけど、普段はそんなことを絶対口にしないアンタがそう言うんだ。次の相手はそれだけ強い、いえないってことよね？」

「うん。彼等のチームが二回戦にシードで進んで来たことに感謝しなきゃいけないくらい。そうでなかったらきつと前のあの二人だけじゃ済まなかつたよ。」

「だから私達は戦うなど。けどアンタは戦うつもりなんでしょ？」

「・・・（コクリ）」

自分は絶対に彼等と対峙せねばならない。その為に僕は・・・

「・・・確認したいんだけど。あたし達じゃ勝てないそんな奴らを相手にアンタなら勝てるの？」

問いは静かに、それでいて有無を言わさぬものがあつた。だからこそカイの返事も半端なものでは許されない。

「正直に言えば、あの二人はかなりの強敵だ。確実に勝てる自信はない。」

「それなら・・・」

「でも。」

ラブレター男の言葉を制し、一日間をおいて、

「1対1の戦いに持ち込めるなら、僕は絶対に負けない。」

続いた言葉は決意と自信両方を含んでいた。この戦いに勝つことは自分を含めチーム全員の望みだ。しかし相手は怪物、なればこそ戦うのはカイ一人で無くてはならない。そして皆を戦わせず自分だけ戦うなどという勝手をする以上負けることは許されない。

「・・・・・・・・」

ラブレター男も黙っている他の面子もカイのただならぬ決意に圧倒されて何も言えなかった。

思えばカイについて彼らはほとんど知らない。大会の数日前に突然転校してきた少年。親しみやすい人柄と確かな実力、だがそれよりもどこかで見かけたような違和感・・・・・・・・偶然の再会なんて素晴らしいものじゃない、ただどこか、そうどこかで見かけたような・・・・・・・・自分たちは彼に僅かなりとも関わっていたことがあるのではないか・・・・・・・・

そしてこの中で一番冷静かつ客観的に物事を見ることが出来る実質的なリーダーのウオナはしばらく黙っていたが、

「・・・・・・・・分かった、アンタに任せる。ただし絶対に負けることは許さない、いいわね？」

「分かってる。こんな我儘を自分から言い出したんだ、絶対に勝ちを持って帰るよ。」

これで話は纏まった。後は向こう次第だ。

「ま、ウオナちゃんが決めたんなら仕方ないけど。言っとくけどカイ、向こうがその申し出を断ったら俺も出るからな。」

「分かってます。その時は出てもらう以上、遠慮なくリーダー達の力を借りさせてもらうよ。」

「ならいい、任せたぞ。」

コツンとカイの肩に拳をぶつけラブレター男は扉に手をかける。

「ま、後は会場に行ってから決めようぜ。もうすぐ時間だ。」

その言葉に一同頷き、彼らは試合場へと向かった。

「……………」

『お前本当に縁がねえみたいだな。ここまで来ると俺も何も言えな  
いぜ。』

彼らが部屋を出て5分後、イツキはすれ違う事すらなくまたもカイと会えなかった。

「仕方ない、会場に行こう。どの道行かなきゃいけないかったんだし。」

「

出来ることなら試合前にカイと一度話しておきたかったのだが……  
……こうなってしまった以上仕方ない。

「けどカラスは多分動けないだろうしヒカルさんの方もまだだろうし……  
……コウジにだけでも声をかけとくべきかな?」

『お前が決めるよ。どっちにする俺は猛烈に機嫌がワリいからな。  
何かあったらいつでも暴れてやるぜ。』



それはまあ、ここのところ本当に良いところなしだからなあ。

### 《悪魔》 達のアジト

「ようやくこの時が来たようだぞマーブラー？貴様の息子と我らの激突の時だ。果たしてどちらが勝つのかな？」

「……知らないよそんなの。正直今の状態はお前らの言葉が頭に響くんだよ。用がないなら消えてくれ。」

この日のルシファーはいつになく上機嫌だった。彼らが長い間追い求めていた《コクーン》、その所在についてマーブラーは固く口を閉ざしているがそれとは別の方法で、つまり今回の戦いに勝てばその在りかが分かるかもしれないのだから仕方ないことではあるのだが……長い間監禁されているマーブラーにとってはあまりいい気分ではなかった。なまじ死なないようにギリギリのところを命を繋ぎとめられている状態なので尚更だ。

「それはスマナイな。だが実際のところ興味が湧いてこないか？お前自慢の息子とそれが操る黒いカブト、対抗するのは《悪魔》と黒きクワガタ……私としてはどちらが勝っても面白いことになると思うね。」

「ハッ、《悪魔》ねえ……随分とその呼び名を気に入ってるみたいじゃないか。自分達でもそう名乗ってるのかい？まあそれはいいけど自慢の息子って何のことかな？僕は特に何もしていないん

「だけど？」

「とぼける必要はないだろう。以前貴様が地球に送った何か、アレはメダルに封印された貴様の子供達を動かすべく力を分け与えたのだろう？だが最も強力な駒である【火】は既に天領イッキの持ち札であつたようだから、仕方なく次に優秀でブラックビートルとの相性もいい【水】を目覚めさせた。」

「だから知らないって。けどまあお前の言う事が正しいとして、そんなことが出来るのなら僕はスピリット全員を目覚めさせるんじゃないかな？それに僕としては一度僕から切り離れた以上、いつ目覚めるか分からないセルリアーノ達より既にメダルになっているエレクトラ達の方が動かしやすいんだけどね。」

「マーブラーは本当に興味がないようだ。というよりイッキ達の動向が心配ではあるがこの男と話すのが嫌だというのが一番なのだろう。この男は毎日自分に会いに来ているのだが、その度に思う。気持ち悪いと。会う度に、というより何か事が起こるたびに逐一何が起きているのかを聞かせては、実力はあるのだがラスボスではないいわゆる小物のような姿を見せるのだが、それが真実なのかどうかは分からない。読めないのだから何を考えているのかが。恐ろしいわけではない、怖いわけでもない。ただ一つ、この男に対する感情は『気持ち悪い』。姿ではなくその内面が。」

「貴様も真実を話してはいない以上、こちらも全てを話すつもりはない。だが先の質問に応えたとすればまず第一にそのような様でスピリット全てを目覚めさせられるわけがないからだろう。一体しかなできなかったからこそ一番ブラックビートルの扱いに長けた【水】を目覚めさせた。」

「だから何でセルリアーノにする必要があるんだよ。大体さつきも言っただけど……」

「どうやったかなど知らん。興味はあるが貴様が口を割るとは思え

んしな。

だが何故選んだかの理由は明確だろう。他のスピリットではむしろ天領イツキ達を傷つける恐れがあるからな。スピリットは人間を嫌っている以上それは仕方ないことだろうからな。だが【水】だけは違う。奴はスピリットの中で最も天領イツキと深く関わっている。まあそれ故に因縁も他のスピリット以上にあるのだろうが、お前はそれに賭けた。そう言う事だろう。」

「……………」

「だんまりか。まあいい。しかし私とこんな話をしているだけでは退屈だろう。こちらとしてはこれ以上貴様を弱らせるわけにもいかないからな。」

そこまで言ってパチンと指を鳴らす。するとマーブラーの正面に映像が映し出され……………」

「これは……………?」

「現在地球で行われている大規模な大会の映像だ。既に天領イツキのチームは決勝への切符を手に入れていてな。そして今度は最初に言ったカードで決勝行きを決めるというわけだ。私も一人で見るのは退屈なのでな。」

「……………」

場所は戻り会場……………」

【皆さん!!!大変長らくお待たせいたしました、これより準決勝第

「二試合・チームアンダーシエルVSチームアスモデウスの試合を行います!！」】

「いよいよ始まるな。《悪魔》とブラックスタッグか……あいつらじゃあキツイ相手じゃないか?」

観客席とは別の、試合場に比較的近い場所でイッキとコウジはスタンバイしていた。もし万が一のことがあった場合駆けつけて止めるために。既にメダロット博士を介してその許可をもらっているからコウトの時のようなペナルティを負う事はないだろう。どうやら運営の方もこの重要性についてこれまでの戦いで理解してくれたようだ。

「そうだね。だからこの場合ラブレター男達がとる手段といえば……」

「一番強い奴同士によるタイマンロボットだな。けど相手がそれを受けると思うか?」

「分からない。けど勝機はそれしかないんだ。普通に戦ったら自殺行為なんだし……ん?」

どうやら話し合っているうちに試合方針が決まったらしい。ラブレター男達に唯一の勝機がある、タイマンロボットだ。

「まず第一関門は突破ってところ……けど問題はまだ残っている。誰が出るんだ?」

「ラブレター男達の方は……やっぱりか。」

予想通りカイが出るらしい。どうやら既に話し合っていたらしく方針が決まった後二、三言葉を交わした程度で出てきた。まあ一番実力が高いのは間違いなく彼だろうし、もし万が一の事態になっても

ブラックビートルは《レアメダル》だ。対応は出来るだろう。だからと言ってイツキ達がこの場を離れるわけにもいかないが。

「そっちは分かり切ってたけどな。気になるのはあっちの方だ。《悪魔》か、それとも《黒衣》か。あるいは未だ出てきてない三人目か。」

「普通に考えればアスモデウスって人だと思うよ。このチームのリーダーだし《悪魔》だし。なにより相手はブラックビートルなんだ。出し惜しみはしないだろうし。」

「だよな。それこそ考えるまでも……って!？」

反対側のチームから出てきたのは、イツキ達の予想を裏切り《黒衣》だった。それに驚くがすぐに思いなおす。ボロボロだったとはいえ一度は《悪魔》のマモンを下したユウトが勝てるかどうか分からないといった実力者なのだ。そしてこの状況で出してくるという事は、

「成程、イツキ達と違って直に対面してない分半信半疑だったんだが、ユウトの言ったことはあながち嘘じゃないらしいな。どうやらあいつらの中で一番強い使い手らしい。」

「そうだね……(カイ……)」

カイと《黒衣》、奇しくも激突するのは黒と黒。ブラックビートルスタック共に闇の機体を操り素姓の分からない謎の使い手。互いに実力は未知数、どんな戦いになるかなど誰も予想できまい。だがこれだけは確実に言える。

この戦いは恐らく、あらゆる組み合わせの中でも最も危険な組み合わせの一つだ。

第57話・出るのは誰だ？（後書き）

というわけで次回はブラック対決です！！実はメダロットを一人でやっていると白でも黒でもカブトVSクワガタって意外とない組み合わせなんだろうな。か通信対戦じゃないと分かんないんですね。果たしてこの小説ではどうなるのでしょうか！？

**第58話：激突！！ブラックビートルVSブラックスタッグ（前書き）**

ハイお待たせしました、第58話と59話です！！今回も2話投稿  
で行きますよ。

## 第58話：激突！！ブラックビートルVSブラックスタッグ

仲間に見送られ、カイは一人フィールドへと上がり相手を眺める。全身黒いフードで身を包みこの場からでは顔を判別することは出来ないが、前回の試合を見る限り《悪魔》ではないらしい。

「意外ですね、てっきりあちらの方が来ると思っていたんですが。」  
「不服ですか？」

「いえ、貴方達が相手というのならそれで構わない。」

《黒衣》の言葉に苦笑しつつ言葉を返し、カイはブラックビートルを転送する。

『・・・・・・・・・・』

静かに佇むその姿はどこかロクシヨウに似たものを感じる。何も語らずただ直立しているだけで全てを伝えているようだ。即ち向かってくる敵は排除する、と。それを見て《黒衣》の方もブラックスタッグを転送し、

「戦いを始める前に一つ確認しておきたいことがあるのですが。」  
「・・・・・・・・・・なんですか？」

後はうるちの開始宣言を待つのみというところでもそんなことを言われ、カイはブラックスタッグに向けていた視線をわずかに上げる。

「あなたの正体についてです。それを確かめたい。」

「意味が分かりませんね。僕は僕です、それ以外の何者でもない。

第一何故それを今聞く必要があるんですか？」



「いえ、この試合が終わった後倒れているであろうあなたには聞けないでしょうから。」

それは挑発とそれ以外の何かを含んだ言葉だが、無論そんなものにカイは乗せられない。ただ先程と変わらぬ表情で《黒衣》を見つめるだけだ。

「……失礼しました、少し悪ふざけが過ぎましたね。忘れてください。」

「それは構いませんが……ではお返しに僕からも一つ。僕としてはどちらでもいいんですが本当にいいんですか、そちらの方ではなくて？」

これは挑発ではなく確認だった。少なくともカイに挑発の意図はなく、相手が誰であつてもこの際関係なかった。前回の試合、そして《黒衣》の雰囲気から考えて《悪魔》と同じようなポジションに収まっていることは明白だったから。

「ええ、私とブラックスタッグがお相手します。前回の試合で分かったかもしれませんが彼女はあまり戦闘向きではない。私の方が……」

「くだらない。」

その一言で、場の空気は一変する。

「さつきも言ったように本当のところはどうでもいいんだ。君達の実力も誰が出てこようとも関係ない。ただの人間如き、誰が来ようとも私には意味など無いのだから。」

それは浦島カイではなかった。いや、それは言い方がふさわしくな



『『っ！！』』

開始の宣言が終わった瞬間、二機とも全く同時に動きだしていた。そのまま互いに一直線に向かっていき、

ジャキイイツッ！！

『運が良かったなあ、後数ミリでも踏み込んできてりゃあテメエの頭斬り落してやったんだがよお。』

『それはこちらのセリフだ。貴様がその右腕を後1ミリでも動かしていたら貴様の頭には風穴が空いていたぞ？』

ブラックスタッグの右腕から伸びる鉤爪のような鋭い刃がブラックビートルの首に後1センチというところで止まっており、逆にブラックビートルの右腕から伸びる砲身がブラックスタッグの顔面に突きつけられていた。二人とも先の言葉は偽りでなく言葉通りに事が起きて入ればどちらかが、あるいは二人とも機能が停止していただろう。

『ハハハハハおもしれえっ！！俺とまともにやりあえるヤツなんざ初めてかもしれねえ、流石は俺と同じダークサイドだな。』

『それはよかったな。ひとしきり喜んだところで消える。』

言うが早いか突きつけていた右腕の《ブラックフューザー》をゼロ距離から発砲する！！しかしそう簡単に決着がつくわけもなく下からアップパー気味に放たれたブラックスタッグの左腕が銃身をずらし、逆に右腕を前へと突き出す！！

『消えるのはテメエだ!!』  
『ほざけ!!』

間一髪顔をそらしてそれを躲し、ブラックスタグの胴を蹴りつけてその場を離れる。のみならず左腕からガトリングまで放つというおまけつきだ。寸分違わず完璧な軌道を描いてブラックスタグへ向かっていくそれを、

シャツ!!

右腕を一振りしただけで全て弾き落とす!!

『あぶねえあぶねえ、予想以上だわ。昨日やり合ったカブトはもつとあっさりやれたんだけどなあ。』

『基本的にあいつらは抜けているところがあるからな。そういう結果になったとしても可笑しくはない。が……』

やれやれという風に首を振り放たれた言葉はとんでもない挑発だった。

『俺としては正直あの抜けているバカが貴様に劣っているとは思えないな。どんな卑劣な手段を使って倒したのだ?』

『なんだと……っ』

『聞こえなかったのか? 同じような性格でもやはり違うものらしいな。貴様は奴より弱いと言っているんだよ、正直失望している。』

どこか笑うように、蔑むように挑発するブラックビートル。これに対してメタビーと同じような性格をし、それでいて自尊心が高く好

戦的なブラックスタッグが耐えられるわけもなく、

『殺スツツ!!』

怒りに震え、その場でメダフォースを急激な速さで溜め始める。大量のメダフォースを溜めて威力を底上げするつもりなのか、それとも一気に必殺技で叩くつもりか。それともメダチェンジの為の……

『なにせよ実に分かりやすい行動だ。やはりバカは誘導しやすい。』

メタビーと何度か戦ったことがある経験を活かし、ブラックビートルは挑発することで敢えて怒らせ攻撃を単調にする。

『隙だらけだ。』

ズガガガガガガッ!!!

再び左腕のガトリングを乱射し、ブラックスタッグを狙い撃つ!!! 怒りに我を忘れて大技を繰り出そうとメダフォースを溜めることにのみ集中しているブラックスタッグにこれを躲せるはずがない。これで決まりだ、呆気なくはあるが早くも勝敗は……

「 スタッグ。」

試合が始まって初めて《黒衣》の口から出た言葉、それは自身の愛機の名前だった。指示を出すわけでも、心配して呼び掛けるのでも

ない。ただ淡々と、まるで機械のように……

『っ……!』

「ビートルッ!」

だがその一言はカイとブラックビートルにとって警戒するには十分すぎる言葉だった。カイは即座に指示を出し、ブラックビートルはブラックスタッグから目を離すことなく後方へと飛び下がる。優位に立っている状況でこの行動はおかしいと周りは思ったろう。だが何か来る、二人の直感はその告げその行動を反射的にとらせてしまったのだ。

『らあああああああああ!!!!!』

ガトリングが着弾するまでの時間は1秒足らずといったところ、だがロクシヨウやスミロドナットと同じ格闘タイプ兼スピードタイプあるブラックスタッグにとっては冷静さを書かなければ避けるのに充分な時間だ。《黒衣》に名を呼ばれることで一瞬にして冷静さを取り戻したブラックスタッグは造作もなく弾丸の雨を回避し、

シュッ!!

『おせえな、お前。』

『なっ!?!』

ブラックスタッグから目を離してはいない。だが、だというのにいつの間にかブラックスタッグが、全身から闇のように黒いオーラを纏わせながら背後に回り込まれていたという事実。瞬きする瞬間す



『やれば出来るらしいな。今は効いたぞ。』

全身に紫色のオーラの様なものを身に纏い、ブラックビートルは防御した態勢のまま地面に立っていた。

『やれやれ、普通のロボットですませられれば良かったのだがな。まさかこんなにも早くメダルの力を解放させられるとは思わなかった。』

『とつさにメダルの力を解放して防御に回したのか。あっさりやられなくて安心したぜ。案だけ大見栄きつといてすぐにやられましたじゃ話にならねえからな。』

クックと心底嬉しそうに笑うブラックスタッグに先程の様な怒りは見られない。あの性格からしてすぐに怒りが収まるとは思えないし、かといって演技のようでもなかった。

『恐るべきは一瞬で正気に引き戻したあのマスターか……』

ブラックスタッグの実力の高さは認めよう。お互いの性能的にはどちらが上でもおかしくはないのだから。だがそれでも怒りで我を忘れるような相手ならばいくら力が強くても恐れる要素は何一つない。キレた者ほど強く、そして勝つ等というご都合主義はマンガやアニメの世界でしか存在せず、実際の世界にはほんの一握りしかない。いたとしてそれは元々が狂っているようなタイプだけだろう。事実、今までの戦いでキレて強くなるような者は見たことがない。このブラックスタッグも短気でこそあるが狂ってはいない。こういう輩はキレればキレるほど冷静な判断が出来なくなり動きも攻撃も単調になって逆に勝ちやすくなるのだ。故にそれを狙い、実際に読み通りだった。上手く行けばあの攻撃の後、数分とかからず勝利はブラッ



クビートルが手にしていただろう。

だが、この《黒衣》という使い手はキレたブラックスタッグをたった一言、名を呼ぶだけで正気に戻した。よほど強い信頼関係なのか、それとも別の要素か？それは分からないが、なんにせよこの使い手がいる以上小細工は何一つ意味を為さないだろう。

『さて、どうしたものか……』

「決まってるだろう。元々策を練ったところで勝てるような相手でもない。こうなった以上、全力で潰すだけだ。」

『……フツそうだな。』

元より策を練って戦うなど性に合わない。これは数年前の海底とは違うのだ。

『本当に強いものはどのような策も通用せず、そして真正面から戦って勝つもの。ギアを上げるぞマスター。』

「ああ、分かってる。」

そう返すカイの瞳は深い深い碧色をしていた。

第59話：死闘は続き・・・・・・・・

ザッ！！

先に動いたのはどちらだったか？それが分からないほど二人の動きは速く、それでいて示し合わせたかのように同時に動いていた。

ガッ、ザッ、ガキイ！！！！

片方が殴りかかればもう片方が捌きカウンターを加えようと動き、もう片方が蹴りを加えようものならばそれを弾き、逆に蹴り上げる。殴り、蹴り、掴み、投げる。何と原始的な戦い方だろう。

だが逆に先程までと同じようにパーツの能力を使つての攻撃をしようものなら僅かな隙を突かれてやられかねない。つまりこれは如何にして隙を見つけ、その上で有効な攻撃を放つか。しかし先に行動を起こした方が負ける確率が高い、そんな矛盾をはらんだ戦いなのだ。そしてそんな攻防が続き、二人の間合いが一定距離離れたとき、遂に戦況が動いた。

『らあああああああ！！』

咆哮と共にBスタッグは首を狙って右腕を振りぬく！！隙のない見事な斬撃だ。

『ッ！！！！』

それをBビートルは体を僅かに逸らして最小限の動きで攻撃を回避する。のみならず振るわれた右腕を掴み、逃がさないようにして至近距離から左腕のガトリングを連射する！！

ガガガガガガッ！！！！

『グオツ！！』

『流石にまだ倒れないな。だがまだ続くぞ？』

更に何か抵抗されるよりも先に足払いをかけて地面に転がす。そのままBスタッグの左腕も踏みつけ行動を制限し、

『流石のお前もこれは効くだろう？』

ジャキンと、身動きの取れない状態のBスタッグの体に頭から伸びる角を突き付け

『《ブラックバリスタ》！！』

ドオオオオオオオオオオン！！！！

Bビートル最大の攻撃パーツが無防備な体に直撃した。

「見事だ………!!」

試合の様子を眺めながらルシファーは感嘆の声を上げる。Bビートルの力は予想以上のものだ。よもやあのBスタッグがここまで……

「流石は貴様の作りだした《レアメダル》といったところかな？」

「ふっ、まあいい。しかしまだどちらにも変形はしていないからな、見物はこれからといったところか。」

BビートルとBスタッグ。共にメダチェンジ対応型の、それも強力且つ珍しいパワー変形のメダロットだ。パワー変形を扱えるメダロットは、変形してからこそ真価を発揮する。この戦いも恐らくは……

シューウウウウウウウウ………

最後のミサイルを放った直後、Bビートルはその場から離脱して被曝によって巻き込まれることを避けていた。だがあれだけの至近距離で放ったのだ、大きなダメージこそないもののやはり少しはその余波を受けている。もっとも今はそれよりも、爆煙によってBスタッグの姿を視認できないのがいたい。流石に無事で済んでいることはいないだろうが、機能停止させたかとは思えないし果たして……

・

「・・・ビートル、今の内にメダフォースを溜めておけ。」  
『了解。』

敵がどう出るかは分からないが、少なくともすぐに動けるような状態でないことだけは確かだ。ならばこの間に力を蓄えて、いざというとき大技をすぐに出せるような状態に持っていくべきだろう。

「・・・」

『・・・』

Bスタッグがいるであろう爆煙に気を払いつつ、Bビートルはメダフォースを着実に溜めていく。そして、大体このくらいまで溜まれば充分だということまで溜まったと同時に煙が晴れBスタッグの姿がようやく視認できるようになる。

『が・・・ぐ・・・ク・・・ソが・・・ツ  
ツ！！』

右腕と脚部のパーツは破壊されて、骨組みであるティンペットが剥き出しになっている。左腕の方は無事のようにだが、頭パーツにも相当なダメージを負ったらしく罅割れているような状態だ。まだ機能停止していないとはいえ、大きなダメージだ。  
しかし、Bスタッグの目は負けることなど微塵も考えていない。それどころかこれで終わりかとも言いたげなように見えた。

(そこまで傷ついていてその余裕。何を企んでいる?)

チャキツと右腕の照準を合わせつつBビートルは困惑する。この右



部も試合開始直後と全く変わらぬ文字通り傷一つない状態で復活していた。

『右腕も脚部も確かに破壊した筈……そのどちらをも一瞬で再生しただと?』

こんな芸当が可能な【メダフォース】は限られている。恐らくこれは……

「《全体レスト》、破壊されたパーツを再生する回復系のメダフォースか……だがどうということなんだ?」

Bスタッグのメダルは間違いなく《クワガタ》メダルと対をなす《Bクワガタ》メダルだろう。ならば得意とする3つの分野、その行動の熟練度は格闘タイプの《殴る》と《がむしゃら》の筈だ。最後の一つは味方をサポートする《応援》でこれだけは《クワガタ》とは違うが、どちらにせよ《全体レスト》に必要な筈の《回復》の熟練度は存在しない。

「クソッ、なんでBスタッグが……!?!?」

「余所見をされていていいのですか?まだ試合は終わっていませんよ。」

「っ!」

しまった、確かに今ので不意を突かれた!!Bスタッグはニヤリと表情を変え、あくまでそのように見えたのだが、凄まじいスピードでBビートルを斬りつける!!

ガキィ!!ザッ、キーン!!

だが、無論Bビートルとていつまでも不意を突かれているようなヘマはしない。振るわれる斬撃を両腕の銃身で捌き、防ぎ、弾く!! 更に至近距離からライフルを発射し、距離をとり間合いを測ってから逆に突っ込んでいく!!

ガッ、ザッ、ガキイツ!!

『チィ、格闘タイプでもねえくせしてよく動きやがる!!』  
『メタビーと戦ってからも無駄に時間を過ごしてきたわけではないからな。ハアッ!!』

攻める、攻める、ひたすら攻める!! 両腕の銃身を棍棒のようにみだてて凄まじい連撃を加えていく。なんとか反撃しようとソードやハンマーを放とうにも、攻撃しようと動かす瞬間に力点を上手く抑えられ反撃が出来ない。結果、Bスタッグの方が防戦一方となるが、  
『調子に乗ってんじゃねえええええええ!!!!』

ドゴオッ!!

『ゲッ!!』

胸に強烈な蹴りを入れられ、Bビートルは吹き飛ばされる。が、何とか受け身を取り態勢は立て直せた。



『さつきは少々焦りすぎたが流石に同じ手は二度も喰うつもりはねえからな、さつきと同じへマはしねえ。しねえが……』

そこで言葉を切り、首に手を当てて首を鳴らす。

『流石にお互い、この状態じゃあ決着はつきそうにもねえな。』

『……どうやらそのようだな。』

如何にどちらかが攻めようが基本性能が互角である以上、油断等が無い限りまず勝負はつきそうもない。となれば互いに取るべき手段は一つ。

『第二幕といこうや。変形して戦おうぜ？』

即ち、メダチエンジンに移行しての戦い。状況が動かないのなら動く状況にする。

『いいだろう。どの道この状態では互いに本気は出せまい。』

Bビートルはそれに応じる。無論マスターであるカイも同じ意見だ。

『ここまでで時間がかかりすぎた。一気に決めるぞ。』

『Yes、マスター!!』

それにBスタッグは笑い、

『んじゃあ、始めようか!!!!』

『 『  
メダチエンジ！！』 『

互いに全力を出すべく、さらなる境地へ戦いは加速する。

第59話：死闘は続き・・・・・・・・（後書き）

と、いうわけで戦いはまだ続きます。というか、現在執筆中の段階ではもう終盤なのですが、この時点で4話目に突入しています。あの意味今ままで一番長い戦闘になっているかも・・・・？決着について大分書き終えてるんで、早ければ明日には出せると思います。というわけで次回もお楽しみに！！

第60話：戦車と戦闘機（前書き）

お待ちせしましたあああああああああ、B対決決着編です！！  
長いので3つに分けてます



Bスタッグは難なく躲して見せたが、外れたガトリングはフィールドを覆うシールドを揺らす。前回りんたるう達を助けるためにメタバীが何をしてもビクともしなかった障壁を、Bビートルは変形したガトリングで容易く揺らして見せた。そしてその余波も無論尋常な威力ではなく、

ブオンツッ!!!

『おつとお!!』

襲いかかる衝撃の波の動きを見切り僅かな動きで避ける。が、無論その余波はBスタッグの動きを鈍らせる程度には充分だ。

『喰らえッ!!』

ドシユウウウウツッ!!!

中央に位置する砲身から放たれるのは切り札の1発ドライブA、つまり最強のミサイル攻撃だ。《火薬》属性を持つミサイルは避けることなど不可能。さあ、どう対応する？

『シャアアアアアアアアアアアアアアア!!』



『チツしぶてえなテムエ!!!』

『こちらのセリフだ!!!消える!!!』

『ほざけっ、切り札のミサイルも打ち止めのノロマがああああああ  
ああ!!!!!!』

ズガガガガガガガガガッッッ!!!!!

ザシユウウウウウウ!!!

銃声が轟き、斬撃は音を切る。Bビートルの両側から放たれる砲撃の嵐とBスタッグから放たれる神速の斬撃と衝撃。速さというアドバンテージによって未だBスタッグは攻撃を避け続け、Bビートルの方は何撃か受けているがこちらは耐久力でカバーしている。だが・  
・  
・  
・

「なんだよこれ………!?!」

Bビートルはいわば戦車だ。全身から伸びる3つの砲身から放たれる砲撃はメタビーの比ではなく、変形したことで格段に増した防御力。並の機体では傷つけることも難しく、圧倒的火力の前に粉碎されるだろう。



対するBスタッグは特攻機か。変形したことで防御力は格段に下がったが、ただでさえ高かった機動力に更なる磨きがかかり、補って余りあるスピードを手に入れた。圧倒的なスピードからすれ違い様に放たれる攻撃の威力たるや想像するだけでも恐ろしい。

どちらも流石は究極と言われる機体だ。過去ビーストキングは彼らのデータを元にプロツソメイルなどを作り上げたが、この二機の強さは圧倒的すぎる。データを元に作られた機体が何体いて、どんな物があるのか性格には分からないが、少なくともリユウコ先生が使っていたプロツソメイルでは話にならない。何より両機が攻撃を加える度にフィールドは揺れ、シールドが悲鳴を上げる。

《メダル》の力をお互いに開放しての戦いとはいえ、それを差し引いても圧倒的な強さ。バーサーカーのように暴れまわるビーストマスターとは違う、完全に制御された破壊兵器。その存在はある意味《悪魔》が操る闇の機体より何倍も恐ろしい。

(イツキ……お前はこんな相手に勝ってあまつさえ自分の仲間にしてたのか……?)

「……違う。」

「え？」

コウジの心を読んだかのようなタイミング。だがイツキは戦場から一切眼を離していない。

「違うって……どういうことだよ？」

「確かに僕は最近までBビートルを仲間にした。メダマスターになる過程で、メタビーだけでなく様々なメダロット達とも分かり合い絆を深めてきたつもりだ。もちろんその中にはBビートルだって含まれてる。」

「……僕と一緒に戦っていたBビートルはあそこまで強

くはなかった。」

「そりゃあ当時はメダルの力を引き出す方法なんて知らなかったんだし当然だろ。」

「それを差し引いても強すぎる。あの強さ……リミッターが存在しなかった当時の、セルリアーノ達と戦ってきたときよりも強い……!」

Bビートルの《Bカブト》は元々リミッターの存在しないメダルだ。それ故に普段リミッターによって力を抑えられているメダルもちらんレアメダルも例外ではない。達の力が本来の30〜50%ほどの力に対して、《Bカブト》は普段から100%の力で戦える。当時は無意識のうちにメダルの力を解放した自分達がその時の運などの要素も合わさって何とか制し、その後は他のメダルと同じように《Bカブト》にもリミッターを付けることで条件を五分にした。もちろん簡単に外せるようなものではないし、第一今も《Bカブト》はリミッターを外していない。なのにあれだけの強さ、もし当時からあんな強さだったらイツキ達は今ここにはいない。一体どういう事だ、あれほどの力があるのならどうしてあのとき使ってこなかった？

……いや、理由は明快だ。リミッターを外せばメダロットは確かに強くなる、いや本来の能力を取り戻すといった方が正しいかどうかどこにもあるような弱いメダルでもリミッターが無ければ、リミッターを外していない《レアメダル》と互角以上の力を発揮する。だがそれはあくまでもメダル個人の力なのだ。信頼しあえるパートナーと力を合わせて引き出す無限の可能性ではない、強力だが限界の見える力。

メダロットも人も互いに大きな可能性があり、協力し合えばその可能性は無限大だ。本当に信頼しあえるパートナーに出会えたとき、メダロットはその力潜在能力を何倍にも引き上げて見せる。メタビーンにはイツキ、G・Oデスならカラス、スミロドナットならばコウ

ジ……そう、あの強さはリミッターを外したからって得られるものではない。真のパートナーと出会い分かりあって初めて引き出せるのだ。

(Bビートル、君は……君自身が信頼できる本当のパートナーと出会えたんだね。)

少し寂しいが、それでも喜ぶべきことだ。自分では分かり合い、絆を紡ぐことは出来ても結局彼の本当のパートナーにはなれなかったのだから。それがカイなのは何という偶然だろう。それともあのカイが本当にあの時のセルリアーノだから？どちらでもいい、大切なのはBビートルが信頼しあえるパートナーと出会えたということだ。例えばあのカイがあのときと同一人物なんだとしても、その絆は、今共に戦い背中を預けるほどに信頼している絆は決して弱くない。

「だからこそ、言葉に出さなくても全部伝わってる……」  
ほとんど指示を出していないように見えるカイ。だがそれは二人が心から信じあっているから、見えない絆で繋がっているからだ。カイは指示を出している、ただし言葉ではなく心で。それで通じ合っている。

「ははっ……なんだか羨ましいよ。」  
自分とメタビーは、どうなのだろう。比べられることではないがそれでも考えてしまう。自分たちはあの二人と同じくらい信頼しあえているのだろうか……

「そして、あの子も……」

カイと同じ、彼女もまたBスタッグと心で繋がっているのだろう。カイも《黒衣》も言葉ではなく心で自分たちの相棒と対話しているのだ。

実力は互角、期待性能も互角、パートナーとの信頼という面でもあの二人はある意味究極の域にまで達している。ならば戦いは拮抗し、長引いてしまうのは必至。だが……

(……気のせいかな)

イツキにはある疑念が生まれていた。この戦いを大きく左右するであろう疑念が。

『イツキ、こりゃ動くぞ。』

どうやらメタビーも同じことを考えているらしい。だがイツキと違って確信を持っているようで……

『あいつら決めるつもりだ。』

ガガガガガガガガガガッッッ!!!

時に激突し合い、斬り裂き、砲撃を放つ。片や躲し、片や高い防御力で耐えきって中々勝負に決着がつかない。ジリ貧だ、Bスタッグ

は決定打に欠けBビートルはドライブAが弾切れになったことで攻撃を当てる術を持たない。いや、お互いにそれぞれ手が無いわけではない。だがそれは大量にメダフォースを消費し、変形時間を減少させる。威力を考えるのならそれで決着をつけられる自信はあるが、先程の《全体レスト》の様なこともある。万が一完全にキメられなかったら……？

(だがそうも言ってもらえないか……)

時間が無い。ここで力を使いすぎることは出来ず、ならば自分達の手を信じ賭けに出るしかない!!

「ビートルッ!!」

Bビートルにもそれは伝わった。完全に動きを止め、溜めたメダフォースを消費して決着をつける!!

『いいのか、それで終わらなかったらテメエの負けだぜっ!?!』

『キメるさ。終わらせてみせるっ!!』

キイイイイイイイイイイイ……!!!!!!!!

「メダフォース・《一斉射撃》!!!!」

戦いに終止符を打つべく、遂にBビートルのメダフォースが放たれ

た。









『ガッ………』

決着はついた、少なくともこの場の全員はそう考えていただく。  
Bビートルを責められはしない。だがその一瞬、この戦いにおいては致命的な隙がBビートルを斬り裂いた。

『ふう、今はマジで死にかけたぜ。これだから強い奴との戦いは止められねえな。』

嬉しそうに笑うBスタッグもまた変形を解いていたが、その右腕は光っていた。その光が消えると同時に、Bビートルの両腕が破裂する！！

バアアアアアアアアンツッ！！！！

『たて……いつせんだと………』

『おう、俺の第2のメダフォースさ。』

全パーツに等しいダメージを与えるロクシヨウ十八番のメダフォース。やはり《クワガタ》と対をなす《Bクワガタ》も使えたのか。

『どうやって……アレを凌いだ？』

『お前らも一回戦は見てるんじゃないのか？スクリユーズとか言っただか、そのリーダーの子猫ちゃんと同じさ。《ダメージ一定》、まあ今回使ったのはあれとは違って威力を下げる方だがな。安心していいぜ、慣れてる技じゃないからな。効力はもうなくなってる。』

キノコのスポアパラソルを相手にダークパンサーが使ったメダフォース、それは使用した戦闘中のみ戦闘中の全メダロットの攻撃力を高める技だった。今回Bスタッグが使ったのはその逆、使用した戦闘中のみ全メダロットの攻撃力を極端に下げるバージョンだった。それで《一斉射撃》によつて喰らうダメージを極端に減少し、結果大したダメージもなく受けきつたのだ。

だがこのメダフォースに必要な熟練度は《特殊》、これも《Bクワガタ》には存在しない筈だ。そして何より……

『どういうことだ……何故メダフォースを4つも使える!?』

『あん?』

『今使用した《縦一闪》と《ダメージ一定》、先程使用した《全体レスト》。そして先日使ったという《全体停止》……どうという事だと聞いている!』

『ん?お前あの場にはいなかったよな。なんで……つてそういうことか。なんだよ、結局ばれてたんじゃねえか。あんときバトリに行かなくて正解だったな。』

『誤魔化すな!!一つのメダルにつき扱えるメダフォースは3つ、これは何一つ例外が無いルールだ。それを貴様は……』

どんなメダルでも《レアメダル》にも適応されるルールだ。だが実際にBスタッグはそれ以上のメダフォースを使用している。一体なぜ?

『別にルール違反でも何でもねえぜ。事実俺は3つしかメダフォースは使つてねえし。出来る奴には出来るんだよ、《レアメダル》じゃなくてもな。』

『そんなことが……』

「出来ますよ。たった一つだけ、3つ以上のメダフォースが使用で

きるようになる手段が。」

たった一つだけの手段……Bスタッグは3つしかメダフォー  
スを使用していない……

『そうか……貴様の第3のメダフォーaska……』

答えはあらゆるメダフォーを使用できる他とは違う特殊なメダフ  
ォース《ランダムチェンジ》だ。これを発動した瞬間全メダフォー  
sからランダムに一つメダフォーが選択され、選ばれたメダフォ  
ースを発動する。そしてこの場合、それぞれのメダフォーに必要  
とされる熟練度は必要ない。

『そして今俺達はお互いにメダルの力を解放してる。おかげで今の  
俺はあらゆるメダフォーから自由に選択してメダフォーを使え  
るってわけだ。まあそういう意味では反則かもな。』

やられた……少なくともメダチェンジを解除するべきではな  
かった。頭パーツの回数は0、両腕は破壊されメダチェンジも出来  
ない……今のBビートルにはメダフォーしか攻撃手段が  
無いのだ。

『残念だったな。これで終わりだ。』

「ビートル!!今はメダフォーを……っ」

異変はその時だった。振り下ろされた右腕を躲し、Bビートルが見  
たのは膝をつき苦しそうに胸を抑えるカ이의姿だった。

『カイツツ!!』

「クツ……まさか、もう……っ!?!」

タイムリミットだといふのか？早すぎる……だがまだこんなところで倒れるわけにはいかない。自分にはまだやるべきことが……！！

「クツ……から、だが……！！」

『無理をするな！！今はしばらく……』

『よそ見してる場合があんのか？』

シヤツ！！

『クツ、流石にキツイな……』

変形を解き両腕が破壊された今、《一斉射撃》の威力は激減している。今は先程のような方法を使われなくても大したダメージは与えられないだろう。だが攻撃手段はそれしかなく……

(……いや、もう一つだけある。)

だがこれは賭けだ、それも先程以上の。文字通り命をかけた大博打でタイミングを誤れば確実に負けるが、先程の様な方法では防げず成功すれば必ず決まる。だがまだ使えない。威力が足りない……！！

『まったくもうテメエのやれることはねえだろ？さつさと終われ！！』  
(かといって奴の一撃は強大だ。今の状態では一発もらっただけでやられる可能性が高い……)

左右の腕から放たれる攻撃を何とか躲しつつ、Bビートルは現在の自分の状態を確認する。

自分のパーツの装甲は数値化すれば頭パーツ60、左右の腕パーツ30、脚部パーツ65といったところ。現在は戦闘を経て頭28、脚部32といったところか。そして奴が攻撃の中で最も威力が高いであろう《縦一闪》の威力はおよそ一パーツにつき30前後、放たれればまず終わる。しかし回避は出来なくとも何とかズラす事が出来れば、その威力は僅かにでも下げられるだろう。問題があるとすれば……

ザシユウ!!

『クツ!!』

遂に躲しきれなかった斬撃が脚部を捉える。掠っただけとはいえそれでも今の状態にはかなり堪える一撃だ。だが動けないわけではない。とにかく今は避け続ける!!

『なんて考えてんだろ？悪いな、もう油断しねえよ。』

そう言い放つBスタッグの右腕が再び輝きだしていた。絶対不可避にして最強の斬撃《縦一闪》、これで止めを刺すつもりだ。

(仕方ない……か。)

『楽しかったぜ、今までの中で最高の戦いだっただ。』

けどワライな、ここまでの戦いも俺が勝つてことも最初から最後まで予定されていたことなんだよ。いくらお前が強かろうが未来は



## 第62話：決着・逆転の一手

「カイツ、Bビートル!!」

「クソツ、これで終わりなのかよ……!!」

あの二人の実力を持ってしても勝てなかった……せめて相手の能力が前以て分かっていたらなんて理由は通じない。大抵の戦いはそういうものでロボットも例外ではないのだ。

「メタビー!!この壁を破るよ、カイ達を助けるんだ!!」

「ヤダ。」

「よし、メダフォー全か……つてヤダ!？」

「ああ、ヤダね。」

予想外のメタビーの反応にイツキは動転しする。だがすぐにそれを振り払い、

「我儘言うのも大概にしろっ、何言つてんだお前は!!いつもいつも僕の言うことを聞かないのはともかくこの状況で……!!」

「それはこっちのセリフだアホマスター。お前こそ何言つてんだよ?」

全く調子の変わらぬメタビーに今度こそ言葉を失った。呆れたからではなく、その声の調子がどこまでも冷静だったから。

「まだ決着はついてねえ。第一この試合だけは誰も乱入なんかしちやいけねえんだよ。もちろん俺もお前も、な。」

「メタビー、お前一体……?」



どこまでも冷静でいつもの彼らしくない。だがその言葉には有無を言わせぬ何かがあった。

『ここまでは予定されていたこと。Bビートルは幾度もBスタッグを追い詰めるが倒しきれない。結果、最後の1撃はBスタッグから放たれ、Bビートルは敗れ去る……。しかも仮にそれに耐えきれたなら、そこから本当の物語が始まる。』

「メタビー？メタビー!？」

何だ、これは？メタビーじゃない？先程までとは声が違う、これは僕が知るメタビーじゃない。

「おいイッキ!!メタビーのヤツどうしたんだ!？」

「分かんない!!いきなり予言者みたいに……………」

だが先程の言葉、もしの先にある可能性。この戦いはまだ終わっていない？

『ウソだろ…………っ!？』

手応えはあった。

既に相手は瀕死の状態で、これで止めをさせた筈なのだ。手加減などしていない必殺の1撃。だというのに…………っ!？

『メダフォースの使いすぎだな。威力が落ちていたお陰で倒れ損ねた。』

違う、そんな理由では説明はつかない。今までにこんなことは無かったし、もし仮にそうだとしても今のBビートルを葬るにはそれで十分な威力だったのだ。見誤ったのか？いいやそれはない。第一、

『何でだ、何で倒れねえっ！？お前が俺と戦うべき真の強者なんだろうっ！？場所も時間も予定されていたんだ、事実今までの経過も予定されていたことと同じだった！！なのに何で倒れねえ！？』

子供の様に喚き立てるBスタッグ。彼にとっては先程の《縦一閃》で全てが終わっていたはずなのだ。しかしBビートルは立っていた。無論瀕死の状態であることに変わりはないが、Bスタッグにとってはそんな姿でも立っていると言う事実が有り得ない。

「予定だの未来だのさっきから何を言っているのかは分からないけど………」

そしてBビートルに続くようにカイもまた立ち上がる。

「そんなもの、簡単に変えられる。」

『嘘だっ！！【予定】は絶対なんだ、変えられるわけがない！！』

「だが実際に今その【予定】とやらは変わったんだらう？君がそこまで取り乱しているのがその証拠だ。」

もう一度言おう、未来なんてものは簡単に変えられる。こんな小さな【予定】ではなく、大きく未来を変えてみせた人を僕らは知っているのだから。」

『そう、だからこそ俺たちは今ここにいます。』

Bビートルの体から紫電がほとばしる。そしてそれは掲げられた右腕に球体として集まっていき………

『今度こそ終わりだ。先に言っておくが、これは先程のような方法では止められない。今までのダメージを返す技だからな。』

そして今、先程の《縦一閃》によってこの場における技としては完成した。Bスタッグを倒せる十分な威力を秘めたメダフォースに。  
「行くぞ。」

『ああっ！！』

「『メダフォース・《ダメージ玉》！！』」

それは真っ直ぐBスタッグ目がけて飛んでいき、着弾と同時に爆ぜ・  
・・・

力・・・ツ！！

音よりも早く、一瞬にして爆風と閃光が試合場に広がった。

今までBビートルに蓄積されたBスタッグから受けたダメージ。それにBビートル自身のフォースを加えて放つ、逆転の最終奥義ともいえるメダフォース《ダメージ玉》。使い勝手が悪いが、可能性という面では使い手が倒れない限りどこまでも際限なく威力を増していく。そして今回放たれた威力は一瞬でBスタッグを倒せる威力だ。例え全快の状態だろうと関係ない。爆発はBスタッグを中心に広が



のはBビートルだった。

『ギリギリ……だったな……』

「ああ……だがよくやったよビートル。今はゆっくり休め。」  
『そう……させてもらおう。』

そう呟くとBビートルはカイのメダロッチの中に戻っていく。それを見届けてからカイはゆっくりと【黒衣】の方を見つめた。

「まさかスタッグが負けるとは……【予定】が狂い始めている？」

「その言葉、気にはなるが今はどうでもいい。それよりも僕はあなたに聞きたいことがある。貴方達は……」

カイが言葉を続けようとするのを手で制し【黒衣】はその身を翻し出口へと向かう。

「待て！」

「いずれ分かります。今は焦らず体を休めたほうがいいと思います

よ。」

「……」

その言葉に歯を食いしめながらも何も言う事が出来ず、カイは黙って見送るしかなかった。

「逆転……しやがった……」

「・・・・・・・・」

決着はカイ達の勝利で終わった。Bビートルも無事の様だし、喜ぶべきことなのだが・・・・・・・・

「・・・・・・・・」

『あ？さつきから何見てんだよ。』

「う、ううん。別に・・・・・・・・」

さつきのメタビーのあの様子、いつものメタビーではなかった。今は元通りに戻っているが・・・・・・・・

「とりあえず戻ろうか。いつまでもここにいるわけにはいかないし。」

「

「だな。お前は明日決勝だし早めに休んどかないとダメだろ。」

今はそのことを気にする時ではない。今は先程の疑問を頭から振り払った。

「と、いうわけで明日はラブレター男達との試合か・・・・・・・・」

「いやあびっくりよねえ・・・・・・・・あのいがみ合ってた二組が力を合わせてここまで来ちゃうなんて。」

皆と合流し、コウジ達と別れた後イツキ達は控室に戻ってきていた。本音を言えばカイの元へ行きたいのだが、今は休ませてやるべきだろう。

「あ、そうだ。カラス君、ユウト君に連絡した？」

「いや・・・したにはしたんだが誰も出なくてな。一応メールも打っておいたから大丈夫だとは思うが・・・」

「じゃあ明日もユウト君抜きでやるしかないか。」

あゝあ、と言いながらポスンと備え付きのソファに座り直すアリカ。どこか不満そうな顔なのは何の連絡も入れないチームメイトに対してのものだろう。

「カラスは？試合の後倒れちゃってたけど・・・」

「そんな大げさなものじゃない。幸い今はだいぶ楽だからな、一晩休めば十分だ。」

「そっか、なら良かった。」

となると明日の試合については問題ないだろう。少なくとも自分達は。

「カイ君大丈夫かしらねえ・・・」

イッキが言うよりも先にアリカがカイの身を案じる。確かにBスタツグとの激闘で精神的にかなり消耗している筈だ。オマケに途中ふらついていたようにも見えるし・・・

(カイ・・・)

明日こそは聞けるだろうか。彼の正体が、もしそうだとして僕たちは・・・

「ク……ツ……ズ……ッ!!」

フューン要塞から外に出て人目につきにくい物陰で、カイは一人胸に手を抑え苦しそうに唸っていた。その苦しみ様は尋常ではなく、誰か人に見られていたらすぐに病院へと運ばれたらう。だがそれは出来ない。自分にはまだやるべきことが……

「やはり……力を使いすぎたか……グウッ!」

原因は分かっても苦しみは消えてくれない。ああ、これはひどいな。こんな苦しみを味わうくらいならもう一回Bスタッグと戦った方がマシだ。

「ハハッ、リーダー達に見られなくて正解だったな……」

試合が終わってすぐ、皆は自分の元へ駆け寄ってきて心配してくれた。それは煩わしくもあつたがどこか嬉しいと思う自分がいて、でも心配をかけたくなって皆と離れてここに来て……

「もう時間は少ない……でも、まだ僕は動ける。」

この苦しみももう少し経てば落ち着く。まだ自分は戦える。だったらやるべきことは一つだ。

「明日……明日で全てを終わらせる……終わらせて見せる……!!」

目的の為に、そして自分を心配するあの愚かで愛おしい皆の為に。



「だから……もう少しだけ保たせてください。」

そう静かに呟き、カイはその場に崩れ落ちる。その様子をメダロツチの中でBビートルがどこか悲しそうに見つめていた……

第62話：決着・逆転の一手（後書き）

ふふふ〜んふんふんふ〜ん

「ん？やけにご機嫌だな作者。何かいいことあったのか？」

よく分かったな．．．．．これを見よっ！！

「そ、それはまさか．．．．．!?」

そう、全メダロッターが待ち望んでいたメダロットDSソフトだ  
あああああああ!!

「つ、遂にいいいいいいいい!!?．．．．．つてオイこ  
ら、それ流星のロックマン3じゃねえかよ。何がメダロットDSだ。  
あんだけ騒いで買ってねえのかテメエは？」

グッ!!そ、それがその．．．．．確実に手に入れるべくセブニア  
ンドワイのネット通販で予約して配送してもらっ事になってるから  
まだ届いてなくて．．．．．

「．．．．．」

．．．．．つわああああああああああああああああああ  
ああああ!!!!早くやりてえよおおおおおおおおおお!!

！アメンバーのセイさんは既にプレイしてるのにいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！チキシヨオオオオオオオオオオオオ！！！！

「……………うっせえ。ほっとくか。」

というわけで皆さん今日は遂にメダロットDSが発売されるぞ！！

こんなざまの作者のせいで更新日時は翌日になってると思うが…………

…………そこは申し訳ない。作者に代わって俺が謝るときます。まあ、

こんな作者の事は置いといて、皆も一緒にロボットしようぜっ！！

！そいじゃあ今日はこの辺で、じゃあなっ！！！！」

#### 幕間4：解析結果（前書き）

今回は1話だけです。カイ達の戦いの裏側、ユウト達の行動です。

## 幕間4：解析結果

【ここは・・・・・・・・】

この光景、見覚えがある。随分と久しぶりの夢だ。

そこは地獄だった。無残にも破壊されたメダロット達が転がり、研究所が、森が、人が燃えている。それはあの時の光景。彼にとつて忘れられない、忘れるわけにはいかない全てが崩れ去った悪夢の日。

いや、何を言っているんだ。この惨状を引き起こしたのは他でもなく・・・・・・・・

「お前だろ？」

【っ！！】

いつの間にか人が集まっていた。血まみれな人が、物言わぬ死体同然となったメダロットが。何人も何人も、その目に怒りと憎しみにじませて。

「悪魔・・・・・・・・」「お前らのせいだ・・・・・・・・！！」「あなただけは許さない・・・・・・・・」「お前らがいたから・・・・・・・・」「お前は悪魔だ！！」「この死神め！！」「私のマスターはあなた達のせいで死んだ！！」「お前が殺したんだ！！お前が！！」「お前があんなものを連れてきたから！！」「あの悪魔を連れてきたのはお前だ！！アイツとお前のせいで皆死んだ！！」



【なんで……なんで  
を囲んでんだよっつ!!】

そいつは関係ないだろう!! そいつは悪くない、誰もアイツを責められないし責めちゃいけない。アイツはむしろ被害者。この惨状を起こした直接の原因はアイツだが、そう仕向けてしまったのは他ならぬ俺達なんだ。いや、そもそも俺が……!!

【クソツ、ってなんで動かねえんだよっ!?!】

まるで金縛りにあつたかのように体が動かない。耳ははつきりと聞こえるのに、その姿ははつきり見えるのに、体だけが動かずその光景を見させられる。

「返せよ!! 皆を返せよ人殺し!!」 「この悪魔!!」 「死んでしまえ!!」 「お前は生きてちゃいけないんだ!!」 「貴様みたいな奴がここに来たのが間違いなんだ!!」 「なんで生きてるんだ!!」 「お前とお前を連れてきたアイツのせいで!!」 「お前のせいで死んだんだ、悪魔はお前だ!!」 「人殺し!!」 「お前みたいな奴のせいで大勢死んだ!!」 「お前が殺したんだ!!」

【止める………っ!!】

罵声を浴びせられている本人は座り込み、顔を下に向けて表情が読めない。だがその姿はそうされて当然だというよう……

違っつ、アイツは悪くない!! 悪いのは俺、皆を見殺しにしたのも俺。だから頼む、俺ならいい。許されなくても当然だ。だけど、だ

けどアイツは……………!!

「返してよ……………」

「っ!?!」

【っ!?!】

人込みをかき分けて現れたのは幼い子供。俺にとって誰よりも大切だった少女でアイツにとつても同じだ。その少女が現れて初めてその顔が上がる。その目は恐怖におびえていて、それでいて許しを請うようで……………

「あなたを連れてきたせいで皆が死んだ……………パパもママも、お兄ちゃんも!」

「あ、ああ……………っ!?!」

【止める、言うな!?!】

止めてくれ……………誰が何と言っても、お前だけは言わないでくれ。その言葉は俺にぶつけるべきなんだ。アイツは悪くないんだ! だから頼む、誰に言われるよりもお前に言われるのがアイツにとつて一番……………っ!?!

【クソツ、なんで動かないんだよ!!止める言うな!?!】

それだけはダメなんだ。それを言ったら、お前がそれを言ってしまうたらアイツは壊れてしまう。だから、だから……………!!



「返してよ……っ!! 皆を返してよッッこの悪魔!! 人殺し!!」

「うわああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

【止めるおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!】

「ハッ!!」

ガバアッ!!

「はあ……はあ……はあ……ここは……」  
「?」

目を覚まして、真っ先に目に映ったのは数々のコンピュータ。その画面には色々な数値が書き込まれていて、それで現在の状況を出す。

「……そうだ、俺はロクシヨウと……」  
『また、あの夢を見たのか……?』

振り向くと顔はこちらに向けず先程と同じ作業を続けているロクシヨウの姿があった。その真にある画面は先ほどよりもずっと進んでいることを示していたが。

「ワリい、俺どのくらい寝てた？」

『3時間と行ったところかな。』

「起こせよー!!」

『起こすのは忍びなくてな……だがそれは逆効果だったようだ、すまない。』

「いや、別にいいけどよ……」

顔はこちらに向けていないが、その声は俺を心配するものだった。それが分かったからこそそれ以上は言えない。だが……

「うわ、汗グツシヨリだな。まあ今までで一番最悪な夢だったから仕方ないっちゃあ仕方ないんだけど。」

『そんなに嫌な夢だったのか？』

「ああ。なんつうか……俺が楽しみにしてた飯を……そり横取りされたような感じだ。」

『意味が分からん。』

「分かんなくていいんだよ。」

そう笑い、俺は一旦服を替えにその場を離れる。本当の内容は話さなくていいだろう。ロクシヨウが聞いたら、きっと……

『そういえばお前が寝ている間にカラス殿から連絡が来ていたぞ。』

「カラスが？ああ、アイツにはメルアド教えといたからな。なんて？」

「既に知っていると思うが、まずイツキ達が決勝に進んだこと。そしてカイの所属するチームも勝ち上がったとのことだ。」

「そっか。んじゃあ急ぐ理由は無くなつた……ってわけにもいかないか。アスモデウスを倒したわけじゃないんだろ？」

あくまで戦ったのはBビートルとBスタッグ。本命の《悪魔》が出たわけではなく、故にこの先の事も楽観は出来ない。

「マモンの場合はヒカルさんとやり合ったけどアスモデウスは違う。はてさてどうなる事やら……」

数年前、あの事件の時に奴らと初めて対峙した時。俺は当時のルシファーとマモンに手も足も出なかった。ロボットにせよ心にせよ完膚なきまで叩きのめされたのだから。だが他のメンバーを覚えていなかったわけではない。見た限りの第一印象でしかないが、俺の勘は良く当たる。そこで感じたアスモデウスという敵は実力はともかく、それ以上に残忍さを備えた人物だという事。必要とあらば仲間奴らに仲間なんて言葉があるとはとても思えないが、だろっかなんだろっか平気で切り捨て策として利用する。どちらかといえばマモン以上に自らの利益の為だけに動く様な……組織の人間には相応しくない人材。

「まあいいか。何しようが実力も戦力もたかが知れてる。マモンより強いってことはないだろうし、ヒカルさんが予選で暴れまわってくれたお陰で数もそう大したことはねえ。イツキ達でも十分何とか出来るだろ。」

で、ロクシヨウ。どんな感じだ？」

「7、8割、といったところかな。ここまでくれば俺一人で良いだ

ろう。既にプリントアウトしてある物を読んでくれ。』

「……………本当に俺必要なかったな。」

その事実にはしさを覚えつつ、俺は言われた通りプリントアウトされた資料を一枚一枚読んでいく。

「【メダル宇宙学理論】……………懐かしいな。親父が良く研究してたよなあ、当時の俺は専門知識ばっかで一つも理解できなかったけどさ。」

『当たり前だろう。メダルの秘密を解くことは宇宙の神秘を解明することと同義とまで言われているんだぞ？当時小学3年生くらいのお前が理解できる方がおかしい。』

「ま、そうなんだけどさ。」

苦笑しつつ一枚一枚印刷された紙に目を通す。8枚目に目を通し9枚目に入った時だった。

「【プロジェクト】？これが……………っ!？」

ようやく手がかりを見つけた!!長年追いつけていた過去の核心。これで……………

「……………」

『どうした？突然黙り込んで。』

「……………専門用語ばっかで分かんねえ。」

どんなギャグ漫画だよ、折角辿り着いた答えなのに教養が無いせいで挫折とか……………!!

「真面目に勉強してりゃあよかつたなあ……………」

『そうならならなかったで恐らく世界が崩壊するから止めておけ。』  
「お前が普段俺をどういう目で見てるか分かったよ……」

とりあえず分かんない項目は飛ばしてしまえ。後でロクシヨウやアトムさんにまとめてもらってから調べればいいだろう。そう考えプリントされた　ロクシヨウの作業が進むことに今もプリントされているが　紙に目を通す作業を続ける。

「……メンバー表、か。」

そんな中またもや目を引いたのは例の計画に参加していたメンバーの一覧表と集合写真だ。懐かしくもあるが同時に自責と後悔と憎しみの念が湧いてくるから元々持っていた者は全て燃やしたのだが……

「こつという形でまた見ることになるとはね……」

俺達に優しくしてくれた若い研究者や祖父母の様な方々。アトムさんに俺の自慢の父親、幼馴染の兄ちゃんに……

「ゴメンな皆。怒ったり憎んでるかもしれないけど、俺なりにケジメをつけたいんだ。だから……」

写真の右端、兄ちゃんと隣り合わせで笑顔を見せる男の姿を睨みつけて、

「こいつを俺なりに償わせる。あの事件のケリを付けるから。」

過去から逃げるように写真をグシャグシャに握りつぶした。



「大丈夫なわけ……」  
『大丈夫、だから。』

その声で俺はようやく落ち着きを取り戻せた。コイツが何も言わな  
い以上、俺がわめくわけにはいかないのだから。

『この内容が真実とも限らんしな。そうだろう？』

「……ごめん。」

『謝る必要などない。だが仮にこの内容が真実だとすれば……』

明日もう一悶着あるかもしれない。なら……

「ロクシヨウ、解析は中止だ。今分かっている部分だけプリントして  
後は保存しとけ。それとアトムさんに連絡を。万が一に備えてアレ  
渡しといてくれって。」

『構わないが……お前はどっするのだ？』

「寄るところがある。遅くなるだろうが今日中には戻るから、準備  
だけしといてくれ。俺が戻りしだいフューン要塞に行く。」

『承知した。』

それを聞いて俺は外に出る。さて、あの人は首を縦に振ってくれっ  
かな……

#### 幕間4：解析結果（後書き）

ふははははは！！どうした、先程までの威勢は！？ホラホラ〜まだ  
ロクシヨウの体には傷一つ付けられてないんだぞ〜ww

「お、作者じゃん。どした？」

ユウトか。実は風月さんの言葉でようやくやる気になってな。今メ  
ダロットDSを進めているのだよ。

「へえ。どんな感じなんだ？」

やっぱりロボットは楽しいぜ！！今回は戦略の幅も広がったし、がむ  
しやらのリスクは軽減して使い勝手が良くなった。もうさいつこう  
だな！！

「・・・だから小さな子供が見たら泣き出しそうなスngoイ顔し  
てるんだな。まあいいや、ストーリーは今どこら辺？」

これを書いている時はようやくロボロボ団のアジトに向かったところ  
だな。現在

クワガタのレベルは殴る13・がむしやら12・助ける8の総合33  
ハートが撃つ7・狙い撃ち4・助ける2の総合13  
ってとこだな。



「……………それって高いのか低いのかよく分かんねえな。」

まあな。ただクワガタの模様が変わったからな……………まあとにかく俺は現在楽しくプレイ中です!!

### 第63話：眠れぬ夜（前書き）

待たせて申し訳ありません！！第63話です。

### 第63話：眠れぬ夜

「……………眠れない。」

皆が寝静まり明日の決勝に備えて布団を被るイツキだったが、何故か全く寝付けない。明日の試合が楽しみとかそういう理由ではない。まあ障害がほとんど無くなってラブレター男達と純粹にロボットを楽しめるという意味では楽しみなのだが。だが……………

「ユウト、カイ、Bビートル、レアメダル、《悪魔》……………」

これまで関わってきたもの全ての事を考えると眠気がやってこないのだ。ならば何も考えなければいいのだが一度考えてしまつとどうしても気になってしまう。

「ちょっと、外の空気を吸って来ようかな？」

夜に眠れないときは空に浮かぶ星を数えたり夜風を浴びるのが一番だ。そう決断するとイツキはカラス達を起こさないようにソーツと足音を忍ばせて外へと出た。

「一応メダロットは付けてきたけど……………メタビー達も休んでるだろうし、無理はさせない方がいいな。」

最早習慣と化しているので一応腕にはめているが、明日の事もあるし出来るだけ呼び出さない方がいいだろう。一応フューン要塞の中は夜とはいえ光が灯っているので怖くはないのだが、やはりこんな時間に出歩いているのは巡回しているメダロット達を除けばイツキだけだ。フューン要塞のメダロット達は顔見知りなので会う度に挨拶

撈を交わしながらも心配してくれるが、笑って大丈夫だと応えイッキは適当にふらつく。なんとなく色んな場所を見て回り、そろそろ外に出てみようかなと思った時だった。

「イツキ君？」

「え？」

突然声をかけられ、思わず声を上げそうになる。が、聞き覚えのある声だったので何とか耐え振り向くと、

「カリンちゃん？」

「やっぱりイツキ君でしたわね。こんな時間にどうしたんですか？」

カリンが私服姿でニツコリ微笑んでいた。

「眠れなくてね、ちょっと散歩に……カリンちゃんは怎么样了の？」

まさか僕と同じで眠れなかったというわけでもあるまい。確かカリンちゃんは寝つきがいい方だった筈だし。

「実は私も眠れなくて……」だが、予想に反して同じ理由で散歩していたらしい。少々意外ではあったが、まあ誰だって眠れない夜というのはあるだろう。

「へえ、ちょっと意外だな。」

「そうですか？」

「うん。僕の勝手な想像だけどカリンちゃんって寝付きいい方だと思ってたし。」

でも危ないよ。こんな時間に一人で歩くなんて。」

夜遅いし女の子が出歩いて平気な時間ではない。

「それはイツキ君もでしょう？と言いたいのですが、確かにそうですわよね。」

イツキ君、よろしければご一緒してもいいですか？」

「構わないよ。話し相手がいたほうが散歩らしいし。」

何よりカリンを一人にしてはおけない。忘れられているかもしれないが彼女は少々方向音痴なのだ。

「あ、でもカリンちゃんはどこに行こうとしてたの？僕はちょっと外に出てこようと思ったんだけど。」

「特には……なのでイツキ君の行きたいところについていくことにしますわ。」

「分かった。でも夜も遅いし少し風を浴びる程度で止めておこうか。」

そうしてイツキ達は他愛無い話を続けつつ外に出るために足を進めた。

「うわあ……!!」

久しぶりにフューンの外に出た二人は夜空に輝く星と月に言葉を奪われていた。別に軟禁されていたわけでもないので出ようと思えばいつでも出られたのだが、大会が終わっていい以上、なんとなくそういう気にはなれなかったのだ。だから冷たい夜風を浴びるのも満天の星空を見るのも久しぶりのことで……

「見てくださいイツキ君！あんなに星が沢山ありますわ！！」  
「うん……なんていうか凄いや。」

星空を見るのは初めてではない。しかしこのフューンがある場所はとても空気が澄んでおり、余計な雲がないことも合わさってイツキが今まで見た中でも一番の星空だった。

「こうして夜空を見ると嘘みたいだな……僕たちが宇宙に行きたなんて。」

「そうですね……」

メダリンピックの優勝商品である月旅行。そこでイツキ達はスバルやマーブラーと出会い、マザーとレアメダルの関係を知り、宇宙人と友達になり……

「色々な事がありましたよね。私が夢で見て、『月にも海はある』って言うのをコウジ君が真顔で否定して、皆で探すけれども見つからなくて。でもイツキ君だけは最後まで信じてくれて……」

「あの時は大変だったよね。無駄にロボロボ団は元気だったし、地雷は踏むし、三原則が外されたメダロットが遅いかかってくるし……」

拳げ句に地球の命運をかけたロボトルだ。メダルを作ったメダロットの神様ともいえるマザーとの決戦。今だからこそ笑い話で済ませられる良い思い出だが、あの頃は本当に命がけだった。

「そしてイツキ君はまたそういう戦いに足を踏み入れてしまっているんですね……」

「うん……でもやっぱり僕は一人じゃないから。コウジがいて、」

ヒカルさんがいて、カラスがいて、ユウトがいて、メタビーがいて……もちろんカリンちゃんやアリカもいる。こんなに頼もしい友達や仲間がいるんだ。だから心配しないで。」

「……そうですわね。きつとイツキ君なら大丈夫です。今までこれからも……。」

そこでお互いに口を閉ざす。先程までと違って言葉は交されないが、嫌ではなくむしろどこか暖かく心地よい静けさだ。音を奏するのは夜風だけ。そんな心地よく、いつまでも続くかと思われた時間は……

『こんな時間に夜遊びか。相変わらず呑気な男だな。』

冷たくも、どこか優しく笑うような声によって終わった。

「あなたは……。」

「Bビートル!?!」

コツコツとフーンの先にある森からゆっくりとBビートルが近づいてくる。そこに敵意はなく、友人であることもあってイツキは大きく警戒することもなく向かい合う。

『久しぶりだなイツキ。お互いに参加しているのは分かっているけど、こうしてここで話すのは初めてだ。』

「やっぱり君は紛れもなく本人だったんだね。本当に久しぶりだねBビートル。半年ぶりだ。」

そう、Bビートルは半年前にいきなり『ちょっと旅に出て来る』と

イツキの元を離れてから今まで一度も帰ってこなかったのだ。しかしそのことはいい。BビートルにはBビートルなりの考えがあったのだろう。

「でも出歩いて平気なの？試合のダメージが……」

「心配するな、明日に支障が出るほどではない。いや、むしろ傷だらけの方がお前達への良いハンデとなったかもな？」

「ははは……」

冗談に聞こえない……

「でもじゃあどうしてここに？マスターのカイはどうしたの？」

『……』

その問いにビートルは答えない。が、少しの沈黙の後口を開き……

「イツキ、お前に忠告しておく。仮にも俺がマスターと認めた人間だからな。」

友や仲間とこれからも仲良く平和に暮らしたいのならば、明日の決勝の結果に関係なく今関わっている厄介事から手を引け。」

と、いきなりそんなことを言ってきた。

「そして最近お前の友となった男、ユウトといったか？あの男ともこれ以上関わらない方がいい。お前達がどんなに仲良くなっても奴は確実にお前を苦しめる。望もつが望むまいがな。」

「どういうこと！？一体何を……」

「二度は言わん、だが忠告は確かにしたぞ。これを聞いてどうするのかはお前次第だ。」



それだけ言ってビートルはイツキ達の横を通り過ぎ、一人フューンへと戻っていく。

『それともう一つ、お前達に謝らなければならないな。先日は助けに行かなくてすまなかった。狙われているのが自分たちである以上無暗に見つかるわけにいかなかったのは事実だが、それがかえってお前達を危険な目に合わせたようだ。本当にすまなかった……』

最後にそう言っただけで今度こそビートルは戻っていく。

「ビートル……」

その背中に叫ぶイツキ。だがビートルが歩みを止めることはなかった。

第64話：決勝開始！！（前書き）

ようやくここまで来れた・・・決勝戦スタートです！！

## 第64話：決勝開始！！

Bビートルからの謎の言葉を受けた後、イツキはカリンと別れてそのまま寝付いた。色々気になること、考えるべきことはあったのだが少し歩いたことですぐに眠れるようになっていたのだ。まあそのお陰で………

「さつさと………起きなさいバカイツキッ！！」

「ぐぼおっ！！」

何ていうイベントが起きてしまったのだがこれは省略しよう。

「で、結局ユウト君は戻ってこなかったわけね。」

「一応ロクシヨウからの返事なら来たがな。早ければもうここに着いていたはずだったらしい。」

「じゃあ何かあったってことかな？」

「さあな。だが、まあ別にかまわないだろう。昨日と同じこの三人で試合に出ればいいだけの事だ。」

確かに。ユウトが来ないのは残念だが、両チームともメダリンピックに参加したメンバーで戦うという事を考えたらこの組み合わせの方がいいかもしれない。

「今回もやっぱりの三人かしら？」

「実力を考えるならそうだろうな。他のメンバーはあくまで数合わせ、あの三人より上だとは思わない。」

つまりはラブレター男、ウオナ、そしてカイ。この三人で決まりだろう。

「リーダーはどっちだと思う？やっぱりBビートルかしら。」

「確かにあの三人の中でも頭一つ抜きんでるからな。順当に考えればそうなんだろうが……。」

先日のダメージの事もある。Bビートルは支障が無いと言っていたが実際はどうか分からない。となると順当にラブレター男のバンチユーがリーダーかもしれない。強力な攻撃を全て反射し跳ね返す能力はイツキ達のようなタイプにとって十分な脅威だ。

「どの道行けば分かる。二人とも準備は出来てるか？」

「うん。」

「バッチリ!!」

「じゃ、行くぞ。」

そして三人は会場へと向かう。最後の試合、ラブレター男達との口ポトルの為に……。

「大丈夫かカイ？昨日辛そうだったけど……。」

「いえ、大丈夫です。心配をかけてすみませんでした。」  
「いや、平気なら良いんだ。今日は先生達との試合だからな、楽しめる体調じゃないと損だぞ。」

ラブレター男から心配されつつ、そういうアドバイスももらう。どうやら昨日の怒りはとくに無くなっているらしくむしろ心配をかけてしまったらしい。

「本当にすみません。本来ならあんな我が儘言っただから怒りを覚えられても仕方ないのに……」

「何言ってるんだよ。結果的に試合には勝ってこうして決勝まで進めたんだ。それにあの我儘が俺達を気遣っての事だって言う事も分かってる。むしろそれなのにあんな風に喚いてた俺の方が謝るべきだ。リーダー失格だよな。」

笑いながらそう言うラブレター男だったが、そんなことはないと言い思っていた。

自分が初めて転校してきたときから色々よくしてくれて、分からないことやアンダーシエルでの面白いことも色々教えてくれた。大会に向けて一番頑張っていたのも彼だし、皆を引っ張ってチームを作ったのも彼。周りから反対意見がなかったわけではない新参者である自分を入れてくれたのも「実力がある奴なら新参者だろうが関係ないし、そもそもこいつはもう俺達の仲間だ」といって周りを納得させてくれたし、昨日のあの怒りも自分を案じてのことだった。

そして夜中には毎晩隠れてロボトルの特訓をしていたのも知っている。「俺は数年前までは凄く弱かったからさ。ウオナちゃんや皆にいつ呆れられるか分からないし、だから努力するんだ」そう言っただけに必死に頑張っていた彼は昔は本当に地味で目立たない人間だったという。でも昔はともかく少なくとも自分が知る限りこのチームのリーダーは彼をおいて他にはいない。もし自分ではなく他にラブレター

「男よりも強い実力者がいたとしてもそれでも彼がリーダーだと思う。」

「大丈夫、このチームのリーダーはあなたしかいない。僕が保証します。」

「いや、俺よりも強いお前に言われてもなあ……」

「それでもやっぱりリーダーはあなたですよ。ウオナさんもそう思いますよね？」

ラブレター男の恋人でもあるウオナに話を振る。なんだかんだ言つてリーダーにきつく当たっている彼女だが、それでも本当にリーダーの事を理解して心から好きなんだという事が伝わってくる。そんな彼女なら間違いなく自分と同じ意見だと思ったのだが……

「……あ、ゴメン話聞いてなかった。」

どうやらボーっとしていたらしく、話を聞いていなかったらしい。

「大丈夫ウオナちゃん？どこが悪いところがあるなら……」

「大丈夫よ、心配しないで。」

どうやら大事ではないようだが……何故かその姿にカイは少し違和感を覚えていた。

「あの、ウオ……」

「皆、そろそろ時間みたいだ。」

その違和感を確かめるべくウオナに尋ねようとしたが、タイミング悪くどうやらもうそんな時間らしい。そして同時にウオナに感じた違和感も消えていて……

「よしっ、それじゃあ行くっか皆！！今日もよろしく頼むぜ、カイ  
！！」

「あ、もちろん。」

バシツと背中をたたく友人に苦笑しつつそう返しながら、カイはど  
うしても先程の違和感が拭えなかった……

【皆さんっ大変長らくお待たせしました！！只今より決勝戦を行  
いたいと思います！！】

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

「うわあスゲえ熱気だな……決勝だから仕方ないとはいえ、  
流石に見てるだけでこっちも熱くなってくる。」

「そう言うコウジ君もちゃっかり一番前を確保してるじゃありませ  
んか。興奮してるんでしょ？」

「当たり前だろ、やっぱり誰が出るにせよ燃えるぜ！！まあ出来る  
ことならあの場に俺も立ちたかつたけど。」

それは俺の未熟さのせいだしな、と笑いながら言うコウジは悔しさ  
以上に素直にこの試合を楽しみにしているようだった。その姿にカ  
リンはほっと息をつく。もうコウジは大丈夫なのだ。

「それはそうとわざわざ俺達の席まで取らなくてもよかつたんだぞ。」  
「いや、ミズチ達だってイッキの試合は間近で見たいだろ？ 気になるだろうし。」  
「まあ、な。」

観客席の一番見やすい位置を陣取るのはコウジ、カリン、そしてミズチ姉弟にハクマにキノコ達だ。本当はヒカルの分の席も用意していたのだが、遠慮されてしまった。

（まあ、仕方ないか・・・）

もう危険ではないとはいえキララは目覚めていないのだ。ヒカル自身負い目もあるし楽しめる空気ではないだろう。

「と、いけねえ。今は楽しまなきゃな。」

ヒカル達には悪いがこちらは楽しませてもらおう。折角のお祭り、そのクライマックスなのだから。

【それでは決勝に勝ち残った2チームを紹介しましょう。まずは青コーナー、二年前数々の熱く素晴らしき激闘を我々に見せてくれたメダリンピックの優勝者にしてメダマスターにもなった天領イッキ君率いるイッキチームですッッ！】



ウイイイインと青色のシャッターが上がりそこからイツキ達が出てくる。ユウトがないので三人だけだが、それでも向けられる歓声は物凄い。

【メンバー紹介！！リーダーはご存知の通りメダロッターの憧れ、メダマスターの称号を携えた誰よりもメダロットを愛する少年・天領イツキツツ！！相棒であるメタビーとはいつもケンカをしながらも熱く固い絆で結ばれており、そのコンビプレイは素晴らしいの一言！！熱い魂を弾丸に乗せて、果たして今回はどのようなロボットを見せてくれるのかっ！？】

「ははは、なんか恥ずかしいな……」

いつもとは違うハイテンションな紹介に正直顔が真っ赤だ。うるちさんこんなに熱いキャラだったっけ？

「いやあ、人気者は辛いわねえイツキ？」

「何言ってるんだよ、メンバー紹介だよ？きつとアリカも……」

【続きましてはイツキチームの紅一点！！イツキ君の幼馴染にして彼の良き理解者。二年前のメダリンピックではこの場にいない二人と共にイツキ君を支えてくれました……噂ではイツキ君の初めてのロボット相手とか！？二種類のメダロットを巧みに使い分ける彼女は果たしてどんなロボットをするのでしょうか！？輝け未来のジャーナリスト！！甘酒アリカ選手ですツツ！！】

「……………」

「ホラね？」

「ゴメンイツキ……」

流石に自分もこんな紹介をされるとは思っていなかったのか恥ずかしそうに謝るアリカ。イツキは苦笑しつつも……

「どうしたのクラス？」

「まさか……俺まであんな紹介をされるんじゃないだろうな？」

完全に凍った表情と震える声で呟くクラス。もちろんそんな予感はない中し……

【続きまして3人目！！二年前のメダリンピックでは決勝戦でイツキ君と熱い戦いを見せてくれた渡鳥クラス選手ですっつ！！その実力は正に天才！！扱いづらい犠牲攻撃を巧みに使いこなし、メダリンピック以来努力することをも覚えた天才を止める術はあるのでしょうか！？寡黙な暗殺者、G・Oデスと共に死神の鎌が相手の首を狙っているぞ！！】

「……」

「ドンマイ」「」

慣れていないのだろう。うるちの紹介を聞いてワナワナと体を震わせている。

「何故だろうな、今この場にはないアイツがひどく憎い……！何故あいつだけが……！！」

「ああ、紹介されても恥ずかしくないもんねえ。この場にはいないから。」

そう考えるとなるほど、確かに理不尽だ。しかし律儀にもうるちはユウトの紹介までしてくれるようで……

【そして最後はイツキ君の元へ馳せ参じたニューフェイス！！火力で物を言わせるメタビーとは真逆に速さと鋭い一閃で敵を葬るクワガタ！！クールな騎士・ロクシヨウをパートナーに数々の強敵を斬り倒してきたその姿は見る者を圧倒する！！しかしその姿はいつもニコニコ、好物はポップコーン！！そんなどこにでもいそうな普通の少年、しかし実力は折り紙つきな神田ユウト選手ですっつ！！】

「いつも食ってたのは知ってたけど好物だったのか……ポップコーン。」

「ていうか一番普通よね、普通。」  
「戻ってきたら皆でユウトに文句言おうか？」

そう尋ねるイツキの問いに拒否する者は一人もいなかった。

【そんなイツキチームに対するは赤コーナー！！かつての険悪さを絆に変えて】、その力を何倍にもはね上げ新生したチームアンダーシエルです！！】

同じようにウィイイイインと赤いシャッターが開き、そこからチームアンダーシエルの面々が現れる。先頭を歩くのはラブレター男、続いてウオナや他のメンバーが続き……

「一番最後にカイ、か……」



「にね あ、そこでのキャラとここでののが違つとか言わないように。」

「アリカ、誰に話しかけてんの？」

「気にしたら負けよイツキ。」

「??？」

よく分からないが深く突っ込まないでおこう。

【ええつと……気を取り直して二人目の紹介です！！チームアンダーシエルのもう一人のリーダーにしてチームの姉御！！恋人であるラブレター男選手とのコンビも中々ですが、特出すべきはそのサポート力でしょう。今大会でブルーハウテンを駆り、全員のサポートをしていることからそれがかがえます。果たして今回はどのような活躍を見せるのか？ウオナ選手ですっつ！！】

「……なあ恋人とかそういうのを公に公表していいの？」

「あの二人は公認だからね。今更騒ぐ人もいないと思うけど……」

その後も何人かの紹介が続く。皆イツキの見知ったメンバーだ。

「とか言いながら割愛してる分扱いがラブレター男よりひどいよね……」

それは言わないでください。まあそれはともかく紹介が進み、

「何かズサンだなあ……」

【そして最後は……こちらも同じくニューフェイス！！大会が始まる前、チームアンダーシエルに急遽参戦が決定した恐るべき実力者！！メタビーと対を為すかの如き漆黒のカブトと共にその目は一体何を写しているのでしょうか！！準決勝の時以上の熱い戦いを見せてくれ！浦島カイ選手ですツツ！！】

「遂に来たな、イツキ。」  
「うん。」

結局ここまで話せずじまいで対戦相手として向き合う事になってしまった。だがそれでも構わない。あのカイが何者であろうと今この場において自分達はメダロッターなのだ。ならば問うにせよ応えるにせよ、全てはロボトルで語ればよい。

【さて、両チームとも紹介が終わったところで代表3名は前へ出てきてください！！】

「代表って私たちの方は3人しかいないんだけどね。」  
「確かに。」

アリカと二人、苦笑しながらイツキ達はフィールドへ上がる。迎えるはやはり予測していた3人。ラブレター男、ウオナ、そしてカイ。

「ようやくこの時が来ましたね先生。今こそ俺達の成長した力を見ていただきますよ？」

「うん、楽しいロボトルをしよう！！」

ラブレター男に対してニッコリとそう言うとイツキはカイへと目を向ける。

「……………」

だが言葉は交わさない。というよりイツキの方は何を言えばいいのかわからないのだ。もしもここにいるカイがあの際のカイならば自分を恨んでいても仕方ないだろうし、もし違っていたとしても姿がそっくりな分やはり声はかけ辛い。だがいつまでも黙っているわけにもいかない。イツキは口を開こうと……………」

「答えはロボットで語ろう。」

先にカイがそう口を開き、Bビートルを転送する。以前の様な殺気は無いとはいえ向かい合って改めて分かる。やはり以前よりも強いと。

そしてカイに続くようにラブレター男達もそれぞれバンチューとブルーハウントンを転送する。

「向こうはいつでもいいらしいな……………それじゃあ俺達も出すとするか。」

カラスの掛け声を合図にイツキ達もそれぞれの愛機を転送する。メタビー、G・Oデス、そして今回は《ギャラントレディ》のパーツを身に付けたブラスだ。

それぞれ今までと同じようにリーダーはカブト。機体は違うとはいえ奇しくも同じKBT型率いる戦いとなる。

「アレ、アンタがそっちのチームのリーダーなのにロボットのリーダーはカイ君なの？」

「これが一番勝率が高いからな。俺はまとめ役だ。」

アリカの問いに返すラブレター男はカイとBビートルを心から信頼しているのだろう。面白い、それでこそ戦いがある!!

「うるちさん、いつでもいいですよ!!」

「同じく僕たちのチームもいつでもいけます。」

・ イツキとカイ、両方の言葉を聞きうるちは深く頷く。そして……

【ではこれよりイツキチームVSチームアンダーシエルによる優勝決定戦を始めたいと思いますっ!!合意とみてよろしいですね? それでは、ロボトルウウウウウウウウ……!!ファイトオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!】

最後の決戦の火蓋が、今切って落とされた。



第64話：決勝開始！！（後書き）

うーん………

「ん？どうした作者？」

お、ユウトか？いやあ実はさ、今回メダルのレベルアップの仕方が変わっちゃったせいでクワガタの熟練度がバランス良くなっちゃって。次は一点特化型に育てようと思ってるんだけど《殴る》と《がむしゃら》どっちにしようかなあって。

「はあ………つまりあれか？ついこないだまで『ようやくメダロットDS手に入れたぜヒヤッホオオオオオ！』とか叫んでた奴が、この小説を完結させるより前に！！メダロットDSのストーリーをクリアしてしまったと、そういうことか？」

うん。

「よし、殺す。おーいロクシヨ………」

「すみませんマジすいません！！反省してます、でも我慢できなかつたんです！！許して………」

「まあ俺らは良いけどよ、これを待っていてくれる数少ない読者に申し訳ねえと思わねえのか？」

すいません……

「たく……で、どっちを上げようか悩んでるんだっけ？ バランス型で良いじゃん別に。」

いや、バランス型にすると確かに隙がないオールラウンダーとなりえるがやはり決定力に欠けるんだ。例えば《がむしゃら》特化させたニンジャメダルとバランス型のクワガタメダルじゃあ共に総合レベル99でも、同じ《がむしゃら》攻撃にかなりの差が出るからな。主役機であるクワガタが負けちゃいかんだろ。

「成程。確かに熟練度が低いと威力や成功値にも響くからな。それは従来と同じだが……」

となるとクワガタといえば《殴る》か《がむしゃら》なんだけど……隙がなくそれでいてクリティカルも出やすい《殴る》を極めるか、隙はデカイが威力もある《がむしゃら》を極めるかで迷ってるんだ。

「うーん……ドークスと一緒に戦う事を考えると俺は《殴る》を極めるな。ハンマーよりソードの方が好きだし。けど今回のクワガタはソードが《がむしゃら》だから……」

お前も知ってるだろうけど少なくとも満足のいく仕上がりになってWi-Fiに勝つことのみを目的にするような段階まではサンジューローのパーツ以外つけるつもりはないんだ。だけど最終的に別パーツに変える可能性だってある。となるとやっぱなあ……

「……どうでもいいが後書きで尺取りすぎじゃね？」



第65話：急転（前書き）

遅くなりました、今回は2話更新です

## 第65話：急転

ズガガガガッ！

開始宣言がされた瞬間、メタビーとBビートルは寸分の狂いもなく互いに射撃を撃ち合っていた。牽制ではない本気の射撃。無論両機ともこんな序盤からダメージを喰らうつもりなど毛頭ないので、敢えて右腕のライフルを放っているが、

「クソッ、やっぱ純粋な攻撃力じゃあテメエの方が上か……！！！」

「それを見越して数で圧すつもりだったんだろう？悪いがお見通しだ。」

「そうか……よ……！」

元より全ての性能において自分が劣っているのは分かっている。だがロボットというのはパーツの性能差で決まる程甘くはない。それはあくまで一つの要因、ロボットの勝敗を分ける絶対的な差にはなり得ない……！

「メタビー、行くよ……！」

「ああ……！」

射撃を止め、Bビートルに向かって駆ける……！《威力全開》を発動するだけのメダフォースを溜める時間は無い。比較的すぐに溜まるとはいえその間は僅かにも隙が出来るからだ。ならば……！！

『確かに性能はテメエの方が高い。けど、格闘戦はお互いに不馴れだろ！！』

Bビートルの間合いに入り、拳を叩き込む！勢いが強い気合いが入った一撃は……

『舐めているのか？浅知恵にも程がある。』

難なく握られ受け止められていた。

『うそおっ！？』

『自慢ではないが短時間ならBスタッグとも互角に渡り合ったからな。この程度造作もない。』

そう言っつてメタビーの拳を掴んだまま頭に銃口をつきつけ……

「今だ、アリカ！！」

「了解！プラスお願いっ」

今にも銃口が火を噴きそうなその瞬間、メタビーの後ろから『ギョラントレディ』のパーツを装備したプラスが右腕の槍をBビートル目がけ大きく振りかぶる！！

「これは……！！？」

『メタビーが囷だと！？』

急いでメタビーの腕を離し、Bビートルは離脱を図るが、

『逃がすかあつ！！！！』

ガシツと今度は逆にメタバィーが腕を掴む！更に槍を当てやすいように引き寄せて……

ピシィツッ！！

『くっ……！！！』

「ナイスよブラス！！」

ブラスが右腕に持つその槍、《トランスフィクサ》のフリーズによりBビートルの動きが封じられた。

「まさかメタバィーを囷に使うとは……」

「僕達だって馬鹿じゃない。これがメタバィーとBビートルのタイマンならもつと他の方法を使うけど、これはチーム戦だ。無理して危ない橋を渡る必要はない。」

『そういうことだ。ま、あのまま続けてても俺が勝ってたろうけどな！！』

そんなメタバィーの声を聞き流しながらカイは冷静に愛機の状況を分析する。ギャラントレディのフリーズは威力こそ低いが付属する効果は中々のものだ。予選時にその力を見たカイはそれを理解している。だが二回戦でブラックメールが簡単に破ったように強力なメダロット相手にこの《停止》状態は長くは保たないだろう。つまりBビートルをこの程度の攻撃で止めることなど出来ない。

「不意を突かれたのは認めるよ。でもこのくらいじゃ……」  
「いや、終わりだ。」

不気味なほど静かな声。だがその言葉が引き金となり……

キキキキキッツ!!

「『!?!』」

Bビートルへ黒き死神が放たれる!!

「メタビーを囿にしてBビートルを停止させる。だがその本当の目的は動けない状態にして確実にサクリファイスを決めるためか……  
・!?!」

「今頃気づいても遅い。《停止》状態を解いたとしても間に合わないからな。」

実際その通りだ。《停止》状態になった以上攻撃を躲すことも防ぐことも出来ない。カイ達のチームには防御タイプのメダロットもないし、いたとしてもダイレクト判定を持つサクリファイスには無意味だ。

成程、確かにメタビーの機体性能ではBビートルには届かない。だがこれはチーム戦だ。一人を他の皆が補い合えば強敵相手でも互角以上に戦える。

「だけどそれは俺達にも言えることですよ先生!」

バキイツ!!



「…………やるな。」

サクリファイスはBビートルに届くことはなかった。いや、正確に言えば別の機体が間に入ったことで遮られたというべきか。

「すみませんリーダー、助かりました。」

「気にするな。このロボットのリーダー機はBビートルだからな。いくら先生達相手でもそう簡単には倒させるわけにはいかない。」

ニヤリと笑うラブレター男。そう、Bビートルに放たれたサクリファイスを身を呈して遮った機体こそ彼の愛機、バンチューだった。まるで叩きつけるように渾身の右ストレートをぶつけて、サクリファイスを打ち消したのだ。

「って、そんなのアリ!?!」

「はっはっは、仮にもこのチームのリーダーである俺がカイ達にはかり頼るわけにもいかないでしょう!?!」

…………メチャクチャだ。

「やるな。だが流石にサクリファイスを喰らって無事ではいられなかったようだな。」

そう言うカラスの言う通り、サクリファイスを殴りつけたバンチューの右腕は破壊されており他のパーツにも僅かながらダメージを与えられている。

「もちろん、最初から無傷で止められるとは思ってない。けど乱発が出来ないサクリファイスをBビートルに当てさせないための行動だったから。正直バンチューがやられる可能性は五分五分だったけ

ど……それを考えればこの結果はむしろプラスだ。」  
「面白い……」

本気で楽しんでいるらしくカラスの顔がニヤリと歪む。

「イツキ、奴の相手は引き受けた。今の内にBビートルを狙え。」

「でもG・ODESは……」

「前回の試合で分かっているだろ？大丈夫だ。」

「……分かった。メタビー……」

それに頷きメタビーをBビートル向かって走らせる！！

「行かせませんよ先生……」

途中妨害しようとバンチューが拳を振るう……だが、

シュツツ……！！

「っ……！！」

「チツ、外したか。」

G・ODESの残った左腕から繰り出される鎌が更にそれを阻む。

「流石はメダリンピック準優勝チームのリーダー、そんな芸当も出来るのか……っ……っ……！！」

「もうコツは掴んだからな。悪いが俺達の相手をしてもらっぞ。」

「仕方ないか……だがカイの元へは先生以外は絶対に通さない。」

「  
そう言ってもいつでも動ける用意をしているアリカとプラスにも注意を向ける。そして次の瞬間G・Oデスの鎌とバンチューの拳がぶつかりあい……………」

『止まってる奴を狙うんざ本位じゃねえけどここで決めるぜ!!』  
バンチューをG・Oデスに任せてメタビーは凍りづけになったままのBビートルを狙う。が、その前に僅かな時間とはいえとはいえ凍っている今なら……………」

「よしっ、チャージ完了!」  
『メダフォース・《威力全開》!!』

Bビートルが止まっている状況を利用して全体の攻撃力を1段階上へと上げる。

「メタビッ!」  
『分かってる!!』

そのまま左腕の《ブラスター》でBビートルを狙い撃つ!!

ズガガガガガッ!!

「チイツ」

だがなんとか《停止》状態から抜け出したBビートルは同じく左腕の《ブラックブラスタ》で全てを撃ち落とす。そしてお互いに撃ちあいながら再び接近戦へと持ち込み、

「おりゃああああああああああ！！」

「フツ！！！」

互いに殴り、蹴り、投げ、およそ射撃型メダロットとは思えぬ格闘戦を繰り広げる。Bビートルが両腕かに備えられている銃身を棒のように使い巧みに打撃を加えるのに対して、メタビーはあくまで拳を使った格闘戦だ。無論互いに隙あらば相手の頭を吹き飛ばそうと銃口を構えているが、やはり中々決着はつきそうもない。そんな中それぞれのマスターは戦況を冷静に分析していた。

（流石にBビートルでもメダフォーラスを使用したメタビー相手では簡単にはいかないか。だが厄介な死神をリーダーが足止めしてくれているとはいえ相手はもう一体、それも《停止》攻撃と《反射》餅の厄介な機体がいる。ウオナさんのブルーハウテンは戦える機体じゃないしやはり・・・）

（このままじゃ埒が明かない。《威力全開》で性能を上げてても精々が互角レベル。確実に勝つためにはもう少し重ね掛けしなきゃいけないけど流石にそんな隙はない。なら・・・）

そして二人は過程こそ違いが同じことに辿り着く。即ち、

「メタビー！！！」

「ウオナさん頼みます！！！」

メダチエンジンへの移行、準決勝でのブラック対決と同じく状況を変えた第2ラウンドだ。しかし今回は前試合と決定的に違う要因がある。

「『メダチエー……エンジンジ!!』」

即座にレクリスモードへと変形したメタビーはいきなりドライブAのミサイルをぶっ放す!!絶対ヒットの《火薬》属性を持つミサイルを避けることなど当然出来ず……

『っ!!!』

同じく《ブラックバリスタ》からミサイルを放つBビートルだったが変形したことで威力が増したメタビーのミサイルには及ばない。結果敗れ、その威力と爆風に吹き飛ばされる!!

『くっ』

だが何とか態勢を立て直し、Bビートルはメタビーから距離をとる。メダフォースのチャージの為だ。

そう、つまりはこれが決定的な差。Bビートルの行う《パワー変形》はメダフォースを消費して変形する。逆にいえばメダフォースがなければ変形できないし溜まり具合によっては変形できたとしてもすぐに解除してしまうのだ。

逆にメタビーの《シフト変形》はいつでも切り替え可能な変形。《パワー変形》と比べれば変形前との違いは僅かなものだが、それでも性能は大きく変わる。そして単純な威力ならばメタビーは変形後の方が性能は高い。もちろん速さも。

「メタビー、メダフォースを溜める暇は与えちゃダメだ。一撃で決

めるつもりで攻撃して!!」

『分かってるよ!!』

慣れた仕草で時間のかかる筈のクロス攻撃を設置してはすぐに放つ。メダフォースはダメージを与えられることでも溜まっていく。だからこそBビートルを変形させないため出来るだけ少ない手数且つ圧倒的な攻撃力で倒すべきなのだ(もつとも暴れ好きなメタビーは互いに変形してのガチンコ勝負がお望みなので正直この展開は不満が溜まっているのだが)。

流石のBビートルも《威力全開》を使用された状態のクロス攻撃を受ければどれか1パーツは破壊されること必至、故にさっきから何とか避け続けてはいるのだが……

「ウオナさん!!」

そう、メダフォースチャージ要員であるブルーハウテンとそのマスター・ウオナがいる。本当ならばプラスのフリーズで動きを止めておきたい相手なのだが、残念ながらそのプラスはG・Oデスと共にバンチューに阻まれてしまっている。と、言うよりバンチューの能力を知っている以上攻撃を出すことが出来ずだが隙を見つけることも出来ずその場に留められていると言った方が正しいか。

こうなる前に開始と同時にブルーハウテンを狙うべきだったか? いや、そんな開始直後に《停止》させるなんて芸当はイセキとマゼンタキャットでもあるまいし難しい。第一そんなことをしていたら最初にBビートルを凍らせることも出来なかつたらう。だが、

「どうしたんですかウオナさん!? 早くメダフォースを……」  
「……………」

どういうわけか当のウオナはこちらから何かをしているわけでもな

いのにまるで動かない。ブルーハウンテンに指示を出すわけでもなければその場から微動だにもしていない。

「ウオナちゃん!？」

その様子にカラス&G・ODESと激突していたラブレター男も気づく。まるでハンマー攻撃の様なバンチューの拳を何度もG・ODESに振るいながらも、その注意は既にカラス達に向かっている。

だが、かといってカラスやアリカもその場から動こうとはしなかった。二人も動かないウオナに対して疑問を抱きそういう風に考えられなかったのだ。だがこれは試合、それもイッキとラブレター男達にとつて楽しみで仕方がなかったロボットだ。なのにそれを楽しむでもなくむしる皆が集中できなくなる様な行動をとっているなんて……!!

「ブラスっ、文字通り頭を冷やしてやって!!」

そんなことアリカは許せなかった。ラブレター男の注意が外れていたこともあっただろう。ブラスはブルーハウンテンに向かって大きく飛び上がりその槍を振り下ろして……

「ああっもう相変わらずあのキザ兄さんは頭かてえなオイッ!!少しは丸くなったと聞いてたのになんじゃありゃあ!?!お陰でかなり時間食っちゃまったじゃねえか畜生!!」

『……そのセリフ、同じようなことをこれで5回は言ってるな。』

「るっせえ。本当なら今日の朝には会場についてイツキ達の試合を見れる筈だったつてのに……っ!! あんのキザ野郎がああああああああああああああああああ!!!!」

『……6回目だな。』

同じ頃、ユウトとはある場所からフーン要塞に向かって愚痴を言いながら歩いていて。予定では前日の夜に全てを済ませてからロクシヨウと合流して、もう一か所大切な場所に寄ってから向かうつもりだったのだが、相手側の対応に思ったより時間をとられてしまい、現在に至る。

『まあ、それでも尚あの場所に行くという当初の目的をそのまま達するのはお前らしいがな。』

「当たり前だろ、今日行つとかないと次いつ来れるか分かんねえし。ああ、だつてのにあの野郎はああああああああああああああああああ!!!!」

『7回目……』

それだけ言つてそれ以上その話題には触れない。それもその筈、何故ならそれは二人にとって大切であると同時にタブーでもあるから。だから最低限のことしか言わずお互い深くまでは踏み込まない。そうしないと彼らはもう一緒にはいられなくなるから。

「ま、とりあえず交渉は上手くいったしこの辺であのキザ兄さんを罵倒するのは止めつか。やっぱキメ手があのお土産つてのが効いたよな……保険かけといてよかつたぜ。」

『……ずっと気になつていたんだが、わざわざあんな交渉をしなくともよかつたのではないか?』

「いやいやいや、交渉なしに無償でこつちの頼みを聞いてくれるほどあの人と俺は仲良くない。ましてアレを使わせてもらつんだから



尚更だ。」

『……さつきから気になっていたんだが何を頼んだんだ？行き先は聞いても何をするかまでは聞かされていないんだが。』

「秘密。まあいわば念の為の保険ってやつだよ。まあ十中八九使う事になるだろうがねえ。」

『……』

これ以上は何を聞いても答えそうもないな。気にはなるが仕方ないか。

「それよりどうなってるかねえ試合。あいつら楽しんでるかな？」

『何事もなければ、な。』

「あゝあ、カプト対決見たかったぜ。本気のBビートルが見れたかもしんねえのに……」

『急げば間に合うかもしれないぞ？』

「……」  
「……」

そして舞台は再び会場へと戻る。

「……うそ」

ブルーハウテンへと槍を突きだしたブラス。だがその槍が届くことはなかった。なぜならば……

「ブラス……？」

なぜならばその前にプラスが刺されていたから。先程までは確かにブルーハウテンだった黒い機体の右腕に。両腕両足、そして頭を無惨に貫かれて……………

「うーん、思ったより早く手が出ちゃったわね。もう少し大人しくしてるつもりだったのに。」

聞こえない、何も聞こえない。ウオナの姿をしてるそいつの言葉なんて聞こえない。

「これでメダル一つゲット。レアメダルじゃないのは残念だけどある意味レアメダルと近いところですけど一緒に戦ってきたものですもの。何か隠された力があってもおかしくないわよね。」

ズルっと、黒い機体の右腕から伸びていた爪がプラスから引き抜かれる。支えもなく落下したプラスはそのまま物言わぬ機体と化して……………

「い……………いやあああああああああああああああああああああああああああああ……！」

絶叫が会場中に木霊した。



いかる！！

「へえ、これが君のレアメダルの力なのね。成程、ベルフェゴールが喜びそうな力だね。」

「消える！！」

ただ一人冷静に、それでいて殺意を剥き出しにしたカラスとG・Oデスの攻撃は……

「でもね、流石にそんなものを喰らったら私達もただじゃすまないから……ね」

「！！！」

目標の直前で動きを停止した。いや、止めるしかなかったのだ。

「貴様……！！！」

なぜなら目標の黒い機体は倒れ伏すプラスの体を再び突き刺して盾にしていたのだから。

「ああ、やっぱり止めてくれた。ありがとうね。」

「っ、今更になってあのバカの気持ちがかかったな俺は今すぐお前を殺したい……っ！！」

この場において最も冷静に状況を理解しているがゆえに真つ先に攻撃を仕掛けたカラスだったが、今は《死神》を消して怒りに身を震わせウオナの姿をした誰かを睨み付けている。どういうことだ？一体何が……いや、今はそれより

「君は……いや、お前は誰だ！？」

ウオナの姿をしているがウオナじゃない。いや、それ以前にあの黒い機体は……

「あら、やっぱりこの姿じゃ分からないかしら。私はあなたの友人に元仲間を倒された者……って、元の姿に戻った方が早いわよね？」

全員の視線を浴びながらもニコニコと笑うソイツはパチンつと指を鳴らすと……

「な!?!」

『オイオイ……!?!』

「貴様……っ!?!」

「……っ!?!」

「え……え?」

驚きを隠せないイツキとメタビー、カラス動揺怒りの視線をぶつけるカイ、そして余りの事についていけないラブレター男達の目の前でウオナの姿からスラリとした女性へと姿を変える。

「初めましてかしら?天領イツキ君に渡鳥カラス君。そしてそのパートナーであるメタビーとG・Oデス……」

私の名はアスモデウス。【色欲】の名を冠し、あなた達の言うところの《悪魔》の一人つてことになってるわ。」

「やっぱり《悪魔》か……っ!?!」

迂濶だった、目立った行動を起こしていなかったら油断していた。ユウトやヒカルがあれほど苦戦した相手だぞ?こういうことを平然とやってのけることをもつと考えておくべきだった!!



「うるちさんっ!?!」  
「うっうっ……」

倒れるうるちへとイツキ達は急いで駆け寄る。幸い急所は避けているようだが、出血がひどい。このままだとうるちさんは……!!

「すみませんイツキ君……このような事態を、止めることが……出来なく……て……」

「うるちさん……?うるちさんっ!?!」

『オイおっさん!?!……気を失っただけか。けどヤバいぜイツキ、このままだとおっさんが……!!!』

「うるちさん……」

……許せない、よくもうるちさんを傷つけ僕達のロボトルを汚したな……!!

うるちが傷つけられたという事実が、遂にイツキとメタビーの怒りに火を点ける。

「……アリカ、うるちさんをお願い。」

「え……?」

未だショックを受けたままのアリに振り返らぬまま、イツキはうるちの事を託す。

「い、イツキ達は?」

「大丈夫、ブラスは必ず助け出すから。だからうるちさんを連れて早くここから離れて、そして皆をここから連れ出して。おそらくここから先は戦場になる。」

「で、でもっ!?!」

「早くっ！！」

頼む、もう僕は怒りを抑えられない……！！

「……………分かった。プラスを連れてちゃんと戻ってきてよ……  
……？」

「うん。」

一瞬だけ振り返り笑顔を見せる。アリカはそれを見て何かを言いかけるが何も言わずにうるちの元へと駆けよって行く。

「カラス、アリカをお願い。一人じゃうるちさんは抱えられないだろうし万が一に備えて護衛役をやってほしいんだ。」

「バカを言うな、配役が逆だろう。お前はまだ……………」  
「体、キツインでしょ？」

「……………」

カラスのあの《死神》はマスターへの負担も大きい。これ以上カラスを戦わせたなら昨日の状態よりも酷いことになりかねない。

「俺なら平気だ。」

「今はそうかもしれないけどこれから平気じゃなくなるかもしれないだろ。ここは僕に任せてほしい。」

「……………」

カラスは何か言いたそうに口を開くが、G・Oデスを収めて何も言わずにアリカの元へ走る。その場から去る前に

「……………気をつけるよ」



とだけ言い残して。

「一体何がどうなって……」

「リーダーもここから離れてください。これはもう試合じゃない、最悪の場合命を落としかねない戦いです。」

未だに状況を呑み込めないラブレター男に向かって快は振り返ることなくそう告げる。彼もBビートルも隙あらばいつでもルクスリアに飛びかかれる状態だった。

「カイは、お前達はどうする気なんだ!？」

「足止め……というよりは彼女の狙いは僕とイツキ君でしょう。だけど他の人に何もしないと限らないので、ずっと注意を向かせないよう引きつけます。」

「なっ、何言ってるんだよ!？だったらお前も逃げなきゃ……」

「逃げれば追ってきます。そうなったら被害は広がる。見たでしょう?あのメダロットは躊躇なくうるちさんを斬った。もう遊びじゃないんですよ。」

「でも……っ!!」

それでもラブレター男は動かない。当然だろう、付き合いが短いはいえカイは彼にとって信頼できる仲間なのだから。今この状況では迷惑だが、そう思われていることを自分はどこか嬉しそうに思っている。だから……

「リーダー、あなたはウオナさんを助けないといけません。」

「……え?」

「恋人で大事な人なんでしょう?囚われのお姫様をナイトが救う……」

「・・・大役じゃないですか。リーダー以外には出来ないんです。」

「カイ・・・」

「こんな相手の事は僕に任せて、リーダーはウオナさんを助けてください。大丈夫、僕は昨日相手の中で一番強かったであろうBスタツグを倒しているんですよ？こんな相手には負けない。」

振り返って、笑いながらカイはそう伝える。ここは任せて先に行けと、自分は絶対に大丈夫だからと。

「・・・お前、それは死亡フラグだぞ？」

「あれ、そういうものなんですか？まあきつと僕は大丈夫ですよ。」  
軽口を叩き合うのは精一杯の虚勢。カイとてこの相手の恐ろしさは肌で感じている。だがそれでも自分にとってこの相手は逃すわけにはいかないから。

「負けんなよ、カイ。」

「リーダーも、ちゃんと助け出してあげてくださいよ。」

そう言い合ってラブレター男もバンチューを一旦収めてその場から離れる。こうして残されたのは・・・

「なんだ、テメエら逃げなかつたのかよ？」

「それはこちらのセリフだ。イツキはともかく貴様が逃げ出さなかつたのは驚きだ。」

「おもしれえこと言うなあ。先にテメエからブツ飛ばすぞ？」

「やれるものならな。」

と、険悪な雰囲気漂わせる2機のカブト。そして・・・

「強力な助っ人だね。けどそれを喜ぶ暇も余裕も今の僕にはなさそうだ。」

「同感です。というより僕らは元々敵同士ですしね。」

そのマスターであるイツキとカイ。そして相対するのは妖艶な《悪魔》アスモデウスとその下僕たるルクスリア。未だにメダルが抜き取られたプラスの体をルクスリアは貫いたままにしており、そのことが更にイツキの怒りを高めていく。

「出来ればあのカラスという子も欲しかったんだけど……まあ後でいいか。あの子はベルフェゴールには勿体ないしね。」

『オイこら、テメエ俺達に勝てると思ってるのか？』

「ええ。」

即答だった。挑発のつもりかそれとも……

「マモンがあの子たちに敗れた理由は弱かったから。私は違うわ、遊びでも全力を抜かない。だから負けることなんてありえない。」

そんなふざけたセリフにイツキは更に怒りを感じた。やはりこいつらはメダロットの事も傷つけることもゲーム程度にしか考えていない……!!

「ふふふ……甘く見られたものだ、このワタシも」

だが、カイの方は至極冷静だった。いや、口調が違う。やはりカイは……

「行くぞ、天領イツキ」

「……うん!!」

だが、今はそれを問うときではない。イッキとカイはそれぞれの相棒をルクスリアへと走らせた。

第66話：ここは任せて（後書き）

うーん……もうちょっと決勝戦を伸ばすべきだったかなあ？

「知るかボケ。けどアレだな、めっちゃ昔の最初の方でお前が言っていた暗くなる話になりかけてきたな」

出来れば死人は出さない方向なんだけどね。我が下手な文章がためにメダロットを使った別の物語になりつつあるなあ……

「まあ者がありが暗くなってくからこそここでは明るくしねえとな。そついや、お前ゲームの方はどうしたんだ？結局どっちを極めるんだよ」

ああ、それ？簡単さ、がむしゃら特化させながら殴るも上げる。

「……バカここに極まれり、か……」

うるさいやい！！今までならばソードの威力を高めるべく殴る特化を選択していたところだが今回のサンジューロはがむしゃらソードなんだよ！！いろんな意見もらったけど最終的にサンジューロで戦うならがむしゃら特化にした方がいいと思ったただけだ。

「けど無理だろ？殴るも上げるなんて。」

メダリアを使う。多分《格闘EX》だろうな。アレは合計レベルの4分の1を格闘属性のレベルに追加する奴だから・・・合計レベルMAXが99である以上がむしゃらを75、殴るを24ぐらいにそれぞれ振り分けることにしようかなと考えてる。

「・・・まあお前がそれを選ぶならそれでいいけどよ。」

まああくまで今のところの第一候補で予定だからな。別のいい案が出たらそっちに切り替えるぞ。

「ってまだ始め直してねえの!？」

ああ、主人公の名前が決まらなくてね。俺専用の最強データなんだからアズマって名前じゃダメだろう？

「・・・」

って、また尺を取りすぎちゃいましたね。それではまた次回もよろしくです!!

「・・・どうでもいいがブログとか俺との会話と比べて読者の皆様への口調が全然違うよなお前。」

突っ込むな!!

第67話：ルクスリア解放（前書き）

第67話更新！！しかし長いな・・・

## 第67話：ルクスリア解放

「アリカちゃん、カラス君!!」

「二人とも大丈夫か!？」

会場を出たカラス達を出迎えたのはパニックに陥った観客の波、そして心配そうに駆け寄ってくるコウジ達だった。

「これはどういうことだ?なんでこんなに……」

「うるちさんが斬られたのがきっかけだと思います。三原則が外れたメダロットなんて普通の人は関わらないでしょうし……」

そしてかなり前、ユウトがおみくじ町に来た前後に何度か起きていた、異形のメダロット達に襲割れるという事件に関わった人間達は皆例外なく記憶の一部が失われている。つまりほとんどの人にとつて三原則が外れたメダロットを見るのは初めても同然なのだ。

「とりあえずうるちさんを頼む。俺はイッキに加勢しに行く。」

「バカ言うな!!お前フラフラだぞ、前回の試合とかさつき使ったアレの反動がひどいんだろ?俺が行く。」

「それこそ無理だ。お前は俺やユウトやヒカルさんと違ってまだ力を使いこなせていない。以前のように暴走することは無くても振り回される可能性だってある。」

「クソツ、なんでこんな時にユウトはいないんだよつ、あの宇宙人も!!」

どうすればいい、会場にいる《悪魔》と対峙しているのはイッキとカイの二人だけだ。実力を考えれば心配ないようにも思えるが、り



んたろうやカントロスが食らったような何かよく分からない技を奴は持っている。どうしたって……

「すまない君達!!頼みがあるんだ!!」

そんなときコウジ達の元に一人の少年が駆けこんでくる。

「お前は確か……ラブレター男とか言う。」

「う、もうその名前で広まってるのか……いやそんなことはどうでもいい!!」

頼む、協力してくれ!!」

「協力?」

そこでラブレター男から攫われたウオナを救出するために協力してほしい旨を伝えられる。

「だが、どこに連れ去られたかは分からねえんだろ?ここにいない可能性だって……」

「こついつとき誰かを攫ってその誰かになりすましたりする場合どこかのロッカーに閉じ込めたりしますわよね……」

いや、そんなベタな展開は……ないとも言い切れないか。

「ということは、奴らの選手控室か。だがあくまで可能性の話、万が一に備えて別の場所も搜索するべきだろう。」

「すまない、俺は奴らのチームの控室に向かう。君達はうるちさんを医務室に……」

「いや、俺も行く。何かあるか分からないし、もしもの場合待ち伏せされている可能性だってある。その場合守護するのは高い確率であの《黒衣》だ。」

恐らくはアスモデウス達のチームで最強の使い手。昨日カイとBピートルに敗れたとはいえ、その実力と恐ろしさは本物だ。イツキもユウトもない今自分が相手をするのが……

フラツ……

「!？」

「今のお前じゃ無理だよ、立ってんのがやっとなぜか。」

「俺は……!!！」

「俺が行く。少なくとも今のフラフラしてるお前よりはよっぽど戦力になるぜ。それにアレを使ったG・Oデスも休ませてやった方がいい。」

「クツ……」

悔しいがコウジの言うことは正しい。まだ戦えるとはいえ、今の状況では足を引つ張りかねない。やはり二日連続で《奥義》を発動したのはまずかったか……

「だがお前たち二人だけで行かせられない。やはり俺も……」  
「なら俺が付き添おう。」

カラスが言うより先に金髪の少年がその場に割って入る。

「《青竜のミズチ》……」

「俺とグレインなら足手まといにはならないだろう。俺が二人に同行する、それでいいだろう?」

「……確かにお前なら信頼できる、かもな。」

「決まりだ。」

こうしてコウジとラブレター男、そしてミスチが敵の控室に向かうことになった。

「コウジ君、やっぱり私も……」

「カリン、お前は残ったメンツの中で唯一まともに戦える。他にも三原則が外れてるあいつらの仲間がいるかもしれないから、お前の盾で皆を守ってくれ。」

「……分かりました。」

「カラス、カリンとアリカちゃんを頼む。うるちさんも……」  
「分かっている。お前たちこそ気をつける。」

そして彼らは二手に分かれる。コウジ達はウオナが囚われている可能性が高い控室へ、カラス達はうるちを休ませるために医務室へ。だがどちらの向かう先にも圧倒的な敵がいることを彼らはまだ知らなかった。

ダッ！！

『ハアッ！！』

『ラアアアアアッ！！』

同時に駆けだし、ルクスリアを挟む形をとったメタビーとBビートルの両腕が火を噴く！！

ズガガガガッ！！

息の合った攻撃をルクスリアは躲すことが出来ない。放たれた弾丸は全て……

スッ……

ズガガガガッ！！

『なっ！？』

何故か全て素通りし、ルクスリアを挟んで向かい合ってるお互いへと向かう。が、驚きこそしたものの二人とも冷静にその場を離れ全て躲す。

『どういうことだよ。確かに俺達の弾丸はアイツを捉えた筈だぞ？』

『ああ、それは俺も分かっている。すり抜けたということか……？』

躲されたわけではなく外したわけでもない。文字通りすり抜けた……

「あら、もうお終いなのか？」

『誰が！！』

挑発的なアスモデウスの言葉真っ向から否定し、メタビーとBビー

トルは先の現象をもう一度確かめるべく再び銃撃を乱射する！！

「懲りないわねえ。さっきも見たと思うけど……無駄よ。」

その言葉通り、先程と同じく攻撃は全て素通りしてしまう。が……

・

「メタビー、後ろだ！！」

イツキの声が響く。その言葉に応え、振り向くことなくメタビーは右腕を真後ろに放ち……

『……………！！』

いつの間にかメタビーの背後をとっていたルクスリアに見事命中した。

『これは……………』

「ビートル、畳み掛ける！！」

『了解！！』

更にビートルのガトリングがメタビーが攻撃を当てたルクスリアめがけて放たれる！！先のメタビーの一撃で怯んだためか攻撃は全て命中し、ルクスリアは吹き飛ばされる。

『どういうことだ。イツキもカイも分かるのか？』

「いや、僕はメタビーが攻撃した場所から予測して指示を出しただけだ。イツキ君の方は分かるようだけどね。」

そう、何故かイツキには本体が視認できた。先程の一撃目はどうい

うことが分からず判断が遅れたために指示が出せなかったが、今の  
でなんとなく理解出来た。

「幻覚を作り出して対象を誤認させる能力か……ウオナに化  
けてブラスを不意打ちで倒した卑怯者らしい能力だね。けど僕には  
効かない。」

「あらあら、思ったより早くばれちゃったわね。しかもルクスリア  
がダメージを負ってる。さっきまでと何が変わったのか判別できな  
いけど既に《レアメダル》の力は解放されているようね。怒りでス  
イッチが切り替わったということかしら……」  
ホラ、さっさと立ちなさいルクスリア。」

だがアスモデウスの方はルクスリアが攻撃を喰らったというのに平  
然としたまま冷静に状況を分析するだけでなくルクスリアの心配す  
らしていない。ああ、確かにあなたの言った通りだヒカルさん。こ  
いつらが扱うメダロット達はまるでクグツだ。自我がなく、メダロ  
ットを道具としか思っていないこんな奴らに使役されるだけの可哀  
そうな存在。ならばやはり怒るべきは、憎むべき相手は……  
！！

「しかしよく気付きましたね。僕はおるかメタビー達でさえ幻覚だ  
とは気付けなかったのに。」

「こつこつには慣れてるんだ。それよりも一気に叩こう。聞いた  
話だとこいつらが操る機体にはもう一段階上があるらしい。今の内  
に倒しておくのが得策だ。」

「ですね、二人がかりで攻めるのは僕にとっても君にとっても本意  
ではないが状況と相手が相手だ。手を抜いている暇などない。」

そう言うってお互いに指示を出すために構え直す。同時にメタビー達  
もルクスリアに向き直り、

「幻覚を見破れるのは君だけだ、位置の指示をお願いします。攻撃は僕が。」

「うん、行くよ！！」

それを合図にメタビーとBビートルの猛攻が始まる！！正直本人達にとつては何もない空間に向かって攻撃を乱射したり殴りつけたりしているように思えて（そのくせ別の場所には幻覚とはいえルクスリアの姿が見えるので）中々に変な気分なのだが、イツキ達の指示は的確だった。

「Bビートルの右だ！！！」

「メタビー、ヒューザーを！！！」

「メタビー後ろ！！！」

「ビートル、思い切り殴りつける！！！」

指示はイツキが、攻撃はカイがという風に役割を分けることでルクスリアから反撃を受けることなくどんどん追い詰めていく。カンタロス達に猛威をふるったその爪も、彼らの目測を誤らせる幻覚も最早何の意味ももたない。ある意味一方的ないじめ状態だ。正直この程度ならばイツキ達だけで充分事足りるほどの手応えの無さ。正直何も知らない第三者がいたら間違いない同情するだろう。だがイツキもカイも手加減などせず全力で潰しにかかる。真名を唱えられる前に早く決着を……

「もういいわルクスリア、解きなさい。」

パチンつと指を鳴らしてルクスリアの幻覚が消える。同時にメタビー達の目にもルクスリアの本体が分かるようになり、イツキの指示がいらなくなっただが……

「やっぱりメダマスターと《カブトレアメダル》、それにスピリットらしき男と《Bカブトメダル》の力を最大限引き出せる機体のコンビじゃあ分が悪いわね。少なくとも今のままじゃ勝てそうもないわ。」

「っー!!」

マズイ、経験したことのない自分でも分かるプレッシャー。これは……!!

「貴方は奪うもの、略奪する者、そして手に入れる者。それ故に醜く、そして美しい。」

詠唱……本格的に真名を唱えて全力を出すつもりだ。

「メタビー、カイツ、ビートル!!」

「分かっています!!」

『一気に片を付けてやるぜ!!』

メタビーはすぐさまレクリスモードへ移行。クロス攻撃を設置して……

「『クロスファイアーツ!!』」

変形後最も威力の高い攻撃を放つ!! 試合中に発動した《威力全開》は生きている。重ね掛けをしてはいないが、倒せなかったとしても怯ませることは出来る!!

「ビートル、《ブラックバリスタ》!!」





先程よりもより苛烈に、より凄烈に攻撃を加えていくBビートル。  
一秒でも数を減らしてルクスリアへと攻撃を加えるつもりなのだ。

「天領イツキ、こいつらは私達が引きつける！！貴様たちは《悪魔》を！！」

「分かつてる！！」

再びカイの口調が変わっていることに突っ込んでいる場合じゃない。  
メタビーはドライブAの照準をルクスリアに合わせてミサイルを放つ！！

「醜いがゆえに輝きを求め、輝きを求めるがゆえに醜い。ああ、  
ただど貴方は美しい。いつまでもい  
いつまでもそのままで……」

(アワリティアよりも詠唱が短い！？間に合って……！！)

その言葉は届いたのか。阻もうとするクリア「ワーム達の波をBビ  
ートルが蹴散らし、そこに出来た道を通ってルクスリアにミサイル  
が着弾したのと、詠唱が完了したのはほぼ同時だった。

「真名・ヘル」

カッ……！！

ミサイルによる爆炎がルクスリアを包むのと同時に光が溢れ出し……

同じ頃、アスモデウス達の控室へ向かっていたコウジ達もまた、途中にある広い空間で強大な敵を前にしていた。

『思ったより早かったなあ？アスモデウスの奴もそろそろ本気を出してる頃かな？』

「……………」

「やっぱりドンピシャかよ……………」

コウジ達の行く手を阻むのは黒き剣士、Bスタッグとそのマスター《黒衣》。彼女達の姿を見て、3人は迷うことなくそれぞれの相棒を転送する。

「エクサイズ、グレイン、そしてバンチュー……………予想してはいましたが一般のメダロットも混じっていますね。3体だけでいいんですか？」

「うるさい！！さっさとそこをどけ！！」

「あ、バツ……………」

その中でもウオナが攫われていることで平静を失っているラブレタ  
ー男がバンチューをBスタッグへと走らせる！！

『まずはお前からか……………斬り応えがねえ相手だな。』

つまらなそうにBスタッグは言いながら右腕を大きく振り上げ……………

・

「バンチュー！！！」

ラブレター男もまた、バンチューの《反射》を発動する。念には念を入れて発動は両腕同時。振り下ろされた剣はバンチューの両腕に生まれたバリアによる頭突きとぶつかり……

『アホが。』

パライイイイイツツ!!

「なっ!？」

『脆いんだよ雑魚がああああああああ!』

ザシユウウウウウウ!!

が、攻撃を一瞬も阻害されることなく無残にも叩き斬られる!! バンチューの両腕を斬り裂き、激しい爆発音と共にバンチューが倒れる。

「なっ!？」

「まずは一人……で、お次はどちらですか？」

感情のこもらぬ声で《黒衣》はコウジ達を見てそう言う。

「……改めてみるとすさまじいな、奴らは。」

「けどやるしかないだろ? 行くぜミスチ!!」

今を見てもビビるわけにはいかない。グレインとスミロドナットはすぐにレクリスモードへと移行する。そしてニヤリと笑うBスタツグへと駆けだし……

更に同じ頃、連絡を受けて、博士たちがいるスタッフルームへと行き先を変更したカラス達は待機していた医療班にうるちを預け、体力を戻すべく（主にカラスが）少し休んでいた。

「思ったより出血はひどくない様じゃ。それよりカラス君、君の方が……」

「もたもたしている暇はないんだ。悪いが博士、アリカとうるちさんを頼む。」

10分程休み、博士から何か言われるより先にカラスは一人外に出る為に扉に手を伸ばし……

「ッ！？G・Oデス！！」

急いでG・Oデスを転送し、今まで使う機会が全くなかった頭パーツ《ジェットブラック》を発動する！！そして……

ビイイイイイイイイッツツ……バアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

『……………！！！！』

「耐えるG・Oデス!!」

いきなり放たれたのは極太のビーム。その余りの出力に《光学》系の攻撃は全て無効化する筈のG・Oデスが圧されるが、なんとか耐える。今のビーム、まさか……

「大丈夫かカラス君!？」

「部屋に入ってきてください。悪いが庇って戦う余裕がある相手じゃない。」

これほどまでの威力を叩きだすメダロットを持つ敵など一人しか知らない。《悪魔》とは別の、だがある意味それ以上に危険な執念を持つ……

「……ほう、貴様はいつぞやのガキか？あの小僧はいないんだな。」

「タイヨウ……!？」

ビーストマスターを従え、部屋のすぐ外に立つタイヨウの姿がそこにはあった。

「何の用だ。悪いがお前の相手をしている暇はないんだがな。」

「俺も貴様などと相手をする気は毛頭ない。が、雇い主の頼みでな。どうやらここにはメダルがたくさんあるらしい、回収させてもらう。」

「!？」

確かにここには博士が保管していたメダルが何枚かある。それが狙いか!？

だとしたらまずい、ここでコイツと戦える奴なんて……

「・・・なんのつもりだ？」

「あなた、ヒカルさんに偉く執心してたよな？そして全盛期のヒカルさんが苦戦した相手・・・」

つまりあなたに楽勝すれば俺は当時のヒカルさんよりも強いことになるわけだな。」

今はヒカルさんはいない、あのバカもいない。部屋の中でまともにロボットで切るのはカリンだけがアイツは戦闘向きではないしそもそもコイツと戦わせるわけにはいかない。下手をすればキララの二の舞になる。だったら・・・

「俺と戦えタイヨウ。神帝には勝てても死神には勝てないと教えてやる。」

「抜かせ、若造が。」

言葉と同時にG・ODESの両腕から鎌が伸びビーストマスターへと襲いかかる！！死神と獣王、2体の戦いが幕を開けて・・・

第67話：ルクスリア解放（後書き）

・・・

「・・・」

・・・ユウトよ、お前に聞きたいことがある

「・・・何だよ？」

これ見れば分かるように3か所でバトル勃発してるわけだけども、  
こっからどうしようか？

「・・・はいや、お前これ書いてる時点でストックそこそこあ  
つたる？」

そうなんだけど・・・選択肢を二つ自分に用意しててさ。一緒に  
するかしらないかで迷ってるんだよ。

「ああ・・・そういうこと。」

どっちにする誰かさんがあの人と戦うのは決まってるんだけど、そ  
の時どうしようかなあと。

「俺としては一緒にしないでほしいな。じゃねえとあいつが可愛そ  
うな気がする。」

ちなみに更なる選択肢として一緒にしない場合は合流するか否かを  
・・・

「勝手にやってる！！」



第68話・3つの戦場（前書き）

お待たせしました、今回も2話投稿です

## 第68話：3つの戦場

『クソツ、間に合わなかった……!!』

煙が晴れた後、そこから出てきたのは倒れたルクスリアではなく巨人だった。半身は醜く焼け爛れており思わず目を背けてしまいたくなる程だった。しかしもう半身は機械的なメダロットの体であることを差し引いても美しい。これがルクスリアの本来の姿……

「ヘル、それが彼女の真名。分かるでしょ？その体の醜い部分が刻一刻と彼女の体を蝕んでいつているのを？」

アスモデウスの言うとおり、半身の腐食部分がどんどんルクスリア……いや、ヘルの体を侵食し始めている。どんどん広がって、見えていて痛ましい程で……

「なんだ……？」

その腐食部分が、ヘルの体だけでなくまるで泥のように地面にも広がっている……!!?

『バカ野郎っ、ポケットとしてんじゃねえ!!』

「!?!」

突然メタビーが三原則を破らない、傷つけない範囲でイツキを強引に背中に乗せて走りだす!!

「うわっ!?!メタビー何を……!!?!」

その疑問はすぐに解消された。先程から広がり始めた腐食の泥がイツキがすぐさつきまで立っていた場所にまで広がっていたのだ。そしてその近くにいたクリアーム達はその泥に触れた途端、

「ウツー!!」

それは見るにも堪えぬ光景だった。まるで生命が残らず搾り取られているかに様で、無残にも灰と化していつて……

「ゴメン……助かったよメタビー。」

「アレがメダロットだけにしか効かねえのか生物なら何でもに効くのかは知らねえけどな。にしてもマジで何でもアリだなこいつらは……」

正直見てて吐かなかつたのは奇跡だ。それほどまでの以上で凄惨な光景、最悪自分自身がああなっていたのかもしれない……

「そうだカイは!? Bビートルは!?!」

「心配するな、俺達も無事だ。」

Bビートル達もまた、あの泥から逃れイツキ達のすぐ近くまで来ていた。が、

「よか……ってカイは全然大丈夫じゃないじゃないか!?!」

カイは、Bビートルに背負われていた。元々青白い顔が更に蒼白になっており、息も荒い。その姿は前回の試合の途中でふらついていた時よりもずっと弱々しくて……

『気にするな、といつても気にするんだろつなお前は……だ

が話は後だ。今はあの厄介な化物を何とかする方法を考えないと。  
」  
確かにまだ勝負はついていない。そして長引かせるわけにもいかない。相手の力量云々よりもこのまま戦いが長引けば長引くほど地面は浸食され、やがてこちらの身動きが取れなくなる。恐らく体の一部でも触れたらそれで終わるであろう泥が広がりきる前にどうにかしないといけないのだ。

「でもその様子じゃあ君達はもう戦えない。この腐食がある以上力イを置いて戦うわけにもいかないし、庇って勝てるような相手でもない。」

「だがお前達だけで勝てる相手ではない。相手は文字通り《悪魔》のような機体だ。」

「だけど、ユウトもヒカルさんもその《悪魔》相手にパートナーとのコンビだけで勝ってるんだ。なら僕達も……」

とはいえあの二人とは条件が違うのも事実。ヒカルの相棒たちは《レアメダル》の中でも更に謎が多いとされる二個一対の《ツインレアメダル》、そしてユウトは長年ロクシヨウと共に戦い《クワガタのレアメダル》の力を十二分に発揮できる熟練だ。ここにいるのが《奥義》を使えるカラスならばあるいは何とかなったかもしれない、がイツキ達はまだその段階にも至っていないのだ。

(カラス……?)

が、そこまで考えてふと先程までの事を思い返す。そう言えば戦いに集中していて忘れていたが、カラスの体はどこだ……? ハツと思いだしアスモデウスの方を見る。そこには薄く笑うアスモデウスの近くで泥にのまれて沈んでいるギャラントレディの姿があ





『ハッ、おせえおせえ！！舐めてんのかよテムエらあッ！？』

ザシユウウウウウツツツ！！！！

「グレイン！？」

「クソッ、なんなんだよこいつはっ！？」

スピードはスミロドナットが、パワーではグレインがそれぞれ上回っている。即席はいえ二組のコンビは中々のものだ。だということに、

『ハッ、よええな。昨日の黒カブトの方がずっと強かったぜ。』

右腕のソードで切り裂かれ、左腕のハンマーで叩きのめされ……  
・未だ相手は変形すらしていないというのに逆に追い詰められているという事実。スミロドナットの方は何とか躲し続けている為ダメージは少ないがそれでも疲労の色は強い。そしてグレインの方は圧倒的な攻撃力ゆえに犠牲となる回避力の問題でかなりのダメージを負っている。もしグレインの装甲が少しでも低ければすぐに機能停止しているだろう。

「改めて浦島カイという男の凄さが分かるな。いや、Bビートルの方か……」

「俺としてはグレインとはいえレアメダルでもないのにアイツと戦えてるお前の方が凄いと思うぜ。」

俺達二組で圧され気味なのは悔しいけどな……」

「いや、あんたたち全員普通じゃないだろ……」

ラブレター男にとってはこの場にいる自分以外のメダロットもメダロットも理解の範疇を超えている。明らかに全員自分よりも格上。そしてイツキもまたその領域にいるのだろう。

(やはり先生を超えるのは並大抵のことじゃないな……)

それが悔しく、同時に嬉しい。普通ならそう思うところだ。だが今はウオナが攫われていてイツキ達もまた命がけの戦いに身を投じている。この状況で自分達は何の役にも立てていない。

(何もしないで大人しく見てるしかないのか……?)

実力の事を考えればそうだろう。しかし元々は自分の都合で彼らを巻き込んだのだ。それなのに何もしないで見守る？彼らに全部任せろ？今もなおBスタッグに翻弄され、苦戦を強いられている彼らを？

「そんなこと……出来ない!!」

まだ自分は戦える。バンチューも機能停止していない。ならば……

「……遊びもここまでですかね。スタッグ。」

『あいよ、マスタアアアアアアアアアアアアアア!!』

遂にスタッグがスミロドナットの動きを先読みし蹴り上げる!!のみならず接近してきたグレインの前足部分を掴みあげて空中のスミロドナットに叩きつける。

『ガッ!?!』

「グレイン!!」



「スミロドナツト!!」

二人の叫びも虚しく、重ねられた二機に目がけて凶悪な爪が振り下ろされて……………

ガシイイツツ!!

『なに!!?』

間一髪、今まで動けず明らかにこの中で格下と侮られていたがゆえにBスタッグから止めを刺されず無視されていたバンチューがその体を後ろから羽交い絞めにする!!

『てめえ……………雑魚のくせにこの俺を……………!!』

だがその状況も長くは続かない。Bスタッグはすぐにバンチューを振り払いその体を斬り裂く!!最後の力を振り絞っていたバンチューには抵抗する力も残っておらず、更に止めとして貫かれる爪を……………

ゴオオオオツツ!!

『ツ、デストロイだと!?!』

そう、バンチューに止めを刺そうとしていたBスタッグはグレイン達から見て後ろ向きの方角だ。バンチューがBスタッグを抑えてい



違っていない。決まりだ、ギリギリだが逆転勝利。流石のBスタックでも……

『……なんだ、この程度かよ?』

「え?」

しかしコウジ達の耳に届いたのはあり得ない一言だった。確実に右腕が入り、貫かれた筈のBスタックが怒りと失望の表情で見下ろして……!?

「下がれっスミロドナツ……!!」

『消える。』

腕を掴まれたまま動けないスミロドナツは動けないまま……

「クッ!!」

更にもう一か所、最後の戦場は既に一方的な様相になっていた。

「はははは!!どうした最初の威勢は!?あの小僧とロクシヨウならば既にBーストマスターの腕を斬り落としているぞ?」

「うるさい!!」

ガキイツ!!

「浅い……!!」

「どうした？お得意のサクリファイスは使わないのか？」

やはり完全なサクリファイスでなければビーストマスターに傷をつけることは不可能か……!!

ラブレター男のいるコウジ達の戦場とは違い、こちらではすでに両者とも《レアメダル》としての力を解放している。というより、常に解放し、暴走している様なビーストマスターに対抗するべくこちらにも合わせたと言った方が正しいか。だが、それでもカラス達は未だに決定的な攻撃を決め切れずにいた。サクリファイスを制限して使っているからという理由だけでは説明できない。恐らくこれは……

「俺も暇ではない、貴様と遊ぶのも少々飽きた。そろそろ終わらせるか。」

そこで遂に今まで防戦一方だったビーストマスターが攻撃に転じる。それも頭パーツ、つまりはG・Oデスでは防ぎきれない一撃。

「《デスプラスト》か……!!」

仕方ない、元々自分達は長期戦が出来る戦い方ではないのだ。向こうが終わらせる気ならば、それを超える一撃で粉碎するまで。

「来るか？ならば力試しといこう。」

「刈り取れG・Oデス!!」

その言葉を合図にG・Oデスの両腕からサクリファイスが発動される!!同時にビーストマスターの口から圧縮された重力弾が放たれて……

バアアアアアアアアアンツツ!!!

「グウウウツ!!」

「クツ……!!」

ぶつかり合い、激しい閃光と火花を散らしてサクリファイスとプレスは相殺し合った。

「互角か……いや、違うな。見事だ小僧。」

「……」

見事だと？違う、これは完全な敗北だ。こっちは今の一撃で倒していなければいけなかったのだ。メダフォースを溜める余裕すら与えないであろう相手を倒すためには今が最後のチャンスだった。サクリファイスは発動後自身のパーツを破壊し傷つける諸刃の剣。相殺したでは、無駄撃ちと変わらない。もうこれで打つ手はない……

「そう悲観するな。破壊できなかつたとはいえ、余波で獣王を傷つけるということ成し遂げたのだからな。実に惜しかった……あの《死神》ならば我がビーストマスターをも破壊できたらう。もっとも、それが出来る体ではないようだがな。」

その通りだ。イツキ達には平気だと言ったが正直今のカラスは立っているのがやっと。体に力が入らず、目の前も霞んでいる。

「だがまあ、ここで消すには惜しいな。先日の秋田キララの様な間違いを起こすわけにもいくまい。見逃してやろう。」

「……ちよつと待て。今何と言った？」

「あの女はあがたヒカルとはまた違う形で楽しませてくれる存在だったというのに……お前もだよ渡鳥カラス。」

貴様は、まるで玩具のように……っ

「だから見逃す。昏睡状態になどなられたら楽しみが減って困るからな。」

とるに足らない存在だと……!!

「次に会うときには是非とも見せてほしいものだ。本当のお前の力をな。」

だから見逃すだと……この俺をつ!!

「……待てよ。」

カラスの脇を通り博士たちのいる部屋に入ろうとするタイヨウを怒りに震えながら引き留める。

「まだ決着はついてない。見たいんだろ？なら見せてやる。」

「……呆れたものだ。」

言葉とは裏腹にタイヨウの顔は笑っている。ハツタリではない、この小僧は本気で発動すると理解したのだ。

「死に急ぐか・・・それもよからう。獣王よ、止めを刺してやれ。」  
「それは俺のセリフだ・・・っ!! G・Oデス!!」

両腕を無くしても死神の殺意と戦意は薄れない。獣王もまたそんな死神の姿に心ふるわせ・・・

「悪いがそれは認められない。ここは僕が預かるよ。」

瞬間、

ズガガガガッ!!!

「「っ!?!」」

第三者が、その戦いに乱入した。

「今のは・・・」  
「クツクツクツク・・・!!」

狙われたのはビーストマスターのみ。獣王はその全てを捌いたもののこの正確無比な射撃はまさか・・・

「ようやくか。待っていたぞ・・・この時をつ!!」

ようやく、ようやくこの時が来たとタイヨウは歓喜する。ああ、長

かった……長かったぞ!!

「さあ、始めようか……我が宿敵、あがたヒカルよ!!」

「……喚かないでくれ、頭に響くんだよ。」

めんどくさそうに頭を抑えながら、あがたヒカルはめたびーと共に参戦した。



第69話：助けに来たのは……

「ヒカルさん……」

カラスとタイヨウの戦いに参戦したあがたヒカル。どこか疲れた様子を見せている彼はめたびーのみを転送して獣王に狙いをつけていた。

「大丈夫かいカラス君？」

「………なんであなたがここにいる？キララさんはどうした？」

「キララは昨日の内に病院に運んである。巻き込まれる心配はないよ。」

「………知らなかった。いや、しかしならどうして今まで姿を見せなかったんだ？」

「君達の昨日の試合を見た後ナエさんと博士から眠るように言われてね。まあそれでも中々寝付けなかったんだけど………ちよつと色々あつてね。」

ん？この表情………どこかで？

「いや、まあ彼女を怒らせた僕がいけないんだろうけど………それでも怖いものは怖いし、眠かったのは事実だし………」

ああ、これは確か昨日怒ったカリンを目にしたときにアリカが見せていた表情だ。恐らく俺も見せていたであろう表情、つまりヒカルはナエに………

「正直に言っただけで寝てただけだね。何か騒がしいと思って博士のところに行こうと思ったたら人はわんさかいるし、何とか抜けだしたらカラス君とタイヨウが戦ってるし……」

「……状況説明いりますか？」

「いや、そもそも君がここにいる時点で大体理解した。」

先程までの表情とは打って変わり真剣な表情でタイヨウを見つめる。

「話は終わったか？なら始めよう……もう俺は俺を抑えられない……！」

「随分嬉しそうだな……10年前とキャラ全然違うじゃないか。」

「お前のおかげだよ……ビーストマスター……！」

ジャキイと獣王の右腕がめたびーへと向けられる！が、既にめたびーの姿はそこにはなく……

「悪いけど、最初から全力で行く。」

『……』

いつの間にか背後をとっていためたびーの拳が獣王へ叩きつけられる！更に左腕からガトリングを乱射し、蹴りつけ、飛び上がって再び殴り、撃つ。その動きはまるで獣だ。

無論、ビーストマスターはその程度の攻撃では倒れない。だが油断も慢心もなく傷つけられ、更には未だに攻撃のチャンスが与えられないという事実。

「これは……《バーサーク》か!？」

「言っただろう？最初から全力で行くと。」

ヒカルとしては出来るなら使わないですませたいメダフォース。第一世代のカプトメダルが持つメダフォースは強力すぎるのだ。それこそ使用者の性格や存在が激変してしまうほどに。

「ククク……嬉しいぞ。ようやく貴様も本気で俺と戦うことを決めてくれたか。」

「まあ、ね。どのみちこれ以上お前を野放しにするわけにはいかないし、個人的な理由でも本気にならざるおえないんでね。」

口調こそめんどくさそうにしているがその目はいつになく鋭い。本気でタイヨウを倒す、決着をつけると言っている目だ。

「けどヒカルさん、だったらなんでもう一体も出さないんだ？アンタの本領は……。」

「ろくしよは今戦える状態じゃない。元々使える筈のない《ラストフォルム》を《ツインレアメダル》という特例で使用できたんだ。正直、めたびー以上にかかった負担は大きい。」

「じゃあ……。」

という事はヒカルは《レアメダル》の力を使えないということか？ユウト曰く特殊ゆえに《奥義》が存在せず、単体での戦闘能力は普通の《レアメダル》に劣ると言われているのに……!?

「心配いらない。少々きついというだけで戦えないというわけではないし、一時的になら君達の相棒達以上の力を出せる。」

「だが……!！」

「それにこいつの相手だけはもう誰にも譲るわけにはいかない。今度こそ、僕が決着をつけなきゃならないんだ。」

それだけ言うと、再びめたびーを獣王へと走らせた。

同刻

『マズイな……』

Bビートルはカイを抱えたまま動けない状態だった。ヘルは動かさないし攻撃もしてこない。だが、ただそこにいるだけで文字通り場を支配する。既に泥は会場のほとんどを覆い尽くし、下手に動けない状態だったのだ。更に最悪なことにメタビーは既に泥に呑みこまれた。そしてその後にはイツキも。絶叫は今こそ止んでいるが、それは彼らが完全に呑み込まれたから。むしろ状況は悪化している。

「ビー……トル……」

『喋るな。俺の背中が寝心地が悪いだろうがそのまま休んでいる。』

かといってカイは指示を出せる状況ではない。つまりは実質上マスター不在のBビートル一人で戦わないといけないのだが……

『……イツキ達はどうなっているんだ？』

「心配なの？」

ルクスリアがヘルに変貌してからというもの、綺麗な半身の方に座りほとんど成り行きを見守るだけだったアスモデウスが頬に手を当てて見下ろしながらそんなことを言ってくる。

「てつきりBシリーズはマスター以外の存在になんて興味ないと思っただけけど……あなたはそうでもないのね？」

『貴様には関係のないことだ。それにしてもやはりこの泥、貴様がそんな安全地帯にいるということは落ちれば貴様もただでは済まないということだな？』

チャキイと銃身をアスモデウスに向ける。だがそんなもの意にも介さずクスクス笑って、

「そんなもの、何の脅しにもならないことはあなたが一番よく分かっているでしょう？今のあなたは三原則に縛られている……あなたでは私を撃つことは出来ない。」

『……』

その通りだ。まだイツキ達と敵対していた頃、敗北し一旦メダロツト社に回収されたBビートルは三原則を備え付けられた。文句を言うつもりもないし、だからこそイツキ達とも親しくなれたことを考えればむしろ喜ぶべきことなのだが、今は三原則の存在が煩わしい。

「そんな怖い顔をしないで。二人なら無事な筈よ？耐えられればの話だけ。」

『……どういう意味だ？』

「ヘルの腐敗泥は体を蝕み命を削る呪いであり、周りを巻き込んで命を繋ぎ止める策。呑み込み、溶解させ、吸収する……でもね、それだけじゃないの。多分だけど彼らは今頃地獄を見てるかもしれないわね。」

それは……どういう……？

「メタビーと言ったわね、彼。レアメダル故の自己防衛本能……それが自分とマスターを守ることで少しの間だけ無事でいられる。でもね、だからこそ彼らはその少しの間に色々見ることになるのよ。」

この世のものとは思えない怒り、憎しみ、悲しみ、恐怖、絶望、殺意、怨念……ヘルに呑みこまれた者たちによる負の光景が彼らを苦しめる。果たしてあと何分持つのかしら？私としてはいつでもいいんだけどね。どっちにしてもレアメダルが溶けることなんてないだろうし、だからあの子が死ぬこともない。人形にはなるかもしれないけど……」

『そろそろ黙れ、不愉快だ。』

これ以上この女の戯言を聞いているわけにはいかない。もしそれが本当ならイツキ達が危ないのだから。カインに衝撃が及ばないよう一旦地面に下ろし、ヘルへとガトリングをこれでもかというほどに撃ち込む！！

だが無情にも全ての弾丸はヘルに届くことなく泥へと呑み込まれて消える。

「無理よ、ヘルになった以上誰も彼女を傷つけることは出来ない……さて、そろそろ貴方も回収しましょうか。ヘルの二つ目の能力で面白い物を貴方にも見せてあげる。」

『ッ！?』

そういうアスモデウスの声に反応したのかヘルが初めて行動らしきものを見せる。腐敗していない方の半身、その片眼が妖しく光り出して……

「じゃあ、あの子たちと同じ悪夢の世界にご招待」

Bビートルの視界が暗闇に包まれた。

(あとは……時間の問題ね)

イツキとメタビーは既に取り込んだ。これでレアメダルの回収と個人的な目的は果たしたことになる。Bビートルも現在は悪夢の中を彷徨っている筈、メダルを奪えるのも時間の問題だろう。後は……

「さて、後はスピリット君かしら？」

Bビートルの傍で倒れ伏しているカイ。ほぼ確実に水のスピリットであることは分かっている。ならばその力も至上のものだろう。何せ自然を構成する4大元素の一角を担うレアメダルだ。

「あそこまで弱ってたら溶かしちゃうかもしれないし、さっさと回収させてもらおうかしらね。」

そう言つて、アスモデウスはヘルに指示して普通の方の片腕をカイへと伸ばさせて……

『意外だな、まさかここまでイツキ達が圧されていたとは。』

その腕を、止めていた。カイとBビートルのすぐ傍に立つ一体のメダロットの姿を見て。

『予想以上に凶悪な能力だったのか、それとも冷静な判断力を無く

していたのか……まあどちらにせよあのバカの見立ては間違っていたわけだ。いや、それとも敢えて……？」

「……どうしてあなたがここにいいのかしら、白い剣士さん？」

ロクシヨウが、その場で牽制していたから。

『何故？可笑しなことを聞くのだな。俺は元々イツキ達のチームに所属するメダロットとして登録されている。ここにいない方が不自然だろう？』

確かに、アスモデウスとしては何故ユウトとロクシヨウがこの場に現れなかったのかがずつと気になっていた。何故実力的に高い筈の彼らが現れないのか？ある意味一番厄介な不安要素がいなかったのはありがたかったが、むしろそれが逆におかしくて……いや、それ以前に、

「貴方、自分のマスターはどうしたの？」

今この場にもユウトの姿は無い。いるのはロクシヨウだけで……

『ふむ、完全に意識が飛んでいるな……しかしまだそんなに時間経っていないようだ。ならば……っ！』

アスモデウスの質問は華麗にスルーし、ビートルの顔面を殴りつける！！

『グ……ッ！』

……俺は、一体……？」

『目は覚めたようだな。立てるか？』



『お前は・・・成程、もう時間切れというわけか。』  
『ああ、これ以上は危険だからな。故にこれを・・・』

すつとロクシヨウはビートルの手に何かを渡す。それ以外にも色々  
と何やら話しており、アスモデウスの事はまるで眼中にないようだ。  
いや、実際に眼中にないのだろう。無論そんなことでマモンのよう  
に怒ることはないが、それでも舐められているというのはあまりい  
い気分ではない

「ちよつと痛い目を見ないと分からないのかしらね・・・ヘル。」

アスモデウスの言葉に呼応したのか、ヘルの体から流れ出す泥が更  
に勢いを増して広がりだす。それはロクシヨウ達を・・・

『・・・と、いうわけだ。とりあえずあのバカから頼まれたもの  
の説明はこれで終わり。何か質問はあるか?』

『いつの間に作っていた・・・とかは聞いていいのか?』

『俺に聞いても無駄だ、知らんからな。後であのバカに確認してお  
こう。』

「・・・・・・・・!!」

泥はいつのまにかロクシヨウ達のを周りに貼られた障壁のような物  
で守られ、避ける様に広がっていく。会場のほぼ全てが覆われてい  
る中、ロクシヨウ達がいる所だけは平気で・・・

『しかしアレだな。単純戦闘力ではアワリティアの方が高いだろう  
があればそういうのとは関係なく危険だ。ただそこにいるだけで周  
りを滅ぼす力に、強力な幻覚を見せる能力か。俺の様な格闘タイプ  
にとっては最悪の相手だ。』

『だが通常の射撃でも意味を為さない。せめて《一斉射撃》位のものでないとな。だが必要なだけのメダフォーを溜める時間が……』

『正直ユウトがいない以上、俺の力にも限界があるからな。出来ればその大半の力は呑み込まれたというイツキ達を引きずり上げるのに使いたい。出来ればすぐにでも戻りたいしな。』

『なら俺はカイを守っていればいいんだな？貴様がイツキ達を助け出すまで。』

『そうだな、任せた。』

そう言つてロクシヨウは自ら泥の中へ飛び込んでいく！！そして……

(なるほど、中々に息苦しい空間だな)

今まで呑み込まれたメダロット達の怨念。そのあらゆる負の声は正常な人間なら発狂してもおかしくはない。自分の周りをメダフォーを放出するように覆うことで守り、溶解されるのを防いでいるロクシヨウだが、それ故に響いてくるこの声は正直かなりキツイ。

【許さない】【どうして私が……】【殺してやる……】

【イヤだ……】

(まるであのころに戻った気分だな……いや、もしかすれば俺だからこの声が聞こえているのか?)

気にはなるがどちらでも構わない。今はイツキ達を……

(見つけた。)

意識は失っているようだが間違いない。すぐ近くにいるメタビーがロクシヨウのようにメダフォースを放出することで自分の身と共に守っているようだ。

【無事か？二人とも】

【っ、テメエ、なんでここに……!?】

【事情は後だ、ここを出るぞ。お前はしっかりイツキを支えているよ。】

【出るってお前、どうやって……】

メタビーの質問には答えず、ロクシヨウは頭上を見上げて……

【斬ッ!】

その右腕の刃で空間を切り裂いた。

第69話：助けに来たのは……（後書き）

中途半端なところで切ってスイマセン。もう少しちゃんとすべきだったかなと思いつつも、もうしょうじょうと思つと文字数の多さが……

「力不足だな。もっと勉強しろ」

言い返せねえ……。ちなみにルクスリアIIヘルの能力である泥ですが、これの元ネタは某特撮ヒーローの敵キャラから来ました。ていつても作中で語られてるような暗い描写はちゃんと書いていないんですが……

「そうだな。もう少しちゃんと書こうぜ？」

……。言い訳を許していただけなら、暗すぎたんです。なんていうかこう、読み替えした自分が軽く鬱になりかけるレベルまで。

「どっちにしる力不足だな。次に活かせよ」

……。相変わらず偉そうな鳥の巣頭め。では皆さん、また次の話で

## 第70話：カイの秘密（前書き）

ようやく70話か・・・アスモデウス編長いな。何かもう少し続きそうですが、彼女との決着がつくのはもう2、3話で済ませたいものです。

## 第70話：カイの秘密

時は少し遡り

「つうわけでロクシヨウはあっち、俺はこっちな。」

『……カイのこともあるし、《悪魔》が動いている以上イツキ達に加勢しに行くのは分かる。だが何故二手に別れる必要がある？』

当初の予定からかなり遅れて到着した二人は、誰に聞くでもなく状況を把握していた。そんな中ユウトが二手に別れると言い出して、

『ユウト、貴様何を考えている？』

「何も。強いて言うならその方が都合がいいからかな。」

『ならば却下だ。俺と共に試合場へ向かうか、俺を連れてお前の行き先へ向かうか。どちらか選べ。』

「うーん参ったな……。」

どうやら本当に付いてきてほしくないらしい。そのこと自体はこの男に限ればそう珍しくもないが、この反応は彼らしからぬものだ。一体……。

「ようし、分かった！んじゃあまあ、ジャンケンで勝った方の意見採用な。」

『……良かろう、ならば我が黄金のチヨキを見せてやる。』

「やる前から出す手を言うなよ……。」

とまあ、ある意味この二人らしい決着のつけ方だったのだが……。

「あ、ちなみに俺はパー出すから。お前はその黄金のチヨキを出す

「がいいぜ。」

『む、そうか。よかろう。ならば望み通り……』

「ふっ、ジャンケンでロクシヨウに勝つなんてチンペットを瞬殺するよりも簡単なことだぜ……」

「いや、いきなり現れて何をかつこつけてるんだお前は!？」

そしてユウトはロクシヨウとは逆方向、つまりコウジ達の所に姿を表していた。今にもスミロドナットを貫こうとしていたBスタッグの後ろを取り、逆に引き裂こうと爪を光らせる白いKWG型メダロットを従えながら。

「細けえことに気にすんなよ。どうやら全員無事みたいだな。」

「あんた確か、試合には出てなかったけど先生のチームにいた……」

「ん？そういうあんたはラブレター男君か？けど本名じゃないよな？もしそうなら何か同情しそうになるんだが。」

「……いいんだ、もう諦めたよ。」

あまり面識のない少年にまで誤って伝わっている……もはや宿命と開き直ろうかな。

「おい、ポップコーン男。なんでここにいる？イツキ達の所に助けに行ったとばかり思ってたぞ。それにその機体……ロクシヨウはどうした？」

「そつだ!?!ユウト、お前ロクシヨウは!?!」

コウジとミズチの問いが相次ぐ。確かにいつも一緒にいたロクシヨウがおらず別の機体を従えたユウトが助けに来たという事実。彼と知り合ってから間もないとはいえおかしと感じる。もっとも当のユウトの方はいつもの屈託ない笑顔を浮かべながら気にするなと言ってくるが。

「話は後々、な。それより困るぜお前ら。」

「？」

「アイツの相手は俺がする、イツキ達にはそう言っただけだなあ。」

やれやれとあからさまな溜め息を吐きながら、ユウトはクイと指で前を指し示す。

「とりあえずお前らもう先に行けよ。誰か拐われて、助けに行こうとしたけどコイツが邪魔して通れなかったってとこだろ？今なら行けるからさ。」

それは遠回しながら、ここは引き受けるという意味。しかし……

『テムエ……いきなり出てきて何ほざい……グボアツ!？』

「いいぞ〜<sup>ナカミツ</sup>長光。悪いけどもうちょいそのまま押さえといてくれ。」

暴れ出そうとするBスタッグを右腕の爪で壁に押さえつけ、動きを封じる。この機体は確か……

いや、それよりもなんでコイツはメダロツチを右腕にもつけてるんだ？以前はつけていなかった筈だが……

「ロクシヨウもないのに、一人で大丈夫なのか？」

「ん？ああ、構わねえよ別に。つうか相手も一人なんだ。一人相手



に大勢で挑んでいいわけねえだろ。さっきまでのお前らみたいな状況ならいざ知らず。」

ユウトに言わせれば一人の相手に大勢でかかっていい状況はただ一つ。相手が自分よりも格上であり、その上で絶対に負けられない、勝たねばならない状況だけだ。誇張や自意識過剰ではなく自分と《黒衣》とのレベルは互角と考えている以上、ここでコウジ達の力を借りようものならそれは恥。ユウトにとって数少ないプライドであり、それ故に曲げるわけにはいかない信念だった。それを曲げるような状況は即ち……

「ま、どの道こいつだけは譲れねえんだ。ここに俺が来た以上、誰にも邪魔はさせねえ。悪いが加勢とかしようとしたら先にお前から潰すからな？」

冗談めかした言葉だったが、間違いなく本気だ。コイツとの戦いを邪魔するな、邪魔したら消す。そういう強い意志がユウトの目からは見えていて……

「分かった。じゃあ目的果たしたら俺達はロクシヨウの方に合流すればいいんだな？」

「ああ、もしかしたらイツキがやばいかもしれないからな。大丈夫だとは思っけど。」

どっちだよ。

「とりあえず早く行け、巻き込まれなくなかったらな。」

「ああ、スミロドナットを助けてくれてありがとなー！」

「ついでだよついで。」

そのままコウジ、ミズチ、ラブレター男はユウト達を残して走り去って行き……

「もういいぞ長光、離してやれ。」

ユウトの言葉を聞きBスタッグの体は解放される。当の本人はユウトへの怒りの色をにじませて今にも襲ってきそうだが、それはあくまでも冷静に受け流す。正直なところコイツなど眼中にはない。

「さて、ようやく二人きりになれたわけだが……久しぶり、元気にしてたか？」

「……」

まるでイツキ達に対する様な気安さでユウトは《黒衣》に話しかけるが、対する彼女の方は何の反応も示さない。いや違うか、何故なら先程までのロボットでは前を見ているようで何も見ていなかった彼女が、フードの下とからはいえユウトの姿をはっきりと視界に収めているのだから。

「だんまりかよ……まあお前は俺とは口を利きたくねえだろうし当然といやあ当然か。」

「……いえ、敵である筈の私にこうも気安く話しかけて来たので驚いただけです。お久しぶりですね、と言ってもそんな挨拶をする関係ではないのですが。」

「だな。でもよかったぜ、少しくらいは俺と話してくれるつもりがあるみたいで。色々話したいこと、聞きたいこともあるからさ。」

本当に、色々あるのだ。聞きたいことも、言わなきゃいけないことも……

「今日はロクシヨウはいないんですね。」

「思った以上にイツキ達がやばいみたいなんでな。それにアイツが来たらめんどくせえ。」

「だから自分のメダロツチを？」

「ああ、今となつては珍しいだろ？どつちもさ。」

トントンと右腕にはめた古いメダロツチを指で叩き、その後親指でユウトとともに現れた機体を指さしながらニヤツと笑う。

「KWG初期型発展試作機《ゾーリン》……一度改修された《ヘッドシザース》を新たに改良した機体。諸々の事情で生産中止となったものの、それ故に価値がつくプレミア物……この僅か数年でよく手に入りましたね。」

「色々あつたんだよ。別に遊んでた訳じゃないんだぜ？」

苦笑し、ユウトはガシガシと頭を掻き始める。そして同時に先程までのふざけた空気はほとんど無くなり、雰囲気が変わって……

「本当はもう少し話してたいんだけど、お前はともかくどうやらそちらさんはこれ以上待てねえみたいだな。どうもさつきから居心地が悪い。」

『分かつてんじゃねえか。前は決着つけらんなかったからな、今日は白黒はつきりつけようぜ！』

「ロクシヨウがこの場にいないんだから前回の決着なんてつけられないだろ……まあいいか。」

露骨に溜め息を吐きつつ、長光と呼ぶゾーリンに構えをとらせる。まるで言葉を発しないが、その後ろ姿は目前の敵を倒すと如実に語っていた。

「んじゃ、旧交を温めんのは後にしてパツパツと片付けますか。出来ればお前は手を、つつか口を出さないでくれると助かる。本当ならこの手の事は言わないんだが、さっきも言ったようにロクシヨウに追いつかれるのは面倒なんだ。分かるだろ？」

問いに対する《黒衣》の返答は無言だったがそれはそれで構わない。ユウトは一度大きく息を吐くとしっかりと眼前の敵を見据えて、

「行くぜ長光。」

言葉と同時にゾーリンが動く。その右腕、KWG型としては異例である鋭利な4本の爪がBスタッグを仕留めんと伸ばされる！！

「ハッ、ようやく第2ラウンドか。さっきの借りを返させてもらおうぜ！！」

スタッグもまた先程の借りを返すべく動きだし、

ガキイツ！！

互いの爪がぶつかり合い、火花を散らす！！ユウトと《黒衣》、二人の戦いがコウジ達の戦いを引き継ぐ形で今始まった。

(完全に誤算だったわ……っ)

この場にロクシヨウが現れたことも、マスターがいない状況でさえあれほどの力を持っていたことも。あれが完全に力を使いこなしている《レアメダル》の力、あれほどのものになるなら誰もが欲しが  
るわけだ。

『ふう、やはりあの空間と比べれば心地良いな。現実も。』

『テメエ、いつか絶対泣かしてやるからな……!!』

そして泥の中から放り上げられたかのように宙を舞って出てきたメ  
タビーとイツキを抱えながら飛び出してきたロクシヨウが再び現れ  
る。

なにやらメタビーがロクシヨウに対して文句を言っているようだが  
そんなことを気にしている場合ではない。捕まえ、確実に墮とした  
と思っていた少年とメダロットが無傷で出てきたのだから。

(ロクシヨウがいる限り彼らには手を出せない、あのメダロットの  
力はヘルを上回っているのだから……)

少なくとも自身が生きるために他を全て呑み込むこの泥ではロクシ  
ヨウは倒せない。先程Bビートルに使った目を介しての幻覚ならば  
いけるかもしれないが、ロクシヨウを本気で相手にするつもりなら  
はこちらも本格的な戦いをせねばなるまい。

(ロクシヨウを倒せない以上あの子たちを襲うのは無理……な  
らば狙うのは弱っているスピリットかしら……)

本当なら《Bカブト》も手に入れたいが、アレもまた強力すぎる。  
マスターであるスピリットが不調であるが故に力を出し切れていな

いとはいえ、本来の力は《黒衣》のBスタッグ以上、下手をすれば  
ロクシヨウよりも強いからだ。

『……早かったな。』

『二人を引き揚げるだけだったからな。それよりも早くすませるぞ。』

『……分かっている。』

ロクシヨウは未だ目覚めきっていないイツキをカイの側に寝かせると、何やらビートルと話始める。

『オイ、何の話だよ？』

『こちらの話だ。お前はさっきと同じ要領でイツキを守っている。』  
『命令すんなボケ！！』

そうは言いつつイツキを守るために先程と同じようにメダフォースを展開して防御を張る。ロクシヨウはそれを確認するとカイの傍にしゃがみ込んで、

「お……前は……」

『よく聞け浦島カイ。以前話した通りお前の体はもう限界に近い、分かるな？』

「……」

『このまま無理をし続ければお前の存在は消える。だから言いたいこと、思うところはあるだろうが今からお前を再び封印する。いいな？』

それは、カイにとっては一種の死刑宣告に等しかった。

「ちょよ、ちょよと待て!! どういうことだよ、そいつを封印するって!?!?」

「そのままの意味だ。そもそも浦島カイなる人間は存在しない。いや、世界中を探せばいるだろうが少なくともBビートルを従えることが出来、マーマン学院の生徒として生活していた《浦島カイ》という人間は本来どこにも存在しないのだ。ここまで言えばお前でも分かるう? いや、気付こうとしていなかったただけでお前達には分かっていた筈だ。」

それは、つまり……

「……やっぱりカイは、セルリアーノだったんだね。」

「っ、イツキ!?!?」

どこから聞いていたのか、いつの間にか目覚めていたイツキがゆっくりとそう聞いてくる。先程までの怒りはなりを潜め、至極冷静になっっていたせいかメタビーは一瞬たじろいでしまった。

「気付いていたんだな?」

「それらしいことは色んな人から聞かされてたよ。でもどうしたらいいのか分からなくて、怖くて確かめられなかった。」

「そうか……だが今はそれを気にしている場合ではない。」

本来セルリアーノが封印されていた《アクアメダル》はアトム殿の元、厳重に保管されていた。お前が封印した他のスピリット同様な。しかしその中でも真にメダルとして覚醒したのは《フレイルム》と《アース》の二つ。残りの二枚は暫く時を待つこととなる、筈だった。」

「だった?」

過去系の言葉、即ちここからが本題ということか。

『最近のことだ。実は・・・ッ!?メタビーー!!!』

続きを話そうとしたロクシヨウを遮るかの如く、先程までとは圧倒的に密度が違う泥波がイツキ達目がけて降り注ぐ!!

『グウウ・・・ッ!!なんだよ、この量は・・・!?!?』

苦しげにうめきながらもなんとか耐え抜く。見ればアスモデウスの顔から遊びの色が消えていて、

「私が間違っていたみたいね。ここからは遊びなし、ヘルの力の全てをもって貴方達を潰すわ。」

先程まで全くといっていいほど動いていなかったヘルが、右腕を前に掲げ戦闘態勢に入っている。先程の波は意図的に操作し、明確な目的を持って放っていたわけか。

『マズイな、いよいよ奴らも本気になったらしい。』

急ぐぞビートル!

・・・それでいいな浦島カイ?』

「・・・また、戻るのか。笑える話だな、ようやく自由を得たと思えば時間制限付きだったとは。」

「カイ・・・」

幾らか楽になったようだが、その口調は自嘲そのものだ。メダルに封印されるというのがどういふことなのかは分からない。でもカイ、いやセルリアーノにとっては地獄のような時間だったのだろう。



「いいさ、やってくれ。どの道マスター不在とマスター不調のレアメダロットでこの場を切り抜けるのは無理だ。私がメダルに戻ればこの場を切り抜けることも可能だろうしな。」

『……かたじけない。ビートル、頼む。』

『ああ。』

そうして、Bビートルの手に握られていた六角幣石が輝きだし……

「ダメだー!!」

バツと半ば強引にイツキはそれをひったくる!!

『イツキ!?』

「ごめん、でもやっぱダメだ。僕はこんな形でカイを封印したくない……!!」

数年前は何がなんだか分からなかった。分けも分からぬまま封印して、その後は自分が死なないために封印して……。一度目はともかく、二度目の封印をイツキは心の底ですつと後悔していた。本当にああするしかなかったのか？本当に？

他のスピリットとは違い、友人関係になって情が移ったことは否定しない。でも、いやだからこそ今度は別の方法を模索したい。仮に再び封印することになってもそれは最後の手段だ。

「この場を切り抜ける為にカイをメダルに戻す必要なんてない、僕達があいつらを倒せばいいんだから!!」

『それは大きな理由ではない！浦島カイとして自信を維持することはもう限界なのだ!!彼を死なせない為に今この内に封印する。お前とて友を見殺しにしたくはないだろう!?!』

「カイを苦しめてるのは何も体の限界だけじゃないでしょ！？アイツを倒せば少しでも楽に出来るはずだ！！」

そう、カイが急激に弱りだしたのはルクスリアがヘルに変貌してからだ。体の限界が近いのもあるだろうが、ヘルの影響もかなりあるに違いない。ならばここでヘルを倒せば少しでもカイを封印せずすむはずだ。

「……出来るのか？覚醒しているという点では俺達の中で最も未熟なお前達だ。この場ではマスター不在の俺やマスター不調のピートルにも劣るであろうお前達だ？」

容赦のない言葉だが、実際その通りだ。今のイツキ達ではこの命がけな《悪魔》達との戦いにおいて今のロクシヨウ達にも劣る。ただ……

「出来るか出来ないじゃない、やってみせる！！そうだろメタビー！！」

「つたり……まえだ！！よく見とけクワガタ野郎、俺とイツキに不可能はないって事をな！！」

そうだ、僕とメタビーが力を合わせて出来ないことなんてない。神帝にもグレインにも、《マザー》にだって負けやしない！！

「……いいだろう。見せてみる、お前達の本当の力を。」  
「言われなくても！！」

言葉と気持ちが生クロし、二人が動く！！戦いは佳境に入り始めようとしていた。

## 第70話：カイの秘密（後書き）

ハイ、ようやくイツキが活躍しますよ！！最近ロクシヨウとかカラ  
スとかにおいしいところ取られまくってましたからね。そろそろ何  
とかしないと主人公の威厳も・・・と、いうわけで次回の更新  
でV S アスモデウス編は終了予定です！！

あ、ちなみにa o k i s h i | K YのネームでT w i t t e rも始  
めてます。小説の更新告知はこれからそちらでユウトかロクシヨウ  
が進めてくれる筈なので暇な時はそれを見て確認してください。ま  
あブログと同じでは日々の戯言なんすけどねw w いや、更新頻度  
が少ない分ブログよりひどいか・・・？

第71話：決着・そして迫る悪意（前書き）

お待たせしました！！今回も2話更新ですが・・・最初の1話には懐かしのあのシーンが流れます（脳内的に）。メダロット3をお持ちの皆さんにはお馴染、そうあのシーンです！！その場面が来たら脳内かゲームでイツキのテーマソング「E」を流・・・

「さつさと始めるボケがああああああああああああ！！」

グハアッ！？

## 第71話：決着・そして迫る悪意

『それで、具体的にはどうするつもりだ？』

再び意識が朦朧とし始めたカイをビートルに任せ、ロクシヨウが聞いてくる。なんだかんだで彼も協力してくれるらしい。

『アレは戦う相手として俺とは致命的に相性が悪い相手だ。あの泥がある以上、接近戦に持ち込むのは困難。先程はメダフォースを全て防御に回していたから耐えられていたに過ぎないしな。』

それでも戦おうと思ったならメダフォースを攻撃にも回さなければならぬ。イツキ達を引つ張り揚げるために泥の中で空間を切り裂けたのは近くにメタビーがいたお陰で防御に回すメダフォースを多くしないですんだから。一体で攻撃と防御どちらも行うのは難しい。

『この場にユウトがいれば話も変わるんだがな。』

「そういえばユウトは？どうして一緒にいないの？」

『古い知人に会ってけると言っていたがよく分らん。詳しいことははぐらかされたからな。』

『……全く、人に黄金のチヨキを出していいと言っていた癖にグーを出すなど反則だろう……!!』

『……本当に何があつたんだろう？』

『まあいい、最初の問いに答えてくれ。一体どうするつもりなのだ？』

こうして二人で作戦会議している間、メタビーは一人でヘルの相手

をしていた。ただし今度は受け手ではなく攻めで。カプト型メダロツトの神髄たる圧倒的火力で一気に押し込むつもりだったのだ。しかしヘルから溢れ流れ出す泥が思った以上に厄介だった。戦闘態勢に入ったヘルは徐々にその泥の侵食地を広げつつ、自在に操作し始めたのだ。先程のように津波を引き起こし一気に決めにかかったり、身の周りに集めることで防御の壁を形成する。そして今、その壁に阻まれメタビーの攻撃は一切届いていなかった。

『メタビーの攻撃力ではあの壁を突破できない。《威力全開》の重ね掛けからの猛攻や《一斉射撃》ならばあるいは突破出来るかもしれないが、どちらも発動する隙がない。ビートルは本格的にカイの守護に回った為援護は不可能、俺は役に立たん。さてどうする?』

「攻撃に関してはメタビーに任せるよ。それよりロクシヨウに願いがあるんだ。」

『俺に?なんだ。』

「メタビーには攻撃と自分の身を守ることだけ考えてもらいたいだ。だから……」

『お前の側を離れず守れと?全く、お前は俺のマスターではないんだがな……』

露骨に嫌そうな態度だが、その声はどこか面白がっていて、

『……仕方ない。イツキこれを俺に向かって投げろ。』

ひょいと何かを投げつけてくる。ん?ちょっと待て、これってまさか……!?

『俺達の間ではあまり使わないものだから数だけ増えて面倒になっていたしな、ちょうどいいからここで一つ消費するでしょう。その方が俺もお前も安全に動ける。』

「いや、でもこれは……」

流石にこれはちょっとまずいんではないだろうか、そう言いかけたがすぐに思いなおす。これは普通のロボットではなく戦いだ。ならば……

『準備は出来たか？ならば行くぞ!!』

「分かった!!行くぞ、メダシエアーズだ!!」

先程ロクシヨウに渡されたオプションパーツ、それをロクシヨウ目にかけて投げつける!!そして、

「メダチエー……ンジ・レクリスモード!!」

ロクシヨウの体が変形し、多脚型のレクリスモードへと変形する。この状態のロクシヨウは対応防御のエキスパート、飛行型と潜水型のメダロットには限りなく無敵となる。だがこれはまだ変形の第一段階、ここからオプションパーツを装備することで究極の第二段階に移行する!!

「メダチエー……ンジ・クラフィティモード!!」

レクリスモードとなったロクシヨウに背中にオプションパーツが備え付けられ翼となる。頭部も完全にクワガタの顎の形状になりここにクラフィティモードが完成した。

『ふう、やはりメダチエンジは体が凝るな……やはり俺には合わん。今のクラフィティモードならともかく、変形してはソードが使えないしな。というよりこの姿も何というか……』

「こだわりあるんだね……」

そういえばいつもハンマーはあまり使おうとしていなかったな。ユウトのこだわりかと思っていたけどロクシヨウのこだわりでもあったのか。

『まあいい。そろそろメタビーもきつくなってきただろう、乗れ。』

「いや乗れって……」

『地に足をつけていたらまた呑み込まれるぞ。何の為に嫌いなメダチエンジをしたと思っっているのだ？』

「そういうことが……」

確かに空中を動き回っていればあの泥の影響は受けないだろう。ロクシヨウの動きは制限されるかもしれないがそれでもあの速さに加えてオプシオンパーツがある今ならそのハンデも補える。後はイッキが振り落とされないかが力ギだが……

(やっぱり、怖いなあ……)

しかし覚悟を決めなければ。イッキはロクシヨウの背中にまたがると、改めてメタビーとヘルの攻防に集中して策を練る。

「……これで、終わらせる。」

そう、今までにない冷ややかな声を小さく呟きながら。

『クッソ、まるで手応えがねえ……!』



メタビーの猛攻は続いていたが依然として有効打にはなりえておらず、ビートル戦で発動した《威力全開》もそろそろ効果が消えかけてきていた。無論、発動にかかるメダフォース量は少ないから重ね掛けなどは出来るが、発動する隙がない。ましてやクロス攻撃を設置する時間ももつたいない為、変形も無し。更に最悪なことに躲しきれないほど巨大な規模の泥津波がメタビーを襲う！！

だが、現在進行形で危ないこの状況で不思議とメタビーは負ける気はしなかった。あの時のイツキの目は本当にやる時の目だ。本人には決して言つてやらないけど、あの状態のイツキと組んでいる以上、俺に負けはない！！

『マスターが冷静に戻つてやる気出してんだ。俺だつて負けてらんなえよな！！』

バアアアアッ！！

向かってくる泥の波をミサイルで吹き飛ばし、再び猛攻を開始する！！

ヘルを守る泥はそれら全てを遮るが、それでもメタビーは止まらな。い。迫りくる泥は躲し、両腕の銃身から連射を続ける。無論それら全て壁となった泥に防がれるが、それでも攻める。だが、既に試合場の地面のほとんどは泥で埋まっている。このままでは身動きが出来なくなるところか再び呑み込まれるのは必至だ。

「バカの一つ覚えもここまでよ。もう貴方に逃げ場はない。」  
『ハッ、誰が逃げるかよ。これで終わらせてやらあ！！』

アスモデウスの言葉に反抗し、メタビーの両腕が火を噴き頭からミサイルが4つ放たれる！！

つまりは簡易的な《一斉射撃》、メダフォースとは違うため威力は格段に落ちるが、それでもこの猛攻は先程の比ではない！！

（でもやっぱり単純ね。バカ正直に真正面からしか攻撃してきていない。）

同じように前面に泥を展開し攻撃を遮断する。いくら物量で押そうが無駄だ。ヘルの操る泥、その壁は鉄壁。真正面からいくら叩きつけたところで……

『こんなんでいいだろ、マスター！？』

「充分だ！！」

メタビーの叫びに応えるのはメダチェンジをしたロクシヨウの背に乗るイツキ。どうやらメタビーの相手をしている間に厄介な相手が強力になるのを許してしまったらしい。だがそれよりも先程のやり取りは何だ？「こんなんでいい」「充分」……？

「っ！？」

その答えはすぐに分かった。先程放たれたミサイルが2発、それぞれ途中で方向を変え、泥を避けて左右から襲いかかってくる！！

「ミサイルはこの為に放ったのね。正面突破に見せかけた多角攻撃、悪くはないけど……」

確かにメタビーのミサイルは中々に馬鹿に出来ない威力だ。《威力全開》による補正も合わさっているし、先程泥を吹き飛ばしたこと

からもそれはうかがえる。恐らくは正面の砲撃を防ぐべく泥を集中させて、別個所からミサイルで倒す予定だったんだろが……

「残念だったわね、ヘルに死角はないの。」

即座に泥を全面に展開して左右からのミサイルを防ぐ！！流石にその部分だけは泥が吹き飛ばされるがヘルは無傷だ。いくら乱射しようともミサイルとメダフォース以外ではメタビーの武装でこの泥を突破できる物は無い。今のが最後の足掻きだったというならこれで……

『まだ終わってないぜ、おばさん！！』

「！？」

メタビーの言葉のすぐ後、泥の壁に空いた二つの穴へ再びミサイルが放たれていた。

(そんな、ミサイルは確かに防いだはず……！?)

いつの間に……いや待て、先程メタビーが放ったミサイルは4発だった。2発は先程防いだが、もう2発は未だ健在……

！！

「時間差で着弾するように計算したというの！？一体どうやって……

……」

『へっ、俺のマスターはな、勉強は出来ねえけどメダロットに関する物なら誰にも負けねえんだよ！！』

つまりは全てイッキの計算。着弾タイミングのズラしからどのよう撃てば長時間ミサイルを爆発させずに飛ばしてられるかまで。

自身の機体の特性、性能、そしてパーツ行動を全て把握するだけでなく相当な経験を積んでいないとまず不可能な芸当だ。

そう、アスモデウスは見誤っていたのだ。《レアメダル》の力ではなく本気になった天領イツキの力を。誰よりもメダロットを愛するがゆえにこんな戦いの道具としては使いたくなくなかったし使うつもりはなかった。しかしヘルの行動、カイのリミットにより今までイツキを縛っていた本気を出すための枷は完全に外されたのだ。こうなった以上メタビーの言うとおりイツキを止められるものなど存在しない。

「くっ、ヘル!!!」

だがアスモデウスも強者だ。空いた穴を、周りの泥の壁を寄せることで塞ぎ再び壁として補強するだけでなく、ミサイルが直撃するであろう箇所を先程よりも強靱にする。全体的に壁の密度は薄くなるが構わない。この程度ならばライフルでもガトリングでも突破できない!!!

そして結果としてはその通りに、ミサイルはヘルに届くことなく壁によって阻まれた。打つ手なしだ、冷静に考えてイツキを背に乗せている以上ロクシヨウは介入できないし、泥が会場のほぼ全てを覆っている以上降ろすわけにもいくまい。そして間もなく《威力全開》の効力は無くなり、メタビーはミサイルを撃ち尽くした。メダチエンジしたとしてもクロス攻撃をセットする前に勝負はつけられる。詰みだ、アスモデウスはそう確信する。最早メタビーに勝ちの目は無いのだと……

「狙いどおりに行動してくれてありがとう。これで本当に最後だ。」

そんな確信は、ロクシヨウの背中でニッコリと笑うイツキの顔で砕け散った。



メタビーの言葉は確信を持っていた。呑まれたわけではない、だがアスモデウスはほんの僅かな時間で自分が敗れたことを悟った。イツキとメタビーを本気にさせればもつと早く自分たちを倒せたというのを。スロースターである彼らが目覚めないうちに決着をつけるべきだったのだ。

『アンタの敗因は二つ。俺が相手だったこと……優しいマスターを怒らせた上にやる気にさせちまったことだ。』

いつになく静かにメタビーは呟き……

「行くよ、メタビー！！」

「『メダフォース・《一斉射撃》！！』」

キィィィィィィ……バァァァァァァァァァァァァァァァァァ  
アァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ

最強の砲撃が会場中の泥を全て吹き飛ばしながらヘルへと炸裂した。

## 第72話：静かな怒り

(ユウトが言っていたな……)

確かにイツキは甘すぎるくらいがある。そしてそれが既にロクシヨウやめたびー達と同じような土俵で戦えるだけの地盤が出来ていた。メタビーの性能を殺していた。Bスタッグにあっさり敗れたのはイツキ自身がそういうのを嫌っていたからに他ならない。そう、メダロットを自分達と対等に扱う彼だからこそそういう戦う手段として見たくなかった。それは彼が持つ優しさやメダロットへの愛から来るものだが、時として相手を傷つけたくないという枷にもなる。こんな人もメダロットも命がけな戦いでは特に。

しかしユウトと深く関わることになった件やベルゼブブに辛口コウジを傷つけられ純米カリンを攫われた件、マモンとタイヨウによって秋田キララは重傷を負い、ルクスリアⅡヘルによってプラスを傷つけられセルリアーノも殺されかけた。その積み重ね、今まで溜めこんでいた《悪魔》達に対する怒りがここに来て遂に爆発し、引き金となつてある意味完全になった。

そう、恐ろしいのはメタビーではなくむしろイツキ。まだこういう戦いでの経験は浅いとはいえ、一度腹を決めた後の行動は見事な物だった。すぐさつきまで苦戦していた筈がこうもあっさり勝利するとは……

(今の《一斉射撃》もどこか違っていたしな。コウジ達と同じく、まだ《奥義》と呼べる代物ではないがとっかかりは掴んだか。)

しかし皮肉なものだ。ユウトだけでなくイツキまでもが同じ怒りと言いきっかけて完全にこちらへ足を踏み入れ始めてしまうとは。

メタビーの最強技が炸裂したことで会場中に広がっていた泥は全てかき消されていた。同時にロクシヨウも地上に降りてイツキを降ろす。

「ありがとうロクシヨウ、短い時間だったとはいえ運んでくれて。」「  
」  
「気に入るな、ユウトを乗せるよりはマシだったからな。」「

イツキを降ろした途端すぐに変形を解除し、結局武器として使用することの無かったメダシエアーズを渋々手にとって手品のようにどこかへと消す（・・・深く突っ込んではいけない）。しかし見ごとくにクラフイティモードは飛行手段としての役割しか果たさなかつたなあ・・・

『イツキ。』

「うん、分かってるよ。」「

ゆるんだ心をすぐに引き締め、まっすぐと前を見る。そこにはアスモデウスを全身で守るヘルの姿があった。既にその体はボロボロで、少なくとももう戦える状態ではない。

『あんなマスターでも命かけて守るんだもんな。一応人間として意識してつから流れ弾でもない限り被害はないってのによ。』

「・・・」

そしてイツキ達の見守る中、ヘルの体が萎んでいく。そのまま人間大の大きさになりヘルからルクスリアへと戻った。



「まさか、そんな……」

「僕達の勝ちです。下手な真似はしないで大人しくしてください。貴方をメダロット博士たちに引き渡します。」

ここでセレクト隊と言わなかったのは彼らが無能な集団だということと、いくらメダロット事件担当の彼らと言えどこの事件に巻き込ませるわけにはい明かないと思ったからである。

「まだよ、まだ終わってない……！！ルクスリア……！！」

『オイおばさんっ、そいつはもう戦えねえだろうが！！イッキの言う通りもう勝負はついてんだよ！！傷ついた奴をこれ以上戦わせんな、殺す気かよ！？』

まだルクスリアを戦わせようとするアスモデウスにメタビーの怒りの声が轟く。が、アスモデウスはそれを鼻で笑い、

「殺す気かですって？所詮メダロットなんて物は道具。私が操るコイツも、貴方達も！！絆が強ければ応えてくれる？信頼しあえるパートナーに負けは無い？そんなもの戯言よ。」

さっさと立ちなさいルクスリア。貴方の頭は壊れていないでしょ、ならまだ負けじゃない……！！！！」

『デメエ……っ！！』

あくまで戦わせようとするアスモデウスの言葉に応え、よろよろとルクスリアは立ちあがる。だが既にボロボロであるルクスリアではイッキの指示がなくともメタビーの敵ではない。だというのに主の命だと言っただけでルクスリアは立ちあがる。

『お前も何でそんな奴の言うことなんて聞くんだよ！？おかしいだろ、考えろよ！！そいつに義理立てする理由なんてないだろ！？』

メタビーの声は届かない。ルクスリアはただ前へ、主の命を遂行する手目にただ前へと進むのみで、

『バカ野郎が……！！この……っ！！』

「もういいよメタビー、もういいんだ。」

『っ、イツキ！？』

「もうメタビーとルクスリアの戦いは終わったんだよ。でも彼女がまだ戦いは終わっていないと言うのなら……後はマスターである僕の役目だ。」

そう言っつてイツキはアスモデウスに向かって歩き出す。

『バツ！？お前何を考え……！！』

『行かせてやれ。アイツの言うとおりもう決着はついてるんだ。』

ロクシヨウはメタビーを制し、黙ってこの先の展開を見守れと促す。納得はしていないがメタビーもそれに従い、

「フフツ、バカな子ね。ルクスリアの力を忘れたのかしら？彼女の本当の力は幻術。ヘルになった時は全てを呑み込む泥に目が行ってあまり使う機会がなかったけれど、一人を対象にする幻覚ならヘルの時と精度は変わっていないくてよ？」

「さっきは見敗れたみたいだけど今度のはレベルが違う。さあ、絶望しなさい！！」

アスモデウスの言葉を体現するがごとく、ルクスリアの目が怪しく輝きイツキの目を捉える！！確実に決まった……はずだった。

「・・・・・・・・」

しかしイツキは一瞬たりとも歩みを止めない。まっすぐ前を向いたままずつと歩き続けていた。

「どういうこと・・・・・・・・ルクスリア!!」

ルクスリアの幻術は目を媒介とし相手と視線を合わせることで発動する技だ。無論ルクスリアは今もおイツキと視線を合わせ、発動の失敗などしていない。だと言うのにイツキは歩みを止めない。何度も何度も幻術をかけようと試みるがことごとくがイツキには通用しなかった。

「そんな、どうして・・・・・・・・!?!」

ルクスリアもベルフェゴールも、あの3人だつてこれは破れない。いや、そもそも人間に破れるようなものではない筈だ。

しかし天領イツキには全く通用していないという事実はなんだ!?!一度や二度ならまだしもこれは一体・・・・・・・・!?!

「ルクスリアが弱っているから・・・・・・・・?そうとしか考えられない・・・・・・・・!」

「何を勘違いしてるかは知りませんが、多分その機体が全快だとしても結果は変わらないと思いますよ。」

動揺するアスモデウスとは対照的にイツキは静かな物腰だった。その顔はどこまでも冷静で、その歩みにも迷いはない。

「幻覚、悪夢・・・・・・・・その言葉を聞くと懐かしい気持ちになる。」

同じような力を持ったメダロットと遊んだことがあるから。」

そのままルクスリアの横を素通りして、アスモデウスの真正面で立ち止まる。何故だろう、メタビーは遙か後ろで、イツキは丸腰で自分達の間合いにいる。弱っているとはいえルクスリアの腕が一振りされれば容易くその命を散らすだろう。だというのに、動けない。恐怖とかそういうのとはまた違う。なのにイツキを前にしてアスモデウスは何もできなかった。

「《プースカフェ》、って言う名前のメダロットだったんです。まあそれはマルガリータが彼に付けた名前だから機体名ではないんですけど。」

悪戯好きな子で王国の皆は困ってたなあ。そのせいで大臣たちの独断で勝手に遠くに捨てられたりもしたな……。あ、今はマルガリータと一緒にいますよ？そんな彼が見せてくれる幻は皆に迷惑をかけたつもりもしたけれど僕はとても好きだった。島を怪物に見せたり、ちよつとした催眠をかけたり……。最近は会ってないから本当に懐かしいや。」

「いきなり何を……………」

本当に訳が分からない。この少年は何が言いたいんだ？よもや昔話を聞かせたいわけでもなかるうに。

「一度同じような能力を持つメダロットと戦った経験があるから効かないと？バカバカしい、貴方の相棒にも通用していましたよ。それにその機体が何者であれ、ルクスリアには及ばな……………」

「違う。」

アスモデウスの言葉を途中で遮り、イツキは彼女の顔を見上げる。

「能力の強弱なんて関係ない。本当に分かりませんか？どうして僕にはその能力が効かなかったのか。」

「簡単な話です、プースカフェの幻とは能力の意味合いが違うから。」

「何を……」

「プースカフェの使う幻はよくも悪くも遊ぶ為のもの。皆に構ってほしくて、皆と遊びたくて、そんな思いが産み出す力だ。結果として迷惑がかかることも少なくないけど、でもそれを目的としてる訳じゃない。」

「ただど貴方達のは違う。誰かを、何かを苦しめ傷つける事に重きをおいた力だ。そしてだからこそ僕には効かない、こう言ってるんです。」

「そこまで言ってイツキはニッコリ笑って、」

「効きませんよ、貴方の様な最低の人間が使う最低な悪夢なんて。」

穏やかに、だが今までに見たことも聞いたこともない様な声でイツキは言葉を放つ。まるでナイフの様に研ぎ澄まされた空気。それはベルゼブブと戦ったときも、数年前の数々の激戦でも見せたことのない怒り。見た目は静かに、しかしそれでいて烈しい。この大会中に培われてきた怒りが、いまこのとき静かに爆発したのだ。

「あ……っ」

「なんだ……これは。何故、何故私は天領イツキが一番御しやすい、現段階で最も潰しやすい人間だと考えていたの！？」

「プラスのメダル、それから他にも色んな人から奪ったメダルがあ



「つつ……ん？イツキ君か！？しまったな、博士たちから引き離す形で移動しながら戦っていたんだがまさかここまで移動していたのか。」

「戦ってつて、一体……」

その質問はする前に答えが出た。

「ふははははは！やはり貴様は素晴らしいぞあがたヒカルつ！  
！そうだ、それでこそ潰し甲斐がある！！」

『タイヨウにビーストマスターか！？』

ユウト曰くある意味《悪魔》以上に最悪な相手。《黒衣》同様、いやそれ以上に危険な第一世代にして幻の《レアメダル》使い！！

「ん？アスモデウス、貴様負けたのか。成程、流石はあがたヒカルの後継者だな。」

「タイ、ヨウ……」

冷めた表情でアスモデウスを一瞥しながらタイヨウは側に近付き、

「俺は雇われている形だからよく分からないが、明らかにこれはルール違反だぞ？既に貴様たちの出番は準決勝で終了していたのだから。」

「……そういう貴方は何をしているの？貴方こそ貴方こそ2回戦で出番は終わった筈よ。」

「言っただろう？俺は雇われの身、しがらみは無いに等しい。最も今回に限っては依頼主たつての頼みなのだがな。」

「……なんですって？」

何だろう？どこか険悪な雰囲気だ。そう考えつつイツキ達は再び臨

戦態勢を取っていた。二人のメタビーめたびーは銃口を獣王に向け、ロクシヨウでさえ先程とは違っていつでも斬りかかれる態勢を取っている。やはり現存する全てのメダルの中でも幻にして最強の一角とされる《?》メダルと獣王の組み合わせと言うのは危険極まりない。《レアメダル》ではなかったとはいえキララと神帝のコンビを圧倒したことからもそれは言える。数ではこちらが優勢とはいえ連続戦で疲れが出始めている自分達と万全ではないヒカル達、そしてマスターがこの場にいないロクシヨウで勝てるか……?。

「オイ、小僧。」

「へ?」

パシッ!!

「これって……」

「それは貴様の友人のものらしいからな、返しておく。」

普通にプラスのメダルを投げてよこしてきたという事実、イツキは一瞬呆気にとられてしまった。いや、今の会話を聞いていた感じ、タイヨウはこの状況をよく思っていないのかなとは思っていたが。

「どういうことだタイヨウ? お前らしくもない、昔のお前ならこんなことはしなかったぞ。」

「今の私にとって重要なのは貴様との決着だけだよあがたヒカル。それにもうすぐ依頼主も来るからな、反則で取ったメダルなど彼は必要としないのだよ。」

「依頼主、ですって?」



アスモデウスの言葉にタイヨウは冷たく彼女を見下ろしながらいき、メタビーとめたびー、ヒカル、遠く離れた観客席にいる倒れたカイとビートル、そしてロクシヨウを順番に見て、再びアスモデウスを見下ろし、

「分からないか？」

この男には珍しく、ヒカルに見せる狂気の笑みとは違う楽しそうな笑みを浮かべて、アスモデウスと、そしてロクシヨウにとって因縁深い人間の名を紡いだ。

「ルシファーが来る、そう言ったのだよ。」

「……どうやらあちらは終わったようですね。いえ、ある意味まだ続いているようですが。」

静かに、目を閉じて会場の方向から聞こえて来ていた音が鳴り止んだのを確認して《黒衣》はそう呟く。

「出来ることならこちらも早く終わらせたいですね。貴方もそうは思いませんか？」

どちらの呟きにも応える者はいない。ただ静かに木霊するだけだ。

《黒衣》と……

バチ・・・ッバチチチッ・・・

「・・・・・・・・」

一方的に叩きのめされて壁に貼り付けられたボロボロのゾーリンと、その首をつかんでいるBスタッグ。そしてその様子を無表情に眺めているユウト達がいる空間に。

## 第72話：静かな怒り（後書き）

相も変わらず中途半端なところで切ってスイマセン。自分でもイッキの最後の決着法はあっさり過ぎたかなあと反省しています・・・

・やっぱ射撃系の攻撃は書くのがムズイ・・・

次回はユウトVS《黒衣》を少しお届けします。もしかしたらヤツも出てくるかもしれません。

幕間5：ユウトと〈黒衣〉（前書き）

帰省前最後の更新！！てなわけで1話更新です。

## 幕間5：ユウトとへ黒衣

「あっさりしたものです。悔しがっている様子なんて欠片もない。」

「……最初から長光でBスタッグに勝てるなんて思ってたねえかな。けどそりゃあ悔しいぜ？何せ最初の1発以外まともに入られてねえし。」

ユウトの言葉通り、最初の登場時の一撃以降長光の攻撃は一度も命中せず逆にやられるがままになっていた。パーツこそ壊れていないが、頭の角は1本折れ、体中はボロボロだ。いや、攻撃力を犠牲に《ヘッドシザース》の装甲を可能な限り高めた発展機体だからこそこの程度で済んでいることを考えたらまだいい方が。

「最初の威勢はどこに行ったんだ？とも言えねえくらい歯ごたえがねえな。アイツと組んでた時は鋭い感じがしてたのに今はそうでもねえしよ。まさかお前、ロクシヨウがいねえとものすごくヨエえなんてことねえよな？」

「う、言い返せねえ……。」

自分としてはそんなつもりなかったんだが……今この状況から考えるとそれは否定できない。

「違いますよスタッグ。確かにロクシヨウがいらないこともあるでしょうがまだ彼は本気になっていないんです。」

「そうなのか？」

「ええ。でもこの調子だと火点けが必要かもしれませぬ。」

「？」

何を言ってるんだあいつは？

「まあいいや、ロクシヨウ呼べよ。待っててやつからさ、このままじゃあんまりにも齒応えが……」

「ダメだ。」

「あ？」

「お前がロクシヨウと戦いたいつてんならお前からアイツの所に行つてくれ止めねえから。けどロクシヨウをこの場に呼ぶのは絶対ダメだ。少なくとも今はまだ。」

「訳分かんねえ……」

「だろうな、俺も自覚してる。けど今《<sup>コイツ</sup>黒衣》と顔突き合わせてる今のこの場にはロクシヨウにいてほしくない。」

「だったらさっさと本気つてヤツを出してくれよ。もうつまんねえ、あっちの方が楽しそうだしさ。」

「行きたきゃ勝手に行ってくれ、って言いたいんだがな……」

「本当なら俺がその場にいないなら別にかまわない。だけど今はイツキ達がいる。向こうがどうなっているかは分からないが、こいつらをロクシヨウ達の所に行かせた時、ロクシヨウの反応次第ではイツキ達がピンチになる可能性がある。それだけは避けたい。俺達の問題のせいでイツキ達が傷ついた日には悔むに悔やみきれない。」

「つつても俺としては結構本気なつもりなんだがな……」

「少なくとも手を抜いているなんてことは一切ない。もちろん負けるつもりなんて一切ない。しかし……」

「ああクソツ！！大体お前がいけないんだぞつ、丁寧語になりやが

つて！！口調戻せつ、集中できないんだよ！！」

「子供ですか貴方は……………」

何とでも言え。もし俺が本気出せてないって言うんならそれしか理由思いつかねえんだよ！！

「やっぱり少し火を点けるかな……………」

「ん？」

どことなく穏やかな口調と声で、フードを外して素顔を晒し《黒衣》はユウトにニツコリと笑みを浮かべて……………

「マサムネは元気ですか？」

何気ない一言、だがユウトにとっては核弾頭を落とされたに等しい言葉を放った。

「お前……………」

「あ、愚問でしたね。だって彼は無様にもし……………」

シャッッ！！

『うおおー！？』

「……………やっぱり。」

突如振るわれた爪の一闪を驚愕の声を上げながらBスタッグが避け

る。その様子に《黒衣》は益々笑みを浮かべる。

「どんな指示を出したんですか？私も見えませんでしたよ。」

「別に、ただブツタ斬れって言っただけだ。本当に長光は物分かりがよくて助かる。」

対するユウトの方も笑みを浮かべていた。だがこちらは意味が違う。笑顔の下に信じられない位の怒気が溢れているのが分かる。先程までのイツキ達に対する様な気やすさは無くなり完全に敵意、もつと言いかえれば殺意へと変わっていた。

「……まさかお前がマサムネを侮蔑する日が来るなんて考えてなかったな。どういう意図があんのか知らねえけど……とりあえず喧嘩を売られたってことでいいんだよね？」

何も言わずフフツと笑う《黒衣》もこうして見ると年頃の少女だ。だが今のユウトには関係ない、こうなった以上自身が操るメダロツト以外は彼にとって全て敵なのだから。

「ハッハア！！成程確かにマスターの言うとおりだな、楽しくなってきたそうだ！！」

「喜んでくれてありがとう。けど悪いね、すぐに終わるよ。」

スタッグの歓喜の震えを一蹴し、ユウトは長光に指示を出して……

「次で終わりだ、一撃でブツ飛ばしてやるよ。」

長光の体からメダフォースが迸る！！そして左半身を後ろに下げ、



右腕を腰に当てる。左腕も引いて為のイメージ……右腕が爪  
になっている為変則的ではあるがこれは……

『《縦一闪》……！成程、流石はクワガタ。不格好ではある  
がやっぱ最後はそれだよなあ！』

感想を口にしながらスタッグがレクリスモードへと移行する。ユウ  
ト達を本気で戦うに値する相手と認めたのだ。

しかしユウトは一切気にしない。目を閉じて、全ての神経を次の一  
撃にのみ集中させる。殺意も敵意も全て研ぎ澄まして次の一撃に込  
める……！！

『いいぜ、そっちが一撃で決めるってんならこっちもそれに倣って  
やるよ！』

言うが早いかBスタッグは弾丸の如く一直線に長光へと向かう！！  
その圧倒的な速さ、そこから繰り出される一撃は容易にメダロット  
を機能停止に陥れる必殺の一撃だ。

だがそれに対抗するように長光も右腕を振り上げて……！！

ザシユウウウウウッ！！！！

『……！！』

『右腕殺ったあああああああああ！！』

右腕が完全に降り上げられる刹那、Bスタッグの翼と化した右腕が  
長光の右腕を斬り飛ばす！！《縦一闪》は剣を装備したパーツにメ  
ダフォースを注ぎ込み発動する必殺剣だ。こうなった場合は当然不

発に終わる。そして不発とはいえメダフォースを発動した直後で長光の体はガラ空きだ。これで……！！

「技、借りるぜコウジ！！」

決着がついたと思われた瞬間、ユウトの目がカツと見開き長光の体からメダフォースが完全に解放される！！そして……

「長光ツ！！」

ドゴオオオオツツツ！！！！

「ガツ！！」

吹き飛ばされ、地面に叩きつけられたのはBスタッグの方だった。変形が解け、全てのパーツが弾け飛ぶ！！そしてその対面には左腕を振り抜いている長光ソリンの姿があった。

「言ったる？一撃でブツ飛ばすってさ。」

そう、ユウトは最初から《縦一闪》など放つつもりはなかった。別に騙したわけでもなく、ただ拳を溜める構えとしてはあの姿勢が一番だと思っただけ。結果として《縦一闪》だと勘違いして右腕を狙いに来られたわけだが……

「今の……別々のメダフォースを同時に3つ発動させてましたね？」

「ああ。ゾーリンの攻撃力はロクシヨウと比べて低いからな。格闘攻撃を発動した後は受けるダメージがデカイって言ってもあんま意味ねえ。だからさ、単純に威力と成功率を底上げして攻撃力を何倍にも高めたってわけだ。」

即ちコウジの十八番、《光学化3》《重力化3》《火薬化3》の同時発動。威力と成功率を4倍にし、《火薬》属性の特性として確実にヒットさせた。最も慣れているコウジと違い長時間使えるわけではないが。

「確かにゾーリンはKWG型だけだよ、長光のメダルが《クワガタ》だなんて一言も言ってないぜ俺。

つつかコウジのヤツすげえな、よくもまあこんな荒業を使いこなせるもんだ。今度コツ教えてもらおう……」

「……なんだ、もう鎮火したんですか。」

長光を右腕のメダロッチに戻して、ぶつぶつと言い始めるユウトを見てつまらなそうに《黒衣》が言ってくる。

「ん？別にそう言うわけじゃねえけど……言ったのがお前だしな。他の奴ならもっと激しくまだ暴れまわるよ俺。」

「イッキだろうとカラスだろうと博士だろうと。ロクシヨウなら……  
・分らない。」

「そうですね……」

「つつか、いい加減その丁寧語止める。なんつつか気持ち悪い。」

「……そう言われても。」

「敗者は勝者の言うことを聞くもんだぞ。」

「ギリギリだったくせに……。」

そんなことを言い合いながら二人ともおかしそうに笑い始める。状況を考えればとてつもなくおかしいのだが……この二人は一体どういう関係なのだろう。

「さて、俺はイツキ達のところに行こうかと思うけどお前どうする？」

「私をロクシヨウと会わせたくないんじゃないですか？」

「さつきと違って今はバトってないからな。別に良いんじゃないか。」

「ではご一緒します。と言っても本当は敵同士なんですけどね。」

「俺はお前を敵だなんて思ってねえけどな。」

そうして二人は一緒に試合場へと向かい……

「あ、そうだ。これだけは聞いとかなきゃいけないかったんだ。」

と、突然ユウトが立ち止まる。

「トップと近い位置にいるっぽいお前なら分かると思ってさ。嘘偽りなく答えてほしい。」

「分かる範囲であればいいですよ？」

「よし。」

答えてくれるらしいことを確認して、ユウトは《黒衣》をまっすぐ見直す。

「昨日、ある物を解析したら面白いもんが出てきたんだよ。面白すぎて思わず暴れ出しそうなくらいのな。」

「……………」

「ちなみにロクシヨウも見た。で、その中身が面白いことに予言とか言うのが書かれてたわけだ。もう終わった物からこれから始まるであろうものも色々ひっくるめて最近の。」

「……………」

「ヒカルさんとマモンの試合とか、コウジとヒカルさんの試合とか……………ああ、お前とカイの試合の事も書かれてたな。そして俺達やアトムさんしか知らない筈の知る者がいない筈のあの事件の事も書いてあった。可笑しいよな、それが作られたのは少なくとも2年以上前の筈なのに。」

リュウコ先生がオロチに渡されたという話が真実なら2年以上前から予言が存在していたことになる。いや、オロチがそのデータを手にした時期を考えればもしかしたらあの事件以前かもしれない。

「そこまで行くと流石に冗談じゃ済ませられないと思ってさ。それでも半信半疑だったんだけど予言の通りイツキのところにアスモデウスが乱入したって聞いて思ったんだ。もしかして俺たちは誰かの掌の上で踊ってるんじゃないかってな。さて、ここで聞きたいんだが……………」

そして真剣な表情で彼女に尋ねた。

「あの《予言》を作ったのは誰だ？」

幕間5・ユウトと《黒衣》（後書き）

ちなみにユウトと《黒衣》の関係は既にバレバレかもしれませんが  
もう少ししたら明かされます。

### 第73話：現れた首領（前書き）

お待たせしました、第73話更新です！が、今回はちょっとないかなあ………自分のにも

### 第73話：現れた首領

「ルシファー……!?!?」

確か《悪魔》達のリーダーでユウトが追っていた男のはず。向かいあっただけでも半端ないプレッシャーを感じさせる相手だった。その男が来る……!?!?

「イツキ君、ルシファーというのは確か……」

「はい、相手のリーダーです。そしてユウト達の……」  
「そうか。」

チラツとロクシヨウの方を見ると、彼は小刻みに震えていた。常に冷静なロクシヨウがこの反応、やはり……

「馬鹿を言わないでタイヨウ。この大会については私とマモンに任せられてる。彼が来るはずがない。」

「理由など知らん。だが俺は本人から直接聞かされたぞ?」

タイヨウのヒカルに対する執着は狂気の域に達しているが、嘘を言うような男でもない。ということは本当に来るのか?

「そんな……一体何の為に!?!?」

「もちろん見学にだよ、アスモデウス。」





様に見下ろしていた。

『貴様……っ!!!』

「落ち着いてロクシヨウ!!」

ルシファーと現れた機体のどちらをも今にも斬り殺しかねないほど睨みつけているロクシヨウに向かってイツキが落ち着かせようとする。

いや、落ち着けるわけがない。ユウトとロクシヨウがずっと追い続けていた存在、それが今は目と鼻の先にいるのだ。

だがそれ以上に不可解なのは……

(ロクシヨウ、今度も躊躇なくあの男を斬りに行った……)

結果的に失敗したが、だとしてもやはり……

「ん？あの少年……いや、ユウトはいないのだな。数週間振りとはいえヤツに会つのを楽しみにしていたんだが。」

辺りを見回しながらルシファーは残念そうにそう呟く。が、すぐに表情を戻し自らを名乗り直す。

「失礼、まだ名乗りの途中だったな。

私の名はルシファー。一応ミュータントを仕切る《悪魔》、そのリーダーということになっている男だ。」

「自己紹介ありがとう。ところであなたはロクシヨウとどんな関係なんですか？見たところ相当憎まれているようですが。」

《悪魔》のリーダー、それを聞いてヒカルは更に警戒を強めながらそう尋ねる。その問いに対してルシファーは嬉しそうに顔を歪めて、

「その通り、私は彼らに憎まれている存在だ。まあ彼らとの関係はそれ以上でも以下でもないがね。」

『ツー!!』

それを聞いてロクシヨウが一度大きく距離をとる。そして、

『今度こそ……望み通り殺してやる!!』

再びルシファアへ向かって駆ける!!

『な、なんだかよく分かんねえけど俺たちも行くぜイツキ!!アイツがリーダーだってんならここでぶっ倒す!!』

「でもメタビー、連戦だよ!?大丈夫なのか!？」

『この際んなこと言っつてられるかよ!!』

そしてメタビーもまたロクシヨウに続く。それを見たヒカルもめたびーをルシファアを守る機体に向かわせて、

『イツキ、悪いがカイを頼む。』

『ビートル!?!』

『お前たちだけの問題ではないからな。ヤツには聞き出したことがある!!』

なんとカイを守っていたBビートルもカイをイツキ達に託し参戦する。先程のヘル戦と違いカイの呼吸も安定しているとはいえ、ビートルまで参戦するとは……

だがこれで、ダブルメタビーにロクシヨウ、Bビートルと強力すぎる4人組が誕生した。

「壮观だな、わざわざ来た甲斐があったというものだ。」

「どうするつもりだ？」

「無論確認するに決まっているだろう？タイヨウは手を出さないでくれ。」

「……まあいいだろう。俺も貴様の實力を把握しておきたい。依頼人がどれ程のものをな。」

対するルシファーは、タイヨウと少し言葉を交わすと不適に微笑み、

「最強クラスの《レアメダル》が4体か。素晴らしい。」

そう言って傍らの機体に指示を出す。そして、

「遊んでやろう、スペルビア。」

自らの僕、スペルビアを迎撃に向かわせる！！

スウ………ッ

「「なっ!?!」」

音も立てず、4機の中心へと体を滑らせるスペルビア。誰も気づかぬ程の速さと巧さにイツキとヒカルは驚愕するが、メダロット達は怯まない。

『オオオオオツツツ!!!』

まず真っ先に攻撃を仕掛けたのはメタビーだ。先程使ったばかりの

《威力全開》の恩恵をフルに発揮し、両腕から怒涛の銃撃を放つ！

ズガガガガガガッツツ！！！！

『……………』

対してスペルビアはその場からは一切動かない。その代わり右腕で左腕の甲から伸びる取っ掛かりを握り、それを引き抜く！！

「剣！？」

驚くイツキの言葉通り、それは片手用の両刃剣だった。スペルビアはそれを右腕で持ち横薙ぎに一振り。それだけで迫りくる弾丸が全て真つ二つになって打ち落とされる！！

『だからなんだってんだ！！』

無論メタビーとて予想していなかった訳ではない。仮にも敵のリーダーなのだからこの程度やってのけて当然だ。故に本命はここから

『邪魔だ、失せろっ！！』

そう、メタビーの猛攻のすぐ後ろでロクシヨウがスペルビアへと突撃していたのだ。そのまま烈迫の気合いを込めて右腕フオーバースの刃を居合い斬りの要領で振り上げる！！

その威力、そして剣速たるやいつももの比ではない。風も音も置き去りにして振るわれた渾身の一撃は、



深く斬り裂かれたロクシヨウの胴体は間違いなく致命傷だ。ロクシヨウはそのまま倒れて……

「つまらんな、やはりマスター不在ではこの程度か。」

『ッ、テメエ!!』

ロクシヨウがやられたことでメタビーの怒りに再び火が点く。体からメダフォースが溢れ出し、格闘メダロット顔負けの速さでスペルピアに殴りかかる!!

「成程、やはり覚醒の鍵は怒りか……これでアスモデウスも敗れたのだな。」

『っ!?!』

しかし、全ての攻撃がスペルピアの剣によって阻まれる。拳も蹴りも、零距离からの銃撃も。全てが捌かれ、一つも決定打を与えられない。まるで柳のように受け流され、一瞬でも気を抜けば逆にやられる……!!

『なんだ、コイツ……!?!』

アフリティアやルクスリアの様にド派手でとんでもない能力を持っているわけではない。むしろどちらかと言えば一般的なメダロットに近く、それ故に恐ろしい。なまじ自分達と重ねて見えてしまうせいで動きが読めないのだ。

「メタビー!!」

『分かった!!』





「そうかい。だけど僕も相棒も君達のお陰で寝不足なんだよ。多少は勘弁してくれないかな。」

そう言いつつヒカルの顔から汗が垂れ落ちる。まさかたった一度の攻撃で看破されるとは思わなかった。今のは《バーサーク》を発動した状態からの全力の一撃だったというのに。

「……それもそうだな。確かにこちらの不手際だ。」

言葉と共に煙が晴れる。

やはりスペルビアは健在だった。その体には傷一つなく先程までと何も変わらない。いや、ただ一つ違うことがあるとすれば……

「しかしそれでも見事だ。スペルビアに2本目の剣も抜かせたのだから。」

その左腕にも右腕に握る剣と同じ物が握られていたことだろう。そしてそれだけのことでスペルビアから発せられる威圧感が更に大きくなる。恐らくはここからがスペルビアの本来の戦闘スタイル。ここからが本当の勝負というわけか。

「本当に君達はスゴいよ。4人がかりとはいえ連戦で、しかも内2体はマスターの力無し……」

君達が万全ならばスペルビアをここから動かすことも出来たろう。」

「っ!?!?」

「なっ!?!?」

馬鹿な、未だに一步も動いていなかったというのか!?!?そんな状態でロクシヨウの攻撃を、メタビーの猛攻を、めたびーとBビートルの《一斉射撃》を防ぎきったと!?!?

「面白い・・・面白いぞっ!!なあ、スペルビア!」  
「っ、マズい!!めた・・・っ!!」

ルシファアの声に明らかに違うものを感じたヒカルは即座にめたびーに指示を出す。が、

トン・・・ッ

「!?!」

ヒカルの指示が完全に伝わりきる刹那、スペルビアは既にめたびーの隣にいて・・・

「　　まずは一人。」

その言葉と共にめたびーの体が文字通り八つ裂きにされ、地面へと落ちた。

「めたび・・・っ、があああああああああ!!!!」  
「ふはははははは!!」

ヒカルの絶叫とルシファアの笑い声が会場に響きわたる。  
だが直後、再びスペルビアの右からBビートルが襲いかかる!!

「仲間がやられても動揺せず向かってくるか。悪くない。」

ヒュッ！

しかしスペルビアは再び姿をかき消し、今度はBビートルのすぐ後ろ、そのまま両腕の剣を振るう！！

『クッ！！』

ガイイインッ！！！！

間一髪、ビートルは銃身を剣の横っ腹に叩き付けてなんとか捌くが、

「ほう、捌いたか！？ならばもう少し速くしよう！！」

ヒュンッ……！！ガイイインッ！！

スペルビアの猛攻は更に速さを増して徐々にBビートルを追い詰めていく。

「ビートルッ！！！！」

『野郎っ！！！！』

このままビートルがやられるのを黙って見ている訳にはいかない。  
メタビーはイッキの指示の元、スペルビアへと《一斉射撃》を放つ  
！！

ドオオオオオオオンツツツツ！！

「スペルビア。」

それに気付いたルシファーは焦ることなく一度Bビートルへの攻撃  
を止め、スペルビアをメタビーの方向に向けさせる。そして、

「斬れ。」

そんなとんでもない指示を冗談なく言い放ち……

ズバアアアアン！！

「なっ！？」

『冗談だろ！？』

スペルビアは文字通り右腕の一振りで《一斉射撃》を叩き斬った。  
普通なら有り得ない。今のはヘルに放ったものと同じ、《レアメダ  
ル》の力を完全解放して且つ《威力全開》を発動させたものだ。  
少なくともこの一撃でグラもヘルだって倒せたのだ。なのに……  
！！

「本当に素晴らしいよ。仲間何かあったとき、君達の実力は何倍にも跳ね上がる。メダマスターの称号も領けるといふもの。」

しかし「……」

『ガアツ!?!』

そのままスペルビアは左腕の剣をBビートルの顔面に突き刺して放す。そして一歩でメタビーの眼前に迫り……

「それだけの力を持ってはまだ、私達には届かないようだ。」

右腕に握るその剣で、無慈悲にメタビーの体を切り裂いた。

この瞬間、《レアメダル》の開放により機体のダメージがフィードバックされたイツキとヒカル、そして直接戦っていたメダロット達は倒れ伏す瞬間に悟った。この男、そしてスペルビアは今までの相手とはレベルが違うことを。

### 第73話：現れた首領（後書き）

．．．．．スペルビアを強く書きすぎてしまった．．．．．そして  
てロクシヨウをあっさり退場させてしまった．．．．．まあ後者に  
関しては次の話で詳しい説明入れますが。近い内に次話も更新しま  
す



## 第74話：敗北

「圧倒的だな。ここまでとは思わなかった・・・」  
最初から貴様が出ていれば良かったんじゃないのか？」  
「そうでもない。彼らが連戦だったことが大きいしな。」

傷つき倒れ伏しながらもかろうじて繋ぎとめられている意識の中、  
イツキはそんな声を聞く。

(メタビー・・・ヒカルさん・・・ロクシヨウ・・・ビ  
ートル・・・)

八つ裂きになったためたびー、顔に剣を突き刺され横たわるBビート  
ル、そして体を深く斬られたメタビーとロクシヨウ。自分達も《レ  
アメダル》の力をかなり開いたリスクとして、自らの相棒達が受け  
たダメージを受けており、メダロット達程ではないとはいえ動けそ  
うもない。この場でルシファー達以外にまだ戦闘可能な者はおらず、  
事実上イツキ達の全滅だった。

「だがロクシヨウが真つ先に脱落したのは意外だったな。ヤツは獣  
王にさえ傷を負わせた機体、ヘルを相手にしても全く引けをとらな  
かったらしいというのに。」

「ビーストマスターを傷つけた時はユウトがいた。それにヘルの泥  
に耐えたといってもそれだけだろう？強大なメダフォースさえ展開  
すればアレは全く無害、マスター不在とはいえその程度のことが出  
来ねば《レアメダル》とは呼ばれんよ。覚醒したばかりでもない限  
りな。」

「成程な・・・しかし妙な口ぶりだな。お前の言葉、まるでマス  
ター不在のロクシヨウなど大した脅威ではないと言っているように



聞こえる。」

「妙なのではない、そう言っているからな。」

「・・・何を話してるんだろう。よく聞こえないけれど、ロクシヨウについて何かを言っているような・・・」

「マスターがいるメダロットにとってその存在がないという状況は大きく力を減退させる要因であることは知っているだろうか？少ない例外があるとはいえ、大抵の場合信頼し合える相棒がいない場合、メダロットはその力を半分程しか行使出来ん。とりわけ《レアメダル》なら尚更だ。」

「そうだな。実際に私も10年前互いに信じあうあがたヒカルとめたびーの二人に敗れた。ビーストマスターもな。」

つまりマスターであるあの小僧がいなかったが為にロクシヨウは力を十分に発揮出来なかったと？だがそれにしても私から見ても鈍すぎる動きだったかな。何より条件としてはBビートルも同じようなものだった。いや、むしろ連戦だったぶんヤツの方がキツイ戦いだっただろう。」

「お前の言う通りだ。条件としてはBビートルの方が厳しかった筈しかしロクシヨウの動きはそれ以上に鈍く、そして弱かった。何故か？それは」

その先の言葉は聞こえなかった。聞きたくなかったから脳がそれを拒絶したのか、それとも・・・

「成程な……つまりは一種のトラウマというわけだ。あれほどの強さを秘めたメダロットも存外脆いものだな。」

「そう言うな。むしろそれくらいの方が可愛げがあるだろう。」

「……さて、それではそろそろスピリットの回収に取り掛かるうか。どうやら彼の意識も沈んだようだしな。」

「この女はもつと早くから落ちてているがな。」

どこか笑うようなタイヨウの言葉通り、この場で暴れまわっていたルクスリアのマスターアスモデウスの意識もまた、既に落ちていた。まあ絶対の自信を持っていた自身の僕が敗れ、更にはリーダー格であるルシファーがこの場に現れたとなつては無理もないが。

「彼女は放っておこう。私の指示を無視し、拳句敗れたんだ。すぐに代償を払うことになるだろうしね。」

「相変わらず恐ろしい話だ。」

そして遂にルシファーはスペルビアに指示を出し、カイの側へ……

『待て……よ。まだ、勝負は……終わってねえ……っ  
！！』

ガシツと弱々しくも強い意思を感じさせる腕がスペルビアの足を掴んでいた。

「驚いたな、力の解放によって精神がリンクしているマスターでさえ倒れた攻撃だ。それを直接受けた君はマスターよりもダメージが遥かに大きい筈なのだが……流石はカブトの《レアメダル》、やはり他の《レアメダル》とは趣が違うらしい。」

『うっ……ちやごちや言っでんじゃ……ねえ……！』

確かにメタバীはどのパーツも破壊されてはいない。だが、あくまで破壊されていないだけであつて、既に致命傷とも言えるダメージが体に宿っていることも事実だ。今のメタバীなら少し力を込めてこずくだけで簡単に破壊できる。

「止めておけ。今回の私の目的はそこに倒れているスピリットだ。大人しく倒れているならばスピリット以外にはこれ以上の危害は加えんよ。」

『何……！？』

どういうことだ、それはつまり……

「そもそも私の仲間が所属していた二チームが敗れていた時点でこの大会においての我々の敗北は決定していたのだ。アスモデウスは醜くも悪あがきを行ったが私にそのつもりはない。

分かるかな、これ以上君が何か行動を起こそうとしないのならばスピリット以外は全員見逃してやる、と言っているんだが。」

スペルビアの圧倒的な力は今さっき見たばかりだ。連戦という不利な条件を抜きにしてもレアメダロット4体を相手にして傷一つ浴びることなく返り討ちにしたその実力は。更にすぐ傍にはヒカルの宿敵にして最凶のメダロット・ビーストマスターまでもが控えている。

「君の性格ならばこの状況でも戦えるならば最後まで戦い抜くだろう。だがいいのか？それはつまりこの場にいる全員を危険に……」

言葉は最後まで続かず、ルシファーは一步後退しスペルビアが右腕の剣を振るう。直後、メタビー達まで巻き込まんばかりの強烈な《横一闪》が霧散する。

「ふむ、流石にあの程度でやられたとは考えていなかったが・・・

」  
「お前・・・!!」

二人が目を向けた先にいたのは最初に倒れた筈のロクシヨウだった。倒れている他の機体やメタビーに比べそのダメージはまだ軽いが、それでも決して楽観視できるものではない。だが、

「ルシ・・・ファアアア・・・!!」

その目はただルシファーのみを見据え、他の一切を視界に入れるどころか認識すらしていない。その目に移るのは憎き仇への憎悪、そのためならばこの身が砕けてもかまわないという強い意志だった。

「オイ、クワガタ野郎・・・お前・・・」

「ルシファアアアアアアアアアアアア!!」

メタビーの声にも耳を貸さずロクシヨウはルシファーめがけて一直線に走る。だが先程のダメージが残っているのだろう、いつもの動きと比べるとまるで止まっているかのように遅すぎる。当然のごとくスペルビアに行く手を阻まれ、拳銃さほど力を入れたとも思えぬ右腕の一振りですぐに吹き飛ばされてしまう。

それだけではない、吹き飛ばされた衝撃に体の方が耐えきれずに右腕が大きな音を立てて弾け飛んでしまう。だがそんなことはお構いなしにロクシヨウは怒りに身を任せるままにルシファーへと向かっていく。

最早自殺行為だ、普段とは違う。ただ憎しみに支配されて我を忘れて、自分が今壊れかけていることにも気が付いていない。いや違う、既に壊れてしまっているのだ。体ではなく精神が、ルシファーに対する激情によって。

『…………ふざけんなよ。』

それを見てメタビーもまた怒り狂う。怒り狂った猛獣のような姿勢でありながらバカみたいなことを何度も何度も続けているルクシヨ<sup>ライブ</sup>ル<sup>ル</sup>に対して。

『テムエは俺がブツ飛ばしたいって、ム力つくくらい超えたいって思わせた数少ない奴なんだ……………！なのに、何やってんだよテムエは……………！』

ロボットで打ち負かされたことがあるわけではない。自分とルクシヨウが戦ったことは実は一度もないから。喧嘩を吹っ掛けても無視され続け今に至っている。

初めて会った時の、力を引き出すきっかけを作ってくれた時の屈辱だけではない。というよりあの時の事は実はメタビーはとつくに忘れてる。

だが、それでもメタビーにとってルクシヨウはム力つく相手だった。理由は一つ、単純にルクシヨウが強いからだ。相手を見下すことはせず、だがそれでいてどんな相手に対しても余裕を崩さない。どんな状況でもどんな相手でも冷静に分析しそしてあっさり勝ってしまった。実際メタビーが知る限りルクシヨウが傷ついた場面など予選の時と2回戦の2回だけだ。

一目見たときからタダものじゃない風格を感じていたメタビーにとって、ルクシヨウは自分以上に目立つム力つく相手だった。そして

それ以上に、倒したい、超えたいと心から思わせてくれる初めての相手だった。自身の影のような存在であるBビートルに対する物とは違うライバル意識。口には出さないが、ム力つくと同時に追いつき、追い越したいと感じていた。まあ今でも劣っているとは思っていないが……

そしてだからこそ、この状況が、ロクシヨウの行動がメタビーには許せなかった。

『ふざけんなよテメエ……!! 逃げろなんて言わねえ、けど！  
！何でお前はそんな呆気なくやられてんだよ!?!』

ふざけるなよ、俺がム力つくお前は。俺が超えたいと、ブツ飛ばしたいと思ってるお前はそんなんじゃないだろうがっ!!

『いい加減……!!グッ……!!』

だがメタビーとてダメージは大きい。スラフシステムの影響で僅かずつ回復してはいるが彼もまだ戦えるような状況ではない。かといってロクシヨウをそのままスペルビアに痛めつけられるような状況は看過できない。ロクシヨウだけではない、今はルシファーもスペルビアを待っているがこのままではカイも……

(この……!! あいつらぶん殴って止めなきやいけねえのに……  
……なんで動かねえんだ俺の体は!!)

スペルビアだけでなく、ルクスリアとの戦闘ダメージまで蓄積されているメタビーには悔しいことだが力が残っていない。漫画みたいここから真の力を解放して皆を助けるなんてご都合展開もないのだ。何より今はイツキまで倒れている。万に一つの奇跡など起きよう筈もない。

『ルシ・・・フアアアアアアアアア・・・ツッ!!!』  
「ふむ、ユウトがいない状態でのロクシヨウには何の魅力も感じないんだが・・・こうして続けられるのも迷惑だな。スペルビア、壊してもかまわん、黙らせる。」  
『っ!?!?』

それはある種の死刑宣告だった。今のまま放置していてもロクシヨウは勝手に自滅する。だがその前に完全に破壊すると言うことは最悪の場合・・・

「いいのか？お前の楽しみの一つだったんだらう？」

「感動の再会でもしているのだから今ここにいない奴が悪い。それに本当に私の楽しみとなってくれる存在ならば生き延びてくれるだらうさ。」

『テメエら・・・っ!?!』

まるで飽きたおもちゃには興味ないともいうような物言いに激しい怒りに支配されそうになる。だがそれではロクシヨウの二の舞だ。ならばどうする？ずっと動かなかったお陰か少しは動くようになってきた。だがだからと言ってスペルビアと戦うなんて不可能、出来るとするならばロクシヨウを止めるぐらいだ。が、今のロクシヨウは両腕を無くし、体が砕けかけている状況でも止まらない。下手に割って入れれば最悪やられる。

それにカイの事もある。今の状態で逃がすことなど出来る筈もないがせめてカラス達仲間が来るまで足止めをするべきではないか？どちらを選ぶ。ロクシヨウを止めるか一人でカイを守るか・・・

『んなもん、考えるまでもねえよな・・・』

そう苦笑すると同時メタビーは動き出していた。

「ん？」

「ほう……」

自分でも驚きだった。まさかこうまで自由に動けたとは。いや、当然だ。分かるのだ弱々しくも頼もしい相棒の存在を。

流石に攻撃は一度が限界だろうが先の一撃を喰らったお陰で充分にメダフォースは溜まっている。向かうは当然、

「メタビー……ツ!!」

「ぶっ飛ばえええええええええええええええ!!」

溜められたメダフォースを左腕に集中させて、スペルビアに殴りかかる!!

「……」

無論そんなことで動じるスペルビアではない。ロクシヨウに向けていた刃をメタビーに向け直し、凄まじき速さで斬りかかってくる。

それと同時にメタビーは避けることなど考えもせず一気に踏み込む!!結果、

「グウウウウラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!……!!」

最も斬れにくい剣の鍔元がメタビーの体を半分ほど切断し、メタビーの拳がスペルビアの顔面に綺麗に叩きこまれていた。

「へっ……最初から受けるつもりで踏み込んだらこんなのは何



て事無いんだよ……」

「……確かに、見事だよ。まさかスペルビアに一撃浴びせる機体がいたとは嬉しい誤算だ。」

ククク……本当に君達は《真なる異端》だな。予言には書かれていない2枚のジョーカー<sup>イツキとメタビー</sup>。これだから面白い、復讐に燃えてくれているユウト達とはまた違った面白さだ。」

『の割には大したダメージを受けてるようには見えねえけどな……グツ!!』

流石に今のダメージは大きかった。正直な話もう指一本動かさせそうにない。

『クソッ、コイツを倒してあのバカに一あ……思っ……』

言葉は小さく、メタビーはその場に崩れ落ち完全に沈黙する。そして先の一撃の時はまだ意識を保っていた筈のイツキもまた意識を失っていた。

「どうだスペルビア、久々に楽しめたんじゃないか？」

『……』

「くくく……本当にユウトは面白い仲間を見つけたものだ。」

……ん、ロクショウももう沈黙したようだな。これで邪魔者は本当にいなくなったということだ。」

どうやらロクショウはメタビーが動き出すよりも前に力尽きて倒れていたらしい。これでようやく邪魔者はおらずスピリットの回収が出来ると言っわけだ。

「随分と長かったな……だがこれでようやく我が目的が達せられる。」

マーブラーが地球へと送りこんだ《何か》、それは十中八九彼の息子であり唯一目覚めたスピリットである彼が持っているに違いない。ようやく、ようやくこれで……！！

『 そうはいかない、むしろ逆だ。』

ダアンッッ……！！

試合場に響く一つの銃声。思えばこれが開戦の始まりだったのかもしれない。これから先に訪れる別れと戦いの。少なくともこの銃声ももう少し早ければ、或いは遅ければ違う結果になっていただろうから。

## 第75話：敗北から目覚めて

「……から……めじゃ……」

「……か……な……くる……」

(……ん)

何だろう、話し声が聞こえる……この声は博士とそれから……  
……女の子？

「……シヨウは……ですか？」

「傷は……じゃ。しかし……」

「なら……すね。」

次第に声はつきりと聞こえてきてイツキの意識が少しずつ覚醒する。目を開けてみればそこは見知らぬ部屋。少なくともフーン要塞の中ではないようだ。

「っ！！目を覚ましたかイツキ！！」

「博士……？」

話すのをやめて心配そうな顔でイツキの顔を覗き込んでくるメダロツト博士。心配をかけないために大丈夫だという意味の笑みを浮かべるも上手くいかない。きつとみんなもこんな感じなのかな……

「そつだ皆は！？メタビーは？ヒカルさんは！？カイヤビートルはどうなったの！？」

「お、落ち着くんじゃイツキ！！まだお主は目覚めたばかり……」



敵意とかそういうのをよりも戸惑いがイッキの頭を駆け巡る。どう  
いうことだ？彼女は確か敵で、でも今は博士と一緒に介抱してい  
てくれたらしくて、でも敵で……

「あ、そういう説明がまだでしたね。アトムさん、お願いします。」

「おお、そうじゃな。」

しかし博士は何の警戒もしていないというかむしろ親しげというか  
……

(僕が寝ている間に一体何が……!?)

「ここはメダロット研究所の僕の仮眠室じゃよ。研究室で寝かせる  
わけにもいからなの。お前さんが眠っていたこの二日間、ここで  
寝かせていたというわけじゃ。」

「二日も!?!」

ルシファーにやられてからそんなに眠っていたと言っのか。という  
ことはメタビーやビートル、ヒカルさんやカイは大丈夫なのだろう  
か……

「お前さんは本当に分かりやすいの。」

「え?」

「皆が心配だと顔にはつきりと書いてある。気持ちは分かるがの。」

サングラスでちゃんと見えませんが、優しい目で見つめてくれているのが分かる。

「ほとんど全員無事じゃよ、後遺症もない。ヒカルも既に起きておるし、メダロット達も今はピンピンしてる。安心せい。」

「良かった……。」

皆無事なのは本当に良いことだ。でもさっきの言葉、『ほとんど全員』って……？

「……無事じゃない人もいますか。」

「……。」

博士は何も答えない。だがその沈黙が答えを示していた。

「誰なんですか。メタビー？カイ？それともあの場にはいなかったカラス達……!？」

「……一人はロクシヨウじゃよ。」

その博士の言葉にイッキは思わず言葉を無くしてしまう。おそらくあの場にいた中でスペルビアの斬撃を最も受けているのはロクシヨウだ。時間をかければ回復すると言ってもあの攻撃によって受けたダメージは尋常ではない。だがそれ以上にロクシヨウを苦しめているのが……

「僕らも迂闊じゃった。あやつが現れることを予め知っていれば何らかの策を講じることもできたのじゃが……。」

以前はユウト、そして今回はロクシヨウ。二人ともルシファーが現れた瞬間に暴走していた。特にロクシヨウはまるで……

「知ってるんですね博士は？ユウト達とルシファアの関係を。」

「……知っておる。」

「やっぱり……」

先程の博士の口調からなんとなくそうだと思っていた。ユウトとも親しいようだったし、だとすれば博士は全てを知っているのでは？

「じゃが儂からは何も言えん。」

「どうしてですか？」

「あの二人との約束でな、お主の質問には何も答えてやれん。」

それに約束がなくても、あの二人に関わることをあやつらが話していないのに儂が話すわけにはいかん。」

「……」

「じゃから今暫く待ってやってくれ。ユウト達がちゃんと話をしてくれるときまで。」

確かに、少なくともユウトがいない今話していい話題ではないか。それに今は他に知るべき事がある。

「分かりました。ユウト達が話してくれるまで待ちます。」

「スマンな……」

「いえ……」

確信に近い予感だが近い内にユウトは全てを話してくれるだろう、自分の過去を。だったらその時が来るまで待てばいい。どんな内容でも受け止められるくらいの気持ちを持って。

「ところで博士、さっき『一人はロクシヨウ』って言ってましたよね？他にも……」

「そこからの説明は私がしましょう。」

すっと、今まで黙っていた《黒衣》が前へ出て口を開く。博士もその方がいいと考えたのかイツキに向かつて一つ頷いていた。

しかしイツキにとって彼女は敵なのだ。そりゃあ何と云うか彼女に対して妙な物は感じているが一度メタビーを倒し、カイを襲おうとしていたのは紛れもなく事実。そう簡単には信頼できない。

「貴方が私に対して警戒心を持つ理由は良く分かります。ですが今は抑えてくれませんか？私はあなた達と事を構えるつもりはありません。いえ、今となってはむしろ味方です。」

「味方？」

「どういうことだ？《悪魔》ではないとはいえ彼女は敵の中でもかなり強い発言力を持つ存在だと思っていたが……」

「困惑されているでしょうがその説明も今します。ですから今は私を信じてもらえないでしょうか？話し終えた後、私を信じるかどうかはあなたに任せます。」

「……分かった。話してよ。」

どの道今この状況では暴れられても抵抗のしようがない。それに博士だって信じているんだし、今だけでも彼女の話聞くべきだ。

「……ありがとうございます。では、」

そう言うと改めてイツキをまっすぐ見つめ直して、

「まずは自己紹介を。《黒衣》と呼ばれるのは少々嫌なので。」



私は雨宮ユネと言います。お見知りおきください。」

「……………」

少年は一人、治療中のメダロットの姿を眺めていた。名をロクシヨウ、ルシファアの登場によって暴走しスぺルビアに敗北したこの機体は大きなダメージを体に残していた。パーツも、ティンペットも、そして核となるメダルも……………スラフシSTEMの自己再生能力だけではとても間に合わない。故にメダロット研究所で集中治療を受けている。そしてそれを分厚いガラスの外から眺めている少年はロクシヨウがここに運び込まれてから今までの間、微動だもせず黙ってその様子を眺め続けていた。

「……………どんな様子なんだロクシヨウは？」

そこにもう一人黒髪でバンダナを巻いた少年が現れる。口には出さずともその目は治療を受けているロクシヨウと、じっと立ちつくしている少年の二人を心配していた。

「かなりのダメージを負ったことは知ってる……………治るのか？」

「……………メダロット研究所の科学力は世界各国のどこよりも上だ、知ってるだろ。」

「そんなことを聞いているんじゃない。あれだけの傷を負い、更には精神的にも大きな傷が開いているこの状態から治るのかと聞いているんだ。」

ようやく口を開いた少年の言葉にイラつきながらも黒髪の少年、カラスは辛抱強く言葉を続ける。

「……外傷は完治するだろ、さつきも言った通りこの科学力は半端ない。メダルにもダメージがあるとはいえそこまでひどいものじゃないしな。数日もすれば元気なロクシヨウに会えるだろうよ。」

「なら心の方は？」

「知らん。けどあくまで考えないようにするって麻痺薬を使って傷の痛みから逃げてたようなもんだからな。そう言う意味じゃこの数年間、そっちの傷は広がりこそすれ治ってなかった。目覚めたとき『しばらく寝てたら治りました』なんて展開がないことは確かだろうな。」

「……ロクシヨウの傷を、お前は塞げなかったのか？」

唯一ユウトの口から全てを聞かされているカラスは答えを知りつつもそう尋ねずにはいらなかった。何か方法はあったのではないかと？お前なら……

だがその問いに対して、初めてカラスの方を見たユウトは自嘲気に否、自分自身に対して怒り狂う声音で、

「俺が？皆を苦しめた俺が？誰よりも許されず糾弾されても殺されても仕方のない俺が？皆が死んだのに生き延びてる自分自身が許せない俺が？ロクシヨウを苦しめる原因を作った俺が？出来るわけねえだろ、そんなこと。俺にそんな資格はないし、あっても出来ねえよ。」

「……」

二人の間に再び沈黙が生まれ、静寂が辺りを支配する。何も知らな

いものがこの場を通ったとしても誰もいないと勘違いしてしまう程に。

「バカが……」

「……」

「本当にバカだよ。いつも『もつと頭使え』とか『ちゃんと物事を考えてから行動しろ』とか言ってる奴がだぜ？自分は暴走した挙句やられやがった。

……バカが、俺がいないときにルシファーに出くわしたら戦うな、逃げろって何千回も念を入れただろうが……ツツ！」

昨日から我慢して我慢して、一度でも口に出したら倒れそうで、だからずつと耐え続けたロクシヨウへの怒りとその裏に隠された自分への怒り。もしこの場にいたのが他の誰かだったら絶対に言わなかつただろう言葉。微々たるものとはいえ、博士たちを除けば一番付き合いが長く、そして同じ思いを知っているカラスが隣にいたからこそユウトの言葉は流れ出ていた。

それにカラスは何も言わずただ黙ってロクシヨウの治療を見守るだけで……

「……俺も聞きたいことがある。」

しばらくしてユウトが落ち着きを取り戻すと、今度は彼の方からカラスに声をかける。

「《彼》はどうなった……？」

「……」

ユウトを見ながら、言葉には出さずカラスはゆっくりと首を振る。それだけで充分、ユウトは全てを悟った。

「……蓄積されていたダメージが想像以上にひどかったらしい。残念だが……」

カラスはそこで一瞬口籠るも、意を決して最後まで言葉を続けた。

「めたびーはもう戦えない。それどころか、もう自由に動ける保証もないらしい。」

## 第75話：敗北から目覚めて（後書き）

皆さんお久しぶりです蒼騎士です。自業自得とはいえ色々タタバタしているうちに更新期間が一月も……

「切腹しろ。介錯はしてやる。」

……いやいやちょっと待とう？本編それなりにシリアスに終わってるんだからさ、ここでそういう冗談は……

「ここは後書きの世界。ここでの俺はテメエの脳内にある先展開を知ってるんだよ。そして小説ほっぽって一月も間あけやがって……腹かつ捌いて詫びるんだな。」

……いやあの、切腹って俺の思う限り最も苦しんで死ぬ方法だと思っんですが。

ってそんなことはどうでもいい！！ユウト、お前は少し黙ってる！！

さて、上では少々ふざけた文面になってしまいました但本本当に、本当に申し訳ありませんでした。せめてしばらく書けそうにありませんとでも書いておけばよかったのに。何度も重ねるようですが今回の事は本当にスミマセンでした。

さて、本編はここからようやく後半戦に入っていきます。間にいく



幕間6：〈悪魔〉達の夜明け（前書き）

回はそれほど時間がかからずに書きあげられたようです！！っっても幕間ですが……

## 幕間6：《悪魔》達の夜明け

「ルシファー、スペルビアの調子はどんな具合だい？」

「問題ない。いい一撃を二つも受けたとはいえ大したダメージにはなりえない。」

フューン要塞から立ち去って一日。ルシファー達は既にアジトに戻り、残りの《悪魔》を集めて会議を始めていた。

「だが俺達としては良くない結果に終わっているぞ。結局集まったメダルは予定の半分にも満たない、《悪魔》も二人欠けた。本当に下手を打ってくれたな奴らは。」

苦々しげにそう吐き捨てるのは細身の青年。彼もまた《悪魔》の一人だ。

「まあまあレヴィ、そうカリカリしちゃダメだよ。いいじゃないか、それだけ強力なメダル達ということはむしろ歓迎すべきことだ。我々の計画には、ね。」

クスクスと笑いながら喋るのは、この場に不釣り合いなほど感情豊かな少年。残りの《悪魔》やタイヨウが揃っている中ではひどく異彩を放っている。

だがこの少年こそがカラスの因縁の相手にしてヘブンズゲートを一人で壊滅させた《悪魔》・ベルフェゴール。ユウトをしてルシファーと並ぶ《悪魔》の2トップと称する程の実力者だった。

「ベルフェゴールの言うとおりだ。これはむしろ歓迎すべきこと。ようやく骨のある強者と戦えるということなのだから。」



「いや、僕はそういう意味で言ったわけじゃないんだけどね……」

呆れられているのはまるで武道家のように屈強な身体つきをした青年。その姿はベルフェゴールとは別の意味でこの場に不釣り合いだった。身体つきがでは無い、ルシファーを含めたこの場の誰もが隠すなり見せつけるなりしている敵意や殺気といった好戦的な気を一切放っていないのだ。彼もまた《悪魔》の一人だということに変わりはないのだが……

「だが一つ解せないな。」

「何がだ？」

「なぜ《スピリット》を回収しなかった？」

ルシファーに向けられたのはここに残っていたメンバーの共通の疑問だった。一体と言えど《スピリット》が目覚めたのはマブラーが関係している筈だ。だと言うのに……

「想像以上に相手が強かったということはマモン達が敗れたことで明白だ。しかし仮にもお前が苦戦するような相手ではなかっただろう？あの少年も、その友人たる《レアメダル》使いも。唯一の懸念事項だったあがたヒカルもマモンとの戦いで激しく力を消耗していたらしいじゃないか。万が一にでもスペルビアに一撃届くことはあっても後れをとることなどあるまい。だがお前達は回収してこなかった、何故だ？」

ルシファーの事だから何か理由はあったのだろう。だから尋ねた側にしてみれば純粋な確認と疑問にすぎない。

「お前の疑問はもつともだよサタン。確かに《レアメダル》の力は

予想を遙かに上回る物であったことは確かだが今はまだ私にとって脅威ではなかった。彼らが全快の状態なら話は別だったかね。

しかし思わぬ伏兵が一人いた。どこから撃つたのかは分からないがあれ程の、めたびーをも上回りかねない針の穴を通すような精密射撃……恐らくは我が旧友の機体だ。」

その言葉にタイヨウは僅かに眉をしかめ、サタンとレヴィと呼ばれていた男は納得したというように頷く。

「あれ？でも君の旧友って確か……」

「生死を確認したのは奴だけだ。パートナーの方は生きていてもおかしくはない。しかしユウトと違って何の動きも起こしていなかったからてつきり死んだものと思っていたがな。」

「成程、それは確かに思わぬ伏兵だ。」

彼らは知っている、ルシファーが旧友と呼ぶ者が一人だということとその実力を。大会などに興味を全く示さず田舎の人間だったため表舞台に名を残していないマスターと第一世代の《レアメダル》にその身を宿したそのパートナーメダロット。もし二人とも健在ならば自分達にとってかなりの脅威になる。が、

「しかし《レアメダル》とはいえマスターを失ったメダロット、それも今までとは違いその存在を我々が知っている以上、最早脅威ではない。」

そう、《レアメダル》だろうが第一世代だろうが信頼しあえるパートナーを失ったメダロットはひどく脆い。少なくともあの伏兵に後れをとることはもうないだろう。

「だとしても《スピリット》を回収できなかったのは予定外じゃないのか？マーブラーも何も吐かない以上俺が……」

「その必要はないよレヴィ。もう急いで《スピリット》を回収する必要はなくなった。《鍵》の場所が分かったからね。」

「!？」

それは、つまり……!!

「《コクーン》は既に我らの手に落ちたも同然だ。予言の終局も近い。」

「ならば今すぐ動くぞ！場所が分かっているのなら《鍵》は早い内に俺達が握っておくべきだ。」

「その必要はない。焦らずとも近い内に《鍵》は必ず我々の元に戻ってくる。素晴らしいお土産をつけてね。」

その言葉に言い返そうとするレヴィだったが、その言葉を飲み込み黙って頷く。ルシファーと共に行動してしばらく経つが、その間彼を信頼して悪い結果になったことなど一度もないのだ。下手に動いてマモン達の二の舞になる可能性を考慮すればルシファーに従っておいた方がいい。

「……しかしまさかマーブラーめ、そう言う方法をとっていたか……道理で何も喋らない筈だ。マザーとはいえ精神は子供と甘く見てスバルを優先したが選択を誤ったかもしれんな。」

「何か言ったかルシファー？」

何やら一人思索し始めたルシファーにサタンが問いかけるが、ルシファーはいやと笑いながら首を振るだけだ。

「とにかく《鍵》の居場所が分かった今、これ以上マーブラーを痛

めつけるのは止めておこう。あそこまで弱って尚且つ何も喋らないのでは人質としてしか機能しないからな。死なれては困るそれよりベル、継承の方はどうなっている？」

ベルフェゴールに頼んでいたのは空席となつた《悪魔》の補充だ。既にマモンとアスモデウスは資格を剥奪され闇に呑み込まれた。だが戦力的な問題も含めて《悪魔》に空席があつてはならないのだ。代わりとなる新たな《マモン》と《アスモデウス》を選ぶ必要がある。

「そう簡単に見つかるわけがないよ。一つに至っては向こうにメダルを握られてるし、そもそも高い実力を備えていないと話にならない。」

「尚且つ思慮分別のある者が・・・タイヨウ、やはり空席の一つには君が収まってくれないか。」

「断る。俺はお前たちを気に入っているし雇われている身だが、仲間になつた覚えなどないし目的になど興味はない。俺の目的はあがたヒカルとの完全なる決着、その場にお前達と同じ称号など必要ない邪魔なだけだ。」

その言葉にルシファアはまあそうだろうと首をすくめるだけで特に何も言わない。というより模試今の頼みを了承する様な人間ならタイヨウを自分たちの側に引き込むことなど出来なかつただろう。

「しかしタイヨウよ、その目的は達せられないだろう。あがたヒカルの片翼たる《カプト》はもう使い物にならないのではないか？マモンとの連戦で力を全開放した反動とダメージに加えスペルビアの剣を受けた、少なくとももう戦えるはずがない。」

そうだ、イツキ達の方でも言われているようにめたびーは再起不能

を言い渡されている。ヒカルのパートナーはめたびーとろくしょうの二人が揃って初めて真価を発揮する。めたびー倒れた今、ろくしょうだけではタイヨウの満足できる戦いになるとは思えないし、そのろくしょうだってかなりのダメージがまだ残っている筈。つまりヒカルは脱落したのだ。なのに……

「ふ、そんなことであの男を倒せるのなら10年前に俺と奴の決着はついていたさ。俺が奴の《カブト》メダルを割ったあの時にな。だが奴は再び俺の前に立ち塞がった、壊した筈の《カブト》メダルを修復してな。」

何度も何度も自分の前に立ち塞がり、もう二度と立ち直れない様にメダルを破壊しても尚立ち向かってきた。その結果自分は敗れ醜態を晒し……。いや、そんなことはどうでもいい。つまりあの時に僅かながら悟ったのだ、奴の強さの根源を。だからこそ、

「ルシファー、それにお前たちにも言うっておこう。奴を甘く見ない方がいい、そしてあの男が認めた後継者たちもな。今回敗北を喫したことで奴らは大きく成長して俺達の前に立ち塞がる、ウカウカしているマモン達の後を追うことになるぞ。」

「それは……楽しみだ。」

ああ、分かっているよタイヨウ。ユウトもそうだったから、あのイツキという少年もその友人達も強くなって自分たちの前に立ち塞がるだろう。面白いじゃないか、歓喜すら覚えるよ。

その思いはルシファーに限ったことではない。ベルフェゴールは死神を、サタンは強者を求めている。レヴィアタンは分からないがいずれ彼の前にも望む存在が現れるに違いない。そしてその時こそ全ての決着がつくときだろう。

「ふふふ……今から楽しみだねえ。彼らの成長も、そして新しい同士もね。」

### 同刻・別室にて

ズウン……ツ!!!

「あ……あああ……!?!」

ベルゼブブは目の前の光景が信じられなくて泣き叫んでいた。かつてはイツキとコウジを追いつめ、その苦しむ様に笑っていた筈の彼は目の前で行われている光景を前に彼自身が苦しめられ追いつめられていた。

「……所詮はこの程度か。やはりあの4人と比べると残る3人は数合わせにしか過ぎなかつたらしいな。」

「ふ……ふざけるな!!! どう考えたって卑怯じゃないか!!! こっちは一人、君は二人なんて!?!」

そう喚き立てるベルゼブブの眼前に映るのは両腕両足が粉々になり体のあちこちに風穴が空き倒れ伏しているグラと、それを見下ろすように立つ悪魔と天使、そして彼らに指示を出す男の姿だった。

「卑怯？何を言っているんだい、一人のメダロットが指示を出せるメダロットの数の基本は最大で3体だ。ルールによってはそれ以上も操れるがね。僕は何一つルールを破っていないよ？それ以前にこの条件を呑んだのは君だ。その必要が無いと、僕は忠告した筈なのに。」

「ぐ……！！！」

「しかしそれでも卑怯だと喚き立てるなら《真名》とやらを出せばいい。強さが10倍近く跳ね上がるんだらう？今の状況なんて簡単に引つ繰り返せるんじゃないか？」

「言われなくてもそうするさ、泣いて喚いてももう許さないからな……！！！」

ニヤリと愚かな挑戦者の泣き叫ぶ姿を想像してグラを真の姿に解放させようとする……

「まあもつとも……」

それを見てやれやれと男は首を振り、

「待つてあげるなんて一言も言っていないけどね。」

ズガアアアアアアアアアッ！！！！

ベルゼブブが真名を唱えるよりも先に悪魔型メダロットから放たれた何かグラの体をメダル以外全て破壊する。塵も残さず、跡形も

なく。

「あ、あああああああああああああああああああ  
？」

「残念だったね、そしてさようなら。」

同時にベルゼブブの体を闇が包み込み絶叫と共にベルゼブブの体が消滅していく。悲鳴が消える頃にはその姿はどこにも存在していなかった。

「さて、これでクリアだ。」

男はカツカツと靴を鳴らしてグラの物だったメダルを拾い上げる。巨人が描かれたそのイラストを見て薄く笑い、

「これで僕が新しい《ベルゼブブ》だな。」

そう呟いてその場から離れた。



## 幕間6：《悪魔》達の夜明け（後書き）

ハイ！！今回はいつもと違って全編オール《悪魔》メンバーの話でした。つっても支離滅裂な文で色々問題あるかもな……

ちなみに少々補足しますと現在の《悪魔》は初めてその存在になつてから一度も敗れたことのない面子でした。まあ今回謎の男にベルゼブブが、大会でマモンとアスモデウスが敗れたせいで次の誰かにその力と称号が継承されるわけですが。

ちなみにこれは後々の話ですが、前ベルゼブブの操っていたグラとこれから謎の男が操るグラは全くの別物だと言っておきましょう。つてかグラさんの出番もうないかもしれませぬ……

更にもう一つ補足。実を言うと《悪魔》メンバーは自己中で残忍で負けちゃった上の3人を除く4人は家族のように仲良しです。誰かがやられたら残りの皆で敵討に出かけるくらいには仲良しです。タイヨウともお互い気に入り合い、だからこそ本当の仲間としてタイヨウに継承を薦めているのですがヒカルとの決着だけに意味を見出し馴れ合いが嫌いな彼はずっと拒んでいるというわけです。

他にも質問があったらいつでも受け付けますんでどうぞどうぞ。

それではまた次回！！今度はちゃんと本編ですよ。

第76話：ユネに連れられて（前書き）

お待たせいたしましたあ！！2話更新です！！





てもモチベーションが上がらなければ仕方がない。目覚めてからずっと、どうもロボットをしようという気力が湧かないのだ。

(燃え付きた、って訳でもないんだけどなあ……)

なんでだろう？敗戦のショックを引きずっているというわけでもないんだけどなあ。

「悩み事ですかイツキ君。」

「そうなるのかなあ……よく分からないよ。」

「今までずっと屋内に籠りっぱなしなのがよくないのかもしれないね。一度ゆっくり空気を入れ換えてみてはどうでしょう？」

「……そうだね。調子は悪くないしそうしようかな。」

カリンの言葉に頷き、イツキはゆっくり立ち上がると、気晴らしに散歩に出かけることにした。

とはいったものの、どうするかな。こつも悩んだことがあまり無いから少し悩んでしまう。

「ここのところ忙しかったしな……ん？そう言えばマルガリータにも全然会いに行っていないや。」

マルガリータというのは数百年以上前に存在していたコーダイン文明のお姫様だ。存在していたという言葉から分かるだろうが、コーダインはもう存在しておらず海の底に沈んでいるのだが、かつて色々あって過去に飛ばされたイツキは当時のコーダインに辿り着いて

しまった。そこで色々あつて勇者として讃えられてしまつていたのだがその話は置いておこう。そして去り際に渡された《銀色のロケット》の不思議な力で、自由に皆が生きているコーダインに行けるようになったのだが……

「最近全然行つてないからなあ……少しは大きくなつて成長してるだろうけどやっぱり寂しがってるかなあ……」

それにコーダインはマルガリータ達と初めて会つたときからいつ海の底に沈んでもおかしくなかつたと聞く。それが数年後か数十年後かは分からないが……要するにだ、いくら《銀のロケット》の力があつてもコーダインが海の底に沈みマルガリータ達がいなくなつていた場合、別れを言う暇もなく二度と会えなくなつてしまうのである。別れが辛くなるとしても少しでも多くマルガリータ達に会いに行くべきかもしれないな……

「よし、善は急げつて言うし久しぶりに……」

「あの、イツキさん。」

「うわあああああああ！？」

突如何の気配も脈絡もなく後ろから聞こえた声に大声を上げて飛び退つてしまふ。……あれ？前にもこんなことがあつた気がするな、デジャヴか？

「……そうまで驚かれると正直、ショックです。」

心なしかしよんぼりしたようにそう言ったのは長い黒髪に整つた顔立ちを持つ少女。最近（厳密にはかなり前からだが）知り合つた女の子だつた。

「あ、ユネちゃん……?」

「はい、見ての通り雨宮ユネです。挨拶しただけなのに激しく驚か  
れてしまった雨宮ユネですよ。」

「ご、ごめんなさい……」

何故だろう、ちゃんと知りあう前の時と変わらぬ丁寧語だが……  
どこか大人びているようで子供っぽい。これが彼女の素なのだろう  
か? そういえば着てる服も黒いフード付きコートじゃなくて黒いワ  
ンピースだな。

「いえいえ、謝られる必要なんてないですよ。ただ名前を読んだだ  
けとはいえ驚かせてしまったのはこちらですから、例えそのせいで  
私の心に大きな傷が出来たとしても自業自得なのでしょう。ですか  
ら貴方はそんな大げさに驚いてしまったことに対して怒る必要など  
一切ありません。むしろ「お前のせいで寿命が縮まったじゃないか  
!!」と更に罵倒してもいいのではないのでしょうか?」

「……」

何だろう、話を聞いているだけで何か疲れてきた……接し方が  
分からない……っ!!

「と、貴方をからかうのはこの辺りで止めておきましょう。ユウト  
に叱られてしまいますから。」

「そ、そう。それはそれは……(今までののはからかってるつも  
りだったんだ……)」

彼女なりの親愛の挨拶だったんだろうか? この間容赦なくメタビー  
を倒したマスターとは思えないな……

「実はイツキさんを探していて見つけたので声をかけたのですが・

「・・・これから何か御用時などはありますか？」

「うーん、久しぶりに最近会ってない友達に会いに行こうかなとは思ってたけど・・・何か急用なの？」

「そう言うわけではないのですが・・・貴方と話をしたいと言う人がいまして、もしよろしければと。」

話をしたい？僕と？誰が？

「長くは取らせないとします。ダメでしょうか？」

「・・・いや、いいよ。それでどこに行けばいいの？」

「それは案内します。付いて来てください。」

そう言うと、ユネはくるりと反転して歩き出す。が、少し歩いたと思ったら再び振り返り、

「こんなことを聞くのも変ですが、畏だとは考えないんですか？ついこの間まで敵だった私の。」

なんてことを聞いてくる。

「えっ、畏なの!？」

「いやあの、そこでそんな顔されても・・・」

「そんなこと全く考えてなかったなあ・・・だって君は今僕達の味方なんでしょ？そう言っただじゃないか。」

「それも嘘かもしれませんよ？」

「博士が信頼してるし、敵なら友達だって容赦しないような性格してるユウトが気にしてないんだ。多分嘘じゃないと思う。というかもしこれが畏で本当は敵だとしたらこんなこと聞かないよね？」

そのイツキの真顔での言葉にユネはしばし目を丸くしていたが小さ



く吹き出し、

「聞きしに勝るお人好しですね。あのユウトが懐くわけだ。」

なんて先程よりも幾分上機嫌そうに見える歩みで再び歩き出した。

(??？僕変なこと言ったかな・・・)

「……………」

一方あるところでは騒がしく、あるところでは戸惑っているような状況の中、ヒカルはメダロット研究所の屋上で寝転がっていた。

「《ラストフォーム》に短期間での《バーサーク》の連続使用。加えてスペルビアによる斬撃がメダルに深刻なダメージを与えており完治したとしてももう戦えない、か……………」

それが博士とユウトから聞かされたためたびーの状態。どれだけの時間がかかってもうロボトルはおるか、最悪の場合は立って歩くこともできないかもしれないのだと言う。ティンペットやパーツを変えたところで意味はない、メダルへのダメージはそれだけ深刻な物だったのだ。

「黄昏れてますねえ……………いや、落ち込んでるのか？」

そんなとき頭上から聞こえてきたのは冗談めかした声。振り返って確かめるまでもなくユウトの声だった。

「君か、悪いけど今は……」

「何考えてるか当ててあげましようか？」

言葉を言い切るよりも早くユウトがそんなことを言ってきてヒカルは思わず振り返ってしまう。それにユウトはいつも通り顔に笑みを浮かべて、

「僕が不甲斐ないから、また傷つけてしまった。キララに続いてめたびーまで……それにろくしょうだって下手したら……ああ僕は、僕はなんて情けないんだくみたいな。ま、ちょっと誇張してるでしょうがこんなところでしょう？」

「……なんだかバカにしているような口調だね。」

「ような、じゃなくてバカにしていますからね。そう聞こえたんなら何より。」

見る人によっては不思議と明るくさせてくれるようなユウトの笑み、だが今のヒカルの状況にとって今の言葉とその笑みは不快以外の何物でもなかった。

「あのねユウト君、今は……」

「前々から思ってたんですよ、あなたもイツキも優しすぎるんだなあつて。でもちよつと違つたらしいな。だってあなたの場合のそれは優しさじゃ無くて甘さだし。」

またもや何か言うよりも先にユウトに先手を打たれてしまう。

「いや、甘さつてよりは甘えかな。まあイツキもイツキで同じように甘いんだけど、少なくとも身近な人間がやられても落ち込みこそすれいつまでもずるずると引つ張らないしまだマシだな。」

「……何が言いたいんだい？」

「ああ、分かりませんか？つまりはね……」

あんま調子に乗ってんじゃねえよこのダラブチが。」

突如笑顔が剥がれ落ち、その内側に隠されていた苛立ちが露わになる。そしてその顔から吐き出された言葉は、静かな口調なのに有無を言わさぬ迫力があつた。

「最初から本気を出さなかつたからキララさんがやられた、OK。

それは確かにあんたが悪い、自己嫌悪に落ちて当然だわな。で？まだ安静にさせとくべきめたびーを無理に戦わせたから？だからめたびーももう戦えない、僕のせいだ〜ってか？まあ確かに人によつては自己嫌悪に落ちるかもな……」

で、それがどうしたんだよ？」

「それがって……」

「タイヨウの時はキララさんが自分で選択したんだろ。めたびーだつてそう、いくら大抵の場合メダロットがマスターに従うつて言つてもめたびー位感情を素直に表現してくれるメダロットなら無理なら無理つて言つてくるはずだ。要するにあんたが落ち込んでるのはお門違い、責任があるつてんならあんただけじゃなくて二人の方にもあるんだよ。」

それは……分かつている。でも……

「納得してないつて感じだな……アレだな、イセキさん辺りが

言いそんな気がするけどヒカルさんてそういう自分に酔ってるんじゃないかね？」

「っ！！」

「ああ、そう考えれば納得だわ。いやあ伝説のメダマスター第一号にそういう悲劇のヒーロー願望があったとはねえ。」

なんだ、何が言いたいんだ・・・？

「つまりこの状況はむしろ貴方にとっては好都合なのかな？何せバカしてくれたおかげでカツコよく黄昏れることが出来るんだから。良かったねえ、都合よく身の周りに不幸が起こりまくっ・・・」

それ以上は言わせなかった。挑発されているのは分かっていたし大げなかつたかもしれないが、ユウトの胸ぐらを掴み上げて黙らせる。ヒカル自身意外なほど激情に駆られたらしい、次のユウトの言葉次第では更に歯止めが効かなくなりそうで・・・

「そうそう、それが正解。今の俺の言葉に怒りを覚えない奴は存在しようがない程凄い聖人君子くらいなもんだからね。その反応は正しいよ。」

いやあよかったよかった、そんな顔もできるんじゃない。うん、やっぱり腑抜けて黄昏れてる面よりよっぽどいい顔してるよ安心した。」

だから再び笑顔に戻ってそんなことを平然と言ってきたユウトに完全に毒気を抜かれてしまった。

「・・・は？」

「いやあ流石に言葉選ばなすぎたなあ、俺ともあるうものが不覚にもビビりそうになったわ・・・あ、ヒカルさんそろそろ手離してくれませんか？流石にキツクなってきたんで。」

先程までの様子とはまるで違う、元に戻ったユウトに言われるがままに手を離し呆然としてしまう。なんだ？どういうことだ？

「気分どうです？少なくとももう落ち込んではいないと思いますけど。」

「あ……………」

言われてみれば。さっきユウトに対して爆発しかけた怒りとか、沈静した後の驚きとかですっかりそんな気分じゃない。ということはユウトはわざと……………？

「いや？全部本心、イラつき100%の本音っすよ。」

「……………」

ダメだ。相変わらず何を考えているのかさっぱり読めないぞこの少年は。

「なんか昔の俺見てるみたいでムカついたんですよね、ってこういうことは本来年長の人間が言う事なんだろうけど。」

「昔の君？」

「ま、酷い怪我したとはいえキララさんもめたびーも生きてるんだしそんな落ち込むこと無いと思いますよホント。……………少なくとも、死んでないんですから。」

「？」

最後の方は聞き取れなかった。が、それを聞こうとする前にユウトは屋上の柵の方に向かっていき、

「んじゃ、ヒカルさん。今は平気だろうけどさっき見たいな姿はも

う見せないでくださいよ？でないと今度はナエさん呼んでまた地獄  
見ることになりますからね」

なんて笑って柵を乗り越え飛び降りる！！慌ててヒカルが止めに入  
ろうとするが既にユウトは風の翼を転送していて、空へ舞い上がっ  
ていた。

「……なんていうか。」

確かに気分は幾分楽になったかもしれない。それはお礼を言うべき  
だろうが……

「寿命がかなり縮んだな……」

## 第77話：レオ

「はい、着きましたよ。」

「つておどろ山なの？」

ユネに連れられた場所はすっかりお馴染となったおどろ山だった。

「彼は最近この山で暮らしているので。」

すみませんイツキさん、本当なら話をしたい方から出向くべきなんでしょうが、あまり多くの人に姿を見られたくないらしくて。」

「いや、それは全然構わないんだけど・・・肝心のその人はどこに？」

キヨロキヨロと辺りを見回すが、それらしき人物の姿は全く見えな  
い。一体どこに・・・？

「おかしいですね、ここで待っていると話す話だったので・・・」

「どうやらユネが場所を間違えたと言っわけでも無いらしいが・・・」

「ちょっと待って下さい。今呼びますから・・・」

と、ユネがポケットから通信機を出そうとしている時、その声は聞  
こえた。

『ああいや、その必要はないぞ。私はここにいる。』

と、声の方に向いて見ればそこにいたのは・・・

『すまないね、あの時は少ししか姿を見ていなかったから、話をする前にちよつと見ておきたかったんだ。初めまして天領イツキ君、私の名はレオという。』

大きく広がる鬣状の頭。右の腕に二つ左の腕に四つずつ備えられている銃身。獣の足のような脚部。

コウジの愛機であるスミロドナットでお馴染のSTG型シリーズのもう一つの対極。KWG型のライバル機として名高いKLNライオン型メダロット、その初期型であるウォーバニットが穏やかな空気を纏いそこに立っていた。

「もしかしてあの時僕たちを助けてくれた……？」

話に聞く、気を失っていた自分達をルシファー達の魔の手から守ってくれた……？

「その節はありがとございました！！お陰で皆無事に助かりました。」

『お礼はいらないよ。君達を助けたのはむしろ弟達だからね。私は彼らの頼みを引き受けたに過ぎない。』

「弟達？」

『そうだよ。ユウトもロクシヨウも私と私のマスターにとって弟の様なものだからね。もう私のマスターはいないんだが……それでも残った兄としては無下にするわけにはいかないさ。』

朗らかにそう言う彼の姿は成程確かに大人っぽい。ユウト達の兄的存在というのも頷ける。が、マスターがもういないとはどういうことなのだろう。もしかして既に……



『あ、一応私はメダロットだからそんな敬語を使わなくてもかまわないよ。』

「ああ、はい。」

詮索は止めよう。恐らくユウトの過去にも関係しているのだろうし。しかし・・・丁寧な口調の機体は色々見てきたが、ここまでお兄さん気質なメダロットは初めてなのでどうしても敬語になってしま

う。『まあどちらでも話し易い方で構わないけどね。そんな些細な事はいいか。』

改めて初めましてイツキ君。弟達が世話になっているね、礼を言うよ。』

「い、いえユウトには僕の方が世話に・・・」

つてなんだこのやり取り？まるで我が子を見守る保護者と話している様な気分・・・

「レオ、いい加減本題に入ってください。イツキさんも困惑していますよ。」

『やれやれ、妹の方は可愛くなくなったんだな。昔はユウトと一緒にあんなに可愛・・・とこれ以上は本当に脱線してしまうな。これ以上はユネが怖いし、本題に入ろうかイツキ君。』

ユネの目つきが徐々に険悪な物になって行くのを見てレオは話を打ち切りイツキを見て、

『さつきも言ったけど本当にありがとうイツキ君。元々あいつは友達付き合いが得意ではないんだ。君達に会ってからはそんな面は見せなくなったらしいからそんな風には見えないかもしれないけどね。』

特にあいつはあの日以来、意図的に人との関わりを避けていたところがあるから……」

「レオさん……」

「だからきつかけはどうであれ、あいつがあんな必死になって君達を助けてほしいと私に話してきた時は思わず泣きそうになってしまったよ。もちろん私は人間ではないから流れないんだがそれくらい嬉しかったんだ。本当に、口では言い表せない位に君達には感謝しているよ。」

深く、深く頭を下げられイツキは慌ててしまう。メダロットに年は意味が無いとはいえ明らかに自分よりも年輩で、ユウト達の兄のよくな存在に頭を下げられて平気でいられるほどイツキの神経は太くない。

「い、いや頭を上げてくださいよ！そんなお礼を言われることじや……」

「あ……すまない。これじゃあ逆に気を使わせてしまうかな。でも感謝しているのは本当だ。出来ることならこれからこれからもユウト達の友人でいてやってくれ。」

「それは……もちろんです。」

その言葉でレオの表情が柔らかくなった気がした。

（ああ、この人は本当にユウト達のお兄さんなんだな……）

そう思わせる穏やかで優しい空気を纏っていて、イツキは素直に敬意を表すことが出来る人だなと思った。のだが……

チュインチュインチュイン！！

「メタビー？」

『……』

メタビーは何も喋らずただジッとレオを睨みつけていた。いや、その体は震えている……？

「メタ……」

『お前……何なんだ？』

ようやく吐き出された言葉は畏怖と驚愕。いつもどんな相手にも臆することが無かったメタビーが、ビーストマスターを、ルクスリアを、スperlビアを前にしても戦意を折ることなく例え絶望的な状況でも向かって行ったメタビーが初めて見せる姿だった。パートナーのイツキでさえこんな姿を見たことはない。

『何なんだって聞いてんだよテメエツツ！！』

「ちょ、ちょっとどうしたんだよメタビー！？お前さつきから……」

『下がってるイツキ！！コイツ、かなりヤバイ……！！』

言うが早いかメタビーはイツキを後ろに突き飛ばして臨戦態勢に入る。いつもなら文句の一つどころか十以上言うところなのだが、普段見せない緊張がメタビーから出ているのを見て口が出せなかった。

『はあ、やれやれ。確かに受けてくれるならロボトルするつもりではあったが、まさかあの時と同じ展開とは……意外と似た者同士なのかな君達は。』

『……』

堪え切れなくなったのか、メタビーはレオに向かって一気に駆け殴りかかる！！が、

（すごい、予測してはいたんだろうけどメタビーの拳が伸びきる限界を見極めて最小限の動きで躲した……！！）

少し頭を後ろに逸らしたようにしか見えないのに、メタビーの拳は空を切る。だがメタビーが先手を取ろうとして決め切れなかったことなど今までになかったことじゃない。そのまま更に一步踏み込み、メタビーの左ストレートがレオに襲いかかる！！

『オイオイ、君のつけてるパーツはは射撃タイプじゃなかったかな？私と同じで。』

しかしその一撃も一歩後ろに下がることで届かせない。が、メタビーの左手はそのまま伸びたまま、備えつけられた銃口からガトリングの火が吹く！！即ち左ストレートに見せかけたガトリング、拳が決まっていたらそれはそれで御の字だったんだろうがあくまでも本命はこちらだ。恐らくは経験の多さから必要最小限の動きで攻撃を躲していたのだろうが、だからこそ距離が近くて躲せない。例えばスミロドナットほどの反応速度があっても意味を為さないだろう。だから倒すとまでは行かなくても多少のダメージは与えられていた筈で……

『いや、参ったな。どうもカッコつけすぎたようで……流石に全弾受け流すのは無理があったか。』

だからガトリング弾がレオに当たることなく音を立てて地面に散らばったのは信じられなかった。

『なっ………。テメエどうやって!?!?』

『どうもこうも見たままじゃないかな。運がいいことにほとんどのガトリングが私に命中することなく地面に落ちたんだろ。正直焦ったけどね。』

嘘だ、そんなことはあり得ない。もつと距離が離れている状況ならともかくあんな近距離で、しかも外れたのではなく、届かなかったなんてことあるわけがない。だからもし考えられるとすれば……。

「……メタビー。」

『ッ、イツキお前はもつと下がってる!!こいつやっぱり……。』

「お前がどうしてそんなにレオさんを警戒してるのかは分からない……でもあの人ガタダものじゃないって言うことは僕にも分かるよ。多分、お前だけじゃ勝てない。」

『んなっ!?!?』

流石にそのセリフは傷ついた。というよりムカついた。

確かにコイツはタダ者ではない、むしろヤバい相手だ。だがしかし、俺では勝てないだ……!?!?

『今なんて言ったイツキ……?俺じゃあコイツには勝てねえと、そう言ったか!?!?』

「レオさんが強いのはいつになく警戒してるお前の姿と今までのやりとりを見て明らかだ。そうだろ?」

『……。だつたら何だよ、だから俺じゃあ勝てねえってのか!?!?』  
「違う、言っただろ?お前一人じゃ勝てないって。」

一人では勝てない。もちろんイツキは複数体でかかれば勝てるなん

てセコイ事を言っている訳ではない。もつと単純な理由だ。

「意地を張るなよメタビー。お前は何かを考えて、展開を予測しながら戦って勝てるほど器用じゃない。」

『そんなこ……』

「当然だろ？だって僕らは二人で戦ってきたんだから。」

その言葉で、イツキが何を言わんとしているのかメタビーも漸く理解する。つまり、

「それは僕の仕事だ。僕がお前の代わりに見て、聞いて、感じて、整理して最適な行動や相手の弱点を導き出す。勉強は全然出来ないけど、この分野なら誰にも譲らない。いや、もう譲らせない。だから、」

そしてイツキもまた構える。最適な指示を迅速且つ正確にメタビーへ伝達出来るように。

「いつも通りメタビーは相手を倒すことに集中しててよ。考えたりするのは僕がするからさ。」

『……へッ、言うようになったじゃねえか。』

メタビーの体から緊張がとれ、イツキの頼もしい言葉に不適な笑みを浮かべたようだった。

『了解だマスター、いつも通り支援は任せませ！』

「うん、任されたよ相棒。」

というわけですいませんレオさん。僕も交せてもらいますね？」

一応レオに確認をとっておく。先程の会話から少し分かった彼の性

格から、拒否はされないとは思うが念の為だ。

『いやもう全然構わないよ。そうだね、当たり前だけどその方がいい。ふふふ、メダマスターとその相棒の真の実力がこれで分かるというわけだ。』

やっぱり大丈夫みたいだ。ならばここからは全力で、ユウト達の兄的メダロットにして狙撃とはいえスペルビアを退けたその実力見せてもらおう!!

「予想通りの展開ですけど……私は蚊帳の外なんですネ。」  
激突する二体のメダロットを見守りつつ、ユネは一人嘆息していたのは置いておこう。

## 第77話：レオ（後書き）

というわけで皆さんお待ちしました！！ようやく、ようやくウオ  
ーバニット参戦です！！いやあ、当初から本小説での彼の設定は考  
えていたんですが色々あつて今まで登場できず・・・ああ、よ  
うやく出せた！！

しかしメタビーは何故レオに対してああも敵対心を抱いているのか  
？それは彼のメダルに秘密があるのですが・・・情報に乗せる  
のはもう少し先になるか次話になるか、どうだろうなあ。

ちなみに76話でユウトが使った「ダラブチ」という言葉、ブログ  
でも以前書いたことがあるんですがこれは石川県の方言で祖母曰く  
「バカ野郎」とか「アホンだら」的な言葉らしいです。語感的に後  
る二つと比べてかなり強いイメージが・・・

まあそんなこんなで今回はここまで！！展開的なことで色々言いた  
いことがあるかもしれませんが込み入った話はもう少し先になると  
思います。それではまた次の話で！！



## 第78話：回想（前書き）

お待ちせしましたああああああああああああああああああああああ  
あ！！受験がひと段落ついてもう焦る必要も何もなくなっただんで更  
新再開します。今回も2話掲載で！！

## 第78話：回想

そもそもイツキ達が倒れた後、果たして何があったのか？作中の彼等はその一部始終をそれぞれ誰かかしらから聞いているが、我々はその限りではない。というわけであの銃声の後から再び物語を戻してみよう。

『そうはいかない、むしろ逆だ』

言葉と同時に放たれた銃弾は、カイへ伸ばされたスペルビアの腕を弾き飛ばし、間髪入れずに放たれた第二射がその体を貫く。その場に集っていた実力者達全員に悟られずに狙撃を成功させたその腕。並外れたレベルであることを瞬時に悟り、タイヨウは警戒を強めた。

「今の狙撃は……！！？」

「慌てなくていいよタイヨウ。確かに中々のダメージを受けたがそれで終わりだ。」

今の狙撃でスペルビアを仕留めきれなかった以上、次はない」

対してルシファアの方は、取るに足らぬ出来事でも言うように警戒こそしているが、気にはしていない。スペルビアが受けた弾丸、それにより与えられたダメージの位置から弾道が割り出せた。いくらスナイパーとしての腕が高くとも、位置が分かっていたら恐れることなど……

そう思った直後、一陣の風が吹き抜けてスペルビアの鋼の体を強く斬りつける。どうやら《レアメダル》持ちではないらしくダメージ

こそないが、新たな妨害者が現れたことに間違いなく、

「・・・・・・・・どうやら一番最悪な状況になる前には間に合ったみてえだな」

スperlビアを斬りつけた疾風　ゾーリンを従えて、息を切らしながらユウトが現れる。以前の様に怒りに吞まれてはいないが、真つ直ぐにルシファーを睨みつけてその場に止まる。

「思ったよりも遅かったなユウトよ。ロクシヨウがおらずともお前の腕ならもつと早く着いたはずだが・・・・・・・・昔話はもう済んだのか？」

「ロクシヨウ、ねえ・・・・・・・・」

そこで初めてルシファーから視線を外し、周りを見渡す。

倒れ伏すイツキとヒカル、力尽きボロボロになっているメタビーと無惨に斬り捨てられたためたびー、そして剣を顔に突き刺されているBビートル・・・・・・・・

「どうも・・・・・・・・一番最悪な状況には間に合ったものの、最悪な状況には間に合わなかったらしいな」

「と、言いつつも至極冷静・・・・・・・・中々に面白い、以前に会ったときよりも成長しているようで嬉しいよ。」

まあ以前のように我を忘れて怒りのまま向かってくる姿も嫌いではないがね」

「・・・・・・・・」

ルシファーの言葉には一切耳を傾けずに、ユウトはルシファーとスperlビア、そしてタイヨウと獣王の動きにだけ集中する。そして僅かに右手を動かして・・・・・・・・

「止めておけ。これ以上の犠牲を出したくはないだろう？お前が動くのならまた一体、屍が増えることになる」

「.....」

「力を持たない一般のメダル、その一枚に多くのメダルの力を集中させることで一時的に《レアメダル》にも匹敵する力を生み出させる装置。」

発案がお前で開発したのは秋葉原博士かな？素晴らしい発明だと思うぞ、私達への対抗手段としては決して間違っていない」

だが、とそこで言葉を切り、

「《レアメダル》が争いとは無縁な普通のメダルになれるわけがないように、量産メダルもまた《レアメダル》の域には届かない。単にメダフォーース総量 出力が普通よりも高いだけで《レアメダル》と呼ばれている訳ではないのだから。」

力を解放している《レアメダル》相手でもそれなりに戦えるだろう。我々に対しても抵抗出来るだろうし、ミュータントレベルなど話にならない。

しかしそこまでだ。多少は戦えるだろう、相対しても逃げ切れるかもしれない。だがそこまでのなだ。精々傷をつけるのが精一杯で勝つことなど出来ぬ。誰よりもお前が一番分かっているんじゃないか？」

その通りだ。クリアワームレベルならともかく、相手が弱っていたり手を抜いてでもない限り《レアメダル》相手には勝てないし、ルシファアの言う通り《悪魔》達には傷を与えるのが精一杯だ。

ここに来る前にゾーリンでBスタッグに勝てたのも、前日のBビートルとの戦いから力が回復しきっていなかったから。こんなことを言えば殺されるかも知れないが、以前イセキが《黒以》とまともに

やりあえたのも、相手に戦意が無かったからだ。

この装置の本来の用途はアリカやカリン等がイツキ達のいない状況で《悪魔》と相対したときに逃げ切らせる為の護身用だ。イセキやキララには《レアメダル》や《悪魔》相手にどの程度まで通用するのか確認する為に渡したが、そもそも戦わせる為に作った訳ではない。

「けど、今のダメージがあるスペルピア相手ならカイを守りきる自信はあるぜ？」

「その言い方だと『他の仲間は守りきれない』と言っているように聞こえるな」

「守る必要なんてないだろ？お気付きの通りあの人がいるし、《レアメダル》とその力を完全に引き出せるマスターをこれ以上傷つける程お前は馬鹿じゃないはずだ」

挑発にも乗らない。仲間が倒れているこの状況は逆にユウトを冷静にさせているのか……？

「ま、ただカイを守るだけじゃ気が済まないし、もうちっとスペルピアに傷はつけとくか」

『……と、まあこんなやりとりが交わされていたわけさ。な？私よりもイツの方が君達を助けてる』

「いえ、そんなことないです。レオさんがいなかったら、ユウトが来る前にカイが拐われてたかもしれないし」

レオに呼ばれたおどろ山の岩場、その手頃な岩に腰かけ、イツキはレオから改めてルシファーに負けた後の話を聞いていた。……  
・ちなみにメタビーは気を失いノビている。

『まあその後にもう一悶着あったものの、なんとかそれも切り抜けて、その結果ルシファー達は撤退したんだけどね』

「そうなんですか……ユウトからはレオさんが助けてくれたとしか聞いてなかったけど、やっぱり色々あったんですね」

『それはもう色々だね。でもまあ、ユネは戻って来てくれたしカイ君も救うことは出来たが、全員が無事というわけでもないから素直には喜べないけどね』

「レオさんは悪くないですよ」

「……あの、イツキさん？」

のんびりと、会話を続けるイツキに今まで黙っていたユネが躊躇いがちに声をかけてくる。

「いいんですか？その……メタビーが倒れてしばらく経つんですが」

「いいんだよ、まだ全快じゃないって最初から分かってたしね。こういう機会でもないと言いつゆつくり休まないから」

意思を汲みはしたが、最初からレオに勝てるとは思っていなかった。傷は塞がっていたし覇気もあつたが、力が全然戻っていないことが丸分かりだったから。

かといって、あんな切っ羽詰まったメタビーを止めることなどできそうも無かったから、手っ取り早く休ませるために荒療治をとったが。

『ユネに関してもそうだが、私についても疑っていないんだね。君

の相棒はあんなに警戒していたのに』

「?なに言ってるんですか」

訳が分からずイツキは首を傾げる。

「だってあなたはユウトのお兄さんみたいな人で、信頼されてるんですよ?それに僕らを助けてくれた。疑うとか警戒するとか、なんでそんなことをする必要があるんですか?」

『……君は本当に純粹でいい子なんだね』

呆れたようなおかしいようなといった口調でレオがおもむろに手を伸ばしてイツキの頭を優しく撫でる。

「わっわっ!?!?」

『本当に良かった。君があの子達の側にいてくれるなら、私も安心できる』

個体差はあるが、メダロットは基本小学生くらいの背丈なため、自分より小さい相手から頭を撫でられるのは少し違和感がある。けどその仕草はとても暖かくて本当のお兄さんみたいで、恥ずかしさこそあるものの全然嫌じゃない。

「で、でもメタビーがあんなになるなんて相当なんで、レオさんが何者なのかはちゃんと聞かせてもらいますよ!もちろんユウト達の兄代わり以外のことで!」

『分かっているよ』

照れ隠しのために早口で巻くし立てるイツキを、レオは優しい眼差しで見つめていた。

## 第79話：話す決心

『わたしは常にこの山にいるから、会いたくなったらいつでもおいで。力を貸してほしい時はいつでも貸すよ』

そう言ってくれたレオと別れ、イツキ達はユウト達が待っているであろう廃工場に向かっていった。当然既にメダロツチの中にメタビーを入れている。

「結局、本人については何も教えてくれなかった……………」

「彼はああいう性格ですからね。昔とは大違いです」

「そうなの？」

「ええ。昔はもつと真面目で気難しい性格でしたから。私にはそれも好ましく感じましたが、人によっては煙たがられるかもしれませんね」

なるほど、たまくにクラスに一人はいるであろうお堅い委員長タイプだったわけか。

「それが今ではまるで彼のマスターのような性格……………正直、この前久しぶりに会ったときは誰だか分かりませんでしたよ」

「そんなに違うの？」

「タイプは全然違いますが、驚きの大きさで言うとアニメ版とゲーム版のコウジさんくらい違いますね」

「？」

例えがよく分からない。コウジにアニメもゲームもないと思うんだけど……………



「まあ、彼にとってもあの時のことがそれだけ大きいことだったということなんでしょうけどね……………」

「あの時……………」

それはつまり、ユウト達の過去に関係しているであろう出来事？

「やっぱり、レオもまた……………」

「なに辛気臭い顔しとんじゃお前は。止める止める、小さい子が絶対怖がるから」

いきなりユネの後ろから手が伸びてきて、顔をグニャグニャといじり始める。正直、コメント出来ないほどおかしな顔に……………」

「つて、ユウト！？なにやってんだよこんなところで！」

「よっ、お二人さん！おどろ山までのデートはどうだった？幽霊が現れたりして、ユネが「キヤー」とか叫んでイツキに抱きついたりとかは……………」

「怒りますよ？」

「……………すいません」

バカな、ユウトが震えながら高速で後退っていく！？ユネはただニッコリ笑いながら一言言っただけなのに……………」

「普段はともかく、怒るとスゲエ怖いんだよコイツ。いいかイツキ？冗談じゃなく命が惜しかったら何があっても絶対に怒らせるなよ……………」

いや、そんな真剣な声音で言われても。一体ユウトは過去に何をしたんだろ……………」

「それで？わざわざ私を怒らせるためにここで待ってたんですか？」  
「んなわけあるかボケ、ただの冗談だよ。ったく昔より沸点が低く……いや、そんなことはどうでもいいな」

言葉を続ける前にユネの笑顔を見てしまい、すぐに真面目な顔になる。なんか新鮮なユウトだな……

「ロクシヨウが起きたんだと。顔を見せてきてやってくれよユネ」

「それはもちろん。色々謝らねばならないこともありますしね」

「ああ、頼む。最初は驚くけどアイツきつと喜ぶからさ」

「どうでしょうか……」

「俺が保証する。だから安心して顔見てこいって」

「あ、じゃあ僕も……」

目が覚めたんなら自分も行くべきだろう。病み上がりなら大勢で行くべきではないだろうがロクシヨウがいなければ自分達はあの時やられていたわけで。改めてお礼を言っておきたいし。そう考えたのだが、

「お前はこっちな」

ガシッと腕を掴まれて、イッキはユウトに引きずられていく。その方向はメダロット研究所とは全く関係なくて……

「ちょ、ユウト!?!」

「んじゃあそういうわけだから、後は任せたぞユネ」

「いや、だからユウトってば!?!」

イッキの叫びは完全にスルーされ、ユウトに引きずられたままイッキはその場を後にした。

「……………そっか。話しちゃうんだねユウト」

二人がいなくなった後、ユネはぽつりと溢す。その口調は普段の丁寧口調ではなくて、

「どこまで話すのかは分からないけど……………これ以上、自分を責めなくていいんだよ？私もロクシヨウも、誰も恨んでなんかいないんだから……………」

「ま、ここら辺でいいだろ」

自然公園までやってきてようやくユウトが歩くのを止める。が、

「引きずられ続けた身としてはここら辺も何も無いんだけどね……………」

「スマンスマン。機嫌直してくれよ」

とか言いつつユウトの顔は笑ってるままじゃないか。まったく……………

「それよりさ、レオには会ったんだろ。どうだったよ？」

「どうって……すごい気さくでいい人だったよ？病み上がりとはいえほとんど何も出来ないままメタビーがやられるくらい強かったし」

「気さくでいい人、ねえ……」

その言葉にどこか含みを持つ笑みを浮かべ、ユウトはイツキを見る。

「ならよかったな。メタビー無事なんだろ？」

「うん、無事だけど……なんでそんなことを？」

「いや、ロクシヨウの時は軽くトラウマ植え付けられてたから」

「……は？」

「多分、メタビーから挑んだんだろ？レオが怪しいからって。ロクシヨウも最初にレオと会った時は同じ反応だったぜ」

「そうなの？」

「ああ。今でこそロクシヨウも信頼できるよき兄貴分としてレオを慕ってるけど、当時は凄かったぜ？なんせレオの奴今よりも堅くて容赦ない性格だったしロクシヨウも落ち着きが無かったからさ。喧嘩吹っ掛けたもののボッコボッコにされて、しばらくはまともにも利けない状態になって、『ライオン怖いライオン怖い……』って寝ても起きてもうなされ続けてたな」

「いや、それは嘘でしょ？」

流石にそれは、さっき会ったばかりのレオとはキャラが違いすぎる。というかロクシヨウがそんなことを言う姿が想像出来ないし。

「世の中には信じられないような事が真実ってパターンが意外に多いもんだ。」

じゃあ次の質問。ユネはどうだ？お前の目から見て」

なんだろう。今日のユウトは質問ばかりだな。

「そうだね．．．．．ユネちゃんは不思議な子だと思うよ。カリンちゃんとは別の意味で、ちょっとズレてるっていうか．．．．．」

「まあアイツは昔と口調変わってるし、暗い印象が強くなってっけど中身はあんま変わってねえしな。中々の確な意見だ」

「でもあの子もいい子だよな？まだちゃんとは教えてもらってないけど、向こう側にいたのはどうしようもない理由があったんだと思うし」

大会で見たときは容赦なかったけど、なんていうか．．．．．嫌な感じが全然しないんだよなあ。

「．．．．．それがお前の感想？他にはなんもないのか？」

「え、他に？うくん．．．．．あ、ロボットが強いよね！ユウトだって勝てるかどうか分からないって言ってたし、僕も呆気なくやられちゃったしさ．．．．．ってユウト？」

ふと見ると腹を抱えてユウトが体を折り曲げて笑っていた。って笑ってる？

「えっと．．．．．何かおかしかった？」

「クッククク．．．．．いやいや、お前には敵わないって改めて思っただけだ。」

「ってかユネに負けたことは気にすんなよ。お前は力引き出す戦いに慣れてないだけ、ユネより弱いわけじゃねえよ。皆さん大好き一般ロボットならお前らに勝てるヤツなんざヒカルさんくらいしかいね

えし」

「そんな、慰めはいいよ……」

「慰めじゃなくて事実だタコ。そりゃあユネは俺と同じかそれ以上に強いけどお前以上にじゃない。ってか《悪魔》とかとのバトルを口ポトルの勝敗と一緒にすんなよ。似てるよつで全然違つぜ？」

「……」

そう言ってくれるのはありがたい。けどあれ？その言い方だとまるで……

「何かその理屈だと、僕はユウトより強いつて理屈になるような」

「そう言つてんだよ。いいか？大会戦績とかだと俺の方が強い印象だろつけど、お前の相手つて強いのはっかだからそこで比べんのは意味がない。

でも俺とお前がガチのタイマンでやりあったら、多分お前が勝つよ。賭けてもいい」

「ゆ、ユウト……？」

本当にどうしたんだユウトは？本当にいつもとどこか違つ……

「ねえユウト。一体……」

「つと話がズレた。

けどよかったよ。これなら安心だ」

「安心？」

「ああ」

そこでユウトは静かに微笑んで、

「待たせたなイツキ。全部話すよ、俺の過去を。お前が聞きたがってるであろう全部を」

イツキが待つていた話を切り出した。

「話して………くれるの？」

「ああ。ユネもレオも受け入れてくれたお前なら全部話せる。それにこれを話せばさっきのお前の疑問にも答えられるだろうし」

それは、つまり………

「ちょっと長くなる。それにお前の俺やロクシヨウに対する印象も変わるだろうな。それでも、いいか？」

一度聞いたら、多分もう引き返せない。聞かないと言う選択肢だつてあるぞ、と暗にそう言っている。だけど答えなんて最初から決まってるんだよユウト。

「お願いだユウト。話してほしい。君が話してくれるなら、僕は聞きたいよ」

「………そっか」

その答えにしばらく目を閉じる。そして、

「うしっ、じゃあ話しますかね！」

いつも通りの人懐っこい笑みを浮かべて、ユウトはしっかり頷いた。

「つつわけで今から語り始めるわけだが、その前に一つ言わせてくれ。途中でも言うだろうけど、これだけは言っとかなきゃなんないからさ」

話始める前にユウトは真剣な顔でイツキにそう切り出す。

「うん、何？」

「実はな……」

真剣な顔でそこまで言う以上、本当に大事なことなんだろう。そう思っただけでしつかり心を落ち着ける。しかしその後続く言葉は全く予想もしていなかった言葉で……

「俺は、ロクシヨウのマスターじゃない。ロクシヨウの方も俺のパートナーじゃない」

「……え？」

「確かに俺は《クワガタ》の《レアメダル》に選ばれた。けど俺たちは相棒でもなきゃ主従関係でもない。本当は側にいるのも嫌なくせに、目的のために嫌々手を組んで……どうしようもなく最低で下らない、信頼とは無縁な仮初めでハリポテで薄っぺらい関係なんだよ」

ユウトが何を言っているのか、これっぽっちも理解できなかった。



## 第79話：話す決心（後書き）

はい、ほんつとうにお待たせしました皆さん！！ようやく更新再開  
できましたですハイ。長かったなあ……。色々。

さて、次の話からようやくユウトの過去話に入り始めます。どのく  
らいの長さになるかはまだ未定ですが……。ユウトの最後の言  
葉の意味は？ロクシヨウとの出会い、ルシファーへの憎しみ、そし  
て……。多分ユウト関係の話はここでダイブ伏線回収しますの  
でお楽しみに！！次回の更新は未定ですが……。

P A S T 1 : 冒 険 ( 前 書 き )

大変長らくお待たせいたしました。ましてスイマセンでした。  
いよいよユウト&ロクシヨウの過去編がスタートです!!

## PAST 1：冒険

今でも簡単に思い出せる。差しのべられた温かくて大きな手を。大好きな奴らの笑い声を。そして楽しそうな皆の笑顔を……。それは幸せだった頃の記憶。気に入らないこともあつたしケンカだつてしたけれど、ユネや他の皆と一緒に泣いて笑って叫んではしゃいで。そんなありふれてるけどかけがえのない日常が宝物で。

けれど、そんな幸福な思い出の最後は最悪の悲劇。

今でも簡単に思い出せる。泥と血にまみれた皆の亡骸を。赤く紅く染まって震える白い剣士を。そして雨に打たれながら笑い続ける自分の声を……。

「ねえ止めようよ……。皆に心配かけちゃうよ？怒られちゃうよ？」

ほとんど泣きそうな声で少女が口を開く。年の頃は丁度10歳に届くかどうかといったところか。ただでさえ幼いのだが、怖くて震えているその姿のせいで、より幼く見えてしまう。

「こ、子供だけで森に遊びに行くのはダメっていつも皆言ってるよ？ねえ、もどろうよお……。」

人気がない静かな森。元々都会の喧騒とは無縁で滅多に人が来ない

超下田舎な村ではあるが、木々に遮られて光が差しにくい森の中ではいつもは気にならないこの静けさが不気味に感じる。その上、

「《関係者以外立ち入り禁止》って書いてあったし、やっぱりダメだよ。何かあってからじゃおそ……」  
「怖いんなら帰ってもいいぞ、別に弱虫とか言わないし。けど俺は進む」

と、どんどん先に進む少年は振り返ることなくそう答える。年は弱気な少女と変わらないだろう。しかし少女とは対照的に年相応に無邪気で向こう見ずな面が多々見える為か別の意味で幼く見えないこともない。

「でも……」

「これは兄ちゃんの意志でもある。男は黙って冒険だ！」  
「だけど……」

「何を言われても止まんねえぞ。例え雨が降ろうが、槍が降ろうが……」

「レオに怒られるよ？」

その言葉を聞いた瞬間、今までハイテンションだった少年の動きがピタリと止まる。

「考えてなかったの？お兄ちゃんが何を言ったとしてもレオは怒るよ、絶対。それは嫌でしょ？」

「れ、れれれれれれレオなんて、こ、ここここ怖くないぜ？こつちには兄ちゃんが味方についてるんだからな。な！？」

「でも……」

『大丈夫でござるよ』

その時、少年の左腕に身に付けられているメダロッチから声が響く。

『レオには拙者からもとりなそう。それに何があるうとも拙者が二人を必ず守るでござるよ』

「流石マサムネ！どっかの硬い石頭とは器が違っぜ！」

先程までの老獺振りから一転して少年はまたもや笑顔を見せる。

「そうとも！！俺達にはマサムネという名の最強の護衛がついてるんだぜ？レオがナンボのもんじゃい！！」

「もう、ダメだよマサムネ。いくらマスターを溺愛してるからって、甘やかしたらすぐ調子に乗っちゃうんだから」

そんな少女の言葉にマサムネは苦笑しつつも、マスターである少年をメダロッチの中から微笑ましく見ていた。

「ようし、それじゃあこのままどんどん進むぜユネ！！」

「うう〜……………分かったよ。ユウトのバカ……………」

神田ユウトと兩宮ユネ、共に9歳の初夏。まだ平和な日常を過ごし誰も失っていなかった頃の二人と、一体のメダロッチと一緒に歩んだ冒険が全ての始まりだった……………

「よかるう、ならば冒険だ！！」

事の始まりは「退屈だから何かない？」と、ユウトが兄に尋ねたことだ。いつもなら彼の相棒たるレオが『なら勉強しなさい』とつれない事を言って、それを兄が笑いながらなだめつつ、なんだかんだで構ってくれるのだが、この日に限りレオはメンテナンスのために留守にしていた。

しかし同時に彼も少々忙しく手が離せない状況だったためにユウトに構ってやれず、子供ながらに色々悟っていたユウトは残念に思いながらも兄の仕事を邪魔しないようにその場から離れようとしたのだが、

「冒険？」

「そう、男なら誰でも一度は憧れる三代要素。即ちパイロット・変身・そして冒険！！」

この中でも冒険はある意味最も現実的且つ手軽に行えるが、それ故に極めることは容易ではなく奥が深い。だからこそ少年の内から冒険を行うべきなんだっ！！」

ドドーンと効果音が入るような熱弁だが、ぶっちゃけ意味が分からない。が、兄を尊敬して止まないユウト少年には正に神の言葉の如く、

「……………流石だぜ兄ちゃん！！つまり冒険はすげーって事だな！？」

「その通りだ弟よ。冒険はすげーんだ！！」

「うおおおお、冒険すげー！！」

「そうだぞ、冒険はすげー！！」

……………傍から見ればバカにしか見えないが、本人達は至って真面目である。

「あ、でも冒険って色々いるよな？それにどこを冒険すればいいんだ？」

「こらこら、冒険なんだから目的地を設定したらダメだぞ。けど確かにこの辺りでそんな場所はあるまいからな……森辺りがいいかもな」

「森かあ……」

なんていうかあんまりそられないなあ……

「甘いぞユウト。森っていうのは読んで字の如く木が集まって出来た空間だ。そして本来は全く人の手が加わっていない……この意味が分かるか？」

「？」

「つまり未開、人が安全に通るための道なんて無く、何が起きるか分からない危険地帯さ」

「……（ゴクッ）」

「まあこの付近の森は俺達が何度も入ってるからそんなに危なくはないが、それでも全部を把握してる訳じゃない。俺達が気付かなかつた危険があるかもしれないし、まだ見ぬ神秘的な何かもあるかもしれない。どうだ？」

「……決まってるじゃん」

多少の危険なんざ何のその。否、むしろそれでこそ冒険にふさわしい！

「早速マサムネと一緒に行ってくるー！！」

「それでこそだ弟よ。父さんには俺から話しくくから安心しろ」

「ああ、じゃあ行って来ますー！！」

こうしてユウトはマサムネが入っている自身のメダロッチを身に付

け、途中彼と遊ぼうとやって来たユネも強引に誘い森へと進んだのだが……

「すげえなマサムネ。俺ってば自分の才能が恐ろしくなるぜ」

『拙者もでござるよ。まさかここまでとは……』

「そうだな。まさか俺達二人ともここまで……」

「『ここまで方向音痴だった(でござった)とは』」

そう、森へ突入して早一時間。彼等は道に迷っていた。

「迷ったじゃないでしょ二人とも!!これからどうするの!？」

「どーしよ?」

「どーしよって……そもそもお兄ちゃん達と一緒に通った道以外を通るからこうなっちゃったんじゃない」

「だって冒険だぜ?道なき道もだな……」

そのまま二人はギヤーギヤーと言い争いに突入するが、だからといって今の状況が良くなる訳ではない。しかしまだ子供の二人には何の解決策も見つからず……

『ユウト、やはりメダロツチの中からでは状況を把握しづらい。一度拙者呼び出してはくれまいか?』

「あ、そうだな。確かにマサムネなら俺達よりここ詳しいだろうし・



「……メダロット転送！」

まだユネは何か言いたそうではあったが、それは無視してマサムネを転送する。呼び出されたマサムネは辺りを見渡したり、一度地面にしゃがみ込んで土や植物を手にとったりして現在位置の把握に努め始める。

それをしばらく続け、何度か頷くと、

『分かったでござるよ。森を抜けるのならばこの道をしばらく歩き、途中にある大きな木を横切れば大丈夫でござる。一度森から出ればすぐに村まで戻れるでござるよ』

と、進むべき道を指し示してそう答える。

「へー、やつぱすげえなマサムネは。地面触ったりしたただけでそこまで分かるのか」

『まあこの森には博士やアキトと共に何度も何度もよく入ったでござるからな。流石に初めて入るような場所ならこんなことは出来ぬでござるよ』

「ふうん。でもやつぱりマサムネはすげえよ。俺には無理な方法だからさ」

『ユウトももう少し年を重ねて、経験を多く積みさえすれば似たような事は出来るようになるでござるよ。』

マサムネはそう言ってくれるが、それでもユウトにとってマサムネが凄い事は変わらない。兄ちゃんといいいマサムネといい、本当に俺の兄貴は凄い人達ばかりだ。

「最初からマサムネに任せてれば迷う事もなかったね」

それは言っな。

「ね、ねえ二人とも。ちょっといい・・・?」

マサムネに先導してもらおう形で「とりあえず最初からやり直そう」と、道を引き返してからしばらくして、ユネがモジモジしながら二人を引き留める。

「どしたユネ?」

『何かあつたでござるか?』

二人ともすぐに歩みを止め、最後尾のユネへと駆け寄っていく。そんな二人に対しユネは恥ずかしそうに俯きながら、

「その・・・に」

「へ、何?」

「だから・・・っ・・・レに・・・」

「声小さくて分かんねーよ。何?」

恥ずかしそうにするばかりで何も答えないそんなユネの様子にしかし、マサムネは納得がいったらしく、

『いいでござるよユネ。本来ならば森を出るまで待ってもらおうとござるが、女子ならばそうもいくまい。ただし、今回だけでござるよ?』

「うん、分かってる。ごめんなさいマサムネ」

『良い良い、分かってくれたのなら構わぬでござるよ。しかし何か起きるかもしれない故、あまり拙者達から離れぬように』

「う、うん。すぐに戻って来るから!」

そのまま一人訳の分からぬユウトを置いてユネは駆け足でその場を離れる。

「なあマサムネ。結局どーゆうこと?」

『男子には言いにくい女子の悩みでござる』

「……………よく分かんねえ」

『それを察し、口にすることなく気を遣うが男子の使命。ユウトも大人になればきつと悟るでござるよ』

「うーん……………」

何か馬鹿にされた気がするけど……………やっぱり分からないんだから言い返せない。

まあとりあえずはユネが戻って来たら聞けば

「……………つ!?!?」

なんだ!?!一瞬だけど、突然頭に電気が走ったような感覚。まるで……………

『ユウト?どうかしたでござるか?』

「え!?!いや、その……………」

マサムネには何も無かったのか?それはつまり俺だけに?一体どう

ゆう・・・・・・・・

「・・・・・・・・いや、何でもないよマサムネ。全然気にすることじゃないよ」

マサムネには起こらず俺にだけ走った電気。いや、そもそもたった一瞬の出来事じゃないか？ならこれはきつと気のせい。気にする必要なんて全く・・・・・・・・

「全く、ユウトってば・・・・・・・・マサムネを見習ってよね」

ユウト達から離れ、一人になり用を済ませたユネはユウトへの不満を漏らしつつ、いそいそと身支度を整えていた。

(そもそもお兄ちゃんの影響とはいえ、何が冒険なのよ。わたしはただ普通にユウトと遊びただけなのに・・・・・・・・)

陰口、とは言わないにせよユネのユウトに対する心の中での不満は止まることを知らず、そのままぶつぶつと文句を漏らしている途中だった。

「・・・・・・・・道？」

ふと目の前の方に視線を向けると、そこには自分が通ってきた道と

は違う、誰かが通ったであろうまだ新しい道の様なものが広がっていた。

「お兄ちゃん達が最近この森に入ったなんて聞かないし、ユウトやマサムネの物じゃない……誰か別の人がいるのかな？」

そう考えると何故だか興味が湧いてくる。まあ仕方ないといえば仕方ないだろう。なにしろ彼女もまた、ユウトが尊敬するあの兄の妹なのだから。ユネはそのまま先に進んでいき……

「なあマサムネ。ユネのヤツ遅すぎねえ？」

その頃待ちぼうけを食らっている男二人は、流石にユネが帰ってくるのが遅すぎると心配していた。

『そつでござるな……ユウトはここに。拙者は少し様子を見に行ってくるでござる』

「いや、俺も行くよ。こういうのはバラバラになるのはあんまり良い判断じゃないんだろ？」

『確かに……では共にユネの元へ』

「ああ、行こ……っ!？」

マサムネと共に一歩踏み出した途端にユウトは頭を抱えてその場に崩れ落ちてしまう。

またか、この感覚は………っ!?

『ユウト!?大丈夫でござるか!?!』

「っつ………だ、大丈夫。ちよつと頭痛が………っ!?!」

なんだ、これ。さっきのあったかどうかさえ判別出来ない感覚とは訳が違う。頭が、割れそうなくらいに痛い………っ!

『ここで見つとじているでござるユウト。すぐにユネを連れて戻つて来る故!?!』

そう言うと、マサムネは疾風の如くその場から駆け出しあつと言つ間に見えなくなる。しかしユウトにはそれを見送る暇もなく………

(どうなってるんだ………俺に、何が………っ!?!?)

そして幼馴染にそんな大変な事が起きているなど全く知らないユネは、ズンズン先の方へと進んでいた。そして………

「あつ!」

いつの間にか大木が中心にそびえ立つ広い空き地へと抜け出た。だがユネが驚いたのはそこではない。大木にもたれかかる形で倒れるメダロットに、彼女は心を奪われていた。

その体はここに来るまでに何度も倒れ転んだのか土や泥にまみれており、元の色が識別出来なくなっている。のみならず体の大部分に亀裂が走っており、左腕や脚部パーツなどはパーツがほとんど碎けて骨組み部分が剥き出しになっていて、それ以外の部位も頭の角が一本無くなっていたり、辛うじて生きてはいるようだがスラフシステムの修復がに全く追いついていないほどに酷い状態だ。恐らく必死で何かから逃げて、この場所で力を使い果たし倒れたのだろう。

「あれ……もしかしてK W G型のメダロット？ どうしてあんなにボロボロなの！？」

見ず知らずのメダロットとはいえこんな酷い状態のメダロットを放っておける訳なんてない。ユネは急いでそのメダロットの側に駆けて行く。

後に傷が治り、現在は《ドークス》のパーツを身に纏いユウトと共に戦うK W G型メダロット。全ての始まりを握る彼の物語は、一人の少女との出会いから始まった……

PAST1：冒険（後書き）

はい、というわけで今回からしばらくユウト編に入ります。つまり  
イツキもメタbも登場しない！！

「な、なんだって!?!」

おお、イツキ。どうした？お前の出番はないぞ。

「そんなのってないよ作者!?!ただでさえ僕はこの小説の中ではユ  
ウトやカラスに出番を喰われているに……!!!」

……うん、ユウトはともかくカラスにも喰われてるね。本当  
に誰がこんなひどいことを……

「あなたでしょ!?!」

否、これはお前のキャラが弱すぎるが故の結果。きつと俺は悪くな  
いんだ

「マーク付けて何言ってるの!?!」

つてなわけで今回はここまで。次回をお楽しみに!!

「いつも以上にグダグダな後書きで終わったあああああああああ  
あああ!?!」



P A S T 2 : 剣士の力 (前編) (前書き)

約半年ぶりの投稿・・・お待たせしました!!

PAST 2：剣士の力（前編）

「ねえあなた大丈夫！？どうしてこんな………っ!？」

力尽きたように倒れているヘッドシザーズの姿にユネは慌てて近くへ走り寄る。何があったとか、どういう経緯でここにいるのかとかそんな些細な事はどうでも良い。重要なのは今まさに死にそうなるダロツトが一人いるということ。

（私でも分かるくらいに弱ってる。早くお兄ちゃんか誰かに診せないと………!）

ユネはメダロツチを持っていないため、その場にしゃがみこみメダロツトを抱えあげようとするが、幼い少女の細腕では意識を完全に無くして倒れているメダロツトを運ぶことは難しい。しかしだからといってこのまま放置するなんて論外だ。

（わたしだけじゃ無理だ。ユウト達にこの事を伝えないと………）

そう考え直すと、ユネはすぐに立ち上がって来た道を引き返そうと………

『づっ………!』

ピクリと、倒れていたヘッドシザーズが目を醒ます。痛むであろう体にこれ以上の負担をかけないようにゆっくりと体を動かして辺り

を見渡し、それに気付き振り向いたユネと目が合って……

『……っ!?!?』

「あつ、目が醒めたの!?!? ねえ大丈夫……」

『人間、だと……?』

ユネの言葉が終わるより先に相手が言葉を放つ。どこか怯えているような、そして怒りに震えている様な声で。

『俺を……まだ追って来ていたのか!?!?』

「え、あの……」

『そんなに、俺が恐ろしいか……?そんなに……俺が疎ましいのか!?!? 全ては……全ては貴様らの、人間のせいだろっつ!?!?』

途端に激昂し、憤怒のオーラを纏ってユネに咆孔する。そして立ち上がると右腕から刃を出し、痛むであろう体を無理矢理動かして、

『俺は生き抜いてみせる……邪魔を、するなっ!?!?』

光る刃がユネへと振り下ろされる。驚きで身動きがとれないユネには避けようがなく……

『伏せる!?!?』

『!?!?』

突如2人の間に割って入る叫び。そして次の瞬間には機関銃の様な高い音が鳴り響き、次の瞬間には白い影が後退したKWG型メダロ

ツットに遅いかかる！

『チイツ！』

キィインと甲高く余韻が残る金属音が辺りに響き渡り、同時に発生した衝撃にヘッドシザーはその場から更に跳び退る。

「マサムネ！？」

『無事でござるか、ユネ！？』

眼前の敵を牽制しつつ、視線だけはこちらに向けてマサムネはユネの姿を確認する。幸いにもユネには目立つ様な傷はない。恐らく目に見えない所に怪我をしているということもないだろう。

しかし、後一瞬遅ければユネは……………

『人間を助けただと？愚か、いや哀れな……………貴様は人間に操られていると言うことか！？』

『……………随分な言われようでござるな。しかしその物言い、そなたは人を憎んでいるのでござるか？』

それは有り得ないとは言わぬまでもとても珍しいことだ。自分達メダロットは人に危害を加えないためにメダロット三原則が組み込まれている。

自我が強いメダルが核となるメダロットならば自分のマスターに対して不平・不満を言うこともあるだろう。だが人を憎み、あまつさえ危害を加えようということはまず有り得ないのだ。そもそもメダロット達にそのような意思は無いに等しいから。

『憎んでいるか、だと……………？そのような問いを投げるとは、やはり貴様は哀れな存在だな……………っ』

吐き捨て、既にボロボロな体を引きずりながらも右腕に備わる刃を光らせる。そして、

『俺は生きる……生きるんだ!!』

最早言葉は不要と、ヘッドシザーズが烈火のごとき気迫で二人に襲いかかる!!

「マサムネ……っ!!」

『下がっているでござるよユネ!下手に近付けば巻き添えてしまっ  
っ』

背後のユネに振り返らず、マサムネもまた刀を握り直して眼前のメダロットへと意識を集中させる。

『……本来ならばそなたの様なメダロットは連れ帰り修理することになっている』

吠えながら遅いかかるヘッドシザーズを見据えつつ、マサムネは本格的に臨戦態勢に入る。思考と神経がを研ぎ澄まされ、まるで自分以外の時間がゆっくりとなっていくような錯覚を。

『しかしそなたは拙者の妹に手をあげようとした……』

つまり危険な存在であり、マサムネにとっては切り捨てるべき対象だということ。故に、

『無事に逃げのびることが出来るなどと、微塵たりとて思っ  
な』

言葉と同時に、マサムネの姿が相手の視界からかき消える。かと思えば次の瞬間、背後に回り込んだマサムネの刀がヘッドシザースの首に迫る！！

マサムネはヘッドシザースに対して一切の油断もしていなければ、相手の力を低くも見ていなかった。むしろ強い相手だと考え、早期決着に持ち込むべきと判断する。そう考えた理由は3つ。

一つはメダルの特異性。今はユウトのメダロットとして彼と行動を共にしているが元々マサムネはマスターを持たずに一人で多くの激戦を経験してきたメダロットでもある。そうして身に付けた単体でも戦い抜ける力と、相手の力量をほぼ正確に計れる経験則。その後の能力と、無意識下にある勘が眼前に立つ相手のメダルの特異さに警鐘を鳴らしていた。

二つ目はユネを攻撃しようとした点。誰がやったのかは分からないが、どうやらこのメダロットはメダロット三原則が外れているらしい。これはつまりメダルの力を制御しているリミッターの一部が外されているということ。純粋なパワー面ではマサムネよりも上回っている可能性があるのだ。

故にマサムネはその冴えわたる剣技と速さを似てヘッドシザースに斬りかかる。感情をコントロールし冷静に。時間をかけず、一瞬で仕留める…………ツ

『ッ！！』

だがヘッドシザースはボロボロの体とは思えぬ反応を見せ、咄嗟に後ろに下がりギリギリのところで斬撃を躲す。

その事実、必殺の刃が躲されたことに特に驚くでもなくマサムネは冷静且つ冷徹に、次々とその刃を走らせる。その全ての狙いがメダロットにとつても急所となる関節部や頭部。一振りで決まらぬのなら二振りで、それでも決まらぬならば四振り。避け続けるのなら更に倍、尚も避けるというのなら更にその倍で……

「……」

その姿に、ユネは今の状況も忘れて見惚れていた。

何度か兄とその親友がロボットしている姿は見たことはある。メダロットを持たずロボットをしたことなんてないユネでも二人の戦いは高レベルのモノだと理解しており、その考えは間違っていない。しかしこの二体は違う。一方的に剣を振るい続ける者とそれをなんとか避け続けるという単純極まりない展開ではあれど、だからこそ分かる。これはロボットという名の真剣勝負ではなく、命の削り合いだ。

「マサムネ……こんなに強かったんだ」

今も尚刃を煌めかせ、眼前の敵を斬り倒そうと走るマサムネ。その速さたるや、正に疾風の如し。無駄な動きをほぼ完全に無くした隙のない体捌きと極限まで研ぎ澄まされた剣技は見る者全てを魅了する。

だからこそ、そんなマサムネの剣を避け続けているヘッドシザーもまた凄まじい。どんなに強いメダロットであろうと、あのマサムネの剣を一太刀も浴びず躲し続けるのは至難の業だ。一度や二度なら偶然で済ませられても、それ以上は最早実力。あんな体でそれを行えるなんて……

( だけど、マサムネ・・・?)

どうしてさっきからマサムネはさっきから剣しか、つまり《ソード》攻撃しかしないのだろう？

確かにマサムネの体である《シンセイバー》は真選組と呼ばれる剣士達をモデルに作られてはいるが、その武装は剣だけではない。先程自分とヘッドシザースを引きはがしたときの様にその左腕には《ガトリング》を放つ機能があり、頭パーツの機能だつてある。だといつのに・・・

( これも凌ぐか・・・ )

剣を振るう手は止めぬままにマサムネは思考する。都合二十、いや三十か。マサムネがヘッドシザースに刃を振るつた回数は詳しくは分からないが恐らくそれくらいだろう。そして振るつた刃は全てが必殺。遠慮も無ければ油断も無く、一撃で相手を斬り伏せる事が出来るモノだ。少なくとも《ティンペット》が剥き出しになりかけている重傷のメダロットが躲せるものではない。

だが現在も尚、その全ての斬撃をヘッドシザースは躲し続けている。それに・・・

ヒュッ・・・!!

( やはり、最初の頃と比べてかわし方が巧くなっている・・・ )



始めの方はほぼ間違い無く運が相手に味方した。自惚れでもなんでもなくそれが事実、その筈だ。

だがその後の動きは少しずつ、でも確実に変わり始めた。徐々に動きに無駄がなくなり、今では体をズラすだけで紙一重に躲すことに成功している。つまりこのまま斬り続けたところで、刀の軌跡は完全に見切られ逆に相手の猛攻が始まるだろう。そしてそうなければまず勝ち目がない。

(これは流石に、計算外でござるな……)

マサムネが早期決着にこだわった第三の理由。それはヘッドシザー스가手負い且つ憎悪に狂う獣だったからだ。

下手に追い詰められた獣は無傷の時とは比べ物にならない力を発揮する。それは人だろうとメダロットだろうと同じで追い詰められた存在は時として予想もしない行動に出る。現在のヘッドシザースは正にそれで、既に手負いの状態で更にはこちらに向けて明らかかな殺意を向けていた。

そしてだからこそ、反撃の隙など与える暇もなく決着をつけようと思ったのだ。その判断は正しかったが唯一の誤算は、

(こやつ、暴れ回るだけの獣ではなく高い知性を持つヒトでもあったか)

憎悪に狂い、周り全てを破壊しかねない獣性と、それとは対極に位置する冷静に物事を見極め判断できる理性の同居。考えていたよりも数段は性質が悪い。そして輪をかけて厄介なのがボロボロの体の癖にマサムネの攻撃を躲し続けるという芸当をやつてのける実力を備えていること。

その事実にもマサムネの心は震えていた。

ああ、これ程の強者はレオ以来だぞ！！

(しかし、これ以上は長引かせる訳にもいかぬか)

皮肉にもマサムネが刀を振るえば振るうだけ敗北に近付いていく。あの体では長くは戦えないと思っていたのだが、ヤツの力量を考えると、恐らくはヘッドシザーが壊れるよりも自身がやられるのが先。

(次で・・・決める！！)

絶対にかわせない一撃、文字通り必殺の刃で。  
次の瞬間マサムネは刃を切り返すと同時に、

『疾ッ！！』

これまでで最速の刃を走らせる。それも斬撃ではなく渾身の刺突を。これまで一度も出してはいなかった「点」の攻撃。それを不意に、斬撃からの一瞬の切り返しから放つ。ただでさえ読みにくい「点」の攻撃を「線」の攻撃に目が慣れたこの状況で放つことで、それは不可避の一撃となる！

『クッ、オオオオオオオオ！！』

その弾丸のごとき一撃に流石のヘッドシザーの反応も遅れる。そしてそのまま、

『 終わりだ 』

マサムネの刃が遂にヘッドシザーズの体を貫いた。

P A S T 3 : 剣士の力(後編)

マサムネの刃がヘッドシザースの体に深く深く突き刺さる。流石と言うべきか、ギリギリのところまで体をズラされ狙った首ではなく体に命中してしまったが、これでも十分。

『……先にも言ったが、拙者は妹を手にかけてようとするヤツに容赦できる程出来てはoirるのでな。ここで眠れ』

そしてゆっくりと刀を引き抜き

『……ム?』

……どういうことだ。刀が、ピクリとも動かない……  
っ?

『よつやく、捕えた』

『っ!?!』

まるで地の底から這い出るような低い声に、マサムネは気付く。その左腕が刀を物凄い力で掴んでいるということに。

そう、まだ戦いは終わっていない……!!

(バカな、今の一太刀が決定打にならない!?)

流石に動揺を隠せないマサムネを嘲笑うかの様にヘッドシザースの右腕は振り下ろされ……

『クッ……!!』

ザツと、刀を捨ててその場から大きく跳び退る。間一髪、ヘッドシザースの刃はマサムネの体を掠めただけで、

『ガ……ツ!?』

その筈なのに、マサムネは腹部を抑えてその場で膝をついてしまう。

(かすっただけで、この威力とは……!!)

強いとは分かっていたが、まともに当たっていない攻撃ですらこの威力。直撃すれば間違い無く……

『ガアアアアアアアツツ!!』

『ツ!?』

咆哮し、体に刺さっていた刀を引き抜いて投げ捨てる。同時に考える時間すら与えまいと、ヘッドシザースはマサムネに襲いかかる!!

(ツ、速い!!)

一瞬でマサムネとの間合いを0にする程の跳躍。先程の一撃からの攻撃は触れるだけでマズイと判断し、体を捻って刃をギリギリ躲すも、間髪入れずに左腕が伸びてくる。幸いヘッドシザースの代名詞の一つである《ピコペコハンマー》は壊れているが、力に制限がかかっていない左の拳は例えパーツが無くとも強烈で、

『グッ、ツオオオ……ツ!』

両腕を交差し、ガードするも衝撃までは殺しきれない。直撃と同時

に跳び下がらなければ両腕のパーツが壊れていたかもしれない。

(壊れた腕でなんとという力か・・・最早メダロットの戦い方ではない・・・っ)

そしてヘッドシザースは尚も攻め立てる。その光景は先程までとは全く逆の展開で、マサムネは必死に攻撃を躲し続ける。

だが先程までと状況は明らかに違う。それはマサムネのスピード。

マサムネがヘッドシザースを追い込むことが出来た最も大きな理由は刀を振るう剣速による部分が大きいの。無論マサムネとて波のメダロットと比べればかなり速いのだが、それ以上に剣速が異常なのだ。そんなマサムネに防戦一方とはいえず対抗出来ていたヘッドシザースのスピードは、恐らくマサムネの剣速とほぼ互角。いや、体のことを考えればそれ以上かもしれない。

簡単に言えば今の状況はマサムネ自身がマサムネに斬りかかられている様なもの。今まで培ってきた経験則によつて現状何とか凌いでいるが、長引けば確実に捉えられる。

加えて今のマサムネには決定的な攻撃手段が無い。投げ捨てられた刀を拾おうにもそんな余裕はないのは百も承知。かといって左腕の射撃はそこそこの性能を持つ《ガトリング》を放てるが、マサムネ自身の戦い方もあり牽制程度の役にしか立たない。そして頭パーツの能力を発動するにせよこうも攻め立てられてはその隙もない。メダフォースもまた同じだ。必殺技であるアレを発動するにはどうしても溜めが必要になる。当然そんな隙はない。

(マズイ、このままではユネを守りきれん・・・!!)

このメダロットにとって、自分はただの障害でしかない。彼の本命は憎悪の対象である人間、つまりこの場ではユネだ。今ここで自分が倒れれば、次はユネにその凶刃が襲いかかるであろうことは間違いない無く……

(なればもう……選択の余地は無し!!)

敢えて一撃を受けて、カウンターのみダフォースを浴びせる。これほどのパワーならば溜めの必要がなくメダフォースを発動できるはずだから。

もちろん当たり所が悪ければこちらが負ける大博打だが、成功すれば今度こそヘッドシザースを倒せる!

『いざ!!』

決断早く、マサムネは敢えてヘッドシザースの方へ踏み込む。間合いの目測を崩すことで僅かにだが、直撃は免れる。そしてヘッドシザースの右腕に合わせて左腕を伸ばし……

「マサムネツ!?!」

『グウウウ……ツ!!』

綺麗に肩口から左腕が切り落とされる。だが、それだけだ。計算通りフォースも溜まり、ヘッドシザースにも隙が出来る!!

(ここだ!!)

右腕が輝き、掌にチカチカと様々な色に光る光球が生まれる。これがマサムネの……

『メダフオース発・・・!?!』

完璧なカウンターのタイミングで伸ばされた筈の右腕が空を切る。躲された・・・?いや、それだけではなくその姿が視界からかき消えた・・・!?!?

(まさか、一見ただけで学習したというのか!?)

最初の一太刀でマサムネが見せた動きと全く同じ動きをこのタイミングで再現する。咄嗟に振り返って反撃をしようと試みるも既にヘッドシザースの間合いにマサムネは入っていて、

『終われ』

先程までとは比べ物にならない圧を纏った刃がそこにある。メダフオース、ヘッドシザースの必殺の凶刃がマサムネの首へと迫り・・・

(やられる・・・っ!!!)

「ダメエエエエエエエエエエエエエエエエエツツ!!」

「マサムネ、《ミブウルフ》!!」





『メダフォーエス発動ッッ、《プレゼント》!!』

掌底の要領でヘッドシザースの胴を打つ。瞬間、光球はその点滅を更に激しくして……

（よし、当たりだ……ッッ）

次の瞬間にはヘッドシザースの装甲を全て弾き飛ばした。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6516f/>

---

メダロット

2011年11月4日04時30分発行